

# 京都府遺跡調査報告書

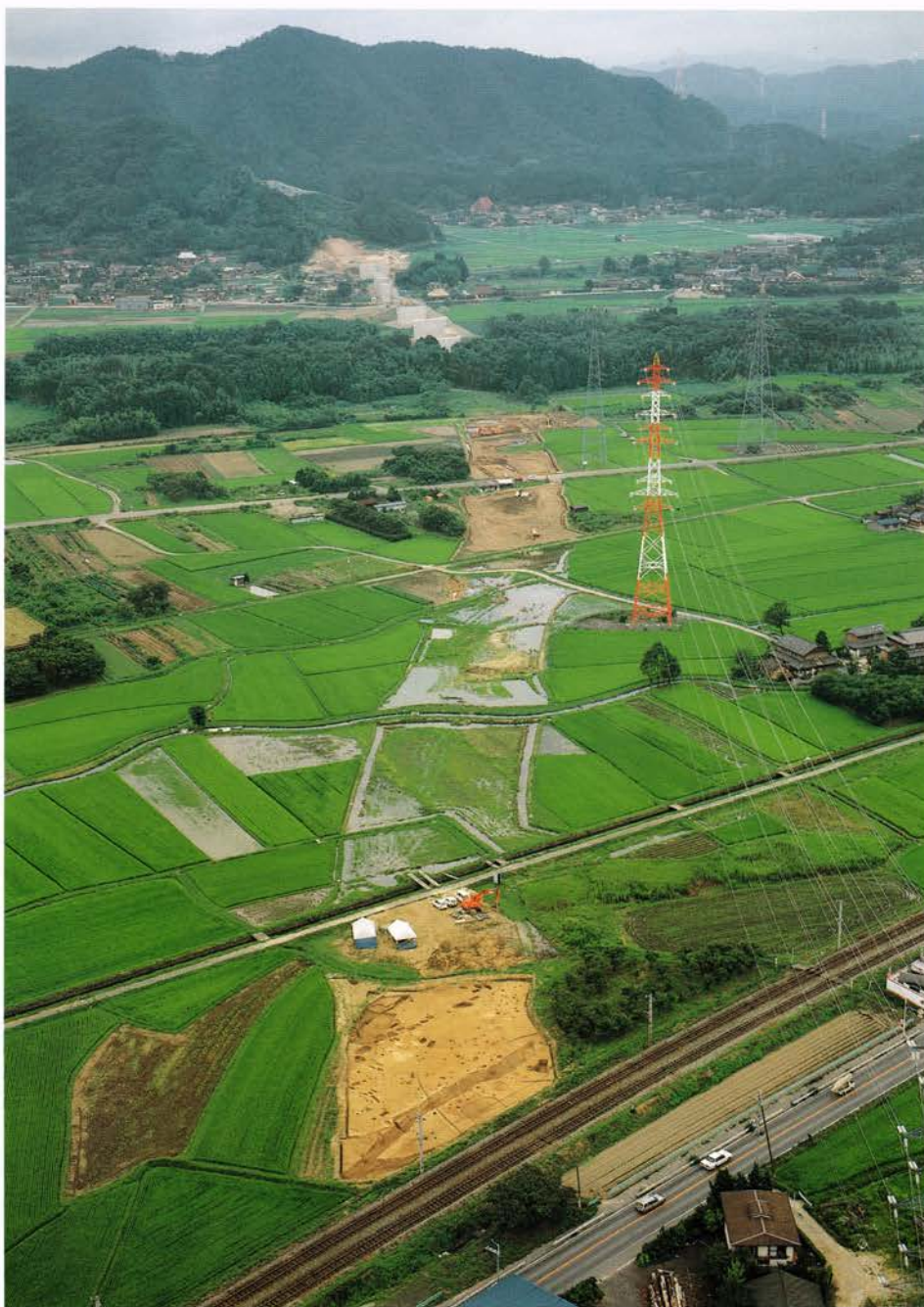
## 第 17 冊

近畿自動車道敦賀線関係遺跡(8次区間)

1992

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 1



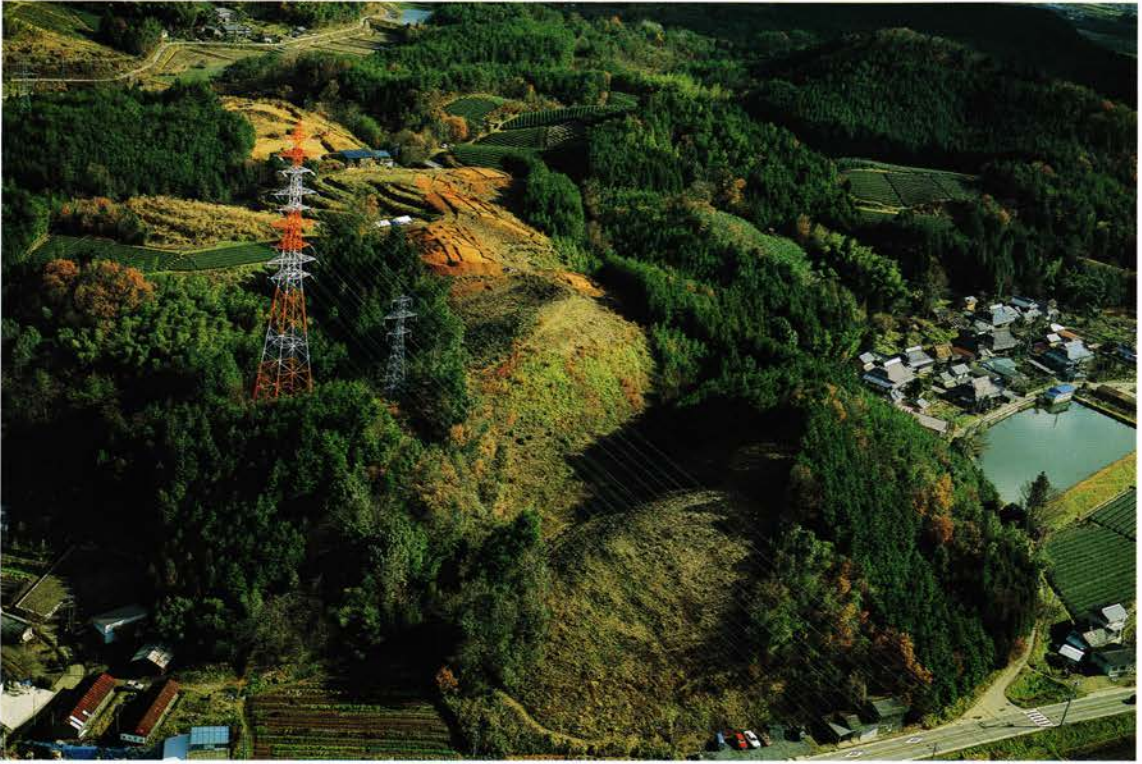
興・観音寺遺跡遠景（南西から）

巻頭図版 2



興遺跡調査地全景（南西から）

巻頭図版3



福垣北古墳群全景（西から）



福垣北古墳群全景（南から）

卷頭図版4



(1) 野崎古墳群全景 (南から)



(2) 野崎4号墳出土 家形埴輪



(3) 野崎3号墳出土 土製模造鏡

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この報告書に収められた各遺跡も、近畿自動車道敦賀線の建設に伴い発掘調査を行ったものであります。福知山市から舞鶴市にいたる近畿自動車道の路線帯には、弥生時代から古墳時代にかけての様々な遺構や多数の遺物が見つかりました。とりわけ興遺跡や観音寺遺跡では弥生時代を中心とした遺物が数多く出土しており、当時の集落のあり方を考える上で貴重な資料となるものです。

これまで、当調査研究センターでは、『京都府埋蔵文化財情報』・『京都府遺跡調査概報』を通じて、この遺跡の調査成果を紹介してまいりました。これらの刊行物とあわせまして、本書を関係各位の参考に供され、地域の文化の発展に少しでも寄与すれば幸いです。

これらの各遺跡の調査にあたりましては、発掘調査を依頼された日本道路公団大阪建設局をはじめ、京都府教育委員会・綾部市教育委員会・福知山市教育委員会などの関係諸機関の御協力を受けただけでなく、極暑・極寒の中で多くの方々が熱心に各作業に従事していただきました。ここに記し、感謝したいと存じます。

平成4年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター  
理事長 福山敏男

## 例 言

- 1 本書は、京都府福知山市興に所在する興遺跡、福知山市観音寺に所在する観音寺遺跡、綾部市豊里町に所在する福垣北古墳群、綾部市高槻町に所在する野崎古墳群に関する発掘調査報告書である。
- 2 各遺跡の調査は、近畿自動車道敦賀線関連遺跡として、日本道路公団大阪建設局の依頼を受け、昭和61年度から平成元年度まで、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが主体となって実施した。
- 3 発掘調査にあたっては、当調査研究センター調査課主任調査員長谷川達・小山雅人・石井清司、調査第2課調査第2係長水谷壽克、同調査員田代 弘・岡崎研一・黒坪一樹(いずれも当時)が担当して行った。
- 4 本書に掲載した写真は、遺構を主に小山雅人、田代 弘、岡崎研一、黒坪一樹、石井清司が撮影し、遺物写真は高橋猪之介氏に委託したものと、田中 彰が撮影したものである。また、航空写真及び一部図化作業は、朝日航洋株式会社に委託した。
- 5 本書の執筆は、水谷壽克、田代 弘、黒坪一樹、石井清司、小山雅人、が分担し、末尾に明示した。編集は、後藤尚規・西村香代子の協力を得て、調査第1課資料係調査員土橋 誠が行った。また、付載の脂肪酸分析は、(株)ズコーシャ総合科学研究所へ、花粉分析・植物珪酸体分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

# 本文目次

はじめに	1
第1章 調査の組織と方法	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 各年度の調査	4
第2章 各遺跡の調査	8
第1節 興遺跡	8
1. はじめに	8
2. 遺跡の位置	8
3. 調査の方法と概要	10
4. まとめ	93
5. 興遺跡出土弥生土器に関する考察	96
第2節 観音寺遺跡	139
1. はじめに	139
2. 調査の経過	141
3. 検出層位	143
4. 検出遺構	147
5. 出土遺物	162
6. まとめ	180
第3節 福垣北古墳群	181
1. はじめに	181
2. 遺跡の位置と環境	181
3. 調査の経過	183
4. 各古墳の概要	183
5. まとめ	204
第4節 野崎古墳群	207
1. はじめに	207
2. 野崎古墳群の環境	207



3.	調査の経過	-209
4.	検出遺構	-210
5.	出土遺物	-215
6.	遺構の検討	-225
7.	遺物の検討	-230
8.	遺跡の検討	-237
9.	まとめ	-240
第3章	まとめ	-241
付載	私市円山古墳・興遺跡・三宅遺跡・日光寺遺跡に残存する脂肪の分析	-251
1.	土壌試料	-252
2.	残存脂肪の抽出	-252
3.	残存脂肪の脂肪酸組成	-253
4.	残存脂肪のステロール組成	-255
5.	脂肪酸組成の数理解析	-256
6.	脂肪酸組成による種特异性相関	-256
7.	総括	-257
付載	興遺跡花粉分析他	-266
1.	はじめに	-266
2.	試料	-266
3.	花粉分析	-266
4.	植物珪酸体分析	-268

# 挿 図 目 次

第1章 調査の組織と方法	
第1節 調査に至る経過	
第1図 調査地位置図-----	6
第2章 各遺跡の調査	
第1節 興遺跡	
第2図 興遺跡と周辺の遺跡-----	9
第3図 トレンチ配置図-----	10
第4図 I地区南壁土層断面実測図-----	12
第5図 I地区検出遺構実測図-----	12
第6図 I地区検出土坑実測図-----	14
第7図 S B01実測図-----	16
第8図 II地区検出遺構実測図-----	17
第9図 S H01実測図-----	19
第10図 S D01・02実測図-----	19
第11図 S D01断面図(東壁)-----	20
第12図 S D02断面図(東壁)-----	20
第13図 S D03断面図(北壁)-----	21
第14図 S D01最下層遺物出土状況-----	21
第15図 S X01遺物出土状況-----	22
第16図 II地区検出土坑実測図(1)-----	23
第17図 II地区検出土坑実測図(2)-----	24
第18図 II地区検出土坑実測図(3)-----	24
第19図 IV地区土層断面図(南壁)-----	26
第20図 IV地区検出遺構実測図(1)-----	26
第21図 S B05実測図-----	27
第22図 S B10実測図-----	28
第23図 S B17実測図-----	29

第24図	S K01実測図	-----	30
第25図	S K03・06実測図	-----	31
第26図	IV地区検出遺構実測図(2)	-----	33
第27図	弥生時代溝断面実測図	-----	33
第28図	S D03弥生土器出土状況	-----	34
第29図	I地区各土坑出土土器実測図	-----	36
第30図	S D01出土遺物実測図(1)	-----	38
第31図	S D01出土遺物実測図(2)	-----	39
第32図	S D01出土遺物実測図(3)	-----	40
第33図	S D01出土遺物実測図(4)	-----	41
第34図	S D01出土遺物実測図(5)	-----	42
第35図	S D01出土遺物実測図(6)	-----	43
第36図	S D01出土遺物実測図(7)	-----	44
第37図	S D01出土遺物実測図(8)	-----	45
第38図	S D01出土遺物実測図(9)	-----	46
第39図	S D01出土遺物実測図(10)	-----	47
第40図	S D01出土遺物実測図(11)	-----	48
第41図	S D01出土遺物実測図(12)	-----	49
第42図	S D01出土遺物実測図(13)	-----	50
第43図	S D01出土遺物実測図(14)	-----	51
第44図	S D02出土遺物実測図(1)	-----	53
第45図	S D02出土遺物実測図(2)	-----	54
第46図	S D02出土遺物実測図(3)	-----	55
第47図	S D02出土遺物実測図(4)	-----	56
第48図	S D02出土遺物実測図(5)	-----	57
第49図	S D02出土遺物実測図(6)	-----	58
第50図	S D02出土遺物実測図(7)	-----	59
第51図	S D02出土遺物実測図(8)	-----	60
第52図	S D02出土遺物実測図(9)	-----	61
第53図	S D02出土遺物実測図(10)	-----	62
第54図	S D02出土遺物実測図(11)	-----	63
第55図	S D02出土遺物実測図(12)	-----	64

第56図	S D02出土遺物実測図(13)	65
第57図	S D03出土遺物実測図(1)	66
第58図	S D03出土遺物実測図(2)	67
第59図	S K02出土遺物実測図	69
第60図	S K03・06・07出土遺物実測図	69
第61図	S K08出土遺物実測図(1)	70
第62図	S K08出土遺物実測図(2)	71
第63図	S K09・10・11・14出土遺物実測図	71
第64図	S K15出土遺物実測図	72
第65図	S K17出土遺物実測図	72
第66図	S K16出土遺物実測図	73
第67図	S K19出土遺物実測図(1)	74
第68図	S K19出土遺物実測図(2)	75
第69図	S K25出土遺物実測図	75
第70図	S K30出土遺物実測図	76
第71図	S K33出土遺物実測図	76
第72図	S K34出土遺物実測図	77
第73図	S K35出土遺物実測図	77
第74図	S X01出土遺物実測図(1)	78
第75図	S X01出土遺物実測図(2)	78
第76図	IV地区出土弥生土器実測図(1)	79
第77図	IV地区出土弥生土器実測図(2)	80
第78図	分銅形土製品実測図	80
第79図	絵図土器	81
第80図	鉄鏃	81
第81図	S K09出土簪実測図	81
第82図	石鏃実測図	82
第83図	石錐	83
第84図	削器実測図	83
第85図	楔形石器実測図	84
第86図	磨製石器実測図	85
第87図	磨製石斧実測図(1)	86

第88図	磨製石斧実測図(2)-----	87
第89図	砥石・石皿実測図-----	88
第90図	石錘-----	88
第91図	S B 05柱穴出土遺物-----	91
第92図	S B 17柱穴出土遺物-----	91
第93図	S K 01出土遺物実測図-----	91
第94図	S K 02出土土器実測図-----	92
第95図	S K 03出土遺物実測図-----	92
第96図	S K 06出土遺物実測図-----	92
第97図	包含層出土遺物実測図-----	93
第98図	溝出土底部実測図-----	101
第99図	底部充填手法各種-----	103
第100図	第Ⅲ-1様式-----	106
第101図	第Ⅲ-2様式-----	106
第102図	第Ⅳ-2様式-----	109
第103図	第Ⅳ-3様式-----	110
第2節 観音寺遺跡		
第104図	調査地位置図(1)-----	140
第105図	調査地位置図(2)-----	141
第106図	磨製石剣実測図-----	143
第107図	トレンチ配置図-----	144
第108図	土層断面図-----	145
第109図	土層柱状断面配置図-----	146
第110図	A・Bトレンチ全体図-----	148
第111図	Aトレンチ掘立柱建物跡(S B 01~07)、溝(S D 01・02)平面実測図-----	149
第112図	掘立柱建物跡(S B 01)実測図-----	150
第113図	掘立柱建物跡(S B 02)実測図-----	150
第114図	掘立柱建物跡(S B 03)実測図-----	151
第115図	掘立柱建物跡(S B 05)実測図-----	151
第116図	AトレンチS B 03のPit6柱穴平・断面実測図-----	152
第117図	Aトレンチ溝(S D 01・02)平・断面実測図-----	152
第118図	Aトレンチ土坑(S K 05)平・断面実測図-----	153

第119図	Cトレンチ全体図-----	154
第120図	Cトレンチ溝(S D01・02)平・断面実測図-----	155
第121図	Dトレンチ全体図-----	156
第122図	Dトレンチ溝(S D01・02・03)平・断面実測図-----	156
第123図	Dトレンチ石敷土坑(S K01)平・断面実測図-----	157
第124図	Dトレンチ土坑(S K04・05)平・断面実測図-----	158
第125図	Dトレンチ溝(S D05)内土器溜り平面図-----	159
第126図	Dトレンチ溝(S D06)断面実測図-----	159
第127図	竪穴式住居跡(S H01~03)平・断面実測図-----	160
第128図	Eトレンチ土坑(S K01~08)平・断面実測図-----	160
第129図	Eトレンチ全体図-----	161
第130図	Fトレンチ全体図-----	161
第131図	出土遺物実測図(1)-----	163
第132図	出土遺物実測図(2)-----	164
第133図	出土遺物実測図(3)-----	165
第134図	出土遺物実測図(4)-----	167
第135図	出土遺物実測図(5)-----	168
第136図	出土遺物実測図(6)-----	169
第137図	出土遺物実測図(7)-----	170
第138図	出土遺物実測図(8)-----	171
第139図	出土遺物実測図(9)-----	172
第140図	出土遺物実測図(10)-----	174
第141図	出土遺物実測図(11)-----	175
第142図	出土遺物実測図(12)-----	176
第143図	出土遺物実測図(13)-----	177
第144図	出土遺物実測図(14)-----	178
第145図	出土遺物実測図(15)-----	179
第3節 福垣北古墳群		
第146図	調査地位置図-----	182
第147図	福垣北古墳群地形図-----	183
第148図	1号墳墳丘実測図-----	184
第149図	1号墳主体部実測図-----	184

第150図	1号墳主体部出土鉄器実測図	185
第151図	第2・3号墳墳丘実測図	187
第152図	第2・3・5号墳墳丘断面図	188
第153図	第2号墳中心主体実測図	189
第154図	第3号墳中心主体実測図	191
第155図	周辺第1埋葬主体施設平面実測図	192
第156図	周辺第4埋葬施設平面実測図	193
第157図	出土遺物—須恵器—	194
第158図	出土遺物—鉄器—	195
第159図	出土遺物—玉類—	196
第160図	4・7号墳墳丘実測図	199
第161図	4号墳周溝出土埴輪実測図	200
第162図	第5号墳墳丘図	201
第163図	第5号墳中心埋葬施設平面図	202
第164図	6号墳平面測量図	204
第165図	6号墳墳丘断面図	204
第166図	6号墳主体部実測図	205
第167図	S K 02実測図	205
第168図	6号墳出土遺物	205
第169図	6号墳主体部出土鉄刀(F3)	205
第4節 野崎古墳群		
第170図	野崎遺跡周辺遺跡分布図	208
第171図	野崎古墳群と高槻茶臼山古墳	209
第172図	野崎古墳群実測図	211
第173図	野崎1号墳埴輪出土状況実測図	213
第174図	野崎4号墳主体部実測図	214
第175図	野崎1号墳出土円筒埴輪実測図	217
第176図	野崎4号墳出土家形埴輪実測図	219
第177図	野崎2号墳出土形象埴輪実測図	221
第178図	野崎古墳群出土土器実測図	223
第179図	野崎古墳群出土土製模造品実測図	224
第180図	野崎4号墳出土鉄鏃実測図	225

第181図	野崎古墳群陸橋集成-----	227
第182図	寄棟造家形埴輪の分類-----	233
第183図	土製模造鏡の分類-----	235
第184図	北丹波の古墳の変遷-----	238

## 付 表 目 次

第1章	調査の組織と方法	
第1節	調査に至る経過	
付表1	近敦線8次区間調査地一覧表-----	5
第2章	各遺跡の調査	
第1節	興遺跡	
付表2	I地区検出土坑一覧表-----	15
付表3	II地区検出土坑一覧表-----	25
付表4	IV地区検出掘立柱建物跡一覧表-----	32
付表5	石器法量表-----	89
付表6	壺・甕底部集計表-----	100
付表7	I地区出土土器観察表-----	112
付表8	II地区出土土器観察表-----	112
付表9	IV地区出土土器観察表-----	135
第4節	野崎古墳群	
付表10	野崎古墳群出土遺物一覧表-----	225



# 図 版 目 次

## 第 2 章 各遺跡の調査

### 第 1 節 興遺跡

- 図版第 1 (1) I 地区全景(南から) (2) I 地区 S K 03・04 検出状況
- 図版第 2 (1) I 地区 S K 05・06 検出状況(南から) (2) I 地区 S K 09 検出状況
- 図版第 3 (1) II 地区全景(北から) (2) II 地区 S D 02 検出状況(北東から)
- 図版第 4 (1) II 地区 S D 01・02 検出状況(西から) (2) II 地区 S D 02 検出状況(東から)
- 図版第 5 (1) II 地区 S D 01 埋土堆積状況 (2) II 地区 S D 01 遺物出土状況(上層)
- 図版第 6 (1) II 地区 S D 01 遺物出土状況(最下層)  
(2) II 地区 S D 01 遺物出土状況(最下層)
- 図版第 7 (1) II 地区 S D 01 遺物出土状況(最下層)  
(2) II 地区 S D 01 遺物出土状況(最下層)
- 図版第 8 (1) II 地区 S D 02 断面状況 (2) II 地区 S D 02 遺物出土状況(最下層)
- 図版第 9 (1) II 地区 S D 02 遺物出土状況(下層)  
(2) II 地区 S D 02 遺物出土状況(最下層)
- 図版第 10 (1) II 地区土坑検出状況(西から) (2) II 地区土坑検出状況(東から)
- 図版第 11 (1) II 地区 S D 03 検出状況(北から) (2) II 地区 S B 01 検出状況(南から)
- 図版第 12 (1) II 地区 S K 08 遺物出土状況 (2) II 地区 S K 15・16 検出状況(西から)
- 図版第 13 (1) II 地区 S K 19 遺物出土状況 (2) S X 01 遺物出土状況
- 図版第 14 (1) IV 地区 S K 01 検出状況 (2) IV 地区 S K 06 検出状況
- 図版第 15 II 地区出土弥生土器(1)
- 図版第 16 II 地区出土弥生土器(2)
- 図版第 17 II 地区出土弥生土器(3)
- 図版第 18 II 地区出土弥生土器(4)
- 図版第 19 II 地区出土弥生土器(5)
- 図版第 20 II 地区出土弥生土器(6)
- 図版第 21 II 地区出土弥生土器(7)
- 図版第 22 II 地区出土弥生土器(8)
- 図版第 23 II 地区出土弥生土器(9)

- 図版第24 IV地区出土弥生土器(10)
- 図版第25 弥生土器の文様
- 図版第26 (1)石鏃 (2)石器類
- 図版第27 (1)磨製石斧(1) (2)磨製石斧(2)
- 図版第28 その他の遺物
- 第2節 観音寺遺跡**
- 図版第29 (1)Aトレンチ掘立柱建物跡群検出状況(南から)  
(2)Aトレンチ柱穴完掘状況
- 図版第30 (1)Aトレンチ溝(S D01・02)検出状況(西から)  
(2)Aトレンチ溝(S D01)内遺物出土状況
- 図版第31 (1)Dトレンチ遺構検出状況(北から)  
(2)Dトレンチ土坑(S K05・06)検出状況
- 図版第32 (1)Eトレンチ上層遺構検出状況(北から)  
(2)Eトレンチ下層遺構検出状況(北から)
- 図版第33 出土遺物(1)
- 図版第34 出土遺物(2)
- 図版第35 (1)出土遺物(3) (2)Cトレンチ柱穴内瓦器椀検出状況
- 第3節 福垣北古墳群**
- 図版第36 (1)福垣北古墳群全景(東から) (2)福垣北古墳群全景(北から)
- 図版第37 (1)第1号墳完掘状況 (2)第1号墳主体部完掘状況
- 図版第38 (1)第2・3号墳完掘状況 (2)第2号墳完掘状況
- 図版第39 (1)第2号墳完掘状況 (2)第2号墳中心埋葬施設検出状況
- 図版第40 (1)第2号墳棺内鉄鏃出土状況 (2)第2号墳棺内剣出土状況
- 図版第41 (1)第3号墳完掘状況 (2)第3号墳中心埋葬施設検出状況
- 図版第42 (1)第3号墳墓壙上面土器出土状況 (2)第3号墳棺内剣出土状況
- 図版第43 (1)周辺第1主体完掘状況 (2)周辺第1主体玉類出土状況
- 図版第44 (1)周辺第4主体完掘状況 (2)周辺第4主体玉類出土状況
- 図版第45 (1)5号墳中心埋葬主体掘削状況 (2)5号墳中心埋葬主体完掘状況
- 図版第46 (1)第4号墳完掘状況 (2)第4・7号墳周溝内遺物出土状況
- 図版第47 (1)第6号墳主体部検出状況 (2)第6号墳鉄剣・鉄鏃出土状況
- 図版第48 出土遺物(1)
- 図版第49 出土遺物(2)

- 図版第50 (1)第2号墳周辺第4埋葬施設出土玉類  
(2)第2号墳周辺第1埋葬施設出土玉類

#### 第4節 野崎古墳群

- 図版第51 野崎古墳群 航空写真(上が北)
- 図版第52 (1)北地区全景 航空写真(左が北)  
(2)中央地区・南地区全景 航空写真(左が北)
- 図版第53 (1)野崎5号墳・6号墳 航空写真(左が北)  
(2)野崎1～4号墳 航空写真(左が北)
- 図版第54 (1)北地区から中央地区・南地区を望む  
(2)中央地区トレンチ断面(南西から)
- 図版第55 (1)野崎1号墳 周溝南部分(南東から) (2)同上(西から)
- 図版第56 (1)4号埴輪出土状況 (2)5号・6号埴輪出土状況
- 図版第57 (1)野崎1号墳 周溝北部分(西から) (2)同上、拡大(上が北)
- 図版第58 (1)野崎3号墳全景(北東から) (2)野崎4号墳と溝1(東から)
- 図版第59 (1)野崎5号墳全景(南東から) (2)野崎6号墳全景(南から)
- 図版第60 (1)野崎5号墳と左手後方に高槻茶臼山古墳(東から)  
(2)現地説明会風景：野崎5号墳後円部(北から)
- 図版第61 野崎1号墳出土円筒埴輪
- 図版第62 野崎4号墳出土家形埴輪
- 図版第63 野崎4号墳出土家形埴輪(正面・側面・背面)
- 図版第64 土製模造品
- 図版第65 (1)須恵器 (2)鉄鍬

## 近畿自動車道敦賀線(8次区間)関係遺跡 発掘調査報告書

### はじめに

近畿自動車道舞鶴線は、兵庫県美囊郡吉川町から京都府舞鶴市に至る高速自動車道である。この自動車道は、京都府北部の丹波・丹後の開発や経済の活性化、そして京阪神地域への交流などを目的として計画された。昭和63年3月に中国自動車道吉川JICから福知山ICまでの区間(近舞線7次区間)について開通し、福知山から西舞鶴間(近舞線8次区間)は、平成3年3月に開通している。また、昭和63年2月近舞線は福井県敦賀市まで区間延長されることが決定し、近畿自動車道敦賀線(以下『近敦線』と呼ぶ)に名称変更された。

近敦線建設にともなう埋蔵文化財調査(総称して『近敦線関係遺跡』と呼ぶ)は、昭和54年度から京都府教育委員会が実施し、昭和56年度からは京都府教育委員会により設立された当調査研究センターが引き継いで調査を実施している。近舞線7次区間の調査は、昭和60年度にすべての現地調査を終了し、各年度に発掘調査概要報告書を刊行するとともにその総括として発掘調査報告書(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 1988)を刊行している。

近敦線8次区間の調査は、福知山市から西舞鶴までの延長約22.7km区間を昭和61年度から実施した。この区間には、昭和58年度に実施した遺跡分布調査で17遺跡を確認し、その後の調査で新たに6遺跡が路線内に含まれることが判明している。

現地調査は、昭和61年11月から実施し平成2年3月にすべての調査を終了した。各年度に調査した遺跡については、第1章第2節にその概要を報告しているが、綾部市を帯状に横断したこの調査は、弥生時代から中世に至る各時期の貴重な資料を得て、この地域の歴史を知るうえで多大な成果を得ている。しかし、現地調査を優先して実施したため、平山城跡・平山東城跡・野崎古墳群・小西町田遺跡・三宅遺跡・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡の8遺跡については、平成2年度以降整理報告作業を進め随時報告書を刊行する予定である。

平成2年度には平山城跡・平山東城跡(『京都府遺跡調査報告書』第14冊)について刊行しているところであり、今回は、野崎古墳群・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡の4遺跡について報告するものである。

(水谷壽克)

## 第1章 調査の組織と方法

### 第1節 調査に至る経過

福知山市長田野から舞鶴市堀に至る延長22.7kmの近畿自動車道舞鶴線(8次区間)は、路線決定に際し、福知山市・綾部市・舞鶴市の各教育委員会及び京都府文化財保護課との間で再三にわたる協議が行われ、どうしても避けられない遺跡について事前に調査することとなった。昭和58年4月、道路公団立ち会いのもと文化財保護課・センターにより道路予定路線内に含まれる遺跡の詳細な分布調査を実施し、福知山市域に6遺跡、綾部市域に11遺跡の計17遺跡を確認し昭和61年度から調査に入った。また、山間部で遺跡地と認められなかった地点で、用地買収終了後樹木の伐採が行われ、地形の隆起・遺物採集がより詳細に行われる時点において、新たに6遺跡が路線内に含まれることが判明した。

調査は、日本道路公団の依頼により、文化財保護法第57条第2項の規定に基づき、各遺跡の発掘調査届出書を文化庁長官あてに提出し、各教育委員会・近舞線対策委員会等関係機関の協力をえて、地元自治会への説明及び作業員募集を行った上で現地調査に着手した。

今回報告する野崎古墳群・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡の調査に至る経緯及び現地調査期間・調査面積等については、下記のとおりである。

野崎古墳群	所在地	綾部市高槻町野崎
	調査期間	昭和61年11月28日～昭和62年3月24日
	調査面積	約2,400m <sup>2</sup>
	調査担当	小山 雅人

遺跡分布調査では、現状水田・畑地の地表面に石器等が散布することから、縄文時代以降の集落跡「野崎遺跡」として調査を開始した。しかし、予想外にも古墳の墳丘が削平された古墳群(前方後円墳1基・円墳5基)であることが判明し、文化財保護課・綾部市教育委員会と調整し、「野崎古墳群」と命名して調査を実施した。

福垣北古墳群	所在地	綾部市豊里町福垣
	調査期間	昭和62年11月5日～昭和63年3月8日 昭和63年4月14日～昭和63年8月31日
	調査面積	約2,500m <sup>2</sup>
	調査担当	石井 清司・田代 弘

以久田野古墳群は、総数120基以上からなる5世紀から6世紀にかけての群集墳である。調査地は、以久田野丘陵の西端に位置し、古墳状の隆起が2か所に認められることから、「以久田野古墳状隆起」と仮称して試掘調査を開始した。その結果、6基の古墳を確認し、また同一丘陵上に福垣北第1号墳が隣接することから、福垣北古墳群の支群として調査を実施した。

興遺跡	所在地	福知山市興
	調査期間	昭和63年11月24日～平成元年3月15日 平成元年4月20日～平成元年9月5日
	調査面積	約2,000m <sup>2</sup> (62年度)・約1,400m <sup>2</sup> (元年度)
	調査担当	田代 弘

由良川上流域の自然堤防上に位置する弥生時代の集落遺跡である。この遺跡は、弥生時代中期の壺形土器の発見による周知の遺跡であり、遺構・遺物の範囲を確認する目的で試掘調査を行った。その結果、JRを挟んで南側に中世を中心とする建物跡を、北側に弥生時代中期の溝や土抗を検出した。

観音寺遺跡	所在地	福知山市観音寺
	調査期間	昭和63年11月24日～平成元年3月15日 平成元年4月20日～平成元年9月5日
	調査面積	約1,200m <sup>2</sup> (62年度)・約4,000m <sup>2</sup> (元年度)
	調査担当	岡崎 研一・黒坪 一樹

興遺跡同様、由良川自然堤防上に営まれた弥生時代から中世に至る集落遺跡である。この遺跡は、昭和54年度に中丹広域農道の道路建設に先立ち、京都府教育委員会により調査され遺物が多数出土している。

調査に際しては、日本道路公団大阪建設局福知山工事事務所・綾部市教育委員会・福知山市教育委員会・綾部史談会・地元各自治会・京都府教育委員会・京都府中丹教育局・京都府立丹後郷土資料館等関係諸機関諸氏より多大な協力を得、また現地作業や整理作業においては、地元各自治会の有志の方々及び学生諸氏に参加願った。心より感謝したい。

調査組織	(近舞線8次区間)
調査主体者	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 理事長 福山敏男
調査責任者	荒木昭太郎 (事務局長 昭和61～平成元年度)

	松阪 寛支 (事務局長 平成2～3年度)
調査担当責任者	堤 圭三郎 (調査課長 昭和61年4月～6月)
	中谷 雅治 (調査課長 昭和61年6月～62年3月)
	(次長 昭和62～平成3年度)
	杉原 和雄 (調査課長 昭和62～平成元年度)
	安藤 信策 (調査課長 平成2～3年度)
事務局責任者	中西 和之 (総務課長 昭和61年度)
	田中 秀明 (総務課長 昭和62・63年度)
	山本 勇 (次長 平成元年度)
	小林 将夫 (次長 平成2～3年度)

調査担当者 長谷川達(主任調査員 昭和61年4月～6月)、小山雅人(主任調査員 昭和61年6月～62年3月)、水谷壽克(調査第2係長 昭和62～平成元年度)、引原茂治(主任調査員 昭和63・平成元年度)、藤原敏晃(調査員 昭和61年度)、細川康晴(調査員 昭和61年度)、鍋田 勇(調査員 昭和61～平成元年度)、竹原一彦(調査員 昭和62～平成元年度)、三好博喜(調査員 昭和62年度)、石井清司(調査員 昭和62年度)、黒坪一樹(調査員 昭和62～平成元年度)、岡崎研一(調査員 昭和63年度)、田代 弘(調査員 昭和63・平成元年度)、小池 寛(調査員 平成元年度)

(水谷壽克)

## 第2節 各年度の調査

昭和61年度から平成元年度まで調査した遺跡は、集落跡7か所・古墳9か所・古墓経塚2か所・城館跡4か所である(付表1)。

ここでは主な遺跡について簡単に紹介する。

平山城跡・平山東城跡は、高城城の支城で、15～16世紀に築かれた連郭式・単郭式の山城である。郭内には、礎石建物跡・柵列・土坑・石組状遺構等を検出し、特に平山城南東の丘陵斜面に設けられた14条の畝状堅堀は、頂部の横堀とともに当時の防御施設の堅固さをうかがうことができ、中丹地域の中世山城を知る上で貴重な資料となった。

野崎古墳群は、平野部に築かれた5～6世紀の古墳群で、全長約27mの前方後円墳1基・円墳5基からなる。近辺には、茶臼山古墳や上杉1号墳といった全長50m級の前方後円墳が築かれており、首長墓クラスの系譜がみられる。1号・5号墳の周溝には比較的遺存状況の良好な埴輪が出土し、数少ない中丹地域の埴輪を知る上で貴重な資料となった。

付表1 近敦8次区間調査地一覧表

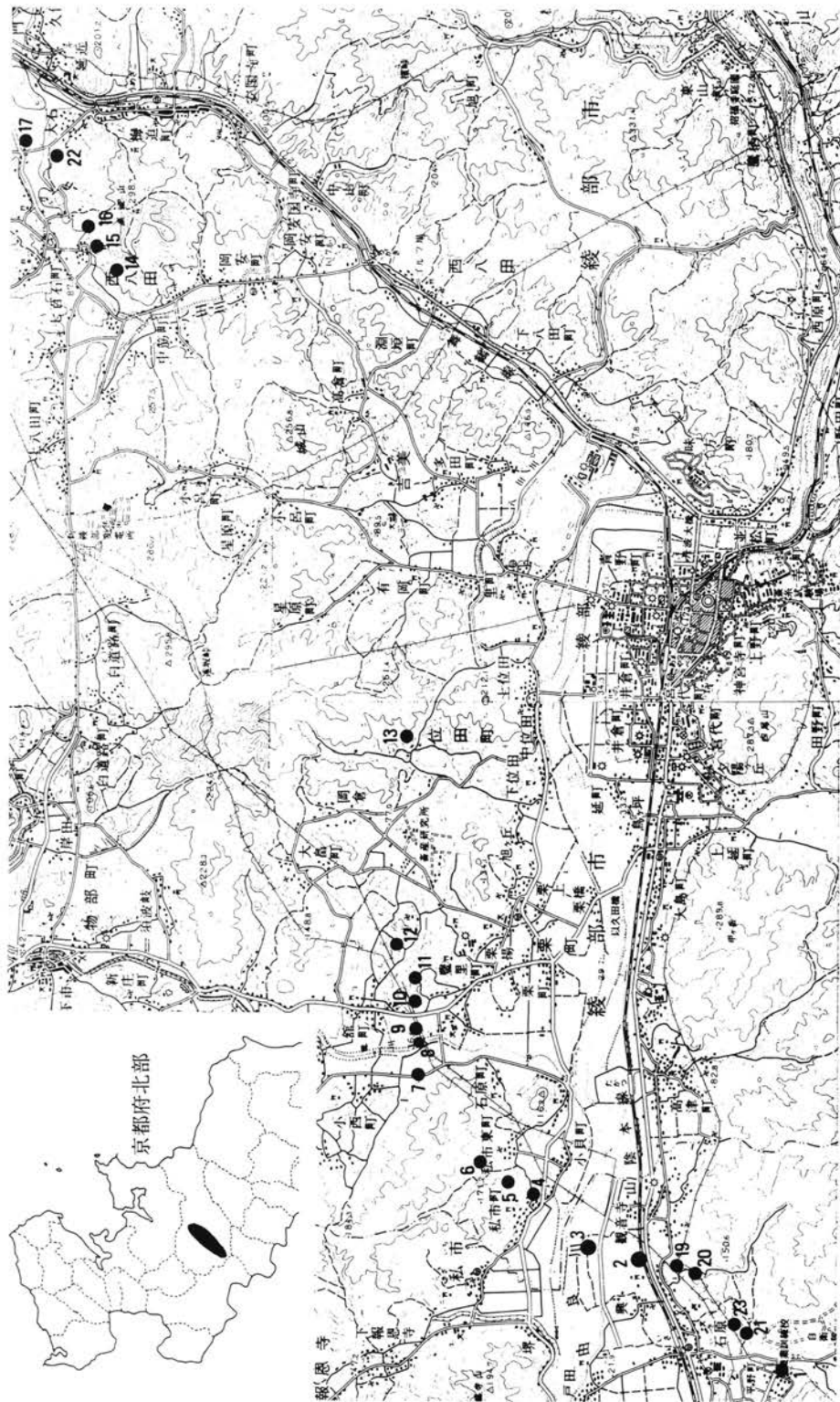
番号	遺跡名	所在地	調査 年度	調査 面積m <sup>2</sup>	資料	
					情報	概報
15	平山城館跡	綾部市七百石町	61	1,500	25	24
			62	2,300		
16	平山東城館跡	綾部市七百石町	61	1,000	23	24
17	野崎古墳群	綾部市高槻町	61	6基	25	24
14	鍛冶屋谷古墓	綾部市七百石町	61	40		31
7	小西町田遺跡	綾部市小西町	62	5,000	27	31
4	小貝遺跡	綾部市小貝町	62	1,400	27	31
10	福垣城館跡	綾部市豊里町	62	500		31
11	福垣北古墳群	綾部市豊里町	62	4基	28・ 30	31・ 36
			63	3基		
9	三宅遺跡	綾部市豊里町	62	5,500	31	31・ 36
			63	3,000		
8	三宅4号墳	綾部市豊里町	62	1基		31
5	私市円山経塚	綾部市私市町	62	1基	30・31	31・
5	私市円山古墳	綾部市私市町	63	1基	32・33	36
6	馬場池東方遺跡	綾部市私市町	63	1,200	32	36
12	館2号墳	綾部市館町	63	1基		36
13	赤田遺跡	綾部市位田町	63	1,500	29	36
2	興遺跡	福知山市興	63	2,000	32・ 33	36・ 37
			元	1,200		
3	観音寺遺跡	福知山市観音寺	63	1,400	32	36・ 37
			元	4,000		
21	火柴原古墳	福知山市石原	63	1基		36
19	西山城館	福知山市観音寺	元	100	33	37
20	古谷古墳	福知山市観音寺	元	1基		
22	奥大石古墳群	綾部市上杉町	元	3基	34	37
23	ヌクモ古墳群	福知山市石原	元	2基	33	37

福垣北古墳群は、総数120基を数える以久田野古墳群に北接する11基からなる古墳群で、方墳2基・円墳5基の調査を実施した。各古墳は、丘陵の自然地形を最大限利用して墳丘を築いており、主体部はいずれも木棺直葬で、出土遺物から5世紀前半まで遡ることが判明した。今回の調査により、これらの古墳群が以久田野古墳群の一支群と考えられ、以久田野古墳群の範囲が若干北西に広がること、築造時期が5世紀前半から始まることなどが明らかとなった。

小西町田遺跡は、弥生時代末期から古墳時代初頭・平安時代の集落跡である。特に9世紀を中心とする平安時代の遺構では10数棟の掘立柱建物跡を検出し、緑釉陶器片50点以上・灰釉陶器・青磁・白磁・硯・墨書土器などが出土し、官衙施設の可能性が考えられる。犀川を挟んで対岸の小字「ミヤケ」地名との関係など興味深い。

三宅遺跡は、犀川右岸の段丘上に立地する。弥生時代中期の方形周溝墓・古墳時代初頭の土坑群・三宅古墳群の4基の周溝・中世の掘立柱建物跡等を検出した。特に土坑群は、総数500以上を数え、大規模な墓壙群もしくは粘土採掘穴と考えられる。鋭意整理中であ





第1図 調査地位置図

るが、墓壙群とすれば中丹地域の一般集落の共同墓地を知る上で貴重な資料である。

私市円山古墳は、標高94mの丘陵上に立地し、福知山・綾部盆地を一望に見渡せる高所に位置している。古墳は10mの造り出しをもつ全長81mの大円墳であることが判明した。外表施設では、三段築成で人頭大の葺石が約145,000個、円筒埴輪や朝顔形埴輪が約1,500個樹立していたものと推定される。主体部は3基検出し、2段墓壙内に組合式木棺を安置し、棺の一部を粘土で被覆していた。墓壙内からは、甲冑・胡籬・鉄刀・鉄剣・農工具・鏡・玉類等多数の副葬品が出土した。特に、胡籬は金装で遺存状況がよく、また甲冑は三角板革綴短甲・冑・肩甲・頸甲・漆塗革製草摺のセットで検出している。この古墳は、5世紀中葉に築造され、中丹地方の方墳文化圏の中で突如出現した大円墳であり、墳形・副葬品から大和政権と密接な関係にある首長墓と考えられる。

赤田遺跡は、位田町北西部の山間部に立地し、東には南北朝期の城跡とされる高城山が位置する。階段状の平坦地(郭)があったため、当初城館跡として調査を開始したが、郭状の平坦地には遺構・遺物はなく、谷部傾斜地より古墳時代の竪穴式住居跡2基を検出した。この住居跡は、東側壁面に竈<sup>かまど</sup>をもち、伴出する須恵器から6世紀後半と考えられる。

興遺跡は、由良川によって形成された沖積地の縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地上に立地している。弥生時代中期・鎌倉～室町時代の遺構・遺物を検出し、特に弥生時代中期の大溝からは多量の遺物が出土するなど由良川中流域の土器編年を知る上で貴重な資料となった。また、分銅形土製品や簪<sup>かんざし</sup>等が出土している。

ヌクモ古墳群は、丘陵尾根の稜線上に10数基からなる古墳群で、2基の調査を実施した。1号墳は、一辺約25m級の方墳で2基の埋葬主体部(木棺直葬)を検出し、鉄刀・鉄鉾・鉄斧・刀子等の武具・工具が副葬されていた。2号墳は、一辺約10mの方墳で1基の埋葬主体部を検出している。組合式の箱式棺とみられる棺内は比較的遺存状況がよく、盤龍鏡1面・玉類・竪櫛が出土した。鏡は、鏡背の文様に一對の龍と虎が見返る状態で描かれており(龍虎鏡)、他に類例がない。古墳の築造時期は5世紀前半と考えられる。

奥大石古墳群は、丘陵尾根筋の先端部に築かれた一辺約11mの3基の方墳からなる古墳群である。1号墳の埋葬主体部は、礫敷の棺床に組合式の木棺を安置したものと思われ、鉄剣・鉄刀が一振りずつ出土した。2号墳からは、組合式木棺・割竹形木棺を安置する2基の埋葬主体部を検出し、組合式木棺では蛇行剣・鉄鎌が、割竹形木棺からは石製白玉・竪櫛・針状の鉄製品が出土した。特に、蛇行剣(全長70cm)は全国でも40余例が知られるだけで、京都府内では初例である。古墳群の築造時期は、5世紀前半期と考えられる。

(水谷壽克)

## 第2章 各遺跡の調査

### 第1節 興遺跡

#### 1. はじめに

興遺跡は、由良川左岸の自然堤防上に立地する集落遺跡である。この遺跡は、弥生土器・須恵器などの遺物が採取されており、以前から遺物散布地として周知されている。

今回、興遺跡の隣接地に近畿自動車道敦賀線の建設が計画された。そのため、当センターでは工事に先立ち、遺構の有無を確認して記録保存を図るとともに、重要な遺構を検出した場合に保存のための資料を作成することを主な目的として調査を実施した。

#### 2. 遺跡の位置

興遺跡は、京都府福知山市字興～観音寺に所在する。福知山市街地の東方約6km、綾部市街地と福知山市街地の中程に位置する。

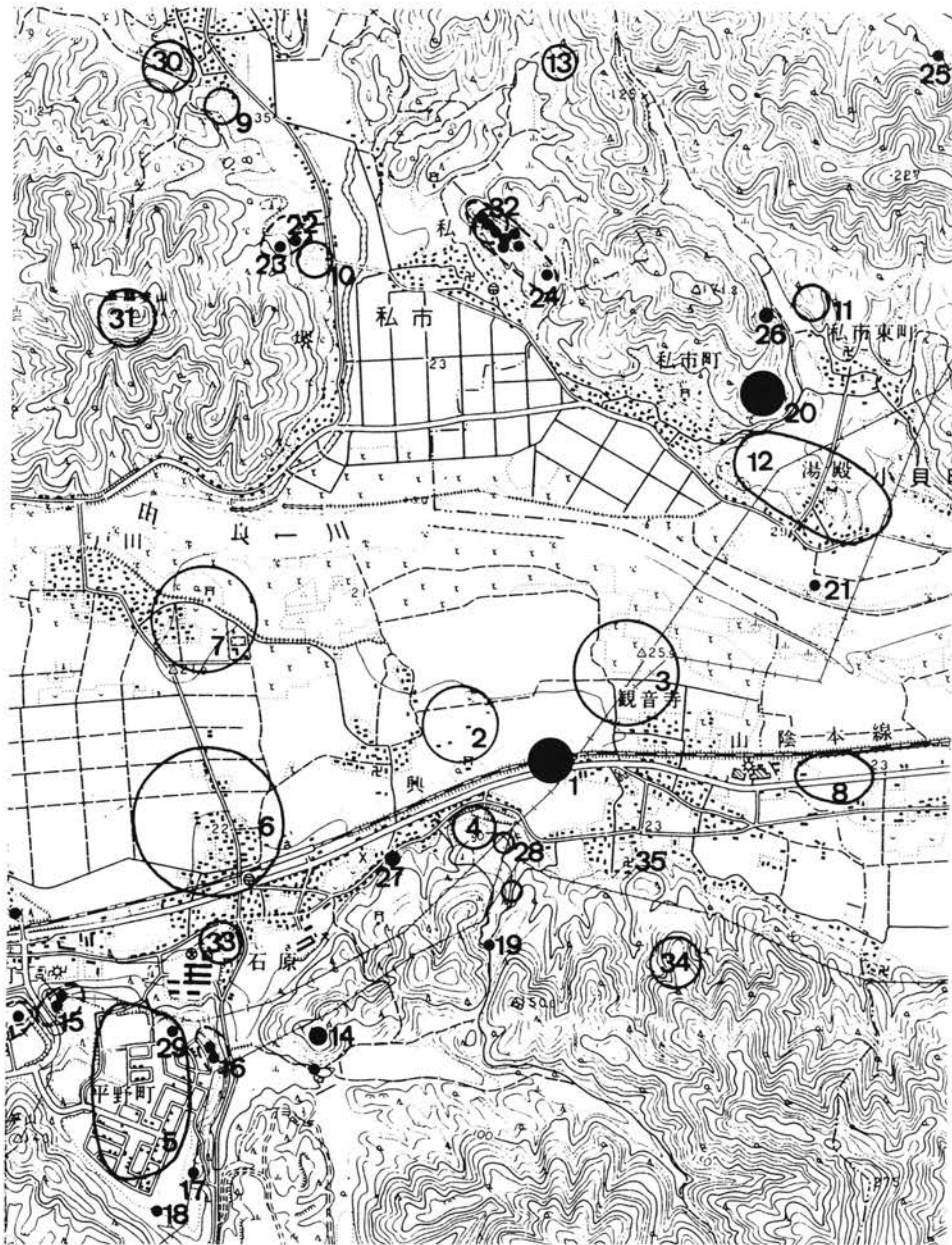
この付近は、由良川の流路変動に伴う氾濫原が発達しており、流れに沿って至るところに旧河道や自然堤防状の微高地が見られる。現在、人々はこの微高地上に居を構えて村落をなし、後背湿地となった旧河道を水稻耕作地として利用している。

この微高地上には数多くの集落遺跡の分布が確認されているが、興遺跡もこうした集落遺跡の一つである。

興遺跡は、昭和20年興小字下地で道路工事が行われたおりに弥生土器(中期)が出土し、集落遺跡として周知された<sup>(注1)</sup>。その後、福知山市教育委員会・京都府教育委員会が分布調査を行い、遺跡の範囲を阿比地神社を南限とする径約250mと推定した<sup>(注2)</sup>。

興遺跡の周辺には、縄文時代から平安時代にかけて営まれた上野平遺跡(5)、弥生時代中期の興南遺跡(4)、弥生時代中期から中世にかけて営まれた観音寺遺跡(3)、弥生時代中期の方形周溝墓が見つかった小貝遺跡(12)、石原遺跡・戸田遺跡(土師器・須恵器散布地)などの各時代の集落遺跡がある。また、沖積地を望む丘陵上には、私市円山古墳<sup>(注3)</sup>(20)、ヌクモ古墳<sup>(注4)</sup>(14)、中坂古墳群<sup>(注5)</sup>などの古墳も数多く分布している。私市円山古墳は全長81mの大型の円墳で、5世紀代の首長墓と考えられている。ヌクモ古墳は中国製の盤竜鏡の出土で知られる。中坂古墳群は、古墳時代中期から後期にかけての古墳群である。後期に造られた7号墳は木心粘土室を主体部としており、注目を浴びた。

興遺跡のすぐ南側には中世に栄えた補陀落山観音寺があり、寺に伝えられた文書から、



第2図 興遺跡と周辺の遺跡(1/25,000)

- |          |           |          |            |            |          |
|----------|-----------|----------|------------|------------|----------|
| 1.今回調査地  | 2.興遺跡     | 3.観音寺遺跡  | 4.興南遺跡     | 5.上野平遺跡    | 6.石原遺跡   |
| 7.戸田遺跡   | 8.高津遺跡    | 9.広野遺跡   | 10.立石遺跡    | 11.馬場池東方遺跡 |          |
| 12.小貝遺跡  | 13.桜谷遺跡   | 14.ヌクモ古墳 | 15.仏山1・2号墳 | 16.池尻1・2号墳 |          |
| 17.狐塚古墳  | 18.平野古墳   | 19.小谷古墳  | 20.私市円山古墳  | 21.小貝古墳    | 22.奉安塚古墳 |
| 23.高龍塚古墳 | 24.西稲葉古墳群 | 25.奥田古墳  | 26.私市経塚    | 27.興経塚     | 28.西山古墓  |
| 29.上野古墓  | 30.報恩寺城跡  | 31.高蓮寺城跡 | 32.私市城跡    | 33.石原城跡    | 34.観音寺城跡 |
| 35.観音寺   |           |          |            |            |          |

このあたりは鎌倉時代には八条院領の六人部新莊、南北朝ころからは天龍寺領となっていたことがわかっている。今回の調査で中世の建物跡群が多数検出されているが、こうした莊園との関係が注目される<sup>(注6)</sup>ところである。

また、この付近は山城が多く分布するところでもある。石原城(33)、観音寺城(34)、高蓮寺城(31)などが主なものである。観音寺城は、室町時代の大槻将監の居城で、郭や空堀が残っている。

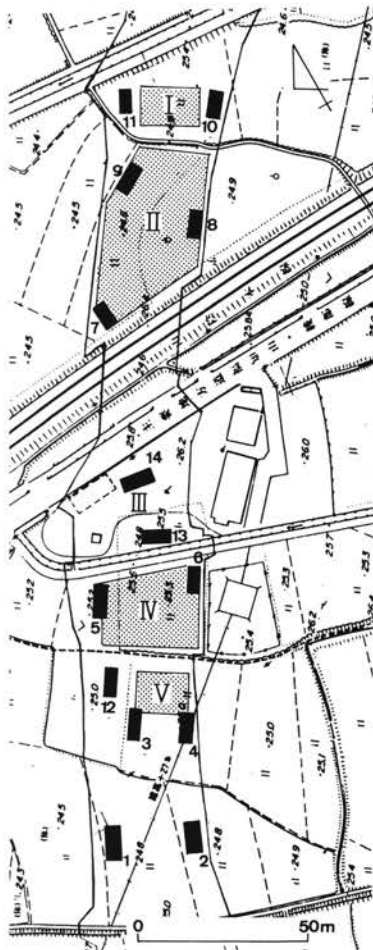
### 3. 調査の方法と概要

今回の調査対象地は、『京都府遺跡地図』に記された興遺跡推定範囲の南東にあたり、銅剣・石剣の出土で知られる観音寺遺跡<sup>(注7)</sup>に南接する位置にある。この地点は当初、遺物の

散布がほとんど認められなかったことから、地表観察のみでは遺跡であるかどうかの判断はむずかしかった。しかし、隣接地に興・観音寺遺跡などの著名な集落遺跡があることや、対象地内にこれらの集落遺跡が立地すると同様の自然堤防を含んでいることなどから、この地点に何らかの遺構が存在することが考えられた。そこで、発掘調査に先立ち、遺構・遺物の有無や分布状況等を確認する目的で試掘調査を実施した。

調査対象地内には、未買収地や耕作物が多く残っていたため、試掘トレンチはこれらを避け、地形にあわせて任意に設定した。トレンチは5m×10mとし、合計11本(No.1～11)を設定して開掘した。試掘の結果は以下のとおりである。

第1・2トレンチは、湧水の多い湿地である。水田床土直下で青灰色粘土層が現れ、地表下約1.4mで暗茶褐色粘質土に移行する。遺構・遺物は出土していない。第3から9トレンチは暗褐色粘質土をベースとしており、安定した堆積状況を示す。第3・4トレンチでは遺構・遺物は出土していないが、第5・6トレンチでは、暗茶褐色粘質土上面で中世の柱穴と遺物を確認した。耕作土中に弥生時代中期の土器を含んでおり、周辺に同時代の遺構の存在が予想された。第7～9トレ



第3図 トレンチ配置図

ンチでは、弥生時代中期の溝・土坑や時期不明の柱穴を多数検出した。また、耕作土中には古墳時代～奈良時代、中世の土器類が散発的にみられ、この周辺には各時代の遺構が広く分布することが予想された。第10・11トレンチは黄色粘土をベースとし、第10トレンチでは弥生時代中期の土坑と溝の一部、第11トレンチでは時期不明の流路を1条検出した。

以上のことから、第5から第9トレンチにかけては土層の安定した自然堤防であり、この自然堤防を中心として複数の時代の遺構が分布していることが予想されるに至った。第3・4トレンチ開掘部分は南側に、第10・11トレンチ開掘部分は北側に向かって緩やかに傾斜しており、自然堤防の縁辺部にあたるものと思われる。

この後、以上の成果を受けて遺構の遺存密度が高いと考えられる地区について面的な発掘調査を実施した。

発掘調査にあたり、調査対象地を北部地区(I・II地区)と南部地区(III・IV・V地区)の二つに分け、1988年度に南部地区を翌1989年度に北部地区の発掘調査を実施した。調査は、土地買収の遅れ等、諸般の事情によりIV地区→V地区→I地区→II地区の順に着手した。その後、第12トレンチを追確認の意味で開掘した。III地区は、遺構の密度が最も高い地点と予想されたが、工事計画の都合から試掘・立会調査に終わった(第13・14トレンチ)。

調査は、重機を用いて遺構直上面までの土砂を除去し、その後人力によって遺構の検出・精査作業を行った。以下は、各地区の調査概要である。

**I地区** 調査対象地の北端に設定した拡張区である。遺構分布の北限でもある。この地区では、弥生時代中期の土坑・溝などを確認した。土坑は、15基あまりを検出したが、いずれも平面形態が不定形であり、掘形も不整形であった。土坑群は、II地区北限で検出した土坑群と一連のものである可能性が高い。

**II地区** JR・府道の北側に設けた拡張区である。自然堤防のピークを含んだ地点で、環濠とみられる溝・土坑・掘立柱建物跡・ピット等の遺構が広い範囲で分布していた。これらの遺構は、時期が明らかでないものを除き、すべて弥生時代中期に属するものである。

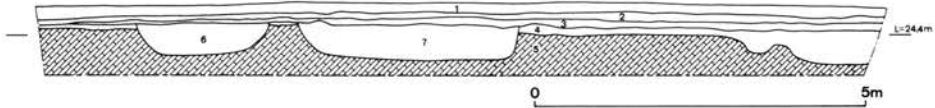
**III地区** この地区では立会調査を行った。第13・14トレンチを設定し、遺構の分布状況を確認した。第13トレンチでは「L」字状の小規模な溝、第14トレンチでは幅約2.5mの溝の一部を確認した。遺物は少ないが、いずれも弥生時代中期に属するものと思われる。

**IV地区** 弥生時代中期の溝と柱穴、鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡・土壙墓・土坑・柱穴など多数の遺構を確認した。弥生時代中期の溝は、II地区で確認した環濠とみられる溝との関連が考えられる。この地区は、今回調査地点内での遺構分布の南限である。

**V地区** IV地区で遺構が顕著に検出されたため、遺構の広がり確かめる目的で設定した。しかし、時期の明らかでない小規模な溝を1条検出したにとどまり、明確な遺構・遺

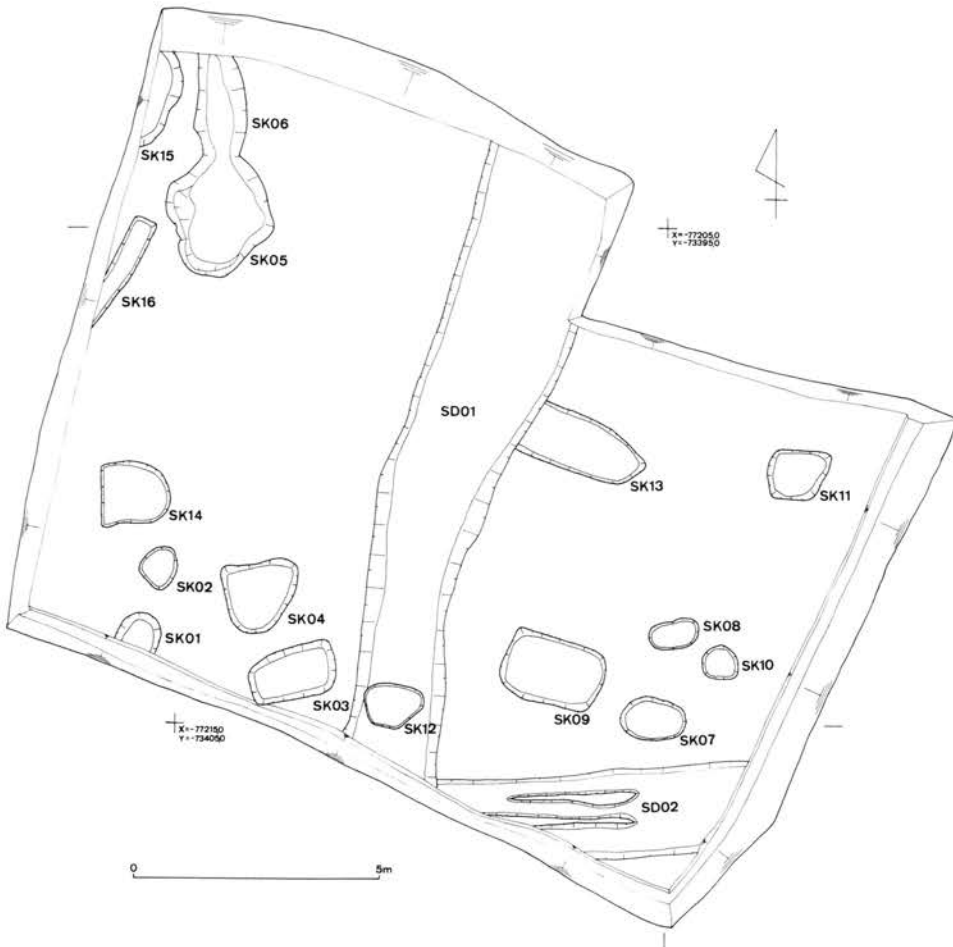
物を確認することはできなかった。この拡張地区は、第2・第3トレンチに挟まれた地点にあたり、IV地区より水準がやや低く、微高地の傾斜変換地点にあたる。開墾・耕作等により遺構が削平されたものと思われる。

今回の調査では、上述したような成果が得られており、当地点は弥生時代中期から中世にかけて断続的に営まれた集落遺跡であることが明らかとなった。



第4図 I地区南壁土層断面実測図

- 1.耕作土 2.暗灰色土 3.明灰褐色土 4.淡灰褐色土 5.黄色粘土  
6.灰褐色土(黒灰色土混じり) 7.灰褐色土



第5図 I地区検出遺構実測図

## 【1】各地区の遺構

## 〔1〕Ⅰ地区

調査対象地域の北端に設定した調査地区である。この地区は、自然堤防状の微高地とその北側に広がる旧河道との境界部分にあたり、緩やかな傾斜をなしている。

Ⅰ地区では、溝と土坑多数を検出した。遺構は、帰属時期の不明なものを除き、いずれも弥生時代中期(第Ⅳ様式)のものである。Ⅱ地区北半で検出した土坑群と同時期であり、両者が隣接していることなどからみて一連のものである可能性が高い。

(1)層序(第4図) 南壁の土層図を図示した。第1層は耕作土、第2層は第1層の床土にあたるもので、暗灰色を呈する。第3層は明灰褐色の粘質土である。第4層は、淡灰褐色土であり、遺構はこの面から切り込まれているようである。この層には、弥生時代中期(第Ⅳ様式)の土器が包含されていた。第5層は黄色粘土である。黄色粘土は下層にゆくに従って青みを増し、次第に青灰色粘土となる。黄色粘土と青灰色粘土との境界は明瞭でなく、土質が類似しているため分離することはむずかしい。第4層は、削平を受けたものと思われ、薄くて微弱である。3層以上は削平後の再堆積によるものと考えられる。

(2)検出遺構(第5図) 溝と土坑を検出した。主なものについて説明する。

## ①溝

S D 01 トレンチのほぼ中央で確認した。約12m分を検出した。幅は南端で約2.4m・北端で約3.2mを測り、北側がやや広い。深さは、検出面から深いところで20cmある。断面は台形である。この地区は北側に向かって傾斜しており、北流する溝と思われる。

埋土は、灰褐色の粘性の強い土である。埋土には、弥生時代中期(第Ⅳ様式)の壺・甕・高杯などの破片を含んでいる。土器は摩滅していて細片となったものが多い。

S K 12・13・S D 02を切っており、これらから後に形成されたものであることがわかる。

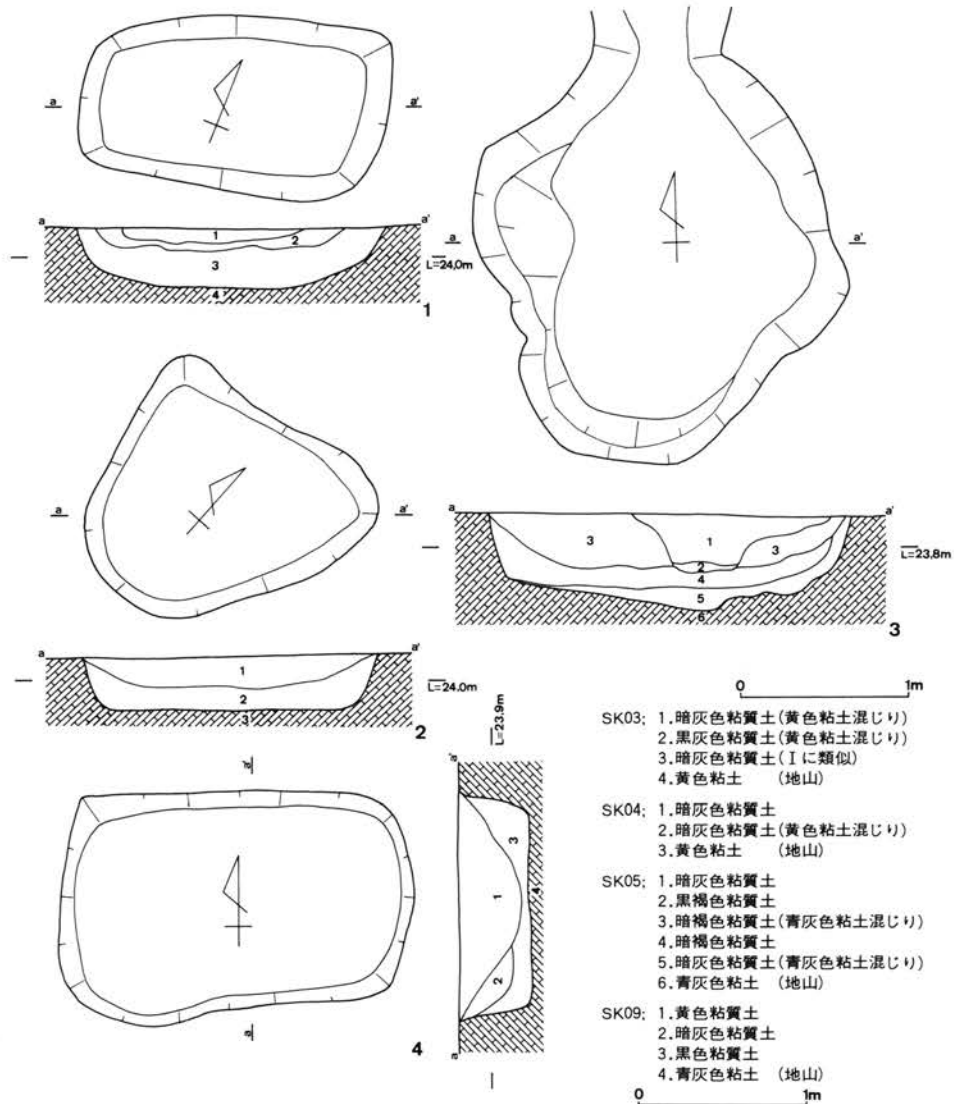
S D 02 トレンチの南東隅で一部を検出した。幅60～80cmの溝が2ないし3条複合したものである。埋土は、黒灰色土、炭まじりの灰褐色土である。溝の東端で弥生時代中期(第Ⅳ様式)の壺体部破片が出土した。溝の断面形は「U」字形である。

②土坑(第6図) 土坑は計16基を検出した。平面形態は、方形のもの(S K 03・09)、長楕円形のもの(S K 06～08・13・15)、楕円形のもの(S K 01・02・10)、不整円形のもの(S K 04・05・12)、溝状のもの(S K 16)など多様である。

ここでは、主なものについて記すことにしたい。全体に関しては付表2を参照されたい。

S K 03 長さ約1.8m・幅約1.2m・深さ約40cmの長方形土坑である。主軸を東西方向にとる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は船底状である。底面は平坦である。埋土は、暗褐色粘質土を主体とし、第1・2層ではベースと同じ黄色粘土ブロックが顕著にみられ





第6図 I地区検出土坑実測図

1. S K 03 2. S K 04 3. S K 05 4. S K 09

た。第3層から第IV様式の壺と甕体部破片が出土した。

第3層から約15cm四方の粘土ブロックを採取し脂肪酸分析を行った結果、高等動物起源とみられるステロール類が検出され、人体埋葬遺構である可能性が高まった。分析結果及び考察は付載参照。

S K 09 長さ約2.1m・幅約1.3m・深さ約40cmの長方形土坑である。主軸は東西方向で、壁面はほぼ直立しており、底面は平坦に造られている。埋土は、黄色粘土ブロック混じりの暗灰色粘土を主体とし、下層には黒色の有機質土がみられた。下層から第IV様式の壺・

付表2 I地区検出土坑一覧表

遺構名称	平面形態	床形態	規模		深さ(m)	出土遺物	備考
			長軸(m)	短軸(m)			
S K 01	楕円形	船底状	0.7以上		0.4	弥生時代中期壺 ・甕・高杯破片	
S K 02	楕円形	船底状	0.9	0.9	0.2	〃	
S K 03	長方形	船底状	1.8	0.7	0.4	〃	
S K 04	不正円形	船底状	1.7	1.2	0.3	〃	
S K 05	不正円形	船底状	2.3	1.5	0.7	弥生時代中期壺・ 甕・高杯破片、 磨製石斧	S K 06に切 られる
S K 06	長楕円形	船底状	2.1以上	2.2	0.5	弥生時代中期壺 ・甕・高杯破片	
S K 07	長楕円形	船底状	1.3	0.9	0.3	〃	
S K 08	長楕円形	船底状	1	0.5	0.4	遺物なし	
S K 09	長方形	平面形	2.1	1.4	0.4	弥生時代中期壺 ・甕・高杯破片、 木製簀	
S K 10	楕円形	船底状	0.8	0.8	0.2	遺物なし	
S K 11	隅丸方形	船底状	1.2	1	0.4	〃	
S K 12	不正円形	船底状	1.2	0.9	0.2	弥生時代中期壺 ・甕・高杯破片	
S K 13	長楕円形	船底状	2.3	1.2	0.2	〃	
S K 14	隅丸方形	船底状	1.3	1.2	0.3	〃	
S K 15	長楕円形	船底状	2	0.6	0.4	〃	
S K 16	溝状	船底状	2.4以上	0.4	0.3	〃	

甕・高杯・木製の簀などが出土した。

S K 05 長さ約2.3m・幅約2.2m・深さ約70cmを測る。南北に主軸をもつ不定形な土坑である。断面形は船底状で、底面に凹凸がある。第1・2層は、第3層を穿って形成されていることから、土坑埋没後に再掘された痕跡を示すものと思われる。小規模な土坑が複合したものであろうか。

埋土は暗灰褐色粘質土を主体とするが、黄色粘土ブロックの混入が顕著である。埋土中～下層から弥生土器、磨製石斧などが出土した。なお、S K 05はS K 06に切られている。

## 〔2〕II地区

府道及びJ R線路の北側に設定した拡張区である。I地区の南側にあたり、自然堤防状

の微高地の西側に位置している。

この地区では、溝と土坑多数、掘立柱建物跡、柱穴等を検出した。遺構は時期不明のものを除き、いずれも弥生時代中期後半に属するものである。以下に記すように削平が著しく、上層遺構はすでに破壊されていた。耕作土中から古墳時代後期の須恵器、奈良時代の須恵器、鎌倉・室町時代の瓦器細片が少量出土しており、これら各時代の遺構が存在していた可能性が高い。

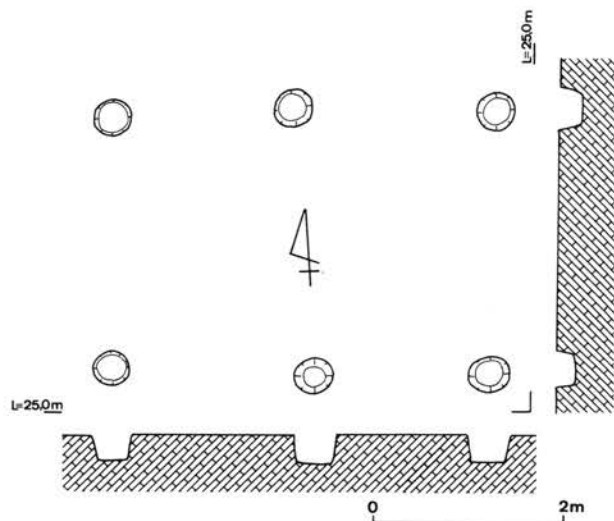
(1)層序 層序は、A調査地区と同様である。水田造成のため調査対象地や全体にわたって削平されており、耕作土直下で遺構のベースである暗茶褐色粘質土が現われた。旧表土及び遺物包含層は認められない。遺構は、すべて暗茶褐色粘質土上面で検出した。

(2)検出遺構 検出遺構には溝・土坑・掘立柱建物跡・柱穴等がある(第8図)。時期がわかるものはすべて弥生時代中期後半(第IV様式)に属する。主な検出遺構を説明する。

### ①建物跡

S B01(第7図) 梁間1間×桁行2間の掘立柱建物跡である。東西棟である。柱間は梁間約2.8m×桁行約2mを測る。柱穴は円形で、径約40cm・深さ約30cmを測る。高床倉庫であろうか。出土遺物はなく、時期不明である。S K36を切っている。

S H01(第9図) 一辺約4mの多角形を呈する遺構である。遺存状況が悪く、検出面からの深さは10cm前後である。中央に楕円形の土坑(S K39)があり、焼土と弥生土器(第IV様式)細片が少量出土している。S K39とS H01との切り合い関係は明らかでない。S H01は住居跡と考えられるが、支柱穴が認められず、推測の域を出ていない。



第7図 S B01実測図

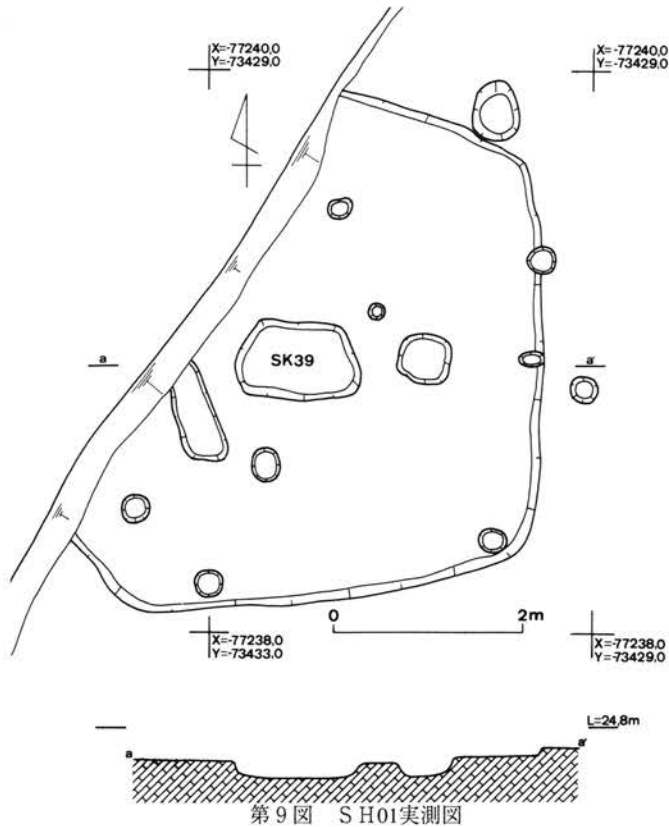
### ②溝

S D01・02(第10図) 調査地区南端で検出した大溝である。S D01はS D02を切り、S D02埋没後に溝の一部を利用して開掘したものである。埋土の状況からみて、S D01開掘の際にはS D02の大半は埋没していたようである。

S D01 約12m分を検出した。上面の幅約3m・深さ約1.2m、断面形は「U」字形を呈する。埋土は10層に分ける



第8图 II地区検出遺構実測図



第9図 SH01実測図

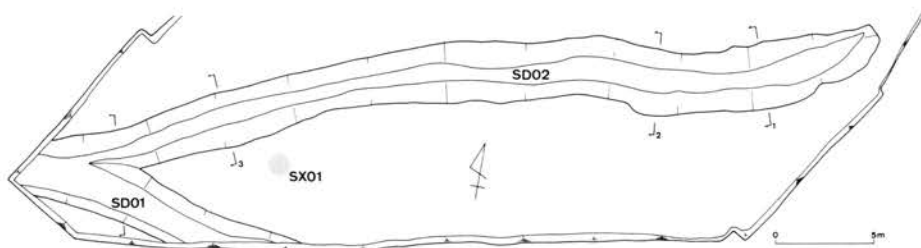
ことができ(第11図2～11層)、大きくみて第3・4層間(I)、第6・7層間(II)に線引きすることができる。この線を挟んで土質、色調、堆積状況が相違しており、土器の包含状況にも変化がみられる。I以上を上層、II以上を中層、II以下を下層と呼んで略述する。

上層(第2・3層) 暗茶褐色系の砂質土からなり、均質な堆積状況を示す。比較的短期間のうちに埋没したものと思われる。土器は、完形の固体

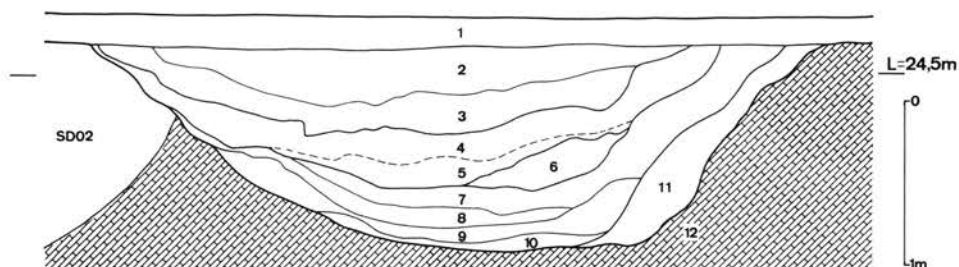
を2・3含むが、細片を主体とし、摩滅したものが多い。

中層(第4～6層) 第4・5層は、暗褐色系の砂質土からなる。土器は、細片が主体で数少ない。第6層は、黄褐色粘質土ブロックであり、無遺物層である。

下層(第7～11層) 第7層は黄褐色土、第8層は黒灰色土、第9層は暗灰色粘質土、第10層は暗黄灰色粘質土である。それぞれラミナ状の堆積状態を示し炭化物・土器片を多く含んでいた。土器は、第9・10層に顕著に包含されており、完形に近い固体を主としている(第14図)。土器の整理にあたっては、この層中のものが高い一括性を有していると判断

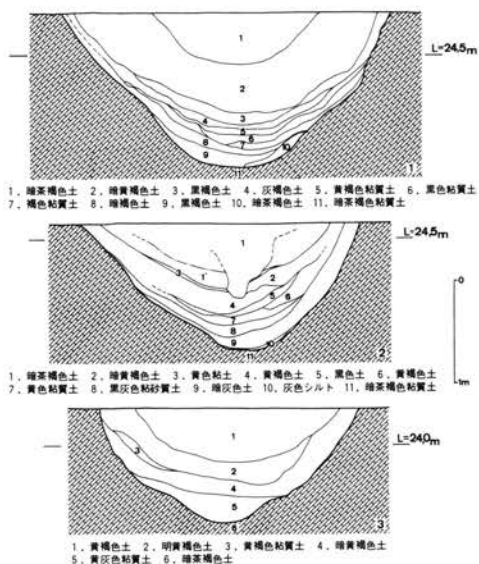


第10図 SD01・02実測図



1. 耕土 2. 茶褐色土 3. 暗茶褐色土 4. 暗褐色土 5. 暗灰褐色土 6. 黄褐色粘質土  
7. 暗灰褐色粘質土 8. 黒灰色土 9. 暗灰褐色粘質土 10. 黄褐色粘土 11. 暗黄灰色粘質土

第11図 SD01断面図(東壁)



1. 暗茶褐色土 2. 暗黄褐色土 3. 黄褐色土 4. 灰褐色土 5. 黄褐色粘質土 6. 黒色粘質土  
7. 暗茶褐色粘質土 8. 暗褐色土 9. 黄褐色土 10. 暗茶褐色土 11. 暗茶褐色粘質土

1. 暗茶褐色土 2. 暗黄褐色土 3. 黄褐色土 4. 黄褐色土 5. 黒色土 6. 黄褐色土  
7. 黄褐色粘質土 8. 黒灰色粘質土 9. 暗褐色土 10. 灰色シルト 11. 暗茶褐色粘質土

1. 黄褐色土 2. 明黄褐色土 3. 黄褐色粘質土 4. 暗黄褐色土  
5. 黄灰色粘質土 6. 暗茶褐色土

第12図 SD02断面図(東壁)

されたため、最下層として分離して取り上げた。第11層は、遺構のベースである暗茶褐色粘質土と類似した層で遺物を含まない。溝の掘削後間もなく流れ込んだようである。この溝は後に述べるように集落を囲む(環濠)と考えられるが、第11層は集落側から流入した無遺物層であり、溝の内側に設けられた土塁等の施設が崩壊したものと考えられることはできないだろうか。

溝内部からは多量の弥生土器

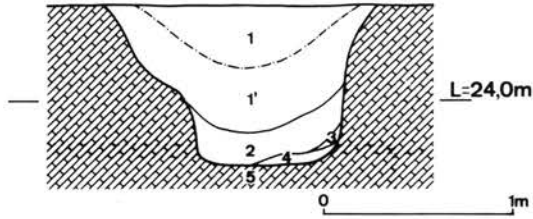
のほか、石器類が出土している。

SD02(第10図) 40m以上を検出した。北側に向かって張り出しぎみに掘削されており、緩やかな弧を描く。東端で浅くなって終わっている。幅2.5~3m・深さ1.2~1.5mを測る。断面形は「U」字形である。SD01に比べて壁の立ち上がり角度が大きくやや深い。埋土は、SD01寄りでは黄褐色土系の砂質土を主体とし単純な層位をなし(第12図3)、遺物も希薄である。遺物は下層で最も多く(第12図1から2の間)、まとまった状態で出土している。埋土の堆積状況については第12図1を用いて説明する。

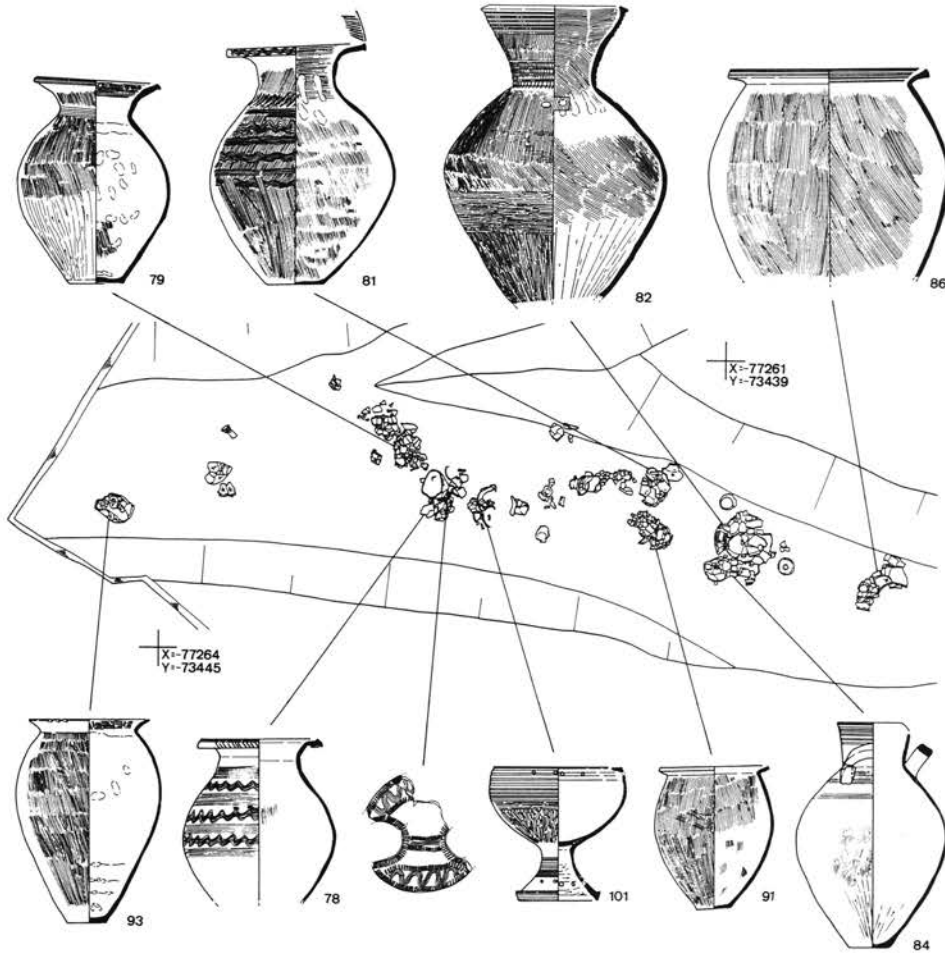
第1層は暗茶褐色土である。土器を比較的多く含むがいずれも細片で摩滅したものが多い。第2層は暗黄褐色土であり、下位に土器を多く含む。第3~4層は、灰~黒褐色粘質土で炭化物・土器を多く含む。第5層は黄褐色粘質土の無遺物層である。第6層は黒色粘質土、第7層は焼土を多く含む褐色粘質土、第8層は暗褐色土、第9層は黒褐色土である。

第6～9層は、ラミナ状の堆積状況を示し、土器・炭化物が顕著である。第10層は暗茶褐色土であり、ベースと類似する土質を有し遺物は含まない。遺物は、第1層～第2層上位、第2層下位～第4層を中層、第6層～第9層を下層として一括して取り上げた。下層のうち

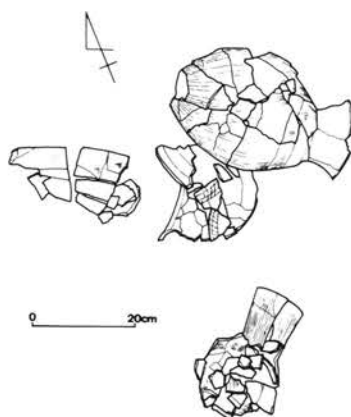
第8～9層では完形に近い多数の土器が溝底に貼りつくよう出土し、一括性が高いと判断されたため最下層として分離した。第12図2では上層が第1～3層、中層が第4～6層、下層が第7～10層に対応する。溝内部からは多量の弥生土器が出土している。



第13図 S D03断面図(北壁)



第14図 S D01最下層遺物出土状況



第15図 SX01遺物出土状況

S D03 調査地区北西端で検出した溝である。約11m検出した。幅約1.2m・深さ約0.8mを測る。底は平坦で、断面は逆台形を呈する(第13図)。溝は蛇行して南西に向かい、途切れる。土坑SK32・34・35を切る。弥生時代中期(第Ⅳ様式)の土器片を多く含む。

S X01 S D01とS D02の間で検出した径1m前後の楕円形の焼土である。厚さ約20cmほどが遺存していたが、範囲が不明瞭で性格は明らかでない。焼土層中から壺・甕などが一括して出土している(第15図)。

### ③土坑(第16・17図)

この地区では計39基の土坑を確認した。いずれも弥生時代中期に属するものである。平面形態は、方形のもの(S K07・11・17・20・26・35・38)、長楕円形のもの(S K02・03・05・06・10・18・19・21・27~30・32・33・36・39)、楕円形のもの(S K01・04・08・09・12・22・25・31・34・37)、不整形のもの(S K13~16・23)などがあり、多様である。土坑は、S D02から北側に16~18m離れて列状に溝と平行するように分布する傾向を認めることができる。土坑は、E調査地区の北側に設定したD調査地区でも多数検出されており、自然堤防北縁部の広い範囲に分布するものと思われる。詳細は付表3を参照されたい。主なものについて説明する。

S K02(第16図3) S D02埋没後に、掘削されたとみられる楕円形の土坑である。長軸1.8m以上・短軸約0.9m・深さ約40cmを測り、断面形は船底形である。埋土は灰混じりの暗褐色粘質土の単層で、埋土中~下層に弥生土器が集積していた(第59図)。

S K03(第16図2) 深さ約20cmの長楕円形土坑である。底部から折損した鉄剣形磨製石剣が出土している(第60・86図)。

S K08 S D02埋没後に掘削された楕円形の土坑である。埋土がS D02上層と類似しており明瞭でないが、規模は径約1.2m・深さ約40cm前後である。完形の壺形土器や鉄鏃などが出土している(第61・62・80図)。

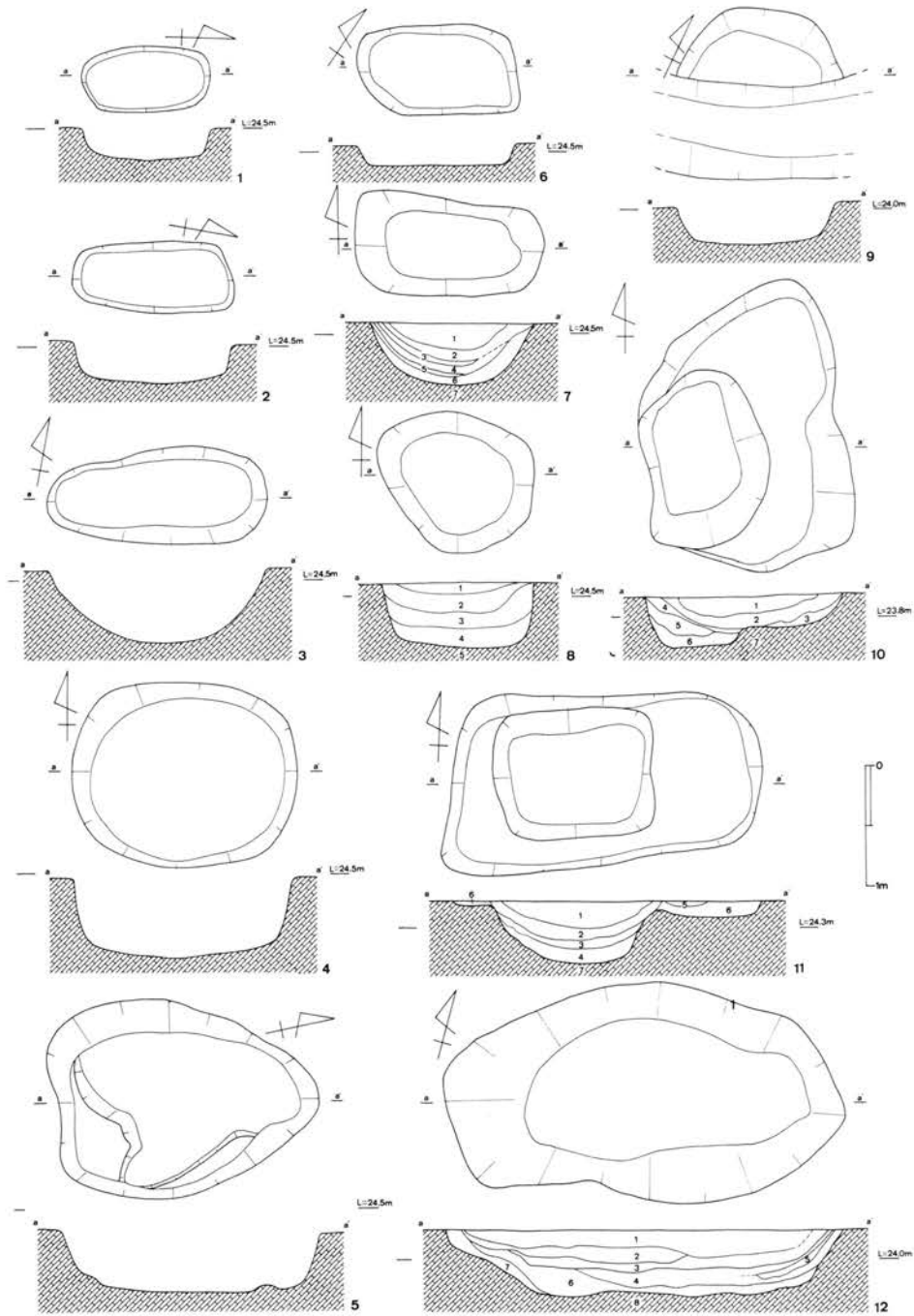
S K09(第16図8) 径1.2~1.3mの楕円形の土坑である。

S K10(第16図7) 長楕円形で、断面形が船底形を呈する土坑である。

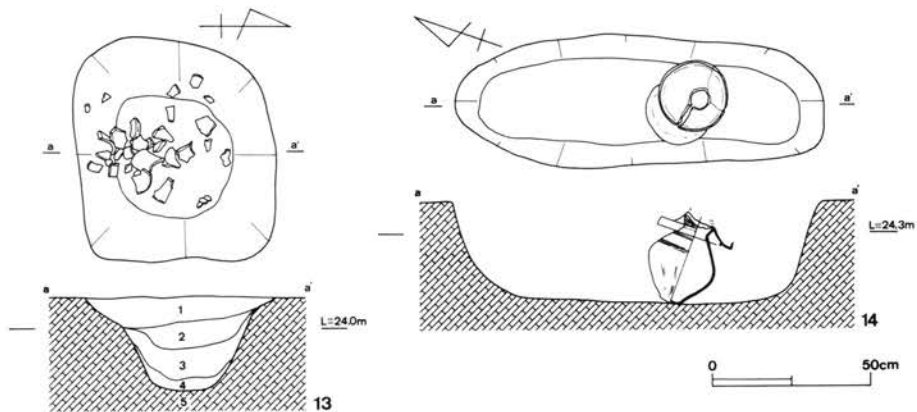
S K11(第16図11) 隅丸方形の土坑で中央が一段低い。2基の土坑が重複したのだろう。

S K13 長軸約1.8m・短軸約1.4m・深さ約60cmの不定形な土坑である。底部は皿状であるが凹凸が著しい。埋土の堆積状況も一様でなく、複数の土坑が重複している可能性が高い。埋土上~中位から弥生土器が多数出土した。

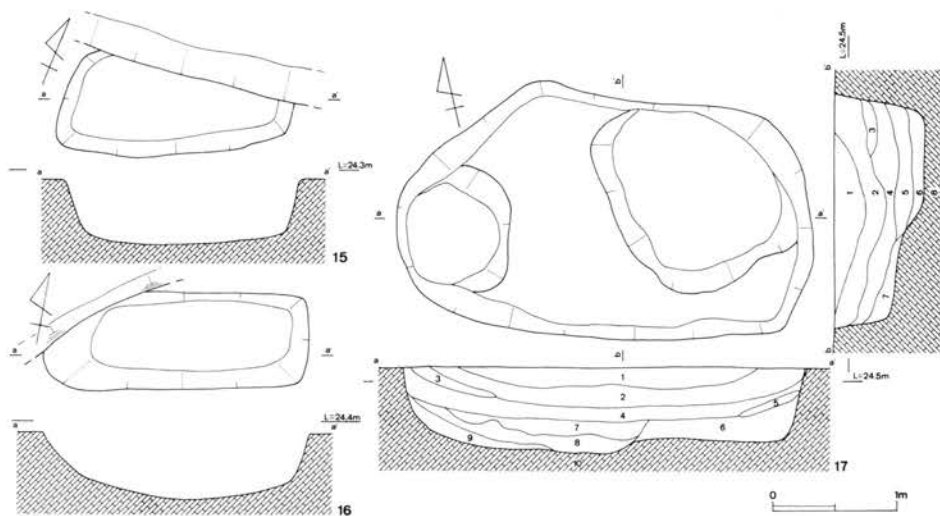




第16図 II地区検出土坑実測図(1)



第17図 II地区検出土坑実測図(2)



第18図 II地区検出土坑実測図(3)

- 1.S K01 3.S K02 5.S K16 7.S K10 9.S K34 11.S K11 13.S K07 15.S K35 17.S K19  
2.S K03 4.S K37 6.S K05 8.S K09 10.S K14 12.S K15 14.S K33 16.S K17

この番号は、第16～18図の通し番号である。

S K 15(第16図12) 長軸約3.4m・短軸約1.8m・深さ約50cmの大形不正円形土坑である。

S K 17(第18図16) 断面が船底形の長方形土坑である。

S K 24 底部が平坦な長楕円形土坑である。

S K 19(第18図17) 長軸約3.4m・短軸約2.0m・深さ約0.9mを測る長楕円形の大型土坑である。中～下位で完形の壺形土器を含む弥生土器が多数出土した(第67・68図)。

S K 33(第17図14) 長軸2.3m・短軸0.8m・深さ約60cmの長楕円形の小型土坑である。土

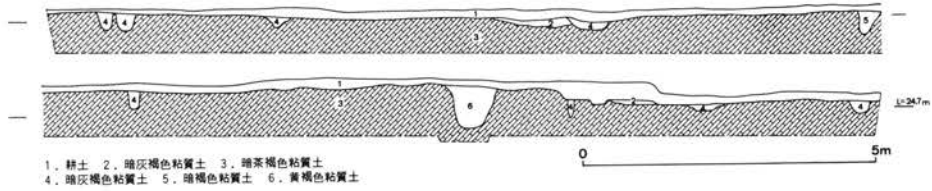
付表3 II地区検出土坑一覧表

遺構名称	平面形態	床形態	規模		深さ(m)	出土遺物	備考
			長軸(m)	短軸(m)			
S K 01	楕円形	皿状	1.1	0.7	0.3	弥生時代中期壺・ 甕・高杯破片	
S K 02	長楕円形	船底状	1.8	0.9	0.4	〃	S D 02を切る
S K 03	長楕円形	平坦	1.3	0.8	0.2	〃	鉄剣形磨製石剣出土
S K 04	楕円形	皿状	1	0.9	0.2	〃	
S K 05	長楕円形	皿状	1.8	1	0.2	〃	
S K 06	長楕円形	船底状	1.9	0.8	0.6	〃	
S K 07	隅丸方形	平坦	0.7	0.6	0.3	〃	
S K 08	楕円形	船底状	1			〃	S D 02を切る
S K 09	楕円形	皿状	1.3	1.2	0.9	〃	
S K 10	長楕円形	皿状	1.6	0.8	0.5	〃	
S K 11	隅丸方形	平坦	2.6	1.5	0.5	〃	2基以上の土坑が複合か
S K 12	楕円形	皿状	1.6	1.1	0.5	〃	
S K 13	不正円形	皿状	1.8	1.4	0.6	〃	2基以上の土坑が複合か
S K 14	不正楕円形	船底状	2.4	1.6	0.4	〃	〃
S K 15	不正楕円形	船底状	3.4	1.8	0.5	〃	
S K 16	不正楕円形	凹凸	2.2	1.3	0.5	〃	
S K 17	長方形	平坦	2.1	0.8	0.5	〃	
S K 18	楕円形	皿状	0.9	0.8	0.2	〃	
S K 19	長楕円形	船底状	3.4	2	0.9	〃	2基以上の土坑が複合か
S K 20	長方形	平坦	1.3	0.8	0.4	〃	
S K 21	不正楕円形	皿状	1.5	0.7	0.4	〃	
S K 22	楕円形	皿状	1.5	1.3	0.7	〃	
S K 23	不正楕円形	船底状	2.8	1.4	0.5	〃	
S K 24	長楕円形	平坦	1.4	0.6	0.2	〃	
S K 25	楕円形	皿状	1.1	0.6	0.2	〃	
S K 26	長方形	平坦	1.2	0.8	0.2	〃	
S K 27	長楕円形	平坦	0.9	0.7	0.2	〃	
S K 28	長楕円形	平坦	1.5	0.6	0.2	〃	
S K 29	長楕円形	船底状	1	0.3	0.3	〃	
S K 30	不正楕円形	船底状	2.4	0.9	0.5	〃	
S K 31	楕円形	皿状	0.7	0.6	0.2	〃	
S K 32	不正楕円形	船底状	3.3	1.7	0.4	〃	
S K 33	長楕円形	平坦	2.3	0.8	0.6	〃	壺棺か
S K 34	楕円形	皿状	1.3	0.7	0.3	〃	S D 03に切られる
S K 35	長方形	平坦	1.8	0.7	0.5	〃	
S K 36	不正楕円形	船底状	3	1.7	0.5	〃	
S K 37	楕円形	皿状	1.9	1.5	0.5	〃	
S K 38	長方形	平坦	1.4	0.8	0.3	〃	
S K 39	長楕円形	船底状	1.2	0.8	0.4	〃	

坑中央から高杯と壺形土器が出土した。壺は口縁部を打ち欠き脚部を取った高杯と合わせ口にしてあった。壺棺と思われる(第71図)。

### 〔3〕Ⅳ地区

試掘調査後、この地区から面的な調査に着手した。Ⅳ調査地区は、今回の調査地の中では遺構密度が最も高い地区である。



第19図 Ⅳ地区土層断面実測図(南壁)



第20図 Ⅳ地区検出遺構実測図(1)

この地区では鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡・墓壇・土坑・ピット、弥生時代中期の溝など多数の遺構と遺物を検出した。

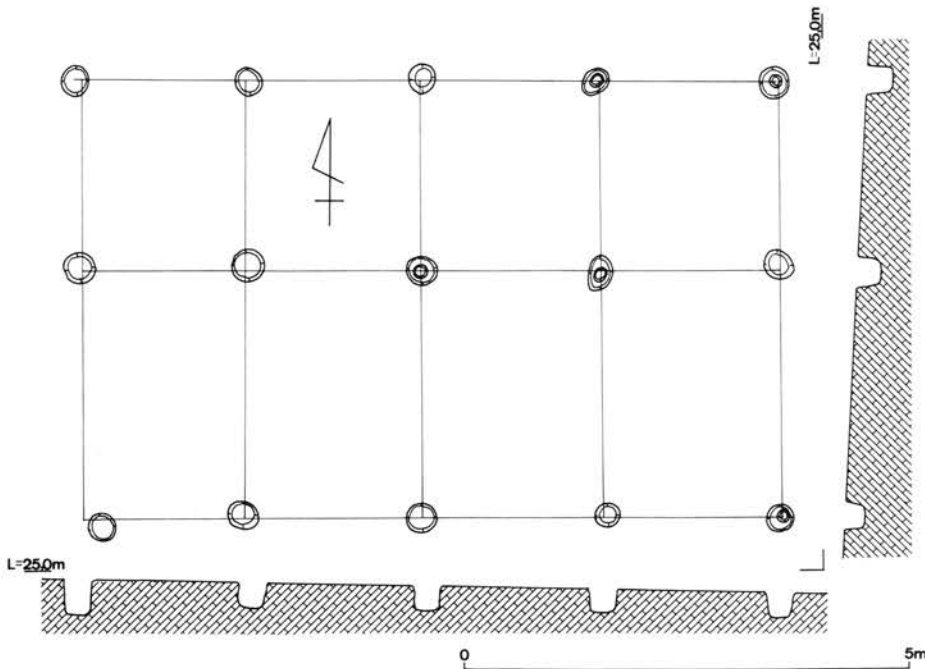
(1)層序(第19図) 南壁の土層断面図である。耕作土直下で遺構のベースである暗茶褐色粘質土(第3層)が現われ、遺物包含層及び旧表土はほとんど認められなかった。遺物包含層は、地形の落ち込みにわずかに遺存するのみである(第2層)。遺構はすべて第3層上面で検出した。

## (2)検出遺構

検出遺構は、時期別に見て大きく中世(鎌倉～室町時代)と弥生時代(中期)の遺構に分けられる。中世の遺構は、耕作土除去後の精査で確認できたが、この段階では弥生時代の遺構は不明瞭であった。そのため、弥生時代の遺構については中世の遺構検出後にこれを削平して再度精査を行い、検出に努めた。時期別に図示して説明する。

①中世の遺構(第20図) この時期の遺構には、掘立柱建物跡・柵列・墓壇・土坑・ピットなどがある。

掘立柱建物跡(S B01～18) 18基以上を確認した。調査地区南～南東部分に集中していた。建物跡は、大半が調査トレンチの外にのびており、全体を確認できた例はわずかであ



第21図 S B05実測図

った。また、柱穴から遺物が出土しているが微量であり、時期を確定できるものも少ない。主なものについて説明する。遺構全体と詳細は別表(付表4)に示した。

S B 01 梁間2間×桁行1間以上の東西棟である。柱間は桁行約1.8m(約6尺)×梁間約2.2m(約7尺)を測る。柱穴から土師器皿と瓦器の細片が出土した。時期は明らかでない。

S B 02 梁間1間×桁行1間以上の南北棟である。柱間は、梁間・桁行ともに約3m(約10尺)等間である。出土遺物がなく時期は明らかでない。

S B 03 梁間1間×桁行1間以上の南北棟である。柱間は、梁間約2.2m(約7尺)×桁行約3.6m(約12尺)を測る。時期は明らかでない。

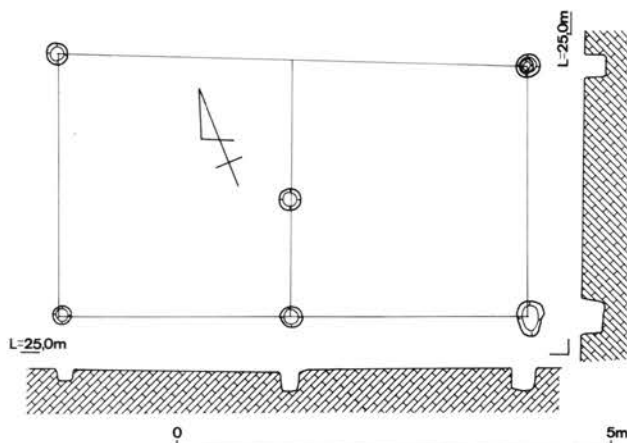
S B 04 梁間2間×桁行3間以上の南北棟で、S B 03と重複している。柱間寸法は、梁間約1.8m(約6尺)×桁行約2.4m(約8尺)を測る。出土遺物はなく時期は明らかでない。

S B 05(第21図) 全体を検出することができた唯一の例である。主軸はほぼ真東西であり、梁間2間×桁行4間の規模をもつ総柱建物跡である。梁間の柱間寸法が北側で狭く、等間でない点に特徴がある。柱間寸法は、梁間北側で約2.0m(約6尺)、南側で約2.8m(約9尺)を測る。桁行は約2m(約6尺)の等間である。柱穴から13世紀後半頃の土師器皿と瓦器碗が出土した(第91図)。

S B 06 梁間2間×桁行1間以上の南北棟である。柱間寸法は、梁間約2.4m(約8尺)×桁行約3.2m(約11尺)を測る。出土遺物はなく時期は不明である。

S B 07 梁間2間以上の東西棟である。柱間は、梁間約2.5m(約8尺)×桁行約3.2m(約11尺)を測る。出土遺物がなく時期は明らかでない。この建物跡は、S B 08・09と主軸方位を少しずつ異にしながら重複して建てられる。建て替えによる遷移を示すものであろう。

S B 10(第22図) 梁間1間×桁行2間の東西棟である。柱間寸法は梁間約3.0m(約10尺)×桁行約2.7m(約9尺)を測る。南第1列中央の柱穴を



第22図 S B 10実測図

欠いている。出土遺物はなく時期は明らかでない。

S B 13 梁間2間×桁行3間以上の東西棟である。柱間は梁間約2.5m(約8尺)×桁行約2.0m(約7尺)を測る。

S B 14 4間以上×2間以上の規模をもつ。柵列の可能性も考えられる。柱間は、

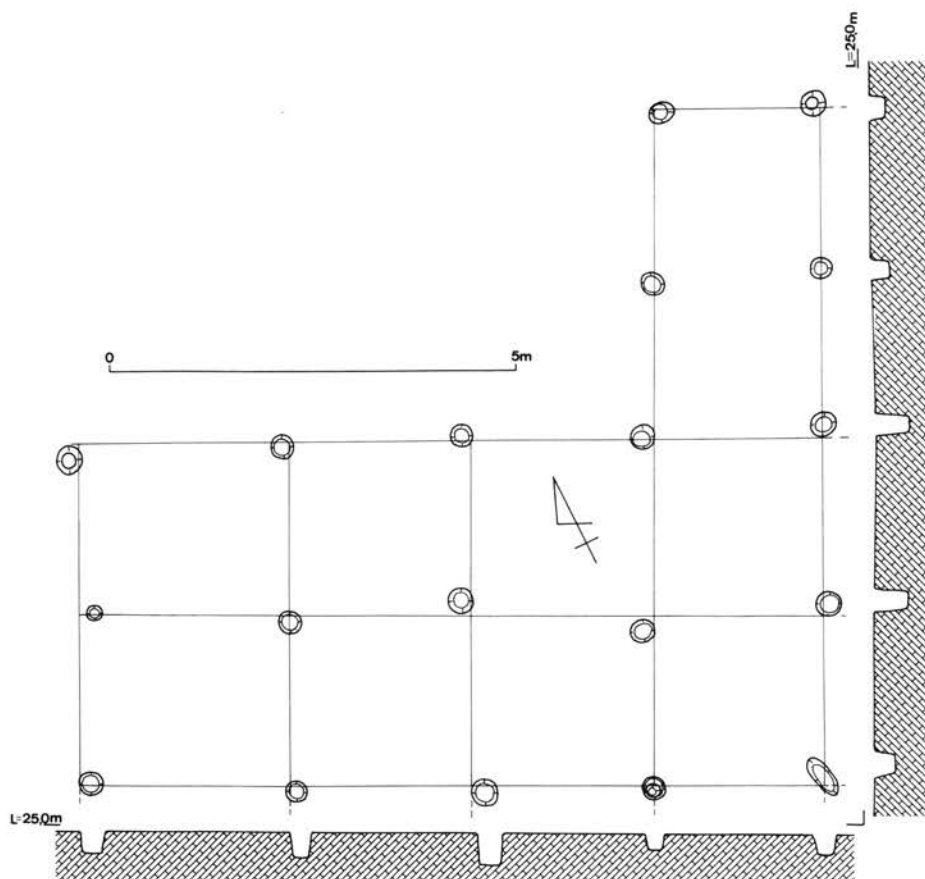
東西約2.4m(約8尺)、南北約3.8m(約13尺)を測る。主軸方位はS B 13とほぼ同じである。

S B 15・16 梁間1間×桁行1間の東西棟である。ほぼ同規模の小形の建物跡である。

S B 17 東西4間以上×南北4間以上の規模をもつ大形の建物跡で、東西棟であると考えられる。建物跡の大半はトレンチの外にのびており、全体の規模を明らかにすることはできない。この建物跡は、北東が3間分、南北2間分が造られておらず、平面形態が「L」字状を呈している。柱間寸法は、東西が約2.6m(約9尺)、南北が約2.0m(約7尺)を測る。柱穴から土師器皿と青磁碗の破片が出土している(第92図)。青磁は龍泉窯産である。蓮弁の幅が広く鑄がない。14世紀代のものだろう。

S B 18 梁間2間×桁行2間以上の南北棟である。梁間は、北端の第1列中央の柱穴を欠く。柱間寸法は、梁間・桁行ともに等間であり約2.1m(約7尺)を測る。

土坑 7基の土坑を検出した(S K 01~07)。形面形態は、楕円形のもの(S K 01・04・



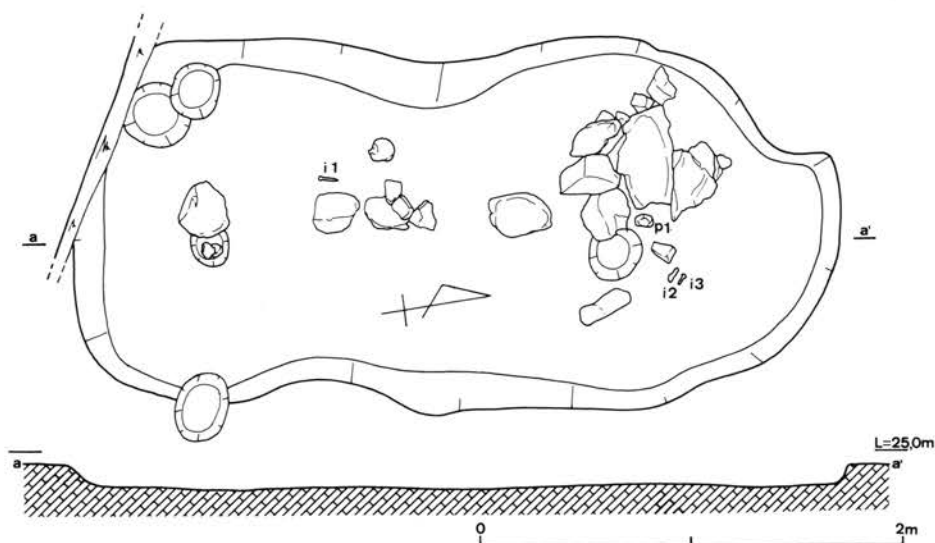
第23図 S B 17実測図

05)と方形のもの(S K03・06・07)とがある。いずれの土坑も削平を受けており、遺存状況はよくない。

S K01(第24図) 長さ3.7m・幅約1.7m・深さ約20cmの長楕円形土坑である。主軸はほぼ南北である。埋土は暗灰色の単一土層で、瓦器碗や瓦器鍋、土師器皿の細片が包含されていた(第93図)。土坑内には人頭大の礫が多数みられた。これらは遺構埋土の陥没によって遺構内に落ち込んだものとみられる。標石の一部であろう。土坑底面で土師器皿1点と鉄釘4点を確認した(第93図)。鉄釘のうち北東に位置していた2点は、1点が先端を下に向けて垂直に立っており、もう1点がそれに直交する状態で出土した。鉄釘は木棺木口部の緊結金具として用いられたものであろう。この土坑は木棺直葬墓と考えられる。

S K02 南北に主軸をもつ楕円形の土坑である。長さ約2.2m・幅約1.7m、深さは約20cmである。埋土は暗褐色で、瓦器皿・碗・鍋、土師器皿などを包含していた遺物はいずれも細片である。

S K03(第25図) 南北に主軸をもつ隅丸方形の土坑である。長軸約1.2m・短軸約90cm・深さ約25cmを測る。埋土は、暗灰色土の単一土層である。土坑中央付近で短刀2点と土師器皿1点、北西隅で土師器皿2点を検出した(第95図)。短刀は、切先を北に向け、把部を揃えて重ねてあった。上に置かれたものは下のものよりやや短い。これらの遺物は、土坑底面に密着した状態で出土している。なお、埋土には少量であるが炭・瓦器破片などが含まれていた。火葬骨を埋納した墓塚であろう。

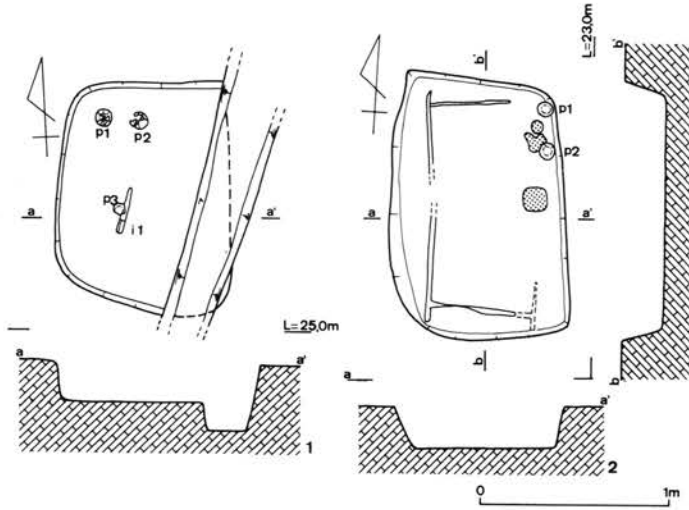


第24図 S K01実測図



## S K 06 (第25

図) ほぼ南北に主軸をもつ隅丸方形の土坑である。長辺約1.4m・短辺約1m・深さ約25cmを測る。底面より約10cm上層で副葬品とみられる土師器皿2点と漆の痕跡を2か所で検出した。漆痕跡は黒色であり、部分的に朱色



第25図 S K 03・06実測図  
1. S K 03 2. S K 06

の漆が認められた。漆塗り椀の腐蝕したものである。土坑底面では木棺痕跡を確認した。木質は遺存していなかったが、木質が腐蝕した痕跡を明瞭に観察することができた。

木棺痕跡はH形であり、木棺は2枚の長側板と木口板とからなる。木口板は、長側板のやや内側に設けられている。長側板の長さは約1.2m、木口板は約55cm、厚みは残りの良好な部分で約2cmを測る。土坑内からは鉄釘などの緊結金具類は出土していない。

S K 17 S K 03・06とはほぼ同規模の土坑である。暗褐色土を埋土とし、主軸は南北である。遺物が出土しておらず、時期は明らかでない。

S K 04・05は平面形態が不定形な土坑である。帰属時期・性格は明らかでない。

柵列 S A 01・02がある。S B 14とした柱列も建物としてのまとまりがなく、柵列と考えることも可能である。

S A 01 調査地を南北に横断する柵列である。柱穴は直径約15cmと小形である。柱間は1.4~1.8mとばらつきがある。帰属時期は不明である。

S A 02 S B 05の主軸と並行して設けられた柱列である。当初は、S B 05の一部と考えたがS B 05の柱掘形と比べて小さく、列も不揃いであることから柵列とした。柱穴は、直径約15~20cm前後である。S B 05に伴うものであろう。

②弥生時代の遺構(第26図) 確実にこの時期に属する遺構は溝(S D 01~08)のみである。これらの溝からは、弥生時代中期の土器片が出土している。

S D 01 幅約2.3m・深さ約1mを測る。約10m分を確認した。直線的にのびる溝であり、

付表4 IV地区検出掘立柱建物跡一覧表

遺構名称	規模	梁間(1間；m)	桁行(1間；m)	備考
S B01	2間×1間以上	2間 (2.2)	1間以上 (1.8)	
S B02	1間×1間以上	1間 (3.0)	1間以上 (3.0)	
S B03	1間×1間以上	1間 (2.2)	1間以上 (3.6)	
S B04	2間×3間以上	2間 (1.8)	3間以上 (2.4)	
S B05	2間×4間	2間 (短；2.0) (長；2.8)	4間 (2.0)	総柱建物跡
S B06	2間×1間以上	2間 (2.4)	1間以上 (3.2)	
S B07	2間×2間以上	2間 (2.5)	2間以上 (2.0)	
S B08	2間以上×2間以上	南北 (1.9)	東西 (2.8)	
S B09	1間以上×1間以上	南北 (2.24)	東西 (3.0)	
S B10	1間×2間	1間 (2.96)	2間 (2.72)	
S B11	2間以上×1間以上	2間以上 (2.8)	1間以上 (3.8)	
S B12	1間×1間以上	1間以上 (2.48)	1間以上 (2.72)	
S B13	2間×3間以上	2間 (2.48)	3間以上 (2.0)	
S B14	4間×1間以上	4間 (2.4)	1間以上 (3.8)	
S B15	1間×1間	1間 (2.4)	1間 (4.0)	
S B16	1間×1間	1間 (2.6)	1間 (4.0)	
S B17	4間×1間	4間 (2.1)	1間 (2.1)	
S B18	2間×3間	2間 (2.0)	3間 (2.6)	総柱建物跡
S B19	1間×2間	1間 (2.1)	2間 (2.1)	

南端部で浅くなって途切れている。断面形は逆台形を呈する。遺構埋土の層序は、耕作土・暗灰茶褐色土・暗茶褐色土・黒灰褐色土であり、暗黄茶褐色土と暗灰茶褐色土層に遺物が包含されていた。第IV様式の壺と甕が出土した(第76図)。

S D04 S D01と並行して設けられた溝である。約11m分を確認した。南端部でS D01と同様に浅くなって途切れている。断面は「V」字～逆台形を呈する。遺構埋土は、上から耕作土・暗黄茶褐色土・暗灰茶褐色土・暗茶褐色土である。暗黄茶褐色土、暗灰茶褐色土に遺物の包含がみられた。遺物は第IV様式壺・甕・高杯であり、少量出土した(第76図)。

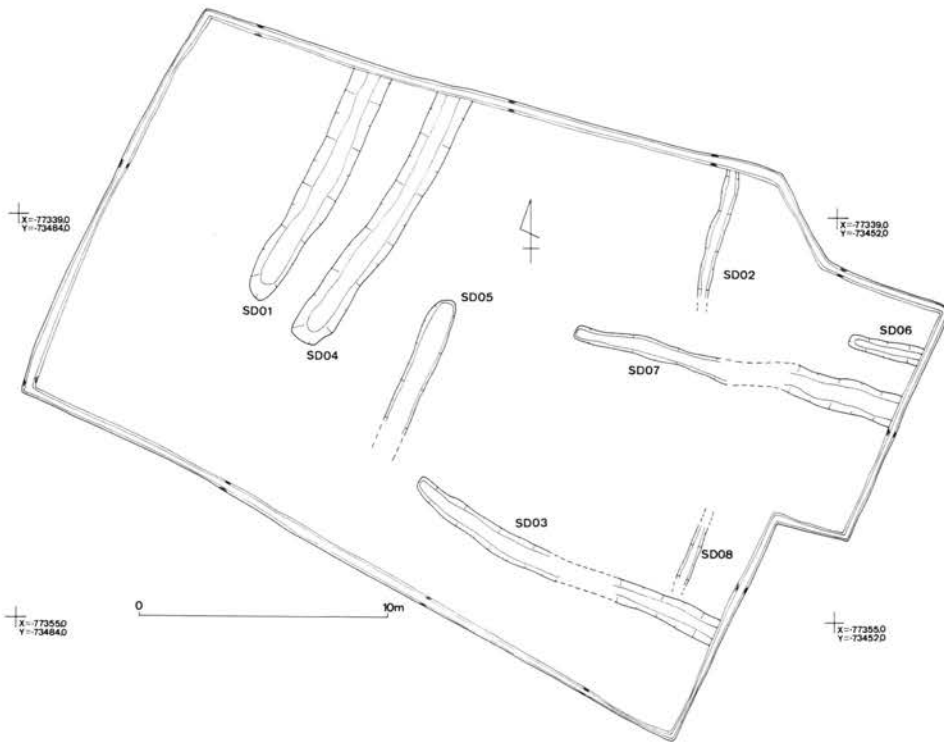
S D03 東西にのびる溝である。S D01・04と直角に配置されている。西に向かって浅くなりやがて消滅する。13.5m検出した。幅約1.9m、深さは約80cm、断面形は「U」字形を呈する(第27図)。溝の底で壺・高杯・鉢等を検出した(第76図)。

## 【2】各地区の遺物

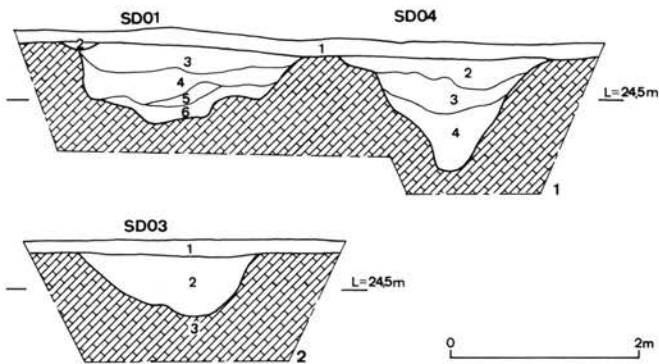
### (1)弥生土器

#### ①器種の分類

この遺跡で出土した弥生土器は、中期・第IV様式にはほぼ限られている。広口壺、直口壺、



第26図 IV地区検出遺構実測図(2)



第27図 弥生時代溝断面実測図(1.S D01・04 2.S D03)

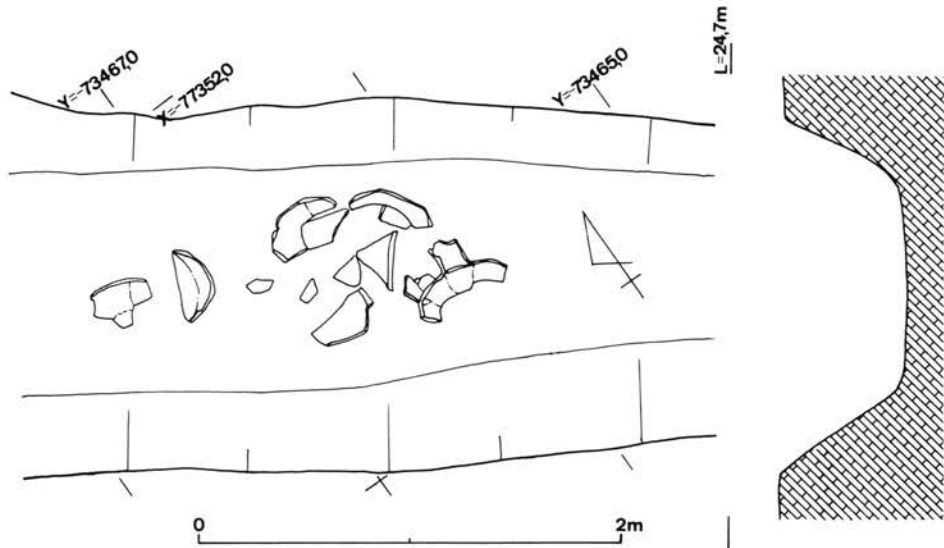
- S D01 : 1.耕作土 2.暗灰色土 3.暗黄茶褐色土 4.暗灰茶褐色土  
 5.暗茶褐色土 6.黒灰褐色土  
 S D04 : 1.耕作土 2.暗黄茶褐色土 3.暗灰茶褐色土  
 4.暗茶褐色土  
 S D03 : 1.耕作土 2.暗茶褐色土 3.暗茶褐色粘質土

受け口壺、短頸壺、長頸壺、水差形土器、無頸壺、器台、甕、高杯、鉢、ミニチュア土器などの器種がある。以下に示す分類案に基づいて各遺構出土遺物を説明することにした。

**壺形土器** 広口壺、直口壺、受け口壺、短頸壺、水差形土器、長頸壺、無頸壺などがある。広口壺・水差形土

器・無頸壺は器体・口縁部の形態から次のように分類した。

なお、詳細については、末尾の観察表を参照されたい。



第28図 S D03弥生土器出土状況

広口壺A 斜め上方に大きく開く口縁部を持つもの

- A 1 端部を丸くおさめるもの
- A 2 端部を強くナデ、外傾する狭い面を作るもの
- A 3 端部を斜め下方へ張り出し気味に拡張するもの
- A 4 端部を上下方に拡張して垂直あるいは外傾する面をもつもの
- A 5 端部を下方に拡張し垂下する幅広い面をもつもの

広口壺B 直立する筒状の頸部から口縁部が水平に開くもの

広口壺C 太く短い頸部から口縁部が外反して開き、偏球形の体部をもつもの

- C 1 櫛描き文を主体とするもの
- C 2 口縁部・頸部に凹線文を施すもの

広口壺D 口縁部が短く外反して立ち上がるもの

広口壺E 口縁部を巻き込み、断面形が円形を呈するもの

広口壺F 口縁部上方に拡張し外傾する広い面を作るもの

無頸壺A 口縁部が内傾して立ち上がり、端部に丸いあるいは狭い面をもつもの

無頸壺B 口縁端部を内側へ拡張して屈曲させるもの

無頸壺C 口縁部外面に粘土紐を付加し、段状口縁とするもの

無頸壺D 口縁部を下方に折り曲げるもの

無頸壺E 短い頸部を持ち、口縁を短く外反させるもの

水差形土器A 偏球形の体部を持つ小形のもの

水差形土器B 長胴の体部をもつもの

**甕形土器** 口縁部形態を重視し次のように分類した

甕A 口縁が「く」の字状に外反する単純な口縁部をもつもの

A 1 端面に丸いあるいは狭い面をもつもの

A 2 口径に対して器高が低く、寸づまりの体部をもつもの。口縁は直線的に外向へ立ち上がり、A 1 に比べ体部の張りが強い

A 3 ゆるやかに口縁が外反するもの

A 4 口縁部が緩やかに内湾して立ち上がり受け口状を呈するもの

甕B 口縁端部をつまみ上げる、いわゆる、「はね上げ」口縁のもの

甕C 頸部が短く屈曲し端部に外傾する面をもつもの

C 1 外傾する狭い端面をもつもの

C 2 端部を上下に拡張して外傾する広い面を作るもの

C 3 外傾する端面をもつ大形の甕

甕D 受け口口縁をもつ近江系甕

**高杯形土器** 杯部形態を重視し次のように分類した。

高杯A 直口する口縁をもつもの

A 1 椀状の杯部をもつもの

A 2 屈曲して立ち上がる口縁部をもつもの

A 3 段状の口縁部をもつ大形品

高杯B 水平にのびる口縁部をもつもの

B 1 口縁部を垂下させずに単純におわるもの

B 2 口縁部を水平に拡張し、端部を垂下させるもの

高杯C 屈曲して大きく外反する杯部をもつもの

**鉢形土器** 脚台のあるものとなないものがある。鉢部の形態を重視して分類した。

鉢A 「く」の字状にゆるやかに外反する口縁をもつもの

鉢B 短く強く屈曲し、外傾する広い端面を有するもの

鉢C 直口する口縁をもつ大形品

台付鉢A 口縁が水平に開き浅い器体をもつもの

台付鉢B 口縁が短く外反し張りのある器体をもつ精製土器

台付鉢C 「く」の字の口縁部をもち深い器体をもつもの。端部が丸く終わるもの(C 1)、とハネ上げ口縁状をなすもの(C 2)などがある。

台付鉢D 直口する口縁をもつもの。体部が屈曲するもの(D1)とゆるやかに立ち上がるもの(D2)とがある。

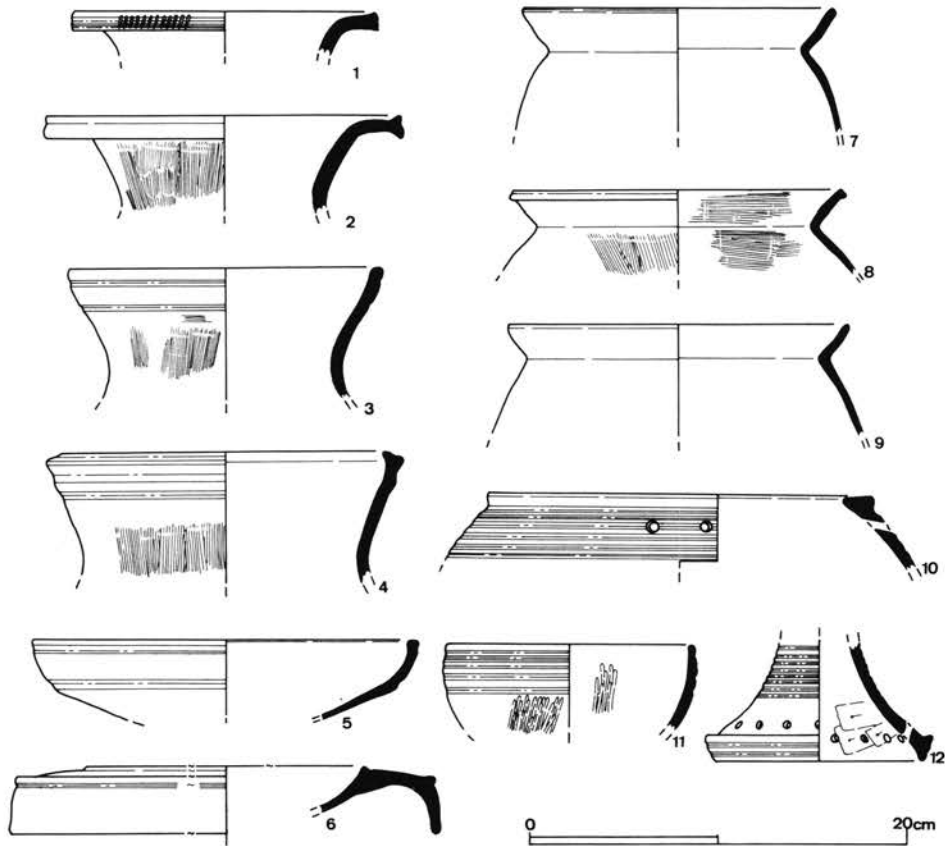
② I 地区出土遺物(第29図1~12)

各遺構出土土器のうち主なものを図示した。ほとんどが細片資料であり、完形に復原できるものはない。

広口壺(1・2) 円筒形の短い頸部から口縁が外反する壺Bである。1は、口縁端面に2条の凹線文と櫛描き列点文をめぐらす。2は、端面を強くナデ、上下に拡張している。

直口壺(3・4) 3は、口縁が緩やかに内湾して立ち上がる。4は、口縁が直線的に立ち上がり、端面を内側に拡張して外傾する面を作る。

無形壺(10) 無形壺Aである。口縁端面を肥厚させて内傾する面を作る。体部外面に凹



第29図 I 地区各土坑出土土器実測図

S K02. 5・12    S K03. 6・8・10    S K04. 7    S K05. 2・3・9・11    S K06. 1・4

線文を多条めぐらせる。口縁部に二孔一対の紐孔がある。

甕(7~9) 甕A1である。7・9は、口縁が内湾ぎみに立ち上がり端部を丸くおさめる。8の口縁は、直線的で端部に狭い面を作る。

高杯(5・6・11・12) 5・11、は高杯Aである。11は、小形で椀状の杯部をもつ。12は、脚部である。脚柱と脚端に凹線文をめぐらせ、径5mm前後の透かしを等間に配している。

### ③II地区出土遺物(第30~75図)

SD01出土遺物(第30~43図) 上層出土は細片化して摩滅したものが多く、わずかであるが古墳時代以降の遺物の混入がみられた。中・下層では完形土器を含む良好な資料が得られた。土層の断面観察では中・下層間で線引されたが、相互に接合するものが多く、ここでは一括して扱うことにした。なお、下層資料のうち溝底にあたる9・10層出土資料については完形土器が充実しており、最下層として分離して図示した。

SD01上層(第30~33図) 細片化し、摩滅したものが多くが二、三完形品が見られる。

広口壺(1~6・8~14・16) A1(14)、A2(3・9)、A3(8)、A5(11)、B(1・2・4~6)、C1(10)などがある。1・6は、口縁部に円形浮文を付加する。3は、口縁端部にキザミ目文、10は、口縁端部に櫛原体による羽状文がめぐる。11は、口縁端部に凹線文、内面に櫛描き列点文と扇形文がめぐる。13は、頸部以下が完存し、頸部に刺突文がめぐる。体部外面下半に粗いヘラ磨きがある。

直口壺(7・15) いずれも口縁外面と頸胴間に凹線文をめぐらす。15は小形品であるが、精良な胎土を用い作りもていねいである。

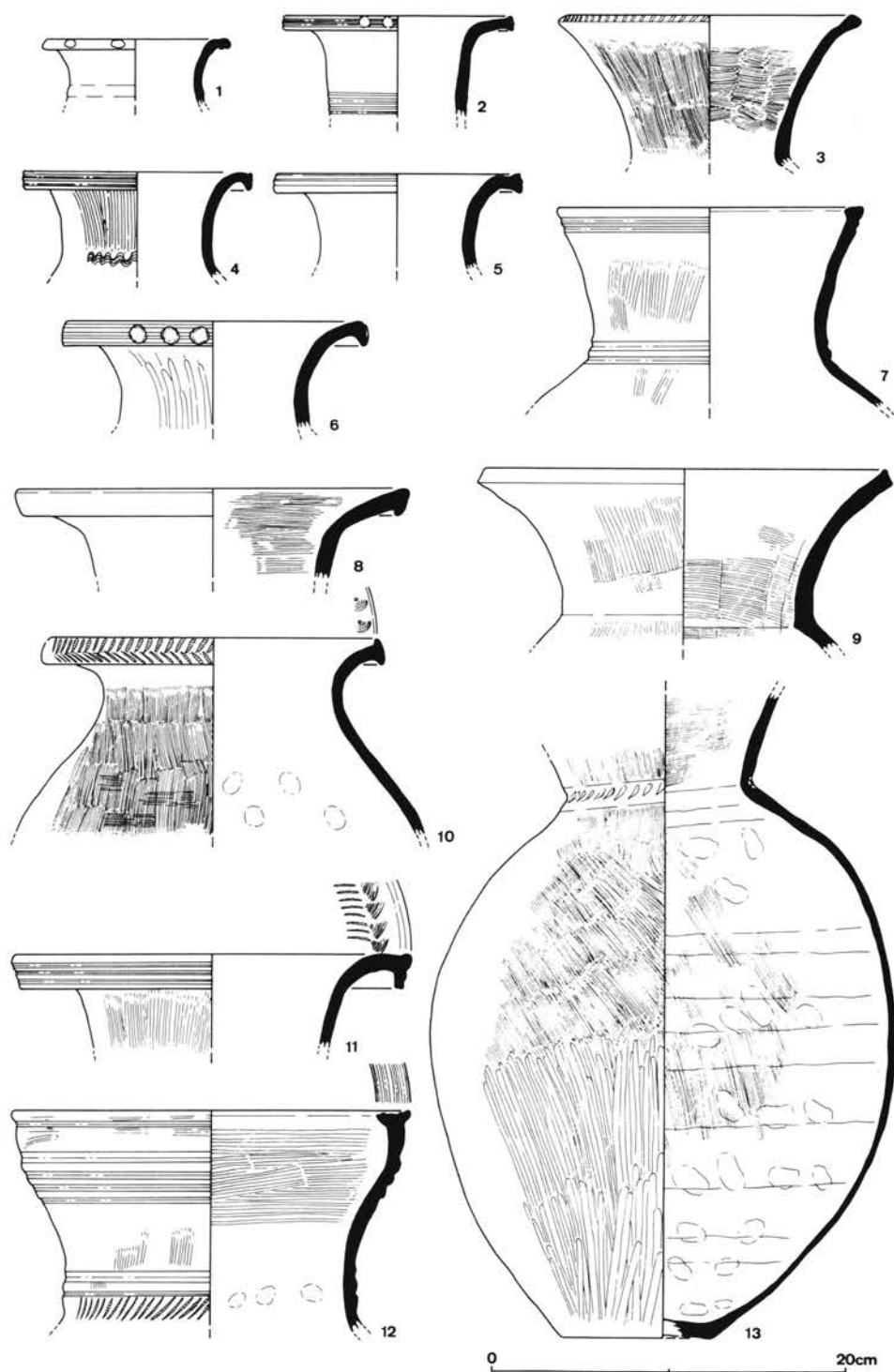
受け口壺(12) 口縁端面を拡張して櫛描き直線文を施す。口縁と頸部に凹線文、頸胴間に櫛描き列点文がある。器壁の厚い大形品である。

水差形土器(17) 偏球形の体部をもつ水差形土器Aである。口縁部を欠損している。脚台と把手をもつ。頸部・胴部・脚部外面に凹線文をめぐらす。

甕(18・19・20~30) 甕にはA1(25・26・28・29)、A3(27)、A4(24)、B(20・21・30)、C1(23)、C2(22)、C3(18・19)がある。20は、口縁部外面下端にキザミ目文、肩部に櫛描き直線文、体部に櫛描き列点文を施す。22は、口縁端部に凹線文3条がめぐる、体部内面にヘラ削りを施す。28は、口縁部端面に6個一対のキザミ目がある。30は、内面ヘラ削り、27は粗製である。

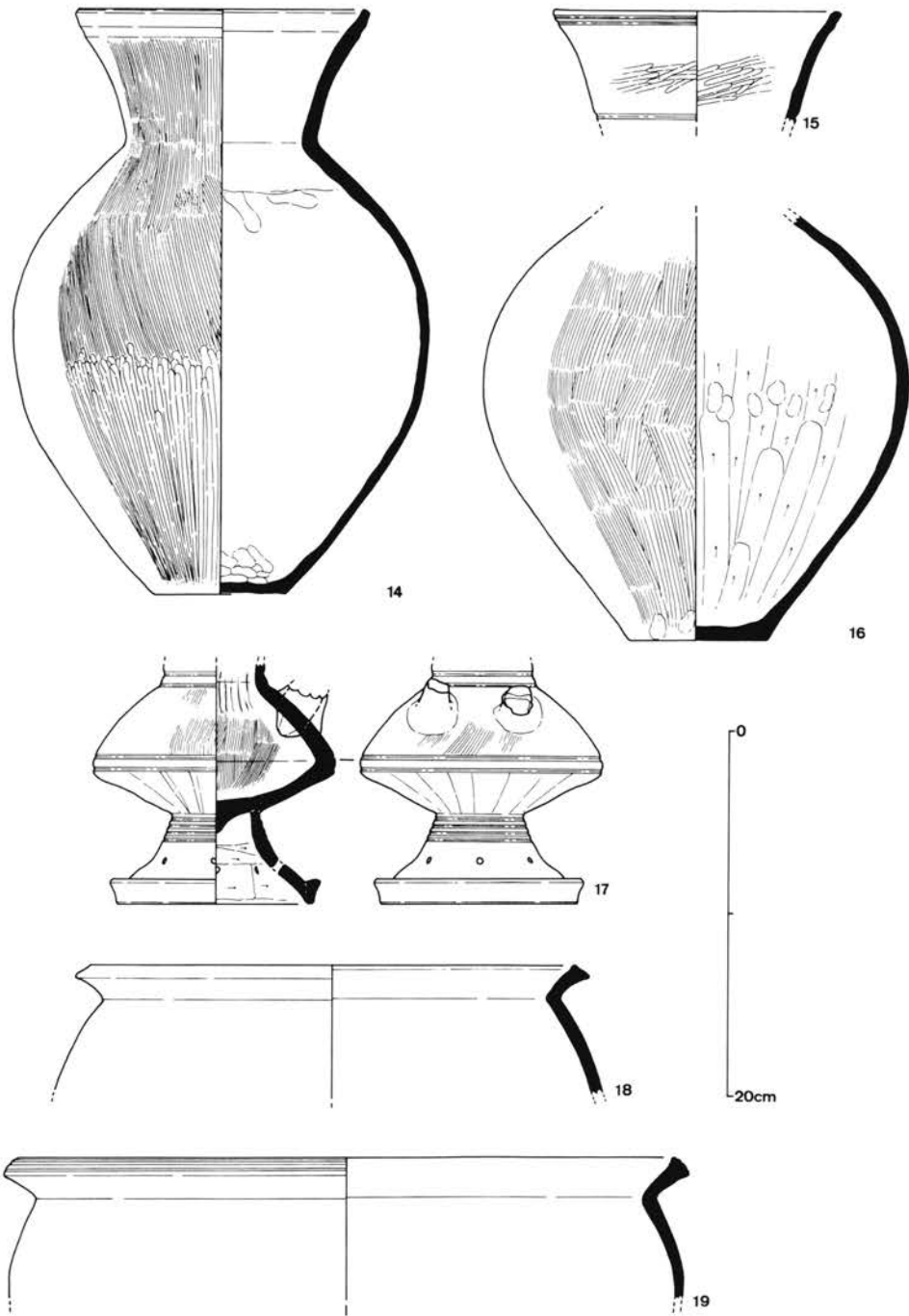
鉢(31・32・39・40・44) 鉢には鉢C(44)、台付鉢A(40)、台付鉢B(31・32・39)などがある。32は完形で、器体全面に赤色顔料が塗布されている。44は、大形品である。

高杯(33~38・41~43) 高杯にはA1(36・38)、A2(37)、B2(35)、C(33・34)があ

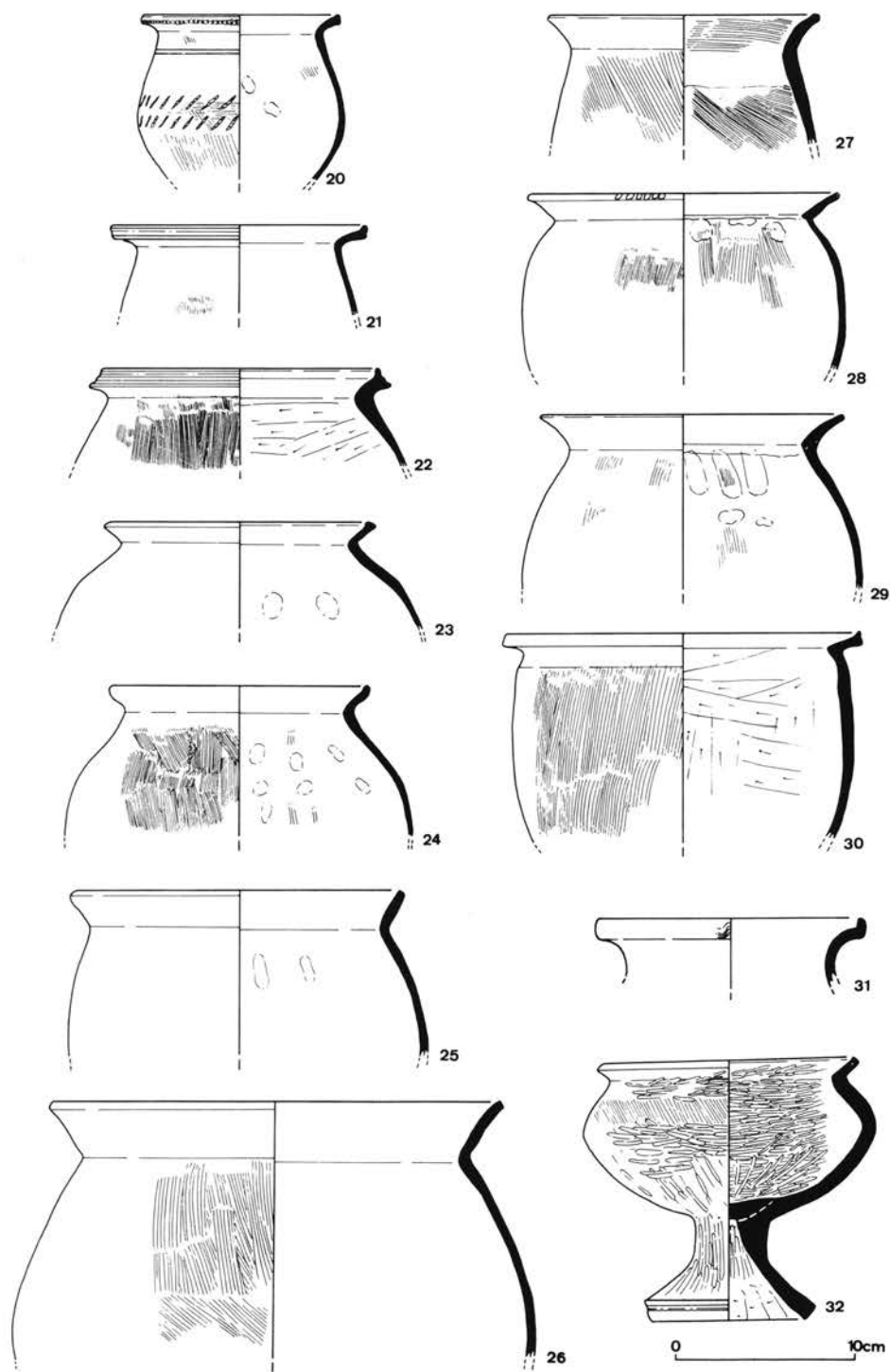


第30図 S D01出土遺物実測図(1) 上層

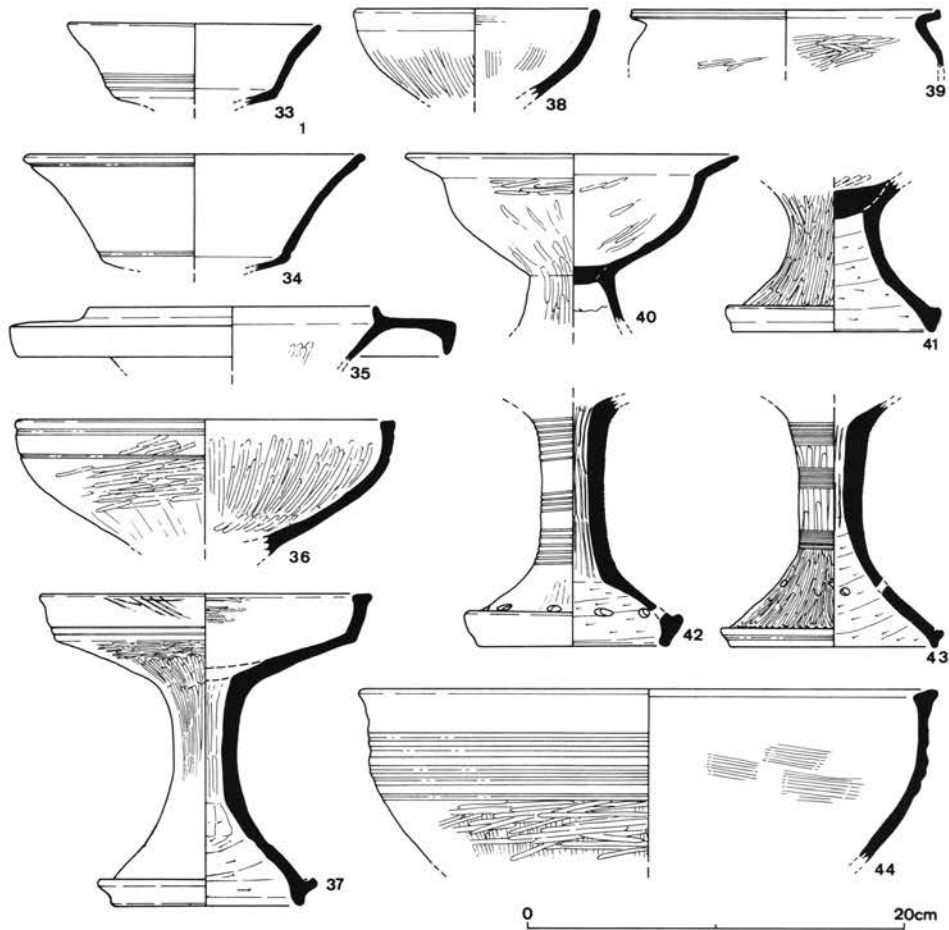




第31図 S D01出土遺物実測図(2) 上層



第32図 S D01出土遺物実測図(3) 上層



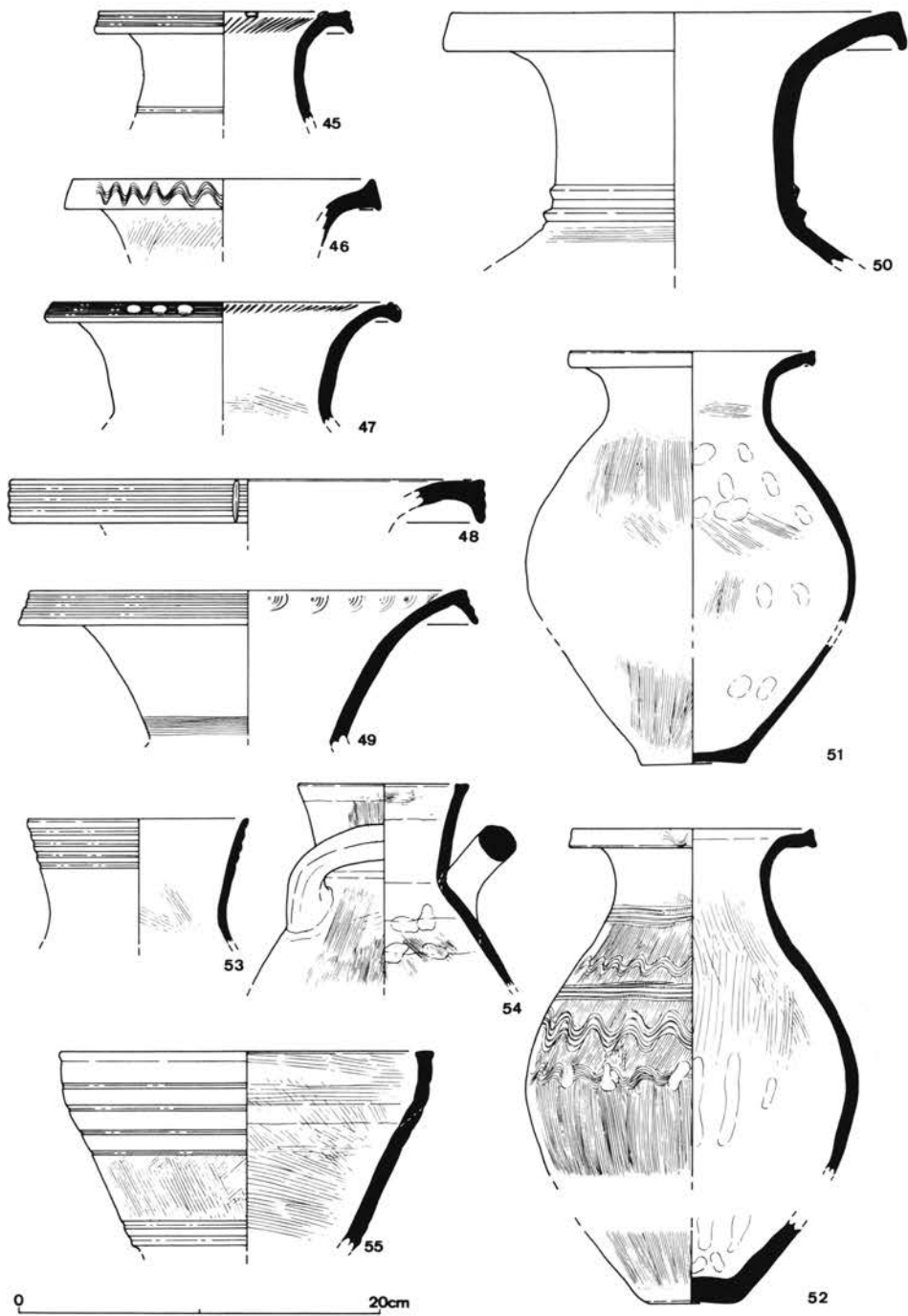
第33図 S D01出土遺物実測図(4) 上層

る。33・38は、小形である。41～43は、脚部である。33・34は、浅く狭い凹線文が施されている。

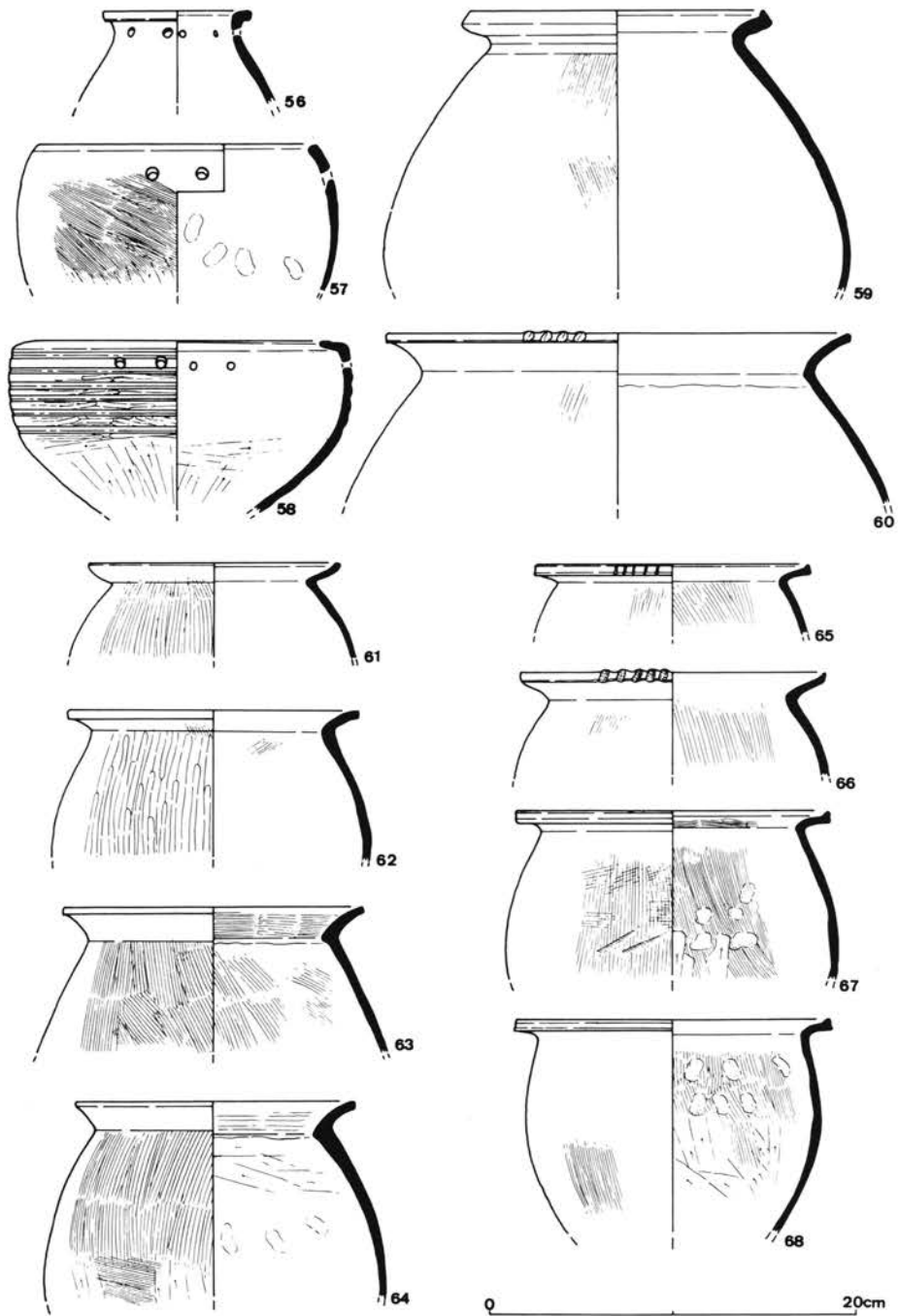
S D01中～下層(第34～36図) 中層では土器の出土はあまりなかった。主に、下層出土土器を報告したい。

広口壺(45～52) 広口壺A 3 (47)、A 4 (48・49)、A 5 (50)、B (45・46・51・52)などがある。45は、口縁部内面に櫛描き列点文をめぐらし、円形浮文を等間に施す。47は口縁外面に凹線文と3個一對の円形浮文がある。49は、口縁部内面に扇形文をめぐらす。50は、頸部に断面三角形の貼付凸帯を2条、肩部に櫛描き直線文を1帯めぐらす。51は無文、52は口縁端面に波状文、頸・胴部に櫛描き直線文と波状文がある。51・52はほぼ完存する。

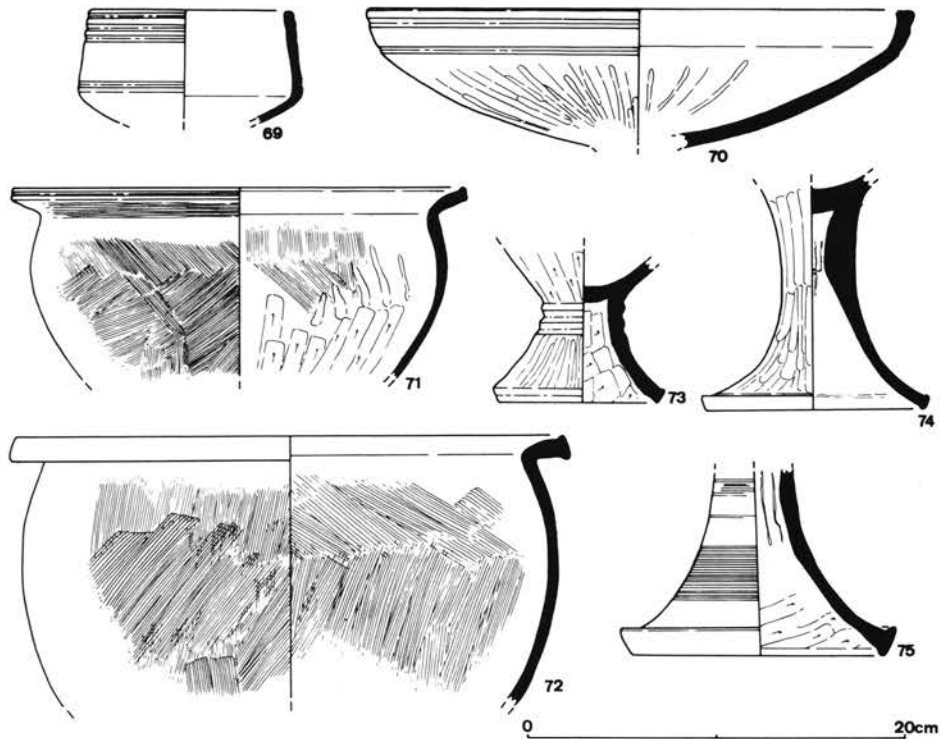
直口壺(53・55) 55は、口縁部が直線的に開いた後、わずかに屈曲して上方へ立ち上がる。受け口壺との中間的な形態である。口縁部と頸部に凹線文がめぐる。



第34図 S D01出土遺物実測図(5) 下層



第35図 S D01出土遺物実測図(6) 下層



第36図 S D01出土遺物実測図(7) 下層

水差形土器(54) 直口する口縁と長い胴部をもつ水差形土器Bである。

無頸壺(56~58) 無頸壺A(57)とE(56)がある。いずれも口縁部に二孔一対の紐孔がある。

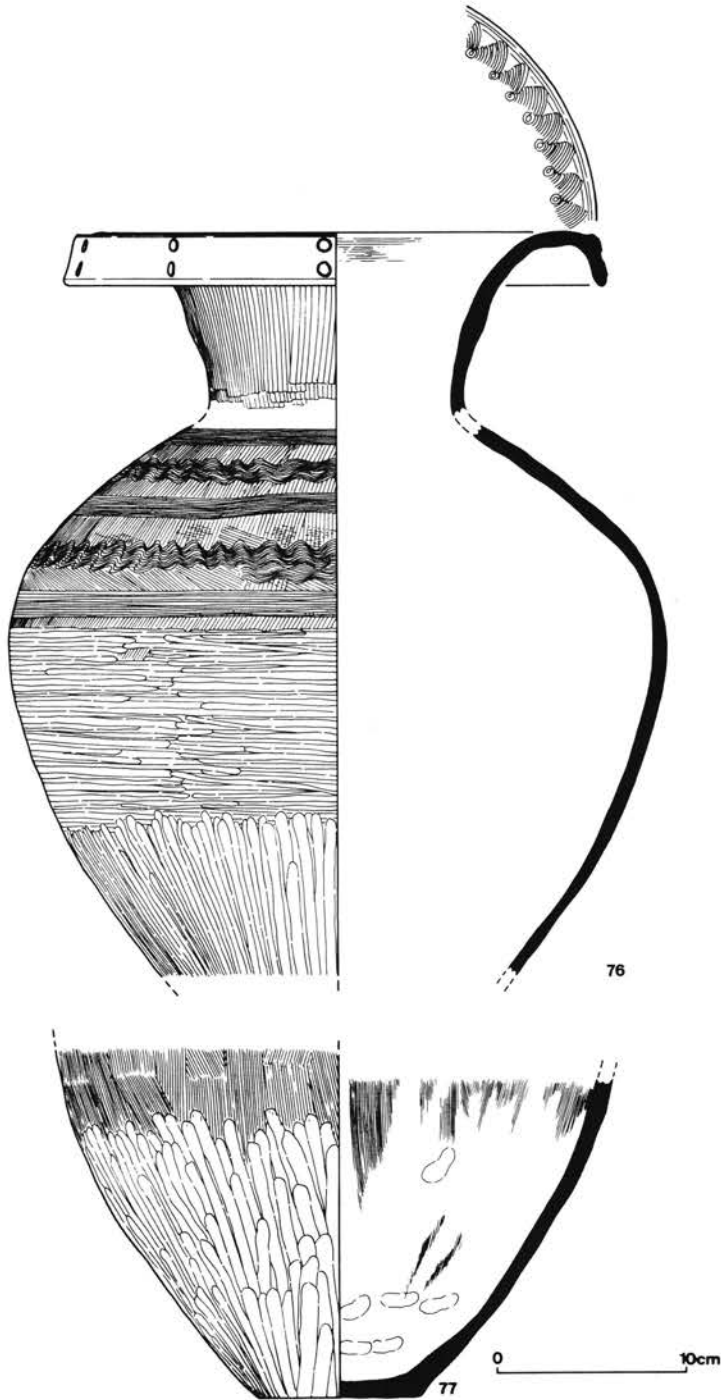
甕(59~68) 甕にはA1(60・62~64・66)、A4(61)、B(65・67・68)、C1(59)がある。60・65・66には口縁端部に4~5個一対のキザミ目文が施されている。62は体部外面をヘラ磨き、67は体部内面をヘラ削りする。

鉢(69・71・72) 69は、台付鉢D1である。71は鉢A、72は鉢Bである。

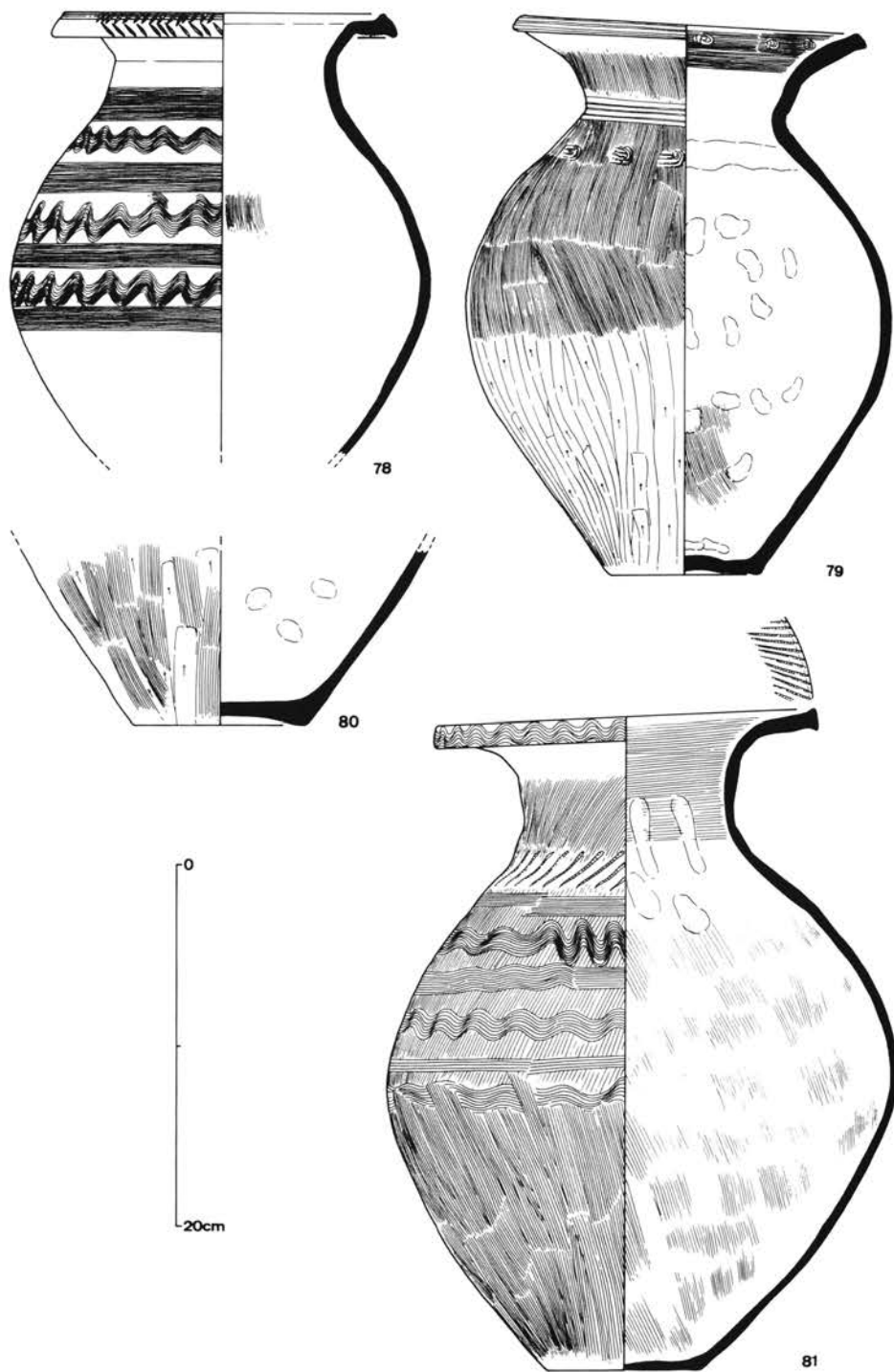
高杯(70・73~75) 70は高杯A、73~75は脚部である。

#### S D01最下層(第37~43図)

広口壺(76・78・79・81) A2(79)、A5(76)、B(81)、C(78)などがある。76は、口縁端部に上下二個一対の円形浮文を等間に配する。口縁部内面には扇形文、肩部に櫛描き直線文、波状文をめぐらす。調整は体部外面上半はハケ、下半はヘラ磨き、内面はナデである。凹線文をもたない。78は、口縁端面に凹線文と羽状文、体部に櫛描き直線文と波状文を交互に施文する。79は、口縁端部と頸部に凹線文、口縁内面と肩部に扇形文を配する。凹線文は棒状工具を用い沈線状である。81は、口縁端部に櫛描き波状文、内面に列点

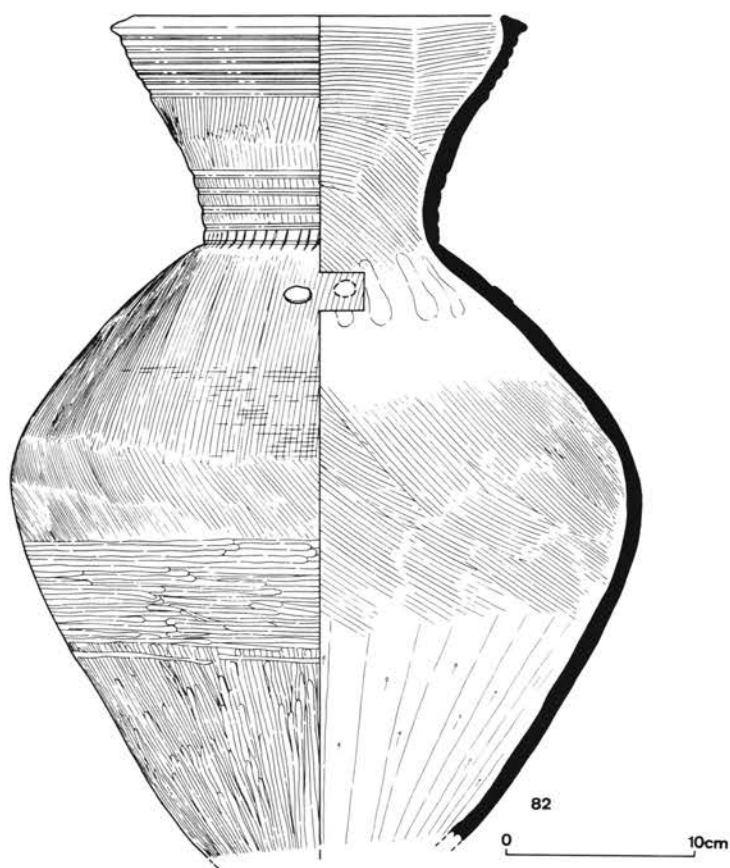


第37図 S D01出土遺物実測図(8) 最下層



第38図 S D01出土遺物実測図(9) 最下層





第39図 S D01出土遺物実測図(10) 最下層

文をめぐらす。体部には、頸胴間に櫛描き列点文、肩部から胴部に櫛描き直線文と波状文を交互に施す。

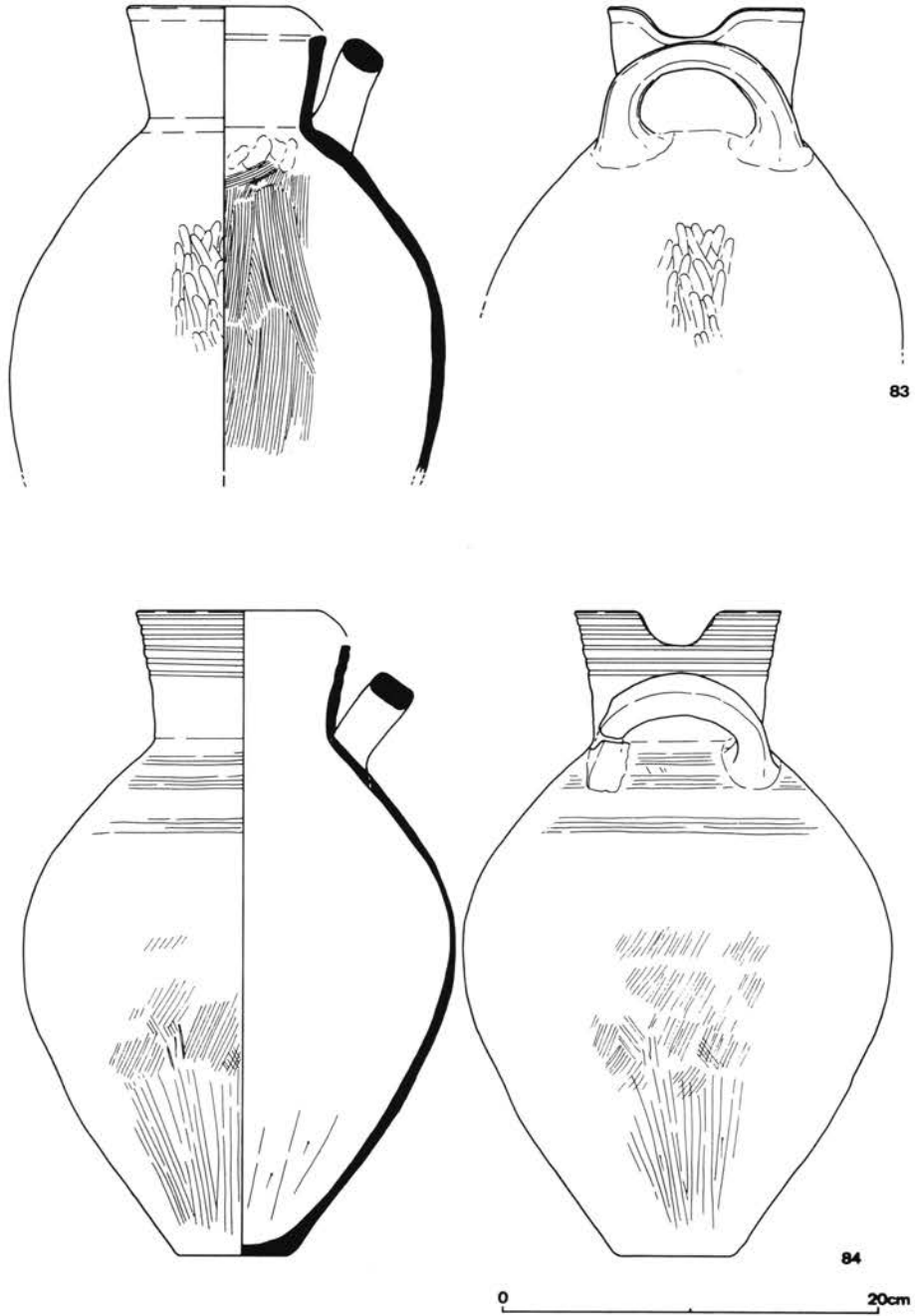
直口壺(82) 口縁部、頸部に凹線文、頸胴間にキザミ目文、肩部に円形浮文がある。ハケ目の下にタタキ目がみられる。

水差形土器(83・84) 水差形土器Bである。83は無文、84は口縁部に凹線文、肩部に櫛描き直線文をめぐらす。84の体部内外面下半をヘラ削りする。

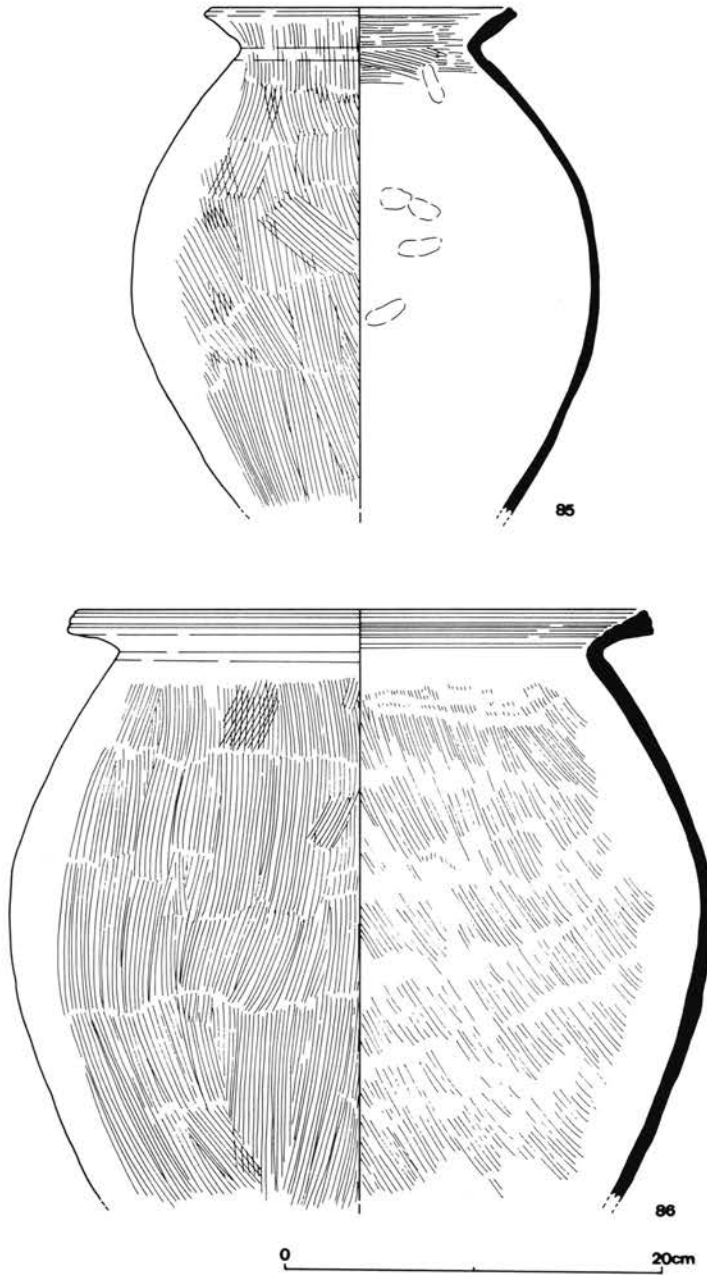
甕(85~99) 甕にはA 1(87・88・90・92・95~98)、A 3(94)、B(89・91)、C 1(85・99)、C 3(86)などがある。89・99は体部内面下半に、92は体部外面下半にヘラ削りがある。92の削りは、89・99ほど顕著ではなく板ナデ状である。90は、底部に穿孔がある。93・94の口縁部は、部分的に押圧する。押圧は93が3個一対、94が5個一対である。

鉢(100) 鉢Aである。

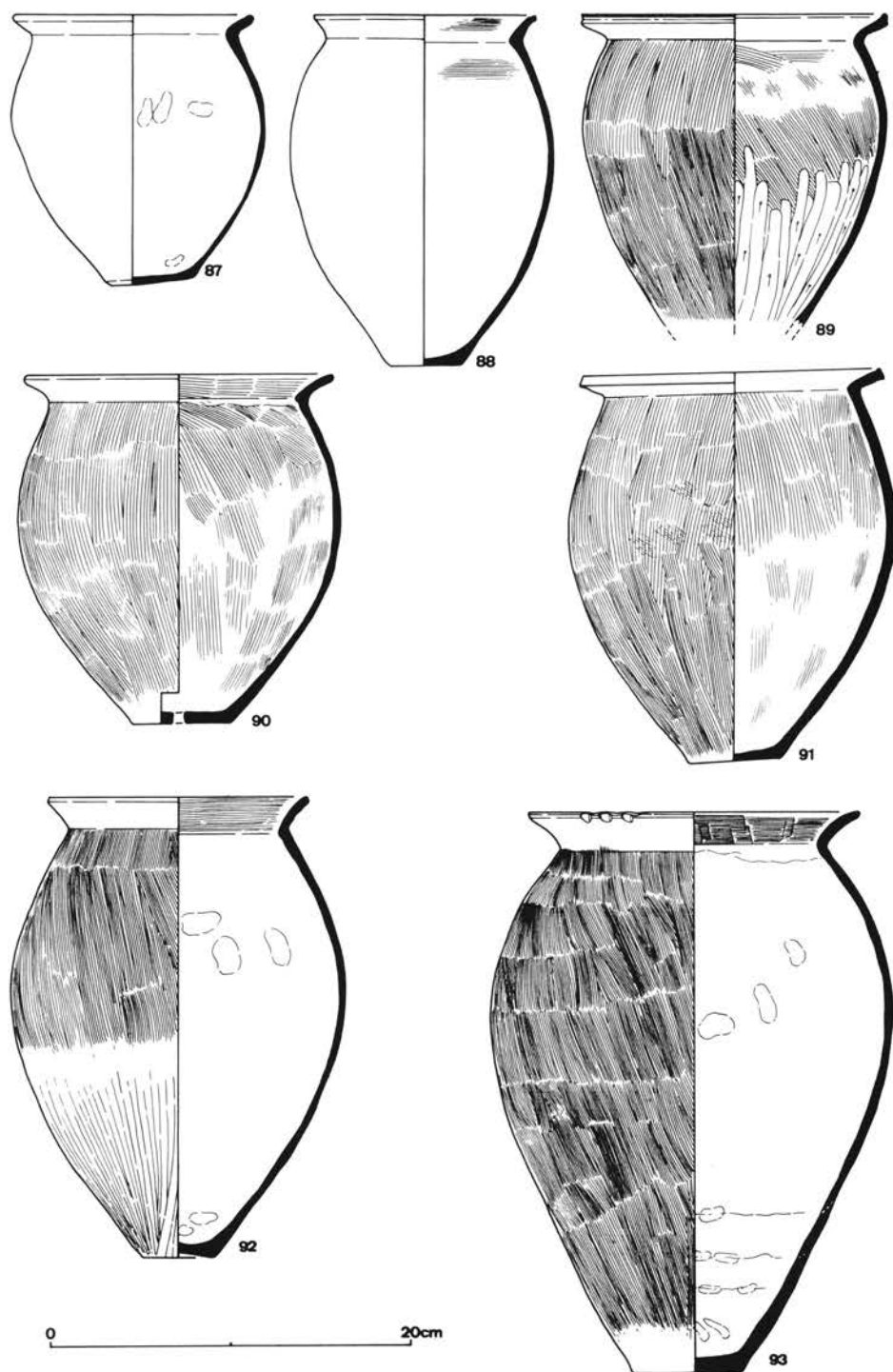
無形壺(101) 無頸壺Bである。口縁部外面と上面、脚柱部、脚端部に凹線文をめぐら



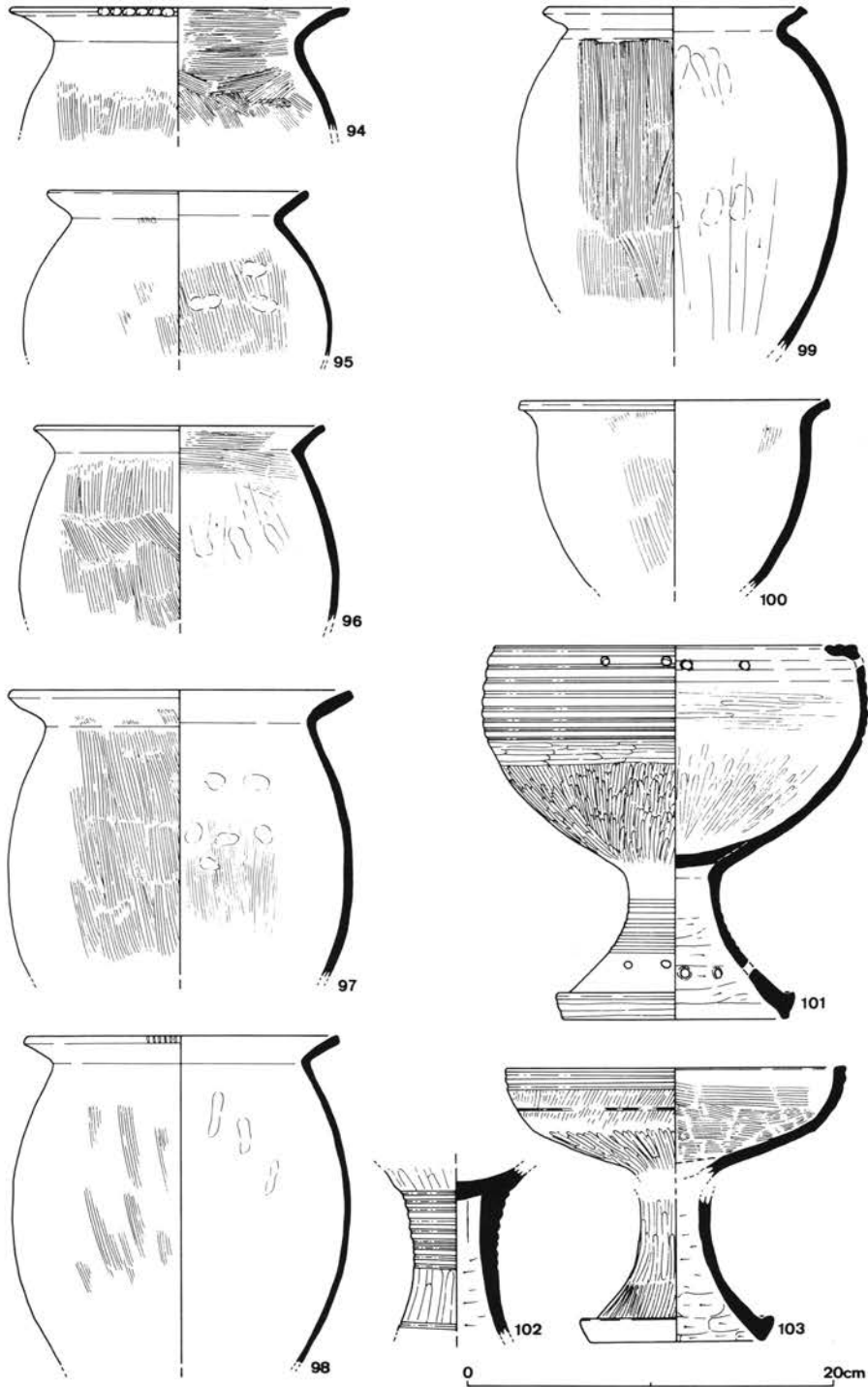
第40図 S D01出土遺物実測図(11) 最下層



第41図 S D01出土遺物実測図(12) 最下層



第42図 S D01出土遺物実測図(13) 最下層



第43図 S D01出土遺物実測図(14) 最下層

す。口縁部に二孔一対の紐孔がある。

高杯(102・103) 103は高杯A、102は脚柱部である。

S D 02出土遺物(第44～56図) 上層には古墳時代以降の遺物の混入がみられた。細片化し、摩滅したものが多い。遺物は上・中層にはあまりみられず、大半は下層から出土している。下層の内、溝底面にあたる第8・9層を最下層として取り上げた。

S D 02上層(第44・45図)

広口壺(3～5・7・10) A 1 (7)、A 2 (4)、A 3 (5)、B (3)、D (10)などがある。4は頸部に凹線文1条と口縁部内面に櫛描き列点文、5は口縁内面に扇形文をめぐらす。10は、器壁が厚く大形である。

直口壺(6) 口縁部に凹線文が3条めぐる。

受け口壺(9) 口縁部外面の屈曲部に凹線文をめぐらす。

甕(1・2・8) 1・2は甕A 3、8はC 2である。1・2は体部内面へラ削り、8は口縁端部と頸部に凹線文がめぐる。

高杯(11～14) A 1 (12)、A 2 (11・13)がある。12は、小形で杯部が浅い。14は、脚部である。

S D 02中層(第46・47図)

広口壺(15・16・18～22・25) A 2 (15)、A 3 (18)、A 4 (20・21)、B (16)、C 1 (25)などがある。15・16は無文である。19は、頸部に櫛原体による押圧を施した凸帯がめぐる。20は、口縁端部に凹線文と棒状浮文、内面に櫛描き波状文をめぐらす。21は、口縁端部に凹線文を施した後にキザミ目文、内面に凹線文と櫛描き波状文をめぐらす。25は、肩部に櫛描き直線文と波状文がある。

受け口壺(23) 小形である。

直口壺(24) 口縁に3条の凹線文がめぐる。

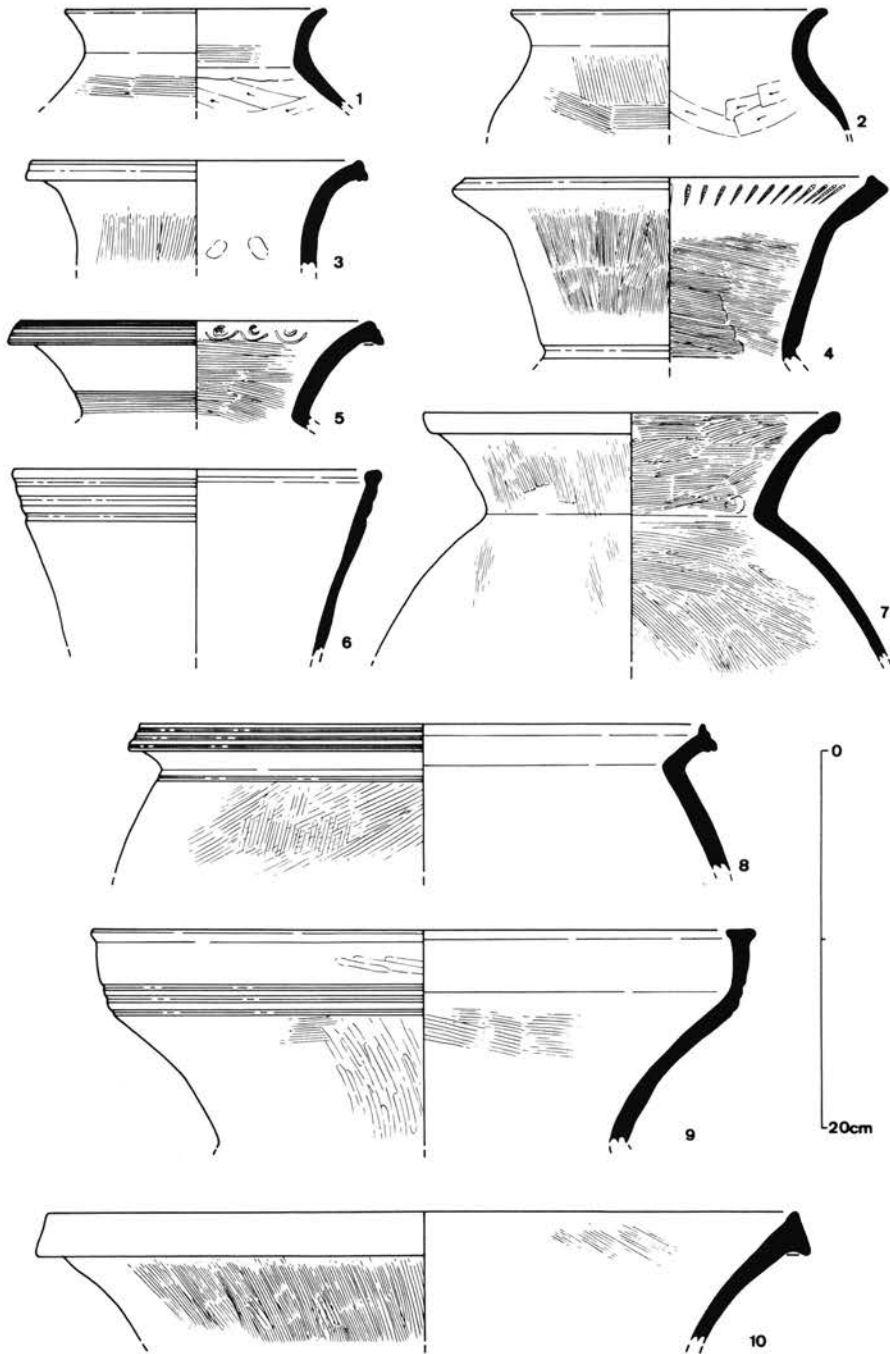
無頸壺(26～28) 26・27はA、28はBである。

甕(30～34) A 1 (30・31)、A 3 (33)、B (32)、C 3 (34)などがある。30は口縁端部にキザミ目文、31は体部外面にタタキ目が残る。

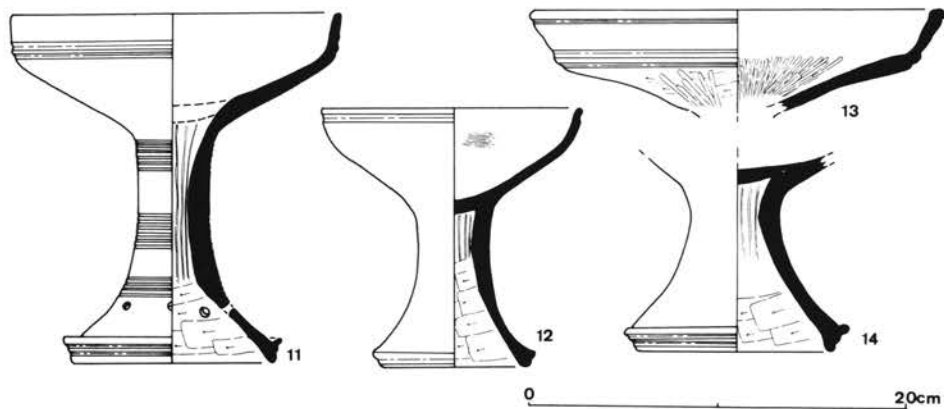
高杯(35～38) A 1 (36・37)とB 2 (35)がある。38の端部外面には列点文がめぐる。

S D 02下層(第48～50図)

広口壺(39～50) A 2 (44・45)、A 3 (49)、B (39～42・50)、C 2 (43・46～48)などがある。41は頸部にキザミ目文、42は口縁端部・内面に波状文、45は頸部に刺突文を施す。46・49は口縁端部に凹線文の後キザミ目文、48は棒状浮文、50は口縁内面に櫛描き列点文



第44図 S D02出土遺物実測図(1) 上層



第45図 S D02出土遺物実測図(2) 上層

を施す。

直口壺(51・52) 52は、口縁外面に櫛描き直線文と波状文、端部上面に凹線文を施す。

水差形土器(53) 水差形土器Bである。

甕(54~67) A 1 (54・55・58・59・66・67)、A 3 (57)、A 4 (56)、B (60~65)などがある。57は内外面にヘラ削りがある。58・59は口縁端部に3個一対のキザミ目文がある。

鉢(72・73) 鉢Aである。

台付鉢(74~76) A (74)、D 1 (75)、D 2 (76)などがある。74は、高杯B 1と類似する。75・76は、口縁部に凹線文がめぐる。75は、内面にヘラ削り痕が残る。

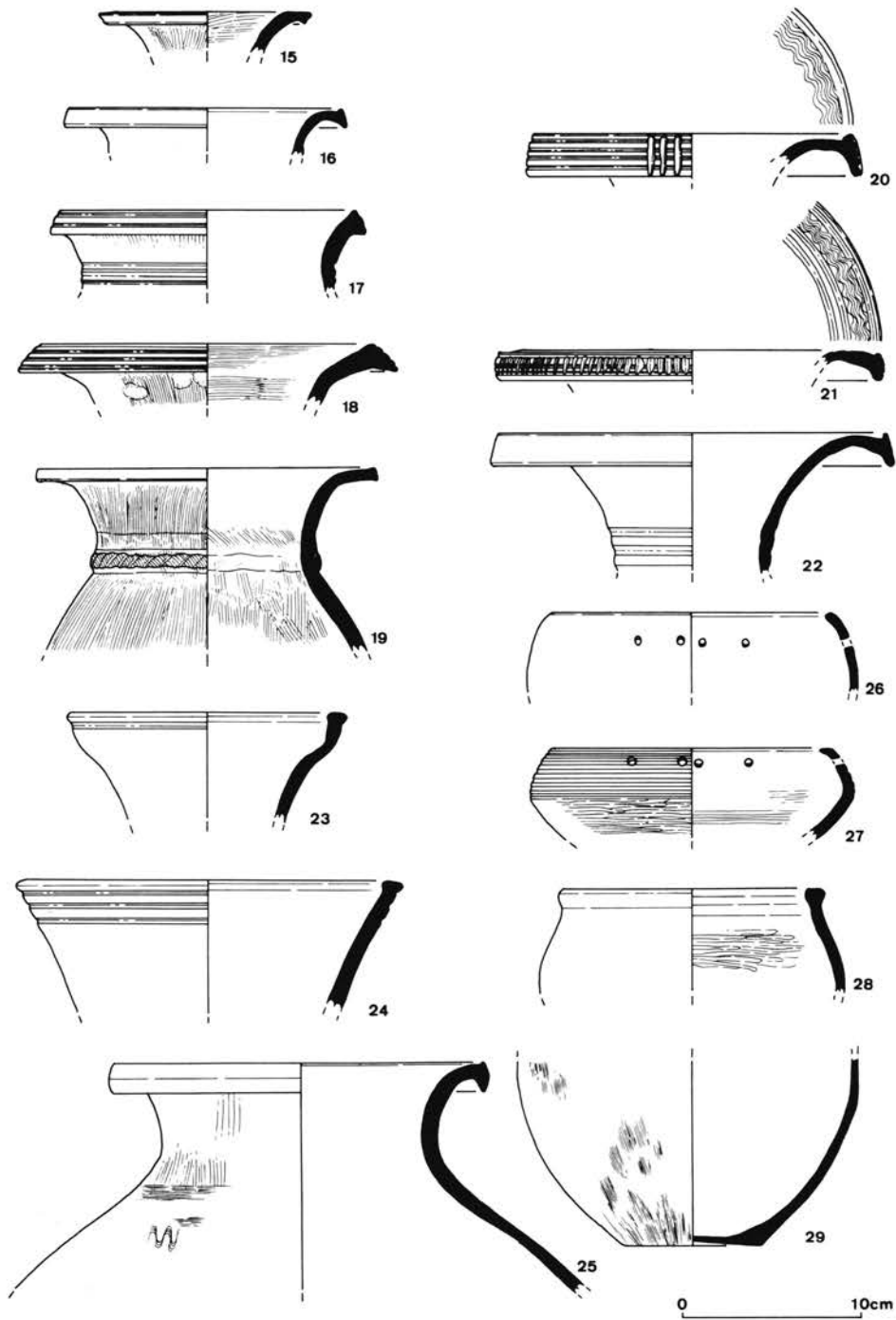
高杯(77~83) A 1 (79・80)、A 3 (81)、B 1 (77)、B 2 (78)などがある。82・83は、脚部である。

#### S D02最下層(第51~56図)

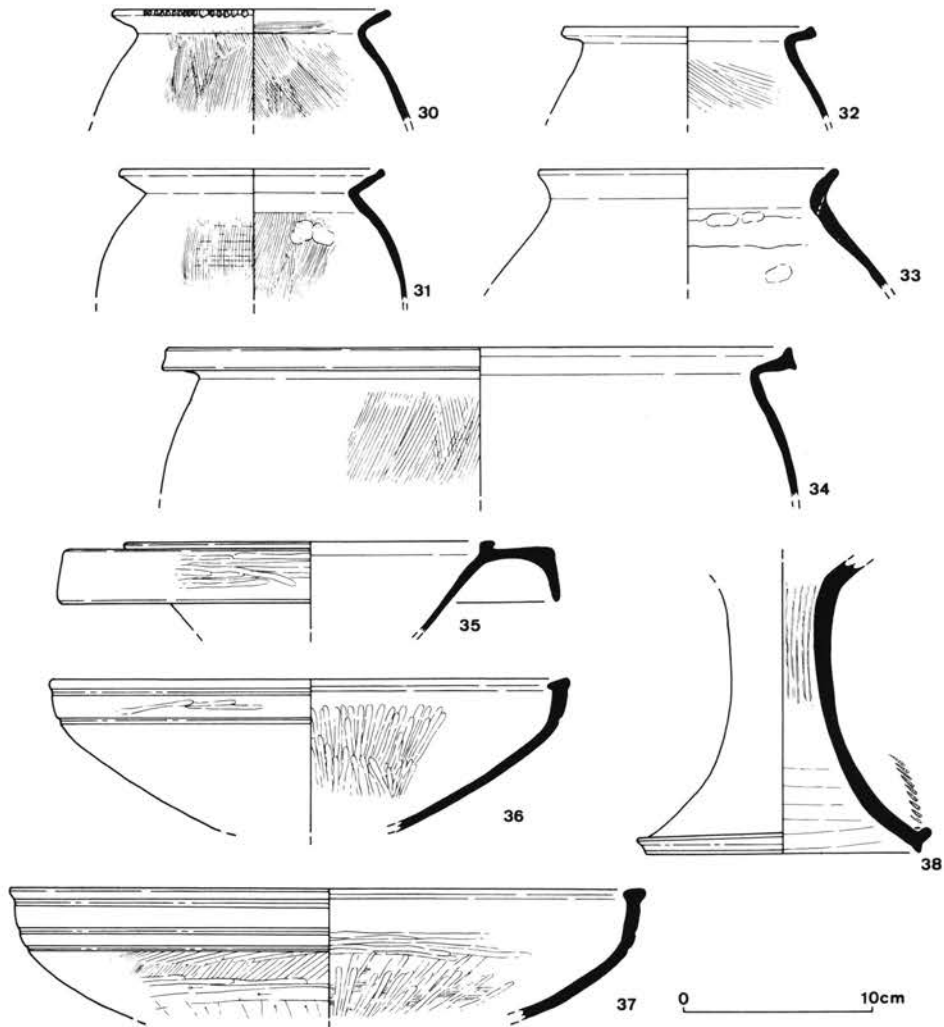
広口壺(84~93・97~99・102) A 2 (84)、A 3 (85)、A 4 (87)、B (91)、C 1 (89・92)、C 2 (93)、E (88)、F (99)などがある。84は、口縁内面に蕨手状文がある。85は、口縁端部に凹線文、内面に櫛描き波状文と扇形文がめぐる。86は、口縁端部に凹線文とキザミ目文、内面に凹線文と櫛描き波状文がめぐる。87・93は、口縁部に円形浮文がある。88は、口縁部を巻き込んで円形の断面を作る。頸部に凹線文、肩部に櫛描き列点文がめぐる。89は、口縁部に櫛描き波状文、肩部に櫛描き直線文・波状文を交互に施す。体部外面をハケ後ヘラ磨き、内面は下半をヘラ削りする。90は、無文である。98は、頸部にキザミ目文を施した凸帯文をめぐらし、把手をもつ。99は、口縁部に斜格子文を施す。102は、体部中央に最大腹径があり、算盤玉形の器体をもつ。肩部に櫛描き直線文と波状文を交互に施す。頸部は円筒形で凹線文がめぐる。

受け口壺(94) 口縁部を肥厚させ、端部に面を作る。口縁部に凹線文が1条めぐる。





第46図 S D02出土遺物実測図(3) 上層



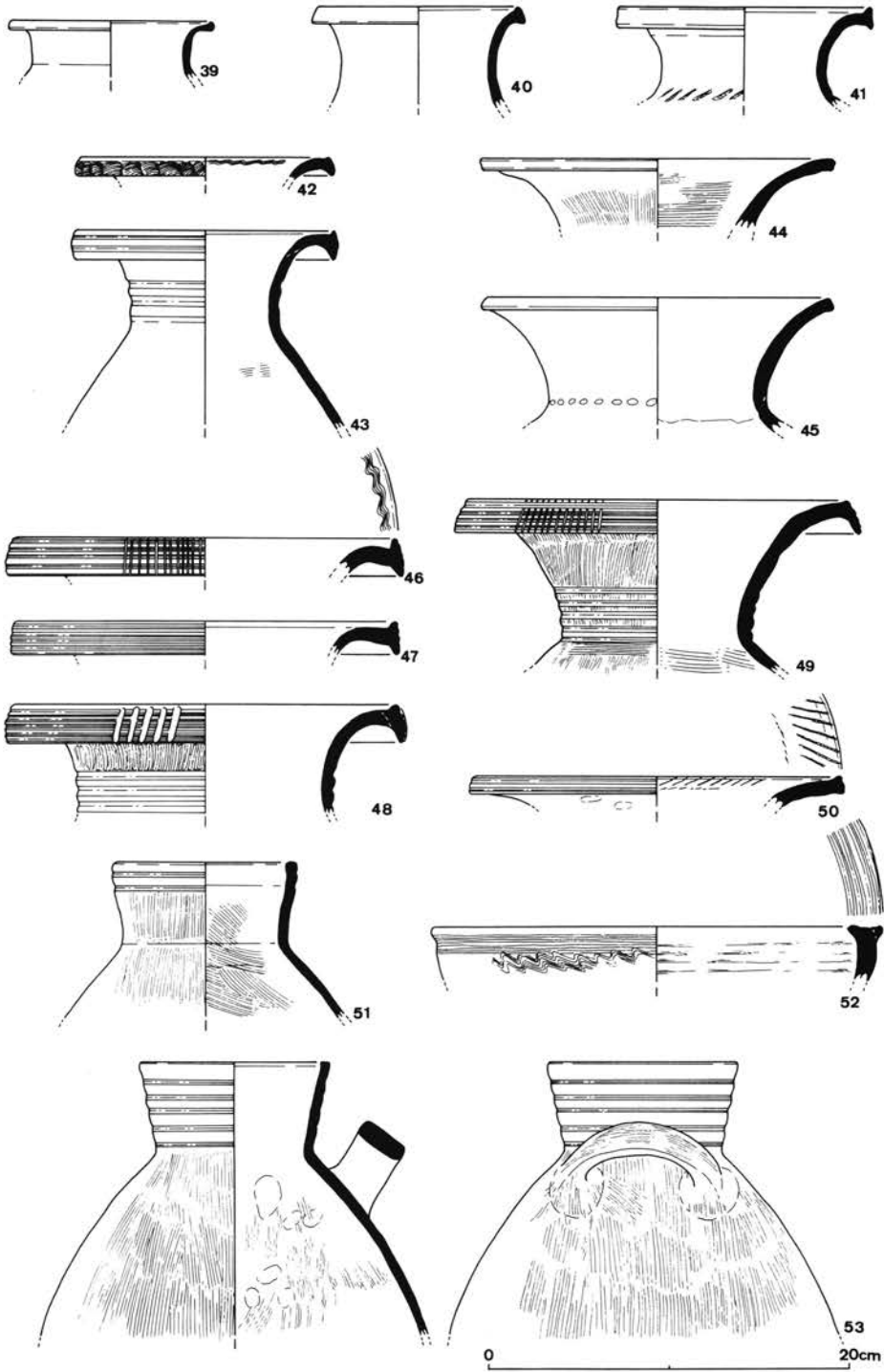
第47図 S D02出土遺物実測図(4) 中層

直口壺(95) 無文である。内外面ハケ調整する。

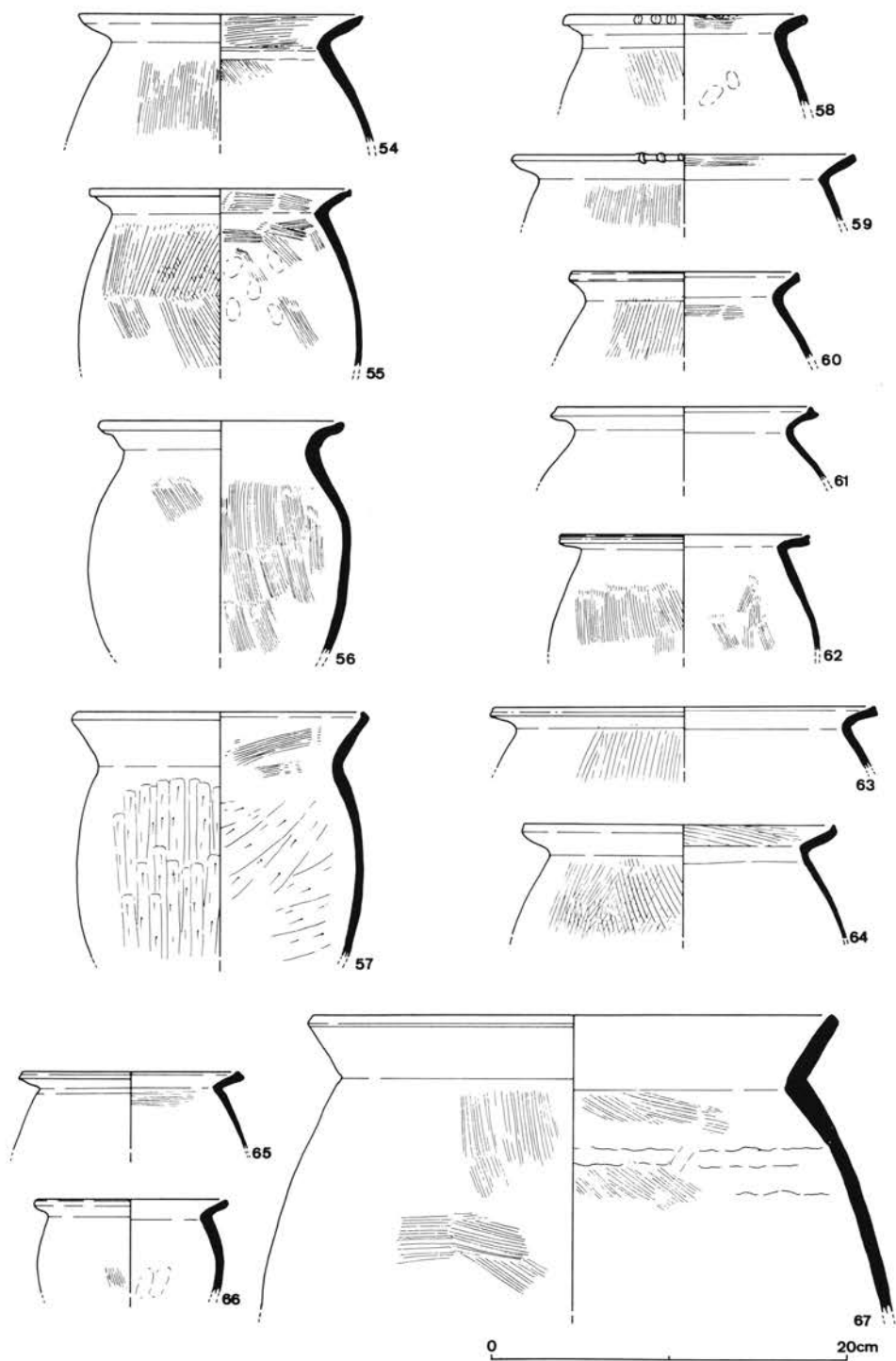
無頸壺(96・115) 96は、無頸壺Eである。115は、無頸壺Cである。

甕(100・101・103~113) A 1 (105~107・110)、B (101・104・108・111~113)、C 3 (100)などがある。103は小形の粗製品で、105は口縁部を押押し波状部を作る。107・106は、5~6個一対のキザミを口縁の3~4か所に施す。108は体部外面にタタキ成形痕を残す。111は、体部に櫛描き列点文がめぐる。112・113は、体部外面下半に粗いヘラ削り状調整、内面をヘラ削りする。外面の調整痕はヘラ磨きとヘラ削りの中間的なものである。

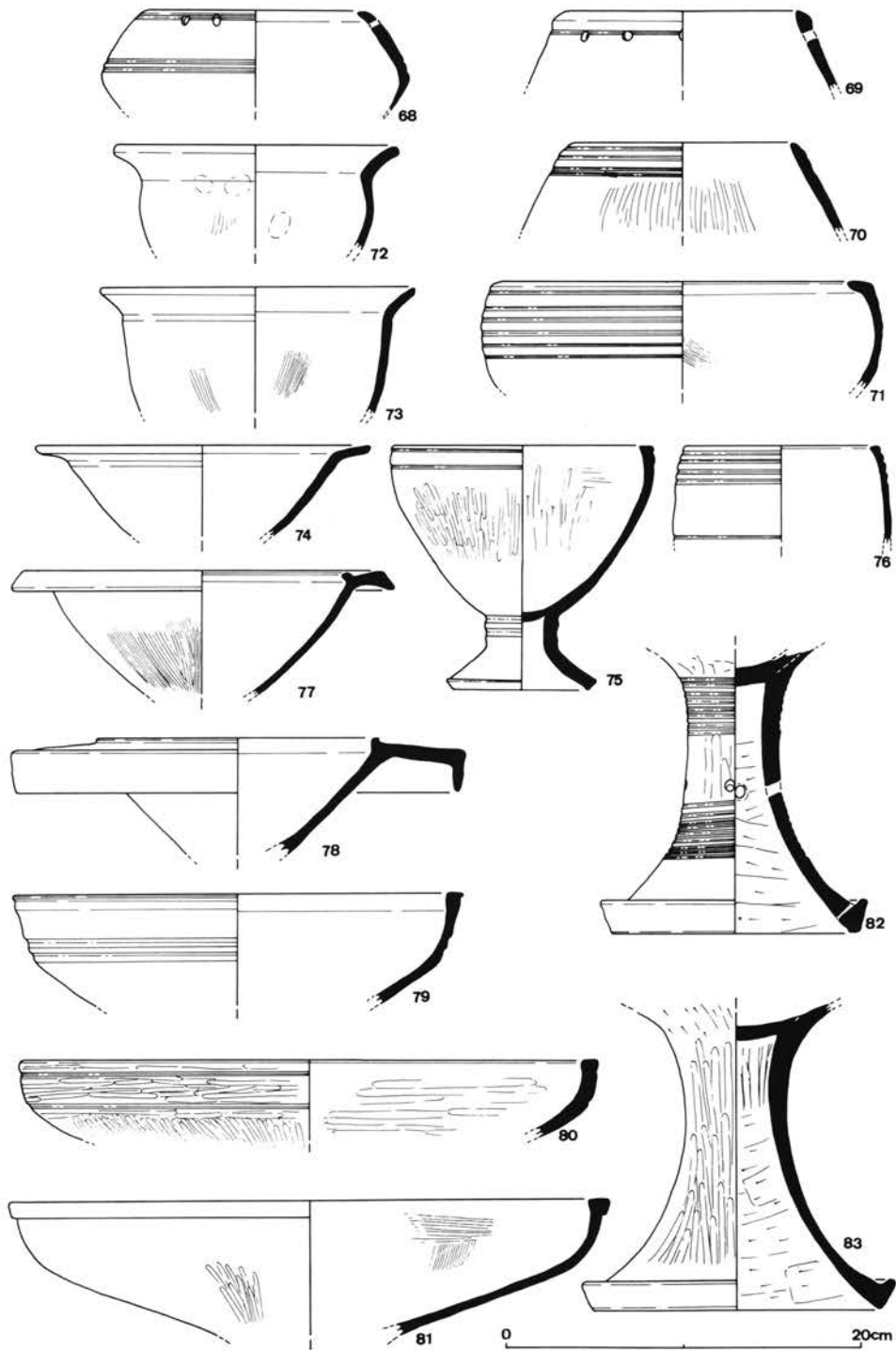
高杯(124・127・128) 124は脚部、127・128はA 3である。



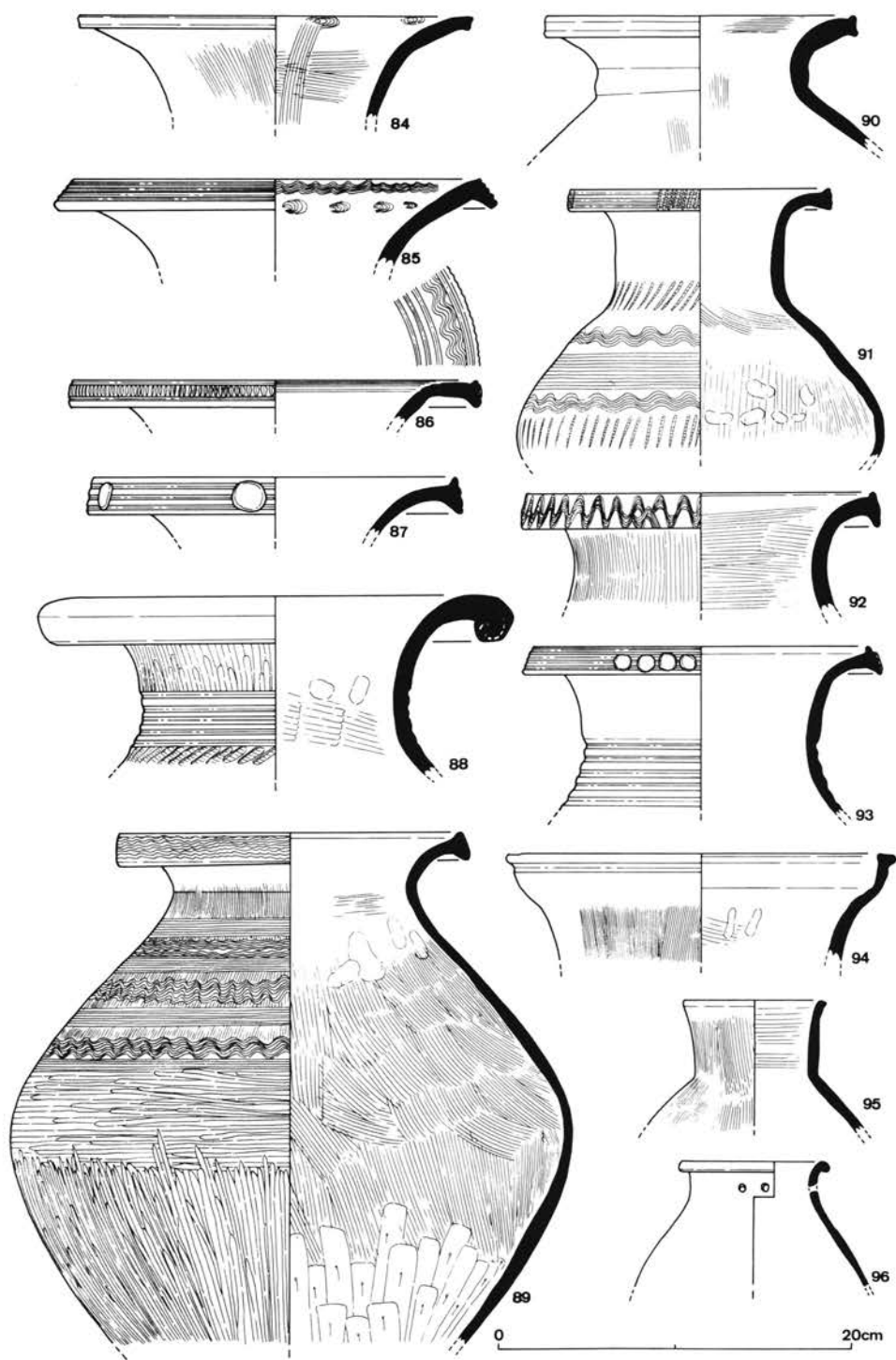
第48図 S D02出土遺物実測図(5) 下層



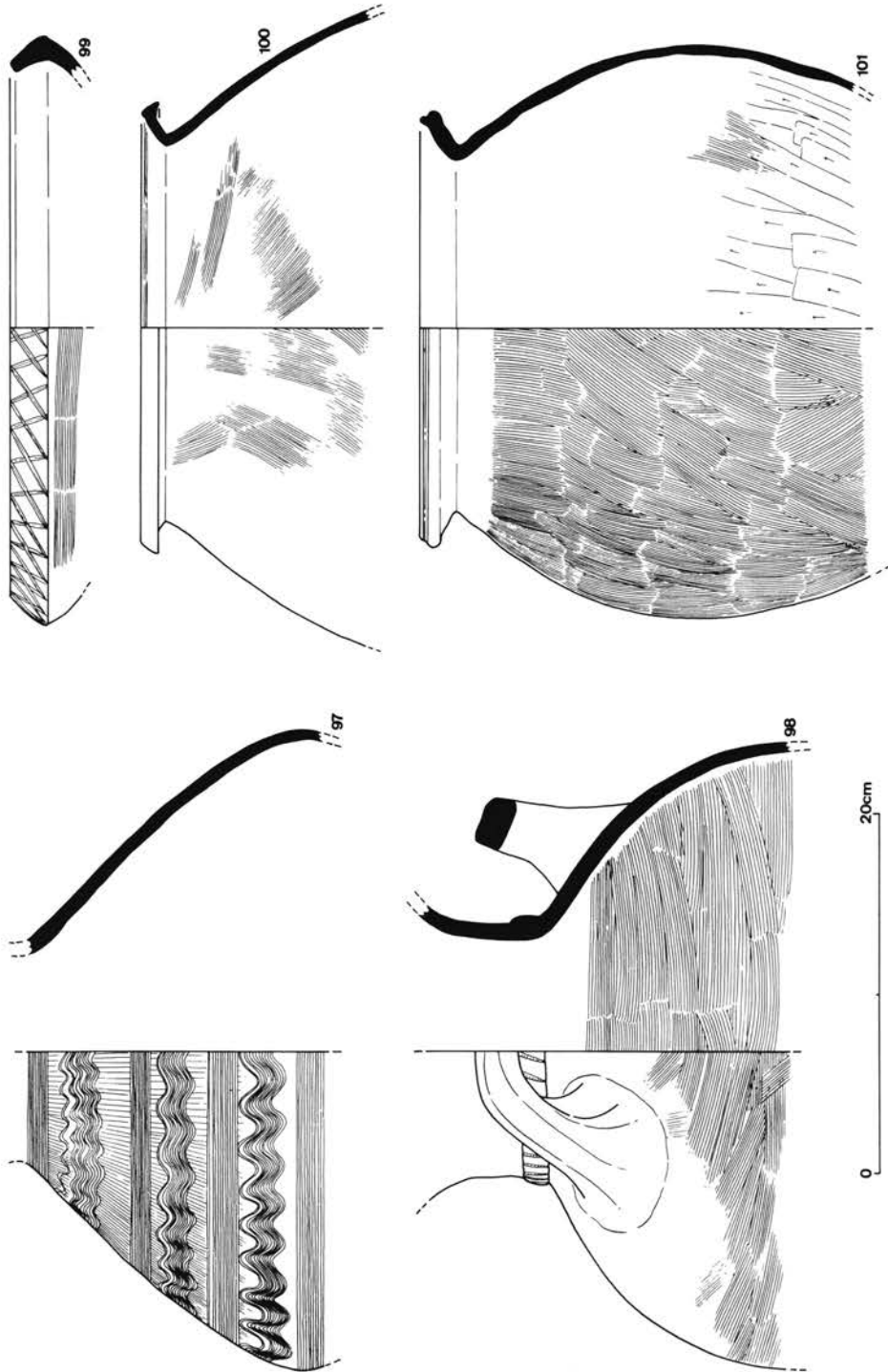
第49図 S D02出土遺物実測図(6) 下層



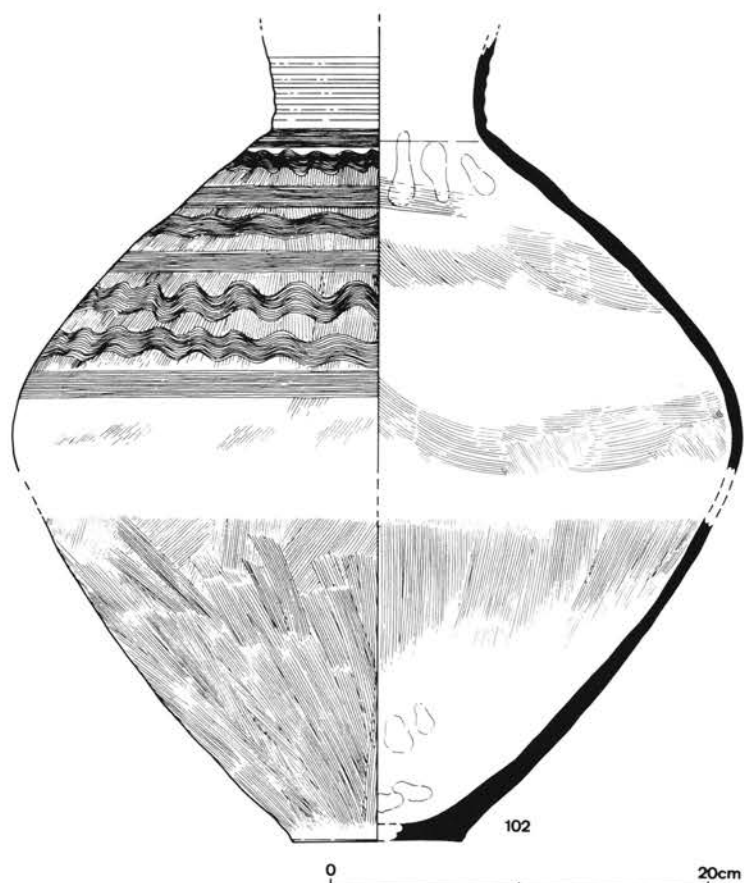
第50図 S D02出土遺物実測図(7) 下層



第51図 S D02出土遺物実測図(8) 最下層



第52図 S D02出土遺物実測図(9) 最下層



第53図 S D02出土遺物実測図(10) 最下層

鉢(118・119・121) A(118・119)とB(121)がある。いずれも器体調整はハケ及びナデである。119は大形である。

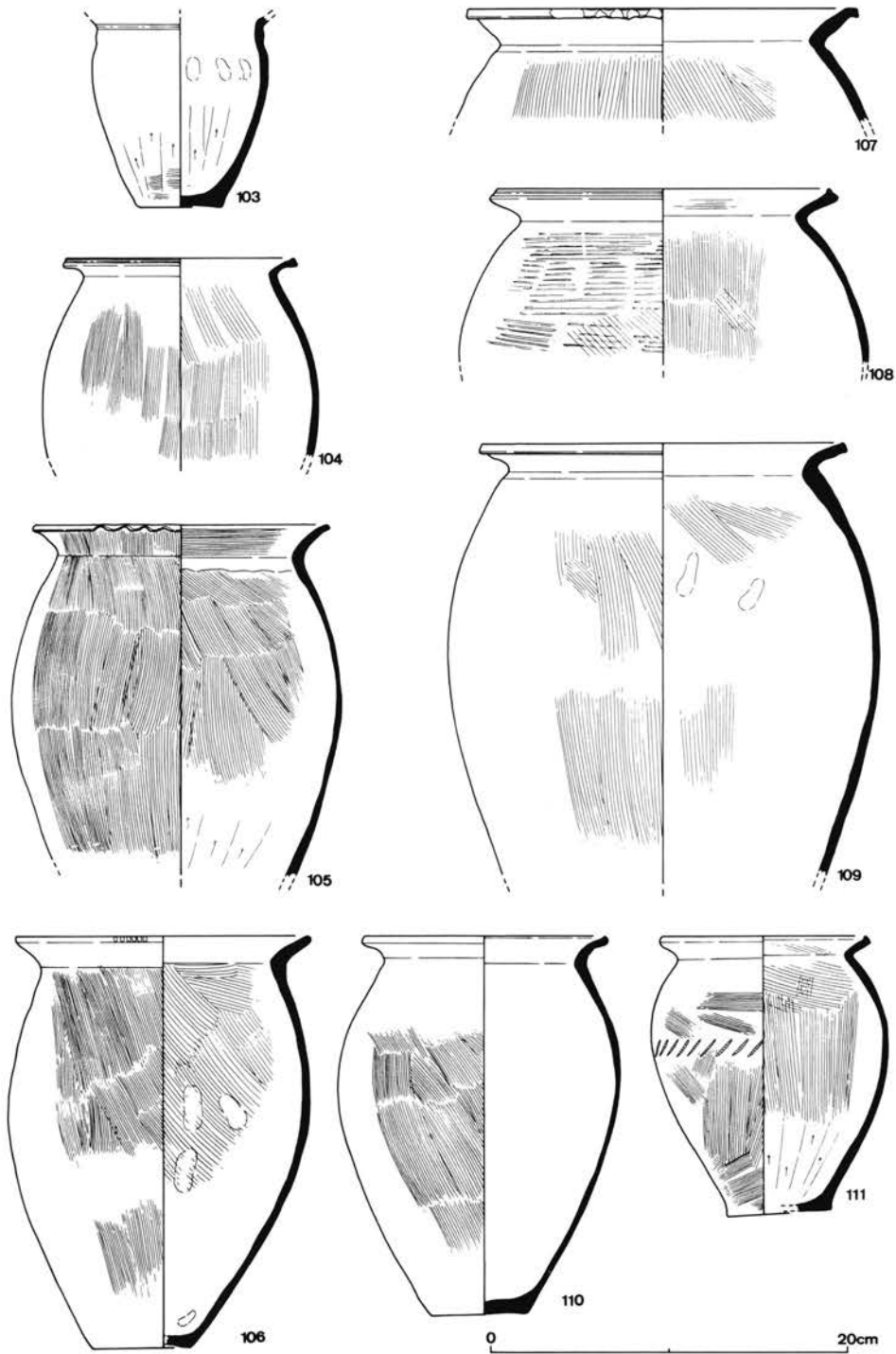
台付鉢(116・117・122・126) C1(116)、C2(117)、D1(122)とD2(126)がある。116は口縁部に5個一対のキザミがある。122は無文、126は口縁部に凹線文が3条めぐる。

123・124・125は、脚部である。123は鉢、124高杯か台付鉢、125は無頸壺あるいは鉢の脚部であろう。

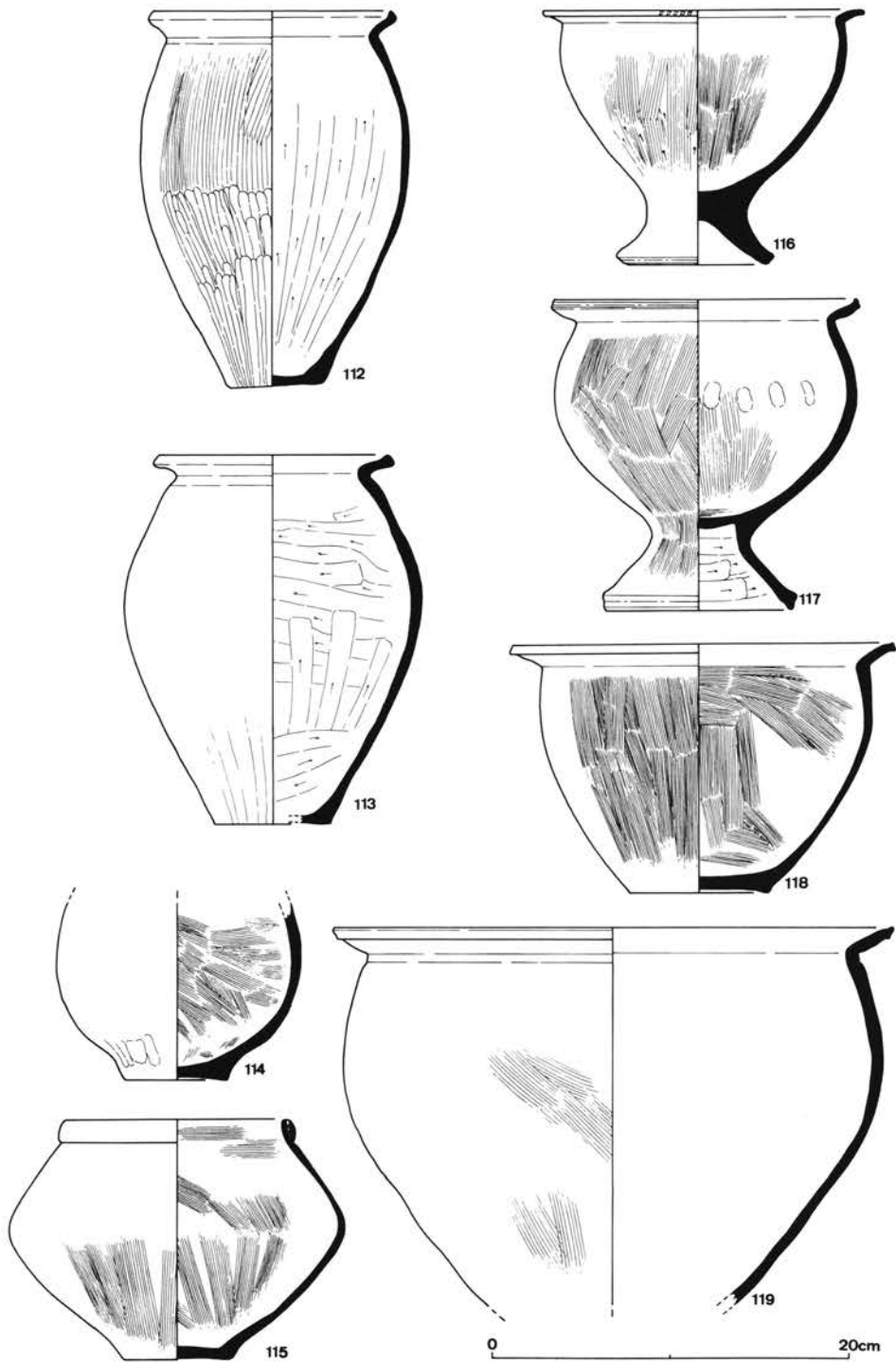
#### S D03出土遺物(第57・58図1～31)

広口壺、無頸壺、短頸壺、長頸壺、甕、高杯、鉢、器台などがある。凹線文は退化・形骸化したものが多く、B種は器台以外にはみられない。また、高杯・鉢などの供献形態の小形化が著しい。高杯Cが見られるのも特徴である。S D01・02に後出する土器群と考えられる。

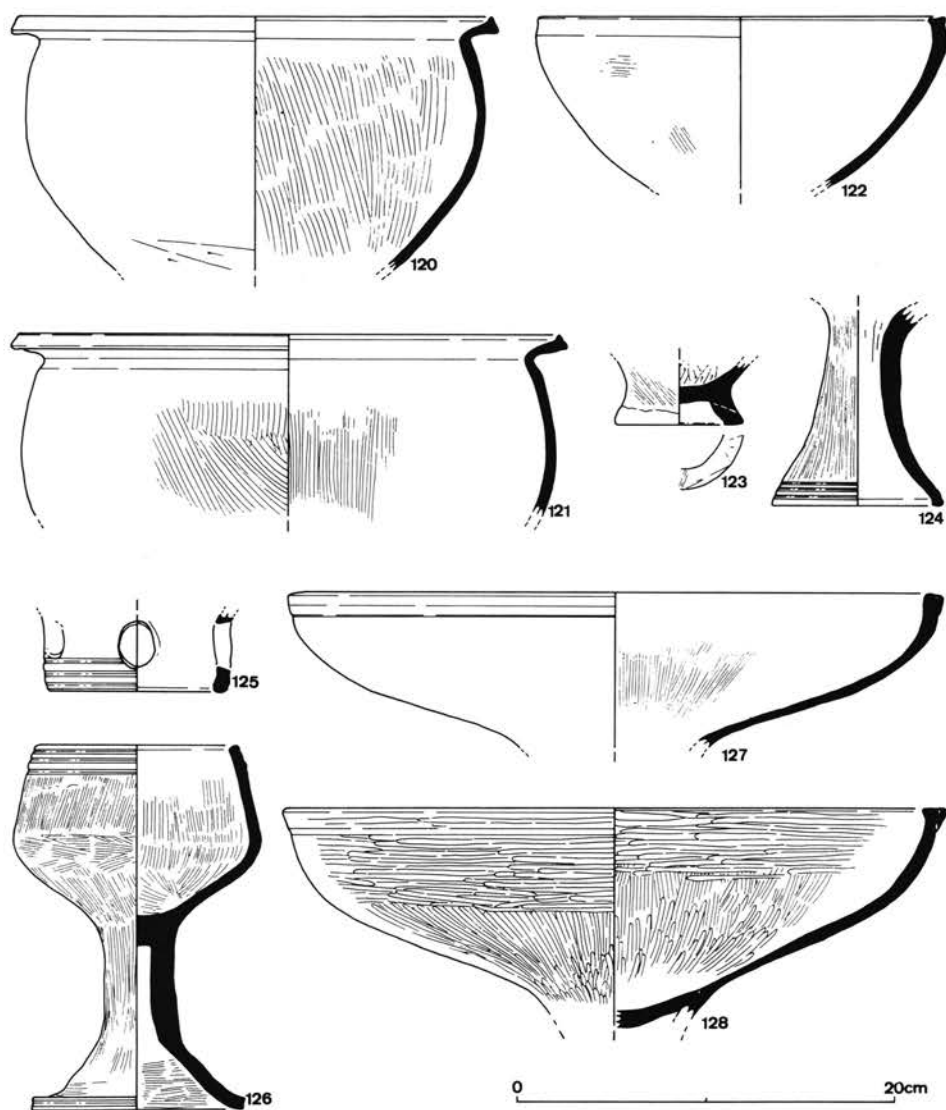




第54図 S D02出土遺物実測図(11) 最下層



第55図 S D02出土遺物実測図(12) 最下層

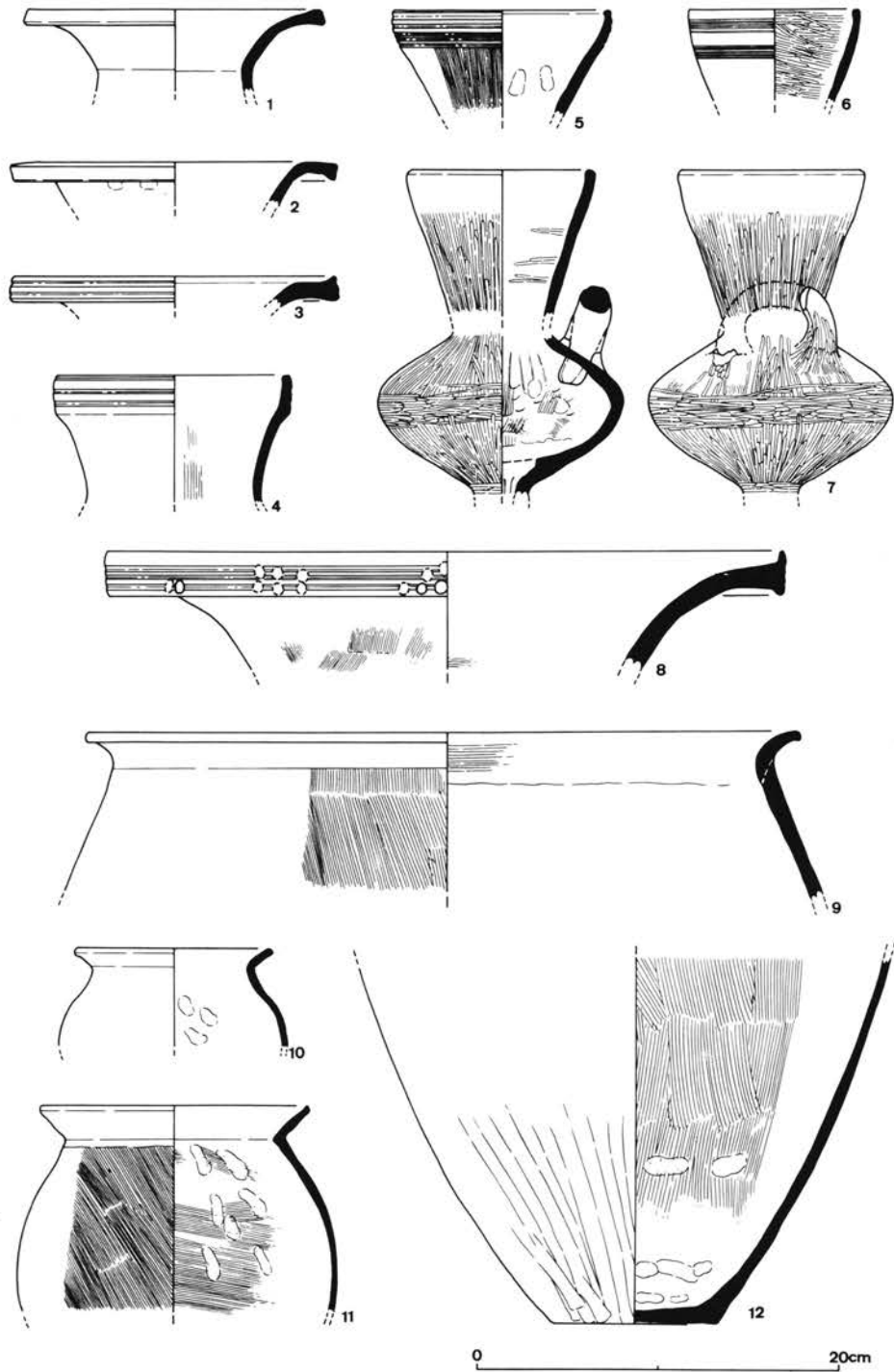


第56図 S D02出土遺物実測図(13) 最下層

広口壺(1~3・8) 1~3は広口壺Bである。端部に狭い面をもつもの(1・2)と拡張して凹線文を施すもの(3)とがある。8は、広口壺A 4である。端面に3条の凹線文と5~6個1単位の円形浮文を施す。

短頸壺(4) 口縁部が直線的に立ち上がり、端部に3状の凹線文がめぐる。

長頸壺(5~7) 口縁部が「ハ」の字状に直線的に立ち上がる。5は口縁部に凹線文、6は櫛描き直線文がめぐる。6は内外面をヘラ磨き、外面に赤色顔料を塗る。7は脚部と把手があり、扁平な体部をもつ。頸部以下をヘラ磨きする。



第57図 S D03出土遺物実測図(1)



無頸壺(26・27) 無頸壺A(26)とB(27)がある。26は口縁部に、27は体部に凹線文がめぐる。27は体部上半をヘラ磨き、下半にハケ目が残る。

甕(9～11) 甕Aである。9は、大形で器壁が厚い。10は、粗製で小形である。

高杯(13～25・28) 13・14・16・17・21・24・25は、高杯A1である。15は高杯A2、18・28は高杯Cである。高杯は、小形のもの(13・14・18・19・25)が目立つ。28は、屈曲部外面に浅く狭い凹線文を4条めぐらす。

鉢(22・23) 22は小形である。23は口縁が屈曲して立ち上がり外傾する端面をもつ鉢Bである。端面に凹線文をめぐらす。

器台(29～31) いずれも脚部中央に透かしがあり、凹線文B種が施されている。

### 各土坑出土遺物

すべての土坑から、弥生時代中期(第Ⅳ様式)の土器が出土している。土器棺と考えられるもの(S K33)、明らかに供献土器と思われるもの(S K19)などがあるが、多くは細片化している。土坑出土の土器は、摩滅したものはあまりみられず、遺存状態は良好である。多くは中～上層で確認しており、土坑底面に貼り付くものはあまり多くない。主なものについて、報告する。

S K02(第59図) 広口壺(1・2)、甕(4)、無頸壺(5)、高杯(6)などがある。1は、広口壺Bである。口縁部外面に凹線文と円形浮文、内面に櫛描き波状文をめぐらす。3は壺の底部である。内・外面をヘラ削りする。外面のヘラ削りは、板ナデ状である。6は、高杯A1である。口径約23.7cmと大形である。

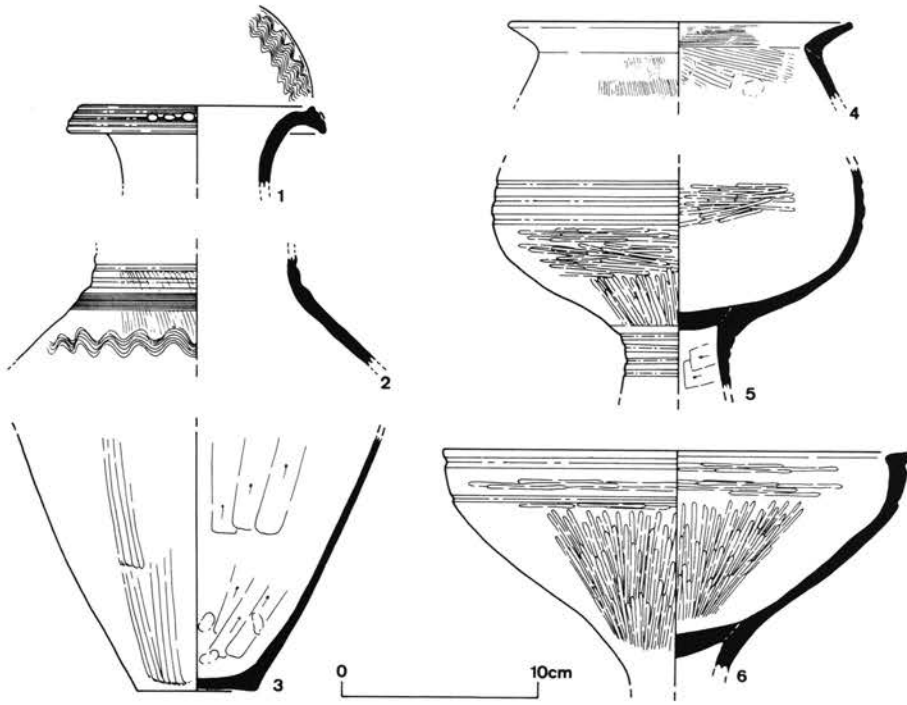
S K03(第60図1・2) 1は甕A1、2は甕の底部である。2の外面にはヘラ削りがある。

S K06(第60図3・4) 3は無頸壺Aである。口縁部に二孔一対の紐孔がある。4は広口壺A3である。

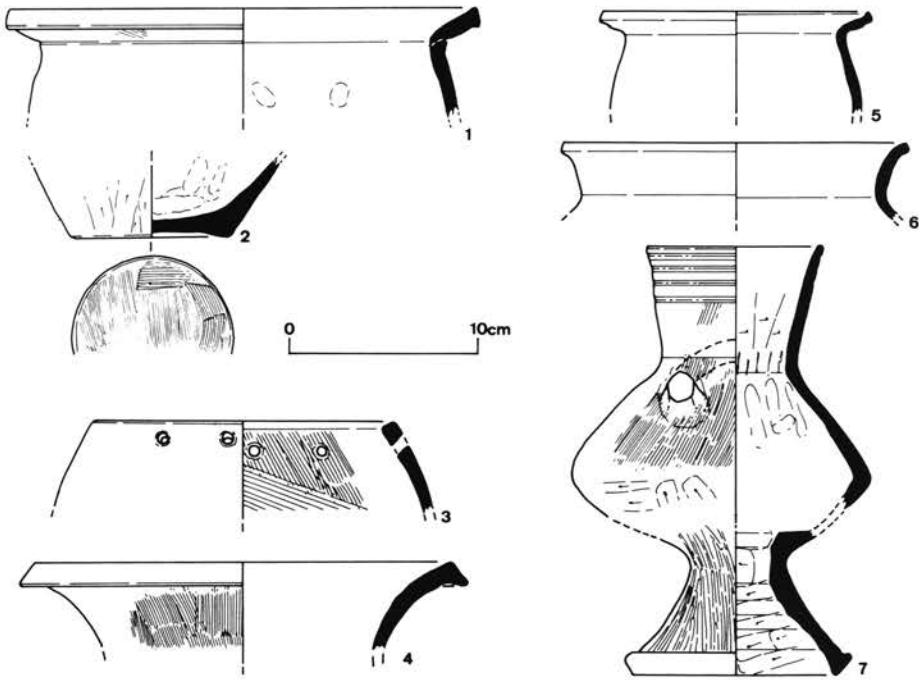
S K07(第60図5～7) 5は甕B、6は緩やかに外反して立ち上がる口縁をもつ甕である。7は水差形土器Aである。7は、直口する口縁をもち、外面に凹線文が3条めぐる。

S K08(第61・62図) この土坑は、S D02内で確認した。検出面は中層上面にあたっており、掘形は一部上層に及んでいた。土器のほか鉄鏝1点が出土している。

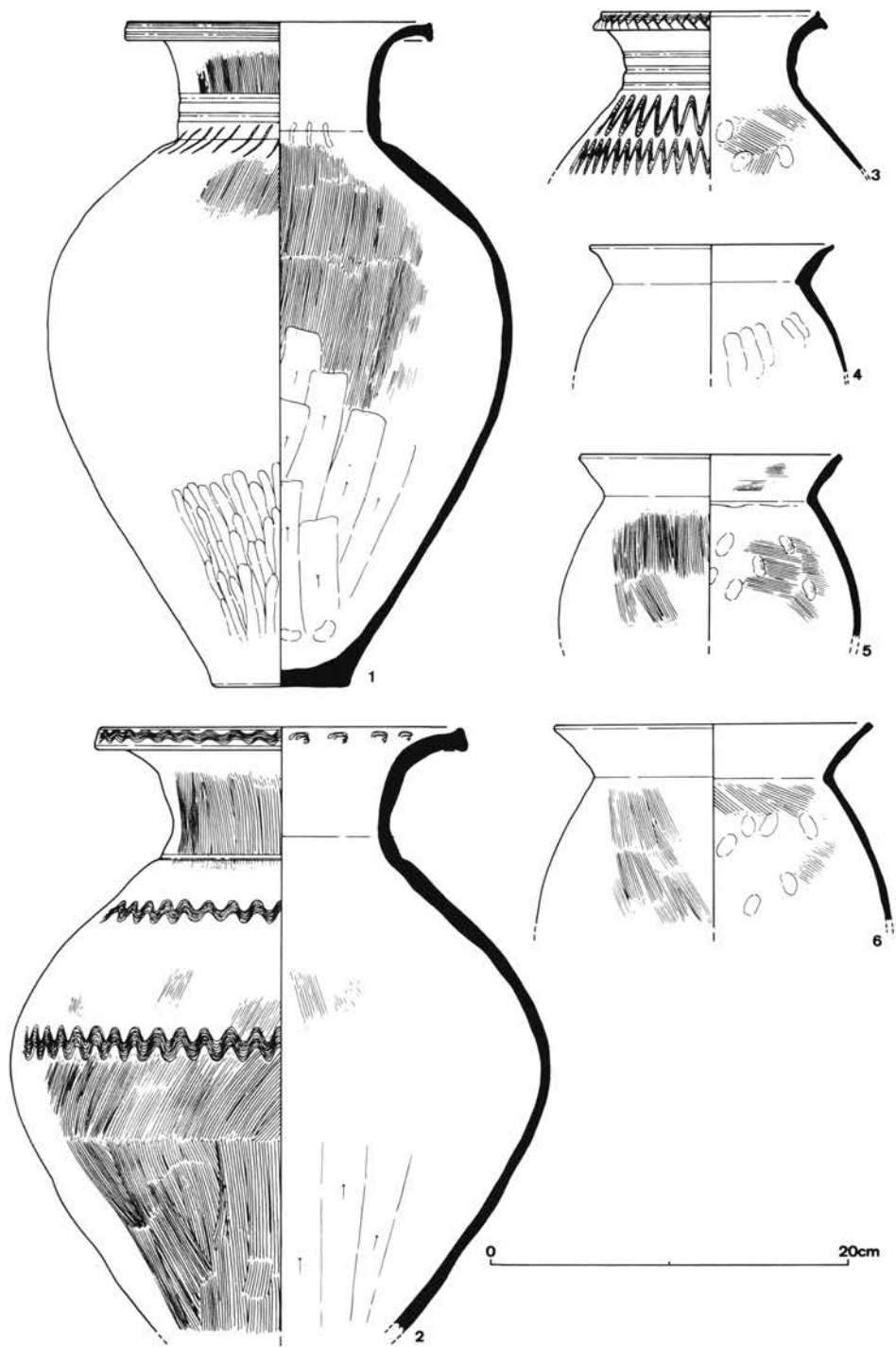
広口壺(1・2)、短頸壺(3)、甕(4～6・11)、無頸壺(7・8)などがある。1・2は、広口壺Bである。1は、最大腹径が肩部にあり、長胴である。口縁部と頸部に凹線文、肩部に櫛描き列点文がある。調整はハケとナデ主体であるが、体部外面下半にヘラ磨き、内面下半をヘラ削りする。2は、最大腹径が体部中位にあり球形の体部をもつ。口縁部外面に櫛描き波状文、内面に扇形文をめぐらす。頸・胴間に1条の凹線文、肩部・体部に波状文がめ



第59図 S K02出土遺物実測図

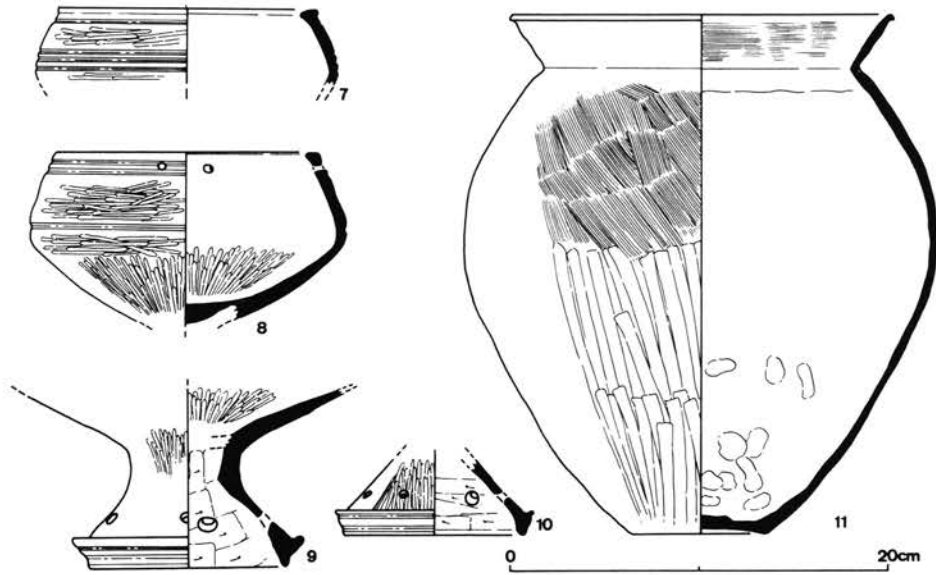


第60図 S K03・06・07出土遺物実測図  
S K03.1・2 S K06.3・4 S K07.5~7

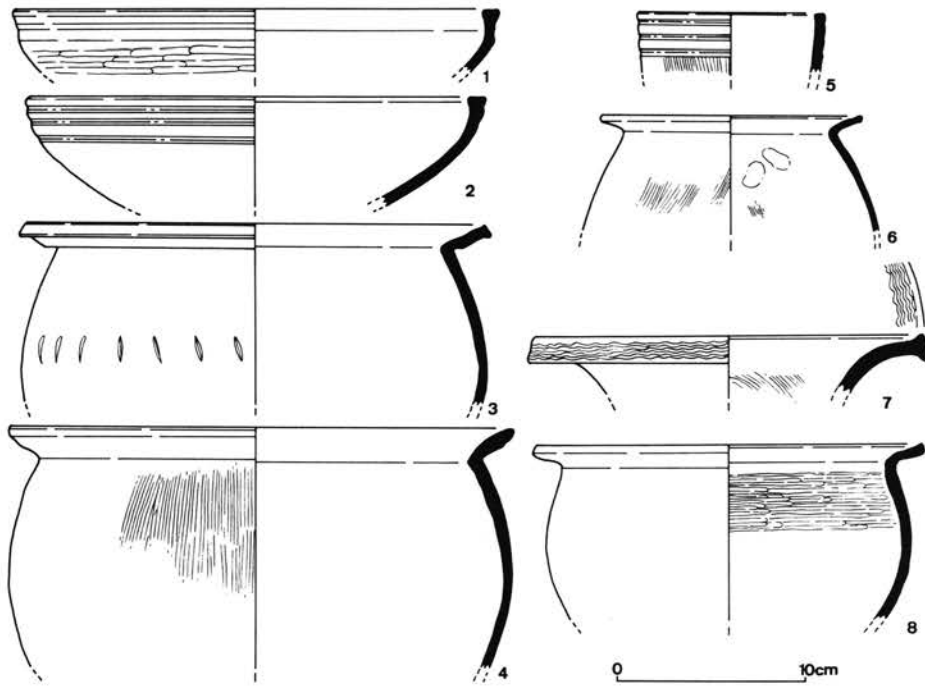


第61図 S K08出土遺物実測図(1)

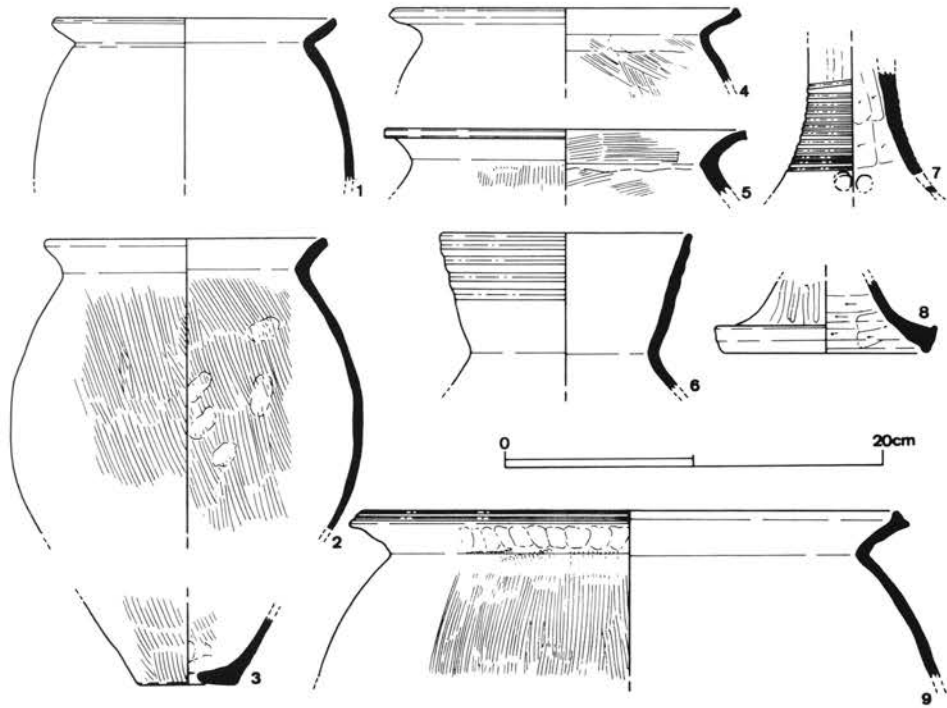




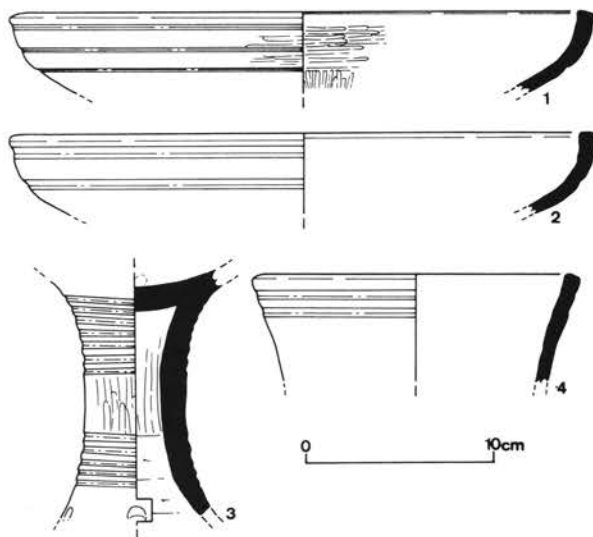
第62図 SK08出土遺物実測図(2)



第63図 SK09・10・11・14出土遺物実測図  
SK09. 1・3 SK10. 5・6 SK11. 2・3 SK14. 7・8



第64図 SK15出土遺物実測図



第65図 SK17出土遺物実測図

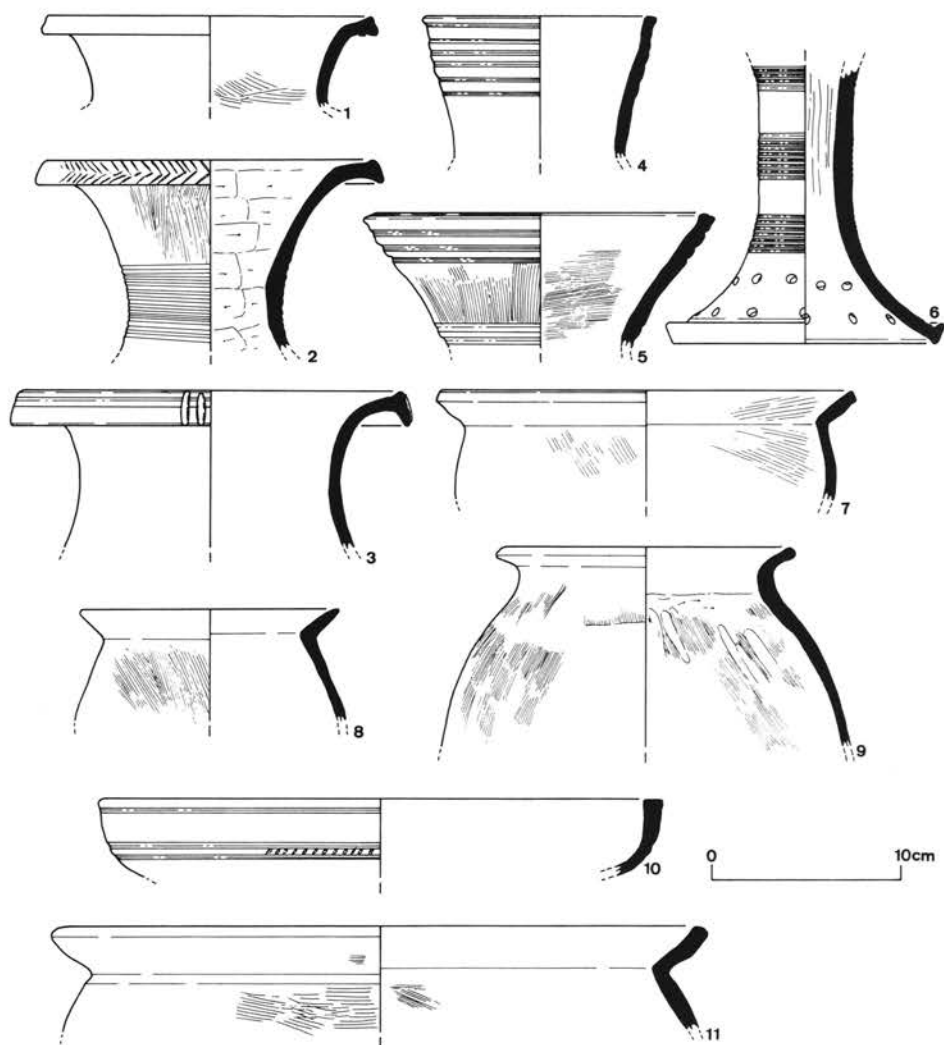
SK14(第63図7・8) 7は広口壺A 4、8は鉢Aである。7は、口縁部外面と内面に櫛描き波状文をめぐらす。

ぐる。4~6は甕A 1、11は甕A 2である。11は、外面ハケ調整の後ヘラ削りする。7・8は、無頸壺Aである。9は無頸壺、10は高杯の脚部である。

SK09(第63図1・3) 1は、高杯A 1である。3は、甕A 1である。体部にヘラによるキザミ目文がある。

SK10(第63図5・6) 5は直口壺、6は甕A 1である。

SK11(第63図2・4) 2は高杯A 1、4は甕A 1である。

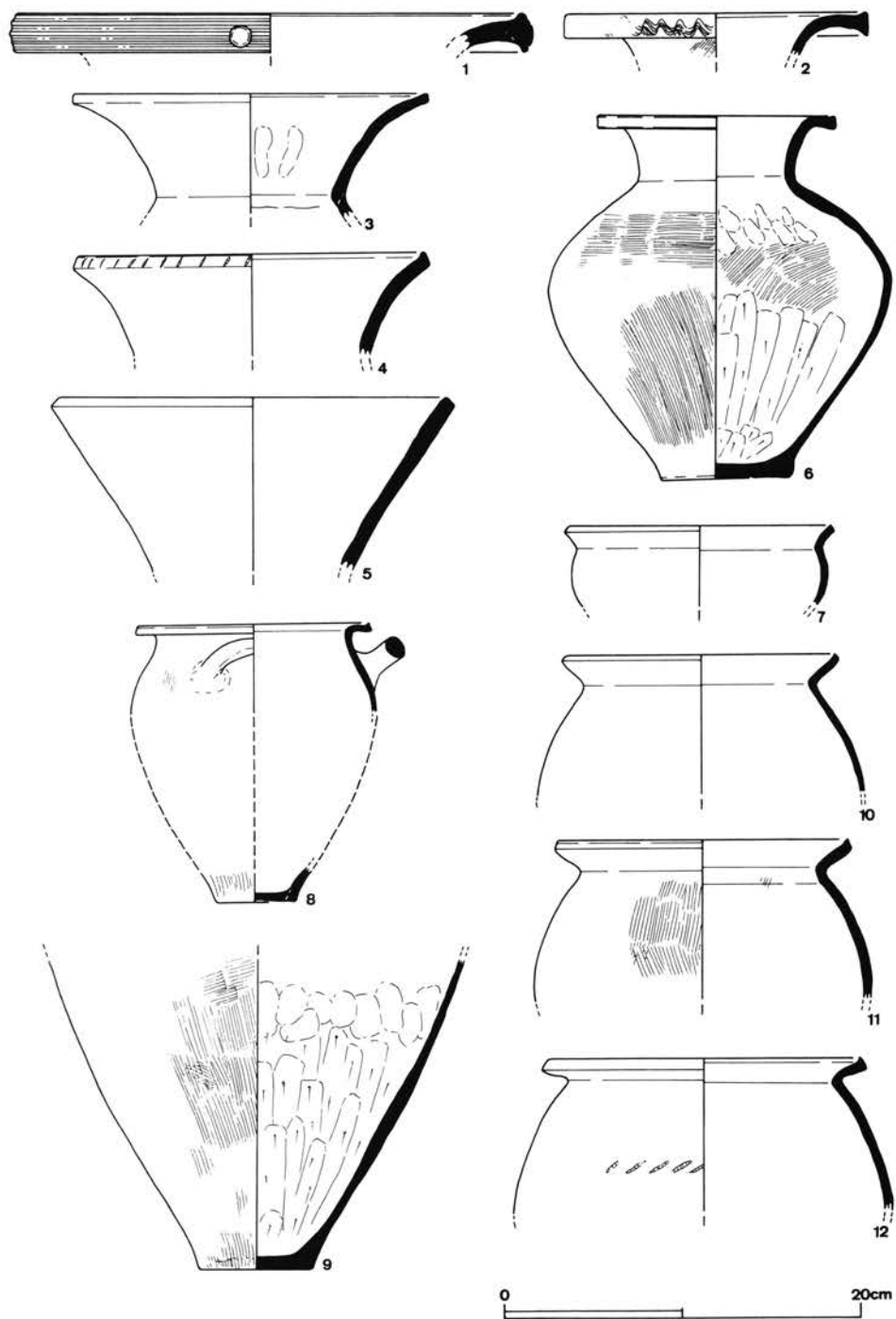


第66図 SK16出土遺物実測図

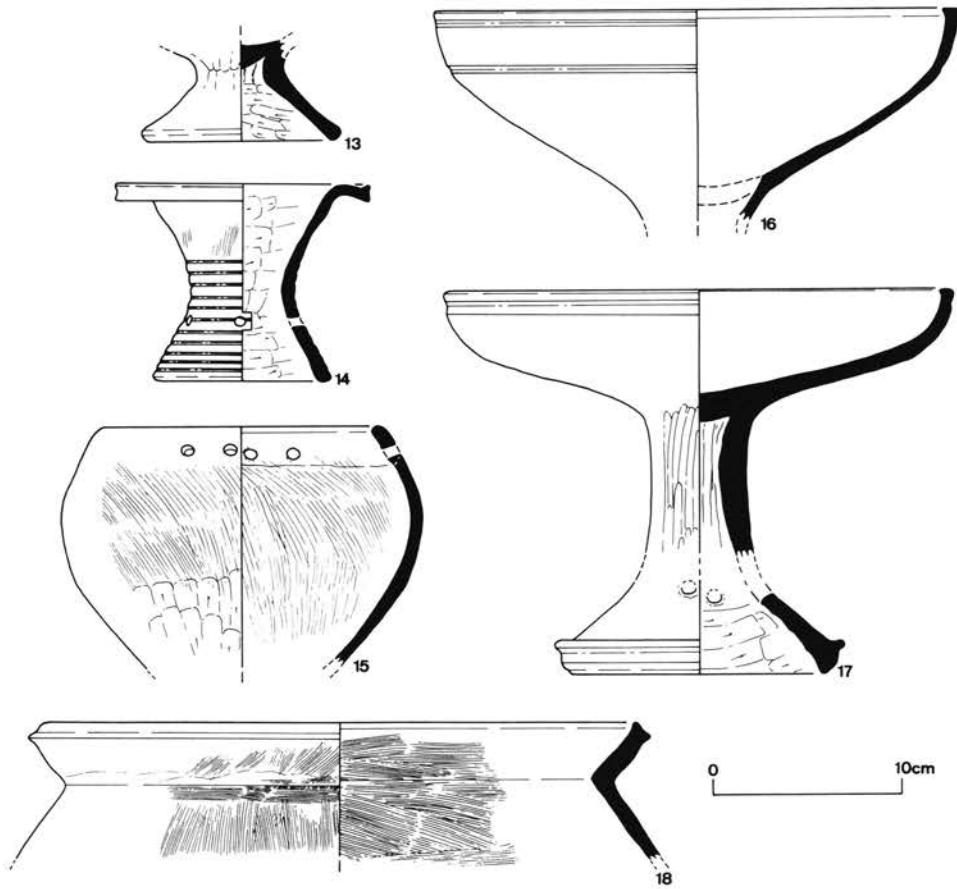
SK15(第64図) 甕(1~5・9)、直口壺(6)、高杯脚部(7・8)などがある。1・2・5は甕A 1、4は甕B、9は甕C 3である。3は、底部に穿孔がある。9は、口縁部に凹線文2条がめぐる。

SK16(第66図) 広口壺(1~3)、直口壺(4・5)、甕(9・11)、鉢(7)、高杯(6・10)などがある。1は壺Bで、無文である。2は広口壺A 4で、口縁部端面に羽状文、頸部に凹線文多条をめぐらす。内面をヘラ削りする。7は鉢Aである。10は高杯Aで、外面に凹線文、屈曲部に列点文をめぐらす。9は粗製の壺である。

SK17(第65図) 1・2は高杯A 1、3は脚部、4は直口壺である。

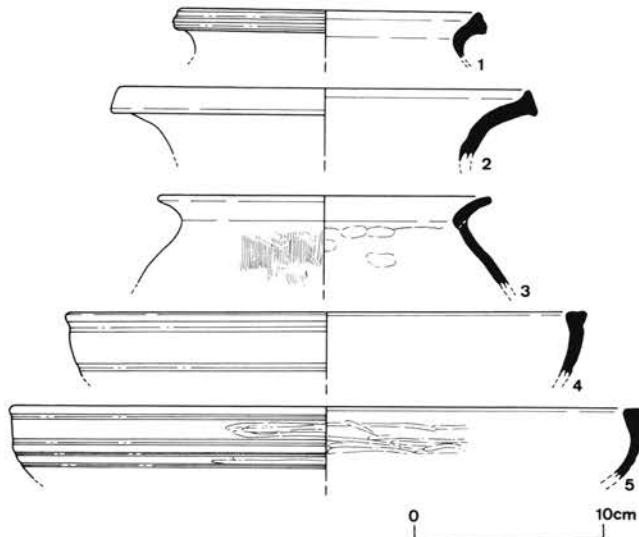


第67図 SK19出土遺物実測図(1)

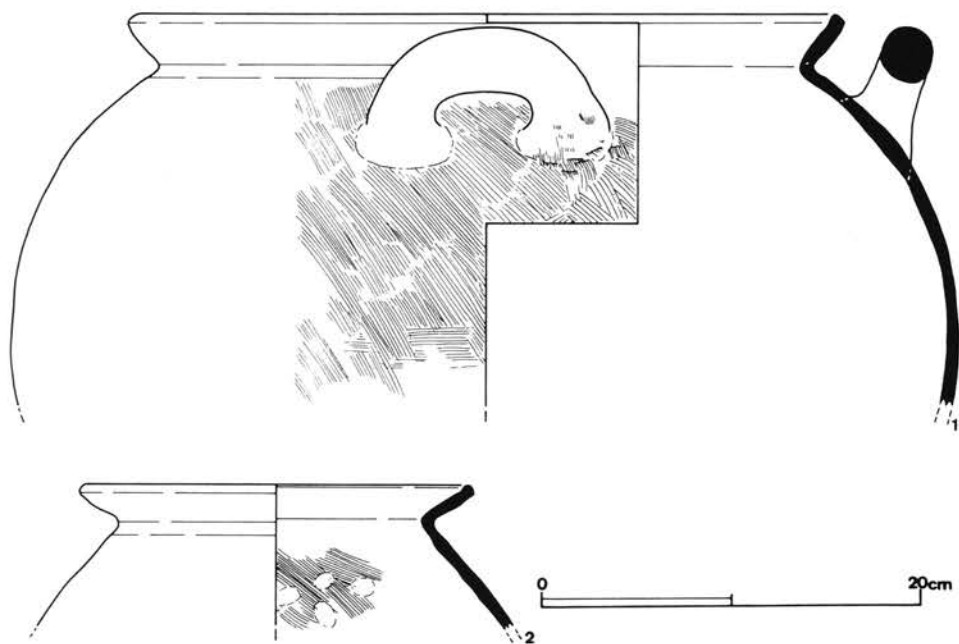


第68図 SK19出土遺物実測図(2)

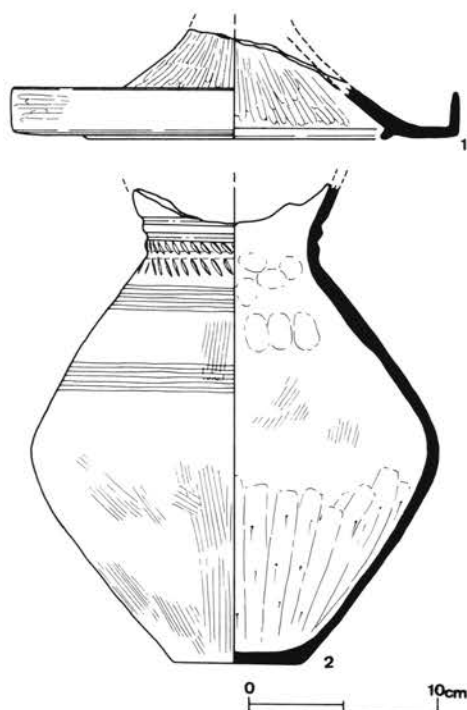
SK19(第67・68図)  
 広口壺(1~6)、無頸壺  
 (15)、甕(8・10~12・  
 18)、鉢(7)、高杯(16・  
 17)、器台(14)などがある。  
 1は広口壺A 4である。  
 口縁部端面に凹線文と  
 円形浮文を施す。3~5  
 は、広口壺A 2である。  
 4は、口縁部端面にキザ  
 ミ目文がある。6は、壺  
 Bである。完形品。体部



第69図 SK25出土遺物実測図



第70図 S K30出土遺物実測図



第71図 S K33出土遺物実測図

外面ハケ、内面下半にヘラ削りがある。  
10・18は甕A 1、8・11・12は甕Bである。  
8は肩部に把手、12は体部に列点文がめぐる。  
14は、小形の器台である。口縁部形態が6と類似している。  
16・17は高杯A 1である。

S K25(第69図) 短頸壺(1)、広口壺A 4(2)、甕A 1(3)、高杯A 1(4・5)などがある。

S K30(第70図) 1・2は、甕A 1である。  
1は、大形の甕で把手がある。

S K33(第71図) 1は、高杯B 2、2は広口壺である。  
1と2が合わせ口で出土した。2は、頸部に凹線文とヘラによるキザミ目文、体部に2条の櫛描き直線文がめぐる。  
体部内面下半をヘラ削りする。

S K34(第72図) 1は高杯B 1、2はA

1である。3・4は、脚部である。

S K35(第73図) 1は広口壺F、2は甕C3である。

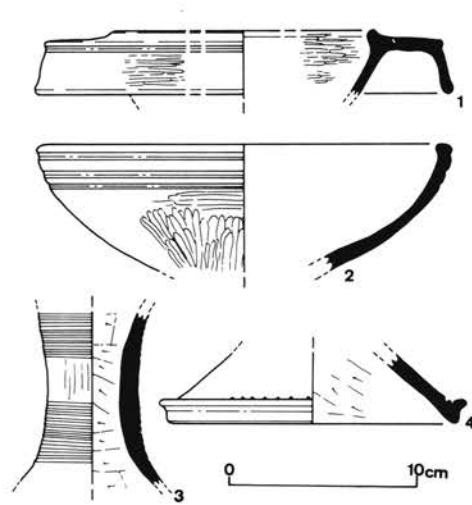
S K36 直口壺、甕A1、甕B、高杯などがある。

S K37 甕A1、高杯A1、無頸壺Bなどがある。

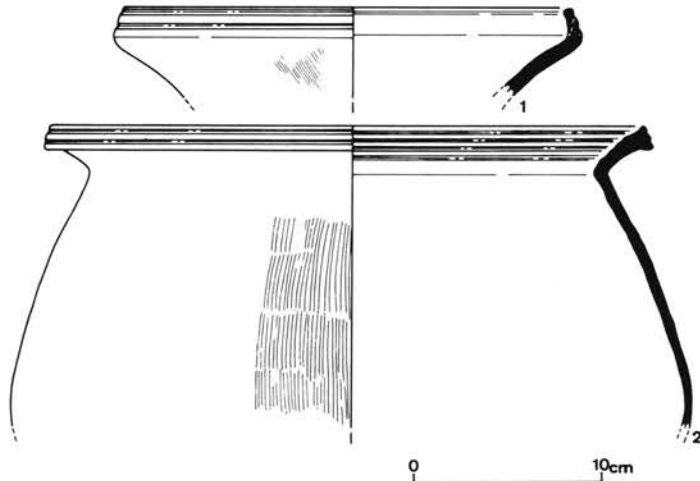
#### S X01出土遺物(第74・75図)

広口壺・長頸壺・近江型の甕等がある。広口壺は口縁部が単純化し、器壁も薄い。S D03に併行ないしはやや後出する土器群と考えられる。

1は、受け口状の口縁部をもつ甕Dである。体部外面中に凸帯があり、列点文をめぐらす。今回の調査で確認した甕Dはこの1点のみである。2は、無頸壺Aである。3は、長頸壺である。頸



第72図 S K34出土遺物実測図



第73図 S K35出土遺物実測図

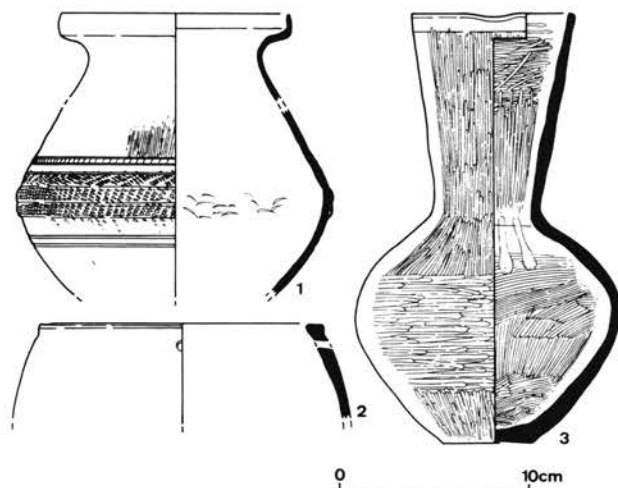
部は直線的に立ち上がり、器壁が厚くしっかりと作られている。調整は、体部外面をヘラ磨き、内面は頸部をヘラ磨き、体部はハケである。4は、直口壺である。口縁部に凹線文がめぐる。5は、広口壺A1である。頸部に櫛描き列点文がめぐるほかは文様はない。体部外面をハケ調整後下半をヘラ磨き、内面は肩部にヘラ削りがみられる。

#### ④IV地区出土遺物(第76・77図)

S D01(8)・S D03(3~5・7)・S D04(6・9・10)から弥生土器が出土している。1・2は、S D04上面にあたる攪乱層から出土した。

広口壺(1・3・7) 1は広口壺A 3、3は広口壺Bである。1は、口縁部外面に3条の凹線文、頸部外面と口縁内面に扇形文をめぐらす。3は、口縁と頸部に凹線文、肩部と口縁内面に櫛描き列点文がめぐる。7は、頸部に櫛描き直線文、肩部に櫛描き波状文を縦位に施文した後に「J」字状の櫛描き文を等間に配する。体部外面下半をヘラ削り。

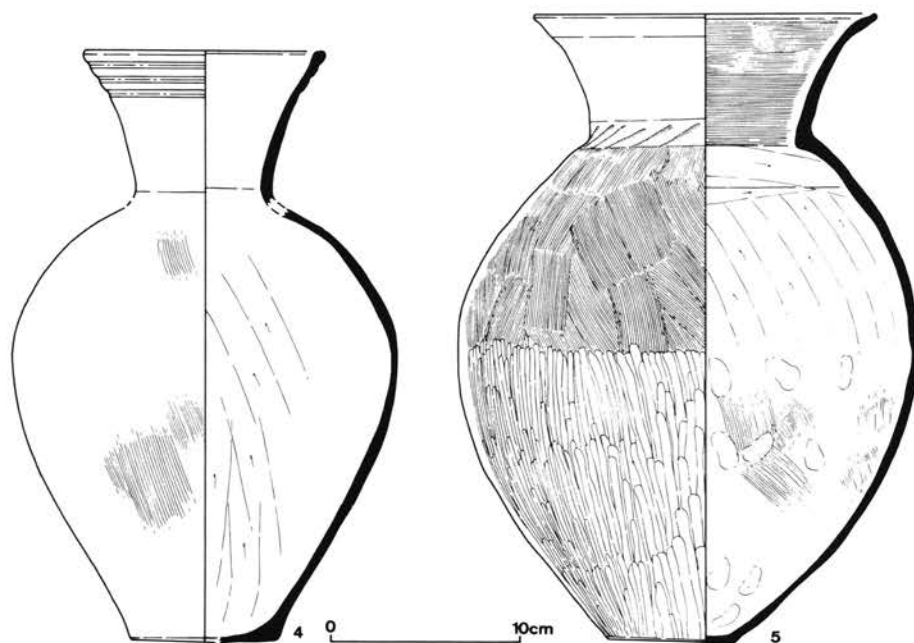
受け口壺(2) 受け部はあまり屈曲せず緩やかに立ち上がる。口縁部と頸部に凹線文がめぐる。



第74図 S X01出土遺物実測図(1)

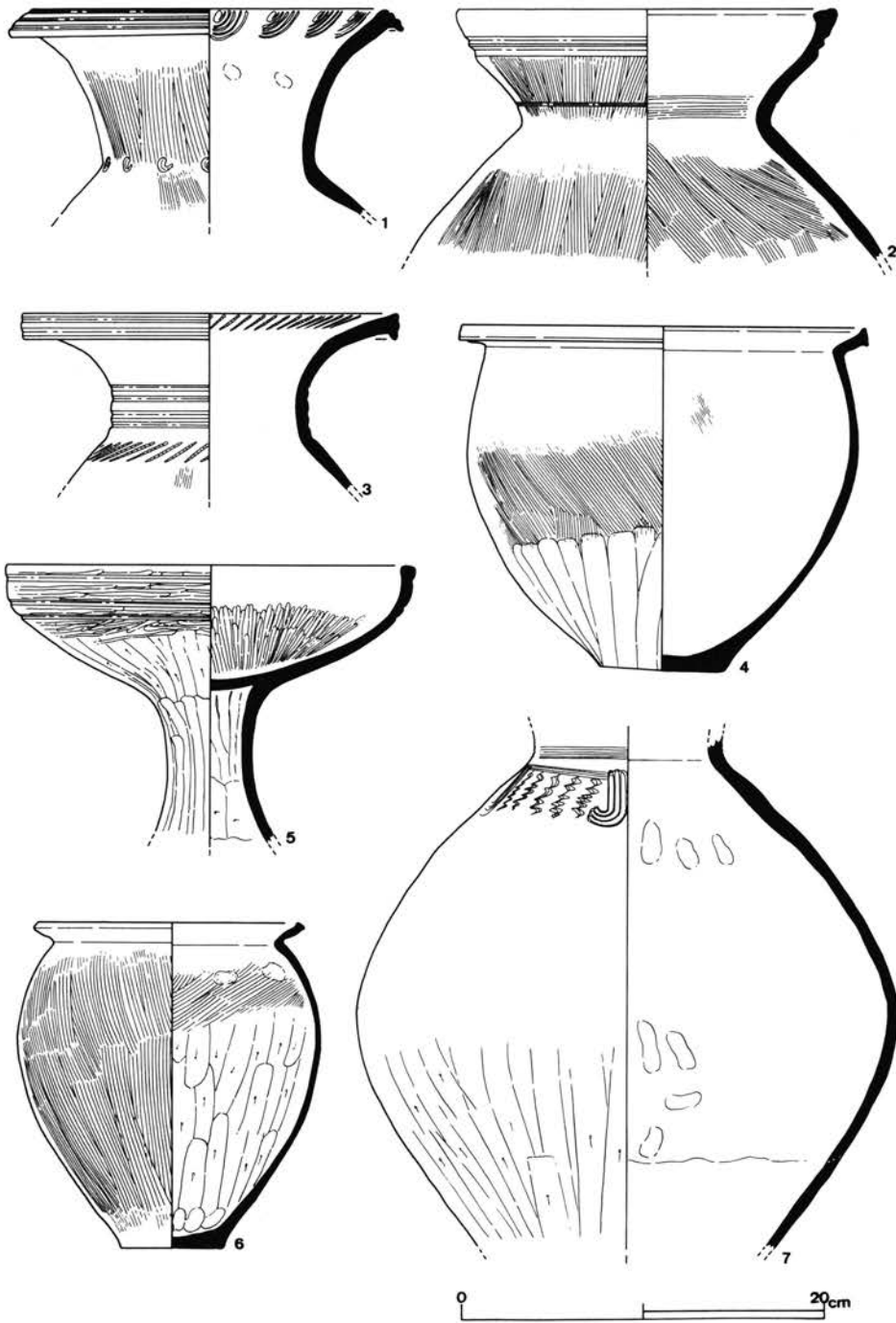
無頸壺(10) 無頸壺Bである。脚部をもち、口縁部に2個一対の紐孔がある。口縁部に凹線文1条、脚端に透かしがある。

甕(6・8) 6は、口縁端部をつまみ上げる甕B、8は甕A 1である。6は、ハケ目調整が主体であるが、体部内面は肩部付近までヘラ削りを残している。8は長胴で、体部

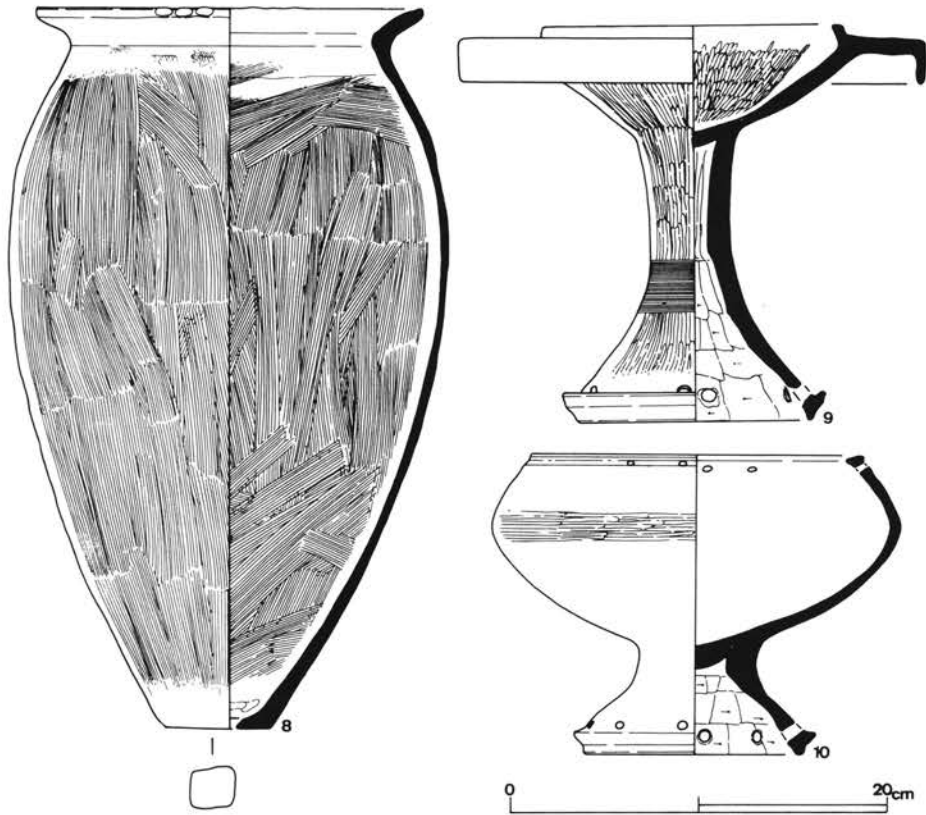


第75図. S X01出土遺物実測図(2)

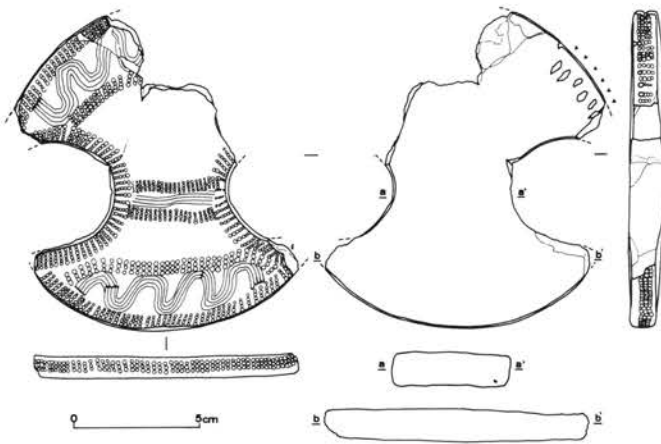




第76図 IV地区出土弥生土器実測図(1)



第77図 IV地区出土弥生土器実測図(2)



第78図 分銅形土製品実測図

は内外面ともにていねいにハケ目調整する。口唇部の3か所に3個一対の押圧文を施す。底部には焼成後の穿孔がある。完形である。

高杯(5・9) 5は高杯A 1、9は高杯B 2である。9は杯部内外面、脚部外面に赤色顔料を塗布している。脚部の凹線文は棒状工具

先端によるもので、浅く狭い沈線状である。

鉢(4) 鉢Bである。短く屈曲する口縁部をもち端部に外傾する面を作る。体部外面下半をハケ目調整後にヘラ削り、内面はハケ目の後、ナデ調整する。

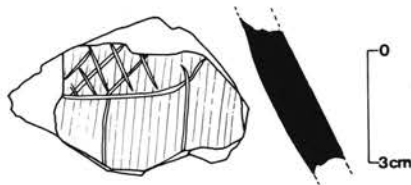
## (2)その他の遺物

分銅形土製品(第78図) E調査地区SD01最下層において壺・甕・高杯などの完形土器群(第14図)に伴って出土した。溝の底に貼り付いて出土しており、SD01開掘後すぐに土器群とともに投棄されたのであろう。上半部の一部と下半が約1.5mほど離れて出土しており、破断面が新鮮であることからみて投棄に際して破壊されたものと考えられる。

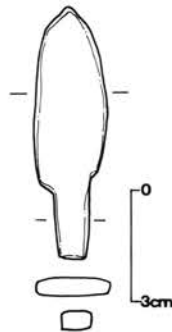
分銅形土製品は、上半部の約3分の2を欠いているが、ほぼ全形を知ることができる。復原残存長約12.2cm、上半部復原幅約12cm、下半部刃約10.5cmを測る。上半部がやや大きい分銅形である。厚さは上端面1.2cm、くりこみ部約4.7cm、下端面約1cmで中央が厚い。裏面は平坦で、断面形は表面中央部がふくらむ凸状である。

器体表面と上半部端面、下半部端面に施文がある。施文は櫛状工具によって行われており、施文部位にトレースするように赤色顔料が塗布されている。器表面の文様は櫛歯による刺突文と櫛描き波状文からなる。くりこみ部には櫛歯文+櫛描き直線文+櫛歯文を施して上半部と下半部の文様境界とする。上下端面は櫛歯列点文を施す。裏面には文様はないが、上半部には端部寄りに6個の小孔がある。この孔は直径1mm程度で、背面から上半部端面にむかって斜めに穿たれており、それぞれ櫛歯列点文の裏面寄りの1点に対応している孔は外縁に沿って部分的に認められており、欠損部でも同じ部位に施されていたものと思われる。細砂を含む精良な粘土を用いて作られている。

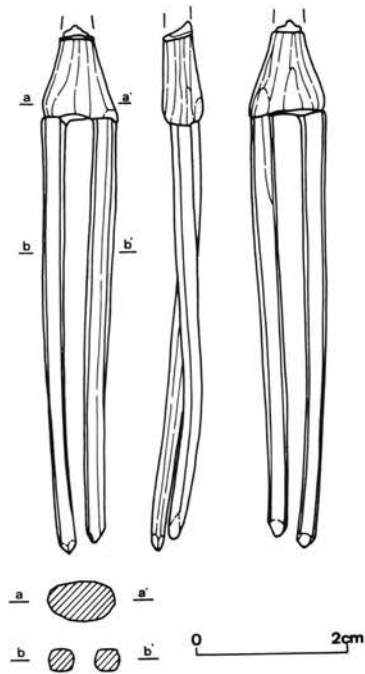
ミニチュア土器 II地区SD01中層から出土した。高杯Bのミニチュアで



第79図 絵画土器



第80図 鉄鎌



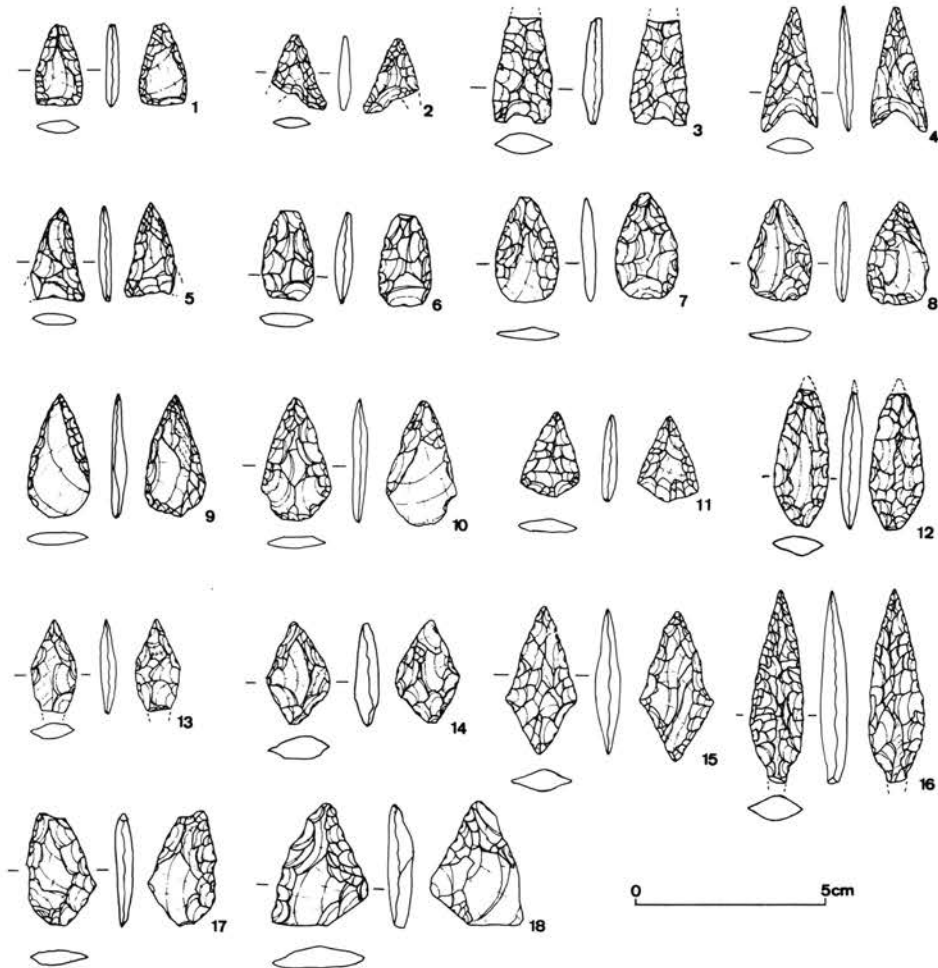
第81図 SK09出土簪実測図

ある。口縁部を欠損している。

絵画のある土器(第79図) S D02中層から出土した。壺の肩部の破片である。絵画は、上向きの弧線と2本の垂線からなり、弧線の上部を斜格子文で充填している。鹿などの動物絵画であろう。

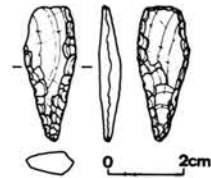
鉄鏃(第80図) E調査地区S K08で、弥生時代中期の土器とともに出土した。全長は約6.8cm・刃部長約5cm・茎長約1.8cmの柳葉形の鉄鏃である。錆びが進んでおり、断面の形状は明確でない。

かんざし  
簪(第81図) S K09から弥生中期(第IV様式)土器とともに出土した。頭頂部を欠損しているが、ほぼ完存していた。黒色の板状素材を用い、2本の脚と頭部を削りだして成形する。成形後にていねいに研磨し、器体を平滑に仕上げている。頭部は断面楕円形の小さな



第82図 石鏃実測図

三角形を呈し、頂部に向かって細くなる。細くなったところで欠損するが、装飾部があったものと思われる。現存長約7.0cm・頭部現存長約1.2cm・脚部長約5.8cmを測る。頭部幅約0.9cm・厚み約0.6cm・脚部の厚みは約0.3cmである。



第83図 石錐

### (3)石器類

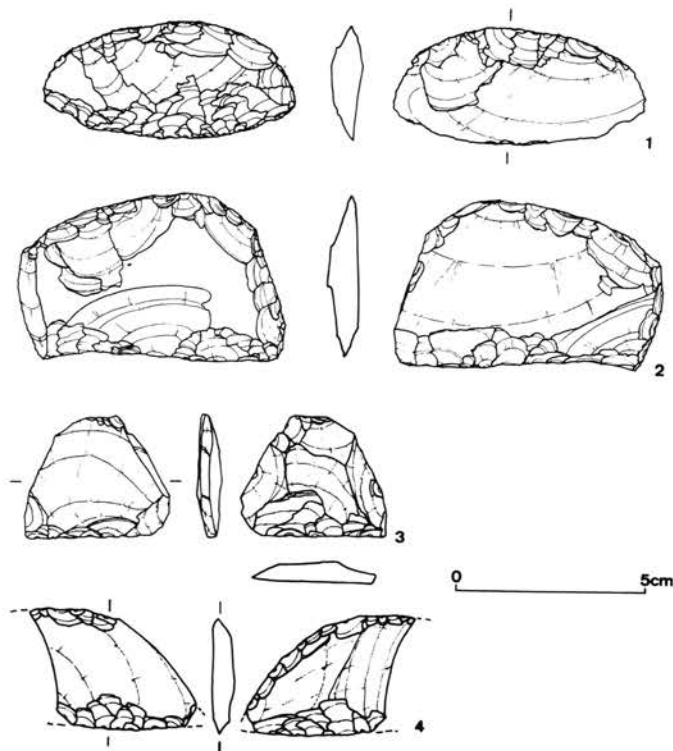
この遺跡から出土した石器類には、石鏃・石錐・削器・楔形石器及び剥片などの打製石器と、磨製石剣・磨製石鏃・太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧及びその転用石器などの磨製石器がある。他に砥石が少量出土している。

本節では、遺物の出土量が限られているため、出土地点・層位を問わず器種毎にまとめて説明することにしたい。なお、個々の出土地区・遺構・法量等は別表(附表5)に示した。

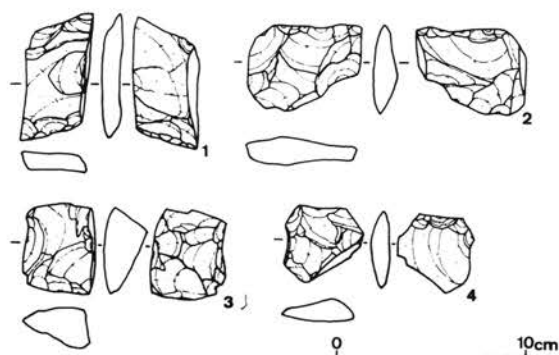
#### A. 打製石器

①打製石鏃(第82図1~18) 未製品・折損資料を合わせ18点を確認した。形態別にみると、平基無茎式1点(1)、凹基無茎式4点(2~5)、凸基無茎式10点〔このうち円基式5点(6~10)、尖基式5点(11~15)]、凸基有茎式1点である。17・18は未製品である。17は凸基無茎式だろう。凸基無茎式が53%を占める。石材はいずれもサヌカイトである。

石鏃の器面は、大半が2次加工痕で覆われているが、剥片生産段階で生じた主要剝離面を器体にとどめるものがある(1・7~10、12~14、16~17)。主要剝離面からみて、剥片素材の幅を石鏃の長さとして利用するものが



第84図 削器実測図



第85図 楔形石器実測図

多く、剥片の剥離方向と石鏃の主軸は斜行するものが多い。主要剥離痕は平基式と凸基無茎式の大半に認められる。このことは、両形式の素材の変形度の低さを示す。

12・16は、柳葉形を呈する大型の石鏃である。16は、唯一確認された凸基有茎式である。器体前面にいていねいな調整剥離が施されて

いる。刃部は鋸歯状である。

②石鏃(第83図) A地区のピットから出土したものである。長さ約3.5cm・幅約1.4cm・厚さ約0.6cmである。素材剥片のバルブ付近を涙滴形に加工して頭部とし、その先端を刃部としたもの。器体の両面に主要剥離面を大きく残している。調整剥離は刃部を中心に行い、頭頂部は未調整に近い。サヌカイト製である。

③削器(第84図) 4点を確認した。扁平な剥片を素材とし、長辺に調整剥離を加えて刃部を形成する石器である。いずれも器体に主要剥離面を残しており、バルブ付近の肉厚な部分を利用している。剥片素材をあまり変形させず、周縁の一部を調整することによって器体整形を行う点で共通している。

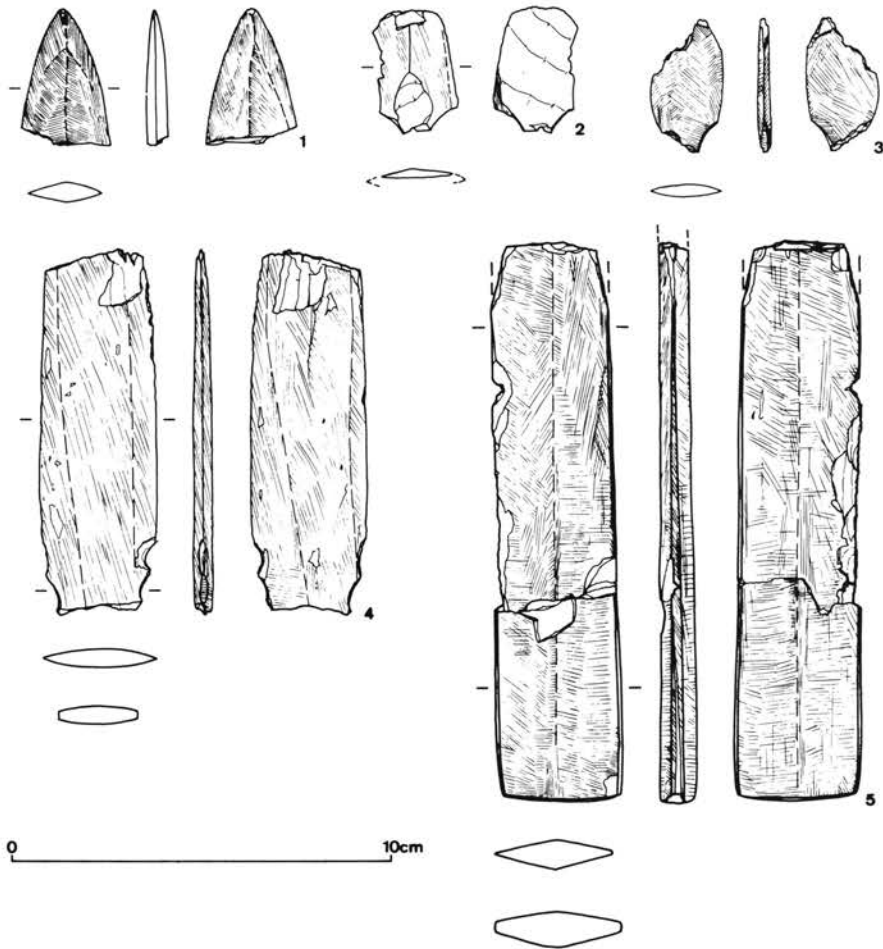
1は、杏仁形である。外湾する二つの長辺に対し調整剥離を加え刃部を形成する。調整剥離は片面側に集中し一部裏面に及ぶ。このため、刃部は薄くて鋭い片刃をなす。裏面には主要剥離面を大きく残し、未調整に近い。長さ約6.6cm・幅約3.1cm・最大厚約0.8cmを測る。2は、横長剥片を用いている。主に周縁を調整して器体を整え、上下二つの長辺を刃部とする。長さ約7.1cm・幅約4.3cm・厚さ約0.8cmを測る。3・4は器体半ばで折損する。

④楔形石器(第85図) 両極打法によって対向する2辺に階段状剥離を作る石器である。両側縁に折れ面をもつもの(1・2)と1辺にのみ折れ面をもつもの(4)とがある。1は安山岩、2~4はサヌカイトである。

## B. 磨製石器

①磨製石鏃(第86図3) S D03埋土から出土したものである。柳葉形で、茎がある。関は明瞭でなく、刃部から茎へと緩やかに移行する。石材は、やや風化した頁岩ないし粘板岩である。残存長約3.5cm・最大幅約1.8cmである。

②磨製石剣(第86図1・2・4・5) 4点を確認した。いずれも頁岩ないし粘板岩を素材とする鉄剣形石剣である。1は切先で、明瞭な鏑と鋭い刃部をもつ。残存長約3.6cmである。



第86図 磨製石器実測図  
1・2・4・5.鉄剣形磨製石剣 3.磨製石鏃

2は、切先付近の器体が剥落している。4は、断面形がレンズ状を呈し、器体は薄く鏃をもたない。基部付近に一對の抉りがある。抉りは研磨して作られており、弧状である。残存長約9.5cm・幅約3.2cm・厚さ約0.5cmである。風化が進んだ石材を用いており、調整も粗く粗製である。5は、基部と体部が折損した状態で出土した。切先を欠損するが残りがよく、ほぼ全形を知ることができる。鏃はしっかりと作られ、断面は菱形である。側縁には先端を除き面取りされている。残存長約14.6cm・最大幅約3.3cm・最大厚0.9cmを測る。

③磨製石斧(第87・88図) 磨製石斧類は、未製品及び転用石器を含め14点出土した。太型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状両刃石斧などがある。

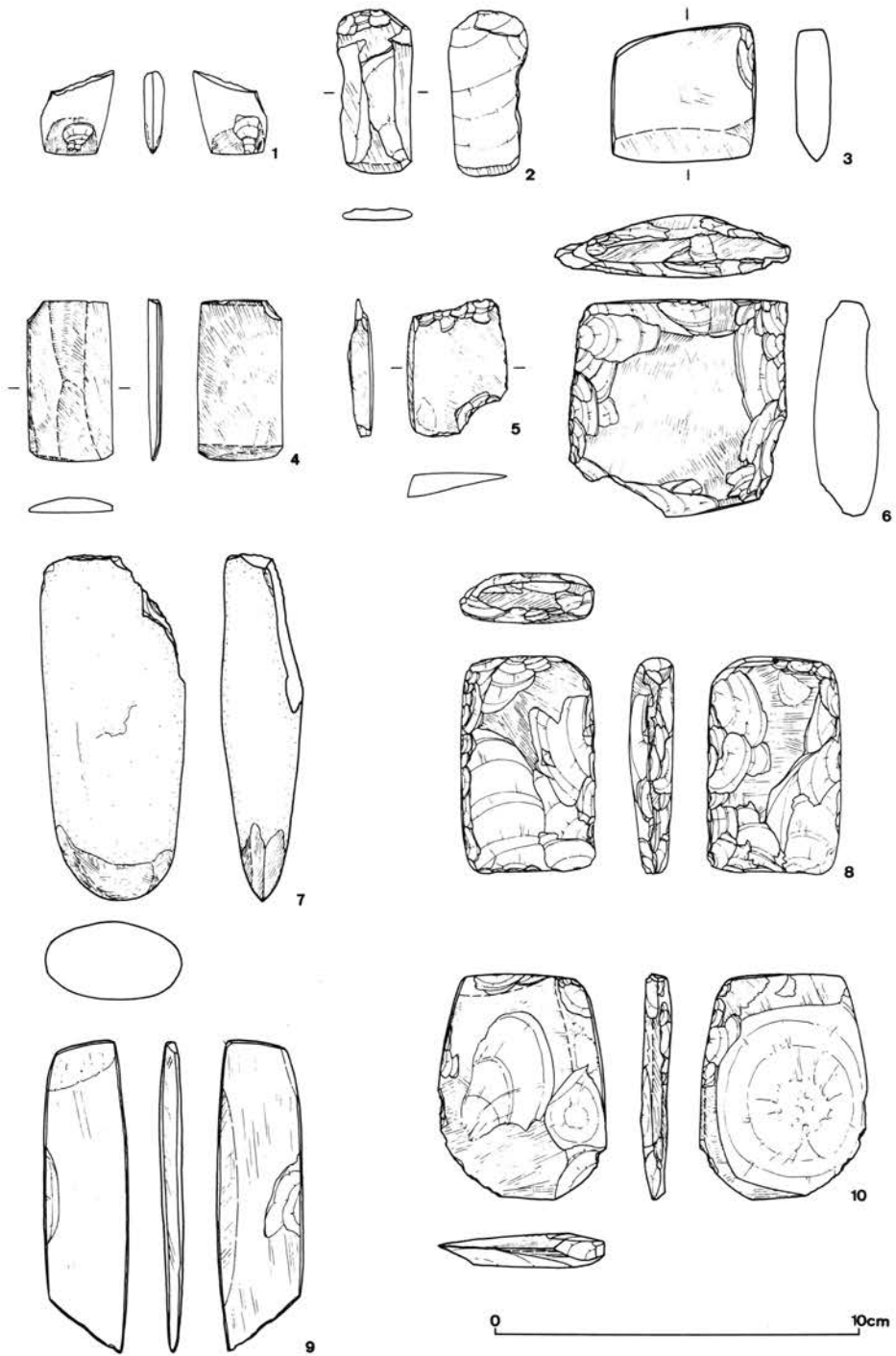


第87図 磨製石斧実測図(1)

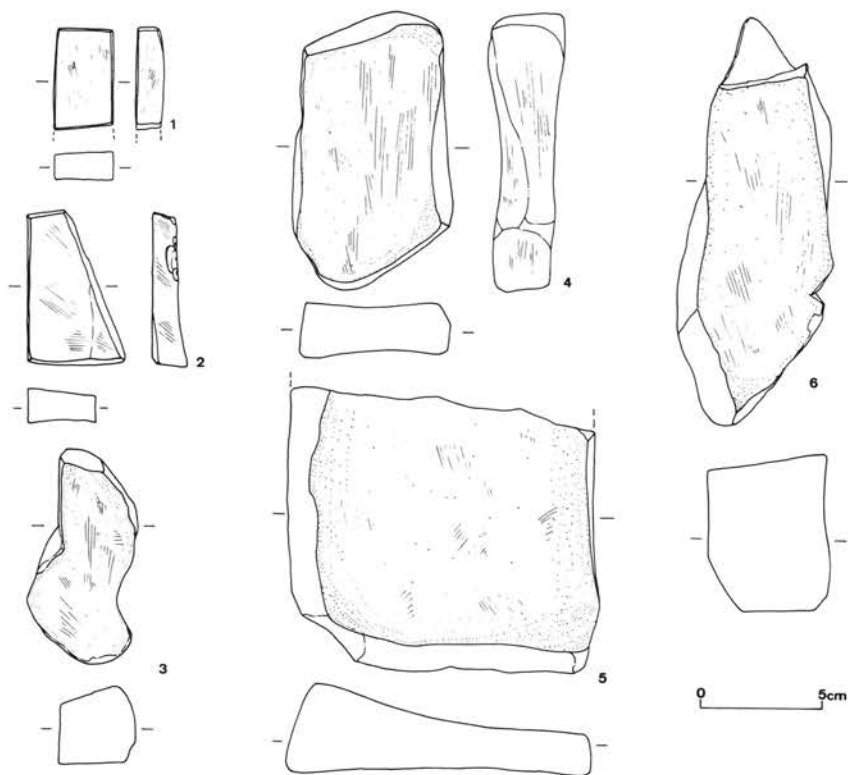
大型蛤刃石斧(第87図) 製品3点と未製品1点が出土した。1は、A調査地区の耕作土中で採取したものである。全長約14.8cm・最大幅約6.5cmを測る。2は、E調査地区S D01埋土より出土した。刃部に顕著な使用痕がある。3は、D調査地区S K06から出土した。側縁及び頭頂部に整形段階の剥離痕を残す。全長約10.4cm・最大幅約5.6cm・厚さ約3.1cmである。4は、自然礫の表面を敲打しあばた状に加工したものである。大型蛤刃石斧の未製品であろうか。いずれも砂岩製である。

扁平片刃石斧(第88図2・6・8・10) 7点出土した。2は、チャート製である。転礫の表層付近の縦長剝片を用い、一端を研磨して石斧としたものである。全長約4.6cmと小形で

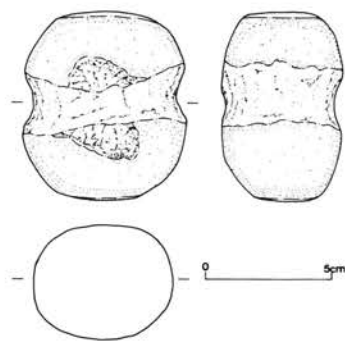




第88図 磨製石斧実測図(2)



第89図 砥石・石皿実測図



第90図 石錘

ある。3は、軟質の砂岩製である。長さ約3.8cm・幅約4.0cm・厚さ約1.0cmを測る。4は、黒色の硬質頁岩製である。短辺の一端を研磨して刃部を作る。両側縁は面取りされている。裏面は剝離痕があり、平坦に研磨されている。鉄剣形石剣等の折損品、あるいは未製品を転用したものだろう。0.4cmと薄い。5・6・10は破片、8は未製品であろう。

柱状両刃石斧(第88図1・7) 棒柱状の転礫の一端を研磨して両刃石斧としたもの。1は、刃部である。7は、頭頂部が折損している。1は、残存長約2.4cm・幅約2.0cm、7は、残存長約9.6cm・幅約3.8cm・厚さ約2.2cmを測る。

転用石器(第88図9) 上端と側縁に面をもつ。折損面と加担を研磨しているが、加工途中で放棄されている。柱状片刃石斧が縦方向に折損したものを転用しようとしたものだろう。長さ約8.7cm・幅約2.3cm・厚さ約0.6cmを測る。粘板岩製である。

砥石(第89図1~4・6) 5点出土した。小形で長方形のもの(1・2)と大形のもの(3・4・

付表5 石器量表

## 石鏃

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第82図1	A地区	包含層	2.1	1.2	0.3	0.9	サヌカイト	平基式
2	E地区	S D02下層	1.4	1.3	0.3	0.7	〃	凹基無茎式
3	〃	S D02中層	(2.8)	1.5	0.5	2.6	〃	〃
4	〃	S D02下層	3.3	1.5	0.4	1.4	〃	〃
5	〃	S D02中層	1.4	1.4	0.3	1	〃	〃
6	〃	S D01上層	(2.4)	1.3	0.4	1.7	〃	円基式
7	〃	S D02上層	2.8	1.6	0.4	1.5	〃	〃
8	〃	S D02上層	2.6	1.5	0.4	1.6	〃	〃
9	〃	S D02中層	3.2	1.6	0.4	1.9	〃	〃
10	A地区	包含層	3.3	2.8	0.4	1.8	〃	〃
11	E地区	S D02中層	2.2	1.6	0.4	1.2	〃	凸基無茎式
12	〃	S D02	(3.6)	1.4	0.5	2.5	〃	〃
13	〃	S D02上層	2.4	1.7	0.5	1.1	〃	〃
14	〃	S D02下層	1.7	1.7	0.6	2.4	〃	〃
15	〃	S D02中層	3.9	1.9	0.7	3.3	〃	〃
16	〃	S D02中層	5.2	1.4	0.8	5.2	〃	凸基有茎式
17	〃	S D02下層	3	1.8	0.5	2.2	〃	未製品
18	〃	S D01上層	3.3	2.5	0.6	5.2	〃	〃

## 石錐

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第83図	A地区	pit39	3.5	1.4	0.6	2.6	サヌカイト	

## 削器

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
第84図1	E地区	S D01下層	3.1	6.6	0.8	16.5	サヌカイト	刃部を主に一方の面から作出。
2	〃	S D01上層	4.3	7.1	0.8	33	〃	
3	〃	S D02上層	3.2	3.8	0.6	7	〃	
4	〃	S D02中層	(5.2)	3	0.3	7.8	〃	

## 楔形石器

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考
第85図1	E地区	S D02中層	3.9	1.7	0.5	安山岩	
2	〃	S D01下層	2.3	2.9	0.6	サヌカイト	
3	〃	S D01下層	2.3	1.9	1.2	〃	
4	〃	S D01下層	2	1.9	0.5	〃	

## 磨製石剣

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考
第86図1	E地区	S D02中層	(3.6)	2.4	0.6	粘板岩	先端のみ残存。
2	〃	S D01上層	(3.3)	(2.2)	(0.3)	〃	器表の一部のみ残存。
4	〃	S K03埋土	(9.5)	3.2	0.5	〃	先端、基部を欠損。
5	〃	S D02中層	(9.7)	3.2	0.9	〃	〃
6	〃	S D02中層	(5.8)	3.3	0.9	〃	基部のみ残存。

磨製石鏃

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考
第86図3	E地区	S D03上層	(3.5)	1.8	0.3	粘板岩	基部、先端を欠損。

磨製石斧

図番号	出土地点	出土層位	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	石材	備考
第88図1	E地区	SD02上層	(2.4)	2	0.5	粘板岩	
2	〃	SD01上層	4.6	2	0.4	チャート	自然礫(円礫)の剝片を利用。
3	〃	SD02上層	4.4	2.3	0.4	砂岩	
4	〃	SD02上層	(4.0)	(2.7)	(0.6)	粘板岩	転用石器。
5	〃	SD02中層	6	5.8	1.7	粘板岩	器体の一部のみ残存。
6	〃	SD02中層	9.6	3.8	2.2	粘板岩	未製品か。
7	E地区	SD02上層	5.8	3.8	1.2	砂岩	棒柱状の自然礫利用。
8	〃	SD02中層	8.7	2.3	0.6	粘板岩	未製品か。
9	E地区	SD01中層	6.3	4.6	0.7	粘板岩	転用石器。
10	〃	SD02中層	14.8	6.5	5	粘板岩	器表、刃部欠損
第87図1	A地区	包含層	13.8	5.6	4.8	砂岩	
2	E地区	SD01中層	10.4	5.6	3.1	砂岩	
3	D地区	SK06埋土	(11.3)	7.1	6.2	砂岩	
4	E地区	SD01上層	(12)	7.9	6	砂岩	未製品か。器表全面に敲打痕あり。

6)がある。1~4は、弥生時代中期土器と伴出している。6は、時期不明である。

石皿(第89図5) 長さ11.5cm以上・幅約12.5cmの砂岩製の石皿である。表裏に使用痕がある。

石錘(第90図) 砂岩の円礫の中央を敲打して抉ったものである。上下端部に研磨痕がある。タタキ石として利用したものだろうか。

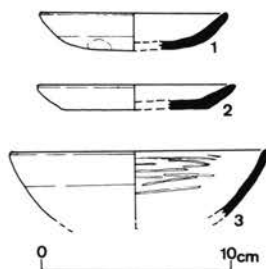
## (4)中世の遺物

中世の遺物は数少ない。遺構出土遺物について説明する。  
いずれもIV地区検出遺構出土遺物である。

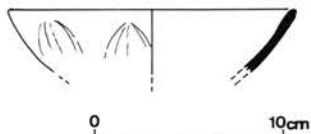
①掘立柱建物跡出土遺物 柱穴に伴う遺物は少なく、IV地区SB05・SB17で数点を検出したにすぎない。

SB05(第91図1~3) 土師器皿(1・2)と瓦器椀(3)が出土した。1は、口径約9.8cm・器高約1.8cmを測る。2は、底部が直線的であり、糸切り後にナデ調整を施したと思われる。

3の口径は細片であるため正確ではないが、おおむね14cmである。口縁外面に強いヨコナデ、器体内面に粗いヘラ磨きが施されている。外面下半は主としてナデ調整であるが、ごく一部にヘラ磨きがある。



第91図 SB05柱穴出土遺物

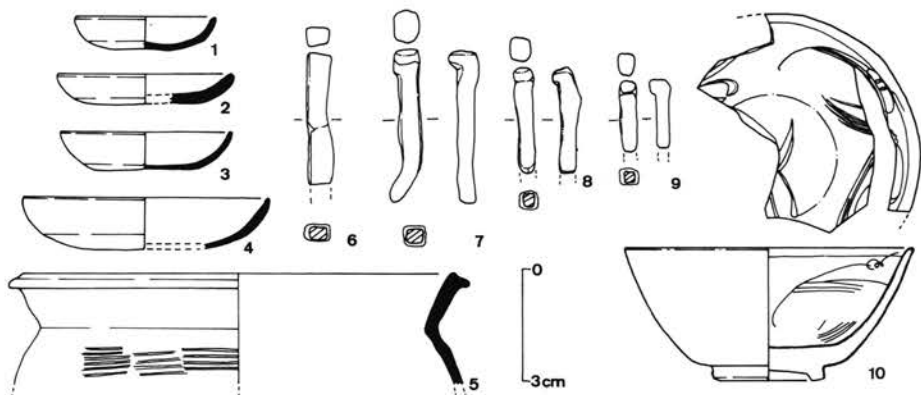


第92図 SB17柱穴出土遺物

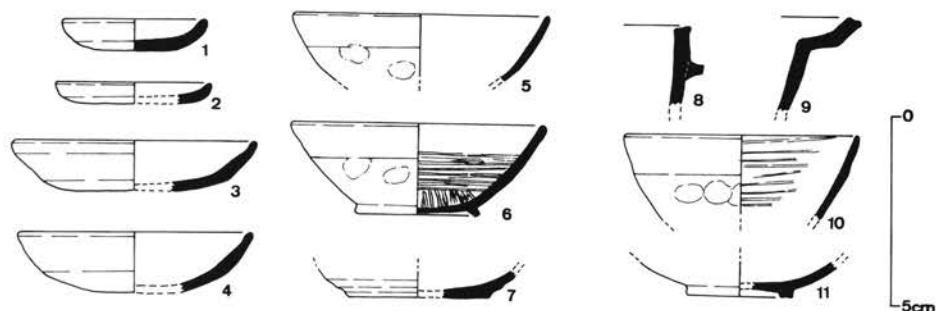
SB17(第92図) 青磁椀の口縁部破片が一点出土した。龍泉窯産であろう。蓮弁の幅が広く文様も形骸化している。

## ②土坑出土遺物

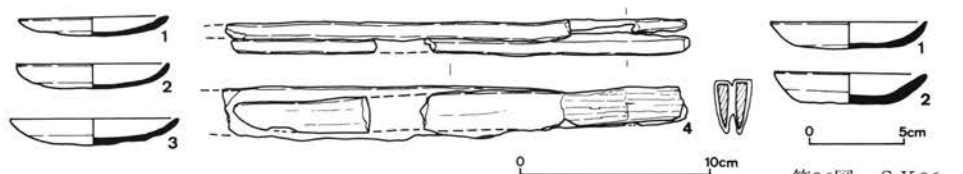
SK01(第93図1~10) 土坑底面で土師器皿1点(1・第24図P1)と鉄釘4点(6~9・第24図II~4)が出土した。埋土から、土師器皿(2~4)・土師器鍋(5)・青磁椀(10)・瓦器椀・瓦器鍋・須恵器甕などが出土したが、ほとんどは細片であった。1は、口径約7.6cm・器高約1.8cmである。5は口径約24.2cmで、外面に平行タタキ目がある。10は、口径約15.2cm、器高約7cmを測る。内面にヘラと櫛による施文がある。外面は無文である。



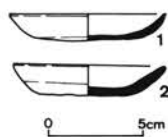
第93図 SK01出土遺物実測図



第94図 S K02出土土器実測図



第95図 S K03出土遺物実測図

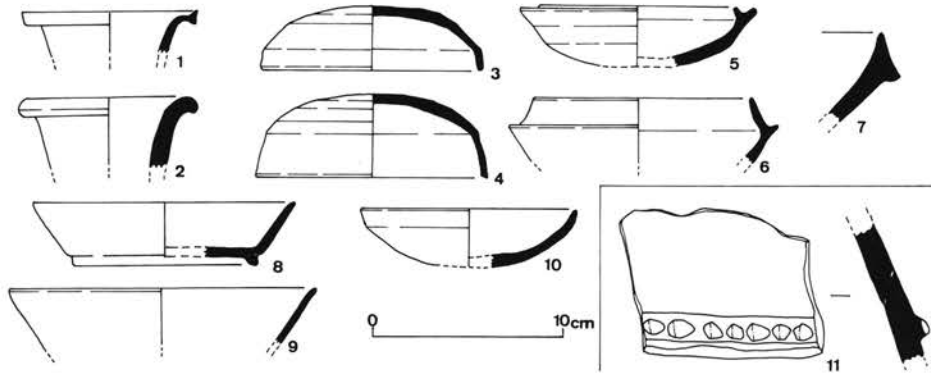


第96図 S K06  
出土遺物実測図

S K02(第94図1~11) 埋土から土師器皿・椀、瓦器椀・鍋・羽釜、須恵器甕などが出土したが、いずれも細片化していた。1~4は、土師器皿である。口径が8~9cm前後のもの(1・2)と13cm前後のもの(3・4)とがある。3は、2段ナデを施すタイプである。7は、土師器椀で、底部に糸切り痕、体部外面にロクロ成形痕を残す。5・6・10・11は、瓦器椀である。口縁部に強い横ナデのある丹波型である(5・6・10)。6は内面をていねいにヘラ磨きし、見込みに鋸歯状の暗文を施す。外面はナデのみでヘラ磨きはみられない。口径約13.6cm・器高約5cmを測る。8は羽釜、9は鍋で、いずれも瓦質である。

S K03(第95図1~5) 土坑底面から土師器皿3点(1~3)と鉄製短刀2点(3・4)が出土した。土師器は口径8~9cm前後のもので、2点が土坑の北隅に並べて置かれ、1点が鉄刀の上に置かれていた。鉄刀は2本が重ねられており、上のもの(b)がやや短い。aは先端が欠損しており、残存長約24.4cm・幅約2.4cmを測る。bは、器体半ばが欠損しているがほぼ完存していた。全長約24cmである。

S K06(第96図1・2) 土坑北東隅で土師器皿2点と漆皮膜(2か所)が出土した。これらは土坑掘形から5cmほど浮き上がった状態で検出されている。漆皮膜の一部が木棺痕跡と重なるが、出土位置からみて、木棺設置後、棺側に置かれたものと推察される。土師器の口径は、1が約8cm、2が約8.2cmである。漆皮膜は黒色で、一部に赤色の部分がみられた。漆塗り木製椀の痕跡と考えられる。



第97図 包含層出土遺物実測図

#### (5)包含層出土の遺物(第97図)

各地区の耕作土中からは、古墳時代の須恵器・土師器、奈良～平安時代の須恵器、鎌倉・室町時代の須恵器・土師器・瓦器・輸入陶磁器(白磁・青磁碗体部破片)などが出土しているが、いずれも細片化しており、数も少ない。その一部を図示した。

縄文時代の遺物(11) II地区S D02埋土から出土した。二条凸帯をもつ晩期の深鉢で、下段の凸帯の一部が遺存したものである。

古墳時代の遺物(3～6・10) 3・4は須恵器杯蓋、5・6は須恵器杯身である。4は6世紀前半(MT15)、6は中頃(TK10)、3・5は後半頃(TK209)のものである。10は、土師器杯身である。底部にヘラ削りがある。口径約11.6cm・器高約3cmを測る。

奈良～中世の遺物(8・9) 8は、8世紀後半頃の須恵器杯身、9は緑釉碗である。10世紀代のものである。4は須恵器摺り鉢の口縁部破片である。

#### 4. まとめ

今回の発掘調査では、縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代後期、奈良から鎌倉・室町時代にかけての遺物が採取され、興遺跡が長い時代にわたり断続的に形成された遺跡であることを確認した。また、弥生時代中期の溝と土坑群、鎌倉・室町時代を中心とする掘立柱建物跡・土壌墓などの遺構がまとめて確認され、当該遺跡の性格の一端を明らかにすることができた。以下、今回の調査で得られた成果と問題点を列記し、まとめとしたい。

##### (1)弥生時代の遺構・遺物

###### ①遺構について

弥生時代の遺構は、I・II・III・IV地区の各地区で検出しており、溝・土坑に伴って多くの遺物が出土した。遺物は、ほとんどが土器であり、他に少量の石器類と鉄鍬・簪各一点がある。土器はいずれも弥生時代中期後半(第IV様式)に属するものである。包含層から

も後期の土器は出土しておらず、第Ⅳ様式期に成立、そして廃絶した継続期間の短い集落遺跡であると考えられる。隣接地にある観音寺遺跡では、中期後半から後期・古墳時代前期にかけての遺物が断続的ながらも出土し、集落が継続的に営まれたようすがうかがわれるが、これとは対照的である。

遺構には、溝(Ⅱ地区S D01・02・03、Ⅳ地区S D01・03・04等)と土坑(Ⅰ地区・Ⅱ地区)、住居跡とみられる遺構(Ⅱ地区S H01)、掘立柱建物跡(Ⅱ地区S B01)などがある。

溝には、浅く小規模なもの(Ⅰ地区S D01、Ⅱ地区S D03、Ⅳ地区S D02・05等)と幅2～3mの規模の大きなもの(Ⅱ地区S D01・02、Ⅳ地区S D01・03・04)とがある。前者の埋土は、粘質の水流痕跡を示し、遺物も細片で摩滅したものが多く、流路とみられる。これに対して、後者の埋土は大きな単位で急速に埋没した様相を示し、一括投棄とみられる完形土器群を含んでいる。Ⅱ地区S D01・02、Ⅳ地区S D01・04は末端が浅くなって途切れており、空堀であった可能性がある。

Ⅱ地区S D01・02、Ⅳ地区S D01・03・04の位置関係を確認しておきたい。Ⅱ地区S D01・02、Ⅳ地区S D01・04は自然堤防状の微高地の縁辺に沿うように弧状に配置されており、Ⅱ・Ⅳ地区の中間にあたるⅢ地区第14トレンチでも立会調査で南北に走る弥生時代の幅約2.5mの溝が確認されている。これら3地点で検出された溝は相互に連結するかどうかは明らかでないが、微高地の西を限る目的で設置されたものとみてよいであろう。Ⅳ地区S D03は、S D01・04に直交して配置されていることから南を限る区画溝と考えたい。

土坑群は、Ⅰ地区とⅡ地区北辺に集中して分布する。この地点は、Ⅱ地区微高地の北西端にあたり、緩やかな傾斜面をなす部分である。土坑の平面形態はさまざまであるが、概して不定型であり底面が船底状のものが多い。すべてが同一の性格であるとはいえないが、Ⅰ地区S K03の埋土から高等動物由来のステロールが高い値で検出されていること、Ⅰ地区S K09で副葬とみられる木製簪が出土していること、Ⅱ地区S K33で高杯と壺が合せ口で出土しており壺棺とみられることなどから、多くは木棺を用いない人体埋葬遺構(墓塚)であると考えられる<sup>(注8)</sup>。近接地では、亀岡市太田遺跡(第Ⅰ・Ⅱ様式)、綾部市青野遺跡(第Ⅲ・Ⅳ様式)、舞鶴市志高遺跡(第Ⅲ・Ⅳ様式)、亀岡市千代川遺跡(第Ⅴ様式)、京北町上中遺跡(庄内併行期)、綾部市三宅遺跡(庄内併行期)などに類例がある。太田遺跡では環濠集落の縁辺部、志高遺跡は方形周溝墓群に隣接して確認されている。これらは、同時期の住居跡などの生活関連遺構と重複することなく一定のまとまりをもって分布する点で共通しており、居住区との位置関係において計画性が認められる。

以上のことから、Ⅱ地区S D01・02、Ⅳ地区S D01・03・04は集落を囲む環濠の一部であり、その北辺に位置する土坑群は墓域であると考えられる。今回の調査地は環濠集落の



西端にあたると思われ、したがって居住域は未調査地区であるⅢ地区とその東に展開するものと予想される。

## ②遺物について

溝・土坑に伴って弥生時代中期後半期の土器(第Ⅳ様式)が多数出土したが、これらは完形品も多く充実した内容となっている。特に、Ⅱ地区S D01・02中・下層資料は一括性に恵まれ、基準資料としての条件を備えている。

この遺跡の第Ⅳ様式土器は大きく二時期に分けることができる。ひとつは凹線文B種が広口系の壺・直口壺・無頸壺・鉢・高杯などに広く採用される段階(Ⅱ地区S D01・02中・下層出土資料、Ⅳ地区S D01・03・04出土資料)、もうひとつは凹線文の衰退が著しく高杯・鉢などの供献形態が小形化・多様化する段階(Ⅱ地区S D03・S X01・S K19出土資料)である。前者は志高遺跡<sup>(注9)</sup>編年の「志高弥生Ⅴ期」(S H86203・S H85205・S H85207・S H85208・S K85201)、後者は「志高弥生Ⅵ期」(S H86201・B地区1号墓)にほぼ相当している。

由良川中流域にあたる福知山盆地では、これまで綾部市青野遺跡、福知山市ケシケ谷遺跡・奥谷西遺跡・観音寺遺跡・石本遺跡など当該時期の遺跡がいくつか調査されているが、いずれも遺物の出土量が限られており器種構成や変遷を明らかにするには至っていない。今回の調査で得られた土器群は、当該地域の弥生時代中期後半期の土器様相を明らかにする上で貴重な事例と言える。

特殊な遺物として分銅形土製品がある。分銅形土製品は、Ⅱ地区S D01の底から折損した状態で完形土器群とともに出土している。溝開掘後間もなくこれらの土器とともに破碎・投棄されたようすをうかがうことができる。分銅形土製品をめぐっては、再生と豊饒を象徴する「人形」説や「仮面」説など複数の説が出されているが、非日常的な場において用いられた祭祀性の強い遺物であるという点で見解が一致している<sup>(注10)</sup>。本例も環濠の開掘あるいは収穫祭などに伴う儀礼的行為の場で破碎・投棄されたのであろう。分銅形土製品は京都府内では熊野郡久美浜町橋爪遺跡<sup>(注11)</sup>、福知山市ケシケ谷遺跡<sup>(注12)</sup>に出土例があり、合わせて3例となった。

## (2)弥生時代の遺跡周辺の環境

この遺跡の弥生時代中期の環境を明らかにする目的で、Ⅱ地区S D01・02埋土資料を用いて花粉分析を行った。分析は、S D01中・下層採取資料各2点、S D01上・中・下層採取資料各1点ずつの計7点を対象とし、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

古植生については、花粉化石の破損・溶解が著しく良好な結果は得られずに残念な結果

に終わったが、植物珪酸体分析では全資料でイネ科葉部起源の植物珪酸体が検出され、次のような結論が得られている。

① S D 01・02の各溝で各層が堆積した当時の溝周辺ではタケ亜科、イネ族、キビ族、ヨシ族、ウシクサ族などのイネ科植物が生育していたと考えられ、溝周辺は比較的開けた場所であった。

② 量比の差はあるがどの資料からもイネ族が検出されており、溝内に稲あるいは稲作耕土が混入していたと考えられる。特に、S D 01中層及びS D 02上層・下層ではイネ族類珪酸体で構成される組織片が多数検出され、稲稈が大量に埋積していたと推定される。

以上のことから、弥生時代中期の遺跡周辺には水田が広がっており、マコモ族・ヨシ族などもみられる湿潤な環境であったと考えられる。人々は水稲耕作を生活基盤とし、集落は明るく開けており、集落の周りには笹などが生い茂っていたのであろう。

### (3)中世の遺構について

第Ⅳ地区では、中世の掘立柱建物跡や土坑・柱穴を多数検出した。これらのほとんどは遺物を伴っておらず、時期を明らかにできるものは少ない。S B 05・17、S K 01・02からは12～13世紀代の土器が少量出土しており、鎌倉時代に属する。遺構の多くはこの時代のものであろう。興遺跡の南西には中世に栄えた補陀落山観音寺がある。寺に伝えられた文書から、遺跡周辺は鎌倉時代には八条院領の六人部新荘であったことがわかっている。今回検出した中世の遺構群は密度が高く、六人部新荘の在地領主層の居宅の一部かもしれない。

なお、この地は南北朝頃からは天龍寺領となった。

## 5. 興遺跡出土弥生土器に関する考察

### (1)興遺跡出土の弥生土器について

Ⅱ地区からは、弥生時代中期(第Ⅳ様式)土器が数多く出土した。溝出土土器を中心に観察所見を記し、この遺跡の第Ⅳ様式土器について考えてみたい。

#### ①器種構成

出土遺構が溝ということもあって、器種に偏りがあり、全器種の構成比は明らかでない。一括性の高いS D 01・02中下層資料のなかで比較的数の多い壺と甕について記す。

壺は広口壺・無頸壺が多く、受け口壺、直口壺(直口短頸壺)などは少ない。広口壺はA・B・Cが構成主体となるようである。その他は細片が数点みられただけである。A・B・Cの比をS D 01・02中下層資料でみると、S D 01ではA 60%：B 30%：C 10%、S D 02ではA 60%：B 34%：C 6%であり、おおむね6：3：1である。第Ⅳ様式新相のS D 03で

は広口壺Cはみられなかった。

甕は出土数が多い。A・Bが主体となり、Cは散発的である。A・Bの比をSD01・02中下層資料でみると、SD01ではA83%：B17%、SD02ではA77%：B23%であり、おおむね4：1である。甕Aは第Ⅲ様式から存続する在地型の甕であり、甕Bは瀬戸内系の外来系甕で第Ⅲ様式には少ない。この数字は、第Ⅳ様式に瀬戸内系甕が在地型式として一定の地位を占めるに至ったことを示すものと思われる。

## ②文様

凹線文、櫛描き文、凸帯文(断面三角形凸帯文・指頭圧痕凸帯文・キザミ目凸帯文)、円形浮文、棒状浮文、キザミ目文などがある。これらの文様は、壺の口縁部・頸部・体部上半に多くみられ、その他の器種に施される文様は凹線文に限られている。文様は凹線文が主体であるが、櫛描き文の占める割合が高い。

凹線文には、A種、B種、C種がある。A種は浅くて狭い凹線文で、壺・甕の口縁部端面、高杯脚端部などの狭い部位に少条施される。この遺跡のA種には、1条ずつ施文したとみられるもの(A1)、板状の工具を用いて一括施文したとみられるもの(A2)とがある。A1は広口壺C(SD02・第48図48)に、A2は広口壺A4(SD01・第34図49)にみられる。B種は幅が太い凹線文で、壺頸部・直口壺口頸部・無頸壺口縁部などに数条施される。C種は、高杯や壺口縁部などの幅の広い部分に数少なく施したものである。高杯脚柱部に回転施文による沈線文が多くみられるが、これらは凹線文を意識したものと思われる。

また、甕A1とBには、口縁端部の3～4か所に3～5個単位の部分的な押圧ないしキザミ目を施すものがある(第42図93)。

櫛描き文には、A種とB種がある。<sup>(注13)</sup>A種には直線文・波状文、B種には列点文・斜格文・扇形文などがある。櫛描き文の施文原体にはI種(木竹などの先端を細く割ったもの)、II種(植物の枝茎を束ねたもの)とがあり、I種の使用頻度が高い。II種には先端が割れた藁状のものを何本か束ねたもの(A)、先端が丸い棒状のものを束ねたとみられるもの(B)、管状のものを束ねたもの(C)などがある。Cは分銅形土製品に一例認められるだけである。

## ③製作技術

胎土 胎土に含まれる砂粒には、長石・石英・雲母などの鉱物と、チャート・砂岩・粘板岩などの岩石があり、垂円～円礫化したものが主体をなす。長石は風化が進み軟化・赤色化しており、雲母は微量である。このような砂粒のあり方は由良川氾濫原に特有のものであり、集落周辺で採土された可能性が高いことを示している。

胎土は、密なものと同微細砂の混入が多く粗いものがある。壺・高杯・鉢は密なものが

多く、砂粒も径1～2mmと均質である。甕には微細砂の混入が多く粗いものが多い(A1)が、甕B・Cなどは壺の胎土に近い。土器の使用目的によって胎土の使い分けがあったようである。砂粒構成・素地を異にするものが二三認められるが、これらは搬入品と思われる。

**器体の成形** 成形は、粘土紐を帯状にしたものを、指先・掌で接着しながら積み上げていく方法が主な手法であると考えられるが、調整して粘土紐接合痕を消すものが多く、その方法ははっきりと確認できない。Ⅱ地区S D01出土の壺(第30図13)に接合痕が観察できるものがある。この例では、体部内面上・下位では2cm前後、中位で4～5cmごとにやや幅広の接合痕が明瞭に認められる。中位の幅広の部分には中程にかすかに接合痕があり、粘土帯の最小単位は2cm前後である。粘土紐を器壁の厚さに近づくよう延圧して幅2cm前後の帯にしたものを順に積み上げているようだ。体部中位では2単位の粘土紐をあらかじめ密着させ、それを積み上げたようだ。接合痕は水平であり巻き上げたようすはみられないから、この固体は粘土帯を輪積みして成形したとみることができる。

肩部内面や体部下半に粘土帯接合痕をとどめるものがいくつかある。これらの断面には内傾する接合痕が観察される。しかし、多くの場合、器体の断面に接合痕をみつけることはむずかしい。

興遺跡ではタタキ目があまりみられないが、S D01出土壺の中にはタタキ目をハケ調整でていねいに消しているものがあり(S D01・第39図82)、タタキ成形手法が盛んに用いられていた可能性も否定できない。

**タタキ目** 平行タタキ目が壺・甕の一部に認められるが、数は非常に少ない。タタキ目は、ナデやヘラ磨き調整で消されており、明瞭に観察できるものは少ない。甕ではヘラ削り同様、甕B・Cと結びつく傾向にあり、A1にはみられない。

由良川流域でタタキ目が多くみられるようになるのは後期終末頃からであり(綾部市青野遺跡・小西町田遺跡)、第Ⅳ様式の早い段階で盛行する口丹波地域(亀岡市千代川遺跡)とは対照的である。

**指頭圧痕** 壺・甕体部内面や底部内面に認められる。体部内面の粘土紐接合痕に沿って認められるが、その後の調整で消されることが多い。甕の底部内面に多い。体部外面に痕跡を残すものはほとんどない。壺頸部の凸帯に施すものがある。

**ハケ目** 直線的に加工した薄い板を用いるもの(A)と植物の茎を束ねたようなもの(B)とがある。Aには、キザミを入れたもの、自然の柾目の凹凸をそのまま利用したとみられるものなどがあり、ハケの一単位が幅広のもの、細かいもの、浅いもの、深いものなど各種認められる。粗いハケ目の上に細かいハケ目が重なることが多い。Bは一見ナデ調整に

見えるが、不規則な平行条線が一定の単位で認められ、ナデ調整と区別できる。Bは甕や壺体部下半にみられ、稀にヘラ削り後に施されるものがある。

**横ナデ** 回転運動を利用したナデで、口縁部や頸部に多用され、壺の底部周辺にもみられる。壺・甕体内・外面には回転運動を用いない不定方向のナデが多くみられる。

**ヘラ削り** 壺の体部内外面下半、甕内面、高杯の杯部外面と脚部内面にみられる。脚部内面以外は、後にヘラ磨きやナデ調整で消されるものが多い。

広口壺Aは、体部外面下半に、広口壺Cでは内面下半にヘラ削りするものが多く、内外面ともに削るものはない。器形により調整部位を異にする点が注意される。甕についてみると、甕B・Cに比較的多く認められるが、この遺跡の主体となる甕A1では削るものはあまりない。甕A1の外面下半には、ヘラ削りによく似た粗いヘラ磨き状の調整痕を残すものが多く認められるが、これは逆に甕B・Cにはない。舞鶴市志高遺跡でも同様である。

**ヘラ磨き** ヘラ磨きは、壺・高杯・鉢の最終調整として多用されている。甕の体部外面下半に施す場合もある。広口壺の体部のヘラ磨きは、縦方向に施した後、体部中位に横方向に施すのを原則とするが、横方向の磨きを優先する固体も見られる。

広口壺・甕の体部下半には、板状の原体で搔き削るようにして施した光沢のない磨きが比較的多くみられる。これらは、ヘラ削りにも見えるが器壁を減ずるほどの効果はなく、3~5mmの幅で整然と施される点でヘラ削りとは区別される。綾部市青野遺跡・福知山市石本遺跡・舞鶴市志高遺跡などにもみられる。

**スリップ** 土器の表面をきめ細かい泥状の素地で覆ったとみられるものが、高杯や鉢・壺のいくつかに認められる。また、高杯と鉢に赤色顔料をまぜたスリップ(ウオッシュ)が施されているものがある(第32図32・第77図9)。

**高杯の成形手法** 高杯の成形は、脚台部と杯部を連続して整形し、円板を充填して仕上げる連続成形手法である。脚柱部内面に成形時に生じた絞り目が残る。杯部と脚部外面をヘラ磨き、脚部内面をヘラ削りして仕上げる。杯部外面のヘラ磨きに先立ってヘラ削りを施すものが多い。

**壺・甕底部の成形手法** 壺・甕の底部断面を観察すると、底部壁に外傾あるいは直立する接合痕を持つものを数多く認めることができる。この接合痕に沿って割れた固体がいくつか見られるが、その内のいくつかは擬口縁状を呈している(第98図)。このことは、底部壁を最初に成形し、後に底面が作られたことを示している。底部内面には指頭圧痕が顕著に見られることから、底面の成形は器体の内側から行われていることがわかる。この接合痕を持つ底部は、高杯の内底面成形と同様、粘土板を充填・押圧して作られたものと思われる。粘土板側縁から器壁を積み上げる手法のものはみられず、底部の成形は主に、底部

壁の成形→粘土板の充填という成形手法(底部充填法)<sup>(注14)</sup>が用いられたと推測される。

(田代 弘)

## (2)壺・甕底部の製作手法について

深澤氏は、奈良県と大阪府中部の弥生土器について擬口縁とその剥離面を詳細に観察し、土器製作手法とその時間的推移を明らかにした。そのなかで、平底の底部成形手法が「畿内第Ⅰ様式から第Ⅳ様式にかけて、畿内第Ⅱ・第Ⅲ様式を転換期にして、底部側縁積上法→底部上面充填法→底部充填法」と推移する事実を指摘している。<sup>(注15)</sup>

ここでは、深澤氏の論考を踏まえ、Ⅱ地区溝出土の壺・甕底部の断面観察結果について記し、興遺跡出土の第Ⅳ様式の底部製作手法について考えてみることにしたい。<sup>(注16)</sup>

### A. 底部の観察

#### ①断面

Ⅱ地区S D01・02・03から出土した壺・甕底部の数は表のとおりである。このうち、一括性の高いS D01・02中・下層資料を中心に観察した。断面観察が可能なものが約60点あり、器壁断面に接合痕を明瞭にとどめるものが約30点あった。主なものを第98図に掲げた。

接合痕はいずれも器壁に沿って上方へ向かい、薄くなって終わる。器壁底付近の形状から大きく3種に分けることができる。

I種 器壁の厚さがあまり変わらずに底部に至るもの(2・5・7)。

Ⅱ種 底面にむかってせりだすようにして器壁が厚さを増すもの(9・13・20)。

Ⅲ種 底面にむかってせりだすようにして器壁が厚さを増す点ではⅡと同じだが、ゆるやかに底面全体を覆うようにせりだすもの(1・8・14~16)。

内底面は、ハケやヘラ削りなどの調整により、第99図-5・10・14のように変化していると思われる。特にI種は変化が大きいようだ。6は、一見すると帰属不明であるが、I種が内面調整により、第99図-14のように変化したものと理解できる。

付表6 壺・甕底部集計表

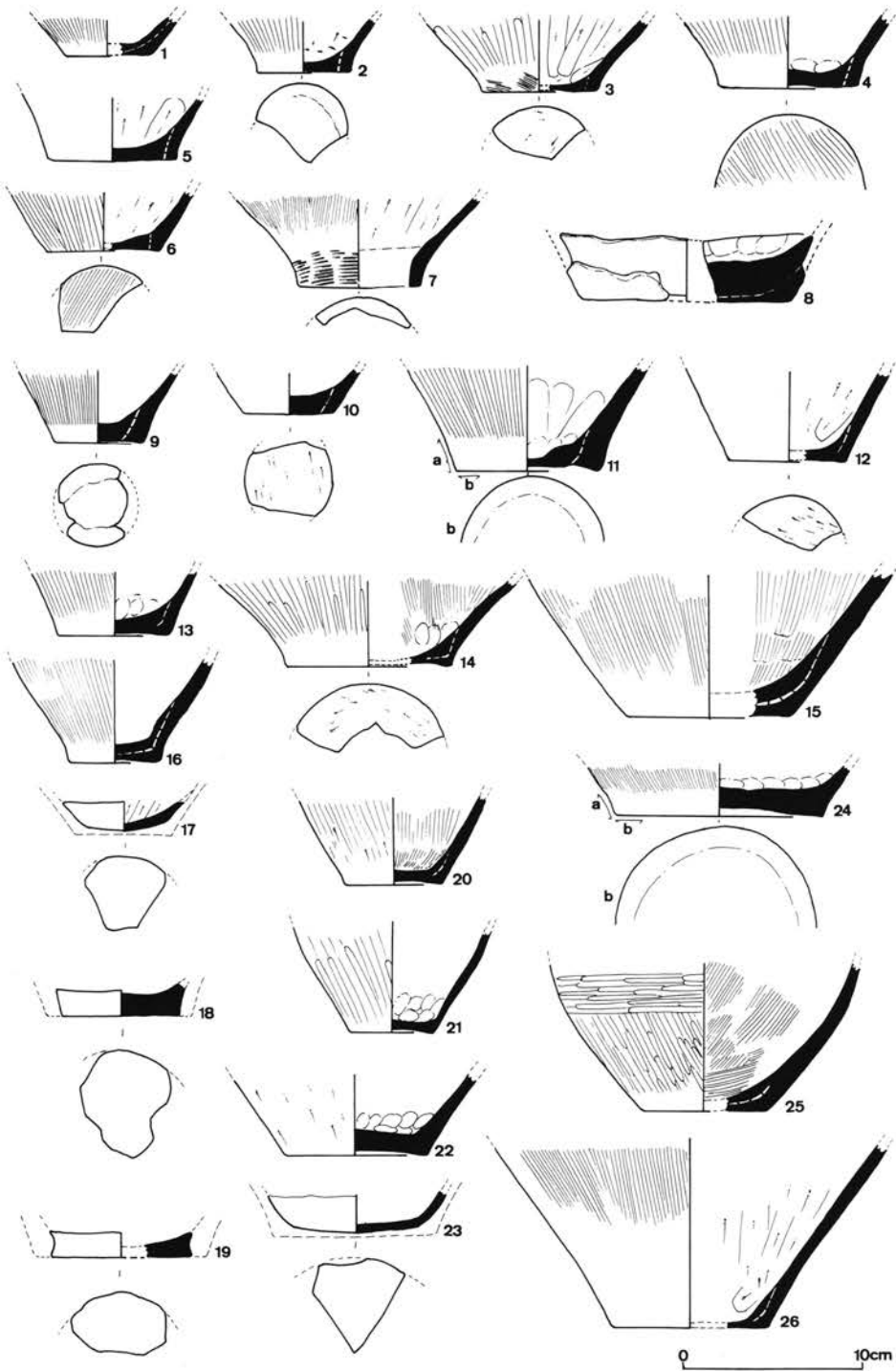
遺構	器種	上層	中層	下層	計
S D01	壺	28	10	8	46
	甕	52	33	14	99
S D02	壺	34	27	76	137
	甕	58	45	157	260
S D03	壺			10	10
	甕			23	23

各種の量比は、接合痕の観察可能な固体が20個前後と限られているため明らかでない。Ⅲ種は8・15・16など、大形の壺底部に多いようである。

粘土板の側縁、あるいは上縁に粘土を積み上げる手法(側縁積上法・上縁積上法)は認められない。

#### ②内底面

内底面には整形時の指頭圧痕を留めるものが多



第98図 溝出土底部実測図

数みられる。指頭圧は底面に対して垂直方向に加える場合が多く、器壁との境界にはしばしば爪痕(2・13)が残っている。また、壁面接合痕の上端に対応する位置に横方向の指頭圧痕を残すもの(8・15)や、これを消すように底面から器壁上方へ粘土を引き上げるような強いナデを施したもの(11)がある。指頭圧痕はⅠ・Ⅱ・Ⅲ種ともに共通してみられ、内底面押圧が底部成形に際して主要な手法であることが推察される。

8は、高杯に見られる円盤充填法と同じ手法で成形されており、内底面及び器壁との接合部境界に指頭圧痕を顕著に留めている。内底面に残る指頭圧痕はこのような底部円盤充填法と密接な関連があると考えられる。以下の資料はこれを裏付けるものである。

7は、底部が脱落した器体の一部である。底部が器壁に沿って脱落しており、器底部が擬口縁状を呈している。17・18・19・23は、器体から脱落した底部破片である。18・19は、円盤状で内面と外面にナデ調整がある。側縁は斜め上方へ向かう剝離面がある。17・18は、内底面である。17は、断面形が円盤状で、内面にヘラ削りがある。外面は平滑な剝離痕が認められる。23は内面にハケ後、ナデ調整である。外面は17と同じく剝離面がある。

18・19はⅠ種、17・23はⅢ種に属するものであろう。

### ③外底面

外底面は、ナデ(1・2・6・9・11)・ハケ目(3・5・6)などでていねいに調整される。ナデの下にヘラ削り痕跡をとどめるもの(4・10・12・15)がある。ナデはほとんどの場合、不定方向であるが、周縁に沿ってていねいに施されているものが2点あった(11-b・24-b)。不定方向のナデの後で最終調整として施されたようである。底部外面のナデ(a)と対応しているように見える。<sup>(註17)</sup>

また、接合面に沿ってヒビの生じたものが見られる(3・9)。7は接合部分で割れ、内底面が脱落したものである。Ⅰ種では器壁に沿って規則的に割れ(2・7)、Ⅱ種では不規則な楕円形(9)に割れる傾向があるようである。

以上の観察結果は次のようにまとめることができる。

①底部接合痕跡はいくつかの種類がみられるが、内底面押圧を主要な成形手法とする点で共通する。

②断面や剝離痕の観察によれば、器体内側から粘土板を充填した痕跡が認められ、内底面の押圧はこれに伴う成形痕と考えられる。

これらのことから、観察対象とした土器底部の主な製作手法は器壁製作→粘土盤充填という手法、すなわち「底部充填法」によるものであるということが出来る。

## B. 接合痕について

上で見た底部製作手法と接合痕の関係を確かめる目的で、簡単な製作実験を行ったので



参考までに記しておく。粘土は、興遺跡隣接地から採取したものに若干の砂粒・炭を混入したものを用いた。第99図は、その結果の概念図である。

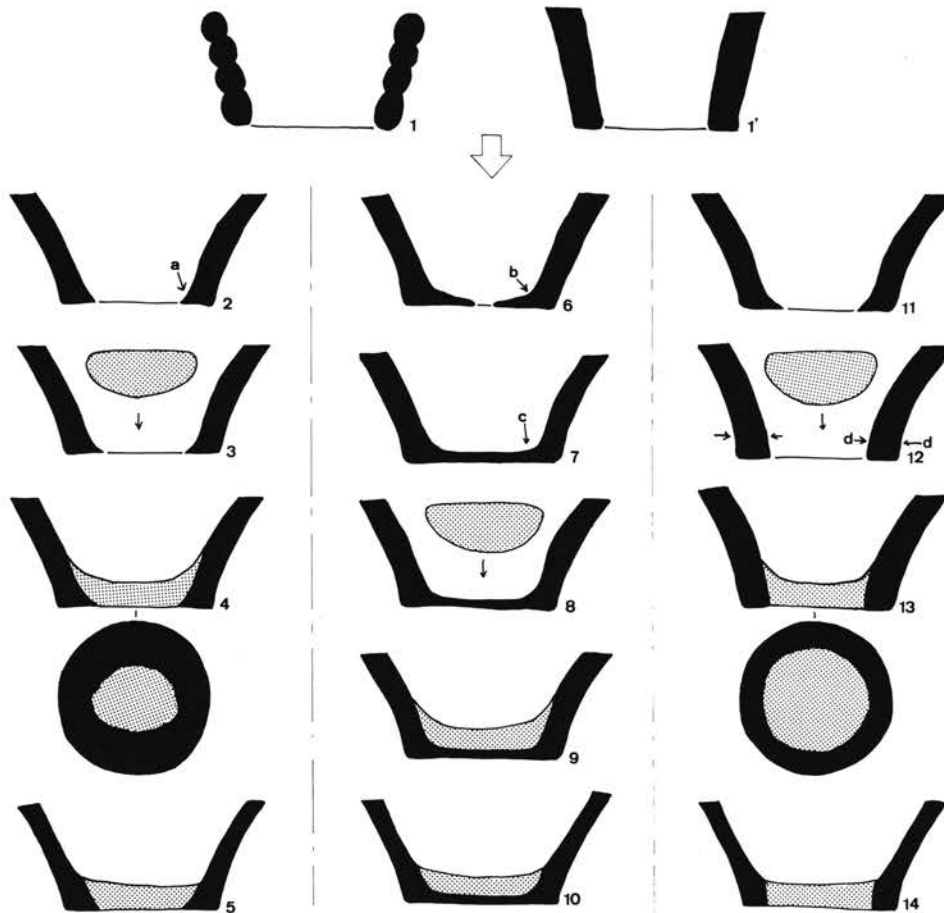
ア；器壁作り ①平らな場所で、粘土紐を輪積みする(1)。あるいは輪積みにしたものを巻いて器壁を作る(1)。

②安定させるために器壁底を整える(2・6・7・11)。

イ；底部に粘土塊を充填する(3・8・12)。

ウ；内外面調整(ハケ・ナデ・ヘラ削り)する(5・10・14)。

アー①ないし②の工程では、器体の自重や器壁成形のため作業台に対して垂直方向の力がかかる。特に、②の工程では壁面基底を安定させる必要上、aの部分を押圧することになり、内側にややせりだす。その結果、2のようになる。底部を平坦な台の上で作業を進めるかぎり、いくつ作っても同様の結果になる。これに粘土塊を内面側から充填した結果



第99図 底部充填手法各種

が4である。これに内面調整(接合面を密着させるための指押さえ、上方への強い指ナデ、ヘラ削りなど)を施すと5ようになる。底面外面の接合痕はやや中心よりに不規則な楕円形として現われる。

安定度を高めるためさらに押圧すると、aが内側へ延びてカーブも大きくなり6-bになり、底部中央に引き出すように強くナデると7-cになる。7に粘土盤を充填したものが9である。

この結果を出土土器と比べると、4・5がⅡ種に、9・10がⅢ種に対応すると思われ、Ⅱ種とⅢ種は近い関係にある。

以上は、器壁をある程度の高さまで作り、外面調整後に円盤を充填した結果であるが、この方法ではⅠ種はできなかった。Ⅰ種を作るためには②工程後、器壁底を器壁に対して垂直に押圧(12-d)する必要がある。また、粘土盤を充填するまでにある程度の乾燥が必要であった。器壁が軟らかいうちに充填すると内底面押圧の影響を受け、4に近い形態になった。したがって、Ⅰ種は、器壁製作→器底調整・半乾燥→粘土盤充填という工程が考えられる。この方法で作ったのが13である。この場合、底部外面には円形の整然とした接合痕ができる。<sup>(注18)</sup>

Ⅰ種の典型的な第98図の7の底部外面にはタタキ目がみられる。Ⅰ種はタタキ成形技法と関係するのかもしれない。

このようにみると、先に確認した底部接合痕のバリエーションは、粘土盤充填に先立つ器壁底の処理法の違いを反映したものと考えられる。

以上、土器底部観察結果と製作実験の概略を記し、興遺跡出土の第Ⅳ様式土器底部の成形が主に器壁整形後に粘土盤を充填する手法—底部充填法—によるものであることを確認した。

観察対象が少ない上に、非破壊・肉眼観察に基づいたものであるので主観的な内容になった。また、製作実験も器壁と粘土盤の関係をみるためだけの簡単なものであり、胎土・器壁成形手法の吟味、調整のタイミングや器面乾燥の状態など土器作りにとって必要な要件を十分に検討せずに行っており、不備の誹りをまぬがれない。土器を切断し顕微鏡観察などを試みれば明確なデータが得られ、別の接合方法も確認されることと思う。

弥生土器は数多くの出土資料があるにもかかわらず土器底部製作手法についてあまり検討されていないのが実情である。深澤氏が指摘するように、底部成形は器体成形と大きく関わりを持つものであるから土器成形技法を論ずる際、その観察を欠くことはできない。それぞれの遺跡・地域で検討していく必要がある。

(田代 弘)

### (3)由良川流域の弥生時代中期土器について

#### ①はじめに

由良川流域の弥生土器研究は、資料が少なくこれまで散発的に出土した固体資料を型式学的に組列する作業が中心となっていた。近年、舞鶴市志高遺跡(第Ⅰ～Ⅴ様式)、綾部市青野遺跡(第Ⅲ・Ⅳ様式)・小西町田遺跡(第Ⅴ様式)、福知山市興遺跡(第Ⅳ様式)などで一括資料の蓄積がなされ、器種構成や各様式内での組成の変化などに視点を置いた編年作業がある程度可能になりつつある。

志高遺跡出土遺物を整理・報告した肥後は、その中で前期から後期にかけての土器群を10期に細分する案を提示した。<sup>(注19)</sup>氏の案は、この地域で示された初めての編年の枠組みであり、今後の指標となる重要な試みである。その後、由良川考古学研究会では志高遺跡の調査以降の出土資料を集成し編年の充実を図っている。<sup>(注21)</sup>

本稿では、これらの成果を踏まえ、この地域の第Ⅲ・Ⅳ様式土器についての私案を示し、興遺跡出土資料の編年上の位置について考えてみることにしたい。

#### ②第Ⅲ・Ⅳ様式の土器

肥後は、畿内第Ⅲ・Ⅳ様式に相当する土器群を4期(志高弥生Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ期)に細分した。Ⅲ期が第Ⅲ様式古段階・Ⅳ期が新段階、Ⅴ期が第Ⅳ様式古相・Ⅵ期が新相に相当するとし、該当資料を次のように示した。<sup>(注22)</sup>

志高弥生Ⅲ期 S D 86240

志高弥生Ⅳ期 S H 85202・S H 85210

志高弥生Ⅴ期 S H 86203・S H 86205・S K 85207・S K 85208・S K 85201・自然流路

志高弥生Ⅵ期 S H 86201・B地区1号墓

この4期細分案を支持するが、Ⅳ期とⅤ期の間には隔たりがあり、該当する資料は得られていないが、もう1期設けておく必要がある。したがって、本稿では第Ⅲ様式を二つ、第Ⅳ様式を三つの小様式に分ける。また、S D 86240出土土器の大半は第Ⅲ様式新相に属すると考えているので、あらかじめ記しておく。

**第Ⅲ様式** 二つの小様式に分ける。

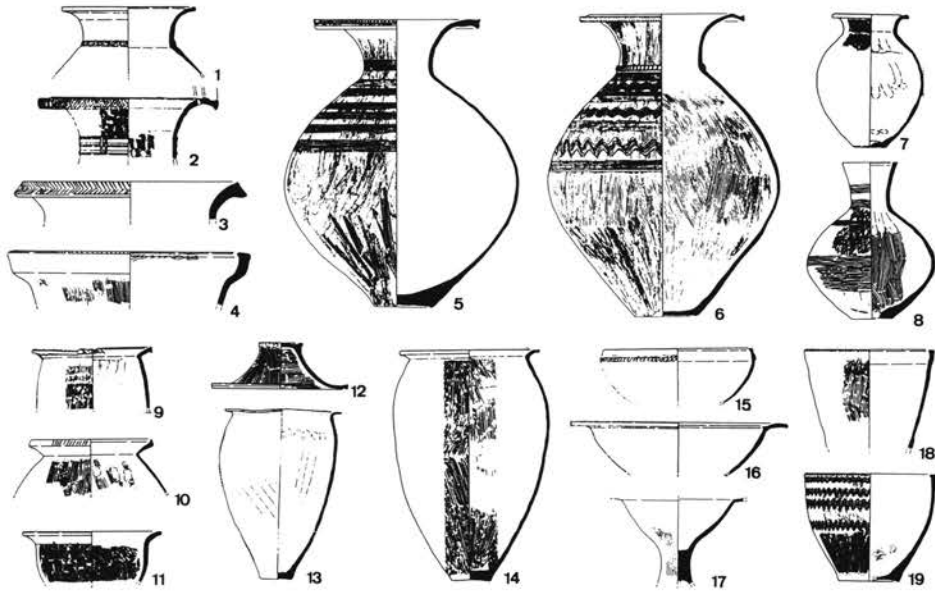
**Ⅲ-1様式** 畿内第Ⅲ様式古段階に相当する。綾部市青野遺跡第12次調査S D 102・S D 105・S D 202・S K 103、<sup>(注23)</sup>青野南遺跡第6次調査<sup>(注24)</sup>S D 16、福知山市宮遺跡<sup>(注25)</sup>S D 19・S K 17で完形固体を含むまとまった資料が出土している。宮遺跡方形周溝墓、志高遺跡舟戸地区包含層・方形周溝墓<sup>(注26)</sup>18・20などでも散発的に出土している。

壺・甕・高杯・鉢・蓋などの器種がある。主たる文様はキザミ目文・櫛描き文・凸帯文

である。調整はハケ目、ナデが主体でタタキ目、明瞭なヘラ削りはみられない。壺のなかに充填法で底部を成形するもの(綾部市青野遺跡第12次調査S D105出土資料)がある。

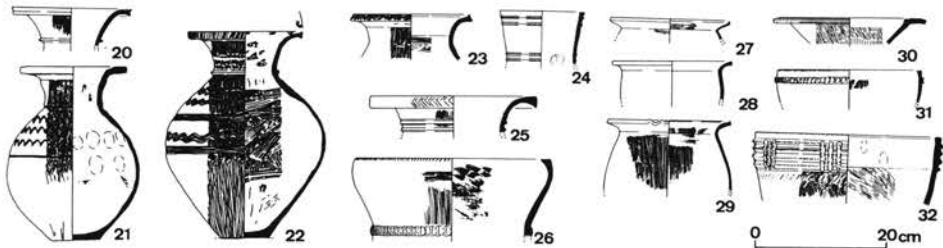
壺には広口壺(1・2・5・6・7)と大形で口縁部が短く外反するもの(3)、受け口壺(4)、細頸壺(8)などがある。水差し形土器、無頸壺の良好な資料はまだ確認されていない。口縁部にキザミ目文(4・6)・羽状文(3)・斜格子文(2)、頸部に凸帯文(1・2・6)、頸～胴部に櫛描き文(5・6・8)を施す。

甕には「く」字状に外反する単純な口縁をもつもの(9・13・14)、はねあげ口縁をもつ瀬戸内系甕(10)がある。前者は長胴傾向があり、この時期の主体となる甕である。口縁部の3～4か所に3～5個一対の波状押圧を施すもの(9)がある。10は、口縁端部に列点文



第100図 第三-1様式

青野遺跡第12次S D202.3・6・10～12・17 青野遺跡第12次S K03103.19 青野南遺跡S D16.8  
宮遺跡S D19.1・2・9・13～15 宮遺跡S K17.7・16



第101図 第三-2様式

志高遺跡S D86240.20・25～29・31 志高遺跡舟戸地区包含層.24 志高遺跡方形周溝墓2.21・22  
志高遺跡土坑10.30 志高遺跡溝27.23 志高遺跡竪穴式住居跡13.32

を施す。

高杯は、直口する口縁のもの(15)と水平にのびるもの(16・17)とがある。脚柱部の成形手法には積上法によるもの(17)と、円盤充填法によるもの(宮遺跡方形周溝墓出土高杯)とがある。15は、口縁部外面に指頭圧痕文凸帯がめぐる。

鉢は、口縁部が「く」の字状のもの(11)と直口のもの(18・19)とがある。18は口縁端部にキザミ目文、19は口縁端部にキザミ目文、体部に櫛描き波状文をめぐらす。

Ⅲ-2 様式 横ナデ手法が発達する段階である。Ⅲ-1 様式に比べ広口壺口縁部が矮小化し、凸帯文間にも強い横ナデが施されるようになる。直口する口縁部を持つ短頸壺(24)が現われる。志高遺跡<sup>(注27)</sup>S D 86240・志高遺跡方形周溝墓2出土資料<sup>(注28)</sup>などがあるが、良好な一括資料に恵まれない。この時期に短頸壺などの器種に凹線文が出現している可能性もあるが、資料が少なく明らかでない。志高遺跡S D 86240は比較的まとまりのある資料だが、この中にも凹線文はみられない。おおむね畿内第Ⅲ様式新段階に相当するが、本稿ではこれらの土器群を「横ナデ手法が盛期を迎えつつも凹線文をもたない直前段階<sup>(注30)</sup>」と理解しておく。

壺には広口壺(20～23・25)、短頸壺(24)、受け口壺(26)がある。20・22・25・26は、頸部に凸帯文がめぐる。25は、凸帯間に強い横ナデが施される。26は、指頭圧痕文凸帯である。口縁部には列点文(22)、櫛描き波状文(23)、羽状文(25)、キザミ目文(26)などの施文がある。22の内面はヘラ削りである。

甕には「く」の字状に外反する単純な口縁をもつもの(28・29)、はねあげ口縁をもつ瀬戸内系甕(27)がある。29は、口縁の一部を部分的に押圧して波状部を作る。

高杯・鉢は良好な固体がない。30は、口縁が水平にのびる高杯である。31・32は、直口する口縁を持つ鉢である。31は口縁端部にキザミ目文、外面に指頭圧痕文凸帯がめぐる。32は、4条のキザミ目凸帯に3個一對の棒状浮文を付加する。

Ⅳ-1 様式 凹線文の出現する時期である。この時期の一括資料はなく具体相はわからないが、壺を例にとるとⅢ-2 様式とⅣ-2 様式の間には凹線文の採用に至るまでの型的連続性を欠いており、小様式を1期設けておく必要がある。隣接地域の兵庫県春日町七日市遺跡<sup>(注31)</sup>では溝(旧河道2)や土坑(S K 060)から散発的ながらも凹線文A種を主体とする壺・無頸壺などが出土しており、志高遺跡舟戸南地区包含層などでも少量出土している。地域がやや離れているが、亀岡市千代川遺跡方形周溝墓1・2、S D 06古相土器群<sup>(注32)</sup>を該当する資料として挙げておく。

Ⅳ-2 様式 凹線文B種が広口壺をはじめ、短頸壺・高杯・鉢などに広く採用される段階－凹線文最盛期－である。舞鶴市志高遺跡S H 86203・S H 86205・S K 85207・S K

85201・自然流路、福知山市興遺跡Ⅱ地区S D01・02中～下層・S K08・同Ⅳ地区S D01・02・03、福知山市愛宕山遺跡、福知山市石本遺跡方形周溝墓、綾部市三宅遺跡方形周溝墓、綾部市青野遺跡S K87302出土資料が主なものである。福知山市奥谷西遺跡・ケシケ谷遺跡・夜久野町白ケ森遺跡・今西中遺跡などでもこの時期の遺物が出土している。遺跡数が多く資料も充実している。

広口壺・短頸壺・無頸壺・台付無頸壺・受け口壺・短頸壺・水差・甕・高杯・鉢・台付鉢などの器種によって構成される。蓋・器台の良好な固体はまだ確認されていない。台付無頸壺・台付鉢が多くみられるようになり、高杯の比重も高まる。在地型(52～55)に対して瀬戸内系甕(58～60)の比重が高まり、構成比がおよそ4:1となる。文様は凹線文が主体となるが、壺口縁部や内面・体部にはなお櫛描き文が盛行する(36～38・40～42)。凹線文は口縁部にA種、頸部にB種がみられる。沈線状のもの(35)もあり、高杯脚部(63)に多くみられる。38タイプの壺口縁部には板状工具で一括施文した擬凹線文状のものがある。

広口壺には、口縁部が大きく開いて狭い端面をもつもの(33・35)、外傾する広い端面をもつもの(34・36～38)、直立する筒状の頸部から口縁が水平に開くもの(39・40)、太い頸部から口縁が短く外反するもの(41・42)、大形で口縁が直線的に広がるもの(45)などがある。43は、口縁部を巻き込むようにして作る広口壺で、珍しいものである。44は受け口壺、46は短頸壺、47は直口壺である。50は無頸壺、51は台付無頸壺である。水差には長胴で大形のもの(48)と算盤玉状の体部を持つ小形のもの(49)とがある。

壺の調整は、ハケ目・ナデ・横ナデ・ヘラ磨き・ヘラ削り等があり、タタキ目があるものも少量みられる(47)。体部のヘラ磨き・ヘラ削りに特徴がある。体部外面中～下半のヘラ磨きには2種ある。一つは体部中～下半に縦方向のヘラ磨きを施したあと、体部中位に横方向のヘラ磨きをするもの(47)、今一つは体部中～下半に横方向のヘラ磨きを施したあとで、体部中位に縦方向のヘラ磨きをするもの(37・42)である。41は、ハケ目であるが前者と同じ方法である。体部下半のヘラ削りにも外面下半のみを削るもの(36)、内面のみを削るもの(39・41・42・47・48)の2者があり、後者が多い。高杯も外面を削るものが多い。

大和・摂津・山城地域などではこの時期、壺・甕・高杯杯部・鉢の外面にヘラ削りを施すもの(62)が比較的多くみられるが、壺・甕の体部内面に施すものは少ないようである。これに対して、播磨以西では壺・甕の体部内面を削るものが主流となるようである。壺外面の削りのあり方はこれらの地域との交流の強弱を示すものかもしれない。

甕には「く」の字状に外反する単純な口縁をもつ在地型甕(52～57)とはねあげ口縁をもつ瀬戸内系甕(58～61)がある。在地型甕と瀬戸内系甕との比はおよそ4:1である。在地型甕の最終調整は主にハケ目・ナデであるが、瀬戸内系甕では内面をヘラ削りするものが多

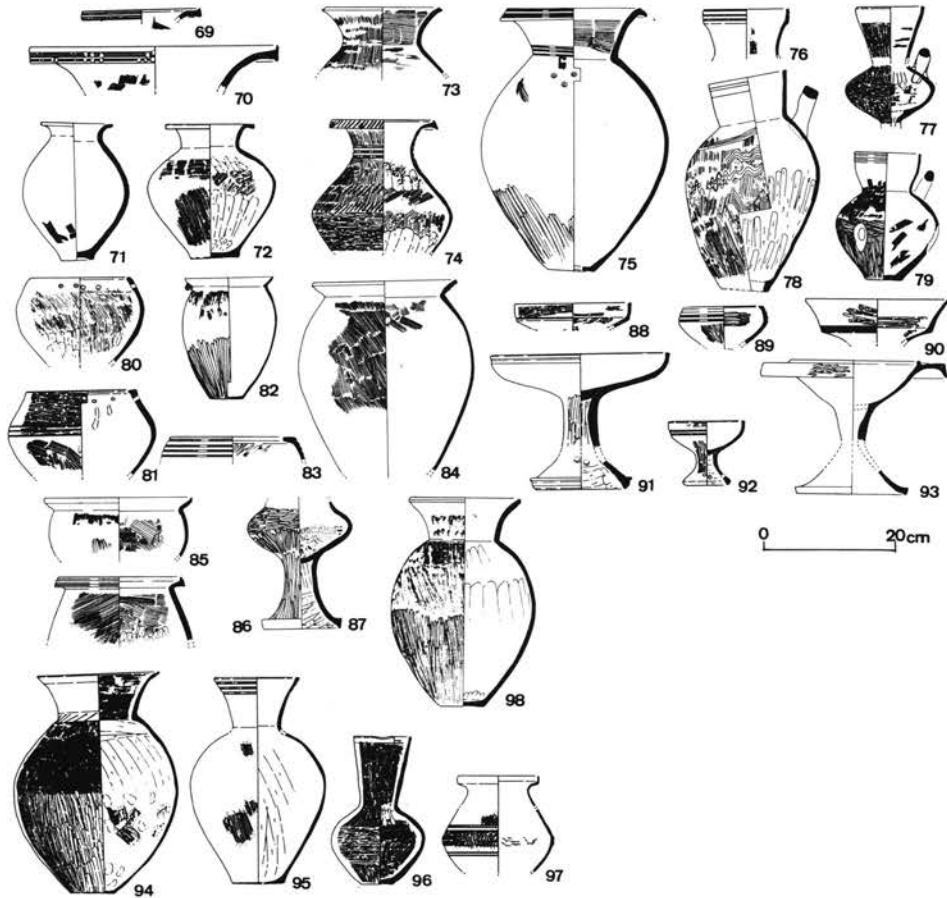


第102図 第IV-2様式

興遺跡Ⅱ地区 S D01.33~35・37・40・46~49・51~56・66 興遺跡Ⅱ遺跡 S D02.42~45・50・58  
 ~61・65・67・68 興遺跡Ⅳ地区 S D01.55 興遺跡Ⅳ地区 S D03.62・64 興遺跡Ⅳ地区  
 S D04.63 三宅遺跡方形周溝墓.36 志高遺跡自然流路.38 青野遺跡 S K87302.41

い(59~61)。タタキ目のみられるのも後者である。口縁部の3~4か所に3~5個一対の押圧を施すもの(54・55)がある。口縁部の部分施文が前様式以来、引き続き行われる。前様式では口縁部を上下に押圧して波状をなす(9・29)のが通有であるが、本様式ではキザミ目か口唇部に対する直角に近い角度の押圧に変わっている。体部外面下半に粗いヘラ磨きを施すもの(53・57・60)がある。59は、体部外面に櫛描き列点文がある。

高杯は、椀状の杯部のもの(62)と水平に開くもの、水平に開いたのちに垂下するもの(63)、段状口縁の大形品(67)などがある。鉢は「く」の字の口縁のもの、はねあげ口縁のもの(64)、直口の大形品(66)などがある。台付鉢は「く」の字口縁のもの(65)、直口のもの(68)などがある。



第103図 第IV-3様式

興遺跡Ⅱ地区 S D03.69・70・76・77・80・81・88~90・92 興遺跡Ⅱ地区 S K19.72 志高遺跡  
 貼り石墓1号.71・73・75・79・82・84・85・87・91・93 志高遺跡 S H86201.83・86 興  
 遺跡Ⅱ地区 S X01.94~97 志高遺跡 S K85208.98



17	短頸壺	口径16.3 残高4.3	○0.1未満 良好 淡橙褐色	短く外反して立ち上がる口縁、口縁端面、頸部に凹線文。	内外面ナデ。	
18	広口壺 A 3	口径18.3 残高3.3	◎0.1~0.2 良好 淡茶褐色	口縁端部を斜め下方に拡張し、凹線文3条を施す。	内外面ハケのちナデ。	
19	広口壺	口径18.8 残高9.9	○0.1~0.2 良好 明赤褐色	頸部に刺突文凹帯。刺突は櫛状工具による。	外面ハケ、口縁~頸部 内面ナデ、体部ハケ。	
20	広口壺 A 4	口径17.5 残高2.3	○0.1~0.2 やや軟 淡茶褐色	端部上下方に拡張し凹線文を施す。3個一対の棒状浮文。口縁内面櫛描波状文。	内外面ナデ。	
21	広口壺 A 4	口径21.3 残高1.5	○0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	口縁端面に凹線文+キザミ目文、内面に凹線文+櫛描き波状文。		
22	広口壺 A 4	口径21.3 残高7.6	○0.1~0.2 軟 黄褐色	口縁端部を上下方に拡張、広い端面を作る。頸部に凹線文。	内外面ナデ。	
23	受け口壺	口径15.0 残高6.0	△0.1~0.2 軟 淡茶褐色	屈曲して直口する口縁部。口縁部に凹線文。	内外面ナデ。	
24	直口壺	口径20.8 残高7.2	△0.1~0.2 軟 淡橙褐色	直線的に立ち上がる口縁。口縁に凹線文3条。	内外面ナデ。	
25	広口壺 C 1	口径20.7 残高12.6	△0.1~0.2 良好 明黄褐色	太く短い頸部から口縁部が外反。頸部に櫛描き直線文+波状文。	外面ハケ、内面器壁荒れており不明。	
26	無頸壺 A	口径15.4 残高4.3	○0.1~0.2 良好 橙褐色	口縁部が内湾して立ち上がる。2個一対の紐孔。	内外面ナデ。	
27	無頸壺 B	口径15.7 残高5.0	△0.1~0.2 軟 淡黄褐色	口縁部をやや内側に拡張。外面に凹線文7条。2個一対の紐孔。	外面下半ヘラ磨き。内面ハケのちナデ。	
28	無頸壺 C	口径14.3 残高5.7	○0.1~0.2 やや軟 茶褐色	口縁部を肥厚させ段状口縁をなす。	外面ナデ、内面ナデ。	
29	甕	底径7.6 残高10.3	○0.1~0.2 良好 赤褐色	口径に比べ器体が低く、ずんぐりとした体部を持つ。	外面ハケ、内面ナデ。	甕A 2の体部と思われる。
第47図 30	甕 A 1	口径14.6 残高5.6	◎0.1~0.2 良好 淡茶色	「く」の字状に外反する口縁。	内外面ハケ。	
31	甕 A 2	口径14.0 残高5.6	○0.1~0.3 良好 黄白色	「く」の字状に外反する口縁。	外面タタキのちハケ、内面ハケ。	
32	甕 B	口径13.0 残高4.6	◎0.1~0.2 軟 淡灰色	ハネ上げ口縁。	外面ハケのちナデ、内面ハケ。	
33	甕 A 3	口径15.4 残高6.0	△0.1~0.2 軟 茶褐色	ゆるやかに外反する口縁。	内外面ナデ。	

S D02

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第44図 1	甕 A 3	口径13.8 残高15.2	◎0.1未満 良好 茶褐色	ゆるやかに外反して立ち上 がる口縁。	体部外面。口縁内面ハ ケ。体部内面へラ削り	
2	甕 A 3	口径16.2 残高6.3	○0.1～0.3 良好 茶褐色	ゆるやかに外反する口縁。	体部外面ハケ。内面へ ラ削り。	
3	広口壺 B	口径17.2 残高5.5	△0.1～0.3 良好 茶褐色	円筒状の頸部から口縁が開 く。端面を強くナデ、凹線 文状に凹む。	外面ハケ、内面ナデ。	
4	広口壺 A 2	口径21.4 残高8.5	△0.1～0.2 良好 茶褐色	外傾する端面。頸部に凹線 文、口縁内面に列点文。	内外面ハケのちナデ。	
5	広口壺 A 3	口径18.4 残高5.6	△0.1～0.2 良好 茶褐色	口縁端面を斜め下方に拡張 凹線文を施す。頸部に櫛描 直線文。口縁内面に扇形文	外面ナデ。内面ハケ。	
6	直口壺	口径19.2 残高9.7	△0.2～0.5 軟 淡黄白色	直線的に立ち上がる口縁。 口縁部に凹線文3条。	内外面ナデか。	
7	広口壺 A 1	口径21.6 残高13.0	△0.1～0.2 やや軟 赤褐色	大きく外反して立ち上がる 口縁。端部を肥厚させ丸く おさめる。	内外面ハケ。	
8	甕 C 2	口径29.8 残高7.7	◎0.1未満 良好 明黄褐色	短く屈曲する口縁。端面を 拡張して凹線文3条施す。 頸部に凹線文。	体部外面ハケ。内面ナ デ。	
9	受け口 壺	口径34.5 残高11.3	◎0.1未満 良好	屈曲して直立する口縁部。 屈曲部に凹線文3条。	外面へラ磨き。内面ハ ケのちナデ。	
10	広口壺 D	口径39.8 残高6.8	△0.1～0.2 良好 赤褐色	短く外反する口縁。外傾す る面を作る。	外面ハケ、内面ハケの ちナデ。	
第45図 11	高杯 A 2	口径17.0 器高18.4 底径10.4	◎0.1～0.2 良好 橙褐色	屈曲して立ち上がる杯部。 杯部、脚柱部、脚端に凹線 文。	杯部内外面ともナデ。	杯部内底 面欠損。
12	高杯 A 1	口径13.6 器高13.6 底径7.7	○0.1～0.4 やや軟 淡橙褐色	椀状の杯部。口縁外面に凹 線文1条。	外面ナデ。杯部内面ハ ケのちナデ。脚内面へ ラ削り。円板充填。	黒斑あり 完存。
13	高杯 A 2	口径21.4 残高5.8	◎0.1未満 良好 明黄褐色	屈曲して立ち上がる口縁。 口縁部に凹線文。	外面下半にへラ削りの ち、へラ磨き。内面へ ラ磨き。	
14	高杯脚	底面10.2 残高10.4	△0.1～0.5 やや軟 淡橙白色	脚端部に凹線文。	内面へラ削り。杯部内 底面は円板充填法によ る。	黒斑あり
第46図 15	広口壺 A 2	口径12.0 残高2.9	○0.1～0.2 良好 茶褐色	らっぱ状に開口縁部。内 傾する端面を作る。	内外面ハケ。	小形品。
16	広口壺 B	口径15.3 残高2.5	○0.1～0.2 軟 黄白色	円筒状の頸部から口縁部が 水平に開く。	内外面ナデ。	

88	甕 A 1	口径12.1 器高19.4 底径4.7	△0.1～0.2 軟 暗褐色	「く」字状に外反する口縁	内外面ナデ。口縁内面にハケ残る。	完存。
89	甕 B	口径16.7 残高17.3	△0.1未満 良好 暗橙色	ハネ上げ口縁。	口縁ナデ。体部外面ハケ、内面ハケ、下半ヘラ削り。	
90	甕 A 1	口径16.7 器高19.3 底径5.5	◎0.1～0.2 良好 暗茶褐色	「く」の字状に外反する口縁端部丸くおさめる。	外面縦ハケ、内面口縁ハケ、体部斜めハケ。	体部外面スス附着
91	甕 B	口径16.3 器高21.5 底径5.1	◎0.1～0.2 良好 暗茶褐色	口縁端部に面をもち、端部をわずかにつまみあげる。	外面ハケ。内面体部上半ハケ、下半ハケ後ナデ。	底部穿孔ほぼ完存
92	甕 A 1	口径14.0 器高25.5 底径4.8	◎0.1～0.2 やや軟 茶褐色	「く」字状に外反する口縁で、体部中位に最大腹径あり。	外面体部上半ハケ、下半粗いヘラ磨き。内面口縁横ハケ、体部ナデ	体部外面下半スス附着。ほぼ完存。
93	甕 A 1	口径18.2 器高31.2 底径5.8	○0.1～0.2 良好 茶褐色	「く」字状に外反する口縁口縁部に3個一対の押圧文。口縁3か所に施す。長胴。	外面斜めハケ。内面口縁横ハケ、体部ナデ。指頭圧痕残る。	完存。
第43図 94	甕 A 3	口径18.0 残高5.5	◎0.1～0.2 良好 橙褐色	ゆるやかに外反する口縁。端部に6個一対の押圧文。	内外面ハケ。	ゆるやかに外反する口縁。端部に6個一対の押圧文。
95	甕 A 1	口径13.9 残高9.0	○0.1未満 良好 淡赤褐色	「く」字状に外反する口縁	体部外面ハケ後ナデ。内面ハケ。	外面スス附着。
96	甕 A 1	口径15.6 残高10.5	○0.1未満 良好 灰褐色	「く」字状に外反する口縁	体部外面ハケ、口縁部内面ハケ。体部内面ヘラ削り後ナデ。	
97	甕 A 1	口径18.3 残高15.0	◎0.1未満 良好 明赤褐色	「く」字状に外反する口縁	内外面ハケ後ナデ。	外面下半スス附着
98	甕 A 1	口径16.8 残高18.0	△0.1未満 良好 橙色	「く」字状に外反する口縁端部に5個一対のキザミ目文。	体部外面ハケ後ナデ。内面ナデ。	外面スス附着。
99	甕 C 1	口径13.7 残高18.8	○0.1～0.2 やや軟 茶褐色	短く屈曲する口縁。最大腹径が上位にあり張りのある体部を有する。	体部外面ハケ、内面上半ナデ、下半ヘラ削り	内面下半スス附着
100	鉢 A C 1	口径16.7 残高10.0	△0.1～0.2 良好 赤褐色	ゆるやかに外反する口縁。端部を強くナデ面をなす。	内外面ハケ後ナデ。	外面下半スス附着
101	無頸壺 B	口径19.5 器高20.4 底径12.2	◎0.1～0.2 良好 黄白色	口縁部を内側へ拡張し、広い面を作る。口縁部上端、口縁部、凹線文。	体部内外面ヘラ磨き、脚部内面ヘラ削り。	黒斑あり
102	高杯脚	残高9.5	◎0.1～0.2 良好 淡黄褐色	杯部内底面は円板充填手法による。	外面ヘラ磨き。内面ヘラ削り。	
103	高杯 A 1	口径18.3 推定高 14.1	○0.1～0.2 良好 黄白色	椀状の杯部から直口する口縁。口縁部に凹線文2条。円板充填。	杯部内外面ハケ、杯部外面～柱部ヘラ磨き。杯部内面ヘラ削り。	黒斑あり ほぼ完存

71	鉢 A	口径23.5 残高10.0	◎0.1～0.3 良好 黄褐色	ゆるやかに屈曲する口縁。 端部を強くナデ、口唇部を つまみ上げる。	外面ハケ。内面ハケの 後下半ヘラ削り。	黒斑あり
72	鉢 B	口径28.6 残高14.1	◎0.1 良好 淡黄褐色	口縁が短く屈曲し、外傾す る端面をもつ。	内外面ハケ。	
73	台付鉢 脚	底径8.4 残高8.0	◎0.1～0.2 良好 橙褐色	凹線文2条。	杯部外面ヘラ削り。脚 外面ヘラ磨き、内面ヘ ラ削り。円板充填。	
74	高杯脚	底径11.4 残高12.3	◎0.1未満 良好 黄褐色	柱状の脚部。	外面ヘラ磨き。円板充 填。	
75	高杯脚	底径13.2 残高9.7	◎0.1～0.3 やや軟 橙褐色	細く浅い凹線文。	内面ヘラ削り。	黒斑あり
第37図 76	広口壺 A 5	口径27.3 残高35.2	◎0.1～0.2 やや軟 黄白色	垂下する口縁、口縁外面に 2個一対の円形浮文。体部 上半に櫛描直線文+波状文	頸部～体部外面上半ハ ケ、体部下半ヘラ磨き 内面ナデ。	黒斑あり
77	壺底部	底径8.0 残高18.7	△0.1～0.2 良好 明黄褐色		外面ハケ後ヘラ磨き。 内面ハケ後ナデ。	
第38図 78	広口壺 C 1	口径17.5 残高24.7	◎0.1～0.2 やや軟 橙褐色	口縁端面に凹線文+羽状文。 体部上半に櫛描直線文+ 波状文。	内外面ハケ後ナデ。	
79	広口壺 A 2	口径18.3 器高30.5 底径8.0	◎0.1～0.2 良好 褐色	口縁端面に凹線文2条。内 面に扇形文。頸部に櫛描 直線文。肩部に扇形文。	外面上半ハケ、下半は 粗いヘラ磨き。内面ハ ケ後ナデ。	完存。
80	壺底部	底径9.5 残高9.7	△0.2～0.5 良好 淡橙褐色		外面ヘラ削り後ハケ。 内面ナデ。	
81	広口壺 B	口径20.7 器高35.9 底径8.3	◎0.1～0.2 やや軟 黄灰色	口縁端部に波状文、内面及 び頸部外面に列点文。体部 上半に櫛描直線文+波状文	内・外面ともハケ。	
第39図 82	直口壺	口径19.3 残高43.0	◎0.1～0.2 やや軟 茶褐色	ゆるやかに内湾して立ち上 がる口縁。口縁、頸部外面 に凹線文、肩部に円形浮文	器体内外面とも上半ハ ケ外面下半ヘラ磨き。 内面下半ヘラ削り。	
第40図 83	水差形 土器B	口径10.5 残高25.0	△0.1～0.2 軟 淡橙色	直口する口縁。握手側に指 かけを作る。長胴である。	体部外面を部分的にヘ ラ磨き。内面ハケ。	黒斑あり
84	水差形 土器B	口径10.8 器高34.3 底径6.0	△0.1～0.8 軟 淡橙色	直口する口縁。握手側に指 かけを作る。口縁部に凹線 文、肩部に櫛描直線文3条	体部内外面にハケ後ナ デ。下半ヘラ削り。	ほぼ完存
第41図 85	甕 C 1	口径15.8 残高26.5	◎0.1～0.2 良好 明茶褐色	短く屈曲して立ち上がる口 縁。腹径に比べ口径小さい	外面ハケ。口縁内面ハ ケ。体部内面ナデ。	
86	甕 C 3	口径29.8 残高31.8	△0.1～0.8 やや軟 淡橙色	「く」の字状に屈曲する口 縁。外傾する端面を作る。 端面に凹線文2条。	体部内外面縦ハケ。口 縁内面横ハケ。	
第42図 87	甕 A 1	口径13.0 器高15.0 底径4.7	△0.1～0.2 軟 褐色	「く」字状に外反する口縁 端面を丸くおさめる。	内外面ナデ。	完存。

54	水差形 土器B	口径9.4 残高10.8	◎0.1~0.2 良好 暗橙灰色	直口する口縁。	内外面ハケ後ナデ。	
55	直口壺	口径20.4 残高11.1	◎0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁部がやや屈曲して立ち上がる。口縁と頸部に凹線文。	内外面ハケ。	
第35図 56	無頸壺 E	口径7.8 残高5.0	◎0.1未満 良好 明橙褐色	口縁が短く外反する。頸部に2個一対の紐孔がある。	内外面ナデ。	
57	無頸壺 A	口径14.9 残高8.0	○0.1未満 良好 暗灰褐色	やや内傾して立ち上がる。端部に内傾する狭い面をもつ。2孔一対の紐孔あり。	外面ハケ、内面ナデ。	
58	無頸壺 B	口径18.1 残高9.2	○0.1 良好 淡橙褐色	口縁端部を内傾に拡張。6条の凹線文。2孔一対の紐孔あり。	内外面下半部にヘラ削り。	
59	甕 C 1	口径16.0 残高13.2	○0.1~0.2 やや軟 淡橙褐色	短く屈曲する口縁。端部をつまみ上げ、外傾する狭い端面を作る。	外面ハケ。内面剝離のため不明。	
60	甕 A 1	口径25.0 残高9.3	○0.1~0.2 やや軟 暗橙褐色	「く」の字状に外反する口縁。口縁端部に4個一対のキザミ目文。	外面部分的にハケ残る内面ナデ。	
61	甕 A 4	口径13.6 残高5.0	○0.1~0.2 良好 暗橙褐色	ゆるやかに内湾して立ち上がる口縁。	外面ハケ。内面ナデ。	
62	甕 A 1	口径15.8 残高8.0	◎0.1~0.2 良好 暗茶褐色	「く」の字状に外反する口縁。	外面縦方向の粗いヘラ磨き。内面ハケ後ナデ	
63	甕 A 1	口径16.2 残高7.8	○0.1~0.2 良好 暗橙褐色	「く」の字状に外反する口縁。	外面ハケのちナデ。内面口縁部横ハケ、体部斜めハケ。	
64	甕 A 1	口径15.0 残高10.8	◎0.1未満 良好 淡茶褐色	「く」の字状に外反する口縁。	体部外面、口縁内面ハケ外面下半、内面にヘラ削り痕を残す。	
65	甕 B	口径14.8 残高4.0	◎0.1未満 良好 黄褐色	ハネ上げ口縁。口縁端部に5個一対のキザミ目文。	内外面ハケ。	
66	甕 A 1	口径16.5 残高5.4	○0.1~0.2 良好 暗茶褐色	「く」の字状に外反する口縁。端部に面を作る。5個一対のキザミ目文。	内外面ハケ後ナデ。	
67	甕 B	口径16.7 残高9.2	◎0.1 良好 淡黄褐色	ハネ上げ口縁。体部に列点文。	外面タタキ後ハケ。内面ハケ後下半ヘラ削り	
68	甕 B	口径16.8 残高11.5	◎0.1~ 10.3 良好 黒褐色	ハネ上げ口縁。器体に比べ口径大きい。	外面ハケ。内面ハケ後下半ヘラ削り。	
第36図 69	台付鉢 D 1	口径10.7 残高6.0	○0.1未満 やや軟 明橙褐色	直口する口縁。口縁部に3条、屈曲部に1条の凹線文	内外面ヘラ磨きか。	
70	高杯 A 1	口径28.6 残高7.2	◎0.1~0.2 良好 明橙褐色	椀状の杯部から口縁部が直口する。口縁部に凹線文2条。	内外面ヘラ磨き。	口縁部に黒斑。

37	高杯 A 2	口径17.5 器高16.5	◎0.1～0.3 良好 淡橙褐色	屈曲して立ち上がる口縁。 屈曲部に浅い凹線文2条。	杯部内外面ヘラ磨き。 脚部外面ヘラ磨き。内 面に絞り痕。	ほぼ完存 脚部に黒 斑
38	高杯 A 1	口径12.7 残高4.8	◎0.1～0.2 良好 淡橙褐色	椀状の杯部。	口縁部ナデ。杯部内外 面ハケ。	小形品。 黒斑あり
39	台付鉢 B	口径16.3 残高4.9	◎0.1 良好 明黄褐色	短く屈曲する口縁。端部を つまみ上げる。	内外面ヘラ削り。	台付鉢か
40	台付鉢 A	口径17.4 残高9.4	△0.1～0.2 やや軟 淡橙褐色	浅い杯部から口縁が斜上方 に開く。	杯部内外面、脚部外面 にヘラ磨き。杯部内底 面は円板充填による。	
41	高杯脚	底径10.6 残高7.6	◎0.1 良好 淡黄褐色	大きく開く脚部。	外面ヘラ削り。内面ヘ ラ削り。円板充填。	黒斑あり
42	高杯脚	底径10.0 残高12.7	△0.1～0.2 やや軟 暗赤褐色	柱状脚。下端が大きく開く。 外面に細く浅い凹線文。	内面ヘラ削り。柱状部 に絞り目。	
43	高杯脚	底径10.8 残高12.8	◎0.1～0.2 良好 淡橙褐色	柱状脚。下端が大きく開く。 外面ヘラ磨き後、細く浅い 凹線文。	内面ヘラ削り。柱状部 に絞り目。	
44	鉢	口径30.4 残高9.2	○0.1～0.3 良好 茶褐色	口縁端部が肥厚し内傾する 面をもつ。凹線文5条。	体部外面下半ヘラ磨き 内面部分にハケ残る。	黒斑あり
第34図 45	広口壺 B	口径13.6 残高6.2	◎0.1未満 良好 淡橙褐色	口縁端面凹線文2条。頸部 に凹線文、口縁内部に櫛原 体による列点文2段。	内外面ナデ。	
46	広口壺 B	口径16.4 残高3.8	◎0.1～0.2 良好 暗灰褐色	円筒状の頸部。端面外傾。 端面に櫛描き状文。	内外面ナデ。	
47	広口壺 A 3	口径18.6 残高6.7	◎0.1～0.2 良好 淡橙褐色	端部をやや拡張。端部に凹 線文3条、円形浮文あり。 口縁内面に列点文。	内外面ナデ。	
48	広口壺 A 4	口径26.0 残高2.4	◎0.1 良好 橙褐色	大きく開く口縁。端部を下 方に拡張。端面に凹線文3 条。棒状浮文の剝離痕あり	内外面ナデ。	
49	広口壺 A 4	口径24.0 残高8.0	○0.1～0.3 やや軟 暗赤褐色	口縁端面を斜下方に拡張。 凹線文3条。頸部に櫛描き 直線文。内面に扇形文。	外面ハケ後ナデ、内面 ナデ。	
50	広口壺 A 5	口径24.3 残高13.7	◎0.1 良好 明橙褐色	円筒状の頸部から口縁が大 きく開く。頸部に貼付突帯 と櫛描き直線文。	内外面ナデ。	
51	広口壺 B	口径13.4 残高22.5	△0.1～0.4 やや軟 暗褐色	短い筒状の頸部。最大腹径 が体部中位にある。無文。	内外面ハケ後ナデ。	ほぼ完存
52	広口壺 B	口径13.3 残高23.7 底径5.0	○0.1～0.2 良好 暗橙灰色	口縁端面に櫛描き波状文。 頸・胴部に櫛描き直線文 と波状文を施す。	体部外面縦ハケ、内面 上半にハケ、下半はナ デ。	ほぼ完存
53	直口壺	口径12.0 残高6.6	◎0.1未満 良好 淡黄褐色	直口する口縁。口縁に凹線 文4条。	外面ヘラ磨きか。内面 ナデ。	

第32図 20	甕 B	口径11.0 残高9.4	◎0.1～0.2 良好 淡茶褐色	口縁部下端にキザミ目文。 頸部に櫛描き文。体部に櫛 原体による列点文2列。	内外面ハケ後ナデ。	外面下半 スス付着
21	甕 B	口径14.2 残高5.0	◎0.1～0.2 やや軟 橙褐色	ハネ上げ口縁。	外面ハケ、内面ナデ。	
22	甕 C 2	口径14.4 残高5.6	◎0.1～0.3 良好 橙褐色	短く屈曲する口縁。端面は 外傾し、凹線文3条を施す。	外面ハケ、内面口縁部 ナデ、体部ヘラ削り。	
23	甕 C 1	口径14.0 残高6.1	◎0.1～0.2 良好 褐色	短く屈曲する口縁。端外傾	器壁荒れ、調整不明。	
24	甕 A 4	口径14.4 残高8.4	◎0.1～0.2 やや軟 橙褐色	口縁がゆるやかに内湾して 立ち上がる。	内外面ハケ。内面指頭 圧痕多く残る。	
25	甕 A 1	口径18.0 残高9.3	◎0.1～0.2 良好 淡黄白色	「く」字状に外反する口縁	内外面ナデ。	
26	甕 A 1	口径25.0 残高14.6	◎0.1～0.2 良好 橙褐色	「く」字状に外反する口縁	外面上半縦ハケ。 下半斜めハケ。 内面ナデ。	体部外面 スス付着
27	甕 A 3	口径15.0 残高7.2	◎0.1 良好 茶褐色	ゆるやかに屈曲する口縁部 をもつ。	体部外面ハケ、口縁内 面横ハケ。体部内面斜 めハケ。	粗製品。
28	甕 A 1	口径17.2 残高9.8	◎0.1～0.2 やや軟 茶褐色	口唇部に6個一対のキザミ 目文。	体部内外面ハケ。	
29	甕 A 1	口径16.8 残高9.9	◎0.1～0.2 良好 橙褐色	「く」の字状に外反する口 縁。端部丸くおさめる。	体部内外面ハケ後ナデ	
30	甕 B	口径19.7 残高10.8	◎0.1 良好 黄褐色	ハネ上げ口縁。器高に対し 口縁が大きい。	体部外面縦ハケ。内面 ヘラ削り。	
31	鉢 B	口径12.4 残高3.1	△0.1～0.2 良好 淡黄褐色	短く屈曲する口縁。	内外面ヘラ磨き。	
32	台付鉢 B	口径14.1 器高14.6 底径8.5	◎0.1 良好 赤褐色	短く屈曲する口縁。浅く張 りのある体部。脚部端面に 凹線文。	体部外面ハケ後篋磨き 内面ヘラ磨き。脚部内 面ヘラ削り。円板充填	赤色顔料 塗布。
第33図 33	高杯 C	口径13.2 残高4.4	◎ 良好 橙褐色	屈曲して外反する口縁。屈 曲部に浅い凹線文3条。		
34	高杯 C	口径17.5 残高6.1	◎0.1～0.2 やや軟 暗黄灰色	屈曲して外反する口縁。口 縁と屈曲部に浅い凹線文1 条。		
35	高杯 B 2	口径23.5 残高3.0	◎0.1～0.2 良好 暗黄灰色	垂下する口縁。	外面調整不明。内面ヘ ラ磨き。	
36	高杯 A 1	口径19.8 残高7.2	◎0.1～0.2 良好 淡橙褐色	椀状の杯部。口縁に凹線文 2条。	内外面ヘラ磨き。外面 下半にヘラ削り。	

3	広口壺 A 2	口径16.1 残高8.0	○0.1~0.3 良好 明橙褐色	斜め上方に大きく開く口縁部。口縁端面にキザミ目文	外面縦ハケ、内面横ハケ。	
4	広口壺 B	口径12.8 残高5.8	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁端部に凹線文2条。頸部の櫛描き波状文。	頸部外面縦ハケ、内面ナデ。	
5	広口壺 B	口径13.6 残高5.4	◎0.1~0.2 良好 茶褐色	口縁端部に凹線文2条。	内外面ナデ。	
6	広口壺 B	口径16.7 残高5.8	◎0.1~0.2 良好 淡橙白色	口縁部を下方に拡張し、端面に3条の凹線文、3個一対の円形浮文。	頸部外面へラミガキ、内面ナデ。	
7	直口壺	口径17.0 残高11.3	○0.2~0.3 良好 黄褐色	口縁上部に2条の凹線文。頸・胴部間に凹線文2条。	外面粗いハケ、内面ナデ。	
8	広口壺 A 3	口径22.0 残高5.0	△0.2~0.3 軟 暗灰褐色	口縁部が大きく開く。端面を下方へやや拡張する。	外面ナデ、内面横ハケ	
9	広口壺 A 2	口径22.7 残高9.5	○0.1~0.2 良好 暗赤褐色	口縁部が大きく開く。無文。	頸部外面縦ハケ、内面横ハケ。	
10	広口壺 C 1	口径18.5 残高11.1	◎0.1~0.2 良好 橙褐色	短く外反する口縁。端面に櫛原体木口による羽状文。口縁内面に扇形文。	外面縦ハケ、内面ナデ	内面に炭化物附着
11	広口壺 A 5	口径22.2 残高5.5	○0.1~0.2 良好 赤褐色	円筒状の頸部。垂下する口縁。端面に3条の凹線文。口縁内面に沈線文2条+扇形文+列点文	外面縦ハケ、内面ナデ	
12	受け口壺	口径22.3 残高12.3	○0.1 やや軟	端面に浅い凹線文4条。口縁部と頸部に凹線文。頸部にキザミ目突帯。	頸部外面縦ハケ、内面横ハケ。	
13	広口壺	頸径10.4 腹径26.4 残高36.4	△0.1~0.2 軟 茶褐色	頸部から大きく開く口縁部をもつ。頸部にキザミ目文	器体外面ハケ、体部下半はハケ後へラ磨き。内面ハケ。指頭圧痕多く残る。	口縁部欠損。頸胴部はほぼ完存。
第31図 14	広口壺 A 1	口径15.5 器高32.3 底径7.1	◎0.1~0.2 良好 暗赤褐色	斜上方に開く口縁、無文である。	口縁端部横ナデ。器体外面ハケ。体部下半ハケ後へラ磨。内面ナデ	完存。
15	直口壺	口径15.5 残高6.0	◎0.1未満 良好 淡赤褐色	口縁上端に2条の凹線文。頸・胴部間に凹線文。	内外面へラ磨き。	
16	広口壺	腹径23.3 残高23.4	○0.1~0.2 良好 暗茶褐色	上から1/3ほどのところに最大腹径を有する。	体部外面ハケ、内面上半をナデ、下半へラ削り。	口縁部欠損。黒斑あり。
17	水差形土器A	腹径13.3 残高13.2	◎0.1~0.2 良好 淡灰色	算盤玉状の体部。頸部・胴部・脚部に凹線文。	体部上半にハケ、下半へラ削り。脚部内面へラ削り。円板充填。	口縁部欠損
18	甕 C 3	口径26.0 残高6.9	○0.1~0.3 良好 淡茶褐色	「く」の字状に外反する口縁。端面外傾。	内外面ナデ。	
19	甕 C 3	口径35.2 残高7.7	△0.1~0.2 やや軟 淡黄白色	「く」字状に外反する口縁外傾端面に凹線文3条。	内外面ナデ。	



付表7 I地区出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第29図 1	広口壺 B	口径16.4 残高2.4	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁端部に凹線文+キザミ 目文	ナデ。	S K06出土
2	広口壺	口径19.3 残高5.0	○0.9~0.2 良好 黄褐色	端部をわずかに上下に拡張	外面ハケ、内面ナデ。	S K05出土
3	広口壺	口径16.5 残高7.0	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁部に凹線2条。	外面ハケ、内面ナデ。	S K05出土
4	広口壺	口径19.0 残高6.8	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁部に凹線文。	外面ハケ、内面ナデ。	S K06出土
5	高杯 A 1	口径20.6 残高4.0	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁部に凹線文。	ナデ	S K02出土
6	高杯 B 2	口径15以 上 残高4.0	○0.1~0.2 やや軟 暗赤褐色	垂下する口縁部を もつ。	ナデ。	S K03出土
7	甕 A 1	口径16.8 残高6.6	○0.1~0.2 良好 暗橙褐色	口縁がやや内湾ぎみに立ち 上がる。	内外面ナデ。	S K04出土
8	甕 A 1	口径18.1 残高4.4	○0.1~0.2 良好 暗黄褐色	外傾する端面をもつ。	内外面ハケ。	S K03出土
9	甕 A 4	口径18.3 残高6.0	○0.1~0.2 良好 暗黄褐色	口縁がやや内湾ぎみに立ち 上がる。	内外面ナデ。	S K05出土
10	無頸壺 B	口径20.8 残高3.9	○0.1~0.2 良好 暗橙褐色	口縁部外面に凹線文。	内面ナデ。	S K08出土
11	鉢	口径17.5 残高4.2	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁部に凹線文。	内外面にヘラミ ガキ。	S K05出土
12	高杯脚 部	口径12.2 残高6.4	○0.1~0.2 良好 暗黄褐色	脚柱部と端部に凹線文。	外面ナデ、内面ヘラケ ズリ。	S K02出土

付表8 II地区出土土器観察表

S D01

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第30図 1	広口壺 B	口径10.0 残高3.5	○0.1~0.3 良好 淡赤褐色	円筒状の短い頸部から口縁 が短く外反。口縁端面に円 形浮文。	内外面ナデ。	
2	広口壺 B	口径12.7 残高5.6	◎0.1~0.2 良好 暗褐色	口縁端面に凹線文2条、円 形浮文の剥離痕あり。 頸部に櫛描き直線文。	内外面ナデ。	

IV-3 様式 凹線文の衰退が著しい時期である。壺が無文化し、高杯の形態が多様化して小形のもの(88・89・92)が多く見られるようになる。屈曲して大きく外反する杯部をもつ高杯(90)が現われるのもこの時期である。舞鶴市志高遺跡B地区1号貼石墓・SH86201・SK85208、福知山市興遺跡II地区SD03・SK19などがあげられるが資料はあまり多くはない。SX01(94~97)はこの時期で最も後出する資料と思われる。

広口壺・短頸壺・甕・高杯・鉢などの器種がある。広口壺(74・75・98)は無文化し(71~73)、小形のものが多くみられる(71・72)。凹線文が少条になり(74・75)、櫛描き文が衰退する。口縁部を屈曲させ、少条の凹線文を施す短頸壺がみられる。水差(77~79)には長頸した小形品が現われる。80・81・83は、無頸壺である。甕は「く」の字状の口縁のものと瀬戸内系甕が引き続き存続するが、前者は口縁の屈曲がより明瞭になり後期的な甕に近づく(82・84)。一方、口縁が短く屈曲して外傾する端面・浅い凹線文をもつ甕(86)がみられるようになる。高杯は椀状の杯部のもの(91・92)と水平に開いたのちに垂下するもの(93)などのほか、口縁が直立するもの(88)や内傾ぎみに立ち上がるもの(89)などがある。88・89・92のように小形品の閉める割合が高い(志高遺跡SH86201)。85は鉢、87は台付鉢である。

94~97は、興遺跡SX01から出土したものである。遺構ははっきりしないが4個体の土器がほぼ完存した状態で一括出土した。壺(94)は、98と同形同大だが、98と比べ最大腹径が下がり、口縁がより屈曲し、端部も薄く処理されている。98よりさらに後出するものと思われる。95は短頸壺、96は長頸壺、97は近江型の甕である。

以上、第Ⅲ・Ⅳ様式を5つの小様式に分けて、主な土器を示し由良川流域の中期後半期土器の変遷をたどってみた。第Ⅳ-2様式以外、特に第Ⅲ-2様式・第Ⅳ-1様式は資料が少なく主観的なものになった。第Ⅲ様式の資料は最近、舞鶴市桑飼上遺跡でまとまった出土があり(1990~1991年調査)、現在整理が進められているところである。この資料が公にされることによって第Ⅲ様式が明らかにされ、第Ⅳ-1様式の存在がより明瞭になるものと期待される。

本文が当該地域土器研究の上でいささかでも役に立つものとなれば幸いである。

なお、41は綾部市の調査で出土したもので未発表の資料である。図面使用に際し綾部市教育委員会近澤豊明氏の御協力を得た。記し、謝意を表します。

(田代 弘)

34	甕 C 3	口径32.7 残高7.8	△0.1～0.2 軟 黄灰色	短く屈曲する口縁部。端面 を強くナデ、外傾する面を 作る。	外面ハケ、内面ナデ。	
35	高杯 B 2	口径25.7 残高4.6	◎0.1未満 軟 淡橙褐色	垂下する口縁部。	外面ヘラ磨き、内面不 明。	黒斑あり
36	高杯 A 1	口径27.2 残高8.0	◎0.1未満 良好 淡黄褐色	椀状の杯部。外面に凹線文 2条。	内外面ヘラ磨き。	
37	高杯 A 1	口径33.4 残高6.8	◎0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	椀状の杯部。外面に凹線文 3条。	外面下半ハケ後ヘラ削 り。部分的にヘラ磨き 内面ハケ後ヘラ磨き。	黒斑あり
38	高杯脚	底径14.4 残高15.4	◎0.1～0.2 良好 橙褐色		器壁荒れ調整不明。脚 柱部内面に絞り目。	黒斑あり
第48図 39	広口壺 B	口径11.0 残高3.2	○0.1～0.2 軟 淡橙白色	円筒状の頸部から口縁が水 平に開く。	内外面ナデ。	
40	広口壺 B	口径11.0 残高5.7	◎0.1～0.2 軟 淡橙灰色	円筒状の頸部から口縁が短 く外反。	内外面ナデ。	
41	広口壺 B	口径13.8 残高5.5	◎0.1～0.2 良好 淡橙灰色	円筒状の頸部から口縁が大 きく開く。頸部に列点文。	内外面ナデ。	
42	広口壺 B	口径13.5 残高1.4	◎0.1～0.2 良好 灰褐色	口縁端面及び内面に波状文	内外面ナデ。	
43	広口壺 C 2	口径14.3 残高11.0	△0.1～0.3 やや軟 淡橙灰色	短い円筒状の頸部から口縁 が外反して立ち上がる。端 面、頸部に凹線文。		C 2の小 形品。長 胴傾向。
44	広口壺 A 2	口径19.2 残高3.7	○0.1～0.2 良好 淡橙灰色	大きく開く口縁部。端部に 狭い面を作る。	内外面ハケ。	
45	広口壺 A 2	口径18.7 残高7.5	○0.1～0.2 良好 橙褐色	大きく開く口縁部。頸部に 円形の刺突文。	内外面ナデ。	
46	広口壺 C 2	口径21.0 残高2.0	△0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	口縁端面に凹線文4条+ヘ ラによる平行直線文。内面 に櫛描き波状文。	内外面ナデ。	
47	広口壺 C 2	口径20.8 残高2.0	○0.1～0.2 やや軟 明橙褐色	口縁端面に凹線文4条。	内外面ナデ。	
48	広口壺 C 2	口径21.2 残高6.0	○0.1～0.2 良好 黄褐色	円筒状の短い頸部から外反 する口縁部。端面に凹線文 と棒状浮文。頸部に凹線文	頸部外面ハケ、内面ナ デ。	
49	広口壺 A 3	口径20.8 残高9.5	◎0.1～0.3 良好 茶褐色	口縁部を斜め下方に拡張、 凹線文+平行直線文。頸部 に凹線文5条。	外面ハケ。口頸部内面 ナデ、体部ハケ。	
50	広口壺 B	口径20.0 残高1.8	○0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	口縁端面に凹線文2条、内 面に列点文をめぐらす。	内外面ナデ。	

51	直口壺	口径9.8 残高8.7	◎0.1～0.2 良好 淡黄褐色	直線的に立ち上がる口縁部 口縁部外面に凹線文2条。	内外面ハケ。	
52	直口壺	口径24.8 残高3.3	△0.1未満 良好 淡橙褐色	直口する口縁を持つ大形品 外面に櫛描き直線文+波状 文、端部に凹線文4条。	内面ハケ。	
53	水差形 B	口径10.7 残高15.5	△0.1～0.2 良好	直口する口縁。口縁部に凹 線文5条。長胴。	内外面ハケのちナデ。	
54	甕 A 1	口径15.7 残高7.4	◎0.1～0.2 良好 橙灰色	「く」の字に外反する口縁 端部に内傾する面をもつ。	体部外面縦ハケ。口縁 内面横ハケ、体部ハケ のちナデ。	
55	甕 A 1	口径14.4 残高10.0	◎0.1未満 やや軟 淡橙褐色	「く」の字に外反する口縁 端部に面をもつ。	体部外面ハケ、内面ハ ケのちナデ。	
56	甕 A 4	口径8.7 残高13.0	○0.1～0.2 やや軟 暗黄褐色	ゆるやかに外反した後、内 湾して立ち上がる口縁。	内外面ハケのちナデ。	
57	甕 A 3	口径16.0 残高14.0	◎0.1～0.3 良好 黒褐色	あまり屈曲せずに立ち上 がる口縁。端面をつまみ出す 粗製。	体部外面縦方向のヘラ 削り。口縁内面ハケ、 体部内面ヘラ削り。	
58	甕 A 1	口径13.3 残高5.3	○0.1～0.2 良好 茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。口唇部に3個一對のキ ザミ目文。	内外面ハケのちナデ。	
59	甕 A 1	口径14.8 残高3.9	○0.1～0.2 良好 茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。口唇部に3個一對のキ ザミ目文。	内外面ハケのちナデ。	
60	甕 B	口径12.6 残高5.0	◎0.1～0.2 良好 淡黄褐色	口縁端面をわずかにハネ上 げる。	体部外面縦ハケ、内面 横ハケ。	
61	甕 B	口径14.2 残高4.4	△0.1～0.2 軟 淡橙灰色	ハネ上げ口縁。	内外面ナデか。	
62	甕 B	口径13.8 残高6.5	◎0.1未満 良好 淡黄褐色	ハネ上げ口縁。	体部内外面ハケ。	
63	甕 B	口径21.2 残高3.7	○0.1未満 良好 淡茶褐色	口縁端面をわずかにハネ上 げる。	外面ハケ、内面ナデ。	
64	甕 B	口径17.2 残高6.4	○0.1～0.2 良好 茶褐色	ハネ上げ口縁。	外面ハケ、内面口縁ハ ケ、体部ナデ。	スス附着
65	甕 B	口径12.0 残高4.5	○0.1～0.2 良好 淡茶褐色	ハネ上げ口縁。	外面ナデ、体部内面ハ ケのちナデ。	
66	甕 A 1	口径10.5 残高5.4	○0.1～0.2 やや軟 淡茶灰色	「く」の字状に短く外反す る口縁。端部丸くおさめる。	体部外面ハケ後ナデ、 内面ナデ。	
67	甕 A 1	口径28.8 残高17.0	○0.1未満 良好 橙褐色	「く」の字状に外反する口 縁。大形である。	体部内外面ハケのちナ デ。	

第50図 68	無頸壺 A	口径12.2 残高5.8	○0.1~0.2 良好 茶褐色	内傾して立ち上がる。端部をわずかに内側に拡張。口縁部、体部に凹線文。紐孔	調整不明。	
69	無頸壺 C	口径12.8 残高4.9	◎0.1未満 良好 淡茶褐色	口縁部外面を肥厚し段状口縁をなす。口縁下端に凹線文。2個一対の紐孔あり。	ナデか。	黒斑あり
70	無頸壺 A	口径12.4 残高5.1	◎0.1未満 良好 淡茶褐色	内傾して立ち上がる。口縁部に凹線文4条。	内外面粗い縦ハケ。	
71	無頸壺 B	口径21.0 残高5.9	○0.1~0.2 やや軟 橙褐色	口縁部を内側に拡張。外面に凹線文6条。	内面にハケ残る。	黒斑あり
72	鉢 A	口径15.7 残高5.9	◎0.1~0.2 良好 淡橙褐色	屈曲してゆるやかに外反する口縁。	外面ハケ。内面ナデ。	
73	鉢 A	口径17.5 残高7.0	○0.1~0.2 良好 茶褐色	屈曲してゆるやかに外反する口縁。	内外面縦ハケ。	黒斑あり
74	台付鉢 A	口径18.6 残高5.1	○0.1~0.2 良好 暗赤褐色	水平にのびる口縁。浅い器体を有する。	内外面ハケ。	
75	台付鉢 D 1	口径7.6 器高13.6	○0.1~0.2 良好 黄褐色	直口する口縁。小さく低い脚部を有する。口縁と頸部に凹線文。	内外面ヘラ磨き。 円盤充填。	
76	台付鉢 D 2	口径10.7 残高5.6	◎0.1~0.2 やや軟 淡橙褐色	屈曲した後、口縁が直口する。口縁部と屈曲部に凹線文。	内外面ナデ。	
77	高杯 B 1	口径20.2 残高7.1	○0.1~0.2 良好 茶褐色	水平にのびる口縁。	外面ハケ。内面強いナデ。	
78	高杯 B 2	口径15.6 残高6.6	○0.1~0.2 軟 黄褐色	水平にのびた後、垂下する口縁。	器壁荒れ調整不明。	
79	高杯 1	口径25.2 残高6.3	◎0.1~0.2 良好 淡黄褐色	椀状の杯部から直口する口縁。	調整不明。	黒斑あり
80	高杯 A 1	口径30.0 残高4.4	◎0.1未満 良好 茶褐色	椀状の杯部から直口する口縁。	内外面ヘラ磨き。	
81	高杯 A 3	口径32.9 残高7.8	△0.1~0.3 やや軟 茶褐色	口縁外面に粘土帯を貼り付け、段状口縁をなす。	外面ヘラ磨き。内面ハケ。	
82	高杯脚	底径13.5 残高16.0	○0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	脚柱部に凹線文。透かしあり。	外面ヘラ磨き。内面ヘラ削り。杯部下半外面ヘラ削り。円板充填。	
83	高杯脚	底径14.9 残高17.4	◎0.2~0.3 良好 黄褐色	脚部無文。	外面ヘラ磨き。内面ヘラ削り。杯部下半外面ヘラ削り。円板充填。	
第51図 84	広口壺 A 2	口径21.8 残高5.9	○0.1~0.2 良好 橙褐色	大きく開く口縁。内面に蕨手状文+扇形文。	外面縦ハケ、内面横ハケ。	

85	広口壺 A 3	口径22.7 残高4.9	◎0.1未満 良好 橙褐色	口縁部を斜下方に拡張し、 凹線文を施す。口縁内面に 櫛描き波状文+扇形文。	内外面ナデ。	
86	広口壺 B	口径22.5 残高2.2	○0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	水平に開く口縁。端面に凹 線文+キザミ目文。内面に 凹線文+櫛描き波状文。	内外面ナデ。	黒斑あり
87	広口壺 A 4	口径20.1 残高3.3	◎0.1~0.2 良好 茶褐色	大きく開く口縁。やや外傾 する端面に凹線文、円形浮 文を施す。	内外面ナデ	
88	広口壺 E	口径21.7 残高10.1	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁に粘土紐を貼り付け断 面円形の口縁をなす。頸部 に凹線文、列点文。	頸部外面ヘラ磨き。内 面ハケのちナデ。	
89	広口壺 C 1	口径19.0 残高29.1	◎0.1未満 良好 淡黄橙色	短く外反する口縁。端面に 櫛描き波状文。頸~胴部に 櫛描き直線文と波状文。	体部外面上半ハケ、下 半ヘラ磨き。内面上半 ハケ、下半ヘラ削り。	
90	広口壺 D	口径17.3 残高7.6	△0.1~0.2 軟 淡茶褐色	短く外反する口縁。端部に 面を持つ。	内外面ハケのちナデ。	
91	広口壺 B	口径14.4 残高15.2	△0.1~0.2 軟 淡橙灰色	口縁端面に凹線文+列点文 頸~胴部に列点文・櫛描き 波状文・直線文。	外面ナデ。内面はハケ のちナデ。	
92	広口壺 C 1	口径19.6 残高3.3	◎0.1~0.2 良好 淡橙褐色	太く短い頸部から外反する 口縁部。端面に櫛描き波状 文。	頸部外面縦ハケ。内面 横ハケ。	
93	広口壺 C 2	口径18.7 残高9.4	△0.1未満 良好 橙褐色	口縁端面に凹線文4条+円 形浮文。頸部に凹線文5条	内外面ナデ。	
94	受け口 壺	口径21.6 残高6.1	◎0.1~0.2 良好 淡橙褐色	屈曲して立ち上がる口縁。 口縁部に凹線文1条。	頸部外面ハケ、内面部 分的にハケ残る。	
95	直口壺	口径8.0 残高7.7	△0.1未満 やや軟 赤褐色	直口する短い口縁部。	外面縦ハケ。内面横ハ ケ。	
96	無頸壺 E	口径7.9 残高7.0	◎0.1~0.2 良好 明橙褐色	短い頸部から口縁部が外反 2個一対の紐孔。	内外面ナデ。	
第52図 97	広口壺 C 1	腹径36.0 残高17.0	○0.1~0.2 やや軟 淡茶白色	扁球形の体部。頸~胴部に 櫛描き直線文・波状文を交 互に施す。	外面ハケ、内面ナデ。	黒斑あり 体部一部 のみ残存
98	広口壺	頸径13.8 残高20.4	△0.1~0.5 やや軟 黄褐色	円筒状の頸部から大きく開 く口縁部。頸部に幅広の刺 突文凹帯。把手をもつ。	体部外面下半。 体部内面横ハケ。	把手付壺
99	広口壺 F	口径25.9 残高4.0	○0.1~0.2 良好 淡赤褐色	外反したのち内側へ屈曲す る口縁部。斜格子文を施す 大形である。	外面縦ハケ後横ハケ。 内面ナデ。	
100	甕 C 3	口径24.2 残高12.8	△0.1~0.2 やや軟 黄褐色	屈曲して短く外反する口縁 外傾する端面をもつ。	内外面ハケのちナデ。	
101	甕 B	口径22.8 残高24.3	○0.1~0.2 やや軟 淡黄白色	ハネ上げ口縁。端部に凹線 文を施す。	外面縦ハケ。内面上半 ハケのちナデ、下半は ヘラ削り。	黒斑あり

第53図	広口壺 A	腹径27.4 残高43.2	△0.1～0.4 やや軟 淡橙白色	円筒状の頸部。算盤玉形の 体部。頸部に凹線文。頸～ 胴間に櫛描直線文+波状文	内外面ハケのちナデ。	口縁部欠 損
103	甕	頸径9.2 残高10.8	△0.1～0.2 軟 淡褐色	頸部に凹線文1条。	内外面下半にヘラ削り。	口縁部欠 損
104	甕 B	口径12.5 残高16.2	◎0.1～0.2 軟 淡灰褐色	ハネ上げ口縁。端面に強い ナデ。	内外面縦ハケ。	
105	甕 A 1	口径16.2 残高14.7	◎0.1～0.2 良好 褐色	「く」の字状に外反する口 縁。端部に4個一對の押圧 文。	外面縦ハケ。口縁内面 横ハケ、体部上半縦ハ ケ。下半はヘラ削り。	
106	甕 A 1	口径16.3 器高23.3 底径5.3	◎0.1～0.2 良好 淡橙褐色	「く」の字状に外反する口 縁。端部に6個一對のキザ ミ目文。	体部内外面ハケ。内面 下半ナデ。	
107	甕 A 1	口径21.4 残高26.4	◎0.1～0.2 良好 黒褐色	「く」の字状に外反する口 縁。端部に5個一對の押圧 文。	体部内外面ハケ。	
108	甕 B	口径18.4 残高10.0	◎0.1～0.2 やや軟 黄褐色	ハネ上げ口縁。端面に強い ナデ。	体部外面平行タタキの ちナデ。内面ハケ。	
109	甕 A 1	口径20.0 残高24.0	△0.1～0.2 軟 淡黄褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	体部内外面ハケのちナ デ。	外面下半 スス付着
110	甕 A 1	口径13.4 器高21.2 底径5.2	△0.1～0.2 やや軟 明茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	体部外面ハケ、内面ナ デ。	外面下半 スス付着
111	甕 B	口径11.3 器高15.6 底径5.5	◎0.2～0.3 良好 茶褐色	ハネ上げ口縁。体部に列点 文をめぐらす。	体部外面ハケ。内面上 半ハケ、下半ヘラ削り	体部外面 スス付着
第55図	甕 B	口径13.0 器高21.0 底径5.4	◎0.1～0.2 やや軟 淡橙灰色	ハネ上げ口縁。	外面上半粗いハケ、下 半ヘラ磨き。内面ヘラ 削り。	外面下半 スス付着
113	甕 B	口径12.5 器高20.5 底径6.4	◎0.1～0.2 良好 茶褐色	ハネ上げ口縁。	外面上半ナデ下半浅い ヘラ削り。内面ヘラ削 り。	外面下半 スス付着
114	鉢	底径5.8 残高10.2	◎0.1未満 やや軟 赤褐色	下ぶくれの体部を有する。	外面ナデ。内面横ハケ	体部外面 スス付着
115	無頸壺 C	口径12.2 器高13.5 底径4.9	△0.1～0.6 やや軟 淡茶褐色	口縁外面に粘土紐を付加す る。算盤玉形の体部。	外面縦ハケ。内面口縁 部横ハケ、体部斜めハ ケ。	黒斑あり
116	台付鉢 C 1	口径17.7 器高14.2 底径7.5	◎0.1～0.5 やや軟 淡褐色	「く」の字状に外反する口 縁。端部に5個一對の刻み 目文。「ハ」形の短い脚部	体部外面ヘラ削りのち ハケ。内面ハケ。	外面上半 スス付着
117	台付鉢 C 2	口径16.6 器高17.4 底径10.3	△0.2～0.4 良好 黄褐色	ハネ上げ口縁。	杯部内外面ハケ。脚部 外面ハケ、内面ヘラ削 り。円板充填。	外面上半 スス付着
118	鉢 A	口径21.1 器高13.9 底径7.6	◎0.1～0.3 良好 黄褐色	「く」の字状の口縁。	内外面ハケ。	外面下半 スス付着 ほぼ完存

119	鉢 A	口径30.9 残高21.2	△0.1~0.2 やや軟 淡橙褐色	「く」の字状の口縁。大形である。	体部外面ハケ。内面ナデ。	
第56図 120	鉢 B	口径24.7 残高13.5	◎0.1未満 良好 明灰褐色	ハネ上げ口縁。	体部外面ナデ、下半ヘラ削り。内面縦ハケ。	外面スス附着。
121	鉢 B	口径28.2 残高9.6	△0.1~0.2 やや軟 黄褐色	ハネ上げ口縁。	体部内外面ハケ。	
122	台付鉢 D 1	口径21.2 残高9.0	◎0.1~0.2 良好 明灰褐色	屈曲せずに立ち上がり直口する口縁をもつ。	体部外面ハケ残る。	
123	脚部	底径6.7 残高3.3	△0.1~0.2 良好 淡赤褐色	「ハ」の字形の簡略な脚。台付鉢の脚部であろう。	外面斜めハケ。杯部内面ヘラ削り。	粗製品。
124	高杯脚	底径9.0 残高10.6	◎0.1~0.2 良好 淡橙白色	脚端に凹線文3条。	外面縦ハケ。内面ナデ柱状部に絞り目。	黒斑あり
125	台付鉢	底径9.1 残高4.0	○0.1~0.2 軟 淡黄褐色	短く直線的な脚。楕円形の透かしがある。脚端に凹線文3条。	内外面ナデ。	
126	台付鉢 D 2	口径10.8 器高19.9 底径11.4	◎0.1~0.2 良好 赤褐色	屈曲したのち内傾して立ち上がる。直口。口縁部に凹線文3条。	内外面ハケのち部分的にナデ。	
127	高杯 A 3	口径34.5 残高8.2	◎0.1~0.2 良好 灰褐色	口縁外面に粘土紐を付加。	器壁荒れており調整不明。内面にハケ残る。	
128	高杯 A 3	口径34.5 残高16.6	◎0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁外面に粘土紐を付加。	外面ヘラ磨き。内面上半ヘラ磨き、下半縦ハケ後磨き。円板充填。	外面スス附着。黒斑あり。

S D03

番号	器種	法量	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第57図 1	広口壺 A 2	口径15.9 残高4.5	△0.1~0.2 軟 暗灰色	外反して立ち上がる口縁。端部に面をもつ。	内外面ナデ。	
2	広口壺 B	口径18.0 残高2.4	○0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	水平に開く口縁。端部に面をもつ。	内外面ナデ。	
3	広口壺 B	口径17.5 残高1.7	○0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	水平に開く口縁。端面に凹線文2条。	内外面ナデ。	
4	長頸壺	口径12.8 残高7.0	◎0.1~0.3 良好 黄褐色	屈曲して直口する口縁部。	外面ナデ。内面部分的にハケ残る。	
5	長頸壺	口径12.0 残高6.0	△0.1~0.2 軟 茶褐色	斜上方に直線的に立ち上がった後内湾して直口する口縁部。口縁部に凹線文。	外面ハケ。内面ナデ。	



6	長頸壺	口径9.4 残高5.2	◎0.1未満 良好 茶褐色	外面に櫛描き直線文2帯。	外面ナデ。内面ヘラ磨き。	器面に赤色顔料塗布。
7	長頸壺	口径9.8 残高17.8	◎0.1未満 良好 黄褐色	斜上方に直線的に立ち上がる口縁部。算盤玉形の体部。把手・脚部を有する。	外面ヘラ磨き。口縁内面ヘラ磨き。体部内面ハケのちナデ。	
8	広口壺 A 4	口径37.4 残高6.4	○0.1未満 良好 赤褐色	大きく外反する口縁。端面を垂直に拡張。凹線文、円形浮文を施す。	内面、外面に部分的にハケ残る。	
9	甕 A 1	口径39.2 残高8.9	△0.1～0.2 やや軟 淡茶褐色	「く」字状に外反する口縁。	体部外面縦ハケ。口縁内面横ハケ。	大形。
10	甕 A 1	口径10.2 残高5.4	○0.1～0.2 軟 淡黄褐色	「く」字状に短く外反する口縁。	内外面ナデ。	
11	甕 A 1	口径14.6 残高11.8	○0.1～0.2 やや軟 茶褐色	「く」字状に外反する口縁。	外面斜行するハケ。内面横ハケ。	
12	壺底部	底径9.2 残高20.2	△0.1～0.2 やや軟 茶褐色		外面下半ヘラ磨き。内面ハケ。	
第58図 13	高杯 A 2	口径12.3 残高3.2	○0.1～0.2 良好 淡褐色	屈曲ぎみに立ち上がる口縁。屈曲部に凹線文2条。	調整不明。	
14	高杯 A 1	口径12.3 残高4.4	○0.1～0.2 軟 黄褐色	椀状の杯部から直口する口縁。口縁部に凹線文2条。	内面ヘラ磨き。	
15	高杯 A 2	口径17.6 残高3.9	◎0.1未満 良好 茶褐色	屈曲して立ち上がる口縁。屈曲部に凹線文。	内外面ヘラ磨き。	
16	高杯 A 1	口径17.2 残高4.7	○0.1～0.2 軟 淡橙褐色	椀状の杯部から直口する口縁部。外面に凹線文2条。	内外面ヘラ磨き。	黒斑あり
17	高杯 A 1	口径16.8 残高4.2	○0.1～0.2 軟 明橙褐色	椀状の杯部から直口する口縁部。外面に凹線文2条。	調整不明。	
18	高杯 C	口径12.8 残高3.9	◎0.1～0.2 良好 淡黄褐色	屈曲して外反する口縁。	内外面ナデ。	
19	高杯脚	底径7.5 残高8.9	△0.1～0.2 軟 淡茶褐色	柱状の脚部。円形の透かしあり。	外面ハケ、内面ヘラ削り。	黒斑あり
20	高杯脚	底径11.5 残高10.8	◎0.1～0.2 良好 明茶褐色	「ハ」状に開く脚部。脚端に凹線文。	外面ヘラ磨き。内面ヘラ削り。円板充填。	黒斑あり
21	高杯 A 1	口径27.2 残高5.7	○0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	椀状の杯部から直口する口縁。凹線文4条。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	
22	鉢	口径7.2 残高3.8	△0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	椀状の体部から口縁が短く屈曲。	調整不明。	ミニチュア

23	鉢 A	口径14.4 残高4.3	△0.1～0.2 やや軟 明褐色	ゆるやかに外反して立ち上 がる。端部を拡張して凹線 文2条施す。	内外面ナデ。	
24	高杯 A 1	口径13.5 残高5.3	△0.1～0.2 やや軟 黄褐色	椀状の杯部。端部をわずか に内側へつまみ出す。	内外面へラ磨き。内面 下半にへラ削り。	
25	高杯 A 1	口径11.0 器高9.5 底径6.0	◎0.1～0.2 良好 赤褐色	椀状の杯部。透かしあり。	杯部内外面へラ磨き。 脚部内面へラ削り。円 板充填。	
26	無頸壺 A	口径18.3 残高8.7	0.1～0.4 良好 橙褐色	内湾して立ち上がる口縁。 口縁部外面に凹線文2条。	調整不明。	器体に赤 色顔料塗 布。
27	無頸壺 A	口径16.0 残高10.3	◎0.1 良好 橙褐色	内傾して立ち上がる。算盤 玉形の体部。最大腹径部に 凹線文3条。	外面上半へラ磨き。下 半ハケ。内面ナデ。	赤色顔料 塗布。
28	高杯 C	口径21.2 残高6.4	◎0.1未満 良好 茶褐色	屈曲して大きく外反する口 縁。屈曲部に細く浅い凹線 文4条。	内外面へラ磨き。	
29	器台	底径15.4 残高8.5	○0.1～0.2 軟 橙褐色	脚部に凹線文8条。円形の 透かしあり。	内面ナデ。	
30	器台	底径20.2 残高7.8	△0.1～0.2 軟 黄褐色	脚端に凹線文2条。円形の 透かしあり。	外面ハケ、内面ナデ。	
31	器台	底径21.5 残高13.2	○0.1～0.2 やや軟 黄褐色	器体外面に凹線文を施す。 楕円形の透かしあり。	内面横ハケ。	黒斑あり

S K 02

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第59図 1	広口壺 B	口径11.8 残高4.3	◎0.1未満 良好 淡茶褐色	口縁端面に凹線文3条。円 形浮文が3条残る。円面に 10条の櫛描き波状文。	内外面ナデ。	
2	壺頸部	頸径10.2 残高7.1	△0.1～0.2 やや軟 黄褐色	頸部に凹線文。頸部以下に 櫛描き直線文。櫛描き波状 文。	頸部外面ハケ残る。円 面調整不明。	
3	甕底部	底径5.9 残高12.7	◎0.1～0.2 良好 暗茶褐色		内外面へラ削り。	
4	甕 A 1	口径17.2 残高3.8	○0.1～0.2 良好 明茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	内外面ハケ。	
5	無頸壺	残高10.8	◎0.1～0.2 良好 茶褐色	椀状の杯部。外面に凹線文 3条。脚柱部に凹線文4条 円板充填法。	杯部内外面へラ磨き。 脚部外面ナデ、内面へ ラ削り。	黒斑あり
6	高杯 A 1	口径23.7 残高11.7	◎0.1～0.2 良好 暗灰褐色	椀状の杯部。口縁部に凹線 文2条。円板充填法。	杯部内外面へラ磨き。 脚部内外面ナデ。	

## S K03

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第60図 1	甕 A 1	口径24.4 残高5.5	○0.1~0.2 やや軟 淡茶褐色	外傾する狭い端面をもつ。	外面調整不明。内面ナ デ。	黒斑あり。
2	甕底部	底径8.2 残高3.6	△0.1~0.3 やや軟 茶褐色		外面ヘラ削り。内面ナ デ。外底面ハケ。	

## S K06

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第60図 3	無頸壺 A	口径16.0 残高4.6	○0.1~0.2 良好 黒褐色	やや内傾して立ち上がる。 端部に内傾する狭い面をも つ。2孔一対の紐孔あり。	外面ナデ。内面ハケ。	
4	広口壺 A 3	口径22.1 残高4.4	○0.1~0.2 良好 茶褐色	口縁部を斜め下方へ拡張す る。	外面ハケ。内面ナデ。	

## S K07

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第60図 5	甕 B	口径13.9 残高5.3	◎0.1~0.2 良好 淡黄褐色	ハネ上げ口縁。	内外面ナデ。	
6	甕	口径17.8 残高4.1	△0.1~0.2 軟 灰褐色	ゆるやかに外反して立ち上 がる口縁。	内外面ナデ。	
7	水差形 土器	口径9.0 推定高 22.8	△0.1~0.2 良好 淡黄褐色	直線的に立ち上がる口縁。 凹線文を4条施す。算盤玉 形の体部。円板充填法。	口縁外面ハケ、内面ヘ ラ削り。体部外面上半 ハケ、下半ヘラ削り、 内面ナデ。脚外面ヘラ 磨き、内面ヘラ削り。	

## S K08

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第61図 1	広口壺 B	口径17.0 残高37.0 底径7.0	◎0.1未満 良好 淡赤褐色	円筒状の頸部から水平に開 く口縁。口縁端面・頸部に 凹線文。頸部に列点文。	外面ハケのち下半ヘラ 磨き。内面ハケのち下 半ヘラ削り。	黒斑あり
2	広口壺 B	口径20.2 残高34.0 腹径30.2	○0.1~0.2 やや軟 淡橙褐色	口縁端面、体部外面に櫛描 き波状文。頸部に凹線文1 条。口縁内面に扇形文。	外面ハケ。内面口縁部 ナデ。体部ハケのち下 半ヘラ削り。	黒斑あり
3	短頸壺 B	口径12.0 残高8.9	◎0.2~0.4 良好 橙褐色	短い頸部から外反する口縁。 端面に凹線文+羽状文。頸 部に凹線文、体部に波状文	外面ナデ。内面斜めハ ケ。	

4	甕 A 1	口径13.4 残高7.2	△0.1~0.2 軟 茶褐色	「く」字状に外反する口縁。	調整不明。体部内面に指圧痕あり。	
5	甕 A 1	口径14.4 残高10.4	○0.1~0.2 良好 茶褐色	「く」字状に外反する口縁。	内外面ハケ。	
6	甕 A 1	口径17.3 残高11.2	△0.1~0.2 やや軟 橙褐色	「く」字状に外反する口縁。	内外面ハケ。	
第62図 7	無頸壺 A	口径13.4 残高4.0	◎0.1未満 良好 淡黄褐色	内傾して立ち上がる口縁。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	黒斑あり
8	無頸壺 A	口径13.6 残高9.0	◎0.2~0.5 やや軟 淡茶褐色	内傾して立ち上がる口縁。 紐孔あり。	外面ヘラ磨き。内面上半ナデ、下半ヘラ磨き 円板充填。	黒斑あり
9	脚部	底径10.2 残高9.4	○0.1~0.2 良好 淡橙褐色	「ハ」状に開く。脚端に凹線文。	外面ヘラ磨き後ナデ。 内面杯部ヘラ磨き、脚部ヘラ削り。円板充填	
10	高杯部	底径9.5 残高4.0	◎0.1未満 良好 淡茶褐色	「ハ」状に開く。脚端に凹線文。透かしあり。	外面ヘラ磨き。内面ヘラ削り。	
11	甕 A 2	口径20.1 残高27.4 底径7.0	○0.1~0.2 良好 暗茶褐色	口径に対して器高が低く寸づまりの体部をもつ。	外面ハケ後下斑ヘラ磨き。内面口縁横ハケ、体部ナデ。底部指圧痕	

S K09

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第63図 1	高杯 A 1	口径25.3 残高3.4	○0.1~0.2 良好 赤褐色	口縁外面を強くナデる。	外面ヘラ磨き。内面ナデ。	黒斑あり
3	甕 A 1	口径26.4 残高12.9	○0.1 良好 茶褐色	「く」の字状に外反する口縁。	外面縦ハケ。内面調整不明。	黒斑あり

S K10

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第63図 5	広口壺 B	口径9.8 残高3.1	○0.1~0.2 やや軟 明黄褐色	2条。	ナデ。	
6	甕 A 1	口径13.6 残高6.1	◎0.1未満 軟 茶灰色	「く」の字状に外反する口縁。	内外面ハケ。	体部外面スス付着

## S K 11

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第63図 2	高杯 A 1	口径23.8 残高5.8	○0.1~0.2 良好 赤褐色	椀状の杯部。口縁部に凹線 文3条。	器壁荒れ調整不明。	
3	甕 A 1	口径23.8 残高9.6	○0.1~0.2 良好 褐色	「く」の字状に外反する口 縁。体部外面にヘラ刻み。	器壁荒れ調整不明。	外面スス 附着。

## S K 14

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第63図 7	広口壺 A 4	口径20.2 残高3.2	◎0.1未満 良好 黄褐色	大きく開く口縁。端部を上 下に拡張。口縁端部と内面 に櫛描き波状文。	外面ナデ。内面斜めハ ケ。	
8	鉢 A	口径20.2 残高9.3	△0.1~0.2 軟 明茶色	ゆるやかに屈曲する口縁。 口唇部をつまみ上げる。	外面調整不明。内面へ ラ磨き。	

## S K 15

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第64図 1	甕 A 1	口径14.8 残高8.7	△0.1~0.2 軟 淡茶灰色	「く」の字状に外反する口 縁。	調整不明。	
2	甕 A 1	口径14.5 残高15.5	○0.1~0.2 やや軟 茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	内外面斜めハケ。	体部外面 スス附着
3	甕底部	底径4.9 残高4.5	○0.1~0.2 やや軟 茶褐色		内外面斜めハケ。	
4	甕 B	口径18.4 残高4.2	◎0.1未満 良好 暗茶褐色	口縁端面をわずかにハネ上 げる。	外面調整不明。内面斜 めハケ。	
5	甕 A 1	口径19.0 残高3.4	◎0.1~0.2 良好 淡茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。端部にわずかに面をも つ。	内外面ハケ。	
6	直口壺	口径13.0 残高8.3	○0.1~0.2 軟 黄褐色	直口する口縁。口縁部に凹 線文5条。	調整不明。	
7	高杯脚	残高7.9	◎0.1~0.2 良好 黄褐色	柱状部に凹線文。透かしあ り。	外面ヘラ磨き。内面へ ラ削り。	
8	高杯脚	底径10.6 残高4.0	○0.1~0.2 良好 黄褐色	大きく開く脚部。	外面ヘラ磨き。内面へ ラ削り。	
9	甕 C 3	口径28.6 残高8.8	○0.1~0.2 軟 淡橙褐色	「く」の字状に屈曲する口 縁。外傾する端面を作る。 端面に凹線文2条。	体部外面タテハケ。口 縁外面指圧痕並ぶ。内 面調整不明。	

## S K16

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第66図 1	広口壺 B	口径17.2 残高4.9	△0.1未満 良好 淡赤褐色	端部をやや拡張する。	ハケ。	
2	広口壺 A 4	口径17.1 残高10.2	△0.1～0.3 軟 茶褐色	水平に開く口縁。端面に櫛 原体による列点文2列。頸 部に櫛描き文。	外面ハケ。内面ヘラ削 り。	
3	広口壺 C 2	口径20.0 残高8.3	○0.1～0.2 軟 橙褐色	口縁端面に凹線文2条。棒 状浮文2個残る。	調整不明。	
4	直口壺	口径12.2 残高7.6	◎0.1未満 良好 黄褐色	直口する口縁。凹線文6条 施す。	内外面ナデ。	
5	直口壺	口径17.4 残高6.1	◎0.1～0.2 良好 淡黄褐色	直口する口縁。口縁部に凹 線文3条。頸部に2条。	外面縦ハケ。内面横ハ ケのちなデ。	
6	高杯脚	底径14.0 残高14.4	△0.1～0.3 やや軟 橙灰色	柱状脚。下端が大きく開く。 外面に細く浅い凹線文。裾 部に透し2段。	器壁荒れ調整不明。脚 柱部内面に絞り目。	
7	鉢 A	口径21.6 残高5.6	○0.1～0.2 良好 淡赤褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	内外面ハケ。	
8	甕 A 1	口径13.6 残高6.0	○0.1未満 良好 赤褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	外面ハケ。内面ナデ。	体部外面 スス附着
9	壺	口径15.2 残高10.6	△0.1未満 良好 淡黄褐色	粗製である。		体部外面 スス附着
10	高杯 A	口径30.0 残高4.1	△0.1未満 良好 淡黄褐色	椀状の杯部から直口する口 縁部。口縁部に凹線文3条 間に櫛原体による列点文。		
11	甕 A	口径34.0 残高5.8	△0.1～0.3 良好 淡茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	内外面ハケ。	

## S K17

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第65図 1	高杯 A 1	口径29.0 残高4.3	○0.1～0.2 やや軟 黄灰色	椀状の杯部から直口する口 縁。口縁部に凹線文3条。	内外面ヘラ磨き。	黒斑あり
2	高杯 A 1	口径30.2 残高4.3	○0.1未満 やや軟 淡橙褐色	椀状の杯部から直口する口 縁。口縁部に凹線文2条。	器壁荒れ調整不明。	
3	高杯脚	残高13.0	○0.1～0.2 良好 淡黄褐色	上部に7条、下部に5条の 凹線文。透かしあり。杯部 内底部は円板充填。	外面ヘラ磨き。内面ヘ ラ削り。脚柱部に絞り 目。	

4	直口壺	口径16.1 残高5.6	○0.1~0.2 やや軟 橙褐色	直口する口縁。口縁部に2 条の凹線文。	器壁荒れ調整不明。	
---	-----	-----------------	------------------------	------------------------	-----------	--

## S K 19

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第67図 1	広口壺 A 4	口径27.9 残高2.2	△0.1~0.2 軟 淡橙褐色	大きく開く口縁。端面に凹 線文、円形浮文を施す。	明。	
2	広口壺 B	口径16.9 残高2.5	○0.1未満 良好 黄褐色	水平に開く口縁。端面に櫛 描き波状文。	外面ハケ。内面ナデ。	
3	広口壺 A 2	口径19.5 残高6.7	△0.1~0.2 軟 明茶褐色	口縁部が大きく開く。	内外面ナデ。	
4	広口壺 A 2	口径20.0 残高5.8	◎0.1~0.2 やや軟 明茶褐色	大きく開く口縁部。端面に 櫛状原体の列点文。	内外面ナデ。	
5	広口壺 A 2	口径21.5 残高9.8	△0.1~0.2 良好 褐色	直口する口縁部。	内外面ナデ。	
6	壺 B	口径13.0 器高20.2 底径7.0	○0.1~0.2 やや軟 淡橙褐色	無文、小形の壺。	口縁内外面ナデ。体部 外面ハケ、内面上半ハ ケ、下半ヘラ削り。	黒斑あり 完存。
7	鉢 A	口径14.5 残高4.5	○0.1~0.2 良好 赤褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	器壁荒れ調整不明。	
8	甕 B	口径12.8 推定高 15.6	◎0.1未満 良好 暗黄褐色	ハネ上げ口縁。把手をもつ	外面ハケ。内面ナデ。	底部外面 スス附着 小形品。
9	甕底部	底径6.3 残高17.4	△0.1~0.2 良好 茶褐色		外面粗い横ハケ後細い 縦ハケ。内面ヘラ削り 上半に指圧痕あり。	黒斑あり
10	甕 A 1	口径14.9 残高7.7	○0.1~0.2 良好 褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	器壁荒れ調整不明。	
11	甕 B	口径16.0 残高9.0	○0.1~0.2 良好 暗赤褐色	端面をわずかにハネ上げる。	外面ハケ。内面調整不 明。	体部外面 スス附着
12	甕 B	口径17.2 残高8.7	○0.1~0.2 良好 橙褐色	ハネ上げる。	外面ハケ残る。内面ナ デ。	
第68図 13	台付鉢 底部	底径9.8 残高5.4	△0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	端面を丸くおさめる。円板 充填法。	外面ヘラ磨き。内面ヘ ラ削り。	
14	器台	口径13.2 器高8.3 底径10.5	◎0.1~0.2 良好 淡黄褐色	外面に凹線文を11条施す。 透かしあり。	外面ハケ。内面ヘラ削 り。	

15	無頸壺 A	口径14.5 残高12.8	△0.1～0.2 軟 橙灰色	やや内傾して立ち上がる。 端面を丸くおさめる。2孔 一对の紐孔がある。	外面上半斜めハケ、下 半ヘラ削り。内面ハケ	外面スス 付着。
16	高杯 A 1	口径27.3 残高10.1	△0.1未満 良好 淡赤褐色	椀状の杯部から直口する口 縁。口縁部に凹線文2条。 円板充填の剝離痕あり。	器壁荒れ調整不明。	
17	高杯 A 1	口径25.0 推定高 20.5	◎0.1～0.2 やや軟 黄褐色	椀状の杯部から直口する口 縁部。口縁部に凹線文2条 脚部透しあり。円板充填法。	杯部内外面調整不明。 脚部外面ヘラ磨き。内 面ヘラ削り。	柱部に絞 り目。
18	甕 A	口径31.0 残高7.5	◎0.1～0.2 良好 暗茶褐色	ハネ上げ口縁。端面に強い ナデ。	内外面ハケ。	

S K25

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第69図 1	短頸壺	口径15.6 残高2.5	○0.1～0.2 軟 橙褐色	短く屈曲する口縁。端面は 外傾し、凹線文2条施す。	調整不明。	
2	広口壺 A 4	口径17.4 残高4.0	○0.1～0.2 良好 茶褐色	端部を上下に拡張し、外傾 する面をもつ。	内外面ハケ。	
3	甕 A 1	口径17.4 残高5.0	◎0.1～0.4 良好 茶褐色	「く」の字状に外傾する口 縁。	体部外面ハケ、内面ナ デ。	口縁外面 スス付着
4	高杯 A 1	口径27.0 残高3.7	○0.1～0.2 軟 橙褐色	椀状の杯部から直口する口 縁。口縁部に凹線文2条。	器壁荒れ調整不明。	
5	高杯 A 1	口径32.8 残高4.0	◎0.1～0.2 良好 黄褐色	椀状の杯部から直口する口 縁。口縁部に凹線文3条。	内外面ヘラ磨き。	黒斑あり

S K30

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第70図 1	甕 A 1	口径36.6 残高20.7	△0.1～0.5 やや軟 淡黄褐色	「く」の字状に外反する口 縁。把手を持つ。	外面ハケ。内面調整不 明。	黒斑あり
2	甕 A 1	口径20.1 残高7.5	△0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	外面ナデ。内面ハケ。 指圧痕あり。	



## S K33

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第71図 1	高杯 B 2	口径22.3 残高5.8	○0.1~0.2 良好 茶褐色	垂下する口縁部。	内外面ヘラ磨き。	黒斑あり
2	広口壺	腹径21.3 残高25.4 底径6.5	○0.1~0.3 良好 茶褐色	頸部に凹線文2条。列点文が2列並ぶ。頸部以下に櫛描き直線文・波状文施す。	外面ハケ。内面ハケ後下半ヘラ削り。上半に指圧痕あり。	黒斑あり

## S K34

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第72図 1	高杯 B 2	口径不明 残高3.5	○0.1~0.2 良好 淡黄褐色	垂下する口縁部。垂下部上端に凹線文1条。		黒斑あり。
2	高杯 A 1	口径21.0 残高7.5	△0.1~0.2 軟 赤褐色	椀状の杯部。口縁に凹線文3条。	外面ヘラ磨き。内面調整不明。	
3	高杯脚	残高9.0	◎0.1~0.2 良好 淡黄褐色	上部に8条+ $\alpha$ 、下部に10条の沈線文。	外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。	黒斑あり。
4	高杯脚	底径15.0 残高3.6	○0.1~0.2 やや軟 淡黄褐色	大きく開く脚部、裾部に棒状原体木口による刺突文。	外面調整不明。内面ヘラ削り。	黒斑あり。

## S K35

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第73図 1	広口壺 F	口径23.2 残高4.7	△0.1~0.2 良好 赤褐色	外反した後内側へ屈曲する口縁部。凹線文を2条施す	外面ハケのちナデ、内面ナデ。	
2	甕 C 3	口径30.8 残高15.8	△0.1未満 良 淡橙褐色	「く」の字状に外反する口縁。口縁内面に凹線文4条端面に2条施す。	外面ハケ。内面調整不明。	黒斑あり。

付表9 IV地区出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
第74図 1	広口壺 A 4	口径21.6 残高12.0	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁端部に凹線文、内面に扇形文。頸部に扇形文。	外面ハケ、内面ナデ。	耕作土中より出土。
2	受け口壺	口径20.8 残高10.0	○0.1~0.2 良好 黄褐色	口縁・頸部に凹線文。	内外面ともハケのち部分的にナデ。	々

3	広口壺 B	口径20.8 残高10.0	○0.1～0.2 良好 黄褐色	口縁端部・頸部に凹線文。 肩部・口縁内面に櫛描き列 点文。	内外面ともハケのちナ デ。	S D03出土
4	鉢 B	口径22.4 器高18.4	◎0.1 良好 橙褐色	「く」字に浅く外反する口 縁をもつ。	内外面ともハケのちナ デ。体部外面下半をヘ ラ削り。	ク
5	高杯 A 1	口径22.4 残高14.4	◎0.1～0.2 良好 黄褐色	線文。	杯部下半をヘラ削り。	ク
6	甕 B	口径14.8 器高17.6	○0.1～0.2 良好 黄褐色	口縁端部に外傾する狭い面 をもつ。	外面ハケ、内面ヘラ削 り。	S D04出土
7	広口壺	体部径 29.6 残高28.4	○0.1～0.3 やや軟 橙褐色	頸部に櫛描き直線文。肩部 に櫛描き波状文と「J」字 状の垂下文を施す。	内外面ともナデ。外面 下半をヘラ削り。	S D03出土
8	甕 A 1	口径20.8 器高37.6	○0.1～0.2 良好 黄褐色	口縁端部に3個一対の押圧 文を計3か所に施す。		S D01出土
9	高杯 B 2	口径24.8 器高20.4	◎0.1 良好 赤褐色	脚部に凹線文。 器体全面に赤色顔料を塗布	内外面ヘラ磨き。	S D04出土
10	無頸壺 A	口径18.0 器高15.6	○0.1～0.2 良好 黄褐色	口縁部に凹線文。	内外面ヘラ磨き。	ク

E地区出土土器観察表

S K36

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
1	直口壺 A 3	口径16.7 残高4.0	△0.1～0.2 軟 淡黄褐色	直口する口縁。外傾する端 面をもつ。口縁部に凹線文 2条。	内外面ナデ。	
2	甕	口径7.8 残高5.1	◎0.1～0.2 軟 淡黄灰色	ゆるやかに屈曲する口縁部 をもつ。	内外面ナデ。	
3	甕 A 1	口径11.5 残高2.1	○0.1～0.2 軟 明橙褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	調整不明。	
4	甕 B	口径20.2 残高3.9	○0.1～0.2 やや軟 灰褐色	口縁端部に面をもち、端部 をわずかにつまみあげる。	体部内外面ナデ。口縁 内ハケ。	
5	高杯脚	底径11.2 残高6.0	△0.1～0.2 軟 明茶褐色	大きく開く口縁。透かしあ り。	外面調整不明。内面ヘ ラ削り残る。	黒斑あり。
6	高杯脚	底径14.3 残高3.8	△0.1～0.2 軟 明黄褐色	大きく開く口縁。裾部に透 かし。	調整不明。	黒斑あり。

## S K37

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
1	甕 A 1	口径12.8 残高7.1	○0.1～0.2 やや軟 茶褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	外面縦ハケ。内面横ハ ケ、指圧痕あり。	
2	甕 A 1	口径16.5 残高6.2	◎0.1未満 良好 褐色	「く」の字状に外反する口 縁。	内外面ハケ。	
3	甕	頸径14.4 残高13.0	◎0.1～0.2 やや軟 淡黄褐色	口縁部は外反する。	外面器壁荒れ調整不明 下半にヘラ削り。内面 粗いハケ後ヘラ磨き。	
4	高杯 A 1	口径20.9 残高4.4	○0.1未満 やや軟 明橙褐色	内湾気味に立ち上がる口縁。 内外に拡張する端面を作る 口縁部に凹線文2条。	外面ヘラ削り。内面ハ ケ。	
5	無頸壺 B	口径16.3 残高4.8	◎0.1～0.2 良好 淡黄灰色	口縁部を内側へ拡張し広い 面を作る。	外面浅いヘラ削り。内 面ハケ。	
6	高杯脚	底径16.0 残高5.5	○0.1～0.2 やや軟 淡茶褐色	大きく開く脚部。	外面調整不明。内面ヘ ラ削り。	

## S K24

番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び文様	技法・調整	備考
1	広口壺 A 4	口径23.0 残高3.1	◎0.1～0.2 やや軟 明茶褐色	大きく開く口縁。端部を上 下に拡張。端面に凹線文3 条。	外面ナデ。内面ハケ。	



## 第2節 観音寺遺跡

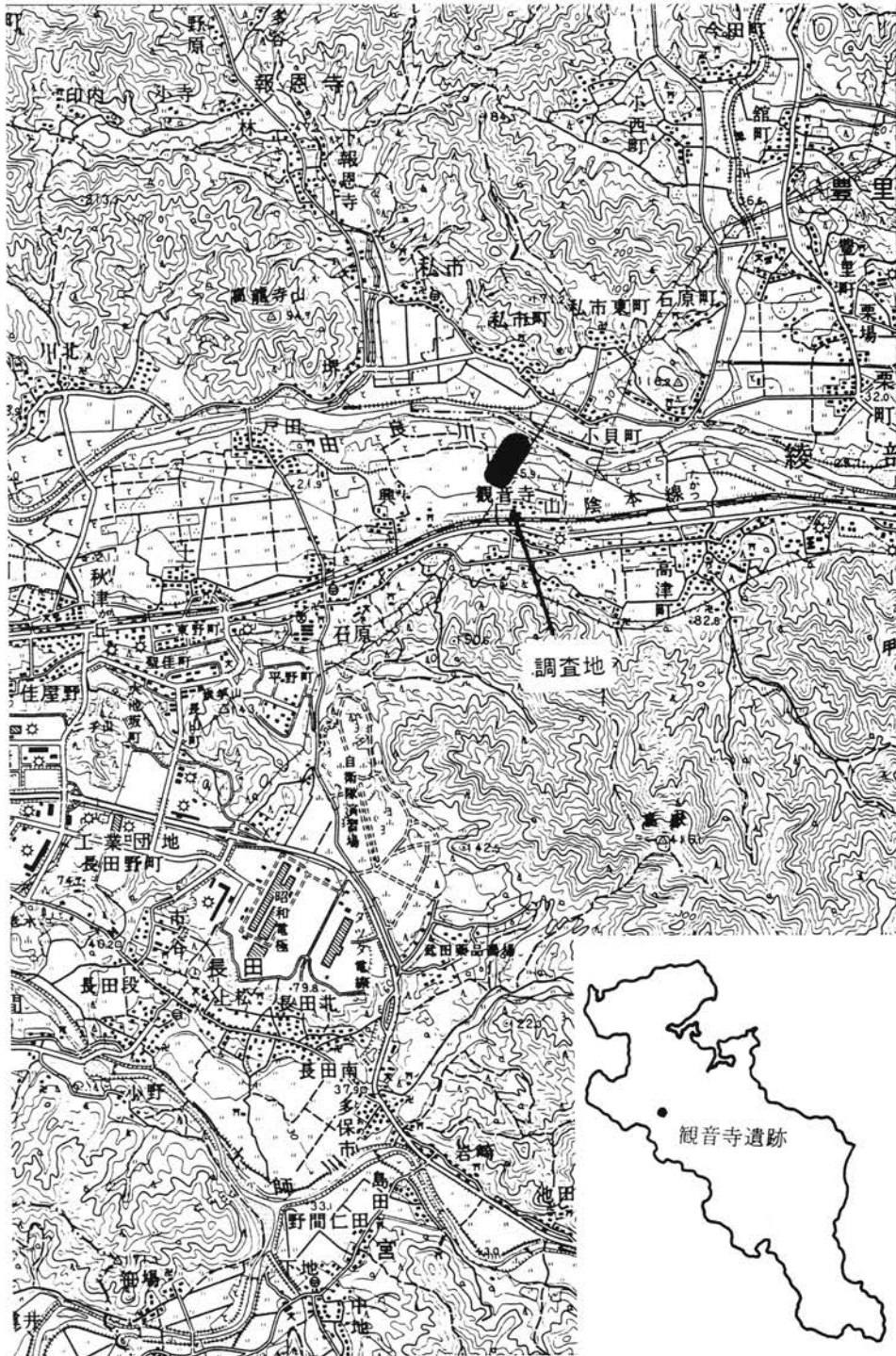
### 1. はじめに

観音寺遺跡は、京都府福知山市字観音寺に所在する弥生時代から鎌倉時代に至るまでの集落跡である(第104図)。観音寺遺跡が初めて学界に報告されたのは、大正11年にさかのぼる。西中筋村石剣発見の遺跡として、「西中筋村大字観音寺小字大木巻ノ内堂屋敷ニアリ。大正三年五月廿六日土地所有者が畑地ヲ掘り下ゲテ田トナサント土工ニ従事セル際偶然石剣ヲ発見シテ、遺跡ノ存在ヲ知レルモノナリ。」と、当時の発見の緒端が記されている<sup>(註42)</sup>。この石剣(有樋式)は、山口県梶栗浜出土の細形銅剣を忠実に模倣したものと指摘されたことでも有名である<sup>(註43)</sup>(第106図)。『日本考古学概説』(昭和26年)にも紹介されている<sup>(註44)</sup>。このように、たいへん古くから観音寺遺跡は、弥生時代中期の遺物を包蔵するところとして注目されており、学史的な観点からも重要な遺跡であるといえる。

本格的な発掘調査は、昭和54年度に行われた京都府教育委員会によるものがある<sup>(註45)</sup>。今回の近畿自動車道に直交する広域農道の敷設に伴う事前調査であった。この時は、近畿自動車道舞鶴線建設予定地(当地)の分布調査と併行して、広域農道部(延長2.6km)の、工事中の立会調査及び3か所のトレンチ発掘調査がなされた(第105図)。結果的に遺構の検出はみられなかったが、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・滑石製紡錘車などの遺物が多量に出土し、弥生時代から中世にかけての複合遺跡として報告された。

近畿自動車道舞鶴線の建設に伴う調査は、昭和64年度の試掘調査から始まる<sup>(註46)</sup>。京都府教育委員会の調査した広域農道に直交する道路建設予定地に、合計25か所の5m×10mのトレンチが広く入れられた。自然堤防状の微高地が認められ、弥生時代の遺物が多量に出土した。小トレンチを広い範囲に設けた試掘調査によって、広い溝状遺構の存在や柱穴などの広がり確認され、溝が人工か自然かという点や、層位の時期について検討が加えられた。この試掘調査を受けて、今回の発掘調査となった。調査に当たっては、歴史的な経過のある弥生時代の遺構・遺物の検出を主な目的としたが、建仁2(1202)年3月以前に六人部新荘の高津に成立していたとされる観音寺についても、関連の遺構・遺物がないかと注意を払った<sup>(註47)</sup>。しかし、鎌倉時代～室町時代の掘立柱建物跡群を検出したが、観音寺の盛衰に関わるような資料を得ることができなかった。

弥生時代中期・後期の資料を主に報告することとしたい。南に隣接する興遺跡との関係を考える基礎的なデータの整備に意を注いだ。



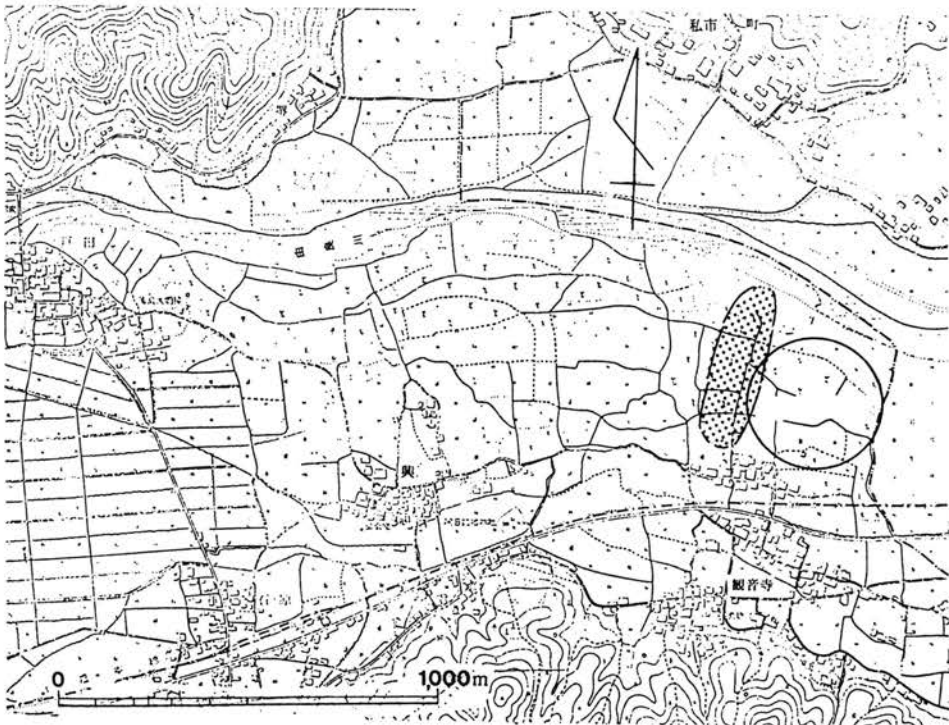
第104図 調査地位置図(1)(1/50,000 「福知山」)

## 2. 調査の経過

試掘トレンチ中、多量の遺物が出土したトレンチをなるべく多くとり込む形で、AからFの調査区を設定した(第107図)。観音寺遺跡の立地する一帯は、由良川の度重なる洪水作用により、各時代の遺構面が複数存在し、しかも深く埋没している。試掘調査データからも、たとえば、第22グリット(第109図)では地表下70cm以上で広大な流路を断面にて観察するなど、その埋没深度の深さがうかがえる。

こうしたことから、重機により畑地の耕作土・攪乱層を除去していった。A～F区においては、表土層を削いだ直後から、夥しい遺物の出土をみた。掘削は、未買収地の入り組みや、田植えに伴う引水路の保護などの影響で、E→D→B→C→A→Fという順序となった。遺構の説明はAから順に行うことにする。

4月20日にE区の重機掘削を開始した。このE区は、試掘グリットのNo.10～12を包括している。特に、No.10グリット中から弥生時代中期の土器が多量に出土したので、弥生時代の遺構の検出に意を注いだ。表土の畑作耕土の直下から、弥生土器の出土量は多くなったが、土師器質皿・瓦器碗・須恵器などが混在していることも観察できた。弥生時代の遺構としては、弥生時代中・後期の土坑群、自然流路の旧河床面である砂礫の広がりなど



第105図 調査地位置図(2)  
(正円は、昭和54年度調査地)



写真1 遺跡遠景(北から)

を検出した。

続いて、D区の掘削に入った。表土層・畑作耕土直下で、平安時代から鎌倉時代に至る東西の溝と、これの西側に接続する南北の細い溝をまず検出した。さらに掘り進めると、弥生時代中期の土器の出土量は増加してきた。そして、これらの遺物の出土層及びレベルを検討した結果、これらは包含層

中ではなく、トレンチの北東隅を流れる巨大な自然流路内に落ち込んでいることがわかった。溝(S D04・05・06)は自然流路であり、S D06→05→04の順に埋没していったようである。なお、溝(S D01)と溝(S D06)の間層で、隅丸方形の礫敷土坑(S K01)を検出した。これは、鎌倉時代のもので、複雑な生活面の埋没状況がうかがえた。

さらに南側を掘り進むにつれて、弥生時代中期の土器は出土するが、平面の精査では遺構の検出はみられなかった。下層遺構の存在についても懸念されたため、あえて断ち割り溝を設け、断面観察を詳細に行い遺構の検出に努めた。この結果、トレンチのほぼ中央で、竪穴式住居跡の切り合いを捉えた。これから下層は、氾濫原の広がりを示す比較的粗い礫層となり、遺構はないものと判断した。

この住居跡の北東部に、大きく屈曲する溝(S D07)を検出した。東側は、溝(S D04)に流れ込むようである。この溝内からも弥生時代中期の土器が出土している。この区は試掘グリッドNo.13・14・20を包括し、どのグリッドからも弥生土器が出土している。

Bトレンチでは、断面観察で自然流路(弥生時代中期)の痕跡を捉えた。B区は試掘グリッドのNo.15を包括する。弥生時代中期の土器を包含する流路を断面で検出していたところである。自然流路よりも上位で、鎌倉時代の溝を6条検出した。自然流路の掘形ラインは、平面的には捉えられなかった。

Cトレンチは、古墳時代から鎌倉時代までの遺物が出土した溝(S D01～02)、鎌倉時代の溝(S D03)、さらにこの溝に並行する柱穴列(S A01)を確認した。灰青色の細かな砂を埋土とする不整形な土坑状の広がり(S X01)は、墳砂の可能性もある。このトレンチは、遺構の切り合い関係が比較的明瞭であった。

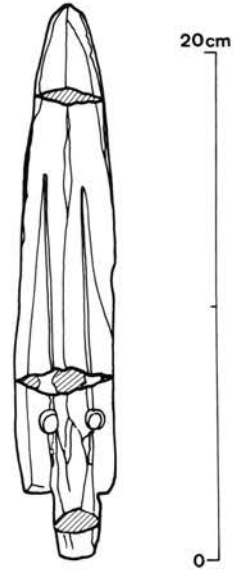
Aトレンチの掘削にとりかかった。このA区は、面積的に最も広い区であるが、試掘グリッドの(No.16～19)からは、それほど多量の遺物は得られていない。北から順に掘り進



めるにつれ、土師器の皿を多量に包含する溝(S D01)を検出し、この溝の南側から、次々に直径20cm前後の円形柱穴痕が集中して現れた。暗茶褐色粘質土の埋土をもち、識別は容易であった。これらの柱穴痕は、A区南半でなくなり、溝条遺構が複雑に切り合っているのを確認した。弥生時代から中世に至る溝である。溝が一部集中するところに楕円形の土坑(S K05)が1基存在した。柱穴群は、鎌倉時代の掘立柱建物跡群を構成する。そして、これらの建物跡の北を画するように溝(S D01)が存在し、この溝から北側は、弥生時代の土坑を数基検出したのみである。

重機の移動に十分な配慮をしつつ、最後に試掘グリッドFトレンチを掘削した。弥生～鎌倉時代の溝(S D01～03)を3条検出し、多量の土器が出土した。

重機による掘削と遺構面精査を併行して行い、9月5日にすべての現地作業を終了した。



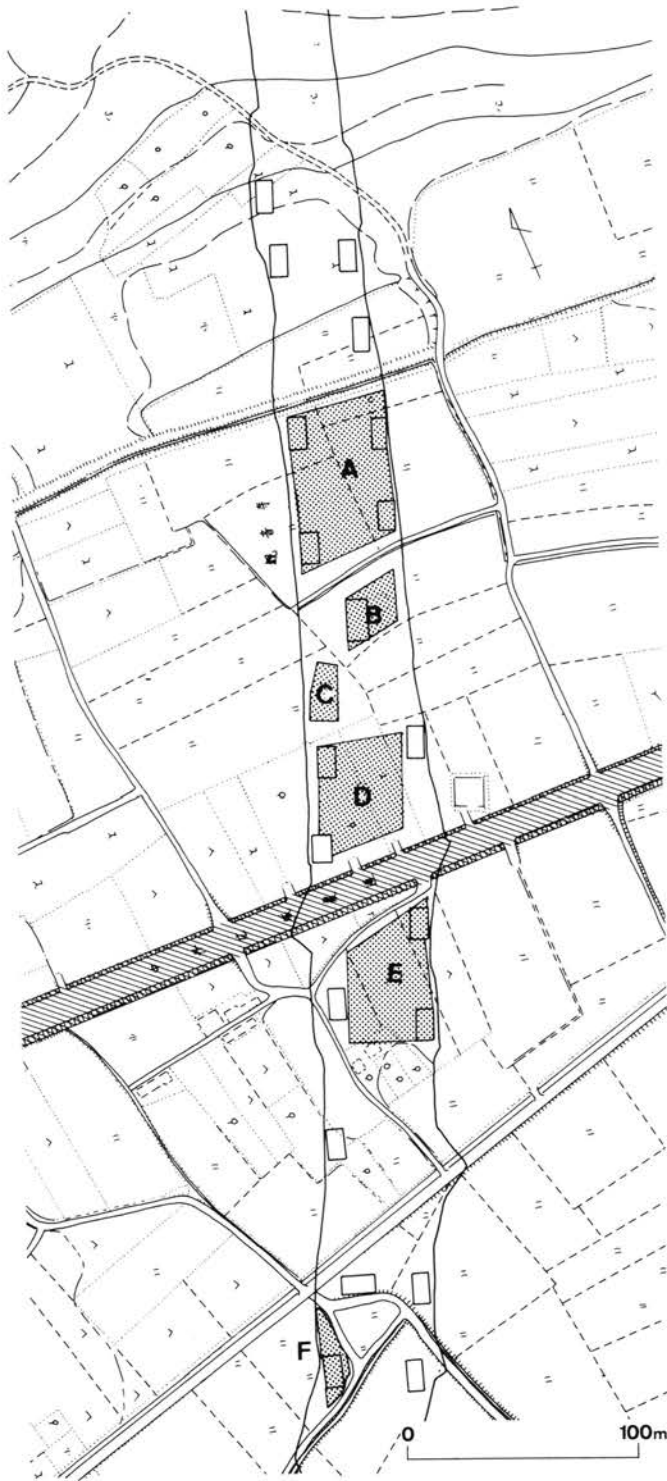
第106図 磨製石剣実測図  
（『日本考古学概説』より）

### 3. 検出層位

土層の堆積状況は、各地区によって大きく異なる。とりわけB区以北については、由良川に流れ込む大小の河川が幾度かの氾濫をくり返したとみられ、複雑な堆積状況である。

個々の土層の切り合い関係は、第108図に示したとおりである。層の名称は、あまりに煩雑になるので割愛した。旧河床の砂礫面の層以外はほとんど暗褐色・灰褐色・暗青灰色などの粘質土(極細砂)が堆積し、岩盤のような礫層はどのトレンチからもみられない。旧河川の河床とみられる砂粒層はAトレンチ南壁の第46層(暗赤褐色細砂粒)、Bトレンチ南壁第11層(暗灰褐色砂礫)、Dトレンチ断ち割り断面第5層(淡灰褐色砂礫)、Eトレンチ北壁第18層(褐色細砂礫)で観察される。検出レベルは、それぞれ23.6m・23.6m・24.9m・24.8mを測る。旧河床面は、南に高くなる。

次に、主な遺構面について対応する層をみていく。Aトレンチ南壁では、第6層(暗褐色粘質土)及び第7層(暗灰色粘質砂土)から、弥生時代の土坑や、鎌倉時代の柱穴などを検出している。したがって、純粋な単一時期の層は確認できていない。第24層(暗黄褐色細砂)と第26層(淡黄褐色砂質)から東は、弥生時代中期から古墳時代までの流路の切り合いがみられる。Bトレンチは、第3層(暗茶褐色土)から掘り込まれた古墳時代から平安時代にかけての数条の溝(S D01～06)がある。大きく第24層(暗茶褐色粘土)、第31層(淡茶褐色粘土)、第39層(暗灰茶褐色粘質土)を埋土とする。溝(S D04・05・06)がそれらにあ

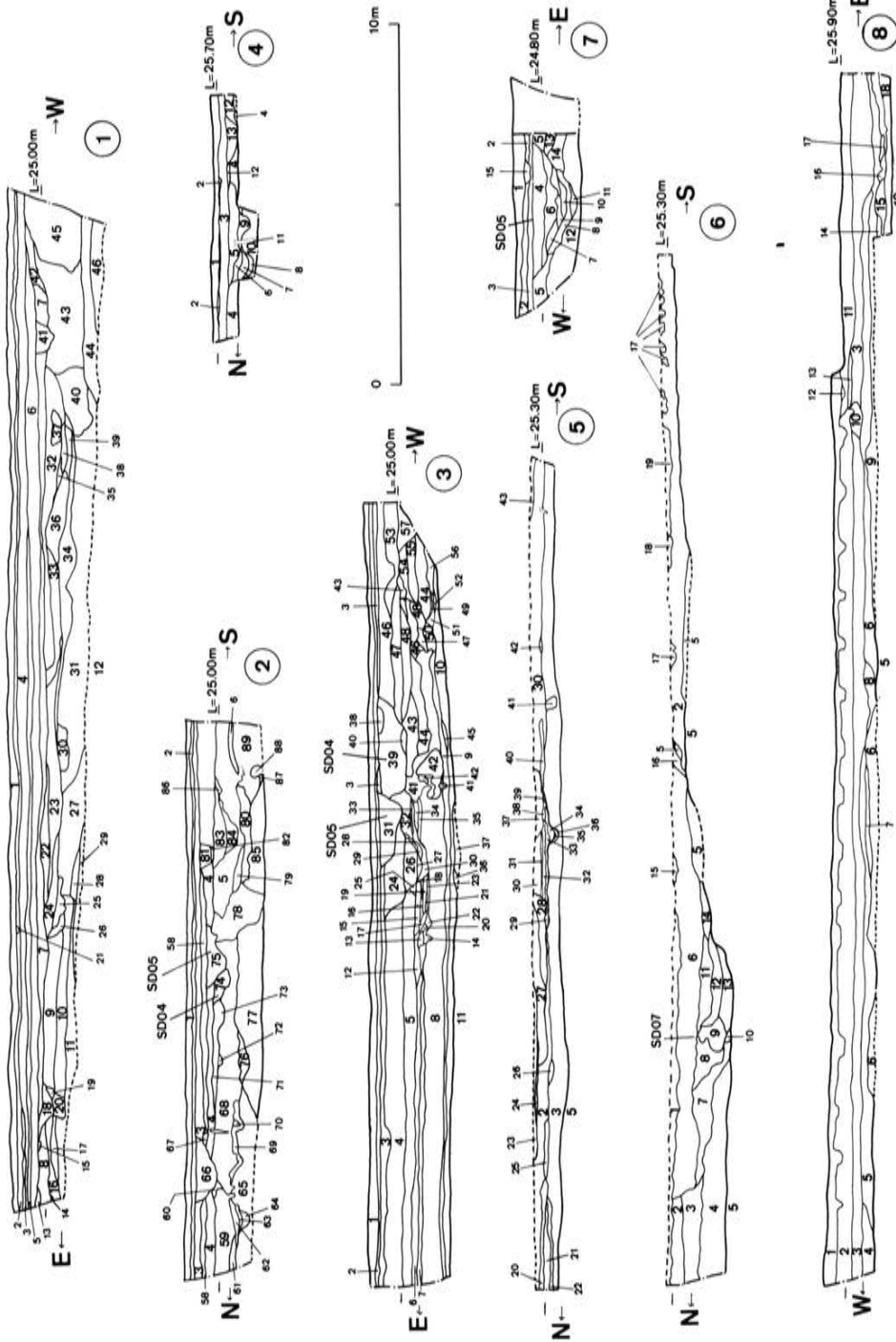


第107図 トレンチ配置図(試掘グリッドを含む)

たる。Aトレンチと同様の複雑な切り合い関係がみられ、弥生時代中期から後期にかけての流路の頻繁な移り変わりがうかがえる。

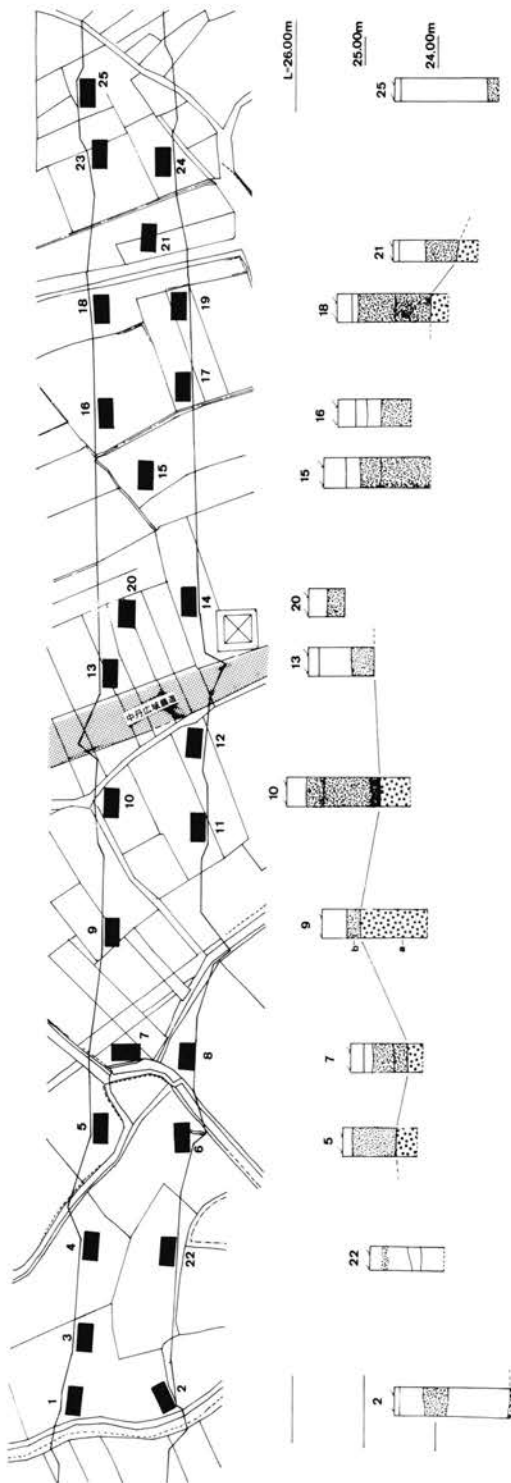
Cトレンチ東壁では、溝(S D01・02)の埋土が観察される。S D01は、第5層(淡茶褐色極細砂)と第9層(茶褐色粘質土)を、S D02は、第6～第8層(灰褐色粘質土)を埋土としている。古墳時代から平安時代にかけての遺物が出土している。

Dトレンチでは、暗黄褐色土(第2層)は、弥生時代中期の遺構面を有する層である。ただ、ほぼ同一レベルで鎌倉時代の遺構・遺物もみつかったので、かなり長い間、安定して存在した層といえる。第23・24・27～39層は、竪穴式住居跡の埋土である。灰白色極細砂の第17層は、中世以降の洪水堆積物であろう。第5層(淡灰褐色砂礫)から下は、旧河床をも掘り込んで、複雑に切り合った



第108図 土層断面図

- 1.Aトレンチ南壁 2.Bトレンチ東壁 3.Bトレンチ南壁  
 4.Cトレンチ東壁(溝S D01・02) 5.Dトレンチ西断ち割り断面 6.Dトレンチ東断ち割り断面  
 7.Dトレンチ北壁断面 8.Eトレンチ北壁  
 E W N Sは東西南北方向を示す。



第109図 土層柱状断面配置図 a.河床砂礫 b.弥生～中世包含層(一部遺構面あり)

流路が観察される。溝(S D 04・05)に相当する。

Eトレンチ北壁は、比較的安定して水平堆積がみられる。第2層(褐色極細砂質土)で、弥生時代から鎌倉時代の遺物が出土している。第3層(暗褐色粘質土)では、弥生時代中～後期の遺構・遺物が中心となり、これらより新しいものはみられない。第18層(褐色細砂礫)は、旧河床面である。

以上のように、堆積状況に恵まれた遺跡ではあるが、旧河川の洪水などにより、安定して各時期の文化層が水平に堆積したところは極めて少ない。なお、試掘調査における各トレンチの土層柱状図を総合し、若干の説明を加えたい。第109図に示すように、遺跡のある一帯は、低位段丘を埋没させて自然堤防・後背湿地を形成しているが、洪水等による土砂の堆積状況は、大きなうねりを伴っているのがわかる。試掘トレンチNo.5～9にかけては、河床礫が上昇しており、南北のどちらに向かってても河床礫の検出レベルは下り、包含層や文化層が厚く堆積している。弥生時代中期から鎌倉時代の遺構を検出したA～E

トレンチは、この試掘トレンチNo.10～No.19の間に入る。その他のところでは顕著な遺構は検出していない。No.22トレンチから南に向かっては、粘質土を中心とする厚い包含層の堆積が始まり、南接する興遺跡につながっていく。

#### 4. 検出遺構

Aトレンチからは、鎌倉時代の溝2条(S D01・02)、掘立柱建物跡7棟以上(S B01～07)、石溜り土坑1基(S K05)、弥生時代中期～平安時代の溝9条(S D03～11)、土坑3基(S K01～04)を検出している(第110図)。

溝(S D01)は、長さ13m分・幅1m・深さ15～20cmを測る。断面形は逆台形の舟底形である。埋土は、暗茶褐色粘質土である。溝の上半部のレベルに集中して、土師質皿が一括投棄されている。陶器・瓦器碗なども出土するが、全体の95%以上を土師質皿で占める(第111・117図)。

溝(S D02)は、長さ6m分・幅0.5m・深さ5～10cmである。溝(S D01)に切られている。断面形は、舟底形を呈する。埋土は、暗褐色粘質土である。遺物の出土は、溝(S D01)に比べて極端に少ない。土師質皿を若干出土する。

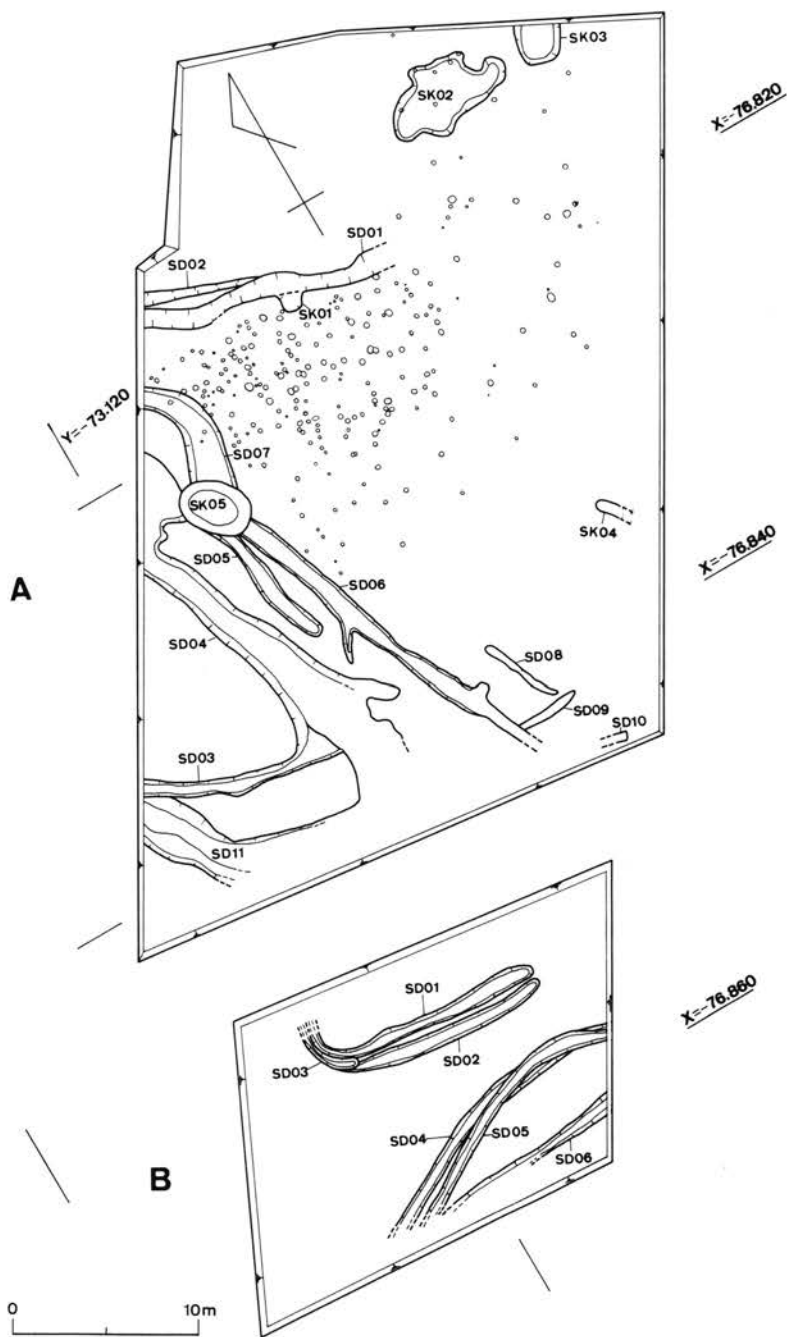
掘立柱建物跡群を構成する柱穴は、溝(S D01・02)の南側からトレンチ北東方向にかけて広がる。両溝は、遺構群のほぼ北限を画している。

建物跡(S B01)は、他の遺構と離れて独立している。梁間2間×桁行2間の建物跡である。柱掘形は、直径25cm前後の円形掘形である。柱間は、P1-P2・P3-P4・P6-P7間が2m、P4-P5・P7-P8間が2.8mの桁行寸法をもち、P1-P3・P2-P4・P3-P6・P4-P7・P5-P8間が2mの梁間寸法を測る。主軸はN-18°-Eの振れをもつ(第112図)。

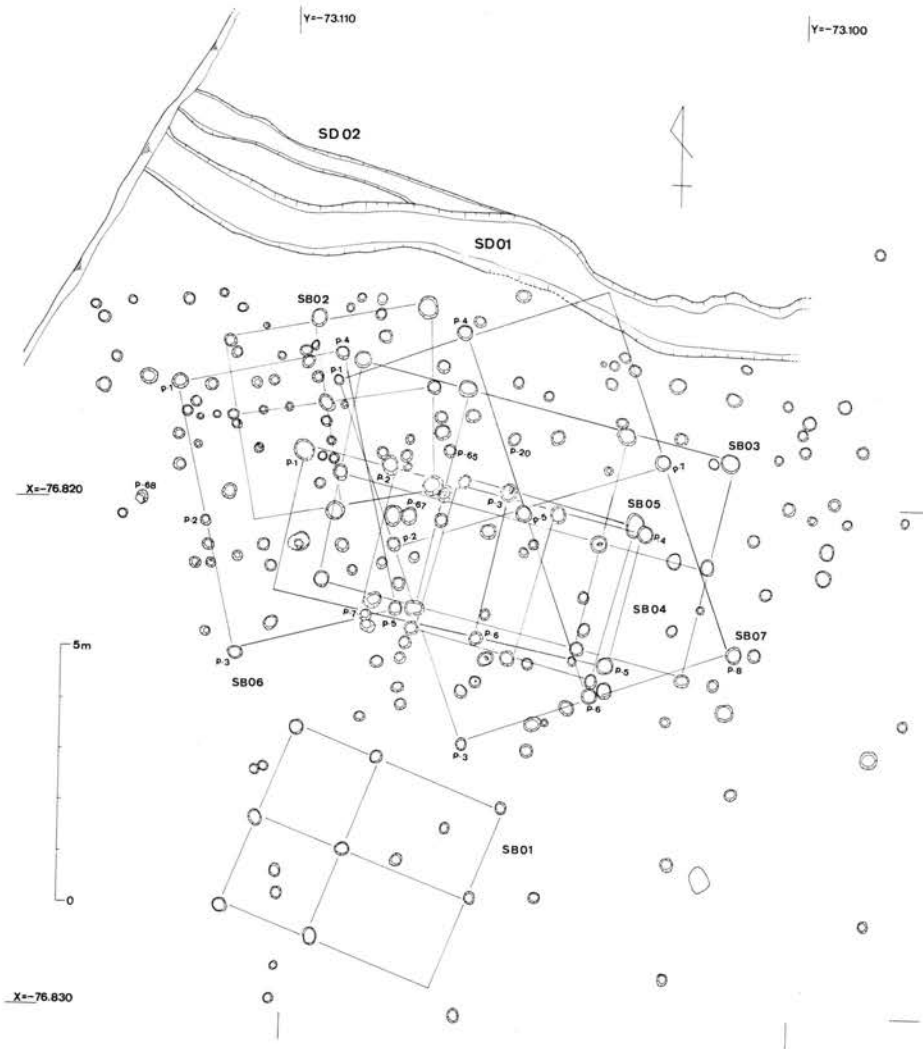
建物跡(S B02～09)は、S B01の北側に建てられ、南北10m・東西12mの狭い検出範囲に、8棟以上の建物が建ち込み、柱を共有するものはなく、主軸方向もすべて異なる。真北方向に沿った建物跡はない。

建物跡(S B02)は、梁間2間×桁行2間の規模である。柱掘形は、直径20～40cmの円形である。柱間は、桁行のP1-P2・P3-P4・P6-P7間で1.6m、P4-P5・P7-P8間で2m、梁間のP1-P3・P2-P4間1.8m、P3-P6・P4-P7間2.2m、P5-P8間2mを測る。主軸はP6-P7-P8でN-4°-W振れる(第113図)。

建物跡(S B03)は、建物跡(S B02)のP8にP6が切られているため、時期的に建物跡(S B02)より先行する。梁間2間×桁行3間の東西棟である。柱掘形は、直径25～35cm



第110図 A・Bトレンチ全体図

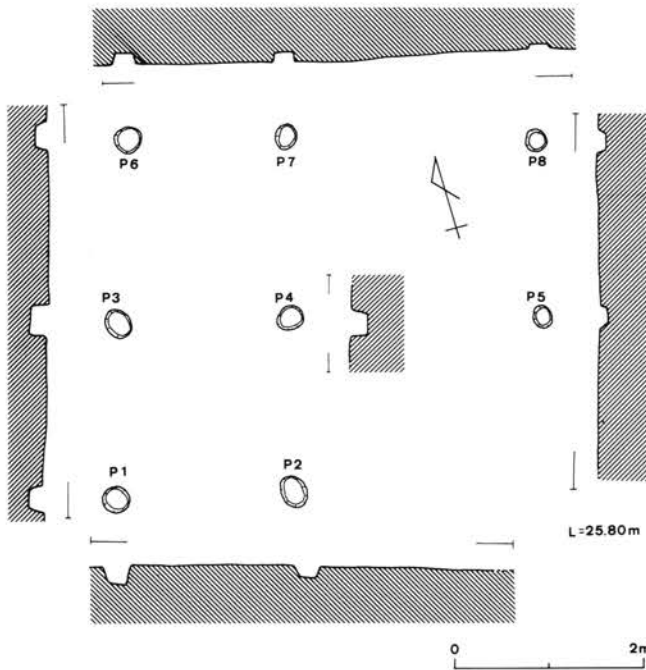


第111図 Aトレンチ掘立柱建物跡(SB01~07)、溝(SD01・02)平面実測図

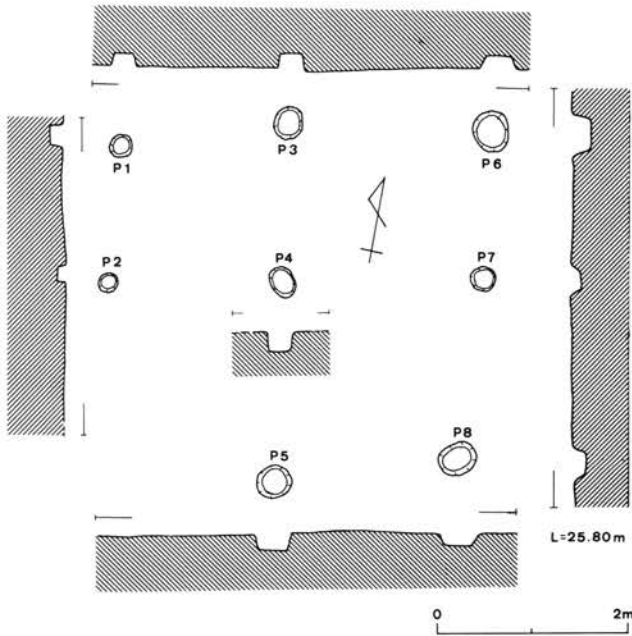
の円形である。柱間は、桁行のP5-P6・P9-P10・P3-P4・P7-P8・P11-P12間で2.2m、P1-P2で2m、P2-P3・P6-P7・P10-P11間で3.2mを測る。また、梁間の寸法はすべて2.2mである。主軸はP4-P12間でみると、N-8°-E振れている(第114図)。P6内からは、土師質皿ばかり約十数点が出土している(第116図)。

建物跡(SB04)は、梁間1間×桁行3間の東西棟である。柱掘形は、直径20~40cmまでの円形である。柱間は、梁間がほぼ2.8~2.9mと揃っているが、桁行の寸法はまちまちである。P1-P2間1.7m、P2-P3間2.4m、P3-P4間2.8m、P5-P6間2.2m、P6-P7間2.6mを測る。P3-P6間で主軸をみるとN-12°-E振れる(第111図)。

建物跡(SB05)は、梁間1間×桁行2間の東西棟建物跡である。建物跡(SB04)のP4にこの建物跡のP6が切れ、建物跡(SB04)に先行して建てられていたことがわかる。



第112図 掘立柱建物跡(SB01)実測図



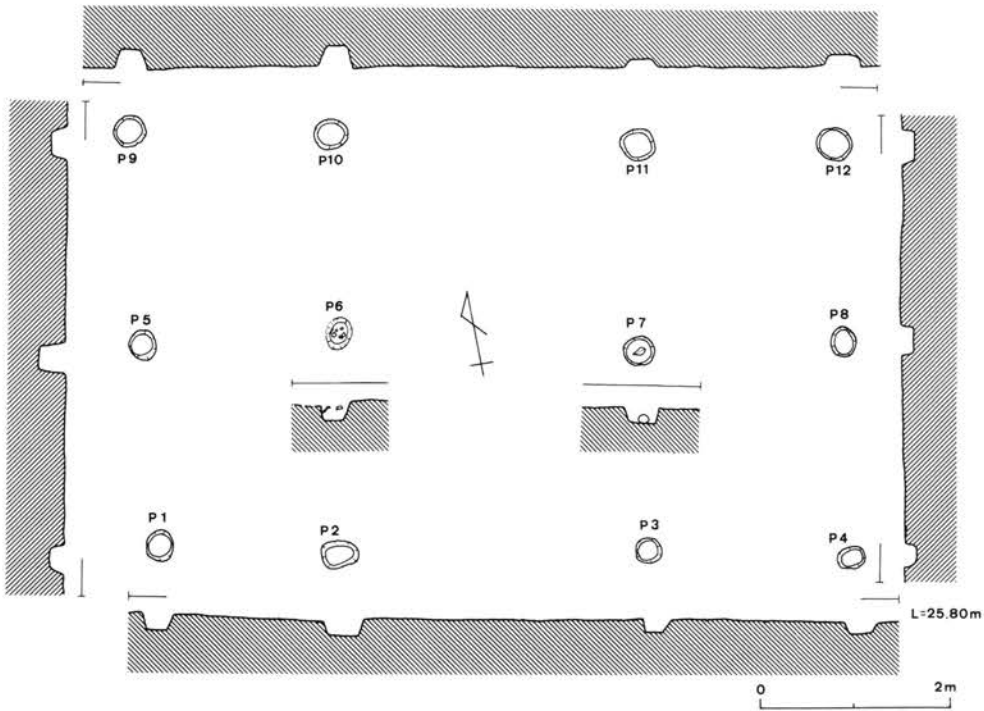
第113図 掘立柱建物跡(SB02)実測図

柱掘形は、直径25cmの円形である。柱間は、梁間3m、桁行のP1-P2・P4-P5間2m、P2-P3・P5-P6間1.6mを測る。P6-P3間での振れは、N-12°-Eである(第115図)。

建物跡(SB06)は、梁間1間×桁行2間の南北棟である。柱掘形は、直径約25cmを測る。梁間は3.3m、桁行はP1-P2間2.8m、P2-P3間2.6m、P4-P5間5.1mを測る。P1-P3を主軸とすると、N-13°-W振れる(第111図)。

建物跡(SB07)は、梁間2間×桁行2間の南北に長い建物跡である。柱掘形は、直径20~30cmの円形である。柱間は、梁間のP1-P4・P2-P5・P3-P6の間2.7m、P5-P7・P6-P8の間で3mを測る。桁行寸法はまちまち

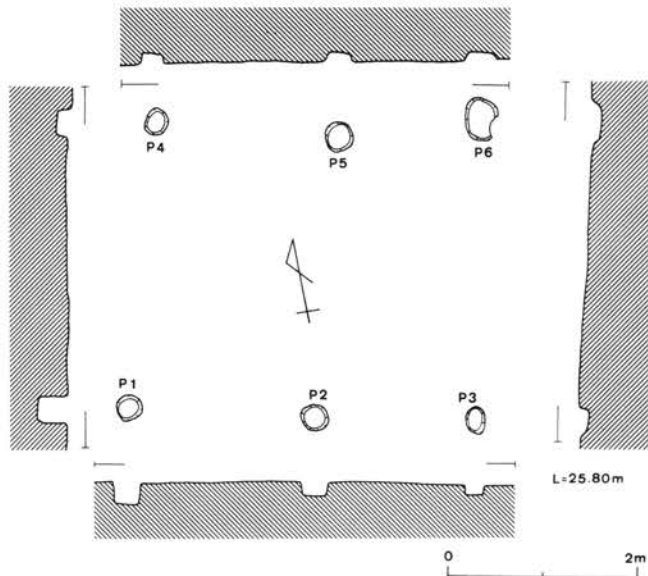




第114図 掘立柱建物跡(S B03)実測図

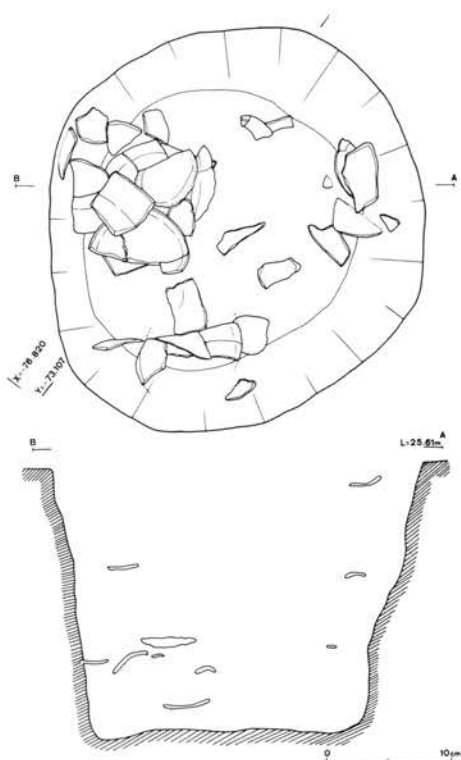
で、P1-P2間3.4m、P2-P3間4.1m、P4-P5間3.7m、P5-P6間3.8m、P7-P8間4mをそれぞれ測る。P4-P6を主軸としてN-21°-E振れる。なお、北東隅の柱は、溝(S D01)により消失し、溝(S D01)に先行して建てられていたことがわかる(第111図)。

以上の建物跡群の北側及び東側には、さらに掘立柱建物跡や柵列などの遺構が存在し



第115図 掘立柱建物跡(S B05)実測図

ていた可能性は高い。建物跡の柱穴と同様に、直径20~30cmの円形の柱穴が多数存在しているからである。ただ、溝(S D01)との時間的な関係は、建物跡(S B07)以外に切り合いがなく不明である。出土遺物からも目立った時期差はなく、共存したかもしれない。

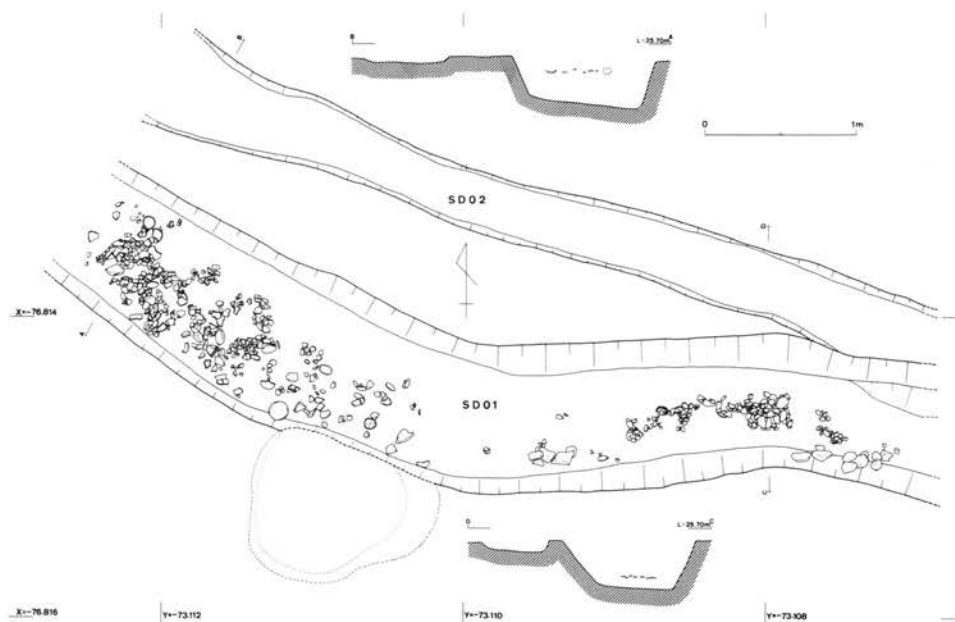


第116図 AトレンチSB03のPit6  
柱穴平・断面実測図

溝(SD03～SD11)は、Aトレンチ南西部で変化のある流れを示している(第110図)。

溝(SD11)は弥生時代中期、溝(SD03・04)は弥生時代後期、溝(SD05～07)は、古墳時代から平安時代ごろには、それぞれ存在していたであろう。溝(SD08～10)は、出土遺物がなく、時期不明である。溝(SD08～10)は、幅40cm・深さ5cmを測る小規模なものである。断面はいずれも底のやや丸い舟底形を呈する。埋土は、3条とも鉄分の沈殿を含む橙灰色砂質土である。他の溝群は北西から南東方向にかけての流れがみられる。

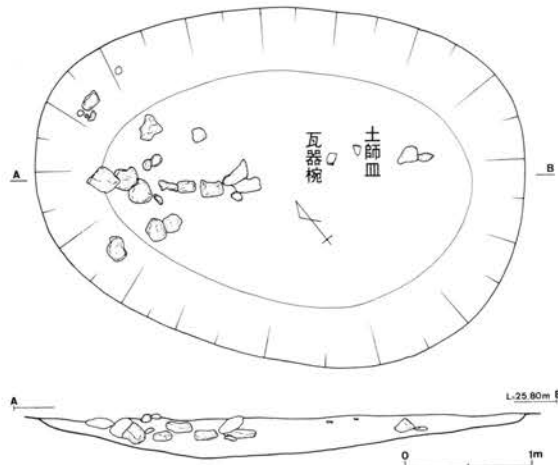
溝(SD03)は、溝(SD04)に東側で接続する。長さ9m分・幅0.8m・深さ20～40mを測る。断面形は、舟底形である。暗灰色粘土を埋土とする。



第117図 Aトレンチ溝(SD01・02)平・断面実測図

溝(S D04)は、南に広がり、さらに北側のトレンチ西壁付近で屈曲して広がる様相をみせる。中間部の幅は、1.5~2.5m・深さ20~50cmを測る。暗灰褐色粘質土の埋土である。

溝(S D05)は、長さ7.5m分・幅0.7~1m・深さ15cmを測る。北側は土坑(S K05)で切られる。断面は半円形を呈し埋土は、淡黄褐色粘土である。



第118図 Aトレンチ土坑(S K05)平・断面実測図

溝(S D06)は、長さ17m分・幅1m・深さ10~20cmを測る。断面は、北側では舟底形で南にいくにつれて半円形に近くなる。埋土は、淡青灰色粘土である。

溝(S D07)は、土坑(S K05)の北から西に屈曲する。長さ約6m分・幅約1.5~2m・深さ50~60cmを測る。断面形は、舟底形である。埋土は、淡灰褐色粘質土である。

溝(S D11)は、溝(S D03)によって切られている。南東方向に屈曲する様相をみせ、幅約3m・深さ60~70cmで、約5m分検出した。断面形は、なだらかな両肩をもつ舟底形である。埋土は、暗青灰色砂粒である。

土坑(S K01)は、鎌倉時代の溝(S D01)により北端部を大きく削平される。直径1.2m前後の不整形な円形で、断面は皿状を呈する。深さは10cm前後を測る。暗茶褐色粘質土を埋土とする。

土坑(S K02)は、不整形で、長軸7m・短軸3.5m・深さ15cmを測る。断面形は浅い皿形を呈する。埋土は、暗褐色砂質土である。弥生土器は、西半部に偏って出土した。

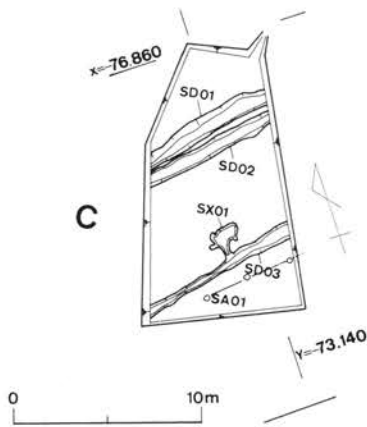
土坑(S K04)は、砲弾形で、長軸1.5m・短軸1.1m・深さ10cmを測る。断面は半円形で、炭化物・焼土を含む暗茶褐色粘質土を埋土とし、弥生土器がまとまって出土した。

土坑(S K03)は、北側は不明であるが、隅丸方形であろう。1片2m・深さ15cmを測る。断面形は舟底形である。埋土は暗灰褐色である。出土遺物は少ないが、弥生土器片らしきものをもつ。

Bトレンチでは、平安時代から鎌倉時代に至る溝(S D01~06)を検出した(第110図)。

溝(S D01)は、西側で大きく弧を描いて方向を変える溝である。長さ13m分・幅0.8m・深さ10cmを測る。断面形は、半円形に近い。暗灰褐色極細砂を埋土とする。

溝(S D02)は、溝(S D01)と並行して走る。長さ13m分・幅0.8cm・深さ10cmである。



第119図 Cトレンチ全体図

断面形・埋土の状況ともにSD01に類似する。

溝(SD03)は、溝(SD02)を切り込み、重複する。屈曲部のみ検出した。溝(SD02)よりも新しい時期である。長さ3.5m分・幅60cm・深さ8cmを測る。断面形は、半円形に近い。淡青灰色粘質土を埋土としている。

溝(SD04)は、ゆるやかに屈曲する東西方向の溝である。長さ15m分・幅70cm・深さ5～10cmを測る。暗青灰色粘質土の埋土である。断面形は、半円形に近い。

溝(SD05)は、長さ14.5m分・幅60～80cm・深さ10～15cmである。半円形に近い断面形で、埋土は淡褐色粘質土である。溝(SD04)と交差することにより、溝(SD04)よりも新しい時期に掘り込まれたといえる。

溝(SD06)は、直線的にのびる東西溝である。長さ10m分・幅70cm・深さ5～10cmを測る。断面形は、底面に丸みを帯びた舟底形である。埋土は、淡灰褐色粘質土である。

溝(SD01～06)のいずれの溝からも、炭化物等の自然遺物の出土はなかった。

Cトレンチでは、平安時代から鎌倉時代に至る溝3条(SD01～03)、杭列(SA01)を検出している。

溝(SD01)は、東西方向で、長さ8.5m分・幅1m・深さ35cmを測る。断面形は、舟底形を呈する。埋土は、青灰色粘土と細砂の互層となっている。

溝(SD02)は、溝(SD01)に並行して流れていた溝である。長さ8.2m分・幅70cm・深さ30cmである。東壁断面で見ると、溝(SD01)を切っているため、これより新しい断面は舟底形である。埋土は、暗青灰色粘質土と灰褐色細砂が中心である。

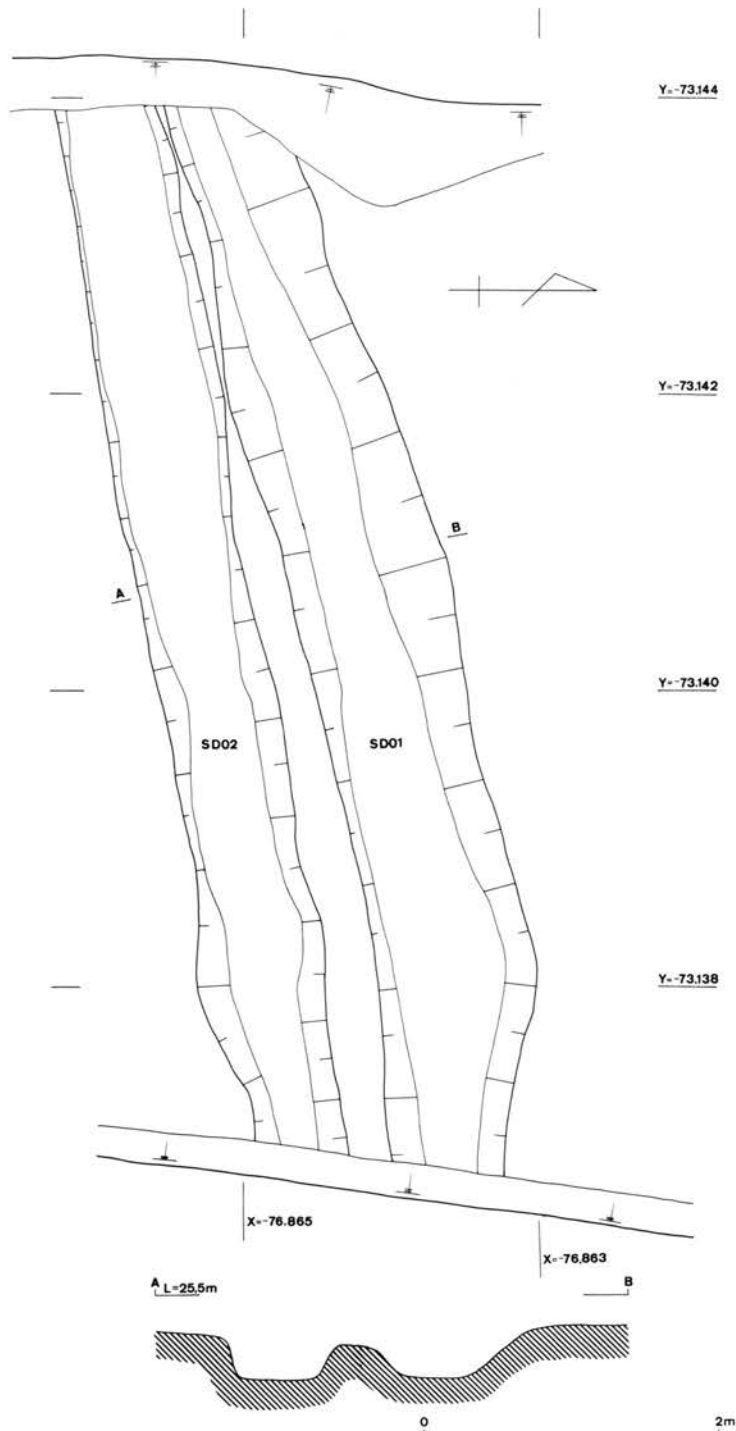
溝(SD03)は、東西溝で、長さ8.5m分・幅40～70cm・深さ20cmを測る。断面形は舟底形である。埋土は、青灰色細砂である。中間部にオーバーフローした状況がみられ、やや抉りとられたようになっている。

杭列(SA01)は、SD03に並行している。3基の杭痕は、2.4m等間となっている。各々2つの大きさもほぼ直径30cm前後と揃っている。中間の杭から、瓦器椀がほぼ完形で、口縁部を下にして伏せられた状態で出土した(図版第35-(2))。

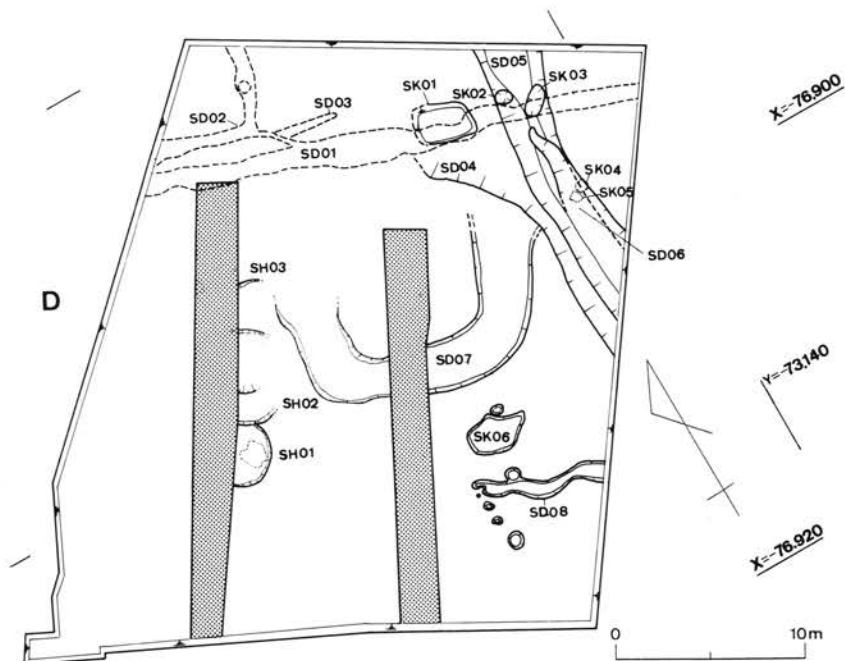
Dトレンチでは、鎌倉時代の溝3条(SD01～03)、石敷方形土坑1基(SK01)、弥生時代の溝4条(SD04～07)、土坑4基(SK02～05)、竪穴式住居跡3基(SH01～03)を検出した。

溝(SD01)は、東西方向で、長さ26m分・幅1～1.7m・深さ30cmを測る。断面形は、舟底形である。暗青灰色粘質土を埋土とする。須恵器杯・壺・甕や弥生土器片などが上層から、瓦器椀・土師器皿が底近くで出土した。13～14世紀の鎌倉時代の溝である。

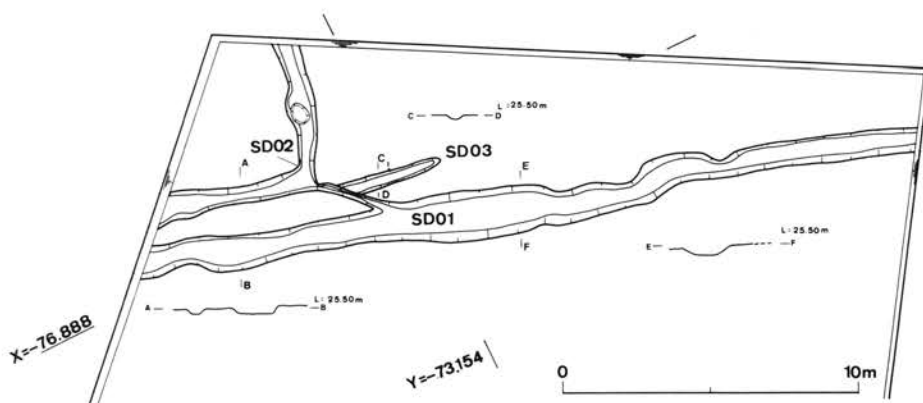
溝(SD02)は、トレンチ北西隅で、「L」字形に検出された。溝(SD01)にもコーナー部からのびて接続している。幅は、接続部で70cm、その他では1mを測る。深さは、接続部では浅くて5cm、南北・東西の部分で15cmである。断面は舟底形を呈する。淡青灰褐色砂質土を埋土とす



第120図 Cトレンチ溝(SD01・02)平・断面実測図



第121図 Dトレンチ全体図(トーンは断ち割り)

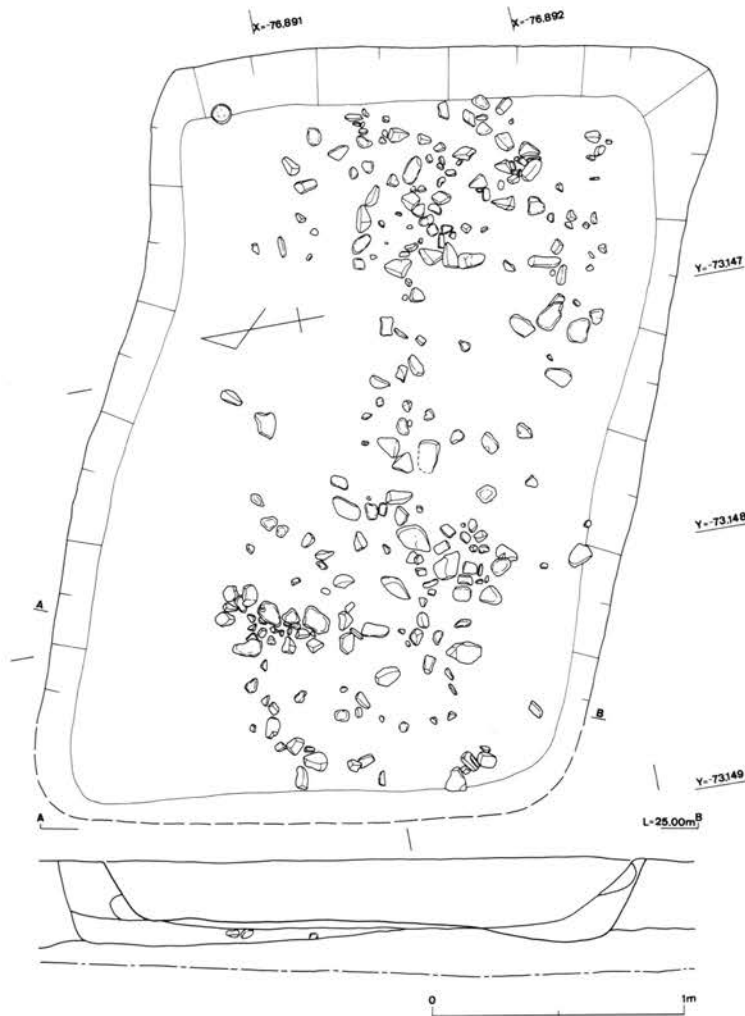


第122図 Dトレンチ溝(SD01・02・03)平・断面実測図

る。出土遺物は、細片ながら瓦器椀・土師器皿などがある。鎌倉時代のものである。

溝(SD03)は、溝(SD02)と溝(SD01)の接続部から東へと伸びていく。長さ3.5m分・幅0.5m・深さ20cmである。断面形は、半円形である。埋土は、灰褐色粘質土である。出土遺物はない。溝(SD01)・溝(SD02)と同じく鎌倉時代のものと思われる。

土坑(SK01)は、隅丸方形で、長辺3m・短辺2m・深さ15cmを測る。断面は、舟底形を呈する。底は平坦になっている。底全面に、拳大までの垂角礫が敷かれていた。埋土は、主に淡灰褐色粘質土である。出土遺物は、瓦器椀・土師器皿・扁平方柱砥石である。上位

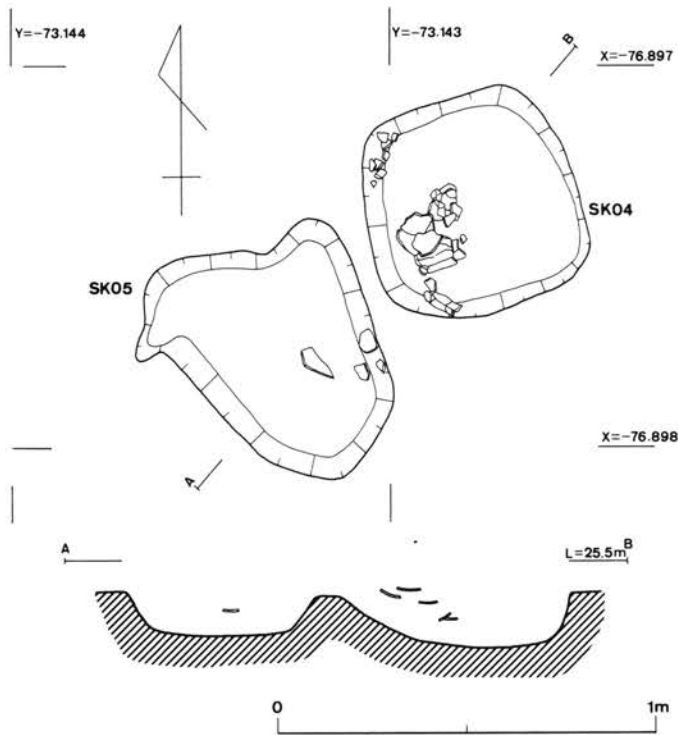


第123図 Dトレンチ石敷土坑(S K01)平・断面実測図

の溝(S D01)よりも古い、鎌倉時代に入る。

溝(S D05)は、南北方向にのびる弥生時代中期の溝である。長さ16m分・幅2.5～3m・深さ1.3mを測る。断面形は、ほぼ舟底形である。埋土は、全体に攪拌したように、濃褐色粘質細砂・暗褐色炭混り粘質土などが上下に入り組んでいる。溝の南半部には、焼土・炭化物・土器を特に多く含む弥生時代後期の溝(S D06)があり、この溝が埋没していくある時期に、何らかの遺構が壊れた状態で溝中に落ち込んだものと考えられる。

溝(S D04)は、溝(S D05・06)を包括するさらに大規模な溝である。南半では溝(S D05)に並行し、北半からは北西方向にさらに広がる。長さは15m分、幅は4～5m以上、深さ1～1.5mを測る。断面形は舟底形である。埋土は、溝(S D05)と同様、暗褐色土系の粘



第124図 Dトレンチ土坑(S K04・05)平・断面実測図

一辺が丸く弧を描く不整形な土坑である。長軸70cm・短軸50cm・深さ10cmを測る。断面形は、舟底形で底は平坦面を形成する。埋土は、やや焼土を含む淡赤褐色粘質土である。炭化物は認められない。肩部の落ち込み部に、弥生土器の出土がみられた(第124図)。

土坑(S K04)は、土坑(S K05)に隣接する隅丸正方形に近い形である。一辺55cmを測る。断面形は、浅い舟底形である。埋土はS K20と同様、焼土を含む褐色粘質土である。弥生土器が出土する(第124図)。

土坑(S K02)は、楕円形である。長軸90cm・短軸70cm・深さ25cmを測る。断面形は舟底形を呈する。淡褐色粘質土の埋土である。弥生土器が出土する。

土坑(S K03)は、長楕円形である。長軸1.7m・短軸90cm・深さ30cmを測る。舟底形の断面である。埋土は、褐色粘質土と淡灰褐色砂質土の互層である。土坑(S K02)と同じく、溝(S D05・06)の埋没後に掘られている。弥生時代中期のものである。

竪穴式住居跡(S H01~03)は、直径約4mの円形である。断ち割りの断面図でみると、柱穴痕らしき掘り込みや、中央部における焼土塊の検出等から、住居跡とした。崩壊が著

質土・細砂などの互層になる。弥生土器のみ出土した。

溝(S D07)は、溝(S D04)に向かい、南側はゆるやかに屈曲する。長さ18m分・幅2~2.5m・深さ10~20cmを測る。断面は舟底形である。埋土は暗褐色砂質土である。溝(S D04)には接続せず西側への広がりも不明瞭である。遺物は、弥生時代の土器のみである。弥生時代中期に属する。

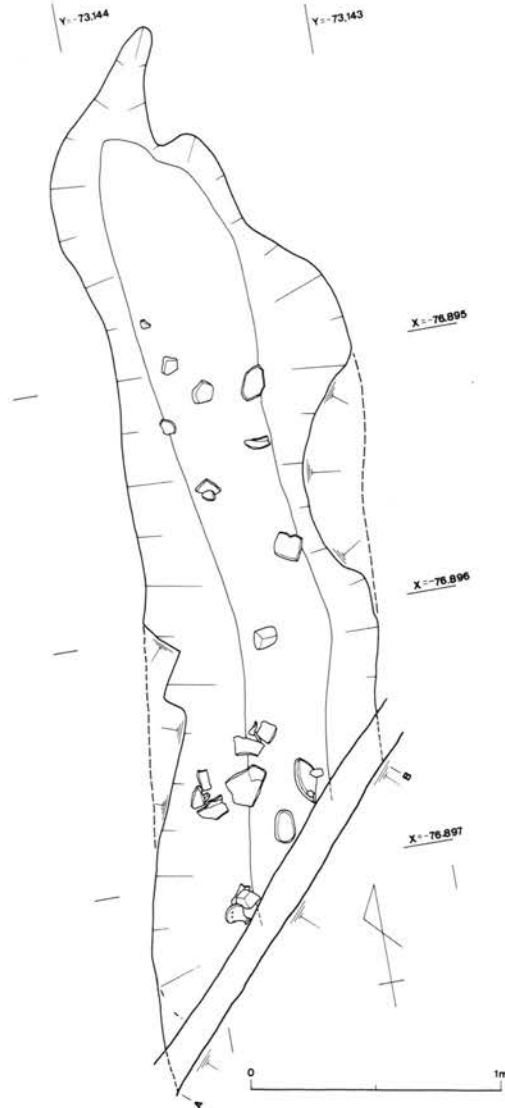
土坑(S K05)は、



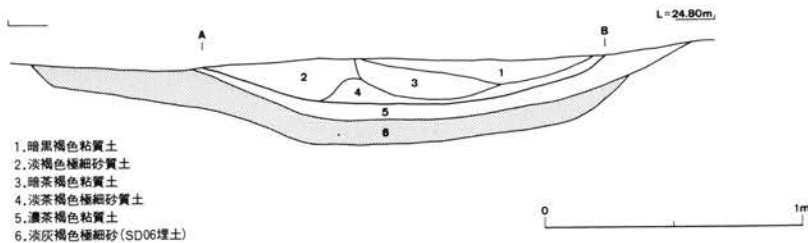
しかつたが、わずかに円形プランの復原が可能であった。立ち上がりの残存長は約10cm程度である。東半部で多量の弥生土器片が出土した。

溝(S D08)は、蛇行する東西溝で、長さ7.5m分・幅1m・深さ15cmを測る。断面形は、舟底形である。埋土は、淡褐色砂質土である。鎌倉時代の土師器皿が出土した。

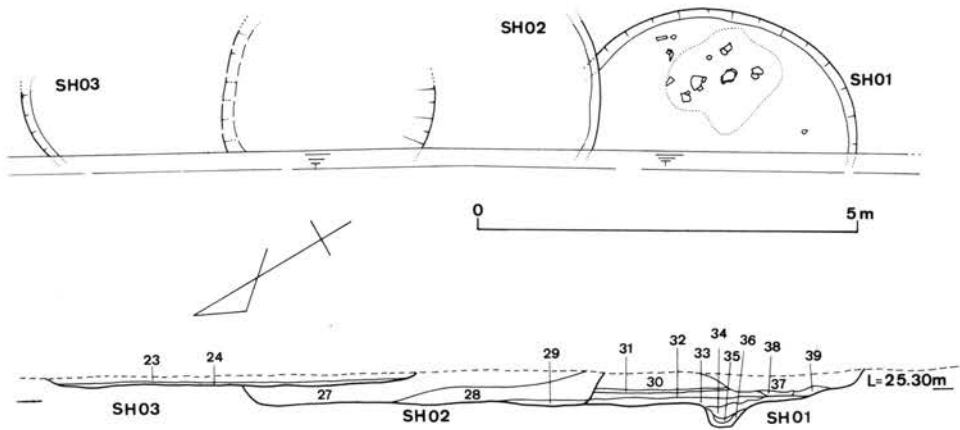
Eトレンチでは、円形・楕円形・不整形な土坑群(S K01~18)、溝状遺構(S D01)がある(第129図)。S K01~08は、同時にまとまって検出された(第128図)。大小はさまざまで、直径20~50cm・深さ10~20cmを測る。暗灰褐色粘質土を埋土とする。断面形は、底を平坦とする逆台形を呈する。弥生時代後期~中世の土器が出土する。土坑(S K12・14・11)は、黒褐色砂質土を埋土とするもので、炭化物・焼土を多く包含している。土坑(S K13・15・16)も、形は細長い不整形であるが、埋土は黒褐色砂質土で共通している。炭化物・焼土を多く含んでいる。深さは土坑(S K12~16)はすべて約10



第125図 Dトレンチ溝(S D05)内土器溜り平面図

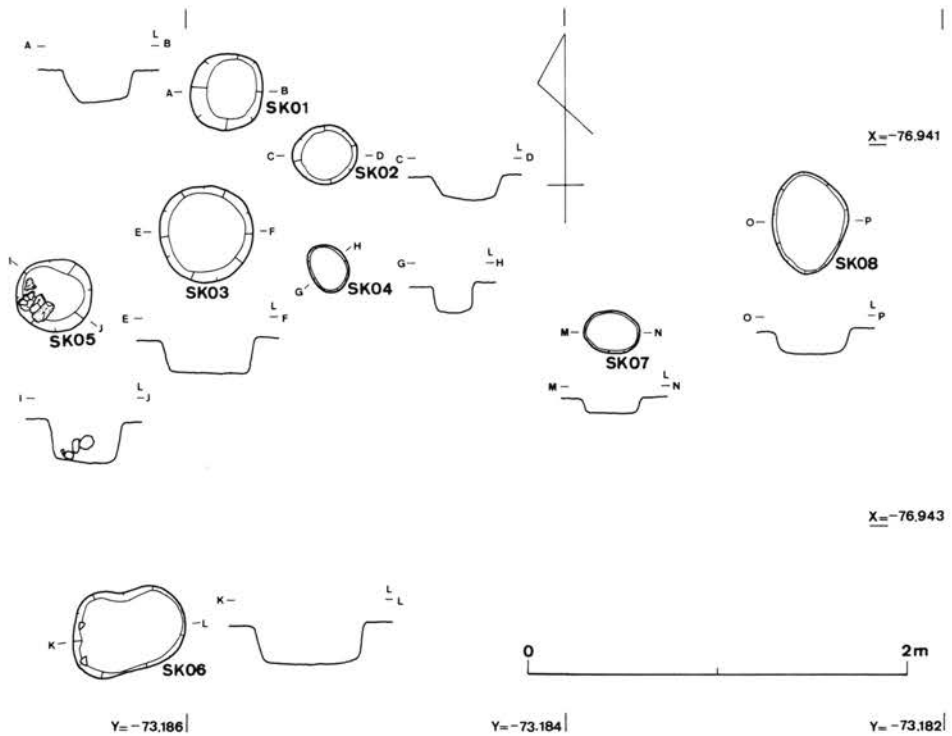


第126図 Dトレンチ溝(S D06)断面実測図(トーンはS D05)

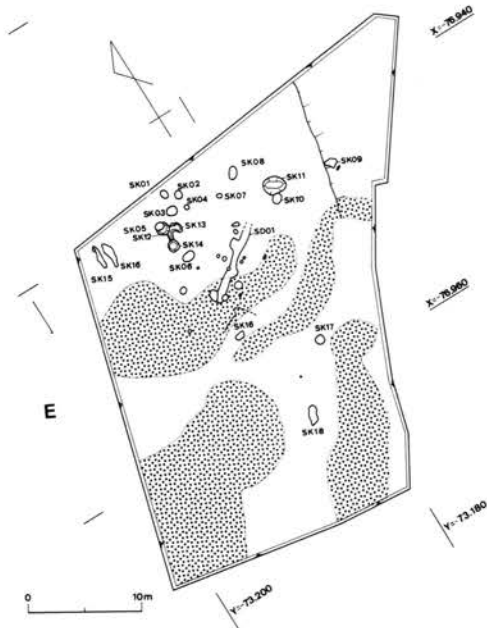


第127図 竪穴式住居跡(SH01~03)平・断面実測図

- |                   |                    |                  |            |
|-------------------|--------------------|------------------|------------|
| 23.褐色粘質土          | 24.淡赤褐色土(炭化物・焼土含む) | 25.淡黄色極細砂        | 26.褐色土     |
| 27.暗茶褐色(小礫混じり)粘質土 | 28.暗黒褐色粘質土         | 29.暗褐色砂質土        | 30.暗灰褐色粘質土 |
| 31.淡黄色極細砂(炭化物含む)  | 32.淡赤褐色粘質土         | 33.暗赤褐色粘質土       |            |
| 34.淡赤褐色(小礫混じり)粘質土 | 35.淡赤褐色粘質土(炭化物含む)  | 36.淡黄褐色極細砂(焼土含む) |            |
| 37.淡黒褐色極細砂        | 38.濁黄褐色粘質土         | 39.淡黄色極細砂        |            |



第128図 Eトレンチ土坑(SK01~08)平・断面実測図



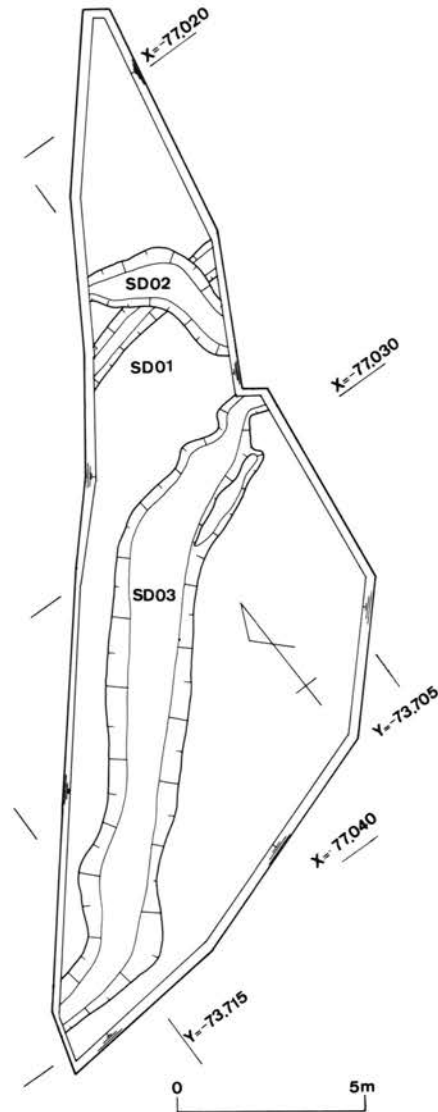
第129図 Eトレンチ全体図

～15cmを測る。弥生時代中期の土器が出土する。土坑(SK09)は、不整形な焼土坑で、約5cmの深さで、中から弥生土器が出土した。このように、合計4か所(SK09・13・15・16)の火処の分布を確認した。これらは、炉をもつ住居跡(弥生時代中期)のあった可能性をうかがわせる。

溝(SD01)は、幅約50cm・深さ約5～10cmを測り、北にいくにつれ浅い残存状況となる。時期は不明である。出土遺物はみられない。

なお、旧河川の河床を示す灰褐色砂礫の面が広がる(第129図トーン部)。この砂礫中からは、明瞭な遺物の出土はみられなかった。河床面の標高は、約25.5mを測る。

Fトレンチでは、3条の溝を検出した(第130図)。溝(SD01)は、幅約80cm・深さ約30cmを測る。埋土は、暗褐色粘質土である。溝(SD02)は、溝(SD01)を切る屈曲した溝で、幅約1.3m・深さ約35cmを測る。埋土は、暗灰色粘質土を主とする。溝(SD03)は、蛇行する溝で、幅約1.2～2.3m・深さ約60cmを測る。いずれの溝も断面形は、半円形を呈する。弥生時代から中世までの遺物が出土するが、各々の溝の掘られた時期は不明である。



第130図 Fトレンチ全体図

## 5. 出土遺物

出土遺物には、土器類(弥生土器・陶磁器・瓦質土器・須恵器・土師器)、石器、その他(土錘・ふいごの羽口)がある。記述は原則として、遺構内一括資料について扱った後、包含層内出土のものを記述していく。

### (1)遺構内出土遺物

#### ①Aトレンチ

##### ア. 溝(S D01)(第131図1～18)

1は、白磁の高台付皿である。口径9cm・器高1.6cmを測る。2は、青磁皿である。口径は、10.5cm・器高1.4cmを測る。越州窯系青磁である。

3は、陶器の壺で、頸部に一条の沈線が入り、大きく外反する口縁をもつ。4は、信楽焼の鉢である。淡黄赤色を帯びた色調で、胎土中に長石の粒を多く含む。5～18は、褐色系の土師器皿である。色調は、赤褐色のほか、淡褐色のものも多くみられる。図化したもののほか、土師器皿は圧倒的な割合を占め、4分の1の破片で約900片を数える。これらの平均口径は8.6cm、器高は1.7cm、器壁の厚さは4.2mmを測る。時期は14世紀代である。

##### イ. 柱穴内(第131図19～38)

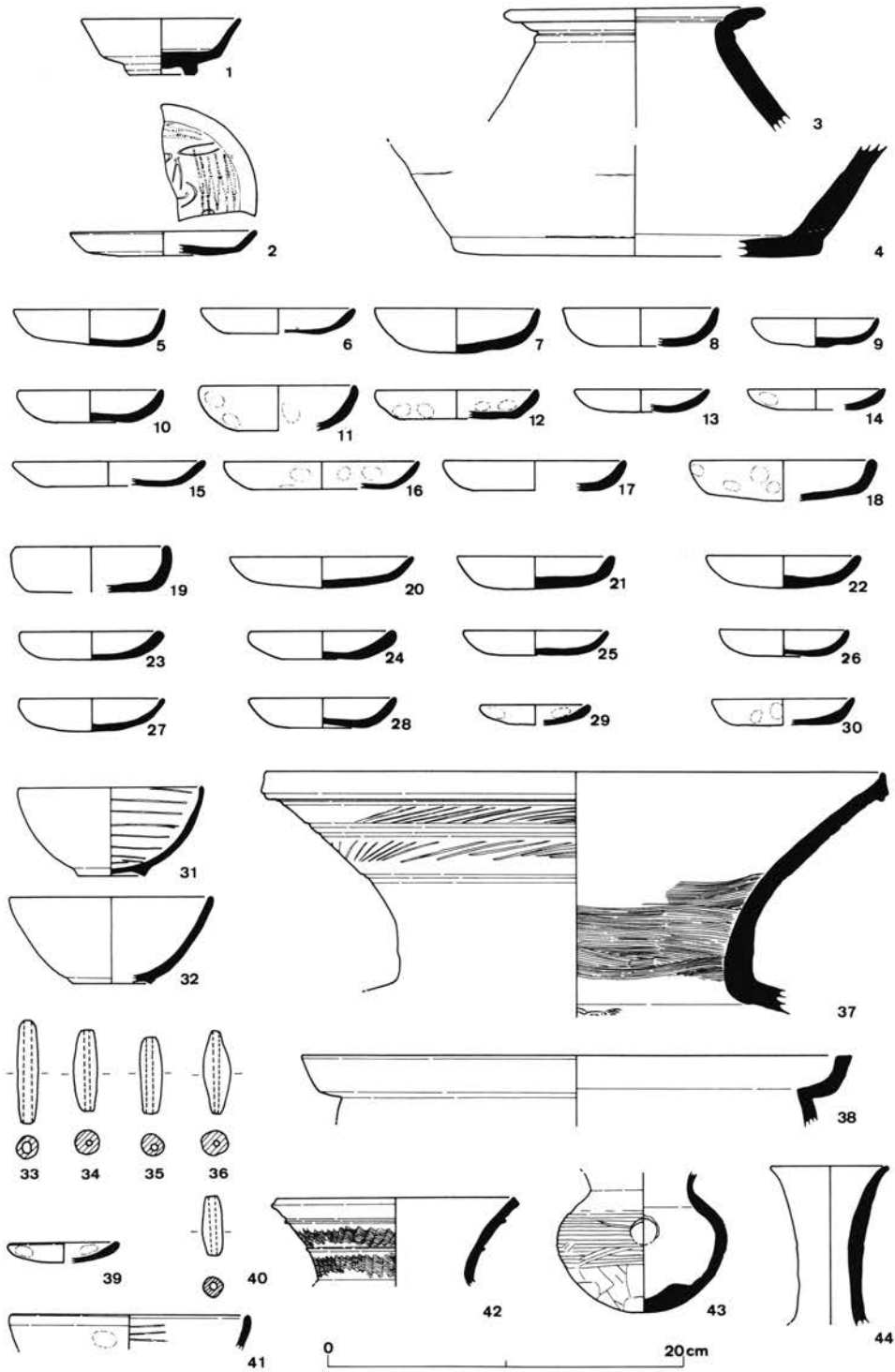
19～30は、柱穴(S B03のpit6)内から出土した褐色系土師器皿である。この柱穴内からは、土師器皿ばかり十数点がほぼ完形で出土した。溝(S D01)内出土のものとあまり変わらない形態であるが、器壁がやや厚い。12点の平均口径は8.6cm、器高は1.8cm、器壁の厚さ5.6mmとなる。これらも14世紀代のものである。31は、柱穴(pit67)、32は、柱穴(pit65)内から出土した瓦器碗である。ともに三角形の高台をわずかに残し、31は、内面に平行暗文が施されている。器壁が比較的厚く、全体的にずんぐりとしたつくりであるので14世紀初頭のものであろうか。

33～36は、土錘である。柱穴(pit20)内から出土した。この柱穴内は、土錘ばかり数点出土した。37は、須恵器の甕口縁断片である。柱穴(S B01のpit5)から出土した。内面は、口縁下半にハケ目、体部にかけて青海波文がみられる。時期は、TK217に併行する頃(7世紀前半)になろうか。<sup>(註48)</sup>38は、柱穴(pit68)内出土の瓦質土器の鍋である。明瞭な屈曲部をもつ。13世紀前半頃に入る。

##### ウ. 溝(S D06)(第131図42～44)

42は、須恵器壺の口縁部断片である。口縁端部は面をもち、外面は2条のシャープな突帯の間に波状紋をめぐらせる。時期はTK208に併行する5世紀後半であると思われる。

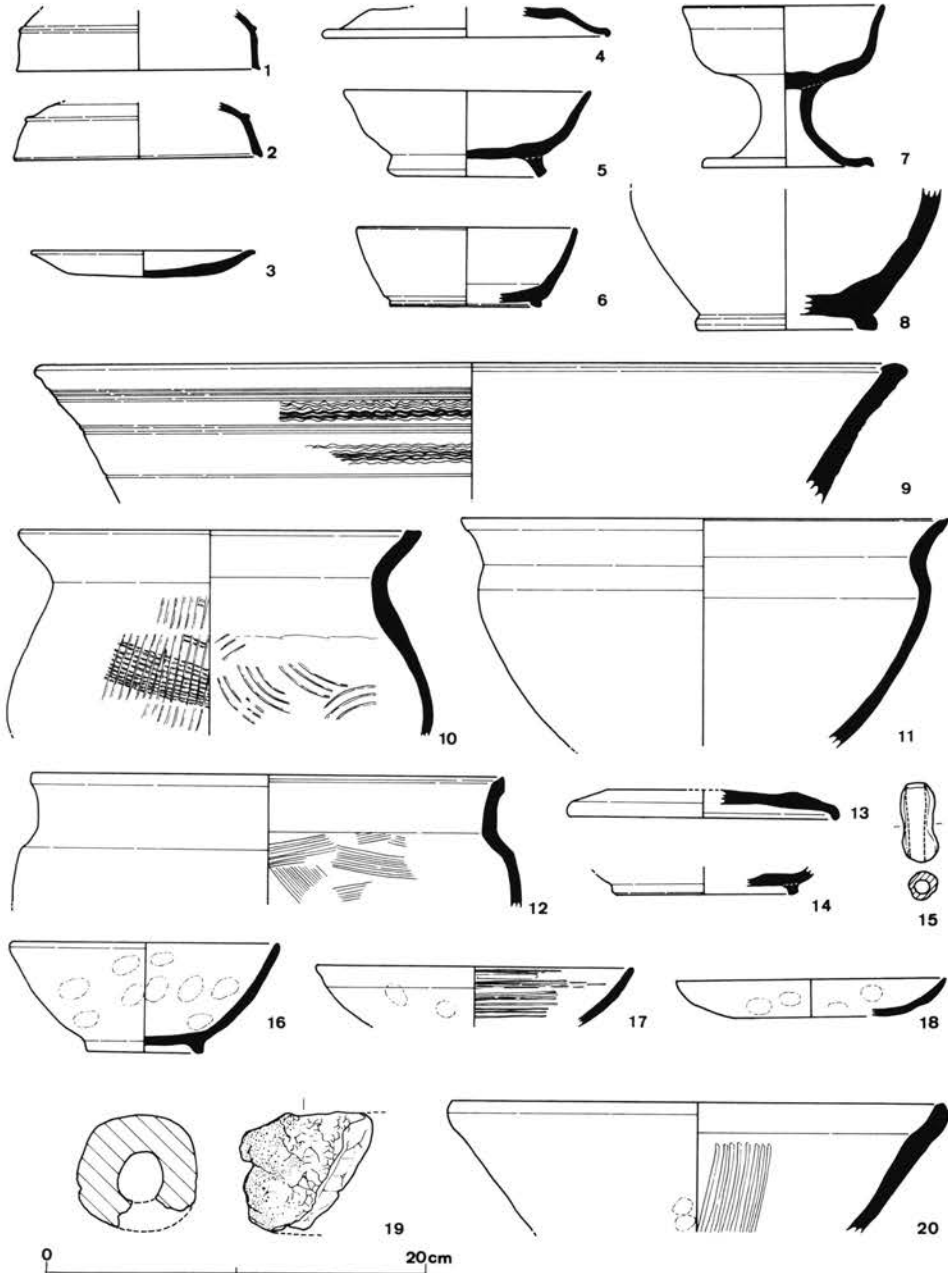
43は、須恵器甗である。外面にはカキ目とケズリ(下半～底)がみられる。44は、須恵器の長頸壺の口頸部である。平安時代のものであろう。



第131図 出土遺物実測図(1)

エ. 土坑(S K05)(第131図39~41)

39は、褐色系の土師器皿である。口径6.2cm・器高1.2cmを測る。40は、土錘である。41は、瓦器碗の口縁部断片である。底部は欠損しているので、明確な時期は不明である。周辺の建物跡群や溝にあわせて14世紀代としておく。(黒坪一樹)



第132図 出土遺物実測図(2)

②Bトレンチ

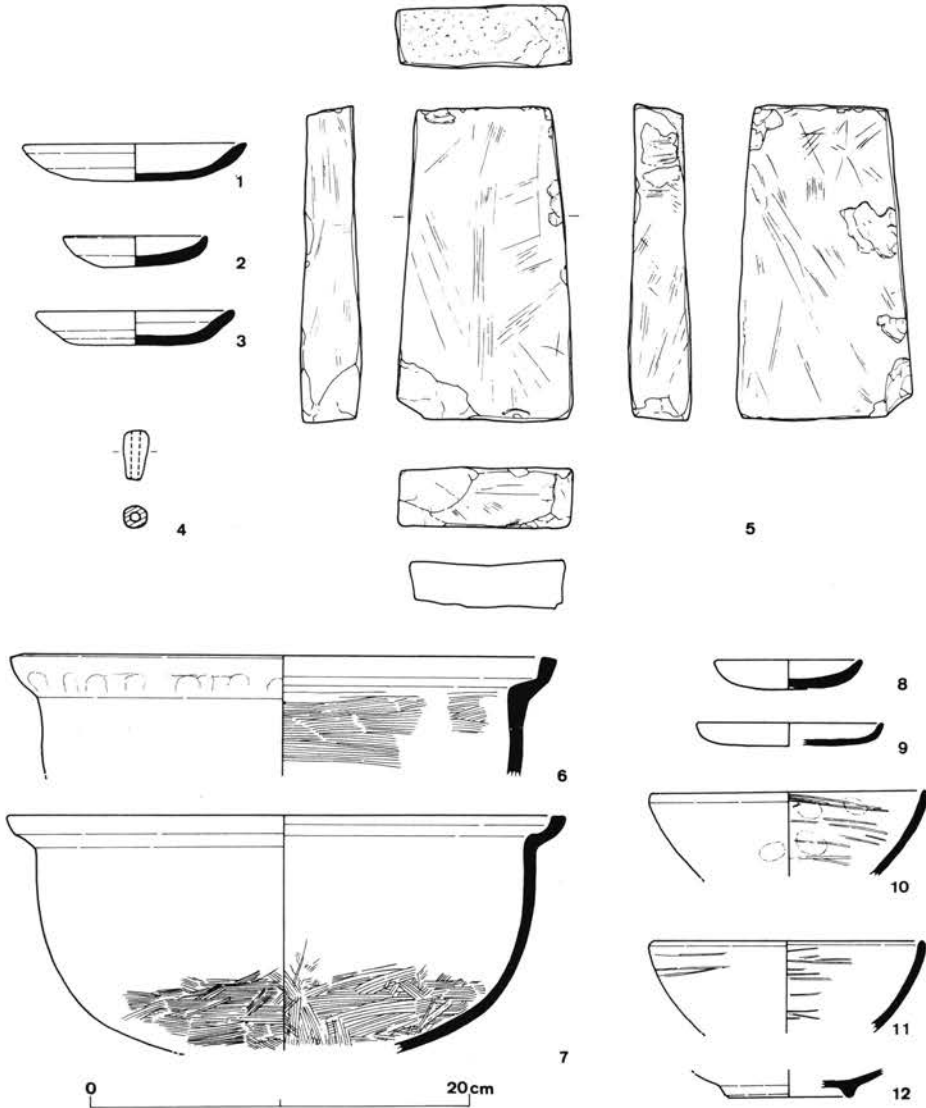
ア. 溝(S D02)出土遺物(第132図13~15)

13・14は、須恵器の杯蓋と高台をもつ杯の底部断面である。奈良時代~平安時代にかけてのものである。15は、土錘である。ピーナッツに似たいびつな形をしている。

③Cトレンチ

ア. 溝(S D05)(第132図1~12)

1・2は、須恵器杯蓋である。体部と口縁の境は、シャープな稜がつくり出されている。



第133図 出土遺物実測図(3)

5世紀前半に比定されよう。3は、須恵器皿である。口径11.8cmで端正なつくりである。4は、須恵器杯蓋である。5・6は、須恵器杯である。5はやや外反ぎみの口縁端部を持ち、ふんばった形の高台がつく。やや「S」字を描く口縁への立ち上がりが見られる。4～6は、奈良～平安時代である。7は、須恵器高杯である。TK217併行期のもので、およそ7世紀前半といえる。8は、須恵器壺の底部から体部にかけての断片である。平安時代のものである。9は、須恵器甕の口縁部である。古墳時代のものである。

10は、須恵器の甕である。灰白色の色調で、生焼けの状態を呈している。外面に粗い平行タタキを交差させ、内面は、下半に同心円タタキを施している。11は、瓦質土器の鉢である。黄灰色の色調で、焼成はよくない。口径は26cmを測る。12は、瓦質土器の壺である。灰色っぽい色調で、内面にハケ目調整が施される。口径は25cmを測る。15世紀代のものであろう。なお、図化していないが、<sup>みいご</sup>鞆の羽口・鉄滓が多く出土した。鉄滓片の総重量は約2.5kg分ある。

イ. 柱穴内(pit 1・2)(第132図16～18)

16・17は、瓦器椀である。16はpit 1、17はpit 2から出土した。16は、口径14.2cm・器高5.8cmを測り、しっかりとした高台をもつ。調整は摩滅のため不明。18は、土師器皿である。内・外面に指頭圧痕が見られる。

④Dトレンチ

ア. 方形石敷土坑(S K 01)(第133図1～5)

1～3は、褐色系土師器の皿である。1は口径11.8cm・器高2cm、2は口径7.6cm・器高1.6cm、3は口径10.4cm・器高1.8cmをそれぞれ測る。14世紀代のものである。5は、砂岩製の砥石である。上端面を除くすべての面は摩擦により滑らかとなり、筋条の線条痕も観察される。部分的に炭化物(タール状のもの)も付着している。

イ. 溝(S D 01)(第133図6～10)

6・7は、瓦質土器の鍋である。6は、口縁部の屈曲が内側ではほぼ直線的に明瞭である。7は、6に比べてやや丸みを帯びて屈曲する。体部の下半から底部にかけて粗いハケ目調整がなされる。13世紀前半に比定される遺物である。8・9は、土師器皿である。8は口径7.8cm・器高1.6cm、9は口径10cm・器高1.2cmを測る。

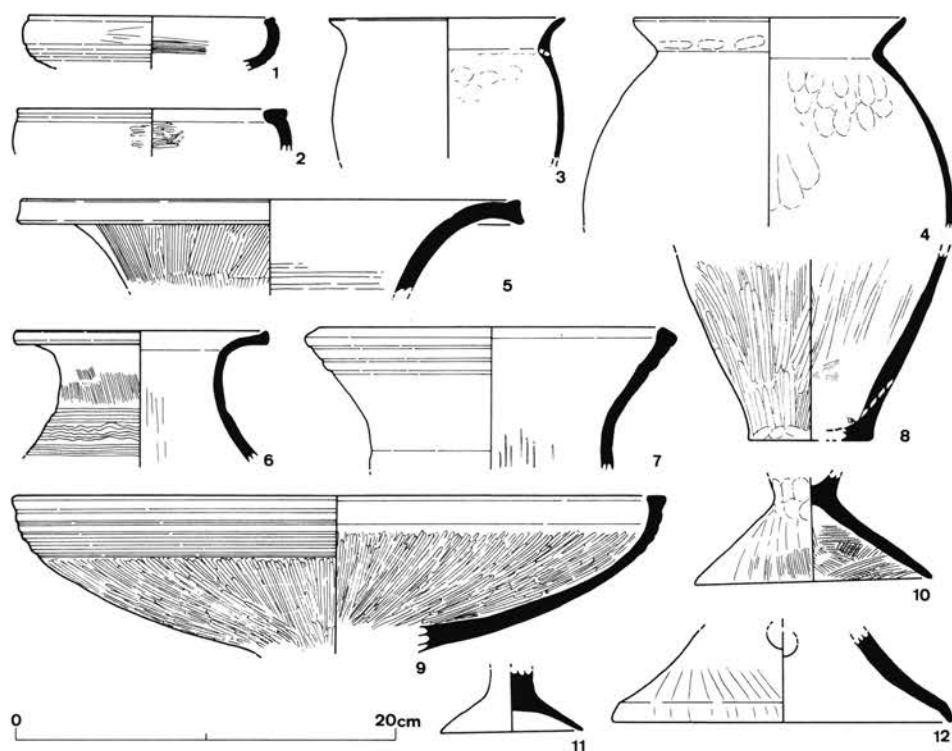
10は、瓦器椀である。底部を欠損している。12世紀末から13世紀に比定される。

(黒坪一樹)

ウ. 竪穴式住居跡(S H 02・03)、土坑(S K 02・04・06)出土遺物(第134図)

弥生時代中期の土器(1～9) 壺(5～8)、甕(3・4)、高杯(1・2・9)がある。壺には外反して大きく開く口縁をもつもの(5)、直立ぎみの頸部から口縁が外反して開くも





第134図 出土遺物実測図(4)

S H01:1・5・6 S H02:9 S K02:3・4・7・8 S K04:2 S K06:10~12

の(6)、わずかに外反する直口のもの(7)がある。6は頸部に櫛描き文、7は口縁部に凹線文を巡らす。8は底部である。内面にヘラ削り、外面にヘラ磨きを施す。甕は「く」の字形に外反するものである。内外面ナデ調整、内面には指頭圧痕文が顕著である。

弥生時代後期の土器(10~12) 高杯(10・11)と器台(12)がある。

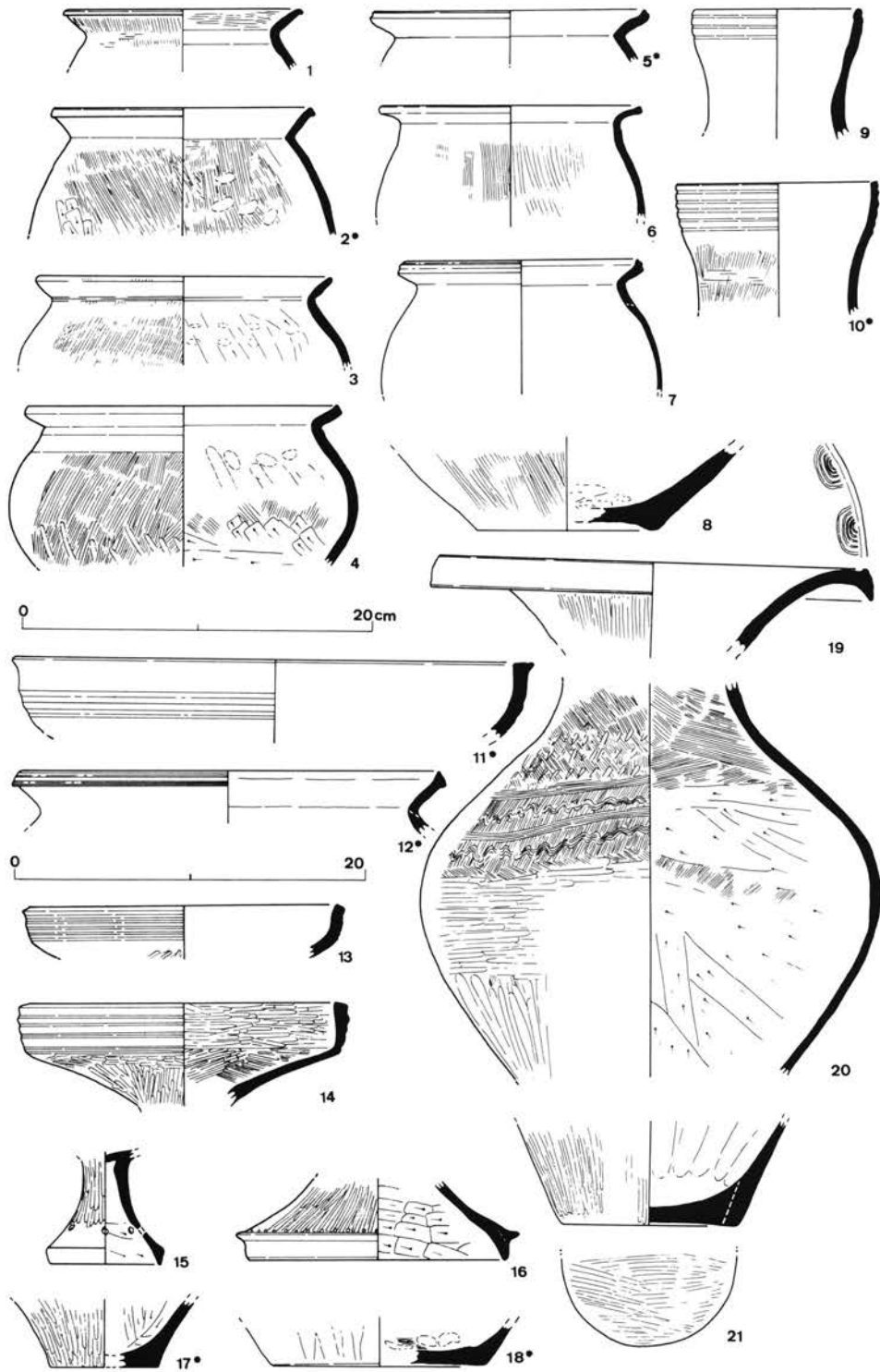
エ. 溝(S D04・05・06)出土遺物(第135・136図)

中期と後期の土器がある。

弥生時代中期の土器 いずれも第IV様式に属するものである。壺・甕・高杯がある。

壺には、口縁部が大きく外反するもの(19)と直立する頸部から外反するもの(30)、直口のもの(9・10)とがある。19は、口縁部内面に扇形文がめぐる。20は、壺の体部である。肩~胴部にかけて列点文、櫛描き直線文・波状文が施されている。外面にヘラ磨き、内面にヘラ削りがある。9・10は、口縁外面に凹線文がめぐる。

甕には「く」の字に外反して端部に面を作るもの(1・2)、丸くおさめるもの(3)、端部をつまみあげるもの(4・5・6)、端部を拡張して外傾する面を作り凹線文を施すもの(7・12)などがある。3・4は内面にヘラ削りを施す。



第135図 出土遺物実測図(5) ※は S D04、他は S D05中

高杯は、椀状の杯部をもつもの(11・13・23)と屈曲して直口するもの(14)とがある。  
15・16は脚部である。

弥生時代後期の土器 壺(28・29)、甕(22)、鉢(24)、高杯(26・27)、器台(25)等がある。  
28は庄内式土器であろう。29もこれに類すると思われる。22は擬凹線文をもつ甕である。

オ. 溝(S D 07)出土土器(第137図)

いずれも第Ⅳ様式の土器で、壺(8・11)、甕(1~3・6)、鉢(5)、高杯(9・10)などがある。

壺は口縁が外反して大きく開くもの(11)、直口のもの(8)などがある。11は、頸部に櫛描き波状文、肩部に扇形文が施されている。

甕には「く」の字状に外反して端部を丸くおさめるもの(1・3)、端部をつまみあげるもの(2)、頸部が短く外反して外傾する端面をもつもの(6)がある。

(田代 弘)

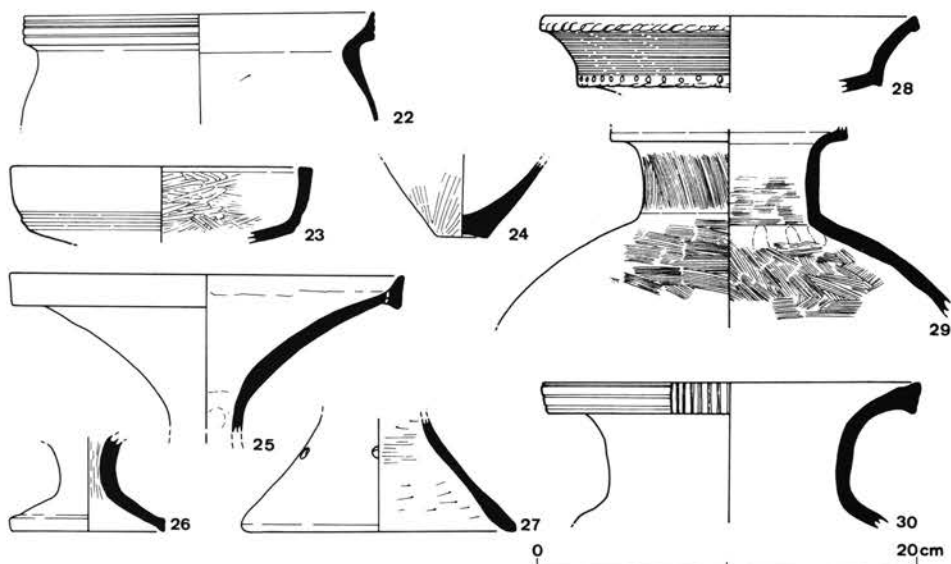
⑤ E トレンチ

ア. 土坑(S K 08)(第133図11・12)

おそらく同一個体の瓦器椀である。あまり退化していない三角形高台をもち、内・外面に暗文がみられる。同一個体として、およそ12世紀末に比定される。

イ. 土坑(S K 01・02・03・11・16)(第138図)

弥生時代中期の土器(3~5・7~10) 3は高杯脚部、4は広口壺である。広口壺は口縁部外面に3条の凹線文と円形浮文がある。5は鉢である。8~10は甕である。「く」の



第136図 出土遺物実測図(6)

30. S K 04 23. S K 05 22・24~29. S K 06

字に外反するタイプ(8)と外傾する面をもつもの(10)がある。10は端面に浅い凹線文2条と3個一對の棒状浮文がある。7は壺の底部である。いずれもIV様式に属するものである。

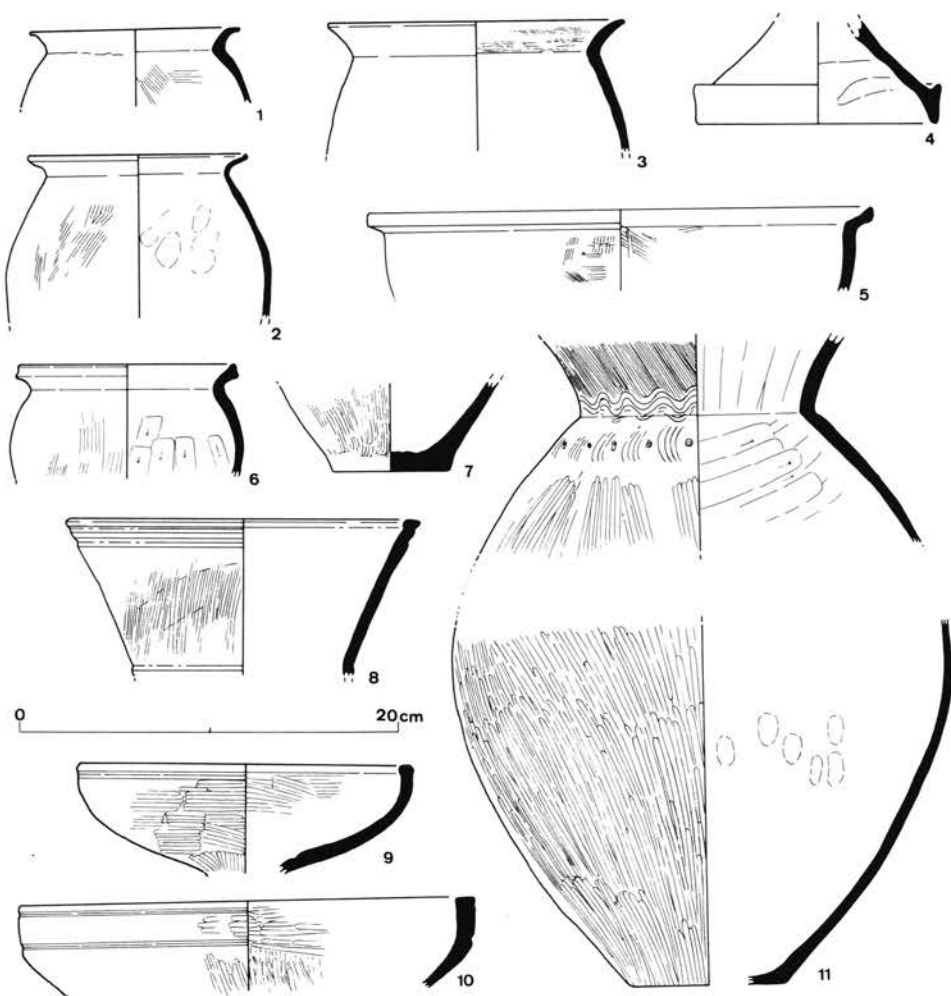
弥生時代後期の土器(1・2・6) 1は長頸壺、2は台付鉢、6は壺の底部である。

(田代 弘)

⑥Fトレンチ

ア. 溝(S D08)(第132図19・20)

20は、陶器の挿鉢である。8条単位の櫛描き一体を観察する。16世紀末から17世紀中頃のものであろう。口径約26cmを測る。19は、<sup>ふいご</sup>の羽口の断片である。先端は赤白色を呈している。ここでも、鉄滓は多く出土している。



第137図 出土遺物実測図(7)

## (2)包含層内出土遺物(第139～144図)

## ①各時代の遺物(第139図)

4・10・11・13・16はAトレンチ、8・9・17・24はCトレンチ、1～3・5～7・14・18・19・21～23はDトレンチ、15・20・25はEトレンチ、12・26はFトレンチからそれぞれ出土した。耕作土中を含むさまざまな層中から出土した。

1・2は、須恵器杯蓋である。1は口径13.4cm、2は口径13.2cmを測る。2はTK209併行の7世紀前半となろう。3・4は、須恵器杯である。3は、口径11.2cmを測る。7世紀前半のTK209併行になる。4は口径11.2cmで、端部受けのかえりが短くなる。TK217併行期であろう。5～9は奈良～平安時代の須恵器類で、5・6は杯蓋、7は高台付き杯、8は壺、9は鉢である。10は、須恵器甕である。古墳時代だが明確な時期は不明である。

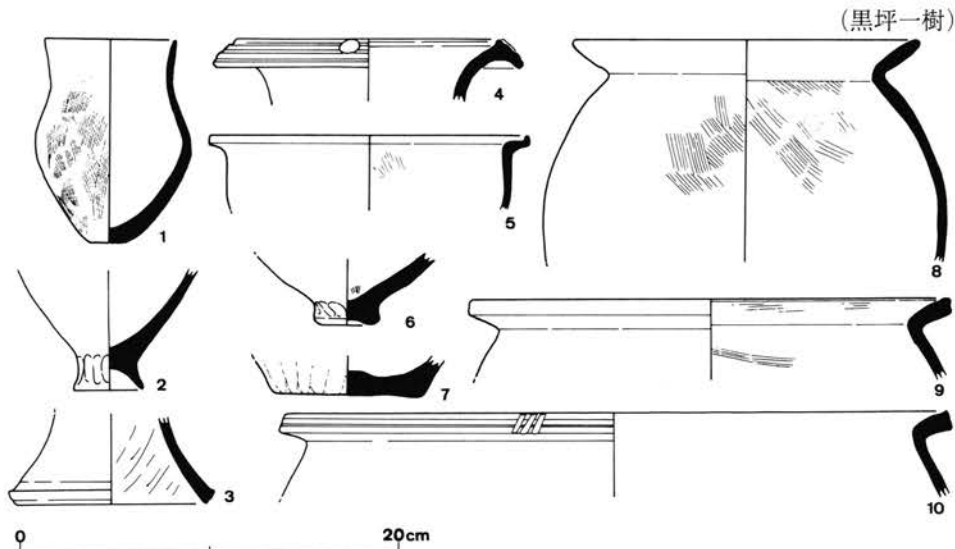
11・12は、土錘である。13は、土師器の釜形土器であろう。外面に8条の水平タタキ調整がみられる。14は、東播系の鉢である。口径34cmを測る。神出Ⅱ式の釜ノ口1号窯(注49)のものに併行する時期と思われる。12世紀末から13世紀前半となろう。

15～19は、中国製輸入陶磁器である。15以外はすべて青磁碗で、見込み部分や内面に猫描き文を描く。15は白磁碗で、ともに龍泉窯系である。12世紀末から13世紀となろう。

20は、古伊万里の染付中皿で、手描きの牡丹唐草文がみられる。17世紀末から18世紀中頃のものである。

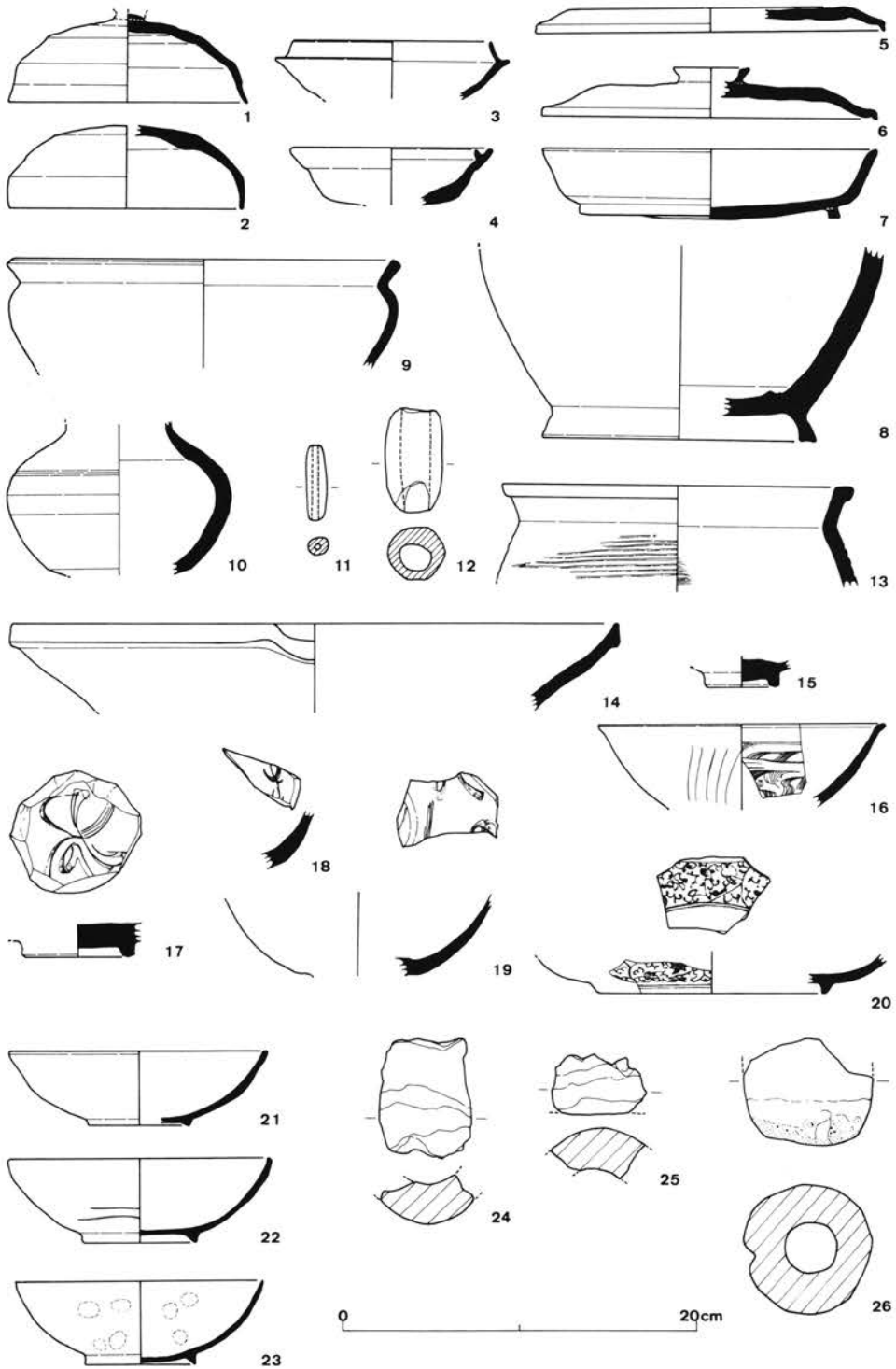
21～23は、瓦器碗である。14～14.4cmの口径を測る。いずれも12世紀代である。

24～26は、鞆の羽口断片である。赤白色の先端部に鉄滓のこびりついているものもある。



第138図 出土遺物実測図(8)

S K 01;2・5～7 S K 02;9 S K 03;1 S K 11;3・4 S K 16;8



第139図 出土遺物実測図(9)

## ②弥生土器

弥生時代中期と後期の土器が主体をなし、古墳時代の土器が少量混在する。

弥生時代中期の土器(第140～142図) 壺・甕・高杯・鉢などがある。

壺には広口壺(1～17)、受け口壺(19)、短頸壺(20・22・25)、無頸壺(18・21・23・24)などがある。

広口壺には、外反して端部に狭い面をなしておわる単純な口縁部のもの(1・2)、端部を拡張して面をつくり波状文や凹線文などの文様帯としているもの(3～17)などがある。後者には円形浮文(7・8・11・15)、棒状浮文(13)などを付加するものがある。頸部に波状文(2)、凹線文(4・6・9・13・16)を施すものがある。16は、肩部にハケ原体木口刺突による羽状文がめぐる。4は、口縁部内面に扇形文がある。短頸壺は口縁外面に凹線文が顕著である。25には扇形文がみられる。無頸壺には、直口のもの(21)、端部を水平に拡張するもの(23・24)、口縁部を折り返すもの(18)がある。

甕(27～34)には、「く」の字に外反する単純なもの(27・30・32)、内傾して立ち上がるもの(31)、端部をつまみあげるもの(28・33・34)、外傾する広い面をもつもの(29)などがある。29は端部に擬凹線文、34はキザミ目文がめぐる。30は唯一の完形品である。体部下半にヘラ削りがある。

高杯(35～42)には碗状の杯部をもつもの(35・36・40～42)、口縁を水平に拡張するもの(37・38)、屈曲して大きく開くもの(39)などがある。39は、興遺跡S D03に類例がある。

弥生時代後期の土器(第141図) 壺・甕・高杯・鉢・蓋などがある。

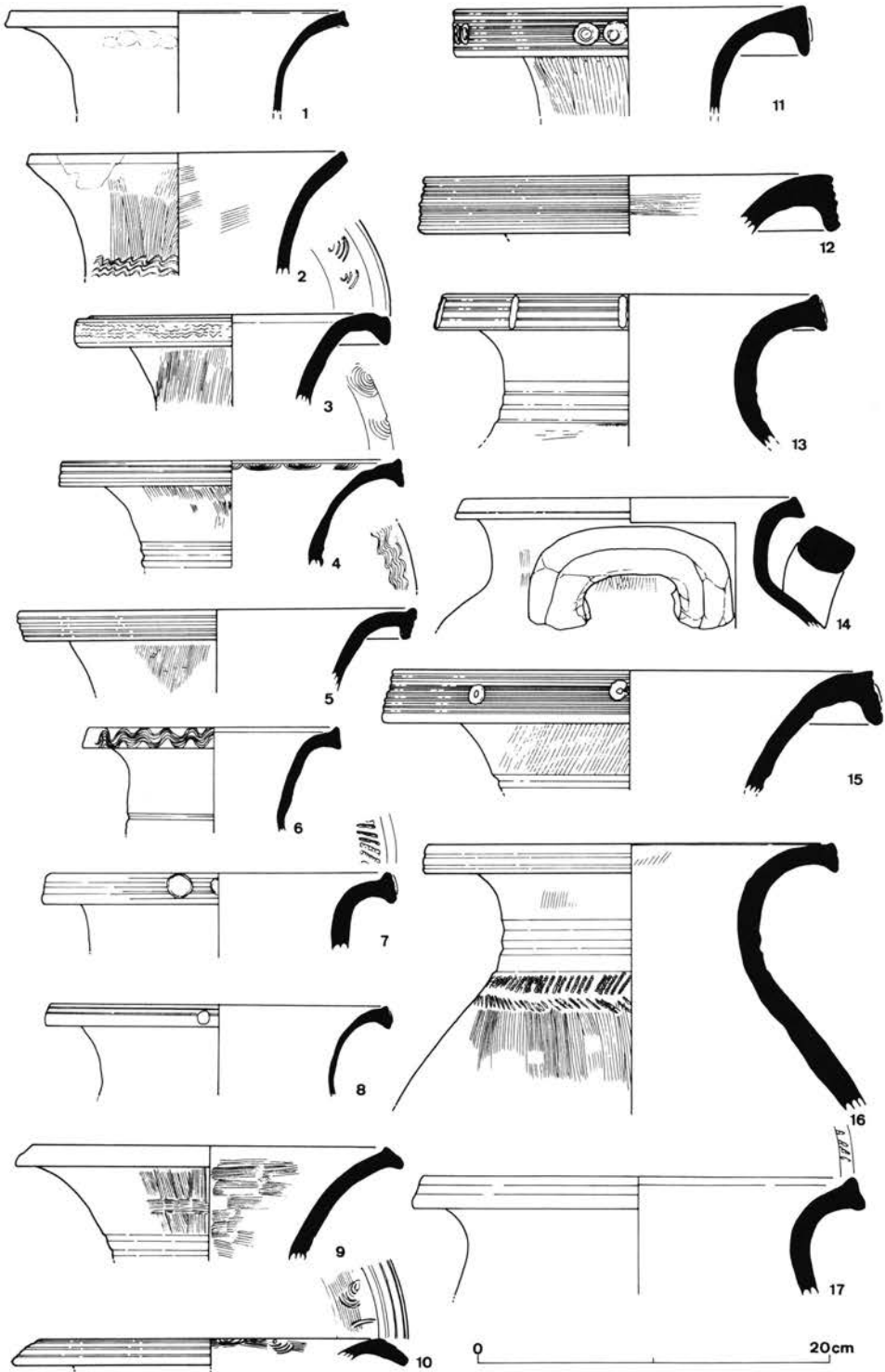
壺には、広口壺(43～45・53・55・57・58)、長頸壺(62・65)などがある。43・44は、二重口縁をもつ。43は口縁部外面をナデ調整、44・53・55・58は擬凹線文を施す。45は口縁端部を拡張して垂直な面を作り、擬凹線文と円形浮文を施す。58は、小型の精製土器である。62は、端部を屈曲させ上方に立ち上げる。65は、口縁部を欠いているがほぼ全形をとどめている。体部外面上半ハケ調整、下半をヘラ磨き、内面ナデ調整である。

甕は、口縁端部に外傾する狭い面を作るもの(48～51・60)、二重口縁をもつもの(46・47・52・56・59)などがある。二重口縁をもつ甕には擬凹線文を施すものとナデ調整するものがある。51は、体部にハケ原体木口による羽状文が巡る。52は完形品である。体部外面ハケ調整、内面ヘラ削りを施す。47・59は、大型品である。60は、ほぼ完形に復原できる。頸部が「く」の字形に屈曲して端部に狭い面を作る。後期前半のものであろう。

蓋は数点出土しているが、いずれも54と同形である。

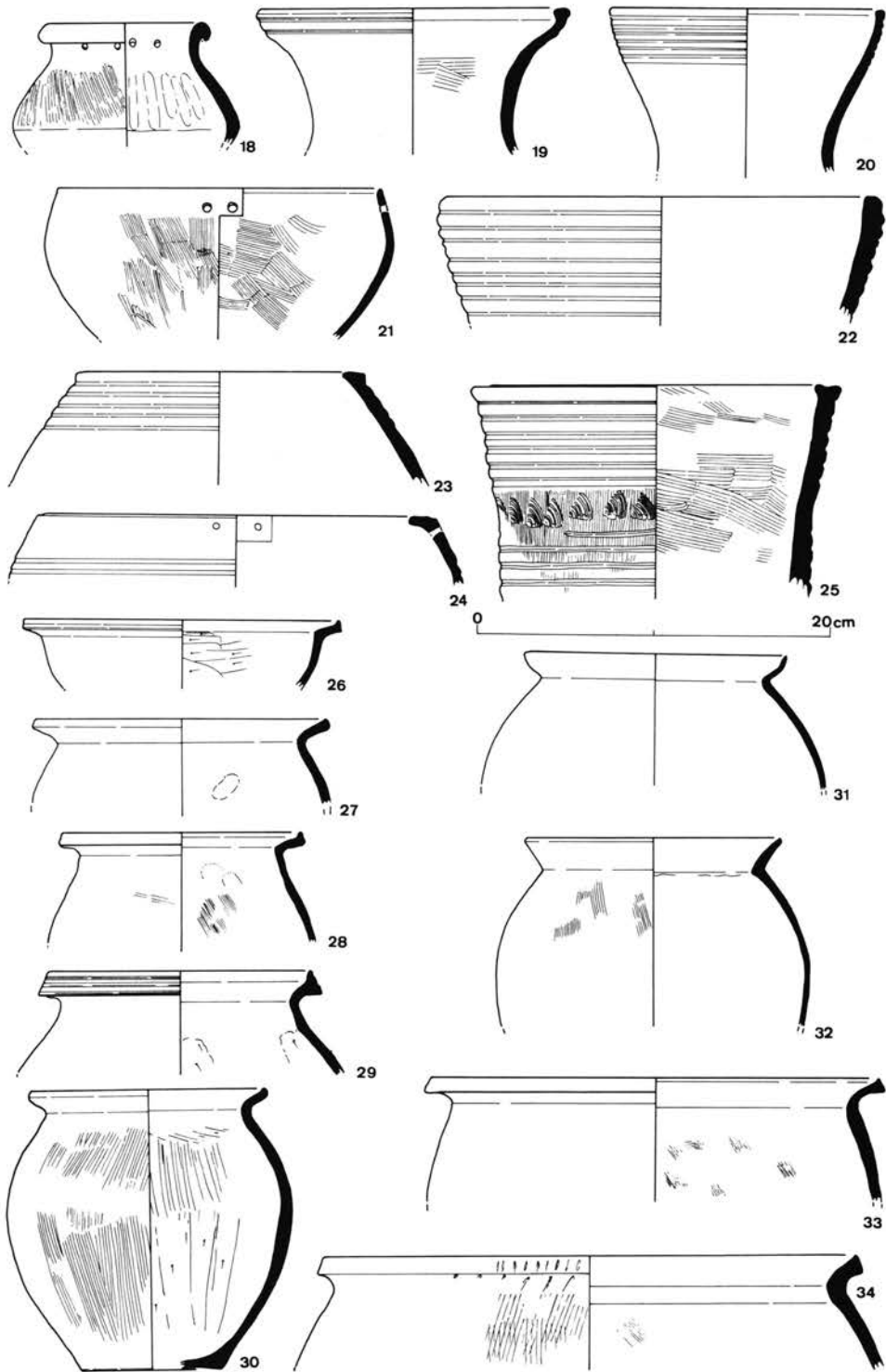
鉢は、二重口縁のもの(66)、扁平な器体をもつもの(76)、粗製品(72)などがある。

高杯には屈曲して大きく外反するもの(74・75)、二重口縁で杯部が鉢状のもの(67・

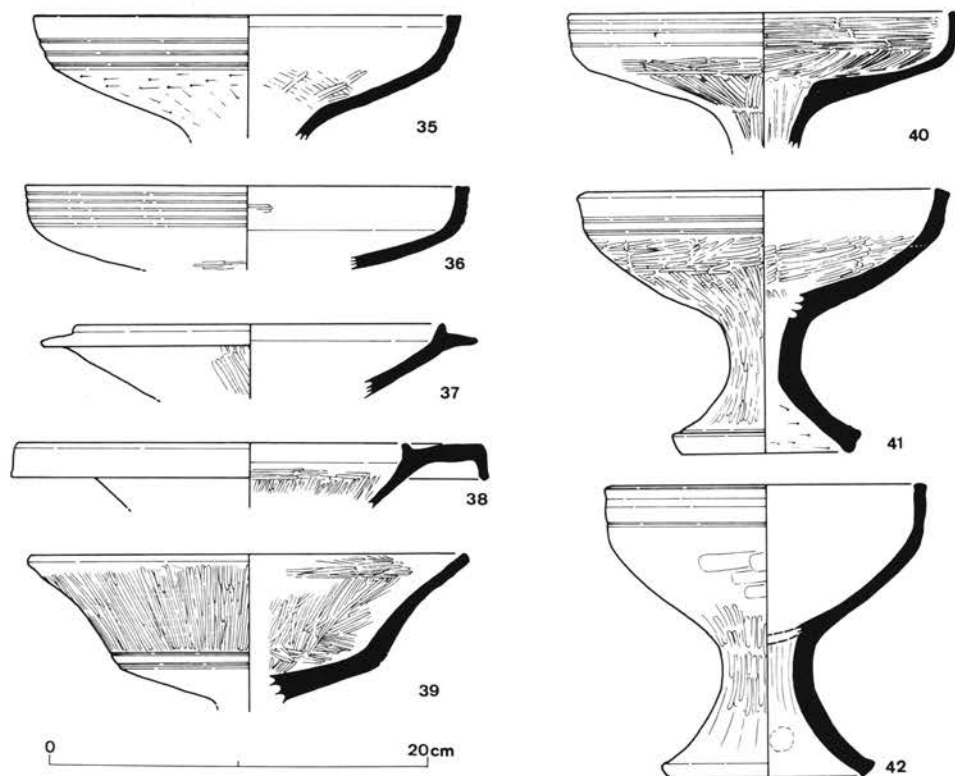


第140図 出土遺物実測図(10)





第141図 出土遺物実測図(11)



第142図 出土遺物実測図(12)

68・71)、椀状の杯部をもつ小型品(78)、直線的に開く杯部をもつ小型品(73・77)などがある。73は、外面に複合鋸歯文、羽状文が巡る。

69・70は、器台である。69は、口縁部外面に連続渦紋をめぐらす。古墳時代の土器には壺(79)、高杯(80)などがある。古墳時代前期に属するものだろう。

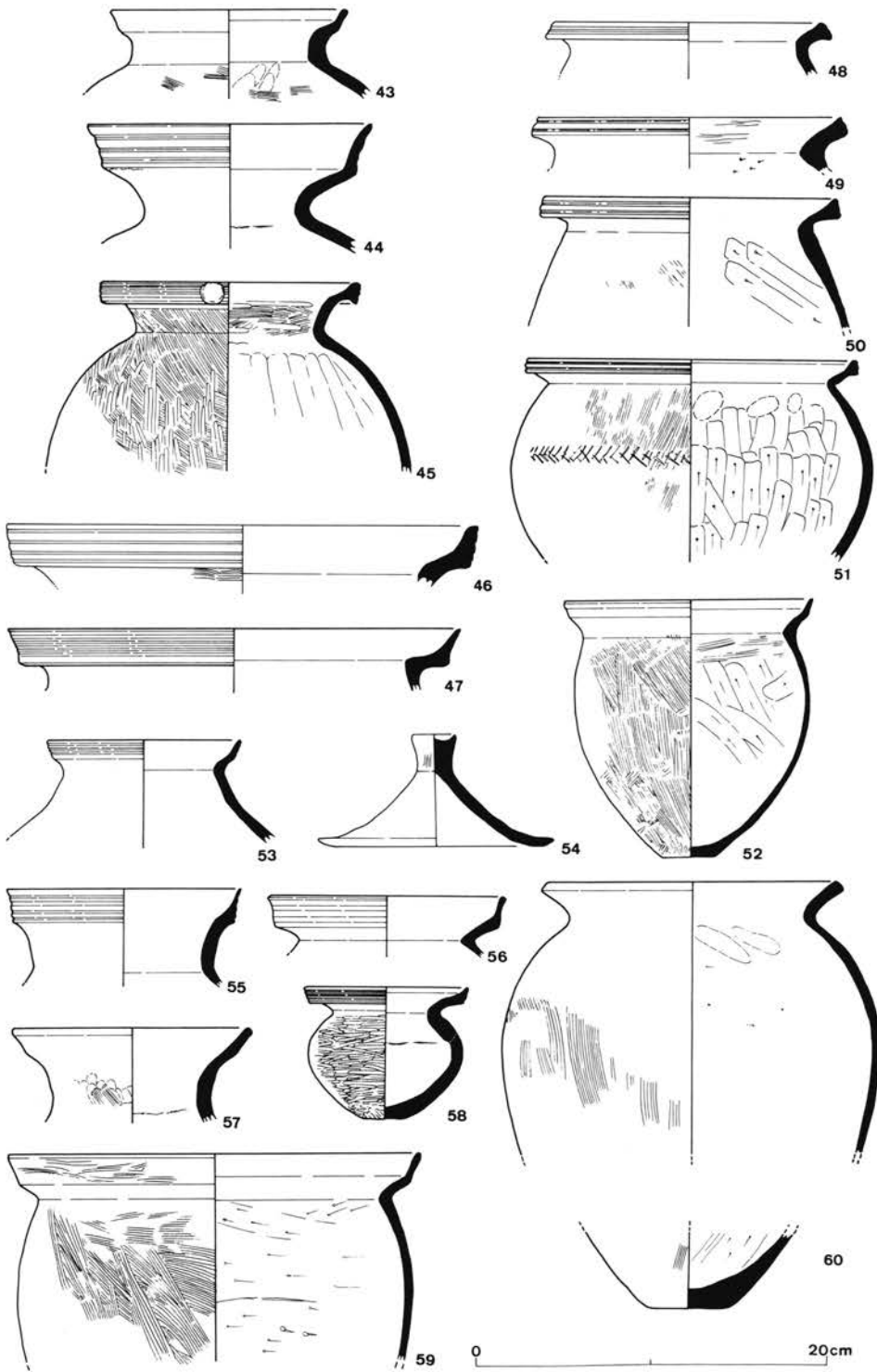
(田代 弘)

### ③石器類(第145図1～6)

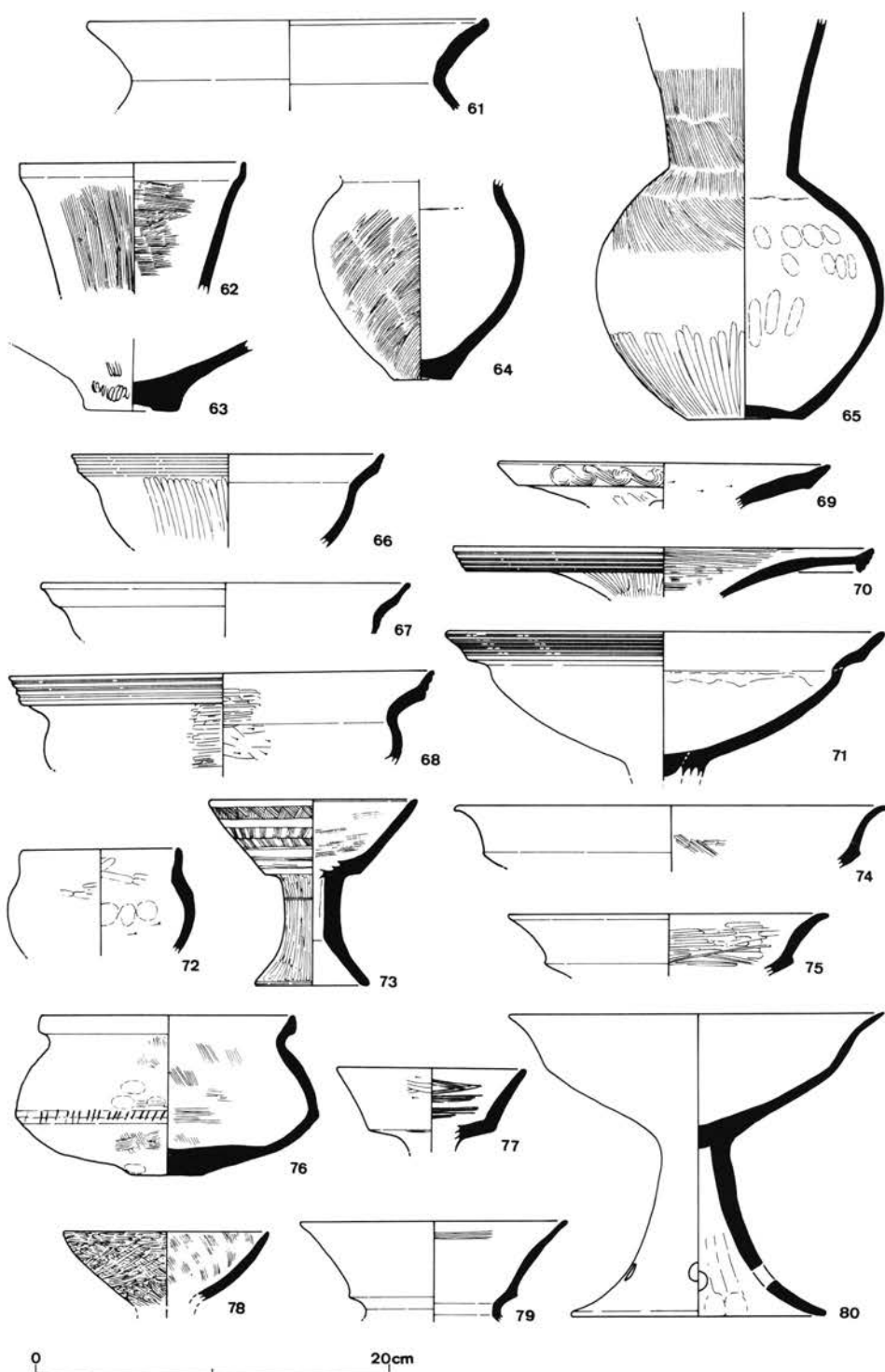
石器の出土点数は、合計7点を数える。広い範囲の調査にもかかわらず、極めて少ない。器種の内訳は、磨製石斧2点、石庖丁1点、砥石2点、石皿1点、磨製ノミ形石器1点である。先述したDトレンチ内の土坑中から出土した砥石と、石庖丁以外は、すべて各トレンチの包含層中から出土した。

1は、石庖丁の断片である。片刃の刃部は欠損している。穴が2つ接して表面側からあけられている。Dトレンチの土坑(S K14)中から出土した。

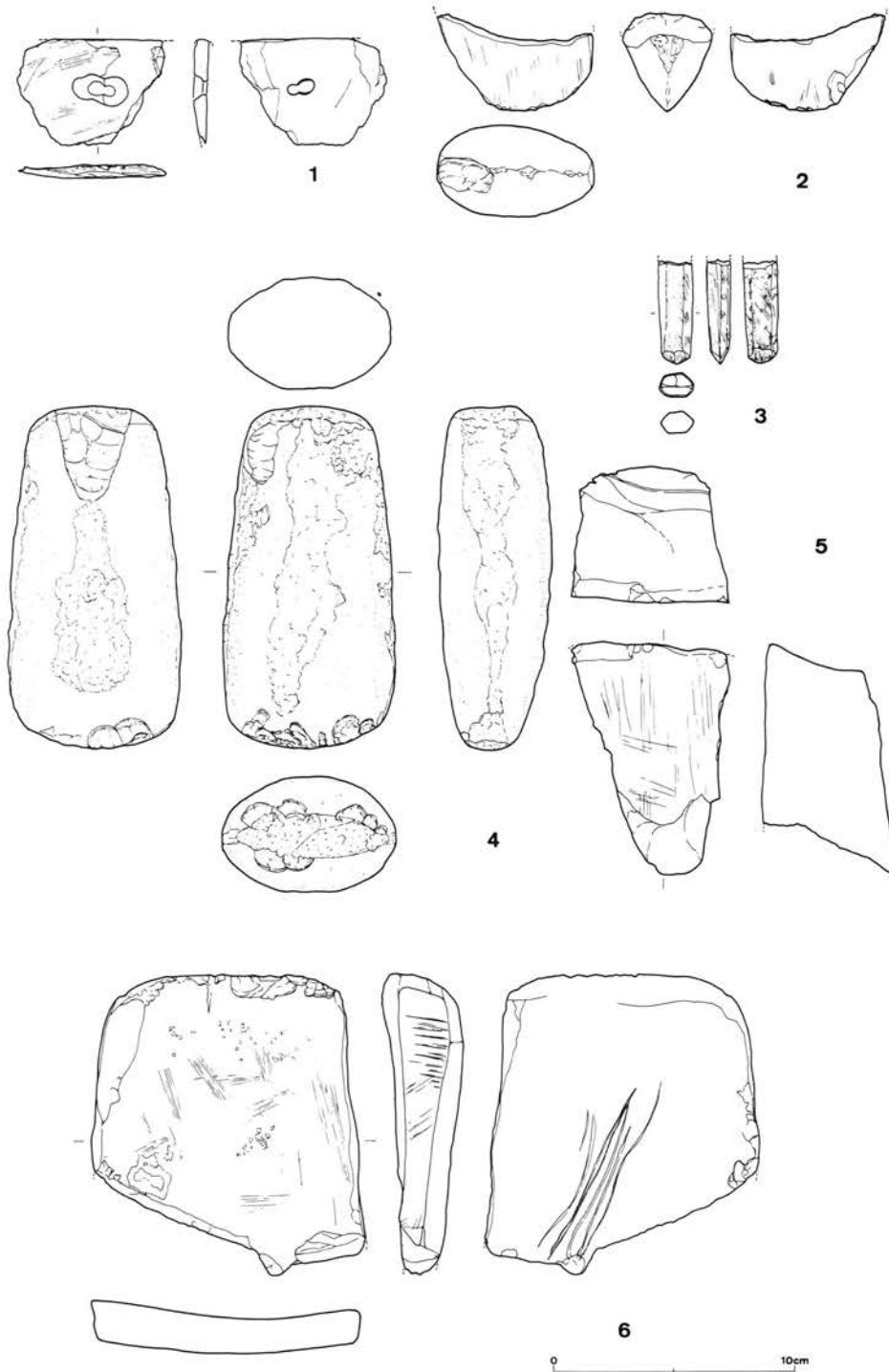
2は、砂岩あるいは流紋岩製の磨製石斧の刃部である。滑らかによく研磨されている。



第143図 出土遺物実測図(13)



第144図 出土遺物実測図(14)



第145図 出土遺物実測図(15)

両側縁部は、わずかに平坦な面取りがみられる。また、使用によるものか、刃部先端に貝殻状の剝離面が不連続に入っている。Aトレンチ内で出土した。

3は、小型の磨製ノミ形石器である。先端は両刃となり、3面に面取られている。製作時の研磨と思われる細かな線條痕が縦方向に走っている。また、中間部も六面に磨かれ、丹念な加工が施されている。頁岩ないし粘板岩製である。Aトレンチ内から出土している。

4は、磨製石斧である。両先端部は、敲打による面ができています。刃部に当たる先端部もアバタ状の敲打面と、打撃による貝殻状剝離面をとどめている。両側面、表裏中央部にも面的な敲打痕を残している。砂岩あるいは流紋岩製である。Fトレンチ内から出土した。

5は、方柱形砥石の断片である。滑らかな磨面に、縦横に線條痕が走っている。灰白色のシルト質の砂岩を用いている。Dトレンチで出土した。

6は、扁平な石皿の断片である。片側表面は滑らかに凹み、使用による細かな線條痕がみられる。側縁部・裏面には、堅い金属的なものを擦り合わせたような深い溝となった線條痕を留めている。また、全体に暗褐色のタール状の付着物がみられる。砂岩製である。Fトレンチから出土している。

(黒坪一樹)

## 6. ま と め

今回の調査では、弥生時代中期～近世にかけての遺物が出土し、由良川の自然堤防上に遺跡の存在を確認することができた。遺構としては、弥生時代中期の竪穴式住居跡・土坑・自然流路及び人工的な溝、鎌倉～室町時代にかけての掘立柱建物跡、溝・土坑などを検出した。土層の堆積状況からも明らかなように、度重なる洪水による土砂によって遺構面はかなり削り取られていた。良好な残存状況を示す遺構面は、中世～平安時代末をさかのぼっては、ほとんど確認することはできなかった。試掘調査を含め、多量の弥生時代の土器類が出土した。

(黒坪一樹・田代 弘)

### 第3節 福垣北古墳群

#### 1. はじめに

近畿自動車敦賀線に伴う調査では、昭和62年度事業として、綾部市豊里町の丘陵部にある「以久田野古墳状隆起」の試掘調査を行った。発掘調査に着手する前の分布調査では、道路予定路線地内に古墳状隆起を2か所確認しており、この「古墳状隆起」が古墳であるかどうかを確認する目的で実施したものである。

試掘調査の結果、「以久田野古墳状隆起」が複数の円墳・方墳からなることが明らかとなった。そのため、墳丘・埋葬施設などを確認・記録するための発掘調査が計画された。

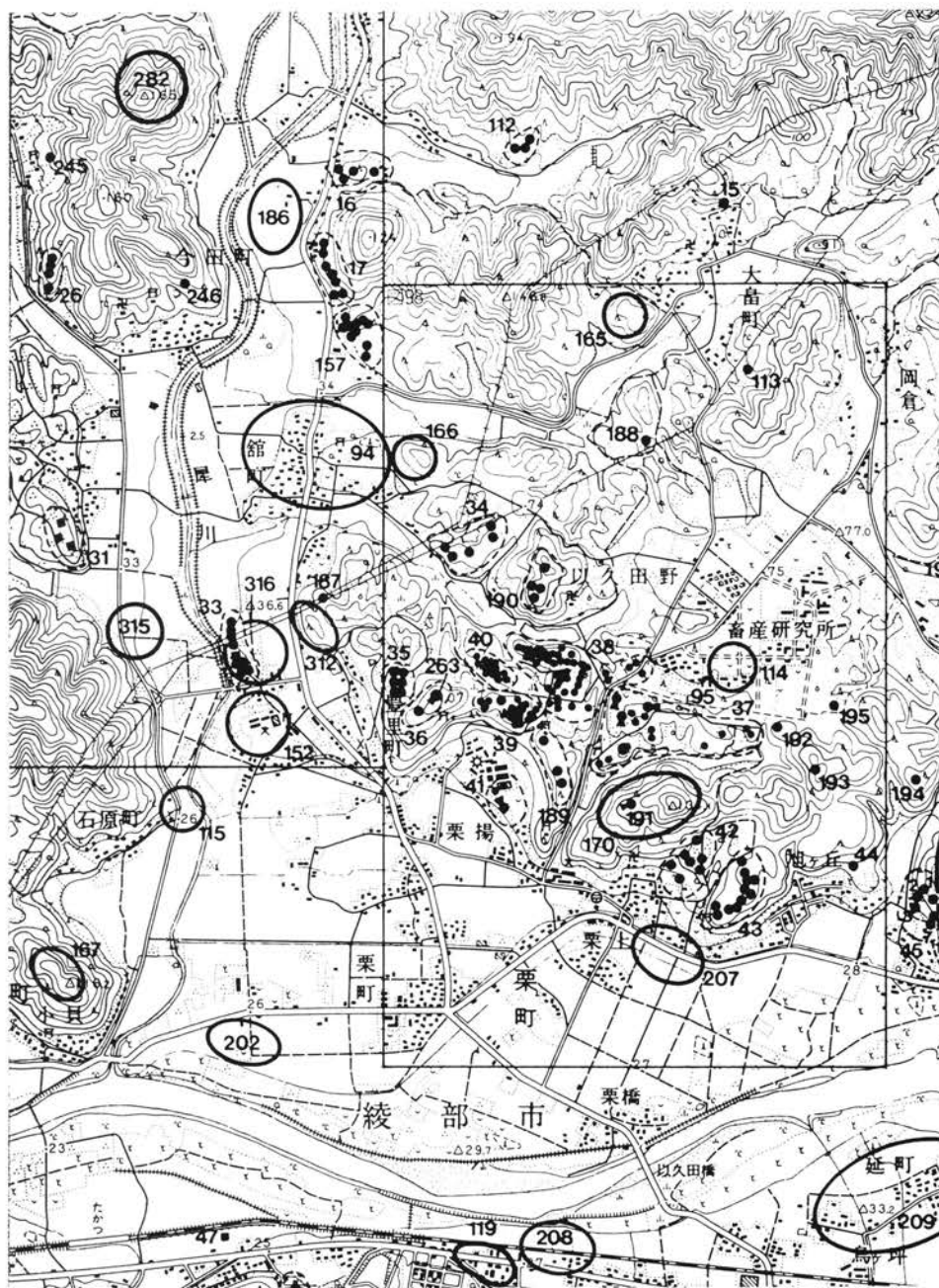
「以久田野古墳状隆起」は、古墳であることが明らかになったため、遺跡名を変更し、「福垣北古墳群」と呼ぶことにした。これは昭和62年版『京都府遺跡地図－第2分冊－』のなかで、今回の調査地の同一丘陵上に、「福垣北古墳」として円墳が記載されているので、同古墳を福垣北第1号墳とし、以下確認した順番ごとに、福垣北2号墳、福垣北3号墳と名付けた。最終的にこの丘陵状には11基の古墳があることを確認した。

#### 2. 遺跡の位置と環境

福垣北古墳群は、京都府綾部市豊里町福垣に所在する。由良川支流の犀川沿いに狭いが肥沃な沖積地が展開する。この古墳群は、この沖積地を南西に臨む丘陵上に立地している。

遺跡周辺には、集落遺跡や古墳など数多くの遺跡が分布している。主な集落遺跡として、館遺跡・三宅遺跡・小西町田遺跡などがある。館遺跡は、前期の弥生時代集落遺跡として知られている。三宅遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の土壙墓群・古墳、中世の溝・柱穴などが確認された。古墳時代前期の土壙墓群は、50基以上の規模の大きなものであり、数少ない集団墓の例として注目されている。小西町田遺跡では弥生時代後期末頃の土坑や溝、奈良・平安時代の建物跡などがみつまっている。特に、弥生時代後期末の良好な土器一括資料が得られ、編年資料としても期待されている。

犀川流域には多数の古墳が分布している。古墳時代前期の方墳で、飛禽文鏡が出土した成山古墳、2基の粘土槨を有し、甲冑や金銅製馬具・須恵器多数が埋納されていた荒神塚古墳(三宅1号墳)、総数120基以上からなる以久田野古墳群などが著名である。以久田野古墳群は群中に4基の前方後円墳を含み、5世紀後半に築造が始まり6世紀に盛行し、7世紀初めまで続いたと考えられている。福垣北古墳群は、この以久田野古墳群の北西端に位置している。



第146図 調査地位置図(1/25,000)

福垣北古墳群:187 三宅遺跡:316 小西町田遺跡:315 以久田野古墳群:37~41  
 上村古墳群:41 上村東古墳群:42 私市円山古墳:167 (『京都府遺跡地図』第2分冊 1987より)



### 3. 調査の経過

調査を開始するにあたって、道路予定路線帯の樹木伐採を行ったところ、墳丘を思わせるような古墳状の高まりが顕著でなかった。この調査地が以久田野古墳群に包括される地点であるため、まず古墳か自然の隆起であるか判断がむずかしかったC地点の頂部に長さ5m×幅3mのグリッドを設定し、古墳の確認につとめた。その結果、後述するように墓壙を2基(第2・第3号墳の中心埋葬施設)確認し、古墳であることが明らかとなった。同じ試掘調査により、A地点・B地点・D地点の各古墳状隆起の頂部を精査したところ、各地点でも埋葬施設と思われる墓壙及び周溝の一部を確認した。

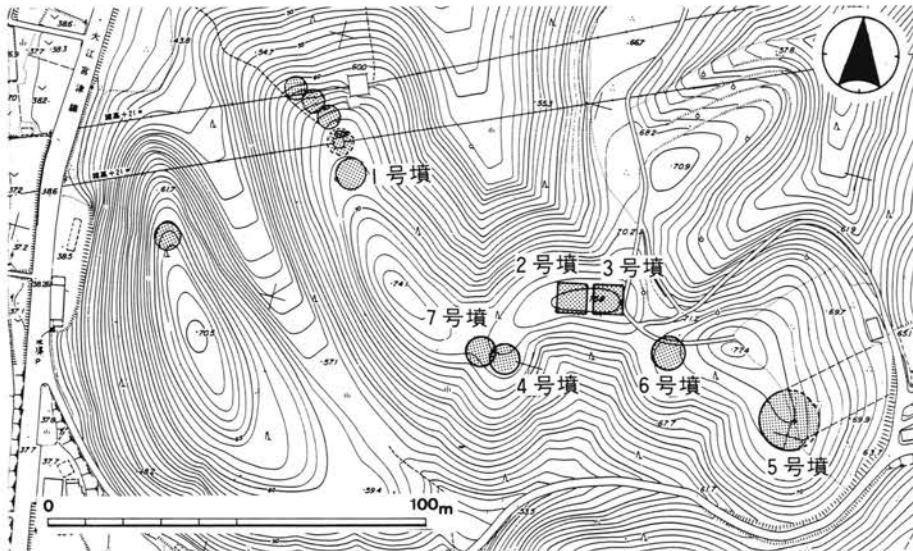
試掘調査の結果、今回明らかとなった古墳は、前述の第2・第3号墳のほか、第1号墳・第4号墳・第5号墳・第6号墳・第7号墳の総数7基である。また、分布調査の結果、丘陵先端には、さらに未調査の古墳4基を確認しており、この古墳群は総数11基からなる古墳群であることが明らかになった。

発掘調査は、第1～7号墳が道路建設予定地内にあたることから、これらについて発掘調査を実施した。

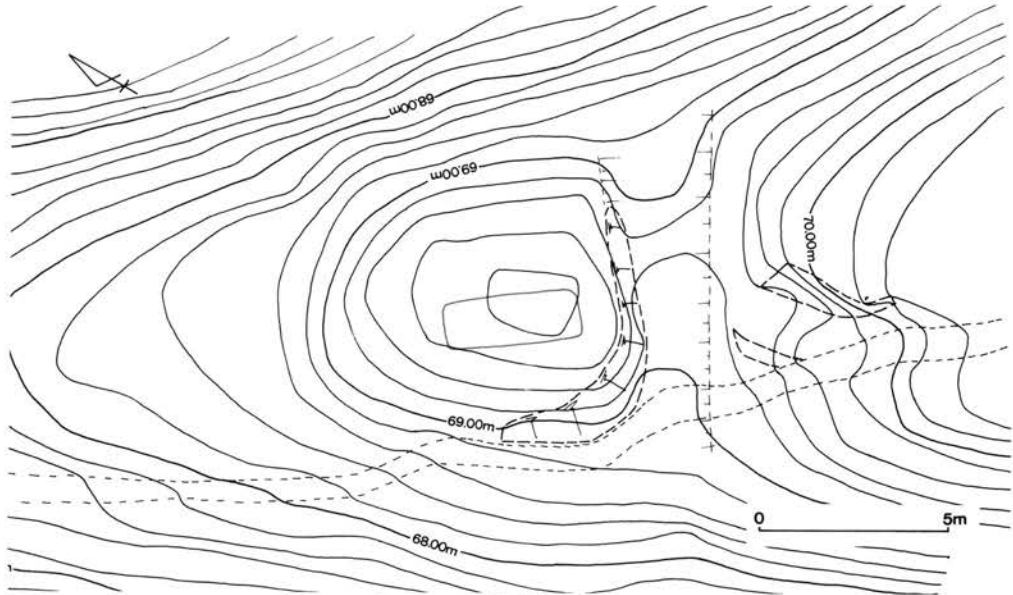
### 4. 各古墳の概要

#### (1)第1号墳

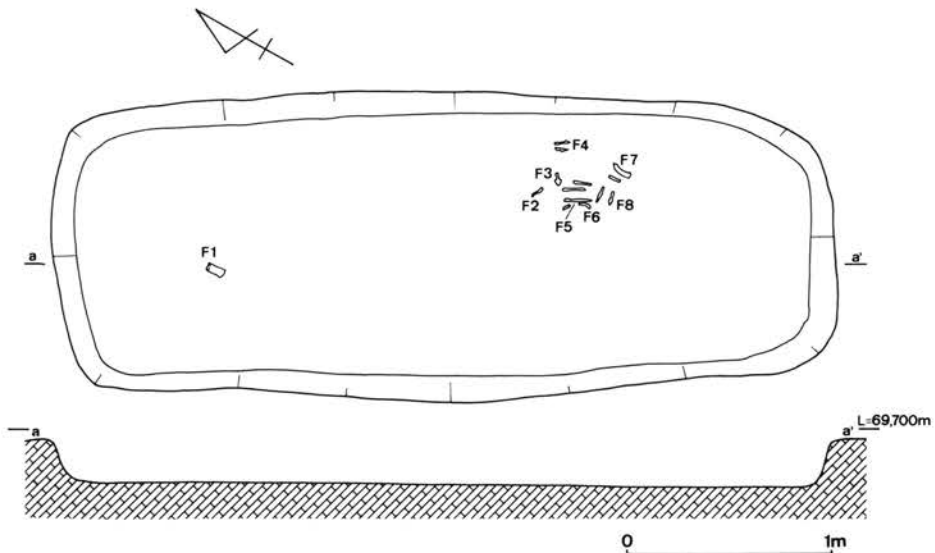
第1号墳は、E地点と名付けた丘陵の中腹に位置する。この丘陵の尾根先端には、1号墳を含め5基の小円墳が裾を接して築造され、一支群を形成している。第1号墳は、この



第147図 福垣北古墳群地形図



第148図 1号墳墳丘実測図



第149図 1号墳主体部実測図

支群の最上部に位置する円墳である。

**墳丘** 丘陵の自然地形を利用して築造され、地山を削り出す手法がとられている。盛り土は封土として墳丘頂部にわずかに盛られる程度であった。墳丘形態は、丘陵軸に沿って長楕円形を呈している。規模は、長径で約10m・短径で約8.5m・高さ約1mである。

**埋葬主体** 主体部は表土直下で検出した。墳丘とともに主体部も削平されているために残りが悪く、墓壙の深さは約20cmほどであった。平面形態は隅丸の長方形で、規模は長さ約3.7m・幅約1.4mを測る。

遺物出土状態 墓壙内から鉄鎌・鉄斧・鉄鎌・刀子などの鉄製品が出土した。鉄斧は、墓壙西寄り出土し、刃部を南に向けていた(F1)。鉄鎌(F3~6・8)・鉄鎌(F7)・刀子(F2)は墓壙東寄りでもとまって出土しているが、攪乱を受けたらしく細片化しており二次的な移動が認められた。土器類はない。

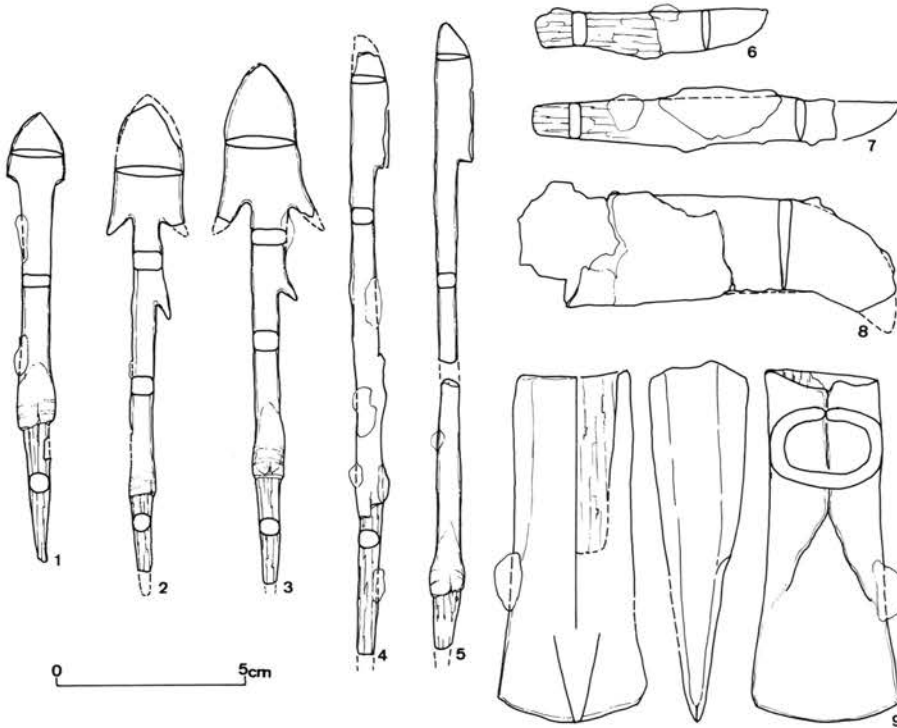
#### 出土遺物(第150図)

鉄鎌(1~5) 5個体を確認した。茎の一部を欠損しているが、ほぼ完存している。茎には、木質が遺存しており、関に糸を巻いた痕跡をとどめるもの(1~3)もある。1は、三角形の鎌身をもつタイプである。2・3は、逆棘を有する広根鎌である。2は約12cm、3は13.5cmをそれぞれ測る。4・5は、片刃の長頸鎌である。4は全長約16cm、5は約17cmを測る。

刀子(6・7) 2点が接した状態で出土した。6は全長約6cm、7は全長約9.5cmを測る。基部に木質がよく残っている。

鉄鎌(8) 曲刃の鎌。着装部と先端部を欠く。幅約3cm・残存長約10cmを測る。

鉄斧(9) 鍛造である。袋部の内側に木質が残る。全長約9cmを測る。



第150図 1号墳主体部出土鉄器実測図

## (2)第2号墳

第2号墳は今回の調査対象地の最高所に立地する古墳であり、溝を挟んで東側に第3号墳がある。

**墳丘** 第2号墳は第3号墳とともに、自然地形を利用して構築されたもので、丘陵に直交する形で幅約3m・深さ約0.8mの溝(S D01)を掘り、第2号墳と第3号墳を区画する。墳形は方墳であり、墳丘基底部は自然地形をそのまま利用しているため、北・南・西側は不明瞭である。墳丘規模は、東西約15m・南北約17mである。

第2号墳の墳頂部は、東西約8m・南北約6mを測る平坦面があり、その平坦面の北側に偏って中心埋葬施設がある。

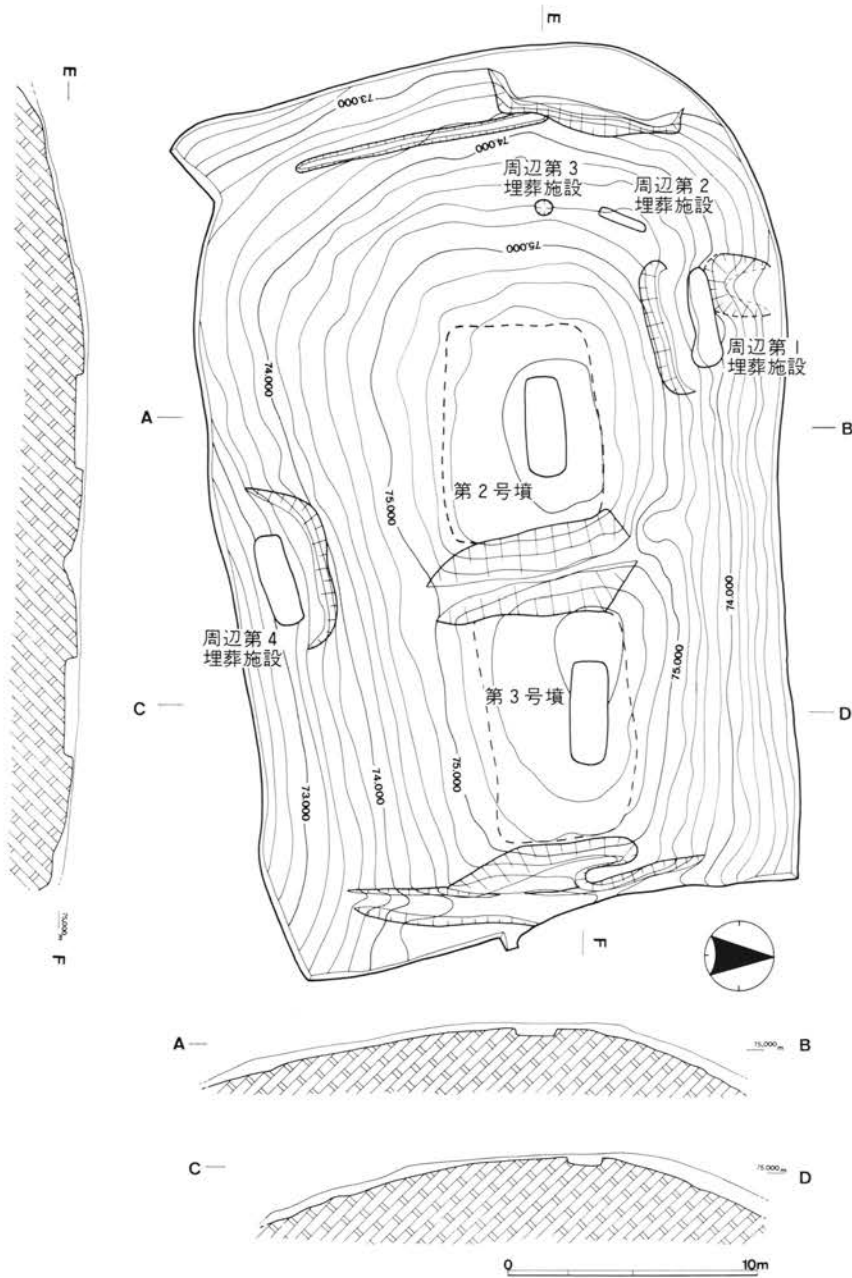
**埋葬施設** 第2号墳の墳頂部で長軸約3.9m・短軸約1.6mの墓壇の輪郭を確認した。墓壇を順次掘り下げたところ、墓壇は2段墓壇であることが明らかとなった。

墓壇の掘り下げに際しては、棺の痕跡に注意したが、棺の裏込め土が棺内の埋土と思われる土質と近似していること、また棺の平面をしっかりと精査せず掘り下げたため、墓壇の底部で棺の痕跡を一部確認するという結果となった。このため、棺の形態・棺の規模等の性格の資料は得られないが、推定長約2.6m・幅約0.45mの組合式木棺と考えた。棺の幅が0.45mと狭く、幅についてはやや疑問が残る。これは棺の北側裏込め土が図のように明褐色土・淡黒灰色土・淡黄褐色土と堆積しているのに対し、棺の南側の埋土は暗黄褐色土・明黄赤褐色土で、棺上に堆積したと思われる暗黄褐色土に近似し、南側の棺の痕跡が土層断面図をみるかぎり不明瞭であったことによる。可能性としては、墓壇内に置かれた棺は墓壇の南壁に接して据えられ、棺の北側にのみ裏込めを行ったことも考えられる。これによると棺の幅は0.44mを測る。

**遺物の出土状態** 第2号墳から出土した遺物は中央埋葬施設内のほか、墳丘斜面から須恵器(樽形甗)が1点出土した。中央埋葬施設からは、墓壇上面から土師器が、また墓壇内及び棺の底部から鉄器類が出土した。墓壇上面から出土した土師器は、細片が棺の中央部に長軸に平行した形で散在した状態であった。

墓壇の東辺の棺外にはピットがあり、それを掘り下げたところ、鉄斧が出土した。鉄斧は刃を西側の棺木口部に向けて埋納されていた。

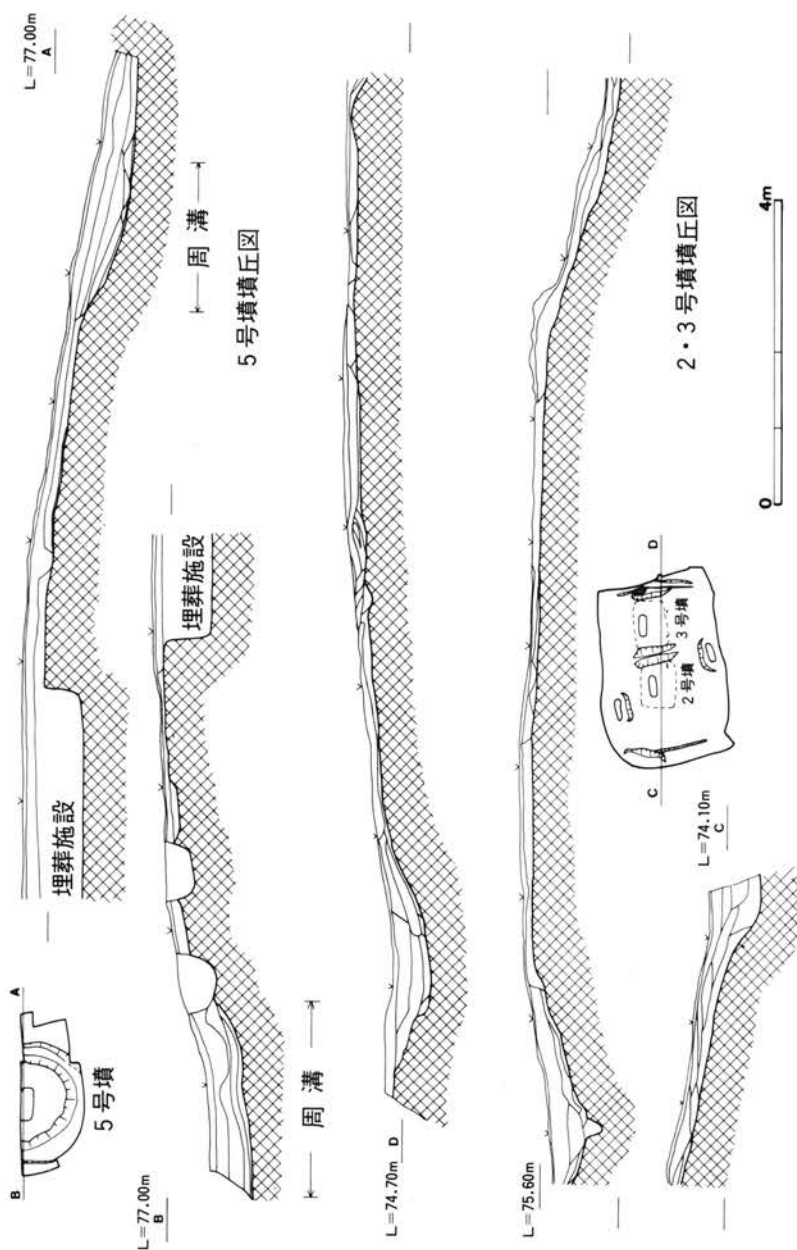
棺の底部からは、鉄剣と鉄鏃が出土した。鉄剣は棺の長軸に平行する形で剣先を西側に向け置かれている。鉄鏃は2群(a・b群)に分かれて置かれ、棺の中央にあるa群には刃先を東側に向けて三角形の大型鏃が3点以上、棺の西端部にあるb群は刃先を西側に向け、柳葉鏃が11本以上置かれていた。この鉄鏃の出土状態をみると、a群とb群の間は約70cmを測り、三角形鏃の矢と柳葉鏃の矢が刃先を交互にして副葬されていたものとみら



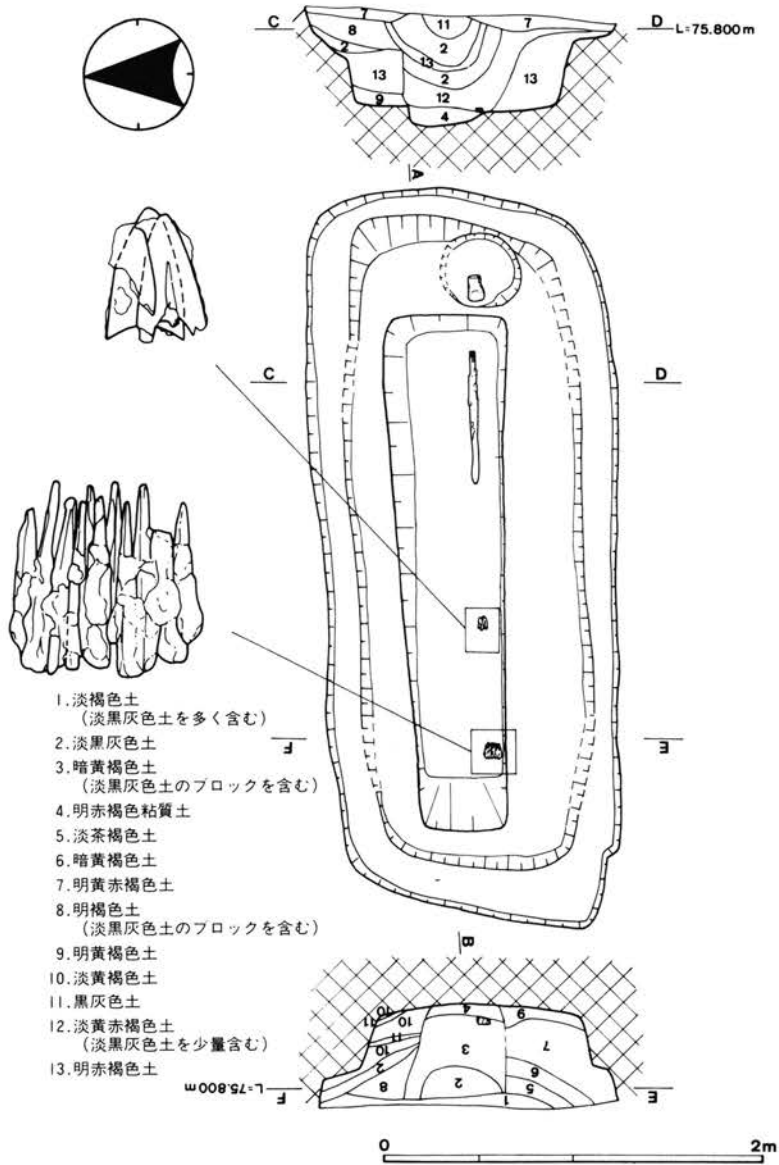
第151図 第2・3号墳墳丘実測図

れる。矢の全長は70cm前後と思われる。弓は検出されなかった。

出土遺物 墳丘斜面から須恵器が出土した。中心埋葬施設では、前述のように墓壇上面から土師器の細片が、墓壇内から鉄斧が、棺内からは鉄剣・鉄鎌が出土した。土師器は、細片で出土しているため、器種・器形は不明である。須恵器は、樽形甕の破片で(第157図3)、体部の一部が出土した。



第152図 第2・3・5号墳丘断面図



第153図 第2号墳中心主体実測図

鉄斧は、有肩式の大型製品である。20は全長156mm・刃幅約90mmを測る。柄装着部は袋状で、断面は丸みをおびた方形である。肩部は直角に張りだす。縦断面は、背・腹ともに袋部から刃先まで一直線になり楔形を呈する。

鉄剣は、全長約705mm・刃部約550mm・幅約33mm・厚さ約5mmを測る。目釘穴は2か所ある。関の部分には鍔の跡が明瞭に残る。

鉄鏃は平根式と尖根式に大別でき、平根式は3本、尖根式が11本出土した。平根式は、無頸の長三角形式で、うち2個体は二重腸袂である。第158図-2には穿孔が1か所、第158図-1には3か所認められる。尖根式は短頸の柳葉形で袂りを有し、篋被は関篋被である。ほぼ同寸法で揃えてあり、10は袂りを含めた刃部長45mm、頸部15mm、篋部33mmである。

### (3)第3号墳

第3号墳は、第2号墳の東側にあり、SD01溝状遺構によって区画されている。

**墳丘** 第3号墳は、第2号墳と同様、自然地形を一部カットし墳丘を成形した方墳である。第3号墳の西側には2条の溝状遺構(SD02・SD03)があり、SD01とSD03の溝の心々距離から測ると、東西規模は約18mを測る。南北規模は墳丘基底部分が不明瞭なため、規模は16m前後である。墳頂部は東西約9m・南北約6mの平坦面であり、第2号墳と同様、北側に偏って中心埋葬施設がある。

**埋葬施設** 第3号墳の墳頂部には長軸約4.0m・短軸1.46mの墓壇輪郭を確認した。墓壇は2段墓壇であり、棺の形態は「Ⅱ」形の組合式木棺と思われる。

**遺物の出土状態** 中心埋葬施設からは須恵器が、その棺内からは鉄器がそれぞれ出土した。須恵器は、墓壇の上面を精査した段階で出土しており、出土状況は、棺の上面に意図的に須恵器を破碎したような状態にあった。棺底を精査している段階で、棺の東端で鉄剣が出土した。

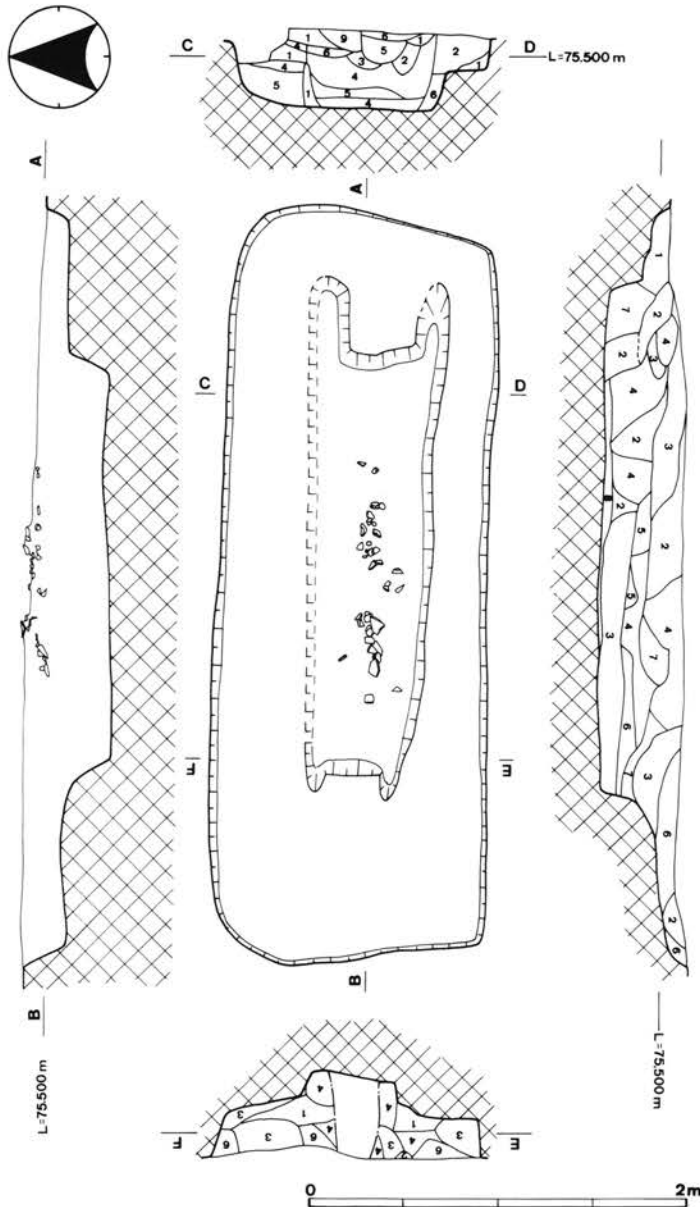
**出土遺物** 埋葬施設では、棺の上面から須恵器が、棺内から鉄器が出土した。須恵器は壺(第157図4)・無蓋高杯(第157図1)である。

壺は口縁部・肩部に凹線と波状文を交互に施す。底部外面にはヘラ削りがみられる。内面はナデ、器壁は薄く焼成堅緻である。口径約18cm・器高約23cmを測る。

無蓋高杯は、口径約15.6cm・器高約12.2cmを測る。杯部外面をヘラ削りしている。

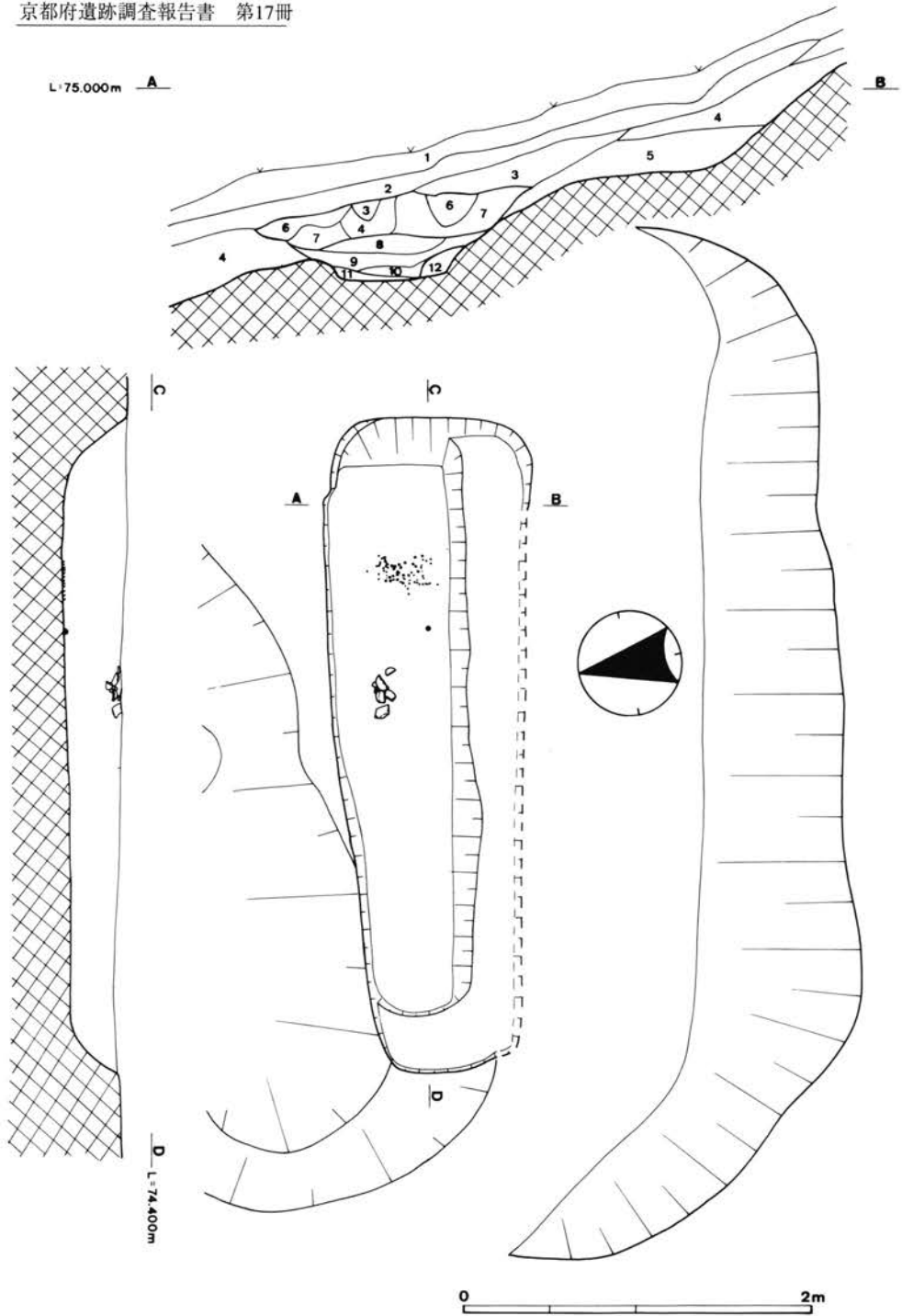
鉄器には鉄剣と鉄鏃がある。鉄鏃は茎部と思われるが、細片のため不明瞭である。鉄剣は全長約42cm・幅約2.7cmを測る。





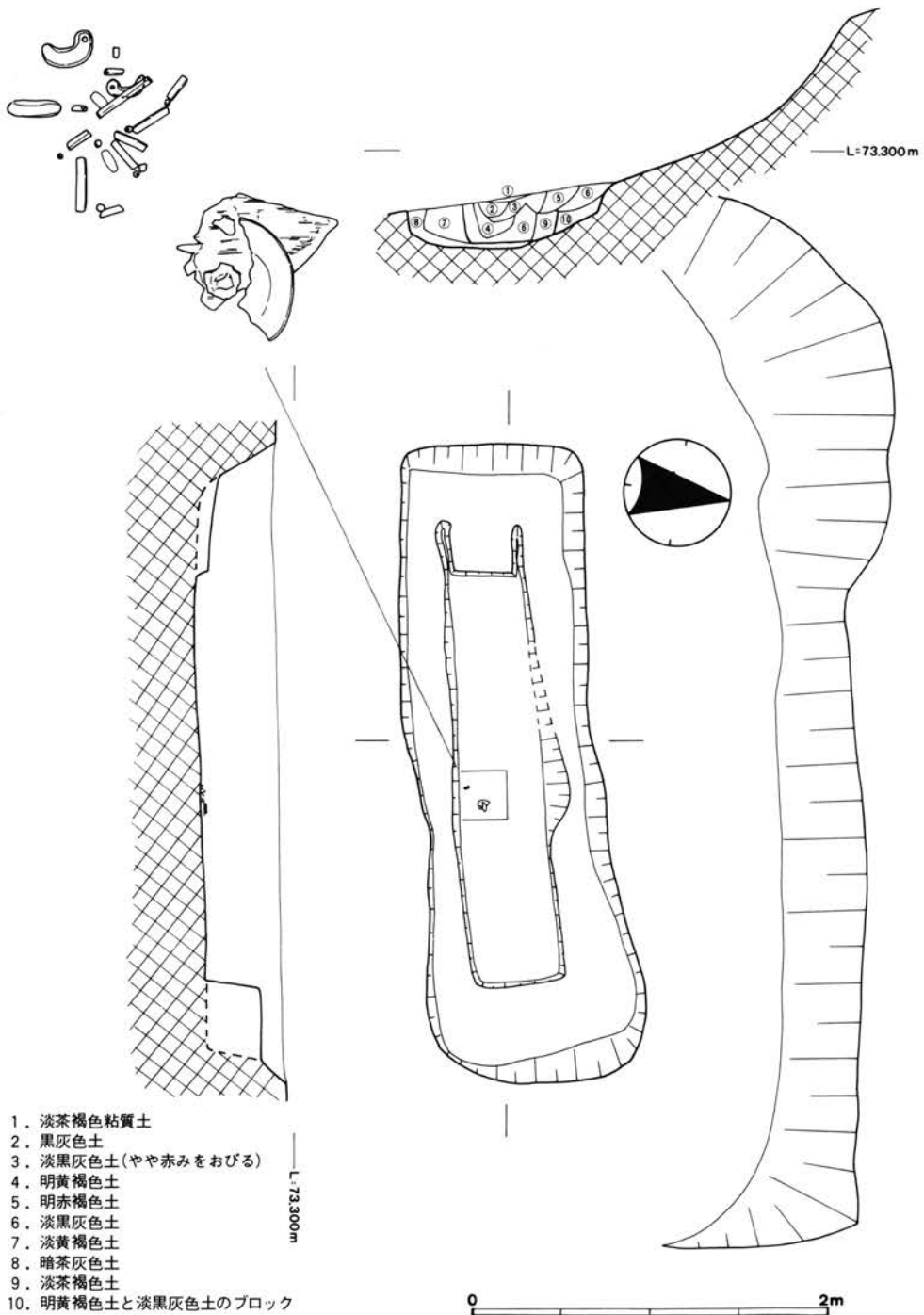
第154図 第3号墳中心主体実測図

- 1.明赤褐色土(淡黒灰色土をブロックで含む)    2.明赤褐色土(淡黒灰色土を含む)  
 3.淡黒灰色土(褐色土が主体)    4.淡黒灰色土    5.黒灰色土    6.暗赤褐色土    7.淡赤褐色土  
 8.黄褐色土    9.暗赤褐色土(赤褐色土をブロックで含む)



第155図 周辺第1埋葬主体施設平面実測図

- 1.表土 2.淡茶褐色土 3.淡黒灰色土(黄灰色土を多く含む) 4.黒灰色土 5.淡黒灰色土  
 6.淡黄褐色と赤褐色土のブロック 7.暗黄灰色土 8.暗赤褐色土  
 9.淡黒灰色土と赤褐色土のブロック 10.暗黄褐色土 11.暗茶褐色と明赤褐色土のブロック  
 12.淡黒灰色土と赤褐色土の互層(棺の裏込め土)



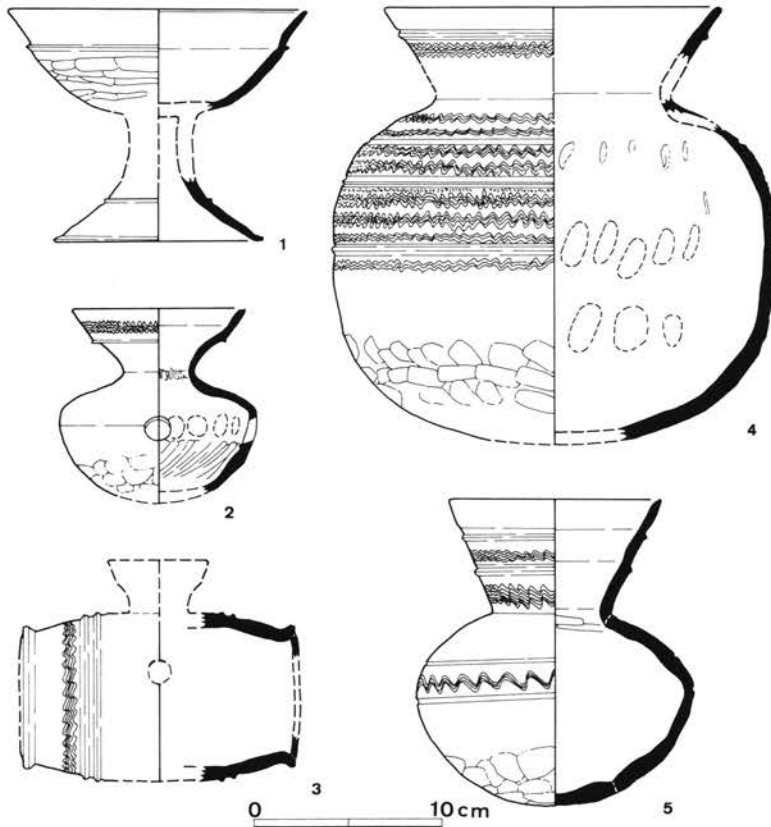
第156図 周辺第4埋葬施設平面実測図

(4) 2・3号墳周辺埋葬施設

第2・第3号墳の墳丘斜面には4基の周辺施設があった。そのうち、第2・第3周辺埋葬施設には遺物がなく、また棺の痕跡もないため埋葬施設として位置づけてよいか疑問の残る遺構である。

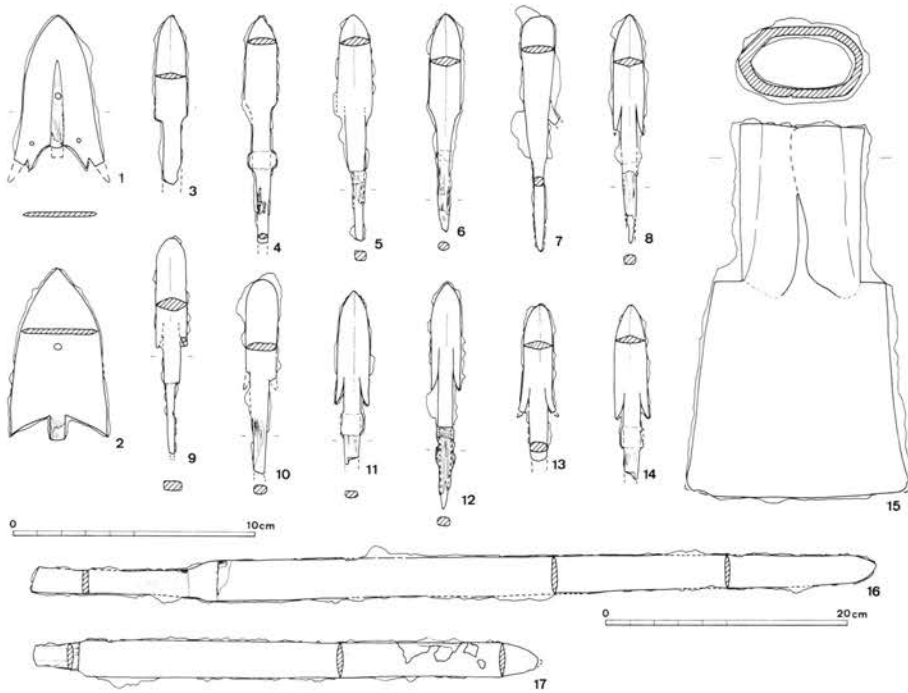
①周辺第1埋葬施設 周辺第1埋葬施設は、第2号墳の北側墳丘斜面にある埋葬施設である。

**埋葬施設** 埋葬施設は、幅約5mにわたって墳丘をカットし、平坦面をつくる。平坦面は南側の高所をカットし、北側の低い部分に盛り土を行ったと思われるが、墳丘部を断ち割っていないため、明らかでない。平坦面には長軸約3.8m・短軸1.15mの墓壙を掘り、墓壙内に棺を設置したものである。棺の形態・規模などは、墓壙を順次注意して掘り下げたが、土質変化が明瞭でなく不明確である。裏込め土は南北方向の畦畔で観察すると20cmを測り、赤褐色土と淡黒灰色土が互層で堆積していることがわかる。



第157図 出土遺物—須恵器—

1・4.第3号墳中心埋葬施設 2.周辺第4埋葬施設 3.第2号墳墳丘上 5.周辺第1埋葬施設



第158図 出土遺物—鉄器—

**遺物の出土状態** 周辺第1埋葬施設からは須恵器・玉類が出土した。須恵器は、墓壙の輪郭を精査する段階で出土したものである。棺の中央部の真上に正位の状態で、須恵器直口壺は破片となっていたがほぼ近接しており、第3号墳中心埋葬施設のように破砕し、バラまかれた状態ではなかった。

玉類は棺の底部床面で、棺の東半部に集中して出土した。玉類の出土状態を観察すると糸でつながれた状態で首から胸部あたりに置かれたものと思われる。

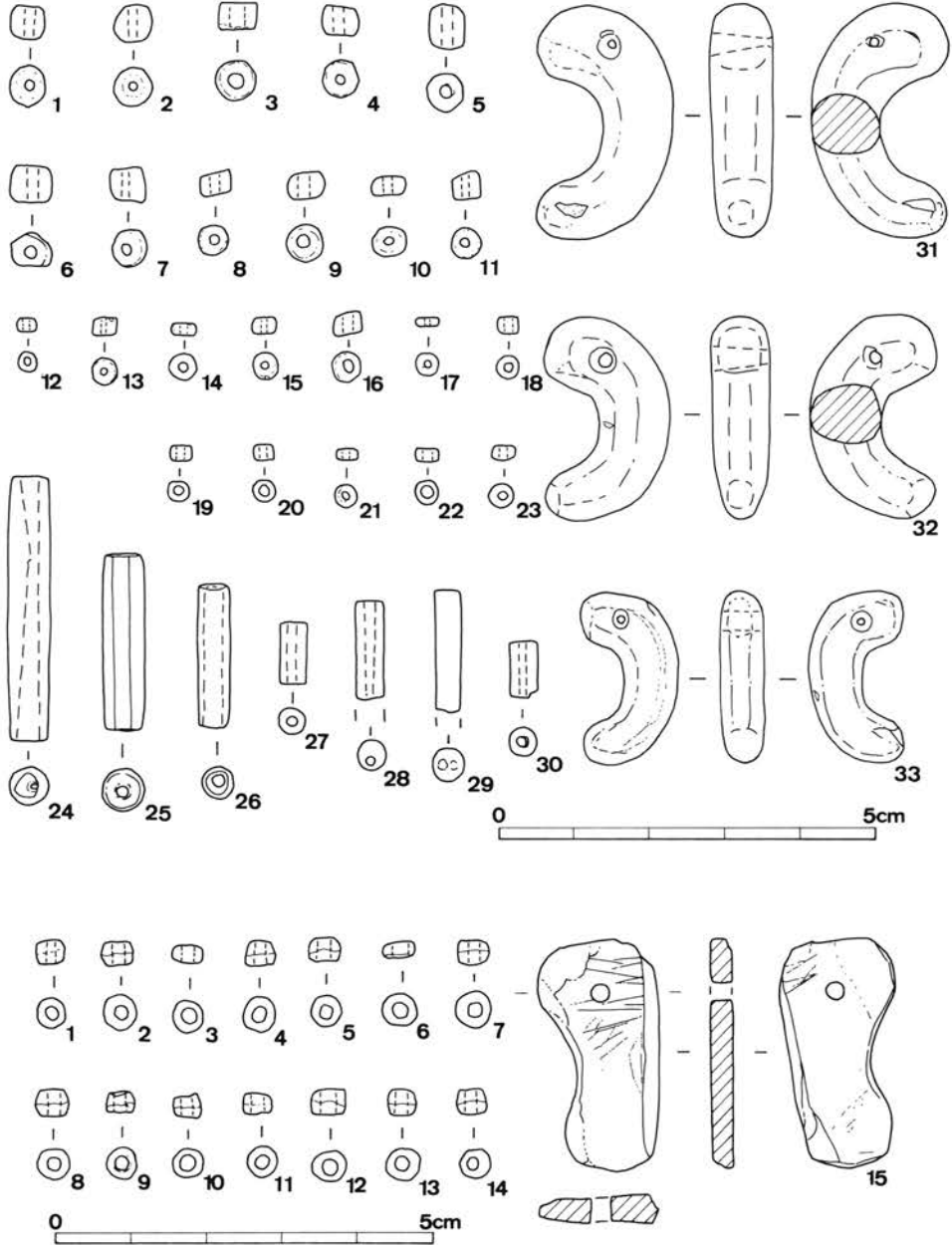
**出土遺物** 周辺第1埋葬施設の須恵器は、復原作業の結果1個体となった。また、玉類は現地の調査時に確認したもののほか、排土中からも水洗いの結果出土したものもあり、出土点数は308個以上を数える。

須恵器は、直口壺(第157図5)である。口径約11.2cm・器高約16.4cmを測る。焼成堅緻である。底部をヘラ削りする。

**玉類(第159図)** 玉類は、棺内から勾玉1個と白玉が307個以上出土した。玉の材質はすべて滑石製で青味が掛っている。

勾玉は、1個出土した。15は頭部付近及び全体にわたり扁平で、いびつである。石材は軟質で表面が風化し、光沢はない。全長29.2mm、厚さは頭部で4.25mm、尾部で3.0mmを

測り、孔径は2.0mmで、片面穿孔である。整形はかなりおおざっぱにつくられている。背部は切断後、角をとり、頭部から尾部にかけて斜めに手早く研磨した程度で、全体に粗い



第159図 出土遺物—玉類—

研磨痕を残す。研磨痕は、表面頭部の背部から湾曲する内側にかけて横方向に、表面尾部や裏面は背部から尾部への斜め方向に認められる。

白玉は、308個以上出土している。径は4mmから5mmまでで、厚さは3mmから3.5mmで大小の差は小さい。実際に糸を通して連接で計測した長さは約73.4cmである。白玉は、算盤玉状のA類と、臼状と算盤玉状との中間にあたるB類に分けることができる。この2分類のほか、研磨(仕上げの工程)段階に少し差があり、ここでのA類・B類はさらに2工程に分かれる。第I工程は、研磨が粗いもので側面中央に稜をもつ。第II工程は、第I工程よりも研磨が細く小さされており、側面中央には稜をもたない。孔のあるものは上・下が平坦であるものは少なく、両面が平行でないものが多い。これは白玉の切断時に浅い「V」字溝を入れて切り離し、そののち磨いてはいるが、その切り口が平坦になりきらないため、段が残ったものと思われる。

②**周辺第2埋葬施設** 周辺第2埋葬施設は、第2号墳北西部で墳丘斜面をカットした平坦面はもたず、直接墳丘斜面に長軸約2m・短軸約0.4mの長方形土坑を掘ったものである。この土坑内には棺の痕跡もなく、遺物も出土しなかったため、埋葬施設として考えてよいかどうか疑問の残る遺構である。

③**周辺第4埋葬施設** 周辺第4埋葬施設は、第2号墳と第3号墳を区画する溝(SD01)の南延長線上にある埋葬施設である。

**埋葬施設** 埋葬施設は、周辺第1埋葬施設と同様、墳丘斜面を幅約7mにわたりカットし平坦面をつくる。この平坦面は北側の高所をカットし、南側の低い部分に盛り土を行ったものと思われる。そして、その平坦面に、長軸約4m・短軸約1.4mの墓壇を掘り、その墓壇内に棺を設置する。墓壇を順次注意して掘り下げて観察につとめたが、棺の形態・規模については、明確にすることはできなかった。墓壇底部の観察から、棺は長さ約2.3m・幅約0.5mと思われ、棺の形態は組合式木棺と思われる。

**遺物の出土状態** 周辺第4埋葬施設からは須恵器・玉類・鏡が出土した。

須恵器は、棺の上面で中央の位置に正位の状態で据え置かれていたと思われる。玉類及び鏡は、棺の底部で、南側板に近接して出土した。鏡は本来完形であったが調査段階で破砕してしまった。鏡の下には木材がわずかながら遺存し、鏡の材質が作用して木材が腐蝕せず、一部遺存していたと思われる。この木材は棺材と思われる。玉類は、鏡の位置から南西10cmに集中して出土した。各玉類は放射状で中高になっており、小玉が交互に勾玉の孔のところに見られるため、一連の首飾りの状態で副葬されていたものと考えられる。

**出土遺物(第158・159図)** 須恵器と玉類がある。須恵器は棺の上面中央で**壺**1個体分が出土した。**壺**は口径約9.2cm・器高約10.4cmを測る。焼成堅緻で底部外面をヘラ削りする。

玉類は、棺内から出土したもので合計29個あり、そのうち14個は排土の洗浄段階で確認した。玉類は、勾玉・管玉・小玉の3種類である。その材質は、6種類の石材からなり、勾玉は瑪璃、管玉は碧玉・滑石・緑色凝灰岩の3種、小玉はガラス・滑石である。

**勾玉** 勾玉は3個出土した。いずれも半透明な橙色を基本に赤茶色の筋が入る。穿孔はすべて片側から行い、全体にていねいな仕上がりである。穿孔を始める面を表面とし、反対側を裏面として以下記述する。

31は、3個のなかで最も大きく全長31mm、厚さは頭部で8mm、胴部7mmを測る。孔径は、1～3mmを測る。研磨痕は腹部・背部ともに平坦面を残さず、ていねいである。裏面孔周辺には角をとるように剥離がみられる。表・裏面には、勾玉の湾曲に直交する方向に、背部には縦方向に細かな研磨痕が観察できる。穿孔は、表面頭部内側から、多少背部寄りに穿たれている。31は3個中最大で32・33に比べて、全体に丸みをおびる。

32は、全長28mm、厚さは頭部で8mm、胴部で7mmを測る。孔径は2～3mmで、穿孔方向は表面頭部から穿たれる。32は3つの中で最もよく磨かれ、胴部に自然面を1か所残す程度で、これといった研磨痕が観察できないほどである。32の尾部は先端が多少とがり気味な感じもする。

33は全長22mm、厚さは頭部で5.5mm、胴部で5.5mmを測る。孔径は2.5～2.8mmで、穿孔方向は、表面頭部内面には寄らず、真直である。33は、唯一逆「コ」の字形を呈し、3個の中で最も明るい橙色である。調整は、表・裏面とも研磨面があるのに対し、腹部の湾曲をつくりだすあたりには面をとった形跡も研磨痕もみられない。これは勾玉製作用の特別な砥石を使用し、仕上げ段階で研磨痕を消すように磨きあげたものと思われる。

33の穿孔の際の垂直比は、0.5～12.5mmを測り、垂直に一番遠い。なお、31・32はそれぞれ0.78～1.25mmである。

**管玉** 出土時には13個であったが、6個は軟質で、非常にもろく、検出時にはひどく風化しており、形を取り留めることができなかった。なお、取り上げ得た7個体のうち、3個体は完形品である。

材質は、碧玉・緑色凝灰岩・滑石製があり、両側穿孔がほとんどである。長さは、18～26mmの2cm前後のもの、大きいもの37mm、小さいもの8mmと多用である。径は3.5mmから5.5mmで、孔径は、1mmから3mmを測り、穿孔面と反対側の孔径の差が大きい。

整形は、24・25をみると側面中央にふくらみを帯び、両端付近の断面が多角形を呈し、その一辺は部分的ではあるが平坦面をもつ。

**ガラス玉** 計15個出土した。径は2.5～4.9mm、厚さは1.2～4.2mmを測る。全体に青・黄緑が主体になっている。形態は2種に分かれ、A類は両端に平坦面をもたず、熱処理な

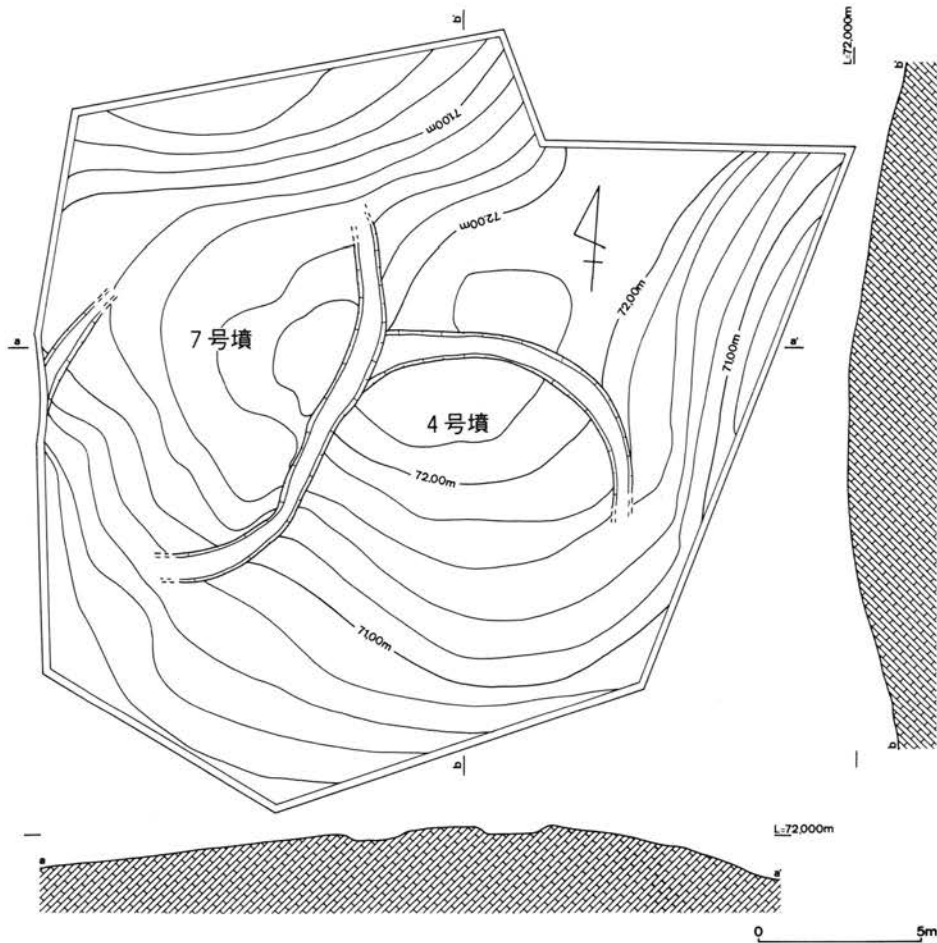


どのために丸みを帯びたと推察されるもので、厚さの薄いものをⅠ、厚いものをⅡとする。B類は、両端がきれいに切断され平坦面をもつもので、断面が円形のものa、多面形を呈し側面に平坦面をもつものbに分けられる。

白玉 白玉は、全部で5個出土した。すべて排土水洗いによるものである。径は小さく2.50~2.80mmで、孔径も1.20~1.30mmを測る。厚さの平均値は、1.60mmである。形態は白状で厚さが薄く扁平な感じを受け、上・下の径がほぼ同じ。側面は研磨痕が残らないほどでいねいに磨かれ、断面形が円形を呈する。第Ⅲ工程に属する。

#### (4)第4号墳

第4号墳は、第2号墳の南西方向にある円墳である。第4号墳は、赤土が露出している部分が多く、地形測量でも古墳とは考えがたい等高線であった。

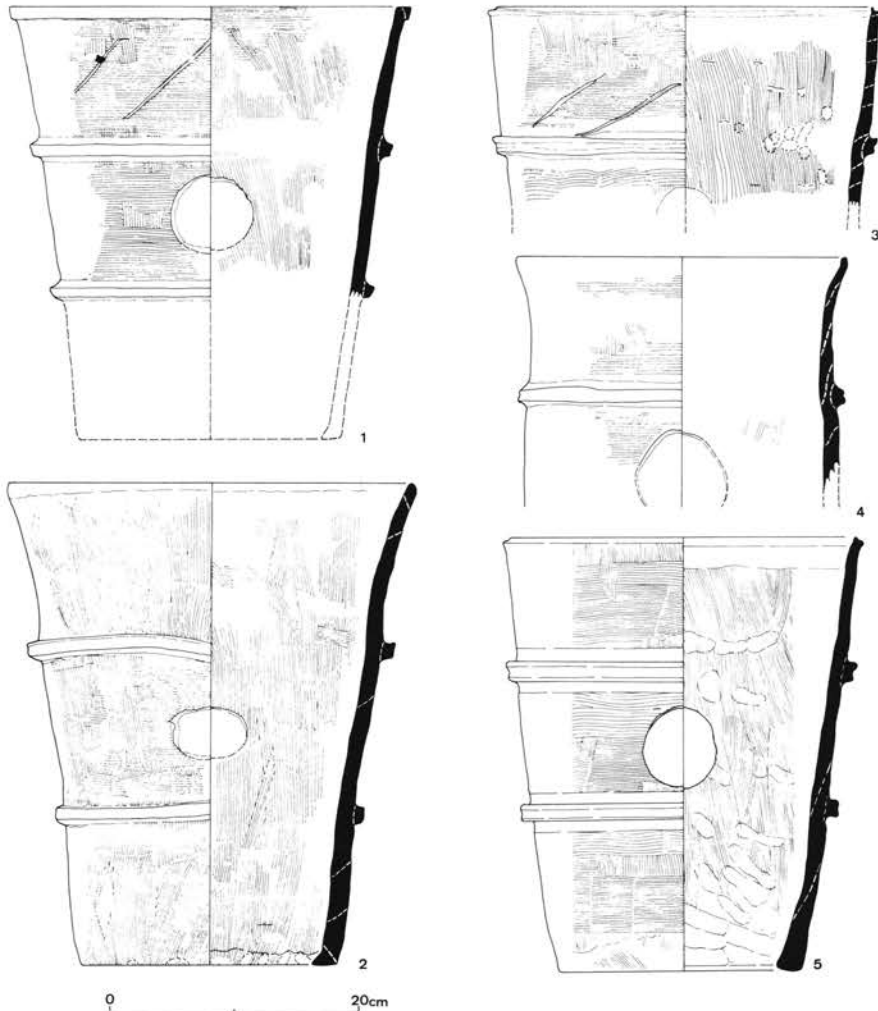


第160図 4・7号墳墳丘実測図

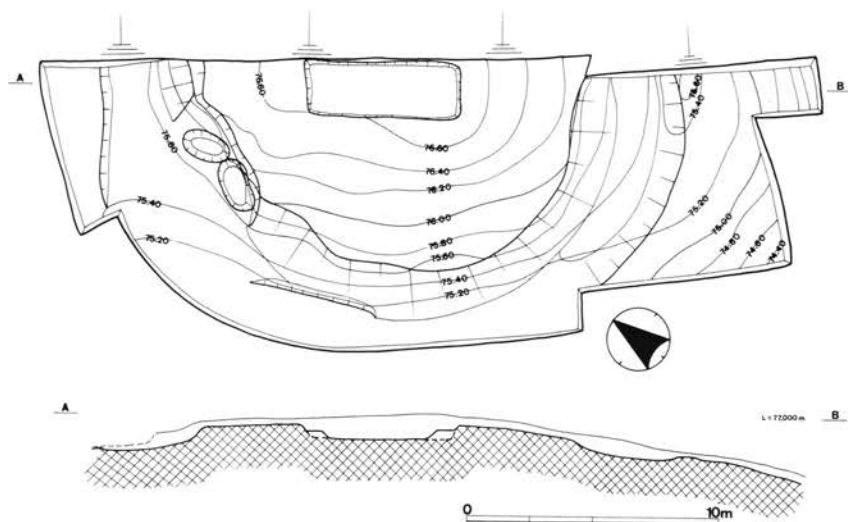
第2・第3号墳と同様、3m×5mのグリッドを設定し、掘削作業を行ったところ、黒灰色土を埋土とする遺構を検出した。調査範囲を拡張し、精査を行った結果、古墳に伴う周溝であることが明らかとなった。

**墳丘** 墳丘は後世の削平により、遺存しておらず、わずかに周溝の一部を確認したのみである。周溝は北半分がほぼ確認できたが、南半分は後世の削平により遺存していなかった。周溝は上面幅1m・深さ20cmを測り、断面は「凹」形である。埋土は3層に分かれるが基本的には黒灰色土の一層である。

**遺物の出土状態** 周溝内から埴輪片が出土したのみである。埴輪は破碎し、周溝にバラまいた状態で出土し、特に後述する第7号墳の周溝と重なる地点に集中して出土した。



第161図 4号墳周溝出土埴輪実測図



第162図 第5号墳墳丘図

### (5)第5号墳

第5号墳は、今回の福垣北古墳群の調査の契機となった古墳である。

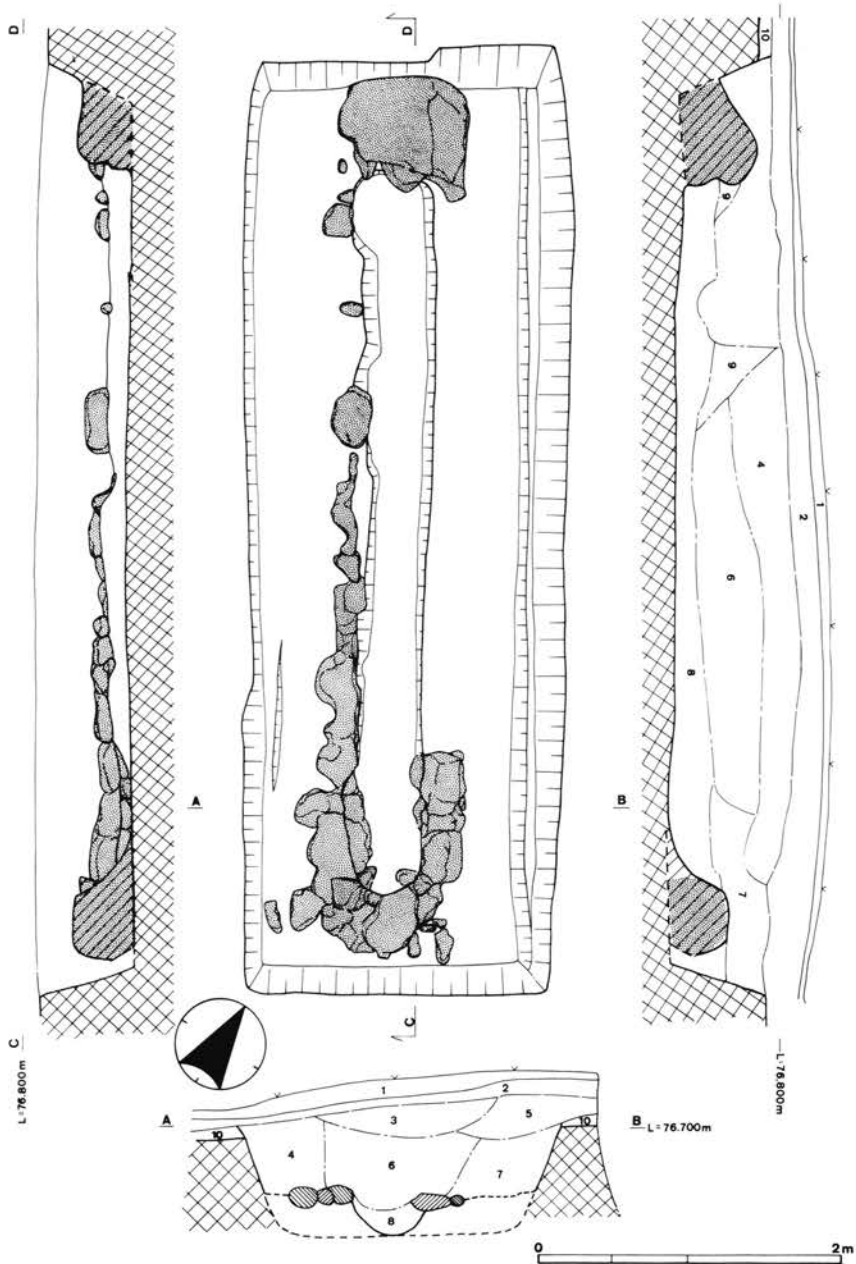
調査前の地形では、北半分が茶畑により、削平を受けており、埋葬施設は遺存していないものと考えた古墳であるが、調査を進めるにつれ、埋葬施設が遺存していたこと、また周溝も一部遺存していることが明らかとなった。

**墳丘** 前述のように、墳丘の北半分は茶畑により削平を受け、遺存していなかったが、南半分は、墳頂部が削平されながらも規模がわかる程度には遺存していた。

墳丘は地山を成形したのち、淡黒褐色土の盛り土を行ったと考えられるが、その盛り土は、調査段階では埋葬施設の周辺に厚さ5～8cm遺存したのみであった。

周溝は、北西及び南東部分に比較的よい状態で残っていたが、南半部については林道等により削平され、確認できなかった。周溝の幅は、上面幅3.5～4.5m・下面幅1.6m・深さ50cmを測り、周溝内には淡黒灰色土が堆積していた。この周溝は墓域を区画するための空堀と思われる。この周溝から復原すると、第5号墳は直径約20mの円墳と思われる。なお、北西部周溝及び墳丘の一部は、奈良時代の土坑により一部切り取られている。

**埋葬施設** 墓壙は、墳頂部を表土下約10cmを除去した段階で検出した。墓壙は、長軸約6.2m・短軸約2.2mを測り、上面輪郭は明瞭に確認できた。この墓壙を順次掘り下げたところ、墓壙上面から10cmのところまで青灰色粘土を確認した。この青灰色粘土を追いかけ、順次掘り下げた結果、青灰色粘土は棺を固定するための粘土床であり、棺の輪郭より割竹形木棺と思われる。この割竹形木棺は、長さ約4.5m・幅約50cmを測り、棺の両木口部に



第163図 第5号墳中心埋葬施設平面図

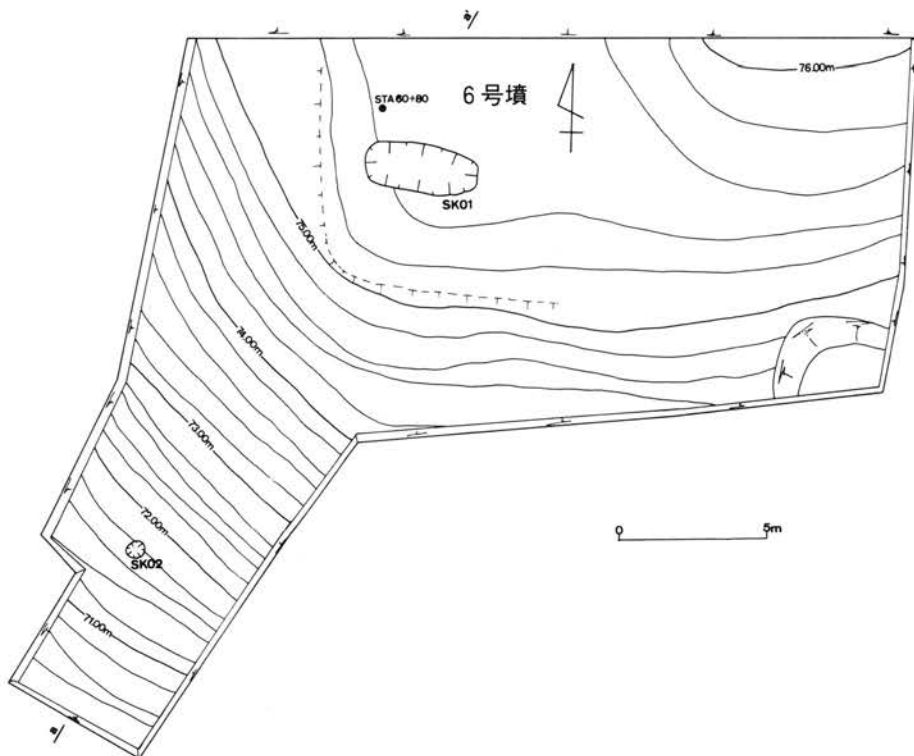
- 1.表土 2.淡茶褐色粘質土 3.淡黄褐色粘質土 4.暗黄褐色粘質土 5.淡黄灰色土  
 6.暗黄褐色粘質土(4より淡黒灰色土のブロックが多い) 7.黄褐色土 8.淡黄褐色土  
 9.暗黄褐色土(淡黒灰色土を含まない) 10.淡黒灰色土

幅約70～80cm、厚さ約25cmにわたって充填し、長側部の南半分及び北半分の東側寄りに人頭大の粘土塊を順次積み上げて、棺を固定していく。

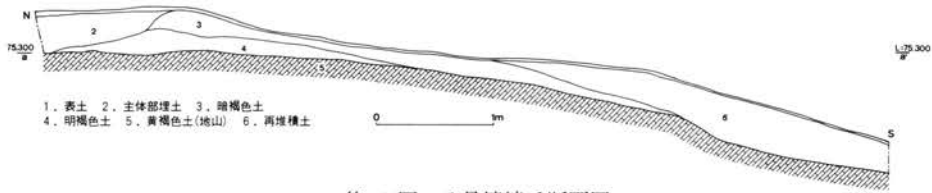
**出土遺物** 埋葬施設及び墳丘の調査では、古墳に関連した遺物がなく、周溝を切った土坑内から奈良時代の須恵器杯身・杯蓋が出土したのみである。

#### (6)第6号墳

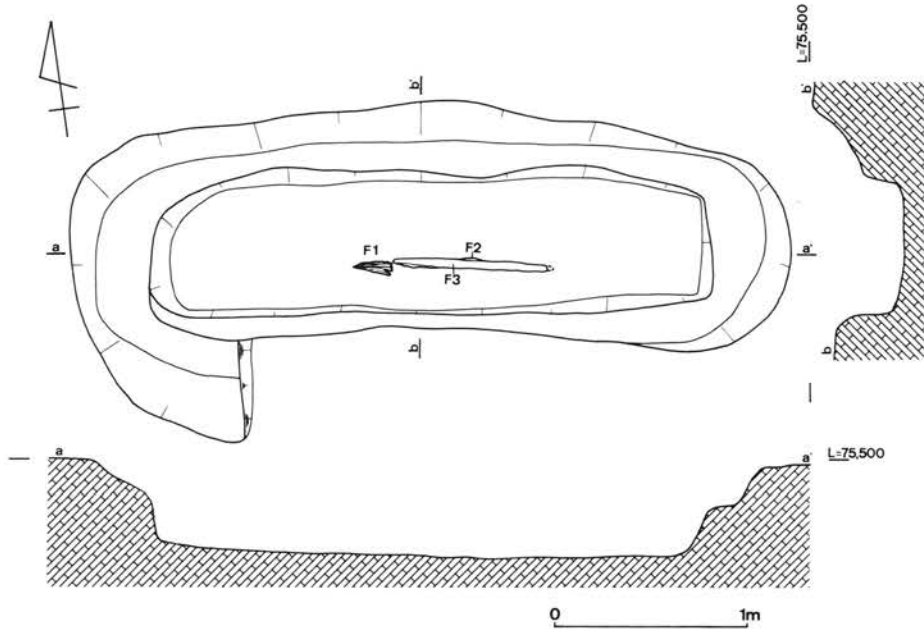
6号墳は、2・3号墳と5号墳の間にのびる尾根稜上に位置している。植林などの開墾によって墳丘は全壊状況であり、墳丘規模・形状は明らかではない。主体部の一部を確認した(第164図)。主体部は長方形を呈する墓壇で、二段に掘られている。墓壇の長さは約3.7m、幅は約1.7mを測る。棺は、痕跡が残っておらず詳細はわからないが、掘形からみて幅60cm・長さ2.7m以下の箱形木棺であろう。棺内から鉄刀・鉄鏃・刀子が、墓壇上面から土師器壺体部破片が出土した。鉄刀は棺中央に切先を東にむけて置かれおり(F2)、鉄刀の南側には刀子(F3)、西側には鉄鏃(F1)が添えられていた。鉄鏃は七本が一括して置かれていた。いずれも棺底で検出した。また、墳丘部の攪乱層において須恵器高杯蓋と鉄



第164図 6号墳平面測量図



第165図 6号墳墳丘断面図



第166図 6号墳主体部実測図

鎌を検出している。

6号墳の位置する丘陵をややさがった地点で楕円形の小土坑を確認した。直径約1m前後の楕円形土坑であり、深さ15cmほどが遺存していた。土坑内からは土師器壺破片が少量出土している。

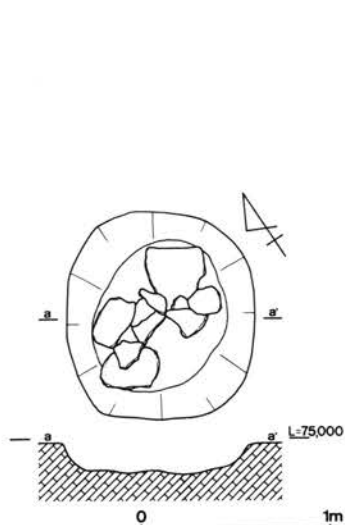
出土遺物(第168・169図)

鉄刀(第169図) 全長約82cm・幅約3.3cmの直刀である。

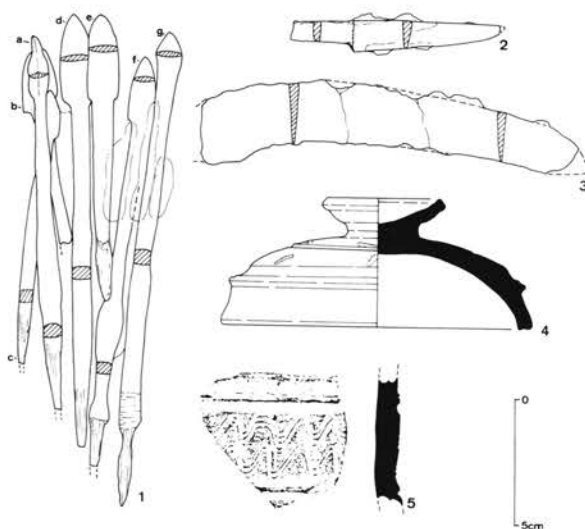
鉄鎌(第168図1) 7本まとまって出土した。鎌身が柳葉形のもの(a～f)と小型で三角形のもの(g)とがある。柳葉形のものには全長12cm前後のもの(c・e)と15cm以上のもの(a・b・d～f)の2型式がある。gは、全長約19cmを測る。

刀子(第168図2) 全長約8.5cm・幅約1cmを測る。基部に木質が残る。

鉄鎌(第168図3) 曲刃である。着装部と先端とを欠損している。残存長約15cm・幅約



第167図 SK02実測図

第168図 6号墳出土遺物  
主体部:1(F1)・2(F2) 墳丘:3~5

第169図 6号墳主体部出土鉄刀(F3)

2.5cmを測る。

### (7) 7号墳

2・3号墳のある丘陵とE地点の間の丘陵鞍部に築造されている。4号墳築造の後、4号墳の周溝を一部壊して築造されている。この古墳は4号墳と同様に削平されて墳丘のほとんどが欠失し、周溝だけが残っている。周溝の形状から約9m×12m程度の楕円形の墳丘であったと推定することができる。7号墳は、4号墳築造後、尾根上の限られた場所を利用して築造されている。尾根主軸に直交して溝を切り、台状墓的な墳丘築成を行ったものらしい。南側の溝からは円筒埴輪数個体分の破片が出土している。埴輪は、二段のタガをもちB種横ハケを施すもので川西編年の第Ⅳ期に該当するものである。須恵質のものと土師器質のものがある。4号墳からも同種の円筒埴輪が出土しており、7号墳は4号墳築造後間もなく築造されたことがわかる。

## 5. まとめ

福垣北古墳は、試掘調査の結果、11基からなる古墳群であることが明らかになった。このうち第1～7号墳について発掘調査を実施した結果、上記のような成果を得た。いくつか気付いた点を記してまとめとしたい。

①墳丘築造の方法 それぞれの古墳は、丘陵の稜線上に位置しており、自然の起伏を最大限利用して造られている。墳丘の大半は自然地形を削り出して成形し、わずかに盛り土をする手法である。特に、2・3号墳などは丘陵に直交する溝を掘削して墓域を区画しており、弥生時代の方形台状墓の墳丘成形方法と変わらない。

②主体部 主体部は木棺直葬で、割竹形木棺(第5号墳)と組合式木棺(第1・2・3・6号墳)がある。一墳丘一主体が基本であるが、第2・3号墳には中心主体のほかに墳丘斜面に埋葬施設とみられる土壌が認められた。

③各古墳の築造時期 概して遺物が少ないが、第2・3・6号墳では須恵器、第4・7号墳では円筒埴輪が出土しており、築造時期を知ることができる。

第3号墳・第2号墳周辺主体部出土須恵器(壺・高杯・甗)は田辺編年のTK216型式に相当する。第6号墳出土の高杯蓋もこの時期のものだろう。第2号墳中心主体から出土した短頸の柳葉鎌は、私市円山古墳第3主体部出土鎌と共通する。これらは5世紀中頃の築造と考えられる。第4・7号墳出土円筒埴輪は、川西編年Ⅳ期に相当するものであり、5世紀後半に位置付けられる。第1号墳出土鉄鎌は長頸鎌が中心となっており、調査古墳のなかではもっとも後出する古墳と考えられる。第5号墳は遺物はないが、割竹形木棺を有していること、墳丘規模も大きいことなどから5世紀前半ごろの築造とみられ、この古墳群築造の契機となった古墳と考えられる。

このように出土遺物・内部主体・立地などからみて、当古墳群はおおむね第5号墳→第2・3・6号墳→第4・7号墳→第1号墳の順に5世紀代を通じて形成された古墳群と考えることができる。

以久田野古墳群は、総数120基を数える丹波地域最大規模の古墳群で、5世紀後半に築造が始まり、7世紀前半まで継続する古墳群と考えられてきた。福垣北古墳群は、この古墳群の北西端に位置することから、当初以久田野古墳群を形成する小支群と考えられたが、調査の結果、築造時期が5世紀前半まで遡る独立性の強い支群であることが確かめられた。

福垣北古墳群は、以久田野古墳群の形成過程を考えるうえで注目される。

(石井清司・田代 弘・平野仁佳子・中井英策)



## 第4節 野崎古墳群

### 1. はじめに

野崎古墳群は、綾部市高槻町野崎45番地ほかに所在する(第170図1)。古墳群が立地する台地は、北から延びてきた丘陵の先端の低平な畑地で、地元では野崎平と呼ばれている。南北250m・東西180mに広がっており、周囲の水田との比高差は5m前後にすぎない(第171図参照)。今回の調査以前には、チャートの石鏃や石器剥片、須恵器・土師器片が採集されていることから、縄文時代以来の散布地、「野崎遺跡」として周知されていた。近畿自動車道の建設予定路線には、この遺跡の西端部分の幅32m・延長175mが入り、当初は「野崎遺跡」として調査を実施した。その結果、縄文時代から中・近世とされてきた遺跡としての遺物の散布は、ほとんどみられなかったが、6基の古墳跡が検出され、これに伴う土器や埴輪も少なからず出土した。そこで、現地説明会や概要報告以来、今回の調査成果を「野崎古墳群」として報告してきており、本報告もこれに従った。

### 2. 野崎古墳群の環境

綾部市高槻町は、旧何鹿郡東八田村に属し、東八田・西八田を合わせた古代の八田郷の北部に位置する。この八田地区は、考古学的には、八田川上流域と呼ばれることが多い。この八田川の下流域の多田町には、大型方墳として知られる聖塚と菖蒲塚の両古墳があり、八田川と由良川との合流地点の対岸には青野・綾中遺跡群が広がっている。この遺跡群の南に接する綾部市街地から北東約8kmに高槻町は位置している。

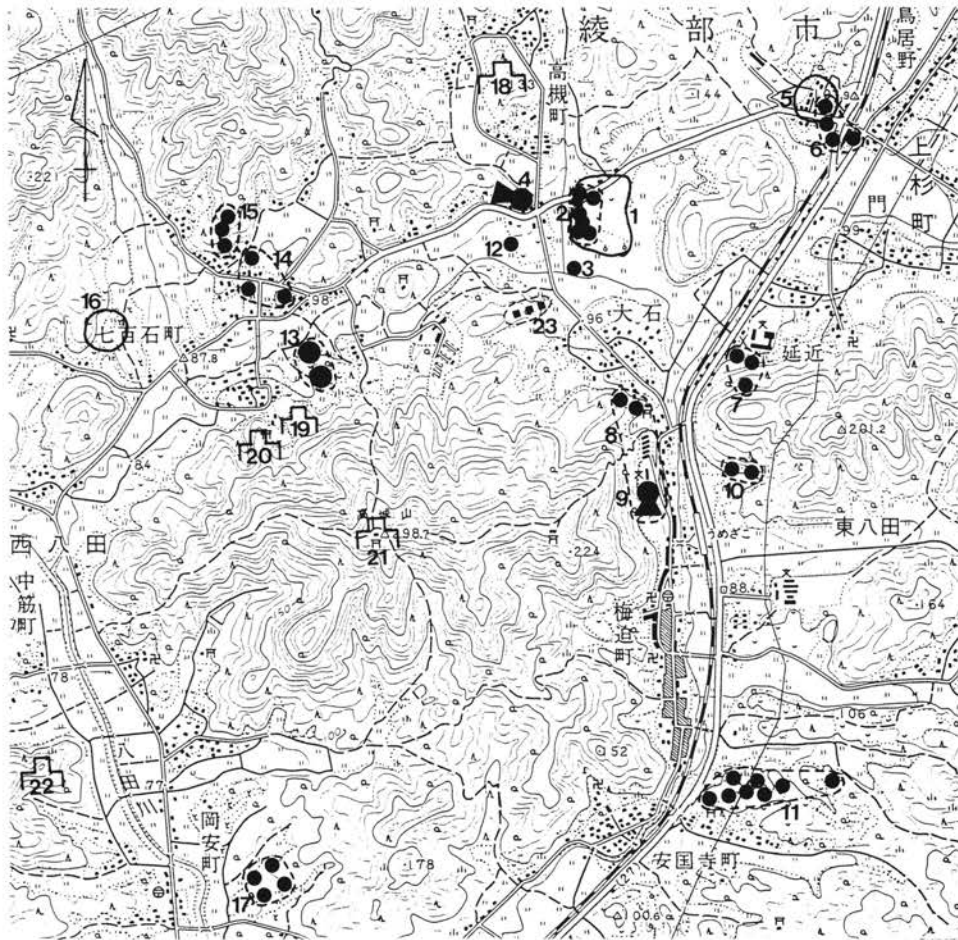
野崎遺跡の東方800mには、市内でも数少ない旧石器時代の散布地である上杉町旗投遺跡(第170図5)がある。縄文時代の野崎遺跡の後、弥生時代の散布地は、この地域では現在のところ報告されていない。

古墳時代の前期の様相は知られていないが、中期になると上杉町に3基の方墳からなる奥大石古墳群(第170図23)が形成される。最近に発見・調査され、全国的にも珍しい蛇行剣が出土している。次いで、七百石町の円墳2基からなる政次古墳群(第170図13)が築かれる。1号墳はすでに調査が行われ、直径40mのかなり大きい円墳である。その東方の高槻町の茶白山古墳(第170図4)は、体積(3,687m<sup>3</sup>)こそ丹波最大の方墳聖塚の13,000m<sup>3</sup>には遥かに及ばないものの、全長54mの大きさは、由良川流域では最大の前方向円墳である。時期は、5世紀末葉と言われているが、6世紀前半に置く説もある。さらに、古墳時代後期になると、人物埴輪が出土した全長約50mの上杉1号墳(第170図9)が築造されている。これら、中丹地方では最大級の首長系列墳とも見られる古墳の存在は、平野部の狭小さや比

較的散在的な小型古墳の分布状況から見て、古墳時代のこの地域にやや特異な様相を与えている。

奈良時代の遺跡としては、野崎遺跡やその西方400mの大原遺跡で土器片が採集されているが、発掘調査例がなく、実態は不明である。

平安時代から室町時代にかけての八田郷は、考古学的には非常に資料が少ないが、高槻町の篠神社(第170図18の北)境内本殿裏に経塚があり、淵垣町(第170図範囲のやや南西)の木寺北遺跡からは、例の少ない鉄磬<sup>(注59)</sup>(12世紀)が出土し、また、足利尊氏ゆかりの寺名から町名をとった安国寺町(第170図南東隅)の平山古墳から13世紀の青磁碗<sup>(注60)</sup>が出土した。<sup>(注61)</sup>



第170図 野崎遺跡周辺遺跡分布図(1/25,000;古墳は約1/10,000)

- |           |           |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1.野崎遺跡    | 2.野崎古墳群   | 3.狐塚古墳    | 4.高槻茶白山古墳 | 5.旗投遺跡    |
| 6.焼森古墳群   | 7.中島古墳群   | 8.上杉古墳群   | 9.上杉1号墳   | 10.石子古墳群  |
| 11.宮ノ腰古墳群 | 12.白田古墳   | 13.政次古墳群  | 14.塚廻り古墳群 | 15.八幡宮古墳群 |
| 16.七百石遺跡  | 17.杉ヶ本古墳群 | 18.高槻城跡   | 19.平山東城跡  | 20.平山城跡   |
| 21.高城城跡   | 22.姫城跡    | 23.奥大石古墳群 |           |           |



第171図 野崎古墳群と高槻茶臼山古墳

中世末期には、八田地区でも多くの山城が営まれた(現在11か所、第170図18～22参照)が、近畿自動車道関係遺跡として調査された七百石町の平山城跡(第170図20)と平山東城跡(第170図19)の調査成果は、すでに報告されたところである。<sup>[注62]</sup>

### 3. 調査の経過

発掘調査は、昭和61年11月28日に開始したが、翌年1月から3月上旬にかけての数回に及ぶ積雪と3月後半の天候不順によって作業が遅延し、終了したのは昭和62年3月24日であった。このため、現地説明会も昭和62年度に入った5月8日に実施した。なお、実働日数は51日である。

調査対象地の5,600㎡は、地形に応じて3地区に分け、台地西縁の最も広い部分を北地区、谷地を中央地区、丘陵南西端を南地区と命名した(第171図)。

#### (1)北地区(図版第52-(1))

北地区の2,000㎡については、4m方眼のグリッド網を設定し、まず最高所である東部に幅4m・長さ68mのトレンチを入れた。次いで、西半部には東西方向に3本のトレンチを入れ、精査したところ、溝状の遺構を数条検出し、これらが円弧を描いており、溝によっては埴輪片を含んでいたため、北地区を全面発掘に切り替えた。また、遺構の一部が、当

初の調査範囲に入っていなかった府道の北にも調査区を広げた。この部分も含め、北地区の最終掘削面積は、1,928m<sup>2</sup>となった。

北地区では、厚さ20～30cmの畑の耕作土のすぐ下に、橙褐色粘質土～淡黄色粘土の地山が広がっている。遺構は、この地山を掘り込んでおり、褐色ないし暗茶褐色の粘質土で埋まっている。検出した遺構には、幅1～3m・深さ5～50cmの溝8条のほかに土坑1基(野崎4号墳主体部)と土坑2基、ピット6個がある。溝のうち6条は、後世の削平や攪乱を受けていない限り、完結した円形、あるいは内側に前方後円形を掘り残した平面形を呈し、また、溝の埋土から、古墳時代の土師器・須恵器、それに埴輪片が出土したので、これらの溝を古墳の周溝と判断した。そして墳丘部分は、後世の削平によって完全に失われたと考えた。古墳の名称については、小字名野崎を採り、尾根の先端部(南)から野崎1～6号墳と命名した(第172図<sup>(注63)</sup>)。これらの古墳跡についてはこの名称で、項を改めて報告する(第4項)。

4号墳の北の溝1は、小さな谷状の遺構であるが、野崎4号墳の項で詳述する。府道北の調査区で検出した土坑1・2は、不定形を呈し、埋土からは土器細片しか出土していない。性格は不明である。ピットは6個検出したが、いずれも古墳の周溝より新しく、中に肥前磁器片を伴うものもあるので、江戸時代以降のものであろう。

#### (2)中央地区(図版第52-(2)・54-(1))

現況では、南北両地区とは2mほど低くなった谷状の地形を呈する。第171図のようにやや広くトレンチを設定して、畑の耕作土を30cmほど除去すると、厚さ20～50cmの包含層がほぼ全面にひろがっていた。近世以降の陶磁器の細片が出土したが、瓦器片や中国製青磁片などの中世遺物も若干含まれている。その下層には黒墨層があり、漸進的に赤褐色粘質土に移るが、この2層からの遺物は皆無であった。中央地区の掘削面積は268m<sup>2</sup>である。

#### (3)南地区(図版第52-(1)・54-(1))

南地区は再び低い丘陵状を呈する。第171図のとおり、176m<sup>2</sup>のトレンチを入れた結果、何の遺構も遺物も検出されなかった。

今回の調査では、3地区合わせて2,372m<sup>2</sup>を掘削調査したが、縄文時代の散布地としての野崎遺跡の遺構は、この台地西縁部では検出されず、遺物も石器剥片数点にとどまった。

この野崎平と呼ばれる台地は、現在かなり低平になっているが、古墳の検出状況や中央地区のような谷状の地形の遺存から、本来はかなり起伏があったものと考えられる。

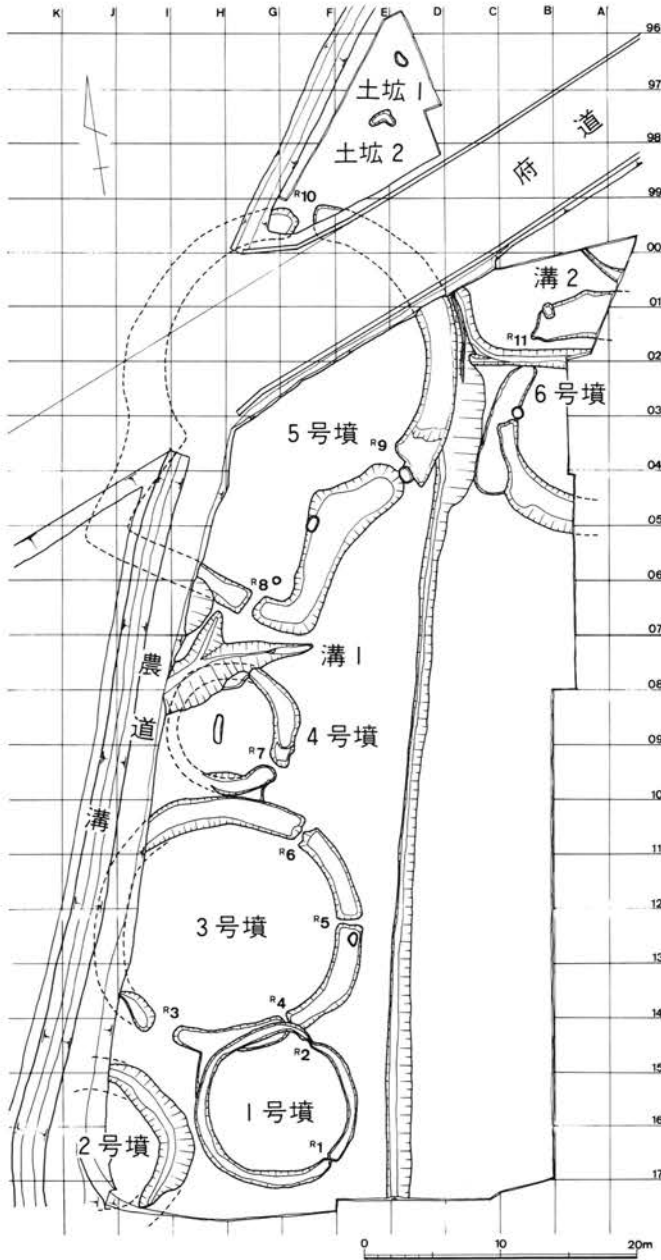
## 4. 検出遺構

以下、検出された6基の古墳跡の調査結果を報告する。周溝幅等の数値は検出面での平

04ライン  
断面図



06ライン  
断面図



第172図 野崎古墳群実測図(Rは陸橋の略)

面形に基づくが、古墳の全長や直径の数値は、周溝の古墳側の下端間の距離である。

(1)野崎1号墳(図版第53-(2)・55・56・57)

周溝の全周が検出された唯一の古墳である。円墳で、直径は東西・南北とも10.5mである。周溝の幅は、最大1.5m・最小0.5mで、深さは5～33cmを測る。東側で狭く浅く、南から西側で広く深い(図版第55)。尾根の稜線が東にあることから、旧地表面が西に傾斜していた関係で、このように古墳の基底面も西に傾斜していると考えられる(このような観察は3号墳でも可能である)。また、南西部分については、土層からみて、次に述べる2号墳を削平し、整地した上にこの1号墳を築いた可能性が高い。

周溝の北東と南東には、内外両側から小さな造出し状の半島が突出して向かい合う半陸橋状の掘り残り部分がある。南東の陸橋1は、古墳側での付け根幅0.42m・長さ0.21m、反対側で付け根幅0.6m・長さ0.27mを測る。半島状の両部分先端間は、上端で0.36m、下端で0.11mを測る。周溝底とこの半陸橋状部分の最低部とのレベル差はほとんどない。北東の陸橋2の古墳側付け根端は0.75m・長さ0.25m、反対側ではそれぞれ0.9mと0.3mで、向かい合う半島状と言うより、周溝が急に狭まったという観に近い。ここでも周溝底のレベル差はない。

周溝の中には埴輪が散乱していた。特に南側では、約7mの間の5か所にほぼ完形ないし半完形の円筒埴輪が6個体落ち込んでいた。埴輪の多くは周溝と直交する方向に倒れており(第173図)、埴尻に立っていた埴輪がそのまま倒れたものと推察される。一方、東側の2か所の陸橋の間の延長約10mの周溝の中からは埴輪片1片すら出土を見ていない。埴輪以外の遺物として、周溝北側で出土した須恵器の小型短頸壺がある。

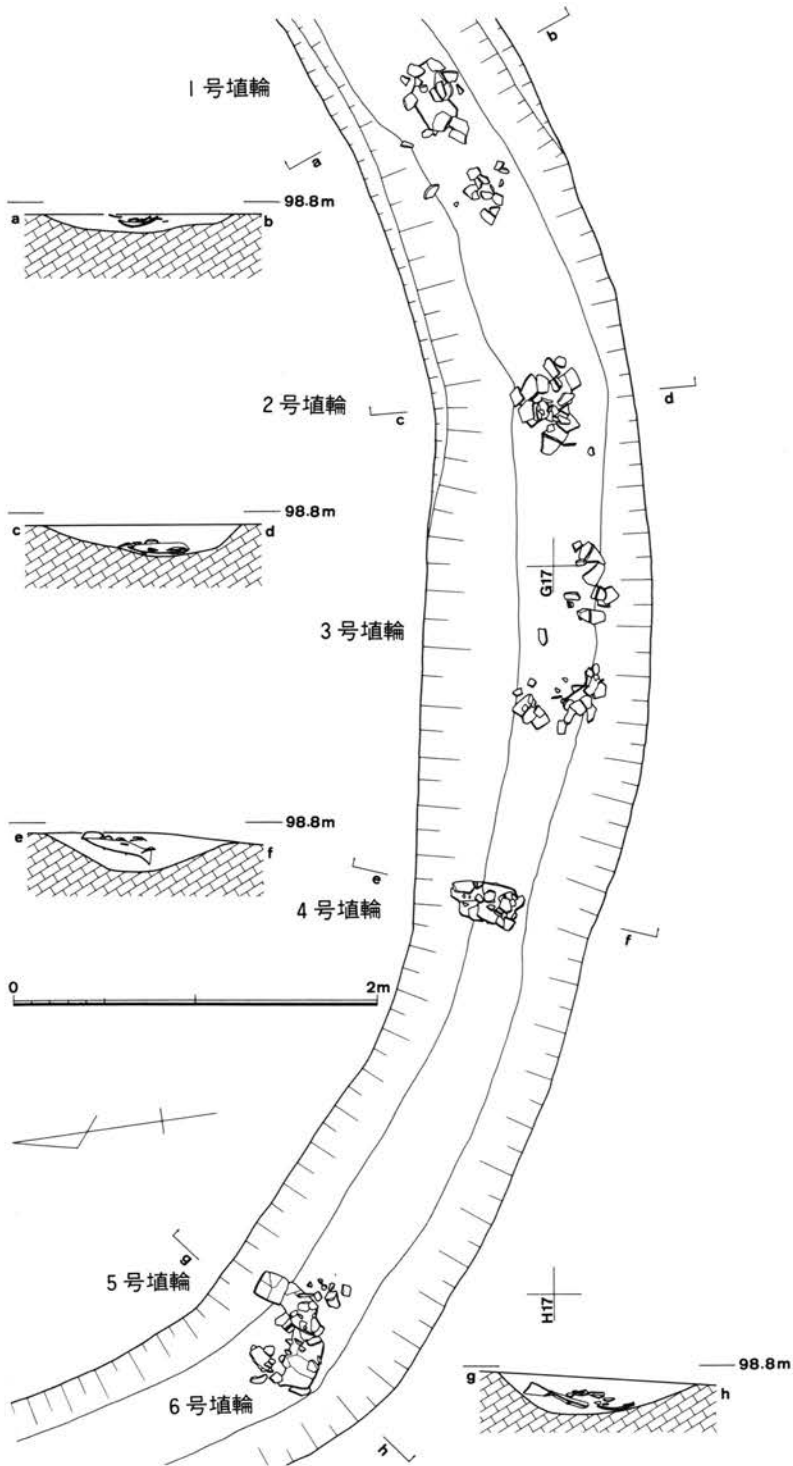
(2)野崎2号墳(図版第53-(2))

西半部と南側が大きく削平されている古墳で、1号墳の西に接する。延長約12m残った周溝は、幅2.5m・深さ約30cmを測る。古墳の復原はむずかしいが、円墳とすれば直径9m前後の規模となろう。前項で述べたように、1号墳築造の際に削り取られた可能性がある。

周溝からは、少量の土師器・須恵器片とともに埴輪片が出土した。整理箱に1箱程度の量であるが、1号墳の円筒埴輪とは、胎土・焼成とも異なる形象埴輪で、この2号墳が独自に持っていた埴輪と考えられる。すべて小片であるので復原は不可能であるが、後述する4号墳のそれと似た家形埴輪と思われる。

(3)野崎3号墳

西側の一部を農道に削られており、南側の周溝の一部も1号墳の周溝で切られている。直径は、南北15.7m・東西(推定)17mを測り、この古墳群の円墳としては最大である。周溝は、幅1.5～2m・深さ10～26cmを測るが、北西側の深さは、検出面から50cmを超える。



第173図 野崎1号埴輪出土状況実測図

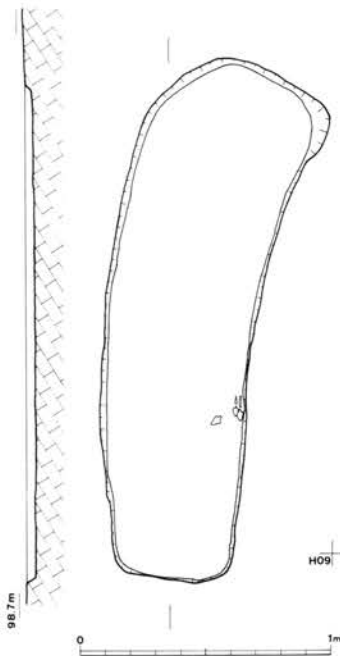
周溝の4か所に陸橋状の掘り残しが見られる。南西部分から反時計回りに陸橋3～6としておく。陸橋3は、南西に位置し、検出面で最短幅1.7m・長さ1.5m前後を測る。陸橋4は、南に位置し、幅0.35m・長さ1.65mを測る。陸橋中央部分は1号墳の周溝に切られて、形状は不明である。陸橋5は、東に位置し、幅0.35m・長さ1.9mを測る。検出面より陸橋中央部が6cm低く、馬の背状の陸橋である。陸橋6は北東に位置し、中央部が狭くなった砂時計状の平面形を呈する。幅は内側で0.6m、外側で0.9m、中央狭小部で0.2m、長さは1.9mを測る。検出面より中央部は4cmほど低く、やや馬の背状を呈する。

周溝、特に北東の陸橋6の両側から、土師器・須恵器とともに、鏡・馬・犬(?)・ミニチュア土器等の土製模造品が出土した。他に少量の埴輪片も出土したが、北側のは4号墳、南側のは1号墳からの混入で、この3号墳には埴輪を樹立していなかったと思われる。

#### (4)野崎4号墳(図版第53-(2)・58-(2))

3号墳の北に接する小型の円墳である。西側が攪乱を被っており、北側も溝1によって削られているので、復原は困難であるが、直径7.5m前後であろう。周溝の幅は1.4m前後であるが、最大幅は、1.9mを測る。最も深い部分で検出面から26cmと、全体に浅く、しかも、近年の耕作で攪乱を受けている。南東部に掘り残しの陸橋7がある。陸橋7は、最短幅0.35m・長さ1.5mを測る。検出面と陸橋上面とのレベル差はない。

墳丘部中央に南北に軸を持つ主体部の底がかるうじて残っていた(第174図)。この古墳



第174図 野崎4号墳主体部実測図

群中で唯一残存した主体部である。残存長2.1m・幅0.6mで、検出面からの深さは3～4cmにすぎない。この墓壙の中央やや南寄りに、鉄鍬3点が切先を南に向けて出土した。他に遺物はない。

4号墳の北を東西に楔形に切り込む溝1は、上層に黄色混じり黒色、中層に暗褐色、下層に暗茶褐色のそれぞれ粘質土が埋まっていた。4号墳は、墳丘を削平されてはいるが、中央部から西半分にかけては黒墨層があり、主体部もこれに掘り込まれている。溝1の性格は全く不明であるが、少なくとも上層の黄色混じり黒色粘質土は、この4号墳の盛り土であった可能性が高い。溝1の中層からは、須恵器片と埴輪片がまとまりなく出土したが、接合作業の結果、須恵器短頸壺1点と寄棟式家形埴輪1点がいずれも完形近く復原でき、他の遺物はほとんど混じっていなかった。家形埴



輪には3号墳北側周溝から出土した数点の小片も接合しており、上述した溝1上層の様相も考え合わせると、これら溝1の出土遺物は、本来4号墳に伴うものと判断される。

#### (5)野崎5号墳(図版第53-(1)・59-(1)・60)

調査地の最北に位置する群中唯一の前方後円墳である。前方部西半部を2号墳・3号墳と同様に農道によって削られ、後円部も大半が現在の府道によって失われているが、府道の北で、後円部北側の周溝の一部が検出され、全長27m・後円部直径20m・前方部幅14m・くびれ部幅12mと復原できる。前方部の長さが8.4mとやや短いのが特徴的である。軸方向は、国土座標に対してN-32°-Eの傾きをもっているが、丘陵の尾根方向に平行しており、谷部を見下ろす台地縁辺部に築かれた前方後円墳といえる。葺石の痕跡は認められない。なお、これは偶然かもしれないが、西方200mにある前方後円墳、高槻茶白山古墳の中軸線を延長してくると、野崎5号墳の後円部のちょうど真ん中を通る(第171図・図版第60-(1)参照)。

周溝は、幅2~3m、くびれ部では4.5mを測る。深さは36~55cmであるが、後円部北側では20cm程度しか残っていなかった。周溝が全周していたとすれば、半分弱しか残存していなかったわけであるが、3か所に掘り残した陸橋がある。陸橋8は、前方部前縁東寄りに位置し、幅0.7m・長さ2mを測る。陸橋9は、後円部南東に位置し、幅1.1m前後・長さ3.4mを測る。陸橋上にピットがあるが、これは近世以降のものである。陸橋10は、後円部北に位置し、幅1.5m前後、長さは攪乱のため不明であるが、2m前後と推定される。5号墳の陸橋はいずれも上面と検出面とのレベル差がなく、馬の背状を呈さない。

周溝からの出土遺物は、細片が多いが、後円部東側では甕・高杯等の土師器、後円部南側からくびれ部にかけては高杯を主とする須恵器が目立った。埴輪をもたない古墳であるらしく、破片1点すら出土していない。

#### (6)野崎6号墳(図版第53-(1)・59-(2))

5号墳の東側に位置する古墳で、東半部が調査地の外にある。円墳として復原すれば、直径は約12mとなる。周溝は幅広く、3m前後で、深さは20~35cmを測る。後世の字切り溝によって切られているが、北西側に陸橋がある。幅2m・長さ1.7m前後を測る。周溝からの出土遺物は少ないが、須恵器高杯片などがある。

### 5. 出土遺物

野崎古墳群から出土した遺物の量は、整理箱20箱程度である。遺物の種類は、土師器・須恵器・埴輪・土製模造品・鉄鏃である(付表10参照)。報文中の遺物番号は通し番号であり、表・実測図・写真図版等においても共通である。

(1)野崎1号墳の円筒埴輪(第175図・図版第61)

1号墳では、遺構の項で報告したように、周溝全周の東側を除く3分の2の部分において埴輪が出土したが、特に南側で出土した1号～4号埴輪(第173図参照)の4個体(第175図1～4)は、若干の欠損はあるもののほぼ完形に復原できた(図版第61)。また、西側にかけての4個体(第175図5～8)については、図面上で完形になった。この8個体以外については、細片化しており復原は不可能であるが、仮に破片のすべてが接合したとしても、3個体分程度の量である。

8個体の円筒埴輪の内、7だけは表面橙褐色、内部灰褐色を呈するやや軟質の焼成であるが、1～6・8及び残った破片はすべて暗赤褐色を呈する焼成良好な土師質である。黒斑はみられない。復原した8個体は、大きさから2種類に分けられる。高さ35cm前後で、タガが2条の小型品(1～6)と、高さ50cm弱でタガを3本持つ大型品(7・8)である。

小型品6点の器高は、最大が3で35.3cm、最小が6で33.5cm、6点の平均は34.5cmである。口径は、最大が5で27.5cm、最小が6の21.7cm、平均24.3cmである。底径は、最大が5の17.2cm、最小が6で14.0cm、平均15.1cmである。個体差はほとんどなく、円筒埴輪としてはかなり小型である。

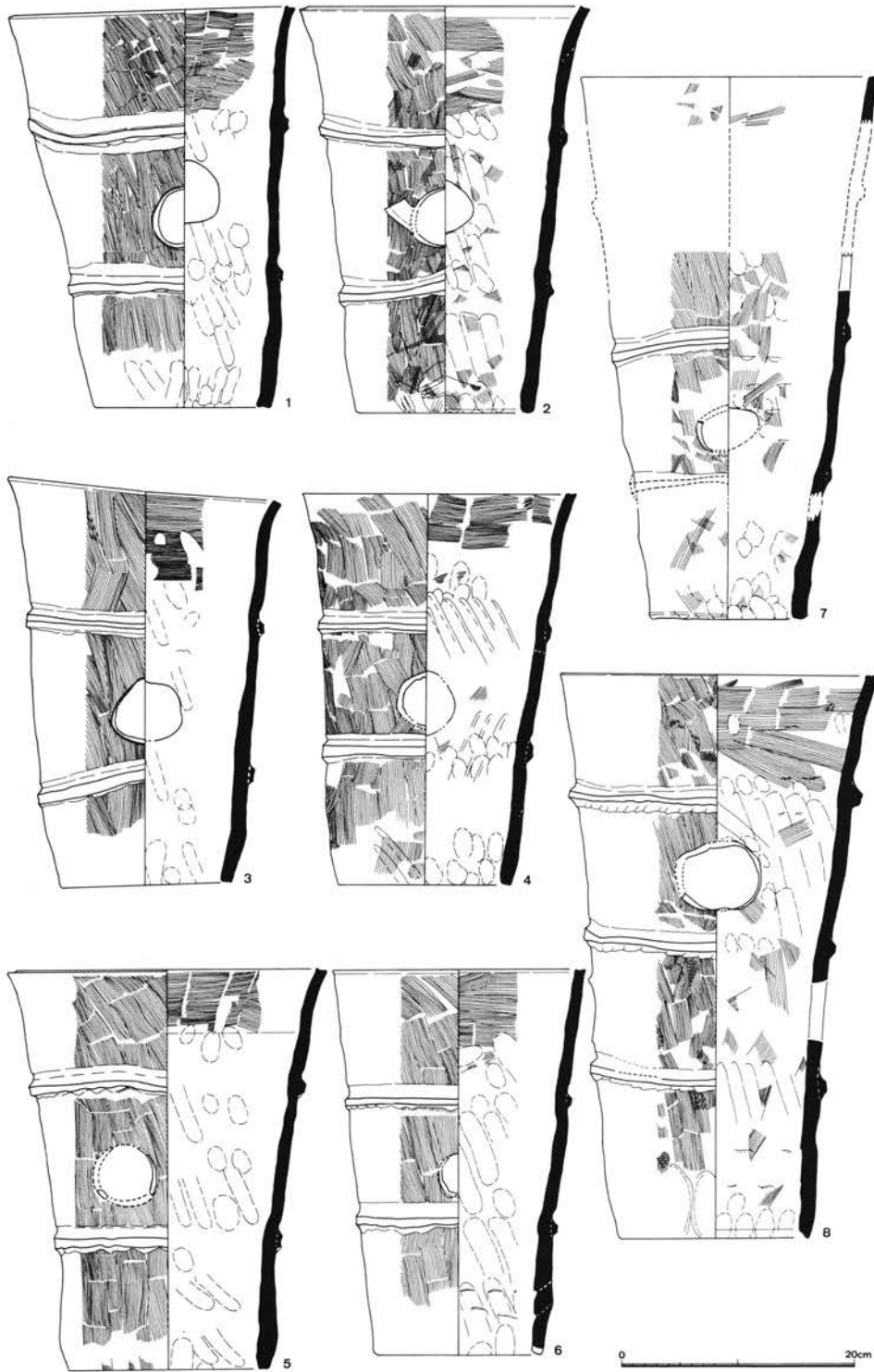
外面調整は、全面タテハケであるが、底部下半はナデ調整によって、ハケ目が消えている例が多い。タガを挟んだ上下のハケは連続しており、タガの取り付け前に底部から口縁部へやや左傾しながらかきあげていることがわかる。

内面調整はナデが主体であるが、一部にハケが消されずに残っている。口縁から6～7cm下まではヨコハケを施している。タガの裏面にあたる個所では指押さえが目立ち、底部近くでは強い指ナデが見られ、外面のナデとともに、底部調整の痕跡を残している。

2条のタガの断面形は低い台形である。円筒に粘土紐を巻き付け、断続的な指押さえによって仮に貼り付けた後、タガの上面と側面のみを2本の指で、断面が内湾するほど強くナデで固定している。下面については仮の断続的指押さえのままになっている点が特徴的である。

透かし孔は、直径4～6cmの円形で、胴部の相対する位置に2か所一対に穿たれている点も、6個体共通している。

大型品2点(7・8)は、いずれも周溝の北東部で出土した。7は、推定高さ46.7cm・復原口径25.6cm・底径12.8cmであり、8は高さ48.9cm・口径27.2cm・底径16.0cmを測る。上述した胎土・焼成の違いに対応するかのよう、プローションや器壁の厚さなどの点で、8は1～6に近く、7はやや異なる。しかし、大きさ・内外面の調整は、7と8で一致するとともに小型品の1～6とも同じとってよい。器高に合わせたかのように1本多くなった3本



第175図 野崎1号墳出土土円筒地輪実測図

のタガの接着法も小型品と同様である。透かし孔は、2段になった体部に一対ずつ直交させて、合計4か所の孔を互い違いに配している。

## (2)家形埴輪

野崎古墳群から家形埴輪が2個体出土した。2号墳の断片的な資料(第177図9)と4号墳の完形に復原し得た例(第176図10)である。記述の都合上、4号墳例から報告する。

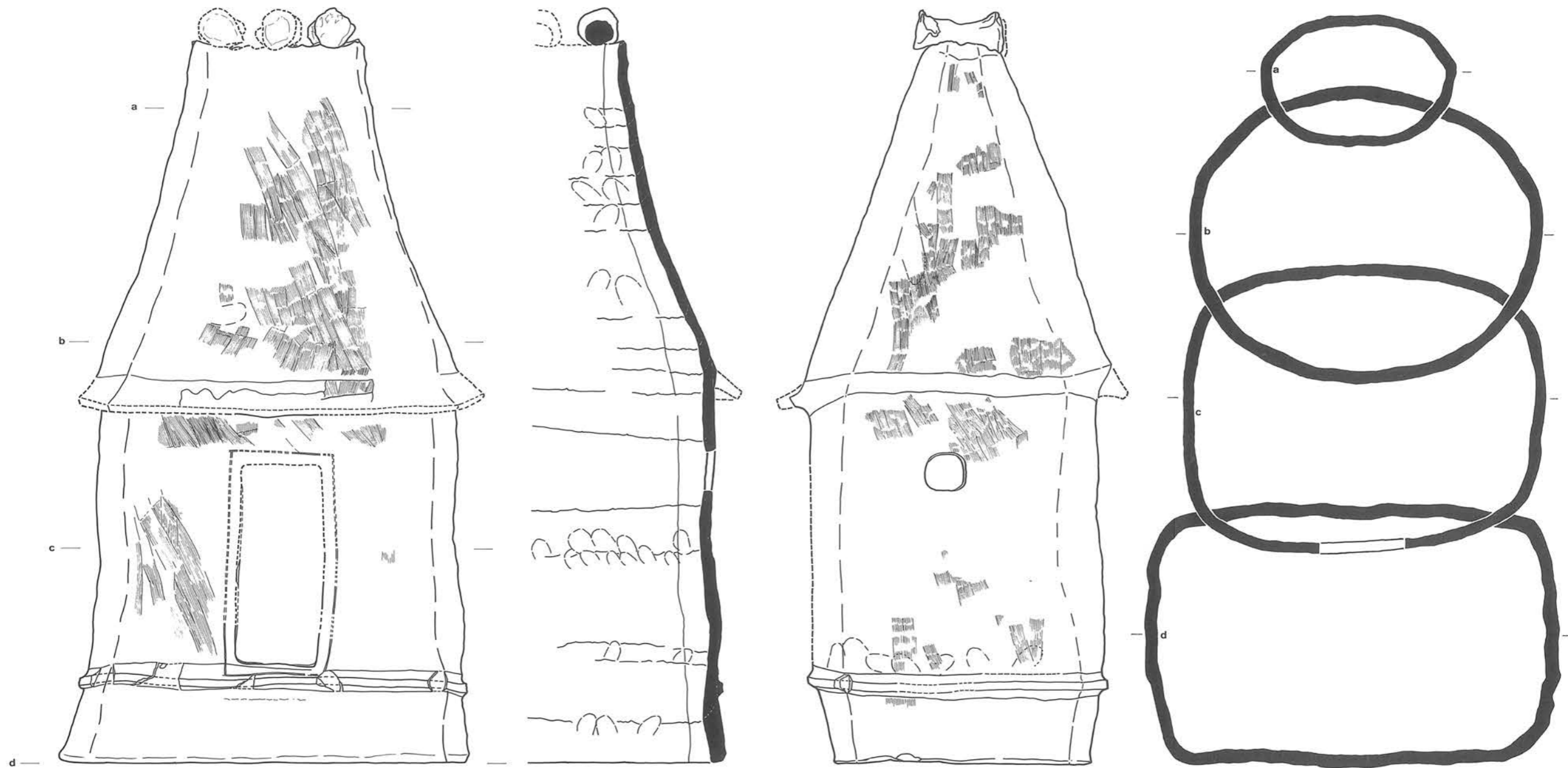
この家形埴輪の出土状況と4号墳への帰属については、検出遺構の項で報告した通りである。出土当初、家形であることすらわからず、復原はかなり困難な印象を受けたが、接合を試みるうちに、相当数の、それも同一個体の破片が残されていたことが判明し、それほど推測を加えることなく完形に復原できた。

寄棟(四柱)造りで、堅魚木の上端までの高さ81cmを測る。底部で平部の幅は44cm、妻部の幅は27cmである。底部での横断面は、隅丸長方形を呈するが、上へ行くに従って隅丸部分のアールが大きくなり、屋根部に至っては、四方流れのはずが、稜線すら定かではなく、むしろ楕円錐形とでもいうべき形を呈する(第176図の断面図参照)。

製作工程を追って細部を観察すれば、まず、壁体部(屋台)は、帯状の粘土を輪にしたものを6~7段積み上げて作っている。コーナー部分が隅丸になったのは、この段階であったろう。屋根部は、壁体部に継続して、次第に小さくしていった環状の粘土帯を10~12段積み上げて成形している。

その後に屋根の出の少ない軒先部分を貼り付けており、この軒先部分は全周の大部分が剝離して失われていた。この段階で器体の外面全体を非常に細かいハケで覆っている。次に、床を表す突帯を円筒埴輪のタガのように貼り付けて、上下両側をていねいにナデた結果、この部分の本体のハケが消えている。入り口は、平部の中央に縦20.4cm・横9.2cmの長方形の穴を穿って表現し、ヘラ描きの線刻で周囲を囲んでいる。この線刻は床の突帯上部のナデよりも後である。さらに、入り口のある面に向かって右手の妻部上方に隅丸方形であったらしい透かし孔(窓か)を穿っている。

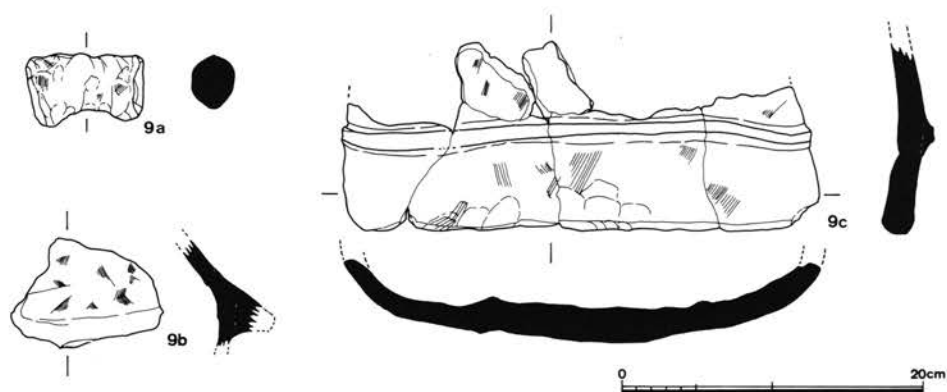
屋根の上端部の破片は少なく、推定によって復原したところもあるが、以下のものであったと思われる。楕円形の横断面で上方へとすぼまってきた屋根は、17.6cm×6.5cmの楕円形に開放したままである。泥障板や妻隠板の破片はなく、またその痕跡も残っていない。ただ、屋根最上段の輪積み粘土帯が、すぐ下の段の上部に重なるように貼り付けられ、若干ではあるが、外側に膨らんだ形状をなしている。あるいはこれが泥障板を表しているのかもしれない。屋根の上端部は波状を呈しているが、その波の一つ置きに堅魚木が載っていたらしい。堅魚木は1本しか出土していないが、棒状の両端を広げた形態であるため、狭い屋根上端に4本以上は並べられず、3本を吹き抜けの棟に載せていたものと復原した。



10

0 10 50cm

第176图 野崎4号墳出土家形埴輪実測図



第177図 野崎2号墳出土形象埴輪実測図

この家形埴輪の胎土はかなりち密で、焼成はやや軟質である。色調は部分によってそれほど変わることなく、表面淡橙色、内部淡褐色を呈する。これらの特徴は、私市円山古墳で多数を占めるDタイプの<sup>(126)</sup>埴輪と共通すると思われる。

野崎2号墳の周溝から出土した破片は、いずれも同一個体に属すると考えられる。比較的大きな破片(第177図9a~c)を見ると、4号墳のと同様の家形埴輪になるようである。壁体部の角は、4号墳例と同じ隅丸方形である。胎土はやや砂っぽく、赤褐色を呈する。

### (3)土器

野崎古墳群から出土した土器で図示可能なものは、40点程度である。ほとんどが古墳の周溝の埋土から出土した遺物である。必ずしもその古墳に伴うとはいえないかもしれないが、一応古墳別に報告する。

野崎1号墳周溝の出土遺物は、上述した円筒埴輪と土師器細片以外には、須恵器の小型短頸壺(第178図11・図版第65)が出土しているだけである。口径5.3cm・器高6.7cmを測る。底部外面以外は回転ナデ調整で仕上げている。焼成は堅く灰褐色を呈する。

2号墳周溝からの出土土器は須恵器の壺(第178図12)のみである。胴部最大径15.2cmを測る。底部外面には平行タタキ(8本/2.5cm)が施され、体部はケズリの後、軽くナデ調整をしている。底部内面に指頭痕が残る。焼成はやや軟質である。

3号墳周溝からは、土器がややまとまって出土した。須恵器蓋杯身(第178図13)は、口径10.4cm・器高4.0cmを測る。口縁端部には面を作らず、丸くおさめている。14は、復原口径9.2cmであるが、13と同一個体かもしれない。高杯蓋(15)は、口縁部内面に面を持つが、外面の天井部と口縁部の境界は、浅い溝でわずかにそれとわかる。口径13.4cm・器高5.0cmを測り、焼成軟質である。土師器には、甕4点(16・17他)、高杯の杯部片3点(18~20)と脚部片5点(22~24他)、及び台付き鉢(21;34参照)がある。甕(16)は、口径18.2cmを

測る。4号墳の26とともに、青野・綾中遺跡群<sup>(註65)</sup>の6世紀末～7世紀前半の甕の前身といつてよいほどよく似ている。高杯の杯部には、皿状のもの(18・19)と椀状のもの(20)があり、脚部には中実のもの(22・23)と、中空で内面を調整せずに粘土紐を積み上げた痕跡を露骨に残すもの(24;他に2点)とがある。残念ながら、杯部と脚部が接合する例はなかった。

4号墳の遺物としては、周溝から出土した須恵器杯蓋(第178図25)と土師器甕(26)の他に、溝1で家形埴輪(10)と共伴していた須恵器短頸壺(27)がある。26は、3号墳の16と同型式の甕で、口径17.8cmを測る。須恵器壺(27・図版第65)の口径は9.2cm、器高は16.9cmを測る。頸部はやや長めで直口壺ともみられるが、蓋をかぶせて焼成したらしい痕跡が肩部表面にあり、有蓋短頸壺としておく。体部は整美な倒卵形で、底部に平行タタキ目を残し、体部外面はカキ目である。

5号墳周溝からも3号墳とともに最も多くの土器が出土した。須恵器杯蓋(第178図29)は、口径11.2cmを測る。器壁内外面に水泡状痘痕ができており、また自然釉がかかっている。須恵器(28)は、焼成軟質の破片で、杯か高杯の身であろうが、かなり大きい。口径18.8cmも復原値であるが、それほど誤差が出るとは考えにくい破片である。受け部の立ち上がりも口径に比例して大きく、大型の(高)杯と考えておきたい。短脚高杯の脚部が3点(30～32)出土した。脚端部の口径は、いずれも復原値であるが、7.8cm・8.6cm・8.6cmを測る。土師器には、口径10cmの小型の甕(33)と台付き鉢(34・35)、及び高杯の脚部片(36)がある。鉢も高杯も粗雑な作りで、3号墳の出土例と共通している。

6号墳からは、おそらく同型式と思われる2点の無蓋高杯片(第178図37・38)が出土している。37の口径は、13.4cmを測る。

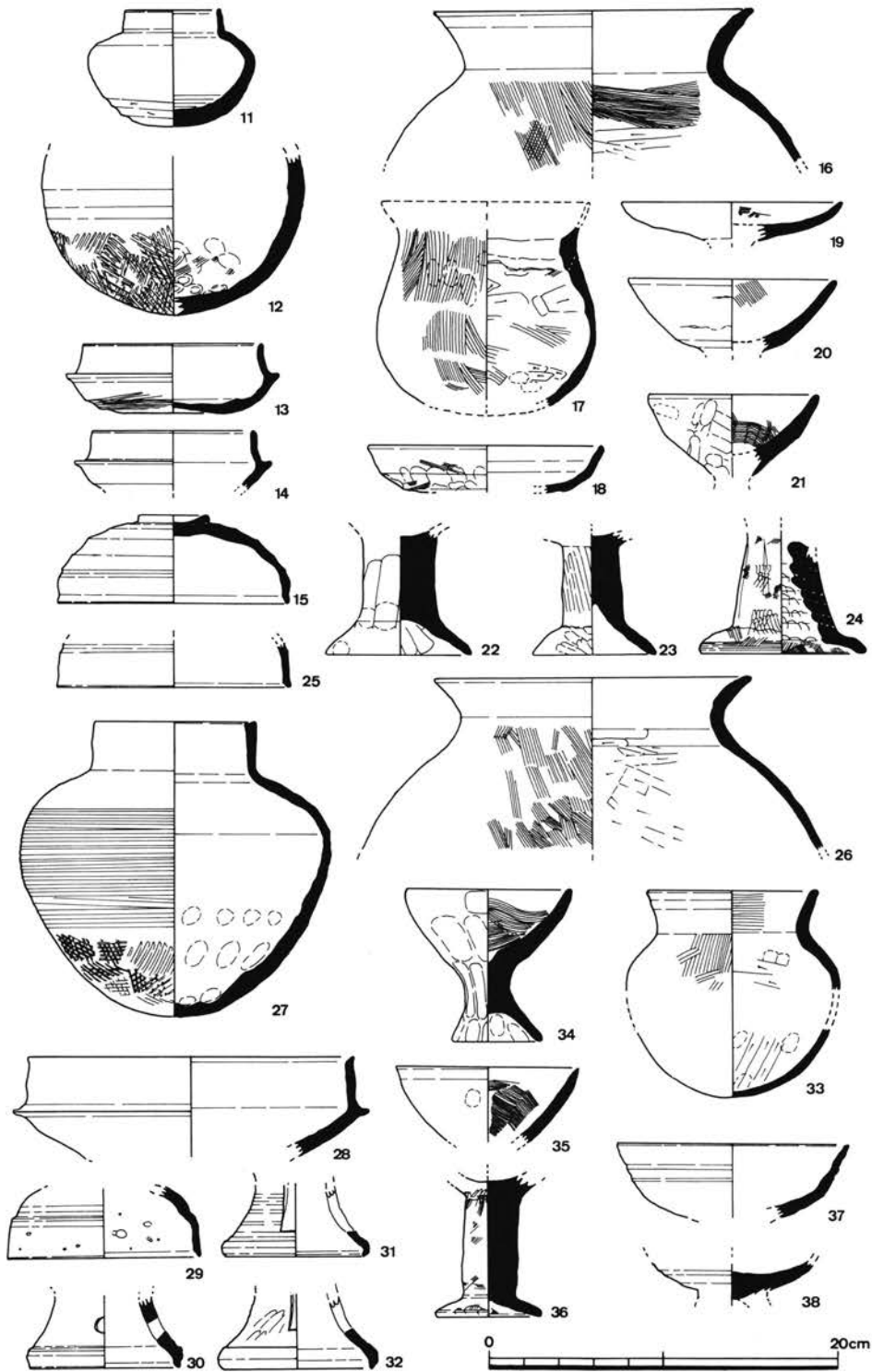
#### (4)土製模造品(図版第64)

野崎3号墳の北西に位置する陸橋6の両側の周溝内から土製模造品が4点出土している。ミニチュア土器と合わせ、この項で報告する。

鏡形土製品(第179図39)は、完形品で、直径6.3～6.6cmのわずかに楕円形を呈し、厚さ最大1.0cm・鈕の高さ1.1cmを測る。手づくねで作られ、鈕部分は貼り付けによっており、径5mmの孔を貫通させている。

40は、ヘラ状の工具で格子様の一部が描かれた平たい土製品の破片である。円盤状を呈していたようであるが、定かではない。

獣形土製品(41)は、長さ7.3cmを測る手づくねの製品である。脚に見える突起が6か所にあり、実測図の左側の4つが貼り付けであるのに対し、右の2つ(1か所は欠損)をひねり出しているところを見ると、前者が4本の脚を表すのであろう。尾が表されていないことになるが、右側を頭部とみるとしても、上述の下方両側のひねり出しの突起と上方にや



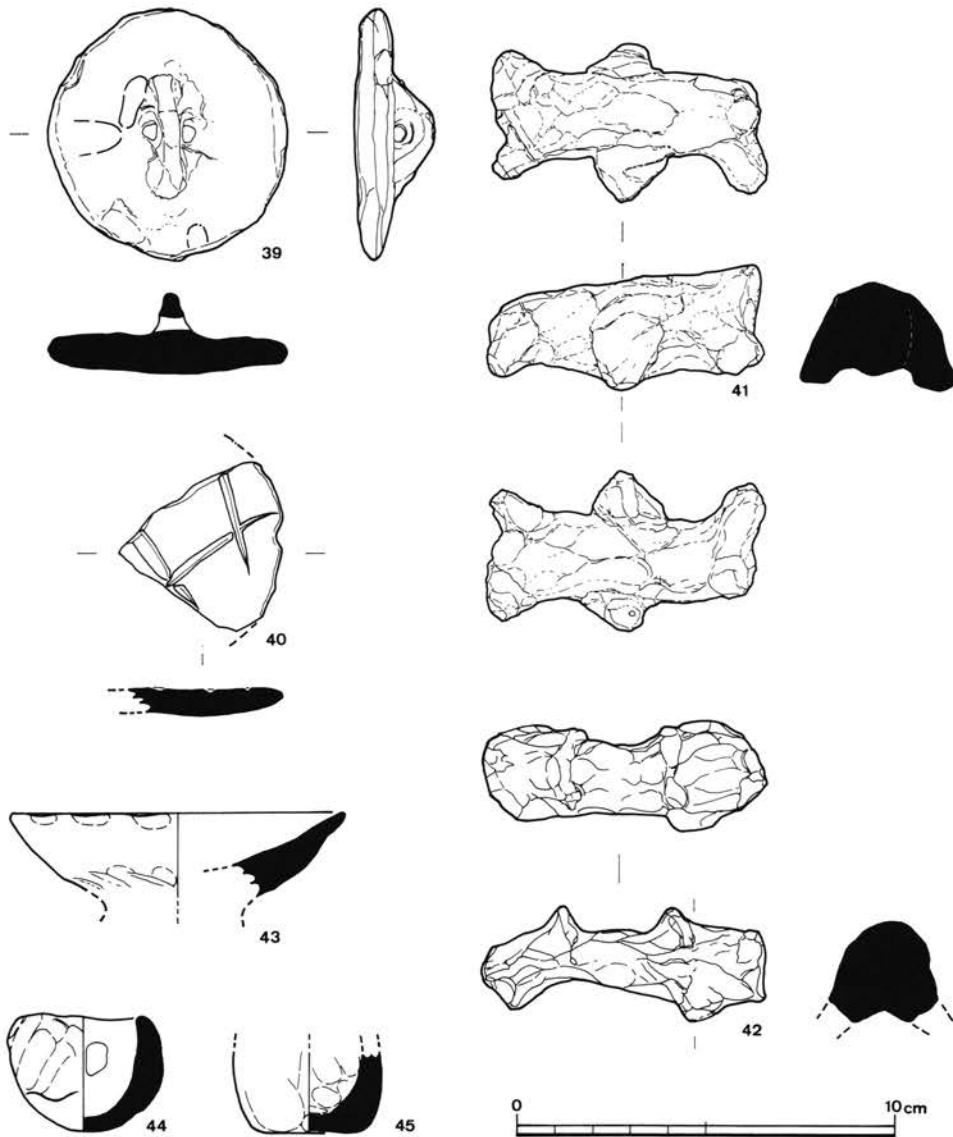
第178図 野崎古墳群出土土器実測図



やひねり出されたいまひとつの突起がそれぞれ何を表しているのか、判然としない。したがって、この動物がなにであるか明言できない。牙を強調した猪とも考えられるが、図版第64上段の写真のような角度から見れば、首を傾げた犬かもしれない。

馬形土製品(42)は、長さ7.5cmを測る。頭・四脚・尾のいずれも欠損しているが、背部に鞍と思われる部分が出来てあるので馬と判断した。

43~45は、手づくねのミニチュア土器である。45は2号墳の周溝からの出土であるが、他は上記の3号墳の同地点から出土した。44は完形品で口径3.0cm・器高3.1cmを測る。43



第179図 野崎古墳群出土土製模造品実測図

は径8.8cmで、土製模造品としてはやや大きいようであるが、全体に雑な作りの3号墳の土師器高杯類の中で一際不細工であるので、この項で報告した。

#### (5)鉄鏃(図版第65-(2))

野崎4号墳に残された主体部の底部から出土した鉄鏃(第180図46~48)は、いずれも筈被広鋒三角形式であるが、46の片丸造りに対して、47と48は両丸造りという違いがある。46の長さは先端が2mmほど欠損するが、復原長は10.6cmであろう。

### 6. 遺構の検討

#### (1)周溝

野崎の6基の古墳は、いずれも周溝を設けている。検出状況からいえば、逆に周溝があったからこそ、完全な削平から免れたわけである。このような文字

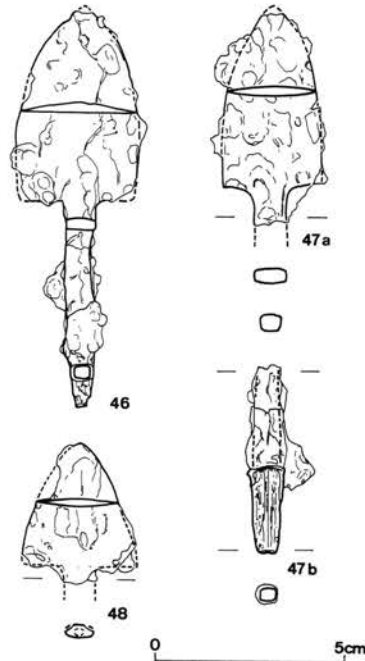
通り「古墳跡」ともいべき検出状況は、全国的には枚挙にいとまがないが、綾部市内でも野崎古墳群の調査後、<sup>(注66)</sup>三宅・<sup>(注67)</sup>福垣の両古墳群や<sup>(注68)</sup>里遺跡で類例が加わった。

古墳が周溝ないし周濠を備える例は、この地域では5世紀前半に段築・葺石・埴輪列・周濠を具備して突如出現する菖蒲塚・聖塚の二大方墳に始まるように見えていた。しかし、近年発掘調査された青野西遺跡の庄内式併行期後半を上限とするS X 49を古墳時代の所産、すなわち前方後方「墳」とするならば、<sup>(注69)</sup>弥生時代の方形周溝墓の伝統を引き継ぎ、かつ古墳時代への橋渡しという位置付けをこの古墳に与えてもよいであろう。

上記の二大方墳の後、5世紀中頃以降に増えるこの地域の前方後円墳には、調査例がほ

付表10 野崎古墳群出土遺物一覧表

古 墳	種 類	主 体 部	周 濠 (10・27は溝1出土)				
			埴 輪	須 恵 器	土 師 器	手 捏 土 器	土 製 模 造 品
1 号 墳	円 墳	(削 平)	円筒1~8	11			
2 号 墳	円 墳 か	(削 平)	家形 9	12		45	
3 号 墳	円 墳	(削 平)		13~15	16~24	43・44	39~42
4 号 墳	円 墳 か	鉄鏃46~48	家形 10	25・27	26		
5 号 墳	前方後円墳	(削 平)		28~32	33~36		
6 号 墳	円 墳 か	(調査地外)		37・38			



第180図 野崎4号墳出土鉄鏃実測図

とどなく、即断はできないが、現状では、周濠は前方後円墳ではなく、小型の方墳の中坂1～4号墳(注70)や、小円墳に溝を半周前後掘った高谷古墳群(注71)、福垣北古墳群、また福知山市の高田山古墳群等(注72)に受け継がれ、前方後円墳を含む6基に周溝を設けた野崎古墳群やほぼ同時期の三宅古墳群(注73)に至る。その後、後期中葉から後半にかけての栗ヶ丘古墳群(注73)に引き継がれている。5世紀後半以降、調査された周溝の例がほとんど小型の円墳に限られるという傾向がみて取れるが、これは調査の偏りかもしれない。

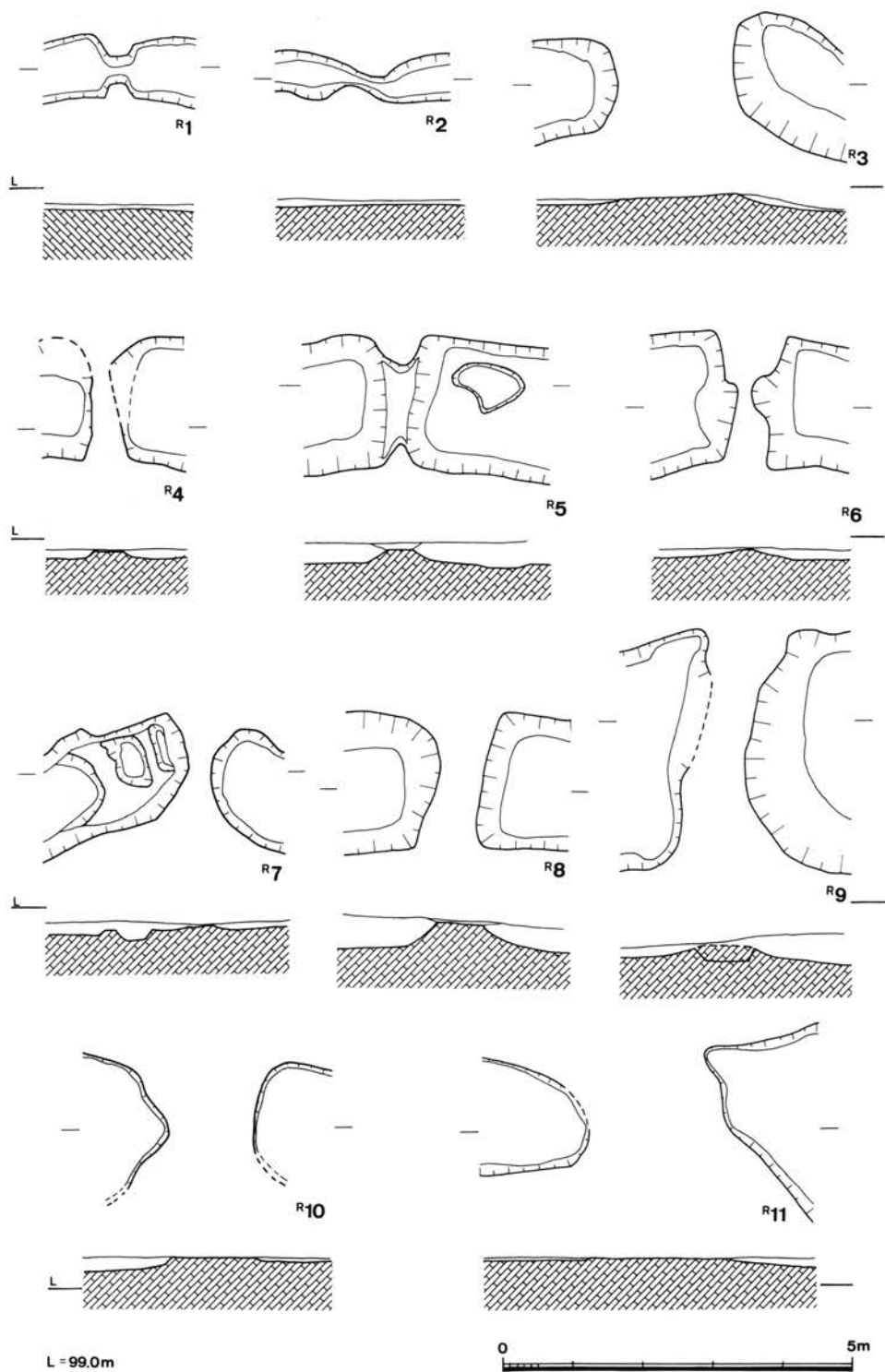
## (2)陸橋

円墳の周溝を掘り残して陸橋を数か所に設けるといふこの古墳群の顕著な特徴に関しては、最近調査された福知山市の高田山4号墳と丹波町の塩谷5号墳(注74)以外に、京都府内にはほとんど類例がない。しかし、全国的にみれば、地域的な偏りはあるもののかなりの数の古墳に陸橋が検出されているようで、白井久美子氏が作成された「ブリッジ付き円墳」の地名表には、福島県から熊本県まで201例が挙げられている。例は古墳時代全期にわたっているが、「前期では、まとまって検出された例がなく、群在した調査例は、5世紀後半以降のものであり」、横穴式石室導入以後は、陸橋の性格もやや変質するよう見えるので、ここでは、野崎古墳群との関連に絞って、氏の時期区分のⅡ期、すなわち、「5世紀後半代から横穴式石室採用までの、盛花期(地域により異なるが、6世紀後葉を下限とする)」に限定して、氏の成果に拠りつつ、野崎古墳群例を検討する(なお、氏の「ブリッジ」を「陸橋」と呼び換える非礼をお詫びしたい)。

白井氏の集成されたⅡ期の陸橋付き円墳は、1都14県の43古墳群で検出された75基である。関東地方が圧倒的に多く、全国の3分の2に相当する50基を数え、埼玉県20基・千葉県11基・群馬県6基が特に目立つ。ついで、九州地方の17基であるが、内13基が熊本県の例である。他の地方については散在的で、1県あたり1～4基にすぎない。

陸橋を持つ円墳は、一貫して、小規模な古墳が圧倒的に多く、Ⅱ期では径10～20mのものが全体の6割を占める。野崎では4号墳がやや小さい(径7.5m)が、ほぼ上記の10m台に収まる。

陸橋の形態について、白井氏は、陸橋の数と形によって6つの類型に分類されている。野崎古墳群では5基に11か所の陸橋を検出したが、1号墳以外は周溝の全容が不明で、削平されていたり、調査範囲外に広がっていたりするので、陸橋の数(1古墳に1か所か2か所)を分類の要素のひとつにしている白井氏の分類には当てはめにくい。また、もうひとつの要素の陸橋の形が直線的か曲線的かという点についても、野崎には折衷的なものがある。ここでは、白井氏の分類を離れ、野崎古墳群の11か所の陸橋そのものを、形態によって以下のように分類してみる(第181図参照)。



第181図 野崎古墳群陸橋集成

1号墳(R1・2) 3号墳(R3~6) 4号墳(R7) 5号墳(R8~10) 6号墳(R11)

- a タイプ：陸橋の両側が方形に掘り残される直線的なもの(陸橋 5)
- b タイプ：陸橋の両側が丸く掘り残される曲線的なもの(陸橋 3・7・11)
- c タイプ：陸橋の片方が直線的、もう一方が曲線的なもの(陸橋 4・8・9・10)
- d タイプ：陸橋の中央が狭くなる砂時計形(陸橋 6)
- e タイプ：陸橋の中央が途切れ、向かい合う半島状の半陸橋(陸橋 1・2)

これを古墳別にみた場合、1号墳がeタイプに、5号墳がcタイプに限られるのに対して、3号墳の4か所の陸橋がa～dの各タイプに分かれ、統一がとれていないのは、いかにも奇異である。また、5号墳の場合、周溝側からの視点からみると、陸橋8・9間の周溝の端部が曲線的で、陸橋9・10間の周溝が直線的であるともみられることから、陸橋の形態はむしろ周溝の形態から決定されているともいえる。とすれば、古墳の西側の失われた部分についても、陸橋8と10の間にもう1か所陸橋があった可能性が高い。この場合、異なるふたつ(直線組と曲線組)以上のグループがそれぞれ周溝の4部分を分け持ったとも考えられる。

野崎古墳群の例が白井氏の分類にはまり切らないのは、氏の分類の対象になった古墳がいずれも陸橋が1か所か2か所に限られているからである。陸橋をもつ円墳の中で、野崎古墳群を特異例にしているのは、4か所の陸橋をもつ円墳(3号墳)と少なくとも3か所に陸橋をもつ前方後円墳(5号墳)の存在である。

3か所以上の陸橋をもつ円墳ないし前方後円墳は、白井氏の地名表になく、また本文にも触れられていない。しかし、氏の地名表番号19～23の埼玉2号墳・4号墳・6号墳・7号墳などには陸橋が3か所以上あったようにも思われる。<sup>(註76)</sup>管見によれば、野崎古墳群以外にこのような円墳を含む古墳群が2例、いずれも最近調査されている。一つは富山県小矢部市の道林寺遺跡で、3号墳(直径18.8m)に3か所の陸橋がある。他に4号墳(直径15.2m)に1か所、2号墳(18.8m)に少なくとも2か所あり、2号墳の東側陸橋が野崎例の陸橋1に似た半陸橋状である点は興味深い。「周溝の中から出土した須恵器は5世紀の終わりころから、6世紀のはじめのころのもの」とされ、野崎古墳群とほぼ同時期かやや古い。いまひとつは、山梨県東八代郡中道町の東山南1・2号墳である。<sup>(註78)</sup>1号墳(直径16m前後)には3か所、2号墳(19m前後)には5か所の陸橋を設けている。周溝から出土した須恵器は、TK216～208型式に属するものとされ、野崎例よりかなり古い。古墳の規模としては、野崎3号墳が直径15～16mであるから、いずれもほぼ同様の大きさである。

このように、陸橋を3か所以上もつ円墳は、周溝が全周調査されなかったり、削平されていたり、あるいは、筆者が見落とした調査例の中にもまだ存在すると思われ、また今後の調査において増えていくであろう。

さて、白井久美子氏は、全国各地の例を検討した後、陸橋の機能と性格について、「単なる通路として存在しただけではなく、埴輪、土器類を用いた葬送儀礼に係る行為の場であると考えが、造り出しと明確に異なる点は、それ自体が独立した機能をもつ施設ではなく、埴丘の内外に開放された「祭祀の道」として意味づけられる点にあるといえよう」と結論している。筆者は、野崎古墳群の遺構・遺物の検討からは、この結論に賛成するにも反論するにも、それほどの考察を加えられないことを遺憾とするが、野崎3号墳の陸橋6の両側から土器とともに土製模造品が出土していることから、ここで何らかの祭祀行為が行われたことは、推察できる。しかし、土製模造品が陸橋をもつ古墳から出土した例を他に知らない。

### (3)埴輪の樹立

野崎古墳群の6基のうち、円筒埴輪列を埴丘にめぐらせていたのは、直径10mの小円墳の1号墳である。先に報告したように、陸橋1と陸橋2の間の東側3分の1から埴輪片は全く出土せず、おそらく埴丘東側を除く3分の2に裾部に1m強の間隔を置いて樹立されていたらしい。この1号墳は、群中最も新しい古墳で6世紀の中頃に近い頃であろうと思われるが、周辺のやや大きい2基の前方後円墳のうち、500年前後と推定される高槻茶白山古墳に埴輪が確認されていないのに対し、6世紀第2四半期頃とされている上杉1号墳からは人物埴輪を含む埴輪の出土が知られていることと関連するのであろう。つまり、北丹波地域で最初に埴輪の樹立が見られた菖蒲塚・聖塚両古墳と同じ八田川流域にありながら、その上流域では、埴輪の使用が遅れ、現在のところ、野崎1号墳と上杉1号墳は、埴輪を樹立した最初で最後の古墳といわざるを得ない。また、八田川に沿う現在の国道27号線をさらに北に行くと、八田川と伊佐津川の分水嶺を越えて、舞鶴市に至る。この地域には現在までに、埴輪の出土地が知られず、また前方後円墳も確認されていない。この地域の古墳時代が不振であることも、その南から(陸から)の入り口の一つにあたる八田川上流域を理解するために考慮しておくべきであろう。

### (4)家形埴輪の設置

野崎古墳群の2号墳と4号墳には奇妙に共通する点が多い。埴丘規模は直径9mと8mで、ともに群中最小である。ともに円筒埴輪は一片すら出土していないが、各々1棟の家形埴輪を有する。出土遺物はほとんどないが、ともに1点ずつ須恵器の壺形土器が完形ないし大きな破片として出土した。壺の形態はやや異なるが、底部外面のタタキ目や内面の指押さえなど共通しており、ほぼ同時期の土器であろう。

円筒埴輪がなく、形象埴輪のみが出土した古墳としては、京都府長岡京市の小型(一辺7m)の方墳、宇津久志2号墳(注79)から切妻造りの家形埴輪が出土しているが、全国的にもあま

り例がないと思われる。

家形埴輪の本来の位置については推測の域を出ないが、もし墳頂に置かれていたとすれば、小さな古墳であり、相当目立ったことであろう。共伴した須恵器の壺の存在から、何らかの祭祀的行為が行われたかとも考えられるが、この家と壺に呪的意味が込められていたのかもしれない。あえて推論を加えるならば、まず、家形埴輪は、形象埴輪の中でも最も古く出現し、かつ(少なくとも近畿地方では)最も出土例が多い。とすれば、形象埴輪のうち、最も本質的な意味を持っていたのではないであろうか。そして、その意味するところは、亡き首長の御魂屋、あるいは首長その人の表現であったかもしれない。人とその住まいを同一視することは、古今東西普遍的な人間の習性であろう。一方、円筒埴輪は器台、朝顔形埴輪は器台付きの壺にその原型がたどれること、また円筒埴輪のかわりに壺形埴輪を用いる古墳もあることは周知のことであるが、いずれも広義の供物たる食料の容器を表現したものであろう。したがって、古墳上の埴輪が表現するものの本質を突き詰めると、被葬者と食料となるのである。はなはだ荒っぽい推論ではあるが、野崎2・4号墳の「家と壺」のセットを「被葬者と食料」を表現したものと考えたい。つまり、壺形土器は円筒埴輪に相当するものとみるわけである。

## 7. 遺物の検討

### (1)円筒埴輪

野崎1号墳の円筒埴輪は、川西編年<sup>(注80)</sup>のV期に相当する。しかし、後期の円筒埴輪としてもかなり小さく、おそらく埴輪では最小の部類に入るであろう。また、タガが2本であれ3本であれ、区別なく同様の接着法を用いている点は、この野崎の円筒埴輪の特徴と見られよう。現在のところ、この手法については類例を確認していない。

なお、何鹿郡(現綾部市)で埴輪が出土した古墳数は、野崎古墳群の調査以降の例も合わせると、現在15基である。丹後・丹波では、竹野郡:13基・丹波郡(中郡):3基・与謝郡:15基+2遺跡・天田郡:7基・船井郡:8基+5遺跡(含埴輪窯跡)・桑田郡14基が知られているので、何鹿郡は、丹後の与謝郡とともに最も埴輪の多い地域といえよう<sup>(注81)</sup>。

### (2)寄棟造り家形埴輪

中丹地方(北丹波)の家形埴輪は、これまでに中期後半の中坂1号墳(切妻造りと入母屋造り)、同2号墳(入母屋造り)、後期の稲葉山10号墳等の福知山市の例<sup>(注82)</sup>が知られていたが、今回の野崎例は、綾部市では初めての出土例となった。その後、私市円山古墳で数棟分の破片が出土している。

寄棟造りの家形埴輪は、全体の形がわかるものが全国でおよそ40例以上出土していると

思われるが、野崎4号墳例と同型式といえるものはあまりない。プロポーションは関東の高萩式に近く、横断面が隅丸方形を呈する点では同じく関東の美土里式<sup>(N183)</sup>に似ている。また、棟上を透かし、その上に堅魚木をわたす例は、千葉県<sup>(I184)</sup>の殿部田1号墳や殿塚古墳<sup>(I185)</sup>等にあり、特に堅魚木の形態は、これらに酷似する。このように一見、関東地方の埴輪という印象を受ける野崎例であるが、全国の出土例の系譜の中に位置付けるために、試案として30数例の全体がほぼ明らかな寄棟造りの家形埴輪を分類してみた。現在たどりついた方法のひとつは、屋根部と屋台部のそれぞれのプロポーションの比を高さ÷幅×100の指数で表し、グラフ化するという単純な方法である。その結果、6つのグループに分かれ、それぞれが外観と一致し、またある程度は時期差も示すようである。なお、この方法は、寄棟造りに最も有効で、入母屋造りにもある程度使えるが、切妻造りには適さないようである。

#### A<sub>1</sub> 宮山型(屋根比:45前後、屋台比:40~60)

奈良県宮山古墳(室大墓)<sup>(I186)</sup>例に代表され、同県鳥見山<sup>(I187)</sup>、福井県西塚古墳<sup>(I188)</sup>、京都府庵寺山古墳<sup>(I189)</sup>等に類例がある。いずれも中期に属する。どっしりとした安定感があり、造りも最もいいのである。

A<sub>2</sub>型として、群馬県赤堀茶臼山古墳<sup>(I190)</sup>の高床倉庫とされる例があり、これは屋台比がやや大きい(80)。ちなみに、岡山県女男岩遺跡の弥生時代後期の器台付き家形土器<sup>(I191)</sup>の家部分もA型の寄棟造りである。

#### B<sub>1</sub> 蕃上山型(屋根比:60~70、屋台比:75~105)

大阪府蕃上山古墳例<sup>(I192)</sup>のほか、鳥根県平所遺跡<sup>(I193)</sup>、京都府青山1号墳<sup>(I194)</sup>、奈良県勢野茶臼山古墳<sup>(I195)</sup>に例がある。A型に比してやや屋根・屋台とも高くなっているが、まだ家としての均衡を失っていない。中期末から後期初頭に集中する。

#### B<sub>2</sub> 長瀬型(屋根比:70前後、屋台比:70前後)

#### B<sub>3</sub> 経の塚型(屋根比:56、屋台比:82)

これらは、鳥取県長瀬高浜遺跡<sup>(I196)</sup>と宮城県経の塚古墳<sup>(I197)</sup>の例であり、網代・押縁や柱などを立体的な造形と線刻で表現している。いずれも中期の地域色であろう。

#### C<sub>1</sub> 高萩型(屋根比:90~120、屋台比:80~110)

後藤守一博士のいわゆる「高萩型」<sup>(I198)</sup>で、屋台もさりながら、屋根部の高さを特に強調している。千葉県殿部田1号墳例もこれに含まれる。外観的な特徴として屋台部の柱以外に節状隆起帯を3~5本めぐらせた独特のものである。

後藤博士によって、「家」(本稿のA型・B型)と「高家」(本稿のC型・D型)の中間様式とされた群馬県の2例(「埴輪家聚成」No.102と89 [各々、図では100と86])は、C<sub>2</sub>型と細分しておくが、屋根の高さがC<sub>1</sub>型ほどには強調されていない。千葉県殿塚古墳例は、



上記の殿部田1号墳例に近いが、装飾的部分がほとんどなく、ここではC<sub>3</sub>型としておく。

C型は、いずれも関東地方の後期に属する。

#### D 石見型(屋根比:100~140、屋台比:105~145)

屋根・屋台ともに高さを強調して行き着いた究極の高家である。奈良県石見遺跡例<sup>(注99)</sup>、三重県木ノ下古墳<sup>(注100)</sup>、同県鈴鹿市個人蔵例<sup>(注101)</sup>など、いずれも近畿地方の後期の高家と言えよう。東国の高萩(C)式に比べて、外面にはヘラによる簡単な線刻程度しか表現しないことを特徴とする。

#### E 美土里型(屋根比:90前後、屋台比:150~180)

屋根は高家としてはそれほど高くはないが、鐙状の突帯を持つのを特徴とし、装飾の少ない屋台部は極端に高く、かつ横断面は隅丸方形を呈する。後藤博士の「美土里式高家」<sup>(注102)</sup>である。

#### F 白石稲荷山型

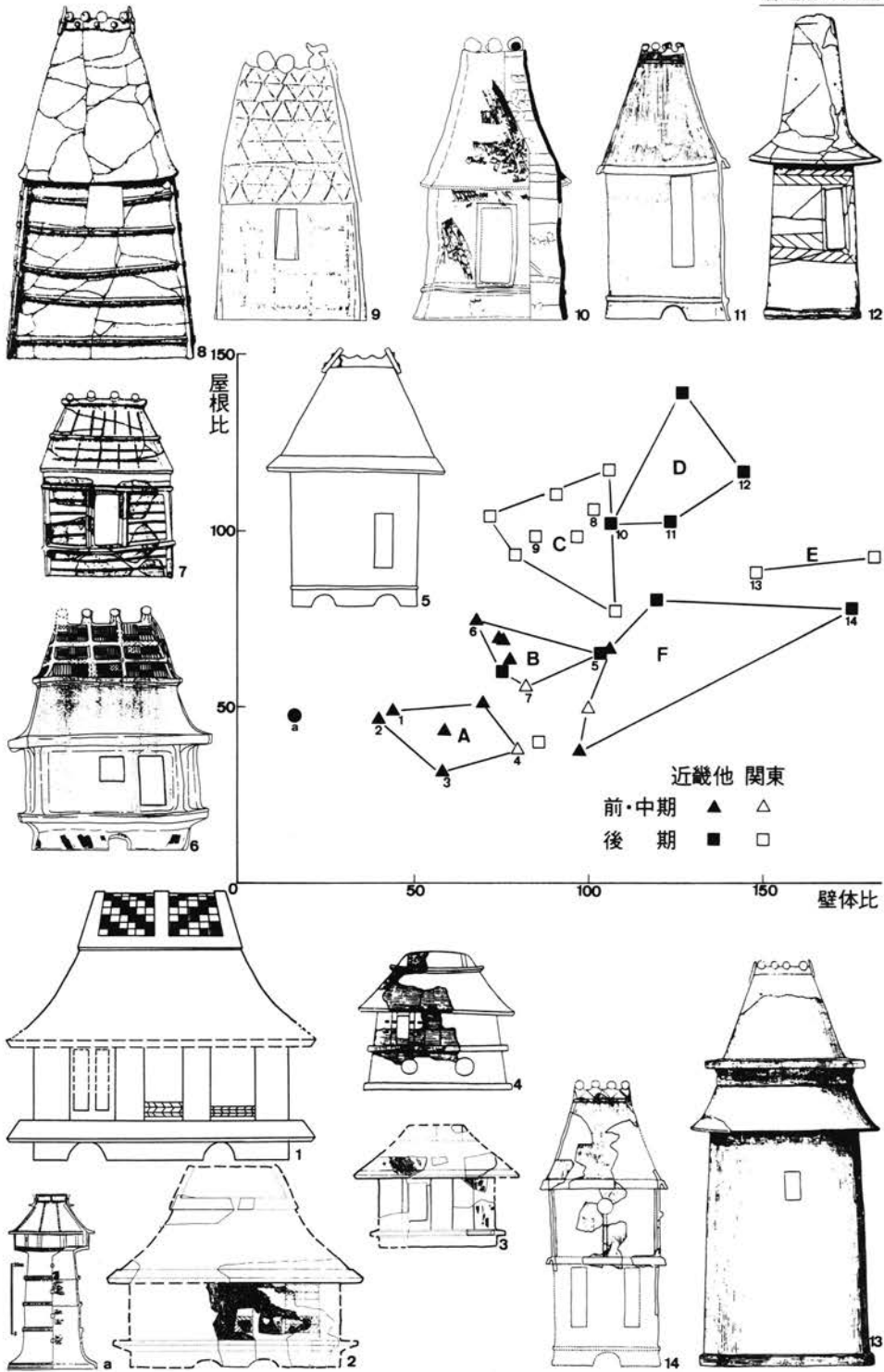
高床式建物の床下が高く表され、二階家と見まちがう形の一括するが、床下の柱だけの吹きさらし部分はずして考えると、上記のA~Eの各型式に含めることもできる。群馬県白石稲荷山古墳例<sup>(注103)</sup>を代表とし、他に大阪府一ヶ塚古墳<sup>(注104)</sup>、三重県木ノ下古墳<sup>(注105)</sup>、同県上出遺跡等<sup>(注106)</sup>に例がある。

以上の各型式をやや図式的に編年すれば、近畿地方では、A<sub>1</sub>型(中期)→B<sub>1</sub>型(中期末)と変化し、後期になると高さを異様に強調したD型が現れ、これが前代のB<sub>1</sub>型と共存するという変遷が追える。一方、関東地方では中期のB<sub>3</sub>型からC<sub>2</sub>型を経て、東国の後期に特徴的なC<sub>1</sub>型とE型が出現するのである。

このように見てくれば、一見東国風にみえた野崎4号墳の家形埴輪も、柱や横棧を立体的に表さず、装飾的要素を省いた造形は、やはり奈良県や三重県の諸例に近く、近畿地方の寄棟造り家形埴輪の系譜上の最後に現れる石見(D)型の後期初頭例として位置付けるのが妥当であろう。

### (3)土器

野崎古墳群の主として周溝から出土した土師器・須恵器で、時期を限定できる資料は少ないが、およそ5世紀末から6世紀中頃に位置づけられる。1号墳の小型短頸壺(第178図11)は、須恵器第2型式前半(TK10か)のものであろう。円筒埴輪の共伴遺物として矛盾はない。4号墳の短頸壺(27)は、プロポーションは愛知県多治見市の虎溪山1号墳の6世紀の直口壺<sup>(注107)</sup>に似ているが、類例が少なく、編年的位置づけはむずかしい。とりあえず、口縁端部の広い面に溝をもつ点や底部のタタキ目等をやや古い要素と考え、京都府城陽市赤塚古墳<sup>(注108)</sup>の直口壺を参考に、須恵器第1型式の末頃と見ておきたい。5号墳周溝の須恵器は、



第182図 寄棟造家形埴輪の分類(埴輪実測図 縮尺1/20)

長瀬高浜(6) 野崎4号墳(10) 庵寺山(2・3) 宮山(1) 勢野茶白山(5) 石見(12)  
 木ノ下(11・14) 殿部田1号墳(9) 赤堀茶白山(4) 美土里(13) 高萩(8) 経の塚(7)

杯蓋(29)、短脚有蓋高杯(30~32)など古相を呈しており、第1型式の末期近くに属するものと考えておく。3号墳周溝の須恵器(13~15)は5号墳よりも新しく、MT15前後の時期を想定している。

#### (4)土製模造鏡

土製模造品と呼ばれる遺物は、石製模造品の盛行の後をうけて古墳時代後期を中心にほぼ全国的に見られる祭祀遺物である。遺跡は集落や祭祀関係が多く、野崎3号墳のように古墳からこの種の遺物が出土したのは11例(3.1%)にすぎない。模造品の種類は、手づくね土器(44%)と丸玉・勾玉・管玉等の玉類(47%)が圧倒的に多く、鏡はそれに次ぐとはいえ3%にすぎない。<sup>(注109)</sup>その他の人形・馬・犬・猪・農工具・織機・什器・舟等の模造品が出土した遺跡はかなり限られる。野崎の鏡・犬(?)・馬・手づくね土器というセットが本来のものかは不明であるが、資料が膨大にすぎる土器形と、逆に例が寡少な動物形は置き、ここでは特に土製鏡についてまとめておきたい。なお、土製円盤も鏡と見られているが、本稿では、少なくとも鈕を表現したものに限ることとする。

名称—円盤の片面中央に作ったつまみ状の突起に、0~2個の孔を円盤面と平行に貫通させた形態の手づくねの土製品は、土製の模造鏡、土製模造鏡、土製鏡、土製の鏡、鏡形土製品などと呼ばれている。青銅鏡を模した形態であるとしても、ミニチュア・サイズであり、かつ鏡本来の光を反射し、姿を映す機能は全くないので、「模造」の語を入れ、「土製模造鏡」と呼んでおきたい。

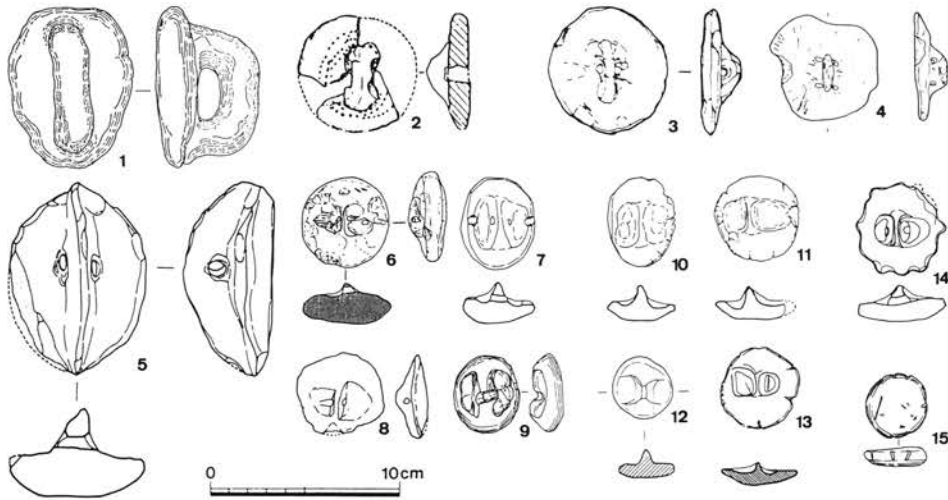
形態—上野精志氏は、土製模造鏡5点が出土した福岡県大又遺跡の報告書の中で、土製鏡を鈕の形態によって3種類に分類している。<sup>(注110)</sup>また、亀井正道氏も鈕の形状を、円形半環状山形の3種に分けている。<sup>(注111)</sup>両氏の分類を踏まえ、ここでは以下のように分類を試みておく(第183図)。ただし、ほとんどの例が報告書等の実測図や写真に拠ったもので、製作上の技法など曖昧なものも多いことを断っておきたい。

**A類** アーチ形の粘土棒の両端を円盤に貼り付け鈕とした馬連状のもの:亀井氏の「半環状の鈕」(静岡県坂上・埼玉県今泉)<sup>(注112)(注113)</sup>

**B類** 鈕となる粘土を貼り付けた後、原則として1孔を貫通させるもの(京都府野崎・三宅・静岡県坂上・静岡県日詰・山梨県坂井南)<sup>(注114)(注115)(注116)(注117)</sup>であるが、愛媛県宮内大畑例の鈕には2孔が穿たれている。<sup>(注118)</sup>

**C類** 鈕が大きく、円盤の両端に達する鍋蓋状のもの:上野氏の皿類(福岡県干潟)<sup>(注119)</sup>

**D類** 鈕部分の粘土を円盤面からつまみ出し(亀井氏の「山形の鈕」)、孔を貫通させるもの(佐賀県久蘇・石木・下中杖・福岡県下山門・長野A・鳥取県青木・広島県ザブ・三重県草山・静岡県坂上)<sup>(注120)(注121)(注122)(注123)(注124)(注125)(注126)(注127)(注128)</sup>



第183図 土製模造鏡の分類

- A類(1・2)    B類(3・4)    C類(5)    D類(6~9)    E類(10~13)    F類(14・15)  
 佐賀県石木(7・10・11)    福岡県干潟(5)    剣塚(13)    大又(14)    下山門(9・15)  
 小原(12)    長野A(8)    愛媛県宮内大畑(4)    京都府野崎(3)    三重県草山(6)  
 静岡県坂上(1・2)

**E類** 鈕部分の粘土をつまみ出しただけで、孔を設けないもの(佐賀県石木・福岡県剣塚<sup>(注129)</sup>2号墳・大曲り<sup>(注130)</sup>・大又<sup>(注131)</sup>・小原<sup>(注132)</sup>・静岡県日詰)

**F類** 円盤の縁に突起を設けるか、あるいは縁を波状に仕上げ、鈴鏡を表現したもの(福岡県大又<sup>(注133)</sup>・静岡県日詰<sup>(注134)</sup>・千葉県つとるば<sup>(注135)</sup>・栃木県長井<sup>(注136)</sup>)。また、鈕はないが、円盤の周縁に刻みを入れた福岡県下山門例(第183図15)もこの類いか。

以上の6種類の分類は、形態差と製作技法の差を混用し、同一の基準に拠らないというきらいはあるが、技法の差が形態差に現れている場合が多く、とりあえず試案として提出したい。亀井氏も指摘しているように、D類とE類は、鈕をつまみ出した痕跡の指頭痕がそのまま深く残されたもので、特に北部九州の例はほとんどこのタイプで、他の地方には少ないという地方色<sup>(注138)</sup>がある。

野崎3号墳の土製模造鏡は、鈕を貼り付け、孔を穿っている点、その面を調整している点など、全国の出土例から見ても、かなりていねいな作りであるといえよう。

**法量**—土製模造鏡の大きさとその直径(楕円の場合は長径)で表すと、大きく3群に分かれる。3cmから5cm台前半の小型のもの(第183図6~15)、6cm前後から8cmまでの中型のもの(同2~4)、そして、例は少ないが径10cm前後の大型品(同1・5)がある。中型品は、概して中・四国以東に目立ち、九州の諸例には小型品が多いようである。ちなみに、野崎3号墳例は長径6.6cm・短径6.3cmで、同じ綾部市内の三宅遺跡の2例(6.8cmと6.0cm)

と同じく、中型品である。

分布—1985年の3月に刊行された『祭祀関係遺物出土地地名表』<sup>(注139)</sup>に拠ると、鏡とされた土製模造品は、75遺跡から158点以上出土している。南は熊本県、北は北海道に及ぶが、地方によってかなり密度が異なる。遺構の数で見ると80の遺構(包含層を含む)の半数近く(37)が九州の福岡・佐賀・熊本の3県に集中し、次いで、静岡県を中心とする中部(15)、関東(15)の東京・千葉・埼玉の3都県に多い。とりわけ、福岡県では、筑紫野市や朝倉郡夜須町を中心に25遺構から59点以上が出土しており、1県で全国の3分の1を占める。逆に出土地が少ないのは、中国(3)・四国(3)・近畿(4)、それに東北(2)・北海道(1)である。特に、畿内とされる地域での出土例はわずかに1か所(大阪府柏原市鷹ノ巣山)が挙げられているだけである。他に、近畿地方では、兵庫(加東郡)・滋賀・三重の3県に1遺跡ずつ報告されていたが、今回、京都府綾部市の野崎・三宅の両遺跡の例が加わった。畿内では皆無に近いのに対して、畿内周辺では希薄ではあるが、中国・四国や北陸と同程度の分布は見られるということであろう。

出土遺構—赤崎敏男氏によると、土製の鏡・円板類が出土した遺跡の種類をみると集落関連遺跡(住居跡)が4割、祭祀遺跡が3割を占め、その他、川・堰・貝塚などがあるという。<sup>(注140)</sup>土製模造鏡の集落からの出土状況が明確である例は少ないが、福岡県大曲<sup>(注141)</sup>遺跡や小原<sup>(注142)</sup>遺跡、東京都八幡原<sup>(注143)</sup>遺跡などでは、住居跡の竈の周辺床面や焼土中から出土している。福岡県松木遺跡(150街区)の6号竪穴式住居跡では、竈を封束する前に、手づくね土器や土製勾玉などとともに、土製模造鏡を使った祭事が行われたことを明確に示す例が報告されている。<sup>(注144)</sup>また、住居廃棄に伴う祭祀の形跡のある例もあるという。<sup>(注145)</sup>

一方、野崎3号墳に見られるような、古墳に伴う土製模造鏡の出土例は、非常に少ないと言わざるを得ない。福岡県五穀神山遺跡で古墳墳丘から出土した例<sup>(注146)</sup>、同県剣塚第2号墳周辺の1.5m×2mの不整円形竪穴の堆積土中から出土した例<sup>(注147)</sup>、それに、鳥取県青木遺跡B地区の古墳の周溝から出土した例が挙げられる程度である。とりわけ、青木遺跡例は、遺跡の様相や出土状況など野崎の例と共通する点が多く、興味深い。報告書によると、古墳時代中・後期のB地区は円墳群であり、周溝を全周の1/3～1/5程度掘り残したC字形の周溝をもつ古墳が多く、中には陸橋と言えるものもある(BSX02)。また、14基の古墳の内1基(BSX10)は、埴輪を樹立していたらしい。土製模造品が出土したのは、BSX06の周溝北東部で、土製模造鏡のほかに土製勾玉・手づくね土器、及び須恵器杯身が集中していた。<sup>(注148)</sup>報告書の考察編では、「葬送儀礼のものではあろうが実物へのあこがれを示すと感じられる」と述べられている。<sup>(注149)</sup>しかしながら、上述したように土製模造鏡や土製勾玉は古墳からの出土例がほとんどなく、集落(住居跡)や、祭祀専用の遺構に伴う例が圧倒的であるので、

野崎や青木(上述した三宅古墳群も)の例は、むしろ日常生活の場の祭祀が墓地に持ち込まれた数少ない例とすべきであろう。そして、その祭事も古墳での葬送と同時であるとはい切れず、そのしばらく後のまだ周溝が埋まらない時期に行われたことも充分考えられるのである。いずれにしても、土製模造品と古墳での葬送儀礼とは、切り離して考えるべきである。したがって、陸橋に伴う土製模造品も、現状では野崎3号墳が全国で唯一例であるので、この共伴関係は見せかけにすぎないのかもしれない。また、土製模造品は、実物の代用品と言うよりも、土製で充分なのであり、むしろ特定の場所の土で、物をかたどることに意味があったのであろう。<sup>(註150)</sup>

## 8. 遺跡の検討

### (1)野崎古墳群の形成

野崎古墳群は、1基の前方後円墳と5基の円墳からなる古墳群である。各古墳の築造順序について、遺構の検出状況からは、次のことがいえる。

周溝の切り合い関係を見ると、4号墳→3号墳→1号墳と、2号墳→1号墳の新古関係が得られる。また、1号墳は、その築造にあたって3号墳の周溝をかなり侵すと同時に、2号墳の墳丘盛り土を削平して、南西部の整地をしたようすが認められる。これに反して、2～6号墳の5基は、相当密集したこの古墳群においても、周溝のごく一部の切り合いは認められるものの、先行する古墳を充分意識しているらしい。また、円筒埴輪や、1点ながら須恵器も考え合わせると、この1号墳が6基の内、最後に位置づけられよう。

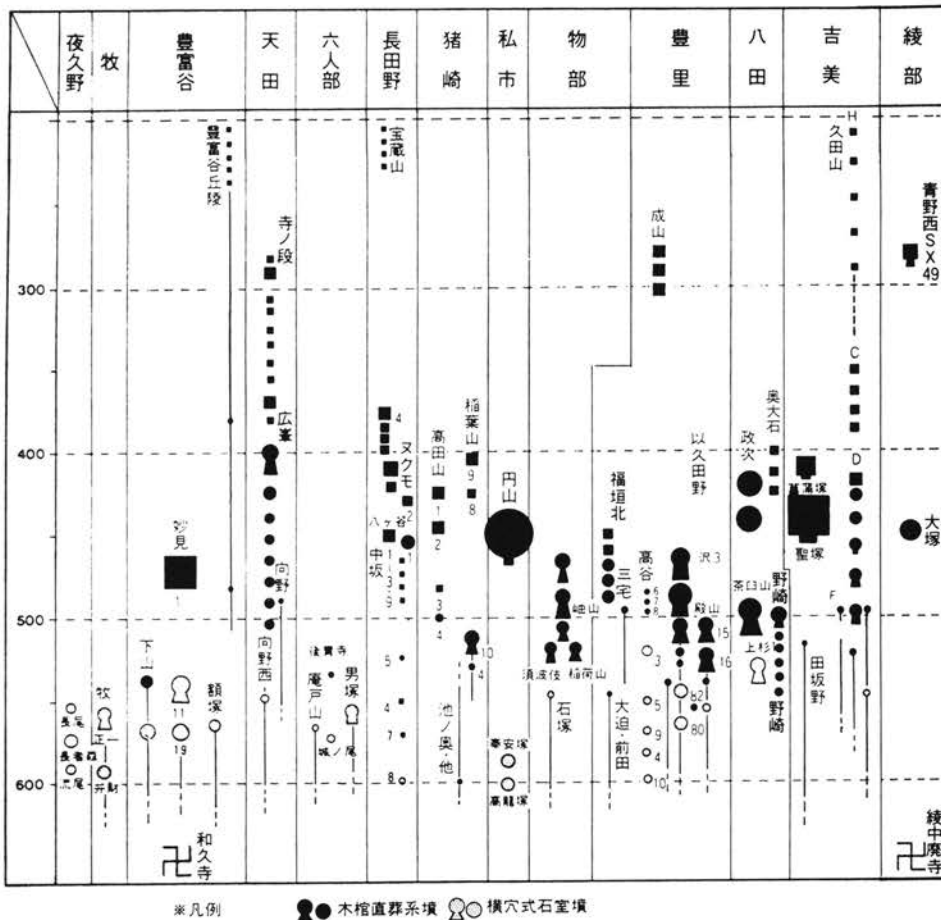
比較的まとまった土器資料が出土した3号墳と5号墳の土器相を比べてみると、5号墳(TK47～)→3号墳(MT15)の順序が得られる。一方、2・4・6号墳の土器はそれぞれ1～2点で位置づけがむずかしいが、あえていうなら2・4号墳の土器は5号墳に、6号墳のは3号墳のそれに近いように思われる。

2号墳と4号墳は、上述したように、墳丘規模(径9mと8m)も、家形埴輪と須恵器壺という特異な出土遺物が共通している。一方、3号墳と6号墳も墳丘規模(径16mと12m)は近い。

5号墳は、全長27mの前方後円墳であり、後円部に限ってみても、径20mと群中最大である。また、出土土器も最古の様相を呈しており、この古墳群の盟主墳と考えられる。おそらく、5世紀末の5号墳の築造を契機として6世紀前半期に群集墳が形成されたのであろう。以上の諸点から、野崎古墳群の築造順序としては、5号墳(前方後円墳)→2・4号墳(家形埴輪と壺を持つ円墳)→3・6号墳(円墳)→1号墳(円筒埴輪列を樹立する円墳)の4段階を考えておきたい。

(2)野崎古墳群の性格と背景

中丹地方の古墳の変遷には、極めて個性的な特徴が見られる。これについては、1975年以来、平良泰久<sup>(注151)</sup>、常盤井智行<sup>(注152)</sup>、中村孝行<sup>(注153)</sup>、小池寛等<sup>(注154)</sup>の各氏が論考や古墳編年表を発表されているが、単純化すると、①3世紀末から5世紀前半にかけての方墳の卓越と、②5世紀中頃における方墳から円墳・前方後円墳への変化である。①の方墳には三つの系統がある。弥生時代後期以来の方形状台墓の系譜を引く多くの小型の方墳がこの地域の主流で、各地に古墳群を形成し、一部5世紀後半にも残るが、ほとんどは5世紀中頃に終わる。その一方、方形周溝墓の系譜を引く前方後方墳も最近発見されている。そして、前二者とは格段の差の規模をもち、段築・葺石・埴輪・周濠を備えた大方墳が5世紀前半の中丹地域に君臨する。②の円墳系の古墳は、ごく少数の先行例はあるが、時期的にも地理的にもこの地域の要の位置にある私市円山古墳(造出し付き円墳)の出現によって決定的になり、以後、この地域で方墳は例外的となる。福垣北やヌクモの古墳群などでは同一の古墳群中で



第184図 北丹波の古墳の変遷(注147-②文献第4図に加筆)

方墳から円墳への変化が見られる<sup>(注155)</sup>。同時に、古墳の墳丘規模から見ると、5世紀前半の方墳聖塚古墳(辺54m)と中頃の私市円山古墳(径71m)を最大として、後半以降は(福知山市域に妙見1号墳(辺43m)という大型方墳が残るが)、比較的小型の前方後円墳(最大が高槻茶白山古墳の長54m)や円墳(野崎古墳群もその一例)が地域の各地に築かれ、その後これらは6世紀中頃には横穴式石室墳に変わっていくのである。

この地域の古墳の変遷は、このように見てくると、スケールはやや小さいながらも、5世紀の中部・西部日本の各地で見られる首長墳の縮小・小型墳の増大という現象と軌を一にしているとみられよう。近藤義郎氏は、「これら...一連の事実は、部族連合における盟主的な存在がその力を失ったことを示すものであろう」と述べ、畿内についても「ひとり大王古墳と目されるものの卓越化が進む<sup>(注156)</sup>」と説いている。中丹地方の場合、古墳の形態が一変する点、ことさら5世紀中頃の画期が目立っているといえよう。

白井久美子氏は、陸橋をもつ小規模な古墳の被葬者層について、「古墳時代を通して基本的には変わらないと思われ、おそらく弥生時代後期以降の低墳丘の墳墓に葬られた人々と同質の基盤をもって存続した被葬者群」とする。そして、熊本県塚原古墳群では、5世紀前半までの陸橋をもつ方墳が後半になると陸橋をもつ円墳に変わる点、この種の古墳が関東(埼玉古墳群周辺)と九州(清原古墳群周辺)に多いこと、その「画期が5世紀後半代という古墳時代社会の大きな画期に対応している」こと、また、同時期の帆立貝式前方後円墳や造り出し付き円墳、及び短甲出土の小円墳に対して、「副葬品の遺物相にも進取の文化を象徴するような飛躍がほとんど見られない」ことなどから、「中央に直結した被葬者層でもなく、また新しく台頭した被葬者層でもない旧来の族長層が再編成されたものとして理解される点にブリッジ付き円墳の特徴が見い出せる<sup>(注157)</sup>」としている。

しかしながら、野崎古墳群について、このような結論をそのままあてはめることには、筆者はやや躊躇せざるを得ない。陸橋のない他の大多数の円墳との差異がそれほど顕著とは思えないからである。また、陸橋をもつ円墳の多くが九州と関東に集中する点についても、この両地方における5世紀の画期は、上記の西日本の各地とは異なり、より複雑で錯綜した様相を呈しているようである<sup>(注158)</sup>。

ただ、白石氏が塚原古墳群や埼玉古墳群などについて指摘しているように、陸橋をもつ古墳群の近くにより優勢な古墳(群)が平行して営まれている点は、注目される。というのは、陸橋を3か所以上もつ古墳として、先に道林寺遺跡と東山南遺跡を挙げたが、いずれもそのような古墳群であるからである。前者には全長50.2mの若宮古墳<sup>(注159)</sup>、後者には「畿内型古墳の伝統を色濃く残す」かんかん塚古墳<sup>(注160)</sup>が同時期に営まれている。野崎古墳群にとって、高槻茶白山古墳や上杉1号墳がそのような存在に相当するのではないであろうか。



野崎古墳群の調査後に、高田山4号墳に陸橋が検出されたように、今後この地域でも類例が増えていくと思われる。こうした個々の例を検証していき、再び全国各地の類例と比較検討していけば、いずれは当地域の古墳時代史に新たな光をあてることも可能になるであらう。

## 9. まとめ

綾部市高槻町(207頁)に所在する野崎古墳群は、縄文時代から古墳時代にかけての散布地野崎遺跡(207頁)が立地する野崎平(のさきだいら)と呼ばれる台地の西辺(207頁)に営まれた5世紀末から6世紀前半にかけて(232・234頁)の古墳群である(237頁)。古墳はいずれも削平を受けていた(225頁)が、周溝(225・226頁)を検出したことによって古墳跡と判明した。前方後円墳(5号墳)1基と円墳5基から成る(212～5頁)。各古墳の周溝には、1～4か所の陸橋(212～5頁)があり、この古墳群の顕著な特徴(226～9頁)となっている。

かなり小規模の古墳群であるにもかかわらず、埴輪が周溝に転落した状態で出土している。1号墳で円筒埴輪群(210・212頁)、2・4号墳で家形埴輪(212・214～5頁)を確認した。円筒埴輪(216～8頁)数点と家形埴輪(218～21頁)1点については、完形に復原でき、貴重な資料となった(230～2頁)。

主体部は、ほとんど削平されてしまっていたが、4号墳でのみ残存したその底部を検出し(214頁)、鉄鎌(225頁)の出土をみた。他の出土遺物は、いずれも周溝からのもので、須恵器・土師器(221～2頁)の他に、この地域では珍しい土製模造品(222～5・234～7頁)がある。

なお、例年になく降雪の多かった悪条件の中、発掘調査に参加された地元の以下の方々にお礼を申し上げたい(順不同・敬称略)。

稲葉逸郎・上羽 章・大槻種三郎・岡安茂一郎・相根三郎・坂本 毅・塩尻 武・新川滋・新川三代三郎・渡辺武雄・渡辺 保・渡辺三千夫・上羽紀代・大槻末子・大槻伸子・大槻フサ枝・岡安年子・相根寿美子・相根八重子・坂本トシ子・新川幸子・新川志津子・高根末野・波多野かずの・波多野君枝・牧かずゑ・松本婦佐子・山上一枝・山室トク・山室よし枝・渡辺かのえ・渡辺君枝・渡辺千代子・渡辺久子・渡辺ふみ代・渡辺美代子・林鈴代・大槻かの・立藤 聡・福田尚弘・牧 克敏・丸岡富江・河野美行(以上作業員)

大和田淳司・永野和史・四方富男・山室明美・塩尻あつ子・山口陽一郎(以上補助員)

家元恵子・伊勢田恵美子・丸岡一實・岩崎恭子・四方純子(以上整理員)

(小山雅人)

### 第3章 ま と め

近畿自動車道敦賀線建設に伴う埋蔵文化財調査は、昭和54年度から京都府教育委員会が実施し、昭和56年度からは京都府教育委員会により設立された当調査研究センターが引き継いで調査を実施している。このうち兵庫県多紀郡丹南町から京都府福知山市に至る延長約41.2km(近舞線7次区間)の埋蔵文化財調査は、昭和60年度に現地調査を終了し、各年度の発掘調査概要や発掘調査報告書(『京都府遺跡調査報告書』第3冊 1984 『京都府遺跡調査報告書』第10冊 1988)を刊行している。

さて近畿自動車道敦賀線8次区間の調査は、福知山市から西舞鶴までの延長約22.7kmの区間を、昭和61年11月から平成2年3月まで真夏の炎天下、真冬の極寒の中、約3年4か月を要し、23遺跡の調査を実施した。遺跡の員数は、集落跡7か所・古墳9か所・古墓経塚2か所・城館跡4か所である。

各年度に調査した遺跡については、第1章第2節にその概要を報告しているが、福知山市から綾部市を带状に横断したこの調査は、弥生時代から中世に至る各時期の貴重な資料をえて、この地域の歴史を知るうえで多大な成果を得ている。特に、全長81mの大円墳である私市円山古墳は、墳形・副葬品から大和政権と密接な関係にある首長墓と推察され、中丹地方と大和との関係を考えるうえできわめて重要な古墳の発見であった。また、畝状堅堀14条を面的に調査し、中世城郭研究に貴重な成果を得た平山城・平山東城跡、総数500基を数える土壙墓群を検出し、古墳時代の大規模な共同墓地と考えられる三宅遺跡、緑釉・灰釉陶器や円面硯・墨書土器等の出土遺物から官衙的色彩の強い遺跡と考えられる小西町田遺跡、鏡背の文様に一對の龍と虎が見返る状態で描かれた盤龍鏡1面が出土したヌクモ古墳群、全国でも40余例しか知られていない蛇行剣(全長70cm)が出土した奥大石古墳群など、その調査成果は多大である。

しかし、近畿自動車道の工事計画が切迫し、十分な整理作業も行わず現地調査を優先して実施したため、各年度の概要報告書が不十分なまま刊行したのも多く、平山城跡・平山東城跡・野崎古墳群・小西町田遺跡・三宅遺跡・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡の8遺跡については、平成2年度以降鋭意整理報告作業を進め、3分冊に分け随時報告書を刊行することとなった。本報告書はその2分冊目にあたる。

本報告書に収録した遺跡は、野崎古墳群・福垣北古墳群・興遺跡・観音寺遺跡の4遺跡であり、要約すると下記のとおりである。

野崎古墳群は、平野部に築かれた5～6世紀の古墳群で、全長約26mの前方後円墳1基・円墳5基からなる。近辺には、茶臼山古墳や上杉1号墳といった全長50m級の前方後円墳が築かれており首長墓クラスの系譜がみられる。野崎1号・5号墳の周溝には比較的遺存状況の良い埴輪が出土し、数少ない中丹地域の埴輪を知る上で貴重な資料となった。

福垣北古墳群は、総数120基を数える以久田野古墳群に北接する11基からなる古墳群で、方墳2基・円墳5基の調査を実施した。各古墳は丘陵の自然地形を最大限利用して墳丘を築いており、主体部はいずれも木棺直葬で、出土遺物から5世紀前半まで遡ることが判明した。今回の調査により、これらの古墳群が以久田野古墳群の一支群と考えられ、以久田野古墳群の範囲が若干北西に広がること、築造時期が5世紀前半から始まることなどが明らかとなった。

興遺跡・観音寺遺跡は、由良川によって形成された沖積地の縁辺部に位置し、自然堤防状の微高地上に立地している。弥生時代中期・鎌倉～室町時代の遺構・遺物を検出し、青野遺跡や青野西遺跡とともに中丹地域の由良川自然堤防上に位置する集落遺跡として貴重な成果を得た。特に興遺跡の弥生時代中期の大溝からは多量の遺物が出土し、由良川中流域の土器編年を知る上で貴重な資料となった。また、簪等が出土した土坑は、付載の脂肪酸分析結果により墓塚であることが判明した。

終わりに、近畿自動車道敦賀線線帯において、綾部市私市円山古墳はきわめて貴重な成果が得られたことから、地元の方々をはじめとして、綾部市・京都府教育委員会、日本道路公団大阪建設局・同福知山工事事務所等の御努力により、オープンカット工法(丘陵部削平)からトンネル工法に設計変更され、現状保存されることになった。今日、平成4年度開園をめざし、綾部市教育委員会により古墳公園として保存整備されている。関係機関の御理解に深く感謝したい。

(水谷壽克)

注1 『福知山市史』第1巻 福知山市 1976

注2 『京都府遺跡地図』第2分冊 [第2版] 京都府教育委員会 1987

注3 鍋田 勇「私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

注4 竹原一彦「ヌクモ古墳」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

注5 平良泰久・末本信策「中坂古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1972)』京都府教育委員会) 1972

- 注6 『福知山市史』第1巻 福知山市 1976
- 注7 梅原末治「西中筋村石剣発見ノ遺蹟」(『京都府遺蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府) 1922  
黒坪一樹「観音寺遺蹟」・本書第3章第2節
- 注8 岡山県南方遺蹟では前期から後期終わりにかけて多数の不定形な土坑群が群集して検出されており、その内1基から屈葬人骨が出土している(弥生時代中期前半)。この人骨は断面が船底状の土坑底面で検出されており、木棺が用いられた痕跡がない。当遺蹟例もこれに類するものと思われる。
- 注9 肥後弘幸「弥生土器の編年」(『志高遺蹟』 京都府遺蹟調査報告書第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989 449~452頁。
- 注10 高橋 護「遠賀川式土器の伝播」(『弥生文化の研究』 雄山閣) 1986
- 注11 石井清司ほか「橋爪遺蹟発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』 京都府教育委員会) 1981
- 注12 岩松 保「ケシケ谷遺蹟」(『京都府遺蹟調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注13 佐原 眞「弥生土器の製作技術」(『紫雲出』 詫間町文化財保護委員会) 1964
- 注14 深澤芳樹「弥生土器の基部成形手法」(『唐古-藤田三郎さん・中岡紅さん結婚記念-』 田原本唐古整理室OB会) 1991
- 注15 ①深澤芳樹「土器のかたち-畿内第Ⅰ様式古・中段階について-」(『紀要』Ⅰ (財)東大阪市文化財協会) 1985  
②深澤芳樹「弥生土器の基部成形手法」(『唐古-藤田三郎さん・中岡紅さん結婚記念-』 田原本唐古整理室OB会) 1991
- 注16 注15②文献9頁。
- 注17 この時期の壺・甕には基底部外面を横ナデするものがしばしばみられる(佐原 眞編『弥生土器』日本の美術NO.125 至文堂 1976 54頁。)が、その目的はわからない(深澤芳樹氏教示)。底面の横ナデとの対応関係を調べれば目的が明らかになるかもしれない。ここに示した2つの例には指紋が流れた跡がみられ、親指と人差し指で角を挟むようにして調整したものと思われる。この例についてはハケ目やヘラ削りなどの底部調整後に、底部外縁を整えるために行なった最終調整と考える。
- 注18 第Ⅲ様式の例であるが青野遺蹟第12次調査S D105に典型的な資料がある。
- 注19 ①石井清司「北丹波地域」(『京都府弥生土器集成』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989 25~28頁。  
②石井清司「丹後・丹波地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 寺沢 薫・森岡秀人編 木耳社) 1989 294~296頁。
- 注20 肥後弘幸「弥生土器の編年」(『志高遺蹟』 京都府遺蹟調査報告書第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989 449~452頁。
- 注21 『由良川考古学研究会紀要』Ⅰ 由良川考古学研究会 1992年度刊行予定。

- 注22 注20文献 449～451頁。
- 注23 中村孝行「青野遺跡第12次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第15集 綾部市教育委員会) 1988
- 注24 近澤豊明「青野南遺跡第6次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第17集 綾部市教育委員会) 1990
- 注25 辻本和美「宮遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注26 長谷川達・三好博喜・肥後弘幸ほか「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注27 注26と同じ
- 注28 『志高遺跡Ⅱ-弥生土器の概要-』舞鶴市教育委員会 1986
- 注29 肥後氏がその可能性を指摘している(注9文献)。
- 注30 森岡秀人「山城地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ 寺沢 薫・森岡秀人編 木耳社) 1990 45頁
- 注31 『七日市遺跡(Ⅰ)-第2分冊-』兵庫県教育委員会 1990
- 注32 森下 衛「千代川遺跡第6・7次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注33 注26と同じ。
- 注34 『福知山市史』第1巻 福知山市 1976
- 注35 辻本和美ほか「石本遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第12冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注36 竹原一彦「三宅遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注37 注23と同じ。未報告資料である。
- 注38 『京都府遺跡調査報告書』第10冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
- 注39 『京都府夜久野の文化財』夜久野町教育委員会 1981
- 注40 『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ・Ⅱ 寺沢 薫・森岡秀人編 木耳社 1989・1990
- 注41 注26と同じ。
- 注42 梅原末治「西中筋村石剣発見ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府) 1922
- 注43 注42と同じ
- 注44 小林行雄「弥生式時代の漁撈」(『日本考古学概説』東京創元社) 1951
- 注45 久保哲正・堤圭三郎「観音寺遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-1)』京都府教育委員会) 1980
- 注46 岡崎研一「(9)観音寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989

- 注47 細見末雄編「六人部荘(福知山市)」(『丹波の荘園』 名著出版) 1980
- 注48 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ 1966
- 注49 神崎 勝・徳原多喜雄・山仲 進『神出-神出古窯址群に関する遺跡群の調査-』 妙見山麓遺跡調査会 1986
- 注50 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』第2版 第2分冊 1987;綾部市203番(図82、177頁)
- 注51 ①『野崎古墳群』(京埋セ現地説明会資料 No.87-04 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- ②小山雅人「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和61年度発掘調査概要 (3)野崎古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987, 101~5頁;
- ③小山雅人「野崎遺跡の削平された古墳群」(『京都府埋蔵文化財情報』第24号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987, 17~26頁;
- ④小山雅人「野崎古墳群の埴輪と土器と土製模造品」(『京都府埋蔵文化財情報』第25号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987, 13~24頁
- 注52 ①中村孝行「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会) 1984;
- ②平良泰久「方墳二態」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987, 91~103頁
- 注53 ①中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第3号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982, 18~24頁;
- ②中村孝行『綾部市文化財調査報告』第9集・第10集・第13集・第15集, 綾部市教育委員会 1982~1988
- 注54 ①綾部市史編纂室『綾部市史』 綾部市 1976, 564頁;
- ②中村孝行「塚廻り古墳群」(『綾部市文化財調査報告』第7集 綾部市教育委員会) 1980, 3頁
- 注55 小池 寛「近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成元年度発掘調査概要 (2)奥大石古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990, 124~133頁
- 注56 長谷川達「政次1号墳発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市教育委員会) 1981, 37~49頁
- 注57 石川 昇『前方後円墳築造の研究』(六興出版) 1989, 174頁
- 注58 梅原末治「東八田村ノ古墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊 京都府) 1923, 105~107頁
- 注59 ①杉原和雄「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」(『史想』19) 1981
- ②綾部市史編纂室, 注54文献, 592~593頁
- 注60 中村孝行「木寺北遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第12集 綾部市教育委員会) 1985, 7~8頁
- 注61 中村孝行「安国寺平山古墳発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第14集 綾部市教育委

- 員会) 1987, 1~18頁
- 注62 森島康雄・鍋田 勇・藤原敏見他「平山城跡・平山東城跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』第14冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 注63 注50文献の171頁、90-1~4に関して錯誤が見られる。90-1を野崎5号墳と訂正するほか、各古墳の概要については、本書の以下の報告に拠られたい。
- 注64 鍋田 勇・他「近畿自動車道敦賀線関係遺跡昭和63年度発掘調査概要 (1)私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989, 22~26頁
- 注65 中村孝行・注53-②文献参照
- 注66 竹原一彦「近畿自動車道敦賀線関係遺跡昭和63年度発掘調査概要 (2)三宅遺跡」(注64文献) 80~82頁
- 注67 本書(181~206頁)所収の報文参照。
- 注68 田代 弘「綾部市里遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991, 5~32頁
- 注69 近沢豊明「青野西遺跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第16集 綾部市教育委員会) 1989, 37~82頁
- 注70 黒田恭正・杉本 宏「中坂古墳群・他」(『丹波の古墳Ⅰー由良川流域の古墳ー』山城考古学研究会) 1983, 109~116頁
- 注71 平良泰久・山下潔巳・他「高谷古墳群発掘調査概要」(『綾部市文化財調査報告書』第1集 綾部市教育委員会) 1973; 注69文献、53~63頁参照。
- 注72 小池 寛「高田山古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990, 1~10頁
- 注73 引原茂治「栗ヶ丘古墳群」(『京都府遺跡調査報告書』第13冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注74 伊野近富「塩谷古墳群平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990, 16頁; 第17図
- 注75 白井久美子「小規模古墳の一類型についてーブリッジ付き円墳の検討ー」(『古代』第75・76合併号 早稲田大学考古学会) 1983, 29~69頁
- 注76 杉崎茂樹「丸墓山古墳 埼玉1~7号墳 將軍山古墳」(『埼玉古墳群発掘調査報告書』第6集 埼玉県教育委員会) 1988, 37~78頁、特に50~56頁の第28~34図
- 注77 ①伊藤隆三「小矢部市道林寺遺跡」(『埋文とやま(富山県埋蔵文化財センター所報)』第32号 富山県埋蔵文化財センター) 1990, 5頁  
②伊藤隆三「富山県小矢部市道林寺遺跡」(『小矢部市埋蔵文化財調査報告書』第22冊 小矢部市教育委員会) 1987
- 注78 末木 健・早川典孝「東山南(B)遺跡」(『山梨県埋蔵文化財センター調査報告』第64集 山梨県教育委員会) 1991, 11~31頁
- 注79 白川成明「右京第321次調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長

- 岡京市埋蔵文化財センター) 1990, 48~49頁
- 注80 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号) 1978
- 注81 小山雅人「京都府の形象埴輪」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991, 335~344頁参照。
- 注82 以上の諸例について、注69文献、87頁、114~115頁、注64文献、注81文献参照。
- 注83 後藤守一「埴輪家聚成」(『上野国佐波郡赤堀村今井茶白山古墳』東京帝室博物館学報 第6冊) 1933, 附録
- 注84 杉山晋作「殿部田1号墳」(第17回埋蔵文化財研究会実行委員会(榎原考古学研究所内)編『形象埴輪の出土状況』(第17回埋蔵文化財研究会資料) 埋蔵文化財研究会) 1985, 508頁
- 注85 杉山晋作「殿塚古墳」(注84文献) 494頁
- 注86 秋山日出雄「室大墓」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第18冊 奈良県教育委員会) 1964, 65頁、及び第35図(Y号家形埴輪)
- 注87 三木文雄「はにわ」(『日本の美術』No.19 至文堂) 1967, 26頁
- 注88 入江文敏「西塚古墳」(注84文献) 439頁
- 注89 杉本 宏「庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第15集 宇治市教育委員会) 1990, 22頁; 第18~20図
- 注90 後藤守一・注33文献、小笠原好彦・注52文献, 16頁参照
- 注91 間壁忠彦・間壁菫子「女男岩遺跡」(『倉敷考古館研究集報』第10号) 1974, 27~34頁; 第11図-1
- 注92 『大阪府の埴輪』(大阪府立泉北考古資料館改修工事完成記念 特別展図録 同資料館友の会)1986, 19頁
- 注93 清水真一「平所埴輪窯」(注84文献) 70頁
- 注94 『よみがえる古墳文化』 宇治市歴史資料館特別展図録 1986, 37頁
- 注95 伊達宗泰「勢野茶白山古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊 奈良県教育委員会) 1966, 第6図
- 注96 福嶋慶順編『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ: 埴輪篇(『鳥取県教育文化財団報告書』11 鳥取県教育文化財団) 1982 13~16頁; 図版2~3
- 注97 後藤守一・注83文献, No.116
- 注98 後藤守一・注83文献; 埼玉県瓦塚古墳の例(若松良一「瓦塚古墳」『埼玉古墳群発掘調査報告書』第4集 埼玉県教育委員会 1986, 第33図)もこのタイプである。
- 注99 末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13冊 奈良県) 1935, 9~10頁
- 注100 三重大学歴史研究会原始古代支部会「亀山市木ノ下古墳の発掘調査概要」(『考古学雑誌』第67巻第3号 日本考古学会) 1982, 9~10頁; 第5図
- 注101 『東海の古墳時代』 名古屋市博物館特別展図録 1980
- 注102 後藤守一・注83文献



- 注103 小笠原好彦「家形埴輪の配置と古墳時代豪族の居館」(『考古学研究』第31巻第4号 考古学研究会) 1985, 21頁
- 注104 欄宣田佳男「一ヶ塚古墳」(注84文献) 177頁
- 注105 三重大学歴史研究会原始古代支部会, 注100文献
- 注106 上村安生「上出遺跡」(注84文献) 414頁
- 注107 注101文献
- 注108 近藤義行編「平川廃寺発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集 城陽市教育委員会) 1974, 34頁(第26図)・35頁
- 注109 この数値は、「祭祀関係遺物出土地地名表」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 附篇 国立歴史民俗博物館) 1985の古墳後期とされる遺跡数・遺物数を集計し、操作したものである。
- 注110 上野精志「大又遺跡」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集 福岡県教育委員会) 1973, 46~47頁
- 注111 亀井正道「土製模造品」(『神道考古学講座』第三巻 雄山閣出版) 1981, 43頁
- 注112 亀井正道「浜松市坂上遺跡の土製模造品」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館) 1985, 135頁; 図1-1、また、注115文献(第3図23)もこの例である。
- 注113 亀井正道・注111文献, 42頁(第1図1)
- 注114 竹原一彦・注66文献, 49頁・第33図
- 注115 向坂鋼二「浜松市都田町中津・坂上出土の祭祀遺物」(『考古学雑誌』第50巻第1号 日本考古学会) 38頁, 第3図22
- 注116 平野吾郎・外岡竜二・他『日誌遺跡(第3次発掘調査概報)』 南伊豆町教育委員会 1978, 図版XⅢ
- 注117 山下孝司『坂井南遺跡 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 東京エレクトロン株式会社・葦崎市教育委員会 1984, 74頁; 第43図14
- 注118 松田直則「宮内大畑遺跡」(『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター) 1981, 379頁; 第35図
- 注119 橋口達也・他「干潟遺跡」Ⅰ(『県道久留米・筑紫野線関係埋蔵文化財調査報告』1、『福岡県文化財調査報告書』第59集) 1980, 5頁; 第4図
- 注120 紫元静雄「久蘇遺跡発掘調査概要」(『土生・久蘇遺跡』 佐賀県文化財調査報告書 第25集 佐賀県教育委員会) 1973, 62頁
- 注121 高島忠平・他「石木遺跡」(『佐賀県文化財調査報告書』第35集 佐賀県教育委員会) 1976, 19頁; 第12図
- 注122 七田忠昭・他「下中杖遺跡」(『佐賀県文化財調査報告書』第54集 佐賀県教育委員会) 1980, 56頁; Fig.29
- 注123 山崎純男・他「下山門遺跡」(『福岡市文化財調査報告書』第23集 福岡県教育委員会) 1973, 40頁; 第25図

- 注124 山口信義・佐藤浩司「長野A遺跡」2(Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区の調査)(『九州縦貫自動車道関係文化財調査報告』11 北九州市埋蔵文化財調査報告書第54集 北九州市教育文化事業団) 1987, 131頁;第60図37~42
- 注125 青木遺跡発掘調査団・編集者団『青木遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 鳥取県教育委員会 1978, 本文編, 78頁;挿図93;図版59
- 注126 中田 昭・他『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』 広島県教育委員会 1973, 134頁;第4-34図 26
- 注127 『草山遺跡発掘調査月報』No.6 松阪市教育委員会 1983.8, 15頁(38・39)
- 注128 向坂鋼二・注115文献, 38頁, 第3図24~27
- 注129 石山 勲・他「福岡県筑紫野市所在剣塚遺跡群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXIV 福岡県教育委員会) 1978, 上巻 41頁;Fig.34
- 注130 伊藤玄三・近藤喬一・寺島孝一・田中勝弘「大曲り遺跡」(『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集 福岡県教育委員会) 1970, 51~2頁;第12図 6と7;第16図 10
- 注131 上野精志・注110文献, 37~40頁;第23図1~4
- 注132 佐土原逸男・他「小原遺跡」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XI 福岡県教育委員会) 1977, 54頁;Fig.51
- 注133 上野精志・注110文献, 第23図5
- 注134 平野吾郎・外岡竜二・他・注116文献, 図版Ⅷ(出土遺物 上段中央の2点)
- 注135 亀井正道・注111文献, 44頁(第2図1)
- 注136 亀井正道・注111文献, 44頁(第2図2)
- 注137 山崎純男・他・注123文献, 40頁;第25図1
- 注138 亀井正道・注111文献, 65頁;九州の諸例は『熊本市立博物館九州古代のまつりー出土品にみる人びとのいのりー』(開館30周年特別展図録)1982, 34・52~55頁に写真が集成されている。
- 注139 注109文献
- 注140 赤崎敏男「鏡と玉」(『古墳時代の研究』3 雄山閣) 1991, 136~137頁
- 注141 伊藤玄三・近藤喬一・寺島孝一・田中勝弘・注130文献, 40頁
- 注142 佐土原逸男・他・注132文献, 54頁
- 注143 中田節子・他『八幡原遺跡の発掘ー八幡神社地区の調査概要ー』 東北新幹線赤羽地区遺跡調査会 1984, 35頁
- 注144 佐々木隆彦「松木遺跡」I(『那珂川町文化財調査報告書』第11集 那珂川町教育委員会) 1984, 下巻, 53~59頁
- 注145 赤崎敏男・注140文献, 136頁
- 注146 注106文献
- 注147 石山 勲・注129文献, 40頁
- 注148 青木遺跡発掘調査団・編集者団・注125文献, 68~98頁
- 注149 青木遺跡発掘調査団・編集者団・注125文献, 394頁

- 注150 亀井正道・注111文献, 62～63頁
- 注151 ①平良泰久「綾部・福知山地方の古墳の周辺」(『京都考古』第16号 京都考古刊行会) 1975.10, 177～178頁  
②平良泰久「前方後円墳の伝播」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991, 143～152頁
- 注152 常盤井智行「由良川中流域の古墳の動向」(注70文献) 168～175頁
- 注153 中村孝行「由良川流域の大型古墳」『シンポジウム私市円山古墳』(中丹文化会館1989.3.26) 発表資料
- 注154 小池 寛「綾部市・八田川上流域における古墳の変遷－綾部市・奥大石古墳群を中心にして－」(『京都府埋蔵文化財情報』第34号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989, 18～23頁
- 注155 ヌクモ1号墳について、「概報」(竹原一彦「近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成元年度発掘調査概要(1)ヌクモ古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990, 111頁)では方墳とするが、円墳と見る小池氏(注154文献, 20～21頁)の説に従いたい。
- 注156 近藤義郎『前方後円墳の時代』(『日本歴史叢書』 岩波書店) 1983, 306～314頁
- 注157 白井久美子・注75文献, 47～48頁
- 注158 近藤義郎・注156文献, 314～319頁
- 注159 伊藤隆三・注77文献
- 注160 末木 健・早川典孝・注78文献

## 私市円山古墳・興遺跡・三宅遺跡・日光寺遺跡 に残存する脂肪の分析

(株)ズコーシャ総合科学研究所 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏  
帯広畜産大学畜産環境学科 中野益男、福島道広

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと<sup>(注1)</sup>、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子<sup>(注2)</sup>、約5千年前のハーゼルナッツ種子<sup>(注3)</sup>に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した<sup>(注4)</sup>。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに伸びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂肪の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現世動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

この「残存脂肪分析法」を腐朽分解の進んだ、考古学的実証の困難な遺跡の解明に適用

し、遺跡内土壌に残存する脂肪を分析することによって、私市円山古墳、興遺跡、三宅遺跡、日光寺遺跡の遺構および遺物の性格を解明しようとした。

## 1. 土 壌 試 料

私市円山古墳は全長81mの造り出しつきの円墳であり、古墳時代中期中葉、5世紀中葉頃の大首長の墓と推定されている。墳頂部は3つの主体部に分けられ、分析試料は墳頂部の中央部よりやや北寄りの第2主体部東側から出土した玉類の下から採取した赤色顔料の付着した土壌である。この試料名を私市円山古墳とし、試料採取地点を図1-1に示す。

興遺跡は出土遺構や遺物から弥生時代中期から室町時代にかけてのものと推定されている。分析試料は北部D地区から採取した。この地区からは溝、土壌、柱穴などが見付き、それに伴い多くの土器や石器が出土し、これらの大半が弥生時代中期に属するものと推定されている。分析試料は土壌SK03の埋土で、土壌の中層よりやや下層寄りの所から採取し、試料名を興遺跡とした。土壌配置状況を図1-2、試料採取地点を図1-3に示す。

三宅遺跡は弥生時代中期末から古墳時代後期のものと推定されている。このうち分析試料として採取した土壌は第IV調査区にあり、粘土採掘坑か古墳時代初頭の庶民の墓である可能性があると考えられている。土壌SK415(7F-2)の土壌外土壌試料をNo.1、土壌内下層土試料をNo.2、土壌SK497(8D-10)の土壌内中層土試料をNo.3、上層土試料をNo.4、土壌SK505(8D-8)の土壌内土壌試料をNo.5、土壌外土壌試料をNo.6とした。土壌配置状況および試料採取地点を図1-4に示す。

日光寺遺跡は奈良時代から鎌倉時代までの複合遺跡であろうと推定されている。このうちC調査区内の土壌1から出土した須恵器杯の埋土を分析した。試料採取地点を図1-5に示す。

## 2. 残 存 脂 肪 の 抽 出

土壌試料179～588gに3倍量のクロロホルム-メタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量を加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表1に示す。抽出率は私市円山古墳で0.0075%、興遺跡で0.0021%、日光寺遺跡で0.0015%、三宅遺跡で土壌内0.0150～0.0875%、土壌外0.0031～0.0037%と土

域内で高く、平均0.0249%であった。この値は出土土壌を土壌墓かどうか判定した宮城県摺萩遺跡の土壌試料の0.003%<sup>(注5)</sup>、兵庫県寺田遺跡の土壌試料の0.0016%<sup>(注6)</sup>、出土遺物を甕棺と判定した静岡県原川遺跡の土壌試料の0.0041%<sup>(注7)</sup>、出土遺物を胞衣壺と判定した奈良県平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した胞衣壺内土壌試料の0.0199%<sup>(注8)</sup>に比べると、ほぼ同じか高いくらいの値であり、分析には十分量であった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成され、遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪の結合したトリグリセリド、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

### 3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサン-エチルエーテル-酢酸(80:30:1)またはヘキサン-エーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで直鎖状の脂肪酸とヒドロキシ脂肪酸に分離精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した<sup>(注9)</sup>。ヒドロキシ脂肪酸はトリメチルシリル誘導体にしてからガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の直鎖状脂肪酸組成を図2に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸(C16:0)、パルミトレイン酸(C16:1)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)、ネルボン酸(C24:1)の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

次にヒドロキシ脂肪酸組成を図3に示す。残存脂肪から9種類のヒドロキシ酸を検出した。このうちヒドロキシアラキジン酸(hC20:0)、ヒドロキシベヘン酸(hC22:0)、ヒドロキシトリコサン酸(hC23:0)、ヒドロキシリグノセリン酸(hC24:0)、ヒドロキシペンコタサン酸(hC25:0)、ヒドロキシセロチン酸(hC26:0)、の7種類の天然型のβ-ヒドロキシ脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

私市円山古墳の主要な脂肪酸はオレイン酸で全体の約41%を占めていた。次いで多いのはパルミチン酸で約25%を占めていた。これらの脂肪酸が主要成分である脂肪酸組成のパターンは動物遺体が存在していた土壌に多くみられるものである。また高等動物の臓器、血液、神経組織に多く存在するベヘン酸、リグノセリン酸のような高級脂肪酸も約21%分布していた。脳には脳神経系の働きに重要な関連を持つセレブロシド等の糖脂質が多く分布する。その糖脂質を構成する脂肪酸はリグノセリン酸等の普通の直鎖状高級脂肪酸より

もヒドロキシ脂肪酸と呼ばれる水酸基を持つ脂肪酸が多く分布している。図3からわかるようにヒドロキシリグノセリン酸も多く分布していた。この脂肪酸が脳に特異的に存在することから考えれば、試料採取地点がヒトの頭部に当たると推測される。また玉類の下に残っていた顔料は北海道湯の里4遺跡<sup>(注10)</sup>土壌内の遺体埋葬地点にみられた赤色顔料と同様なもので、酸化鉄がその成分であろうと推定されるが、今回は土壌の金属分析は行わなかった。

興遺跡の主要な脂肪酸はパルミチン酸で全体の約45%を占めていた。パルミチン酸は高等動物の体脂肪、骨油に多く含まれる場合が多い。またベヘン酸、リグノセリン酸は約29%と、大変多く分布していた。この遺跡中の試料も私市円山古墳同様ヒドロキシ脂肪酸の分布が多かった。

日光寺遺跡の主要な脂肪酸はパルミチン酸、パルミトレイン酸でこの2つが全体の約71%を占めていた。パルミトレイン酸を持つ動植物種は少なく、その分布割合も3~8%しかないので、この脂肪酸はステアリン酸、オレイン酸の分解物から来たものと推定される。これらの脂肪酸が多く含まれることは、動物遺体の存在した可能性があることを示唆している。ベヘン酸リグノセリン酸は約4%しか含まれていなかったが、ヒドロキシリグノセリン酸、ヒドロキシベヘン酸、ヒドロキシペンタコサン酸など5種類のヒドロキシ脂肪酸が検出された。従ってこれらの脂肪酸の分布が多いことから、高等動物の臓器に類する遺物が埋納されていた可能性が推測される。

三宅遺跡の土壌SK415では試料No.1とNo.2でその残存脂肪含量と脂肪酸組成に明確な相違があった。すなわち対照試料である試料No.1は残存脂肪抽出率は0.0031%で土壌下層の試料No.2の0.0132%の約4分の1であった。また残存脂肪酸も試料No.1は中級脂肪酸の方が分布割合が高く、高級脂肪酸の方は分布割合が低くなるという植物腐植土の比較的多いパターンを示し、No.2は中級脂肪酸の含量が若干少ないが、谷状の脂肪酸パターンを示し、動物性遺体の存在を示唆していた。試料No.3とNo.4は土壌SK497内から採取し、試料No.2同様谷状の脂肪酸パターンを示した。土壌SK505から採取した土壌内試料No.5はNo.2~4同様動物性の脂肪酸パターンを示し、対照試料の土壌外試料No.6は試料No.1同様比較的植物腐植土の多い脂肪酸パターンを示した。

また試料No.2からNo.5のリグノセリン酸含量は一般的な動物性遺体の存在する土壌中の含量よりもかなり多い。この直鎖状高級脂肪酸の分布割合はヒドロキシ脂肪酸の分布状況ともよく一致し、いずれの試料からも動物の脳、神経組織、血液などの組織、臓器中に広く分布するヒドロキシリグノセリン酸、ヒドロキシベヘン酸が検出された。土壌外の試料No.1およびNo.6にもヒドロキシ脂肪酸が検出されたのは、土壌から50cmしか離れ

ていないために攪乱により土壌の影響を受けているか、またはその周辺に遺物の包含層があるのかもしれない。

#### 4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノーエチルエーテル酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジノー無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図4に示す。残存脂肪から17~21種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンベステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

私市円山古墳では動物由来のコレステロールが約3%、植物由来のシトステロールが約16%、哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールが約11%含まれていた。興遺跡ではコレステロールが約4%、シトステロールが約10%、コプロスタノールが約24%含まれていた。三宅遺跡ではコレステロールが約1~7%、シトステロールが約10~21%、コプロスタノールが約2~10%含まれていた。日光寺遺跡ではコレステロールが約4%、シトステロールが約20%、コプロスタノールが約10%含まれていた。これらの値をみると、コレステロール、シトステロールともに一般的な土壌中での含量よりも少ない。これは上記の主要なステロール以外のコプロスタノールや未同定のステロールの比率が高いため個々のステロールの含有率が数値的に低くなったものである。コレステロールの含量が少ないのは、コレステロールの一部が腸内細菌叢によりコプロスタノールへ移行していると考えられる。一般的な土壌にあまり含まれていないコプロスタノールがかなり含まれていることは哺乳動物の存在を示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壌で0.6以上<sup>(注11)</sup>、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる<sup>(注12・注13)</sup>。土壌試料のコレステロールとシトステロールの分布比とコプロスタノールとコレステロールの分布比を表2に示す。コレステロールとシトステロールの分布比は私市円山古墳、興遺跡、日光寺遺跡のいずれでもあまり高い値を示さなかった。また三宅遺跡では試料No.4の値が0.6であった他はすべて0.6以下で、他の遺跡同様高い値は示さなかった。これは既述の如くコレステロールの一部がコプロスタノールへ移行しているためと考えられる。コプロスタノールとコレステロールの分布比は男性で4.25、女性で2.75をとる<sup>(注14)</sup>。私市円山古墳、興遺跡、日光寺遺跡のいずれもその値が2.0か4.0の近辺にあり、三宅遺跡での試料No.3、No.5では4.0付近の値を



とっている。これらのことから私市円山古墳、興遺跡、三宅遺跡内の土壌 S K 497、S K 505には男のヒトが埋葬された可能性が高い。

## 5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って、各試料間の類似度を調べた。同時に宮城県摺菽遺跡<sup>(注5)</sup>、兵庫県寺田遺跡<sup>(注6)</sup>、静岡県原川遺跡<sup>(注7)</sup>、奈良県平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した<sup>(注8)</sup> 胞衣壺の土器および土壌試料に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を図5に示す。三宅遺跡の土壌外試料No. 1とNo. 6は各々幼児埋葬の原川遺跡や土壌墓の寺田遺跡の土壌試料に相関行列距離0.1以内で類似しており、興遺跡の試料は平城京胞衣壺内土壌試料に相関行列距離0.1以内で類似していた。そしてそれらは同じA群を形成した。このことは、興遺跡の土壌には高等動物が埋葬されていたことを示唆している。三宅遺跡の土壌外試料もA群を形成することは、この周辺にも動物遺体の痕跡があることを示唆している。私市円山古墳の試料は摺菽遺跡の土壌試料と相関行列距離が0.1以内で類似し、これらの試料は平城京胞衣壺や壺内土壌試料とも類似してB群を形成していた。この地点にはヒト全身遺体があったことを示唆している。日光寺遺跡の須恵器杯の土壌試料は相関行列距離的に近い位置に他の試料がなく、単独でC群を形成したが、B群の骨や胞衣と比較的近い距離にあった。三宅遺跡の試料No. 2～5はその距離が0.2以内でD群を形成した。このD群は距離的には他のいずれの試料とも離れていた。このことは土壌 S K 415、S K 497および S K 505は同じ性質であることを示唆している。動物遺体の存在を示す脂肪酸やステロールが検出されることから、土壌は土壌墓と推定される。動物遺体の存在する他の遺跡と相関行列距離的に遠いのは、土壌の性質が多少異なるためと考えられる。

## 6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のバルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布し、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪が分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原

点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を図6に示す。興遺跡の試料と三宅遺跡の試料No.1とNo.6はA群を形成し、第1象限から第2象限にかけての原点から遠く離れた位置に分布した。B群の私市円山古墳の試料は第2象限の原点から少し離れた位置に分布した。しかし脳の分布する第1象限からは、ずれていた。これについては更に免疫反応で確認する必要がある。三宅遺跡の試料No.2～5は第1象限のX軸、Y軸ともに原点から大きく離れた位置に分布しD群を形成した。これらA、B、D群の分布位置は高等動物由来の脂肪が分布する所である。日光寺遺跡の試料は第3象限のX軸に沿って原点から離れた位置に分布し、植物腐植に近いC群を形成した。この試料が植物腐植土を示す位置に分布したのは、動物遺体の一部に植物腐植が多く混在していることを示唆している。

この成績とクラスター分析の結果を総合すると、私市円山古墳、興遺跡、三宅遺跡のいずれにも高等動物に類する遺体が埋納されていたことを示唆している。日光寺遺跡の須恵器杯の中には微量ながら骨あるいは胞衣に類する動物遺体の一部が埋納されていたと推測される。

## 7. 総 括

私市円山古墳内の赤色顔料の付着した土壌に残存する脂肪酸を分析した。この古墳内の第2主体部東側からは高等動物の脳、神経組織に広く分布する直鎖状脂肪酸とヒドロキシ脂肪酸が検出されることから、ヒト遺体の頭部が位置していたと推定された。

興遺跡の土壌S K03埋土からは高等動物由来の脂肪が検出された。この土壌は土壌墓と認定された。

三宅遺跡の3つの土壌内外の土壌からはいずれの土壌内土壌からも興遺跡同様高等動物由来の脂肪が検出された。これらの土壌も土壌墓と認定された。

日光寺遺跡から出土した須恵器杯の埋土からは高等動物の骨と胎盤に近い脂肪が検出された。この須恵器杯には骨または胎盤(胞衣)を納めていた可能性がある。胎盤の埋納については、更に免疫学的な分析である。

## 参考文献

- 注1 R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」  
 『Archaeo.Physika.』, 10巻, 1979, pp260.
- 注2 D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」, 『Nature』, 292巻, 1981, pp146.
- 注3 R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle : 「Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte」,

- 『Naturwissenschaften』, 70巻, pp33.
- 注4 中野益男:「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp124.
- 注5 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏:「摺藪遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、宮城県教育委員会
- 注6 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏:「寺田遺跡土壌墓状遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』、兵庫県芦屋市教育委員会
- 注7 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏:「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」、『原川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書』、第17集、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79.
- 注8 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏:「平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した衣衣壺の残存脂質について」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』、奈良市教育委員会、1989、pp5.
- 注9 M.Nakano and W.Fischer:「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」、『Hoppe-Seylers Z.Physiol.Chem.』, 358巻, 1977, pp1439.
- 注10 中野益男、伊賀 啓、小林進介、根岸 孝:「油の里遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、『油野里遺構群－津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書』、第18集、(財)北海道埋蔵文化財センター、1983・1984、pp223.
- 注11 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 眞、田中 琢:「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40.
- 注12 中野益男:「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、『真脇遺跡－農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団、1986、pp401.
- 注13 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子:「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所調査報告書、第3集、1987、pp191.
- 注14 中野益男:「残存脂肪酸による古代復元」、『講演収録集－新しい研究法は考古学になにをもたらしただか』、第3回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、1989、pp114.

表1 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取地点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
私市円山古墳	第2主体部東側	178.80	13.40	0.0075
興遺跡	D地区SK03埋土	192.71	4.10	0.0021
日光寺遺跡	C地区土壌1出土			
	須恵器杯埋土	587.51	8.80	0.0015
三宅遺跡	第IV調査地			
No.1	7F-2土壌外	388.65	12.00	0.0031
No.2	7F-2土壌下層	336.08	44.40	0.0132
No.3	8D-10土層No.⑩	335.58	293.50	0.0875
No.4	8D-10土壌上層	266.15	39.80	0.015
No.5	8D-8土壌内	389.22	103.40	0.0266
No.6	8D-8土壌外	413.12	15.30	0.0037

表2 試料に分布するステロールの割合

試料No.	コプロスタノール(%)	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール	コプロスタノール/コレステロール
私市円山古墳	10.87	2.71	15.75	0.17	4.01
興遺跡	24.02	4.13	10.42	0.40	5.82
日光寺遺跡	9.78	4.47	19.52	0.23	2.19
三宅遺跡					
No.1	2.73	2.91	11.43	0.25	3.41
No.2	2.41	6.79	16.01	0.42	1.47
No.3	9.16	2.55	20.52	0.12	0.35
No.4	9.50	7.14	12.61	0.57	0.94
No.5	4.87	1.43	12.88	0.11	1.33
No.6	3.05	2.07	10.07	0.21	3.60

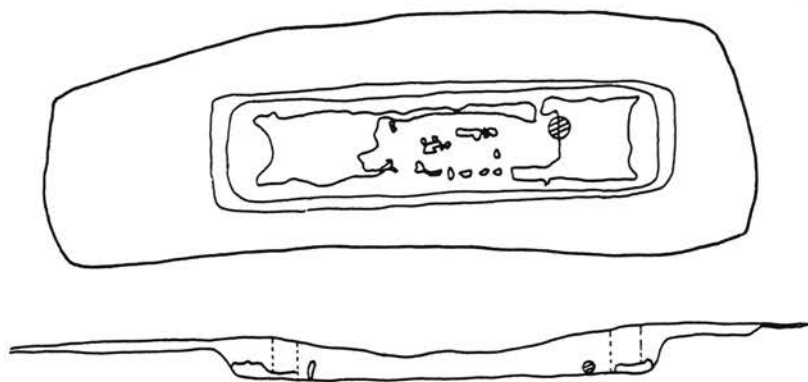


図1-1 私市円山古墳の試料採取地点図

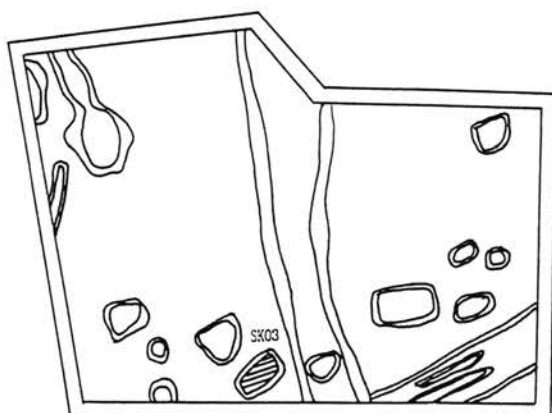


図1-2 興遺跡の土壌配置図



図1-3 興遺跡の試料採取地点図

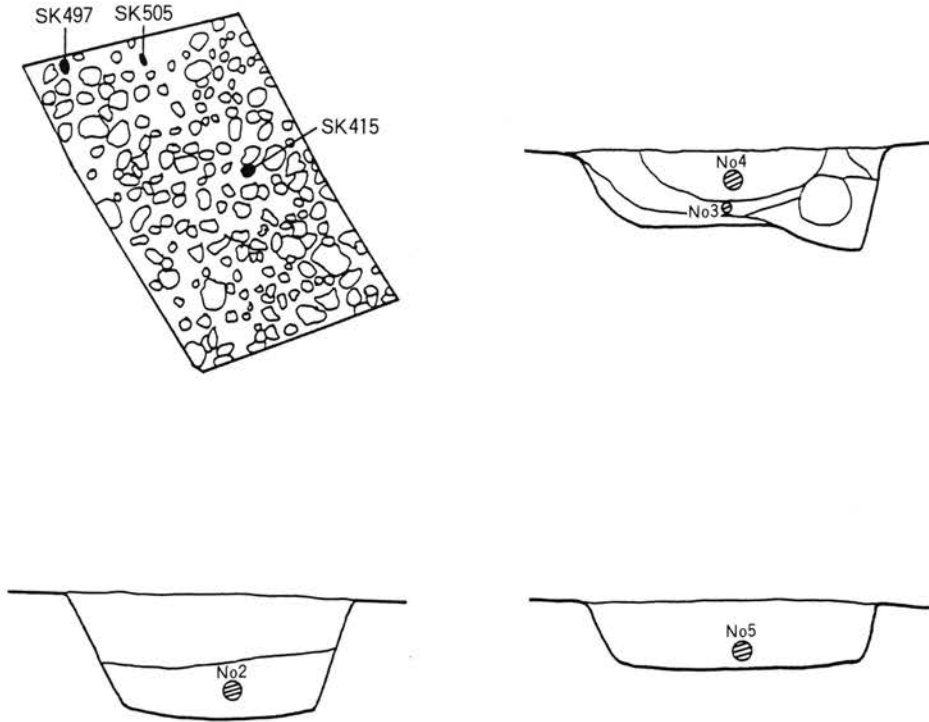


図 1 - 4 三宅遺跡の土壌配置図および試料採取地点図



図 1 - 5 日光寺遺跡の試料採取地点図

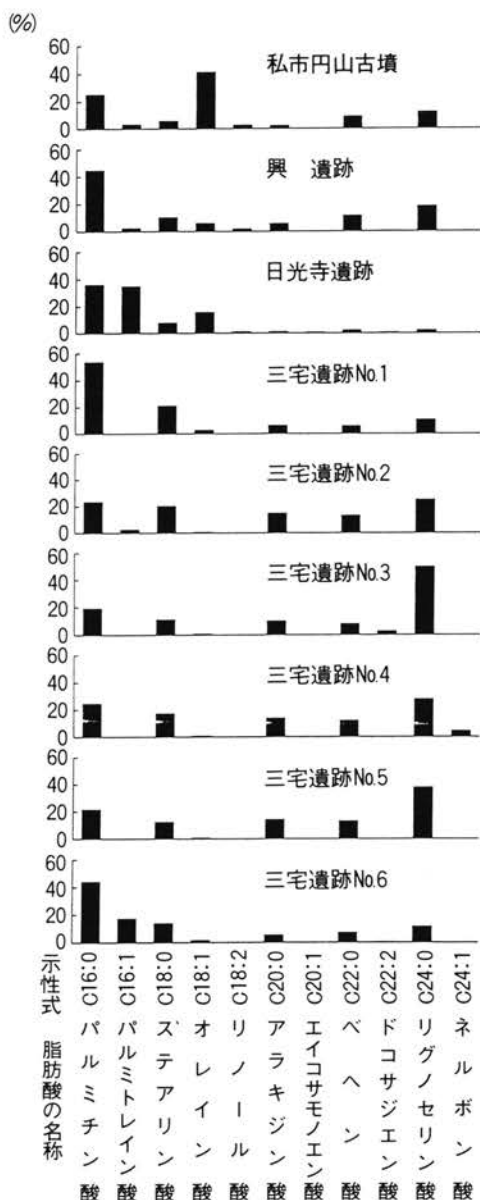


図2 試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

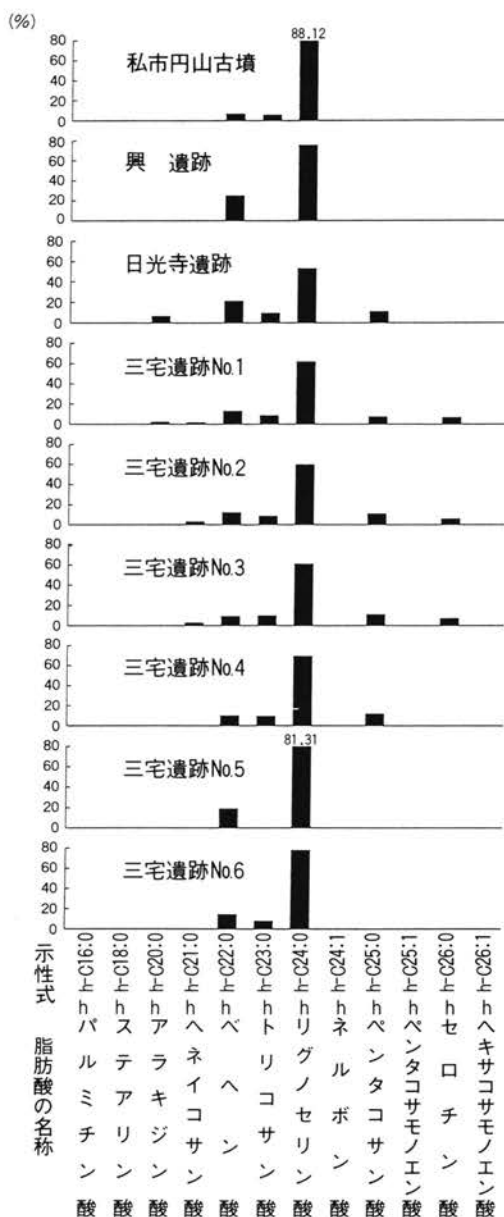


図3 試料に残存する脂肪のヒドロキシ脂肪酸組成

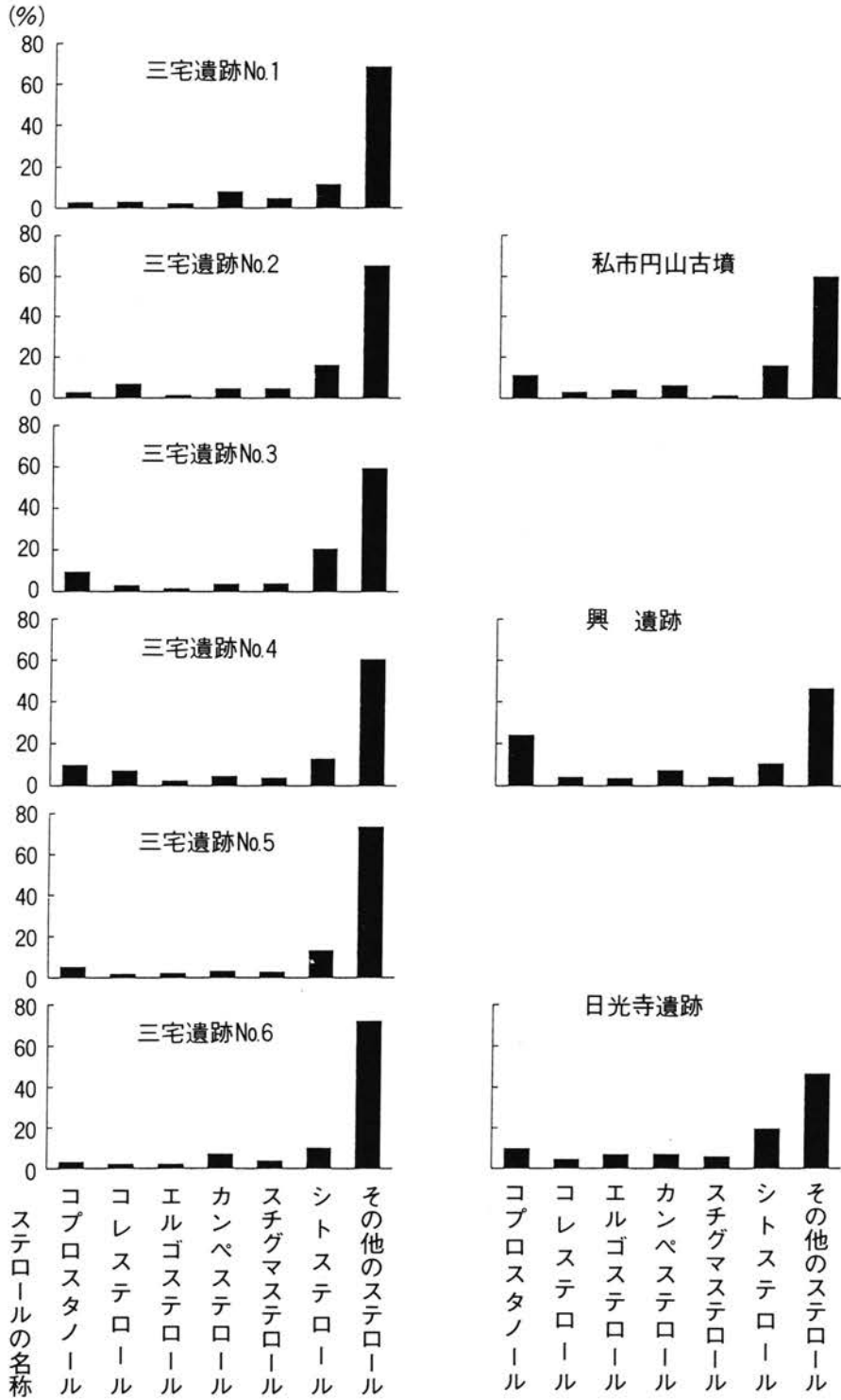


図4 試料に残存する脂肪のステロール組成



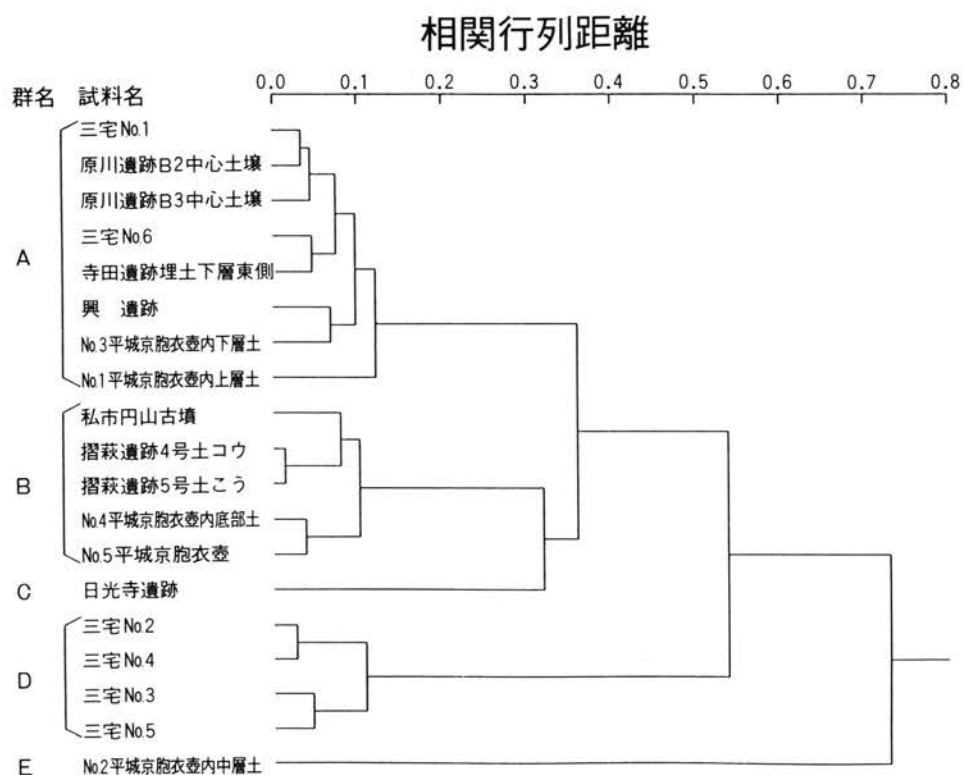


図5 土器および土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

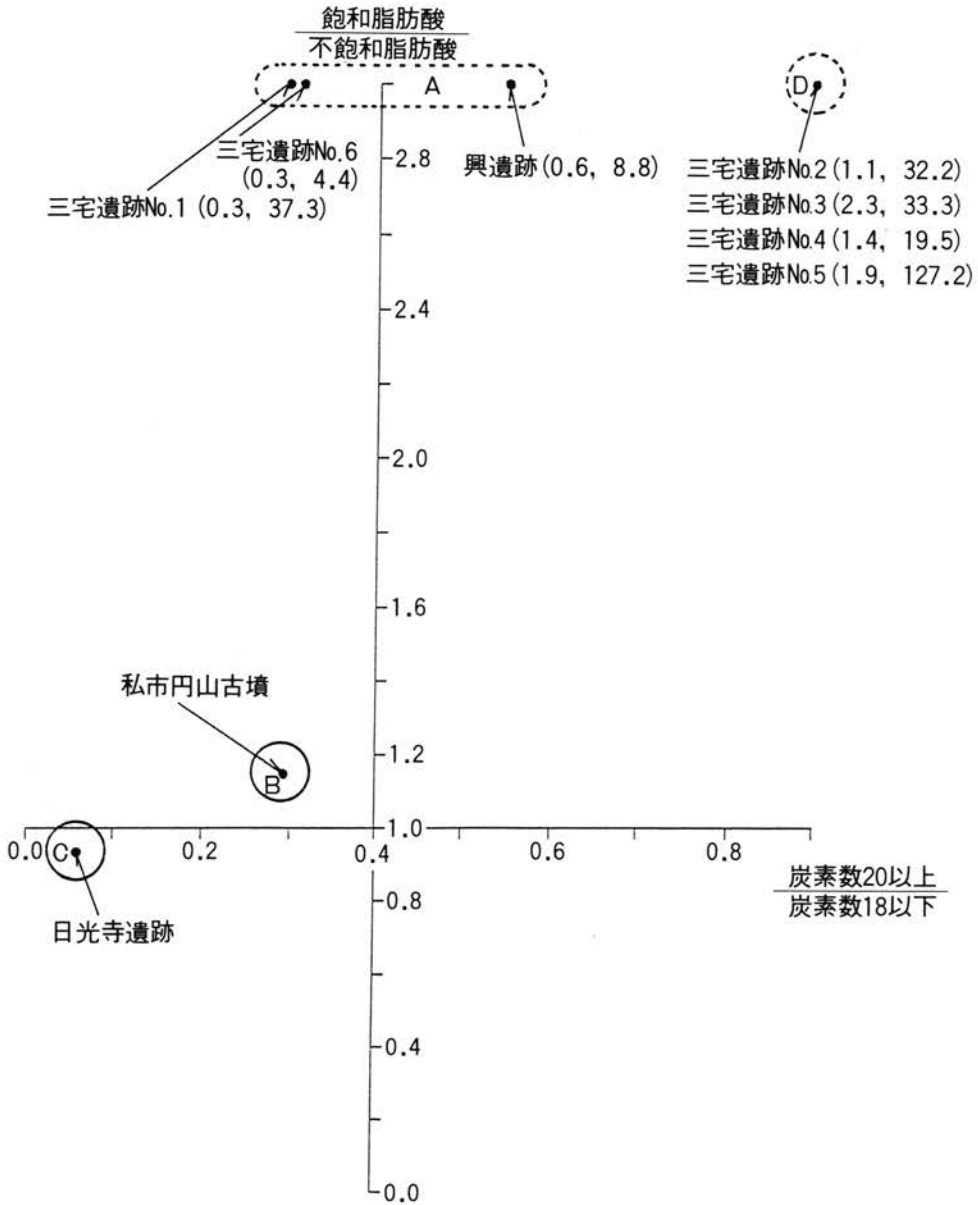


図 6 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

## 付 載

# 興 遺 跡 花 粉 分 析 他

## 1. は じ め に

興遺跡は、京都府福知山市字興～観音寺に所在する。遺跡の性格は、由良川によって形成された自然堤防上に立地する弥生時代中期に属する集落遺跡である。昨年度行った北部地区の調査の結果、E拡張区において溝や土坑、柱などの遺構や土器や石器などの遺物が検出されている。

今回の分析調査では、E拡張区の大溝(S D01, S D02)周辺古植生復元を試みるため、遺構内の堆積物について花粉分析を行った。しかし、分析試料の質から花粉分析試料として不適と考えられたため、花粉分析の結果を待って植物珪酸体分析を自主的に試みた。

## 2. 試 料

分析試料は、S D01内の堆積物が4点、S D02内の堆積物が3点の計7点である。なお、S D01の試料は中層および下層がおのおの2点ずつあるため、当社にて便宜上それぞれ①、②と番号をつけた。

S D01の試料はいずれも褐色のシルト質粘土で、炭化物が混じっていた。S D02の試料のうち、上層と中層は炭化物を含む褐色のシルト質粘土、下層は有機質を含む黒褐色の粘土であった。

これらの大溝は調査所見により、水路などではなく環濠の一部と考えられ、S D02のすぐ後にS D01が構築されたことが判っている。

## 3. 花 粉 分 析

### 3-1. 分析方法および結果の表示法

花粉・孢子化石の抽出は、以下に示した方法で行った。

試料を湿重で10～15g秤量し、フッ化水素(HF)処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に重液(ZnBr<sub>2</sub>, 比重2.2)を用いて鉱物質と有機物を分離させ、有機物を濃集する。その有機物残渣について、アセトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解して、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。

表1 興遺跡花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	OKI-E	OKI-E	OKI-E	OKI-E	OKI-E	OKI-E	OKI-E
		SD-01	SD-01	SD-01	SD-01	SD-02	SD-02	SD-02
		中層	中層	下層	下層	上層	中層	下層
		①	②	①	②			
木本花粉								
コナラ属アカガシ亜属		—	1	—	—	—	1	—
草本花粉		—	—	—	—	—	—	—
不明花粉		—	—	—	—	—	—	—
シダ類孢子								
シダ類孢子		—	20	2	1	2	1	—
合計								
木本花粉		0	1	0	0	0	1	0
草本花粉		0	0	0	0	0	0	0
不明花粉		0	0	0	0	0	0	0
シダ類孢子		0	20	2	1	2	1	0
総花粉・孢子		0	21	2	1	2	2	0

処理後の残渣は、よく攪拌しマイクロピペットで適量を取り、グリセリンで封入しプレパラートを作成した。検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類(Taxa)について同定・計数した。

### 3-2. 結果

本調査で分析した全試料とも、花粉化石・シダ類孢子化石がほとんど検出されなかった(表1)。また、これらの化石は保存状態が極めて悪く、破損・溶解がかなり進んでいた(図版1)。

### 3-3. 考察

本調査によって、分析した全試料からは花粉化石がほとんど検出されなかった。この原因としては、好気的な環境下による酸化や微生物などの影響により花粉化石が分解してしまったことが考えられる。一般に被子植物より裸子植物の花粉やシダ類孢子の方が、風化・腐敗に対して抵抗が強い。そのため、花粉化石の保存が悪く落葉樹の半数以上に風化の痕跡が見られるような場合には、その試料は花粉分析には不適である(徳永・山内, 1971)とされている。以上のことから、今回の分析結果から古植生を復元することは差し控えた。今後、本遺跡周辺の植生を検討するには、周辺の低地などの花粉化石の保存状態が良好と思われる場所で採取した同時期の堆積物を分析対象とする必要がある。

## 4. 植物珪酸体分析

花粉分析の結果はやはり予想された結果に近かった。したがって、目的に対する検討は不十分であったため、同一試料で植物珪酸体分析を行った。

#### 4-1. 分析方法

分析は、近藤・佐瀬(1986)の方法を参考にして次のように行った<sup>(\*)</sup>。

湿重 5 g前後の試料につき、過酸化水素水(H<sub>2</sub>O<sub>2</sub>)処理・熱塩酸(HCl)法による脱鉄処理で、試料を泥化し、試料中の有機物および鉄分を除去する。続いて、超音波処理(150W, 250KHz, 5分間)で土壤粒子を完全に分散し、篩別(250 μm目)により粗粒物を、沈定法により粘土分を除去し、植物珪酸体を濃集する。次に、重液分離法(ZnBr<sub>2</sub>, 比重2.3)で植物珪酸体を分離・濃集する。これをプレパラートに封入(封入剤：プリユウラックス)し、400倍の光学顕微鏡(簡易偏光装置装備)下で全面を走査しながら、出現する植物珪酸体を同定・計数(500個以上)する。同定に際しては、イネ科植物珪酸体の葉部短細胞由来の植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞由来の植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)に着目し、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて行った。

結果は、一覧表で示す。

\*1: 近藤・佐瀬(1986)の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、出現率から過去の植生を推定するものである。これは、種レベルで植物体内の植物珪酸体の組成および生産量が異なるためである(近藤, 1983)。例えば、稲(イネ属)では機動細胞珪酸体の割合が高いが、小麦(イチゴツナギ亜科オオムギ族)などでは機動細胞珪酸体はほとんど形成されない。過去の稲作の有無について検討する場合には、特に短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体について注目する。

#### 4-2. 結果

計数結果を表2に示す。

S D02下層試料を除いた全試料でイネ科葉部起源の植物珪酸体が多く検出され、その中でも短細胞珪酸体の検出個数が多かった。植物珪酸体の保存状態は、短細胞珪酸体で良好であったが、機動細胞珪酸体ではその表面に多数の小孔(溶食痕)が生じているため同定できないものが認められた。

植物珪酸体の種類(Taxa)は、S D02下層試料を除いた全試料ではほぼ同様であった。短細胞珪酸体ではタケ亜科が多数産出し、イネ族、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が伴出する。イネ族は栽培植物とされるイネ属とマコモ属に細分され、その多くはイネ属である。イネ属のいくつかは、組織片中の短細胞列として認められる。ウシクサ族はチガヤ属・ススキ属に細分される。また、タケ亜科にはネザサ節が含まれる。さらに、キビ族に

表2 興遺跡植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	SD01	SD01	SD01	SD01	SD02	SD02	SD02
	試料番号	中層①	中層②	下層①	下層②	上層	中層
葉部短細胞珪酸体由来							
イネ族イネ属	8	5	17	10	67	4	43
イネ族マコモ属	2	—	2	—	—	—	—
キビ族ヒエ属	9	2	6	1	7	2	1
キビ族キビ属	7	7	1	2	12	11	2
キビ族エノコログサ属	2	2	1	—	—	3	—
キビ族(その他)	—	—	1	—	4	—	—
タケ亜科ネザサ節	10	25	22	50	61	63	—
タケ亜科(その他)	282	300	216	260	119	193	1
ヨシ属	11	15	15	11	3	9	—
ウシクサ族チガヤ属	—	5	—	4	8	3	—
ウシクサ族スキキ属	7	5	3	7	24	20	—
イチゴツナギ亜科オオムギ族	6	—	1	2	20	13	—
イチゴツナギ亜科(その他)	15	19	26	18	43	16	—
不明キビ型	12	4	11	9	4	8	—
不明ヒゲシバ型	19	24	15	27	33	29	4
不明ダンチク型	5	4	3	2	—	—	—
葉身機動細胞珪酸体由来							
イネ族イネ属	23	13	31	7	12	7	5
キビ族	—	1	1	—	—	1	—
タケ亜科ネザサ節	37	42	85	47	59	84	—
タケ亜科(その他)	48	44	52	54	49	46	2
ヨシ属	1	—	1	—	—	—	—
ウシクサ族	1	1	5	2	3	—	—
不明	6	1	5	—	—	—	—
合計							
葉部短細胞珪酸体由来	395	417	340	403	405	374	51
葉身機動細胞珪酸体由来	116	102	180	110	123	138	7
計測数	511	519	520	513	528	512	58
組織片							
イネ属穎珪酸体	193	32	52	28	165	75	759
イネ属短細胞列	—	—	—	—	1	—	4

はヒエ属・キビ属・エノコログサ属、イチゴツナギ亜科にはオオムギ族といった栽培植物の種を有する種類が認められる。ただし、現状の植物珪酸体の分類ではここで検出された植物珪酸体が栽培種に由来したのか否かの判別は困難である。機動細胞珪酸体ではタケ亜科が多数産出し、栽培植物とされるイネ属、ヨシ属、キビ族が伴出する。また、イネ属の穎珪酸体(稲穂に形成される植物珪酸体)で構成される組織片が多数検出された。

SD02下層試料では、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体で50個程度しか検出されなかったが、イネ属穎珪酸体で構成される組織片が多数検出された。

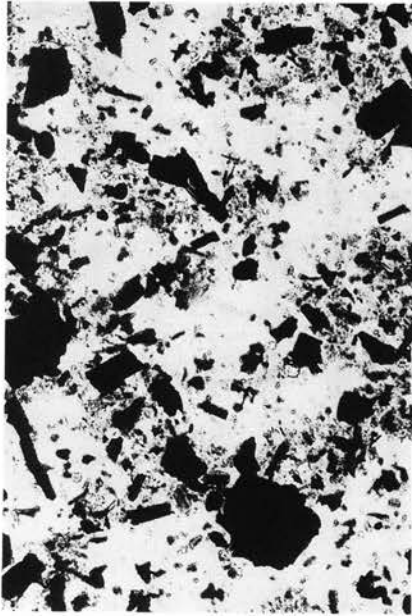
#### 4-3. 考 察

土壌中の植物珪酸体は局所的な植生を反映すると考えられる(近藤・佐瀬, 1986)。これより、今回の分析結果を考慮すれば、S D01およびS D02の各溝内で各層が堆積した当時の溝周辺ではタケ亜科、イネ族、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族などのイネ科植物が生育していたと推定される。タケ亜科のネザサ節は十分な日光のもとでしか生育できないため開けた場所に生育する(室井, 1960)。このことから、溝近辺は比較的開けた場所であったと推定される。また僅かに、イネ族マコモ属、ヨシ属が検出されているが、これらは低湿地などの湿潤な環境下に生育する湿生植物(挺水植物)であることから、そのような環境下での堆積物の混入があったか、局所的に同様の環境が存在したかが考えられる。水路ではないという判断がなされていることから、前者の可能性を示唆する。

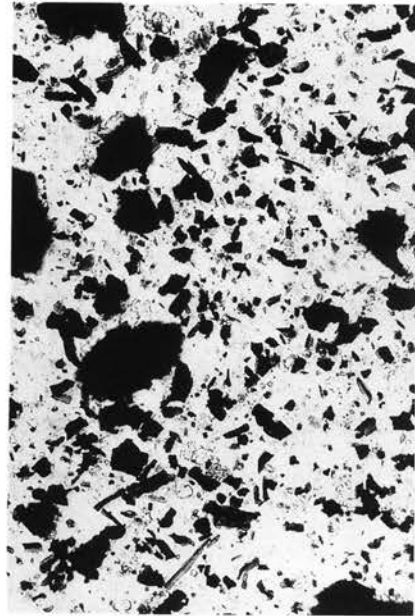
また、量比の差はあるがどの試料からもイネ属が検出されたことは、溝内に稲あるいは稲作耕土が混入していたと考えられる。さらに、S D01中層およびS D02上層・下層では稲粃が大量に埋積していたと推定される。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

図版1 状況写真



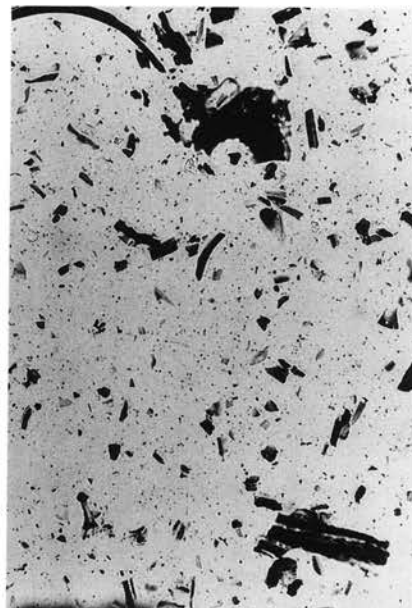
1 SD01中層①



2 SD01下層①



3 SD02下層

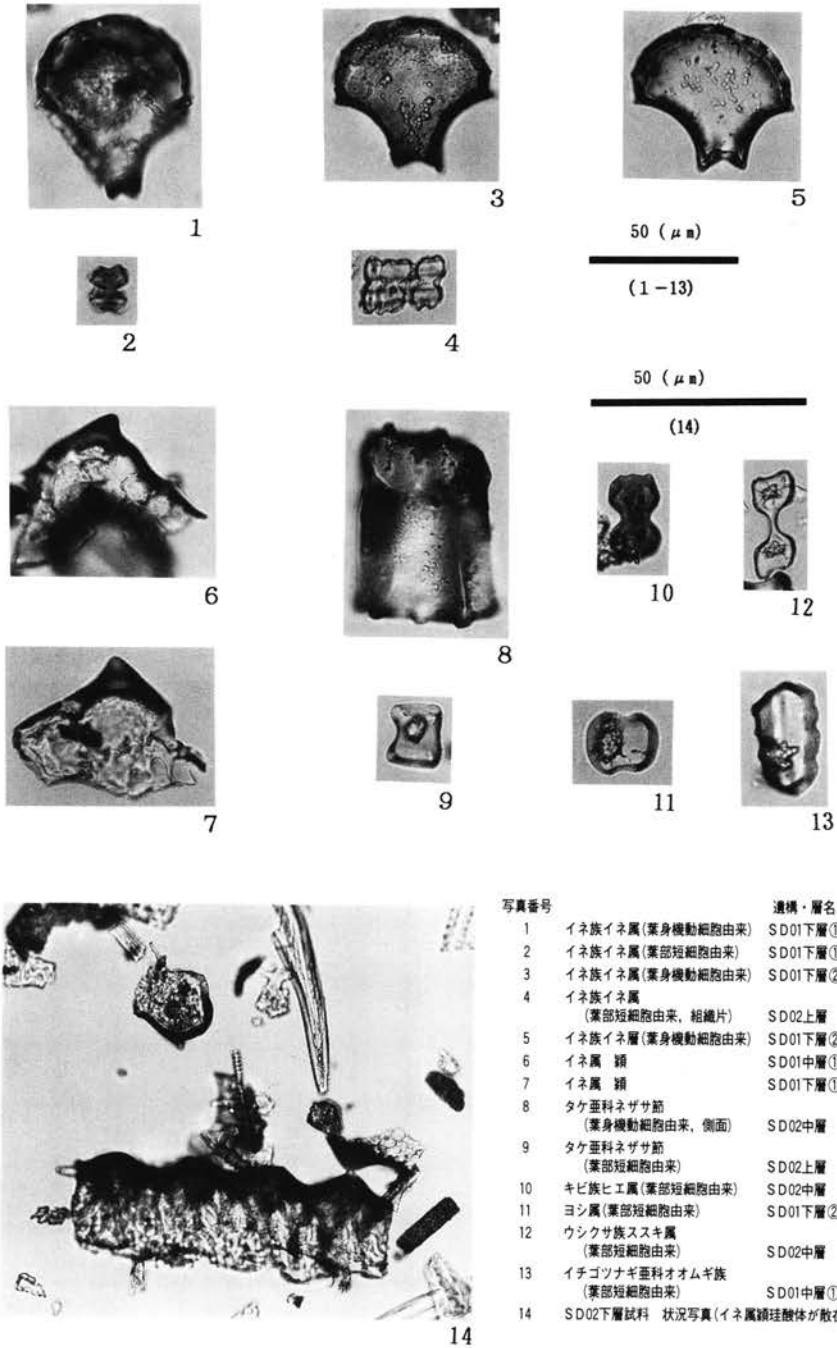


4 SD02中層

100μ



図版 2



- | 写真番号 | 遺構・層名                             |
|------|-----------------------------------|
| 1    | イネ族イネ属(葉身機動細胞由来) SD01下層①          |
| 2    | イネ族イネ属(葉部短細胞由来) SD01下層①           |
| 3    | イネ族イネ属(葉身機動細胞由来) SD01下層②          |
| 4    | イネ族イネ属<br>(葉部短細胞由来, 組織片) SD02上層   |
| 5    | イネ族イネ属(葉身機動細胞由来) SD01下層②          |
| 6    | イネ属 穎 SD01中層①                     |
| 7    | イネ属 穎 SD01下層①                     |
| 8    | タケ亜科ネザサ節<br>(葉身機動細胞由来, 側面) SD02中層 |
| 9    | タケ亜科ネザサ節<br>(葉部短細胞由来) SD02上層      |
| 10   | キビ族ヒエ属(葉部短細胞由来) SD02中層            |
| 11   | ヨシ属(葉部短細胞由来) SD01下層②              |
| 12   | ウシクサ族ススキ属<br>(葉部短細胞由来) SD02中層     |
| 13   | イチゴツナギ亜科オムギ族<br>(葉部短細胞由来) SD01中層① |
| 14   | SD02下層試料 状況写真(イネ属穎粒酸体が散在する)       |

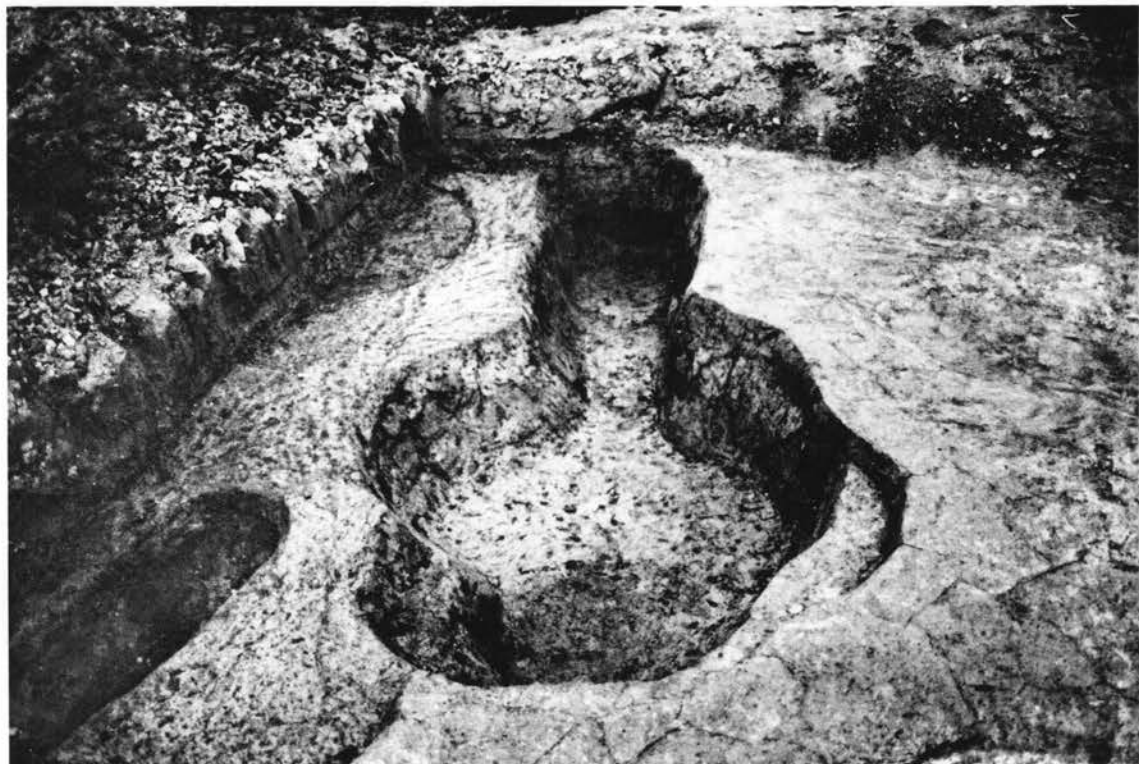
# 圖 版



(1) I地区全景（南から）



(2) I地区SK03・04検出状況



(1) I地区SK05・06検出状況(南から)



(2) I地区SK09検出状況



(1) II地区全景（北から）



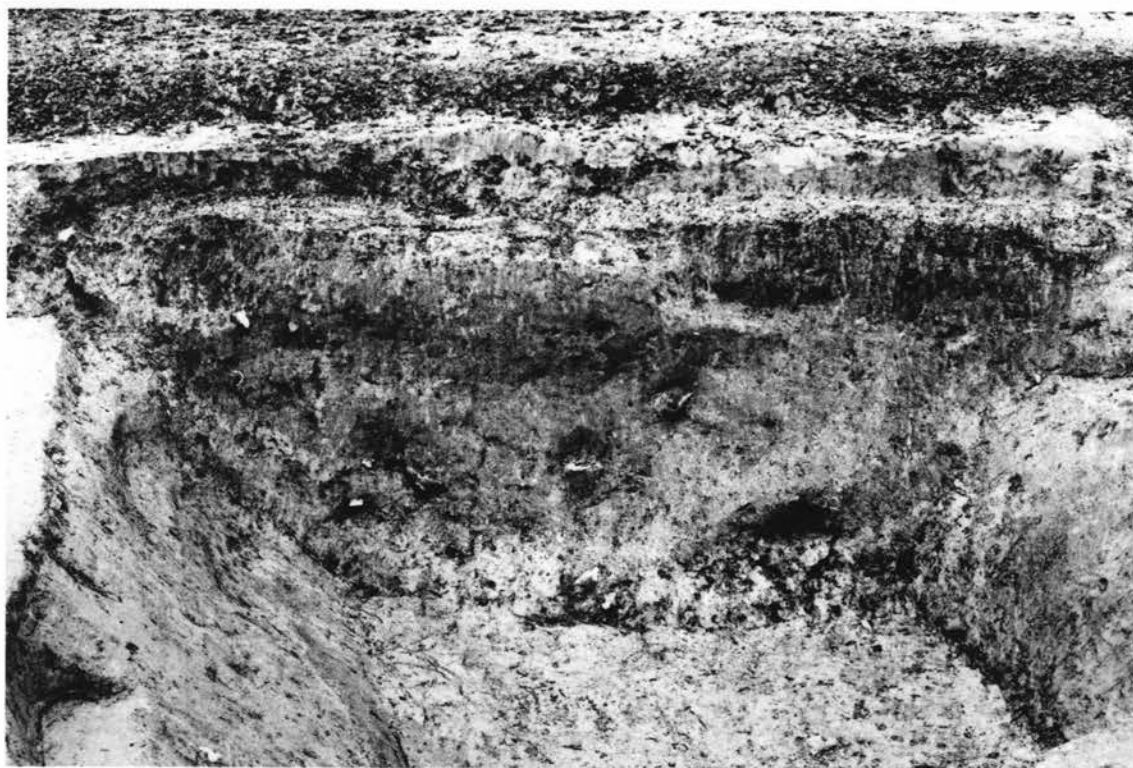
(2) II地区SD02検出状況（北東から）

(2) II地区SD02検出状況(東から)

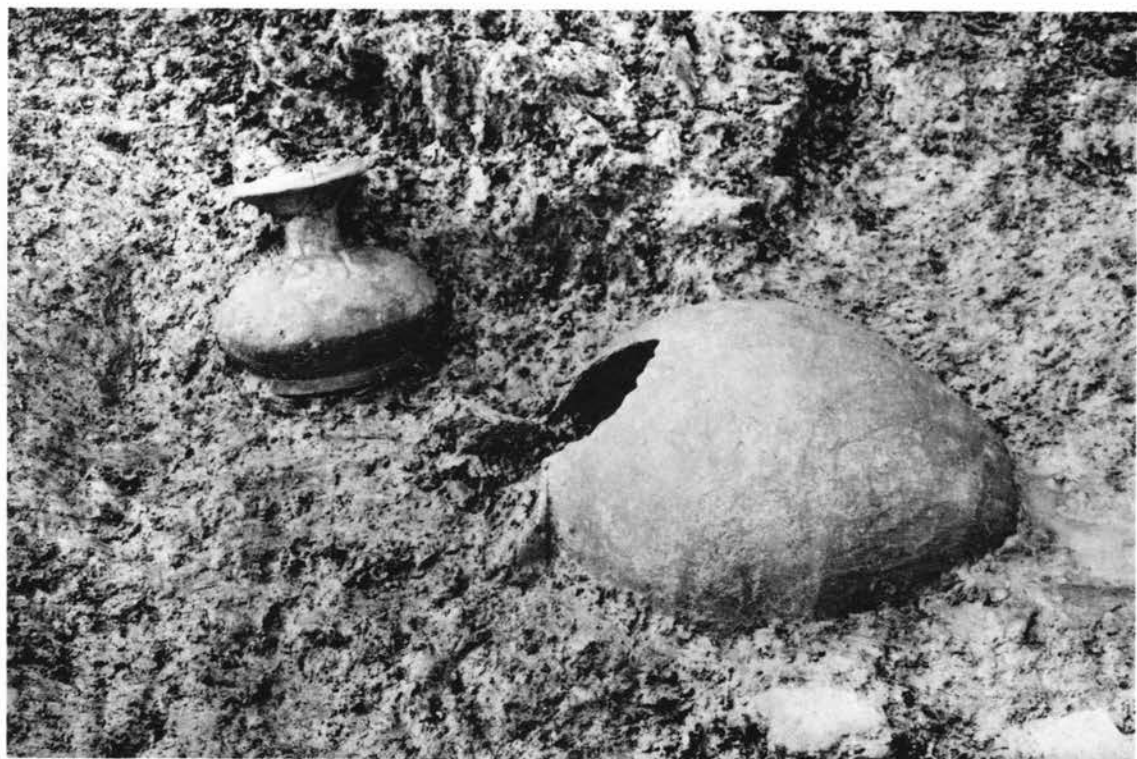


(1) II地区SD01・02検出状況(西から)





(1) II地区SD01埋土堆積状況



(2) II地区SD01遺物出土状況（上層）

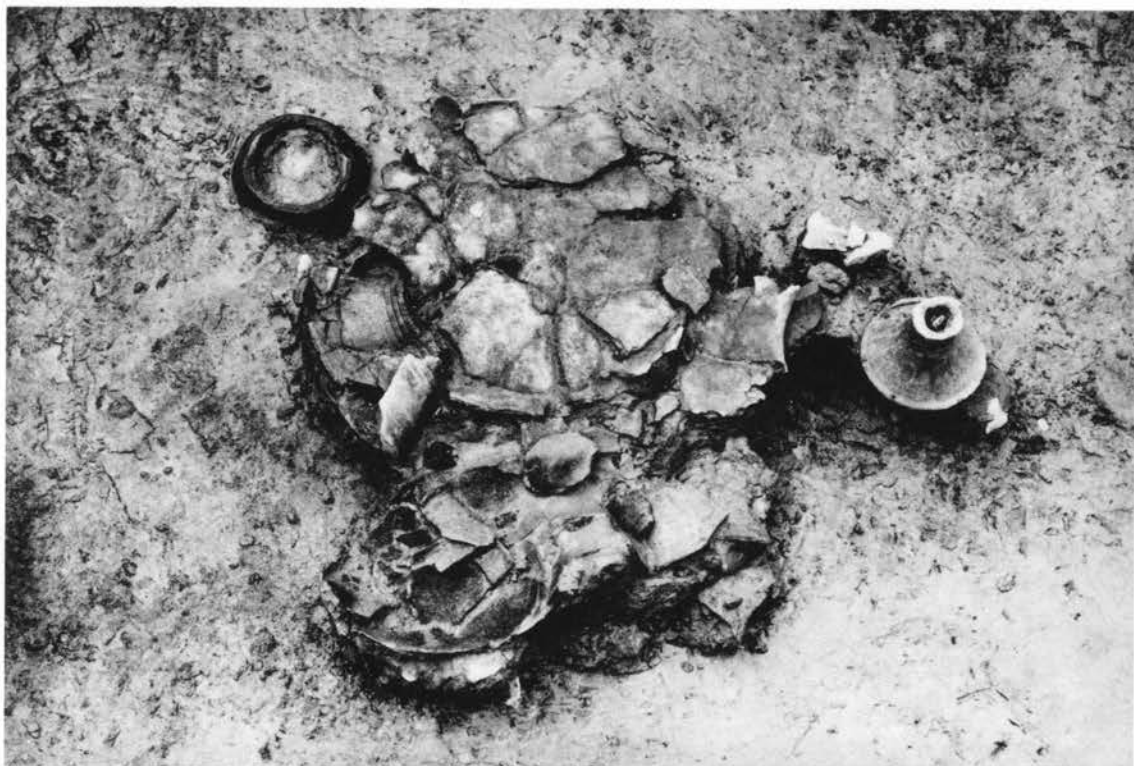


(1) II地区SD01遺物出土状況(最下層)

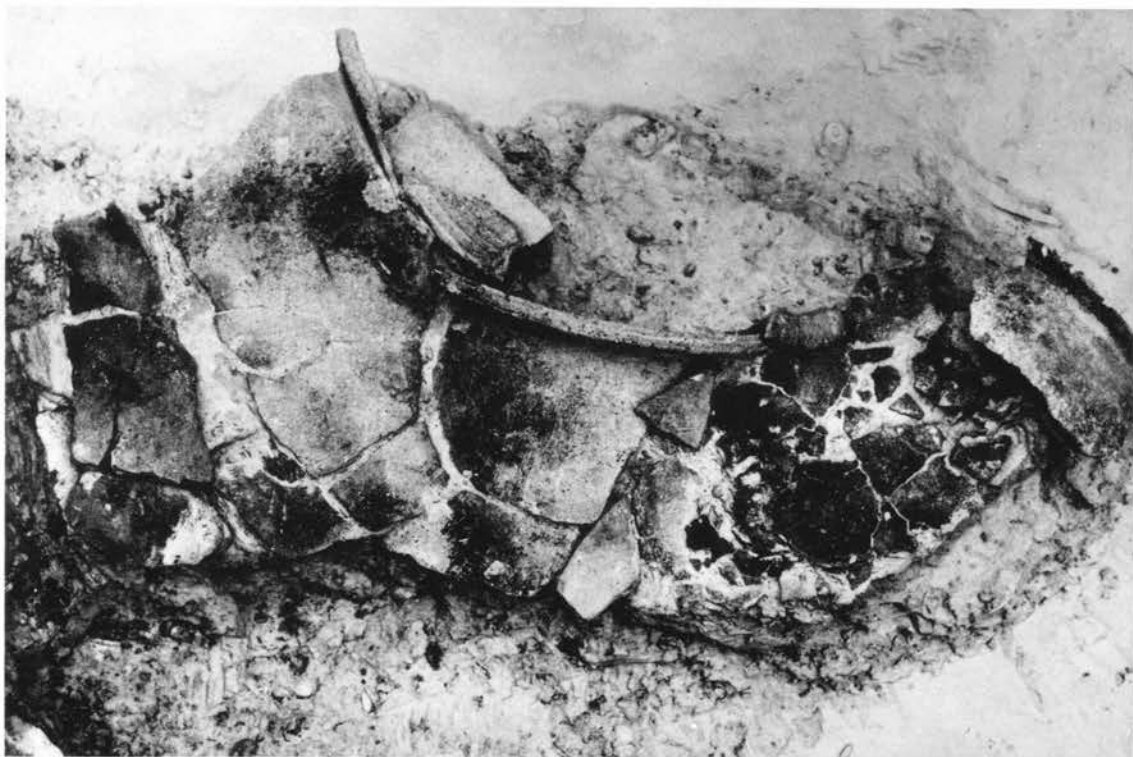


(2) II地区SD01遺物出土状況(最下層)





(1) II地区SD01遺物出土状況(最下層)



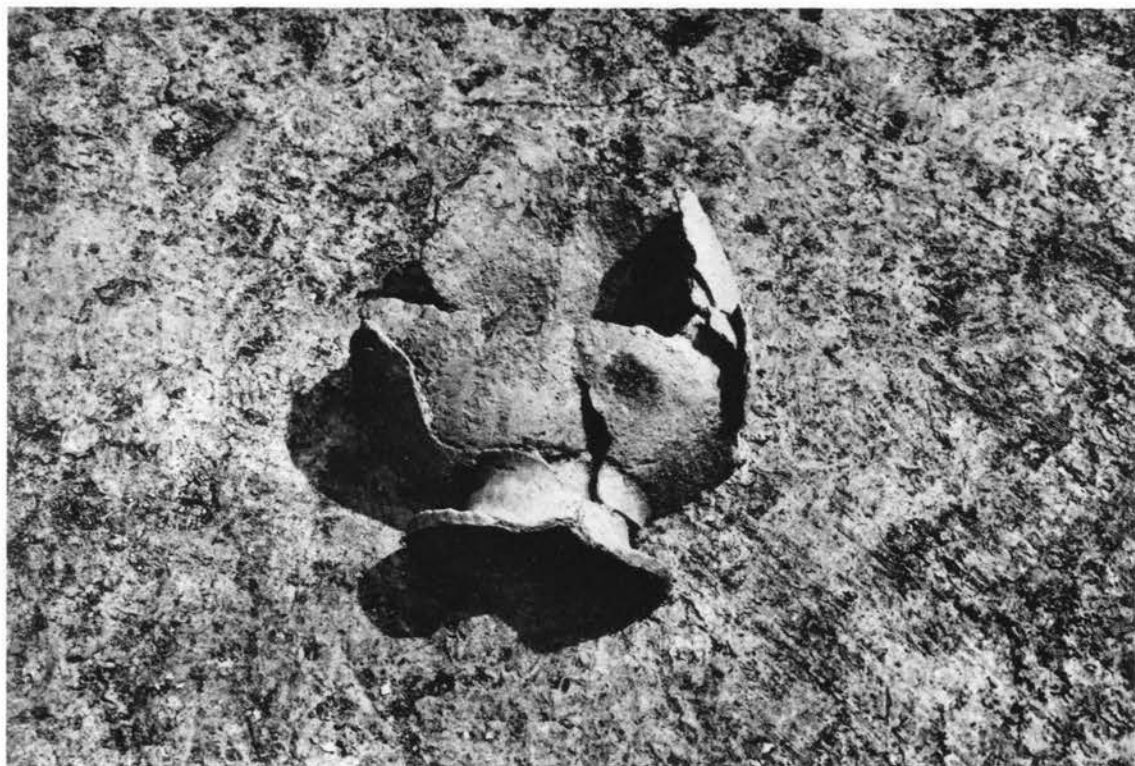
(2) II地区SD01遺物出土状況(最下層)



(1) II地区SD02断面状況



(2) II地区SD02遺物出土状況(最下層)

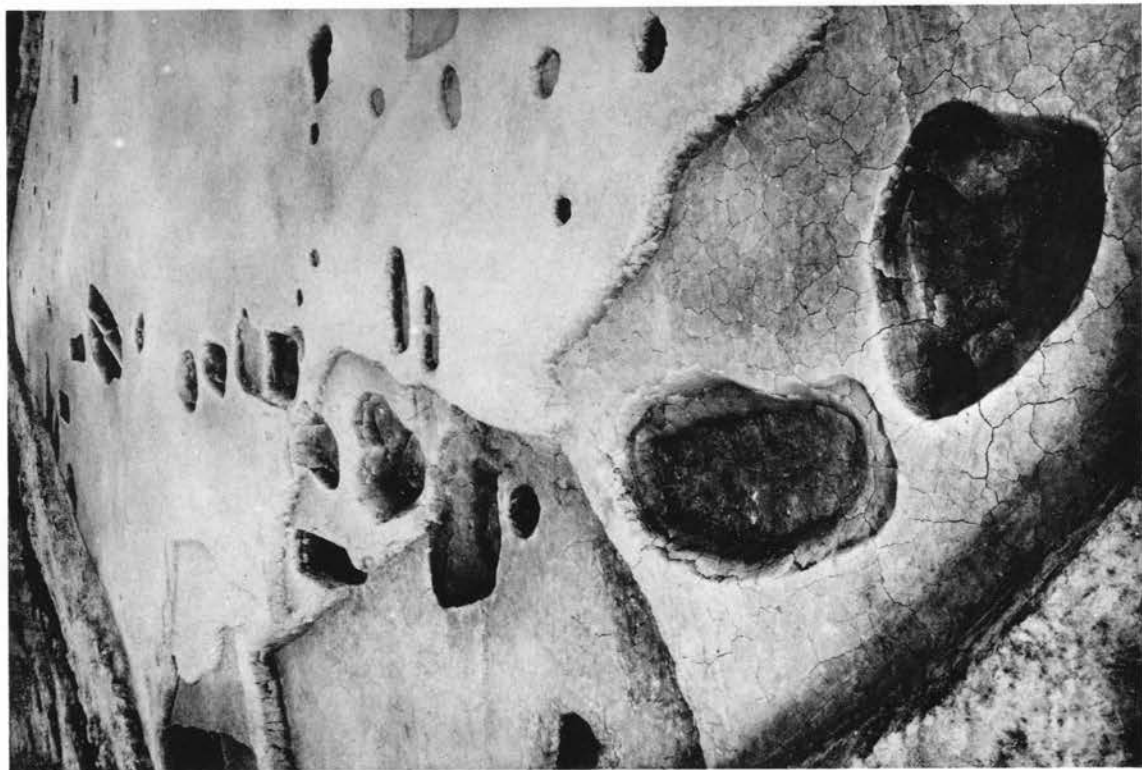


(1) II地区SD02遺物出土状況(下層)

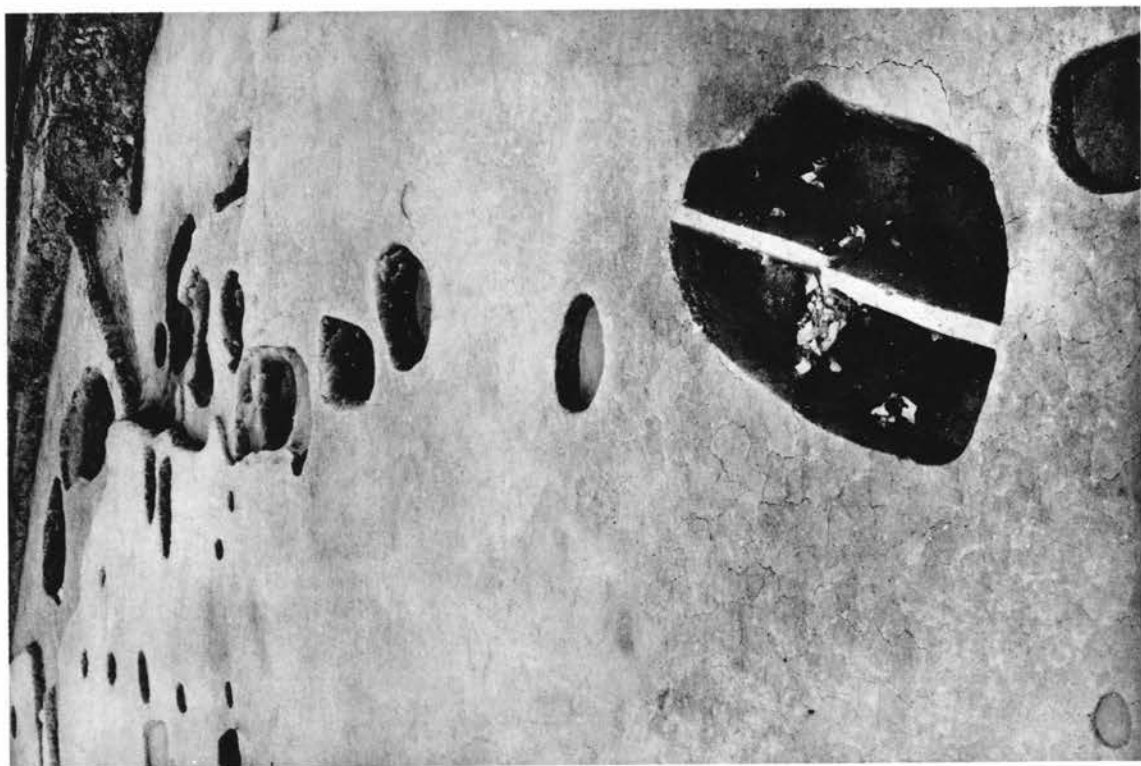


(2) II地区SD02遺物出土状況(最下層)

(1) II地区土坑検出状況(西から)

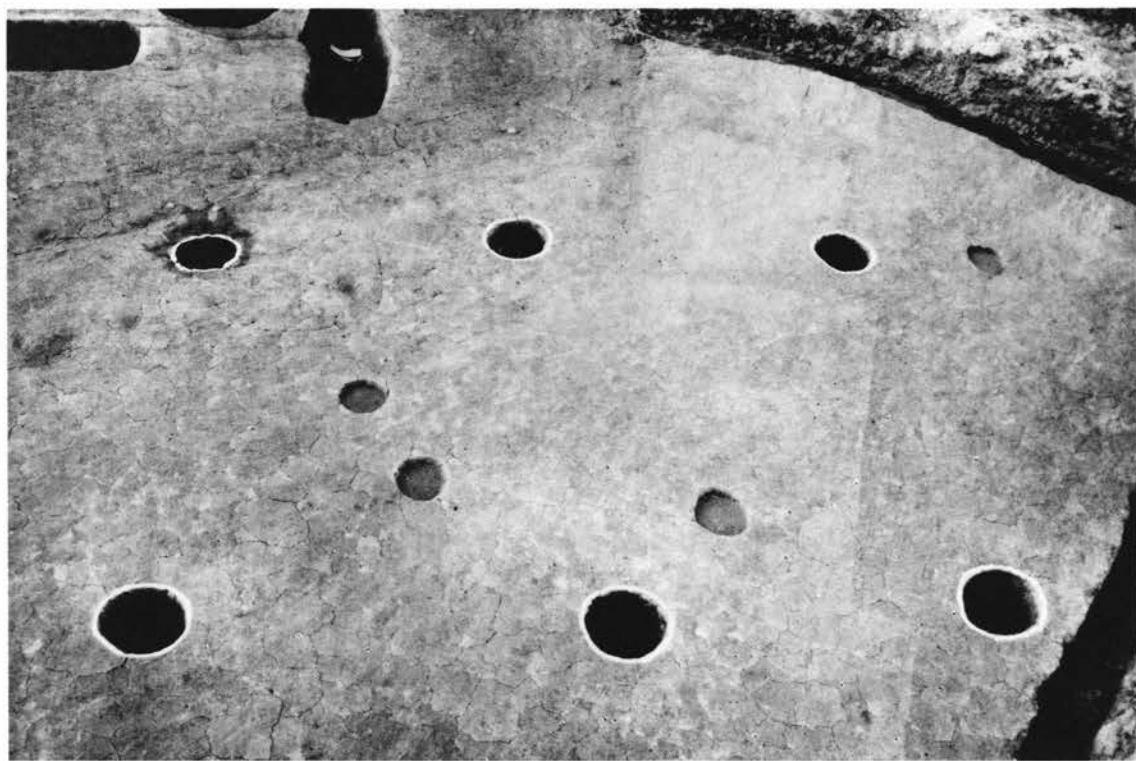


(2) II地区土坑検出状況(東から)





(1) II地区SD03検出状況（北から）



(2) II地区SB01検出状況（南から）



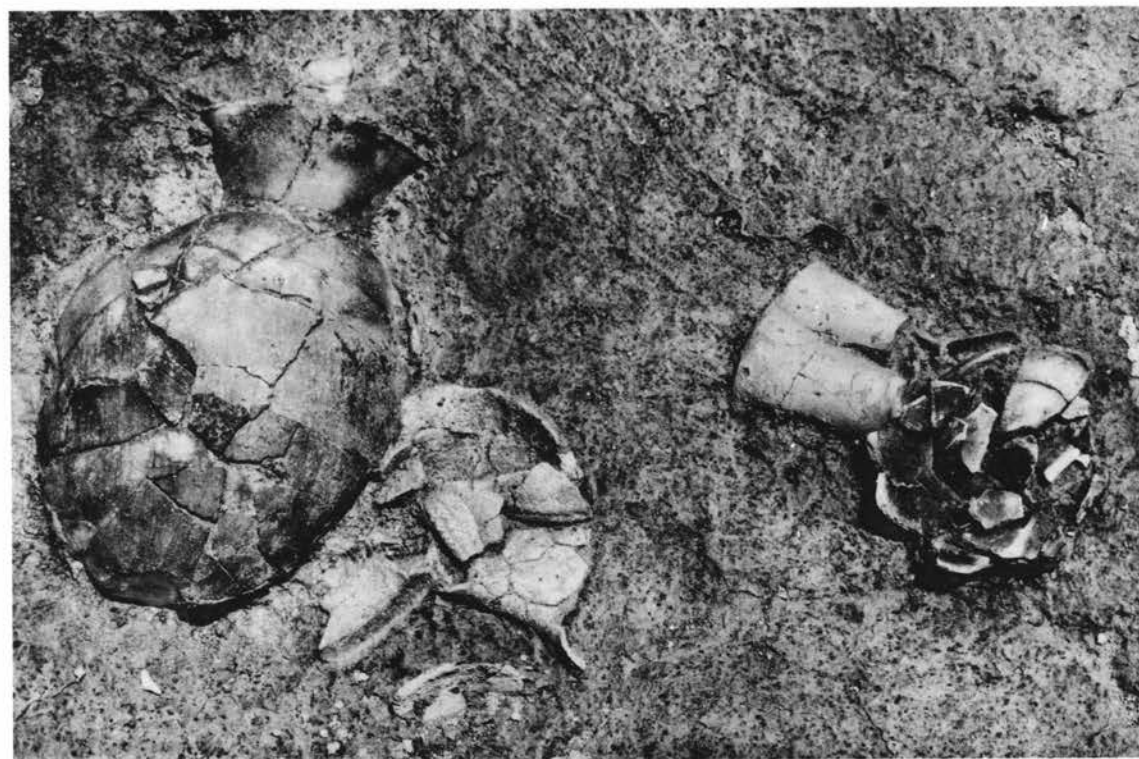
(1) II地区SK08遺物出土状況



(2) II地区SK15・16検出状況（西から）



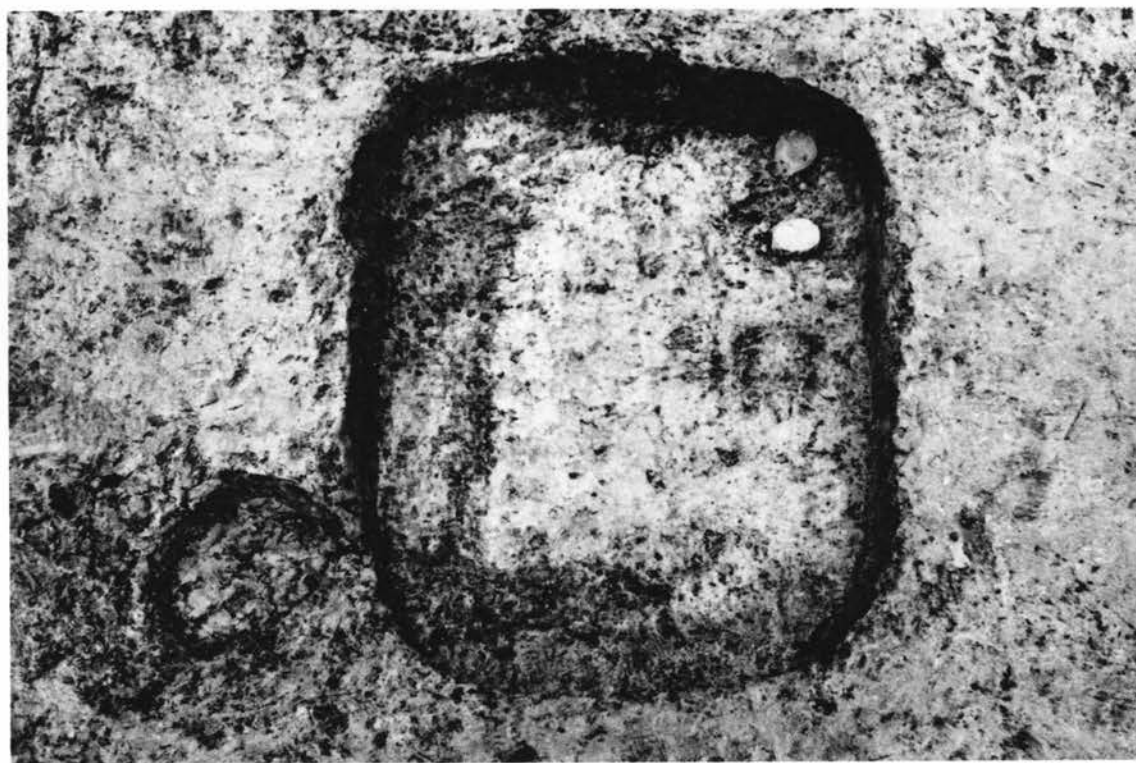
(1) II地区SK19遺物出土状況



(2) SX01遺物出土状況



(1) IV地区SK01検出状況



(2) IV地区SK06検出状況





1



3

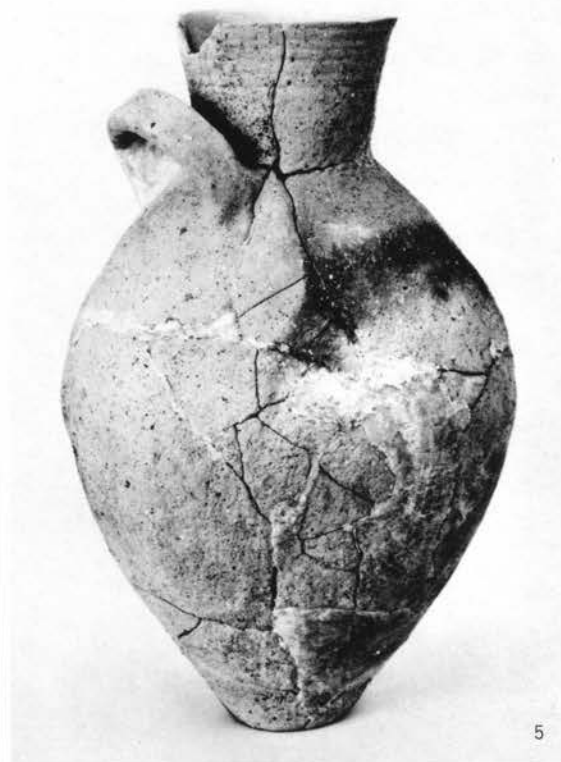


2



4

Ⅱ地区出土弥生土器 (1)  
SD01; 1~4



Ⅱ地区出土弥生土器(2)  
SD01:1~5



1



4



2



5

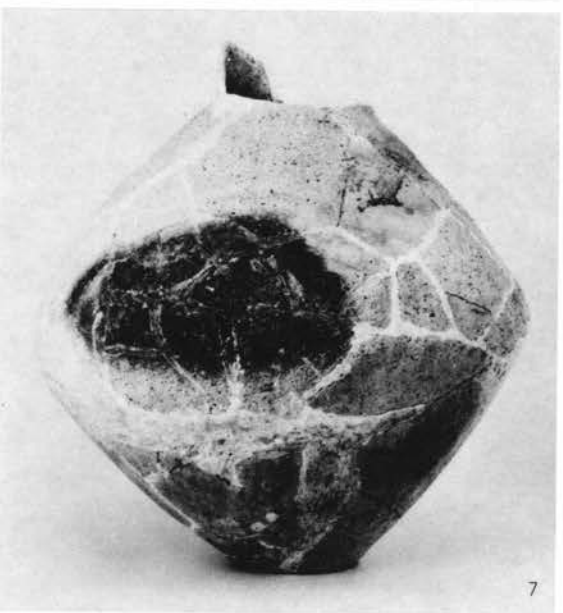


3

Ⅱ地区出土弥生土器 (3)  
SD01:1~5



Ⅱ地区出土弥生土器(4)  
SD01:1~4・7 SD03:5



Ⅱ地区出土弥生土器 (5)  
SD02;1~7



1



4



2



5



3

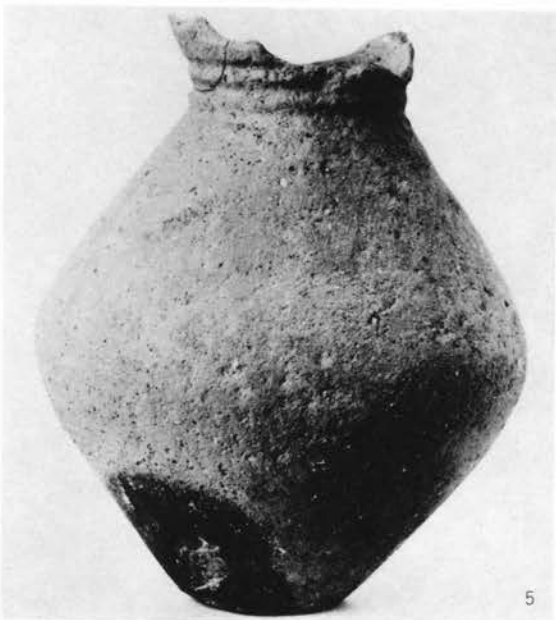
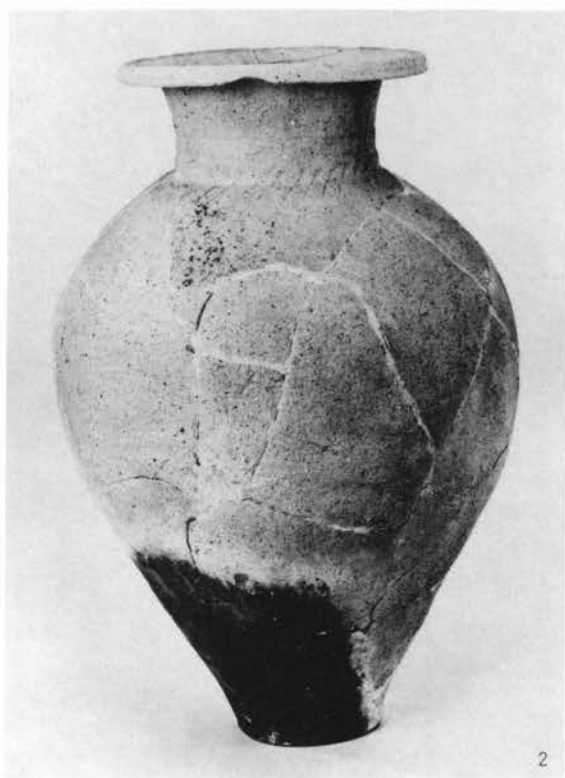
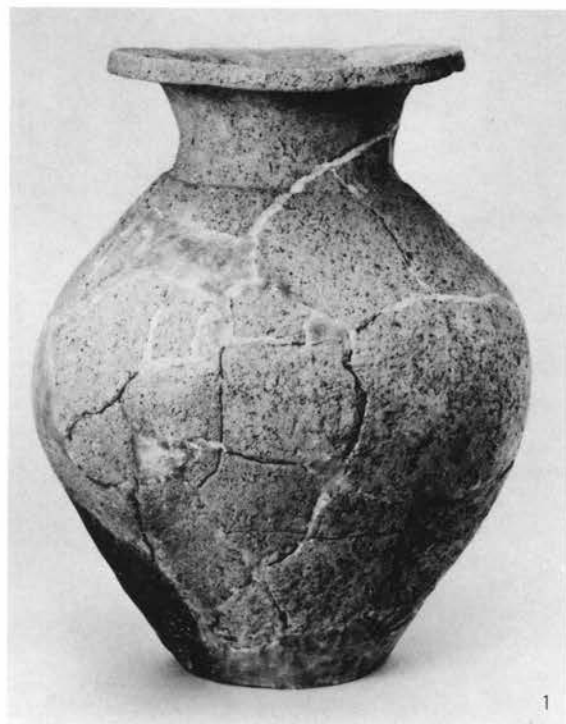


6

Ⅱ地区出土弥生土器 (6)  
SD02; 1~6



Ⅱ地区出土弥生土器 (7)  
SD02:1~5 SK16:6



Ⅱ地区出土弥生土器 (8)

SK07;3 SK08;1·2 SK33;4·5



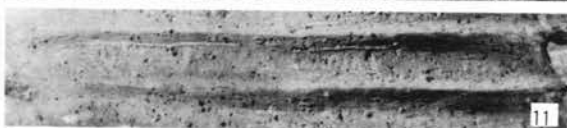


II地区出土弥生土器(9)  
SK19;1・2 SK01;4・5 ピット;3

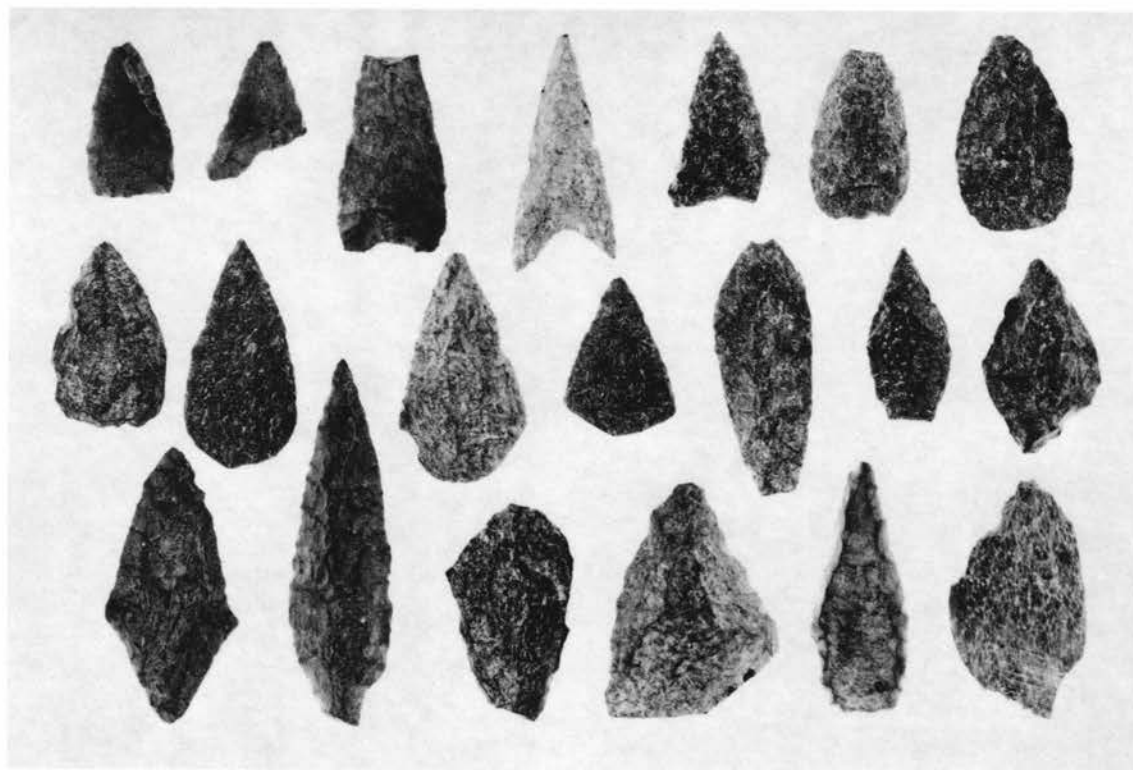


Ⅳ地区出土弥生土器 (10)

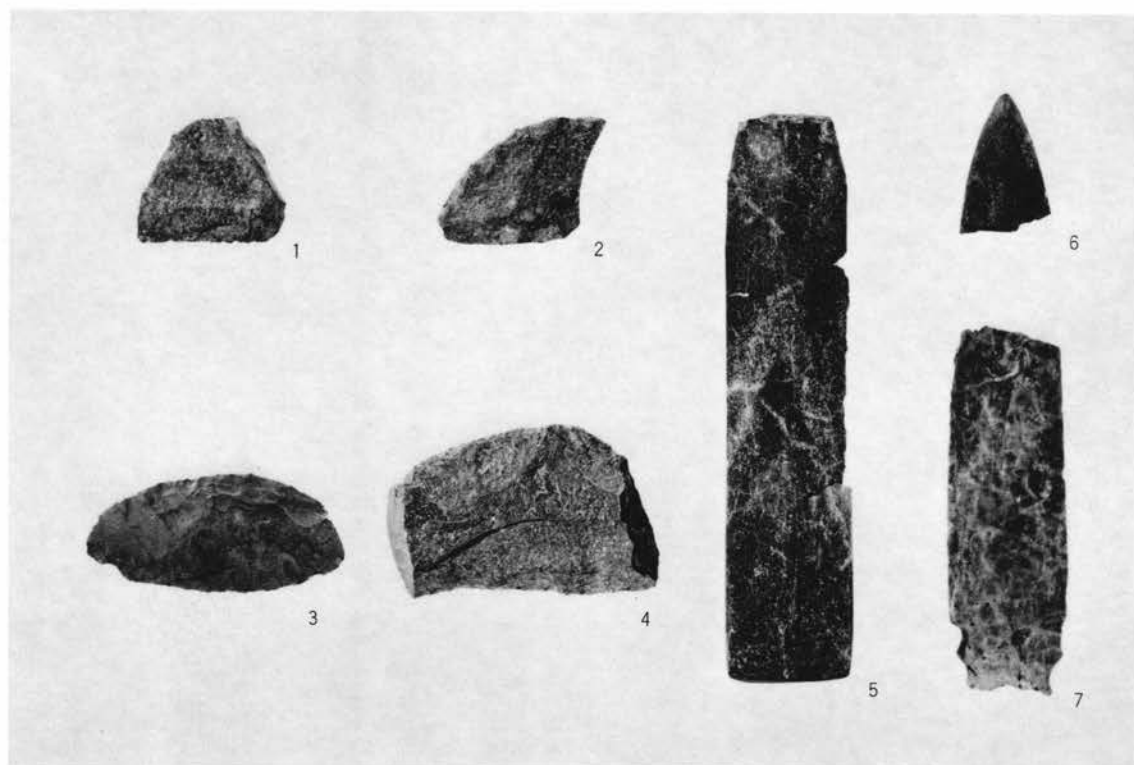
SD01;5 SD03;1·4 SD04;2·3



弥生土器の文様

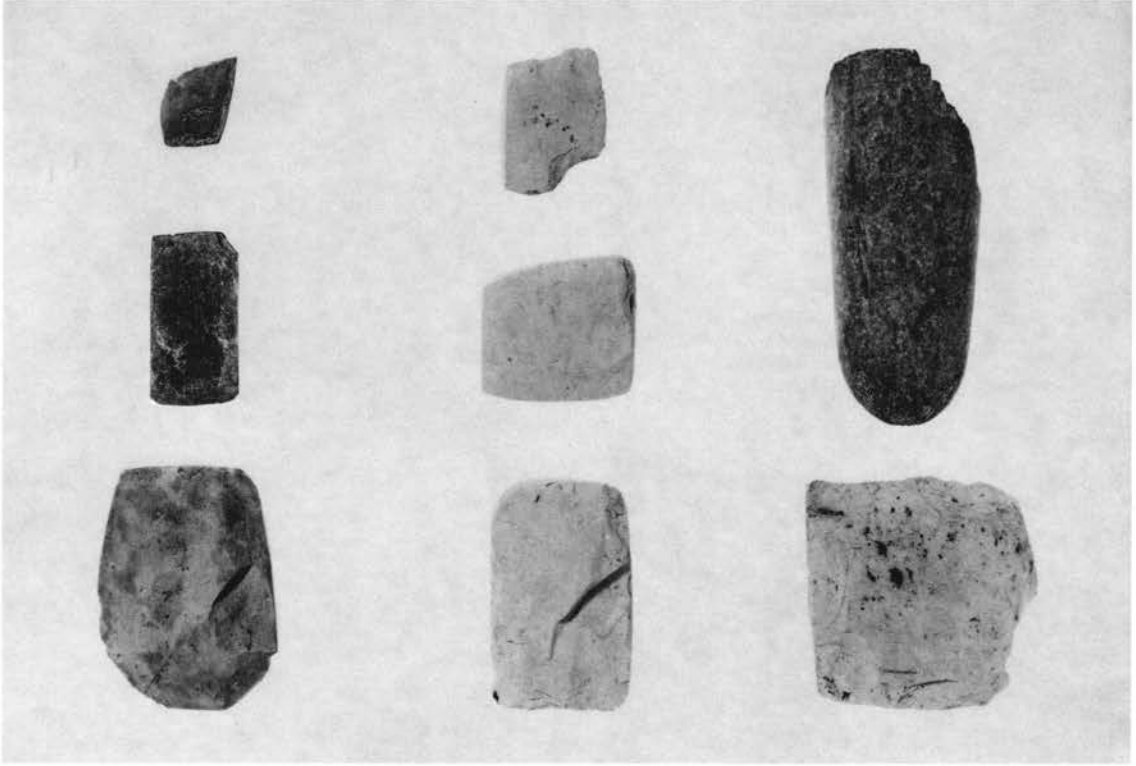


(1) 石 鏃



(2) 石器類

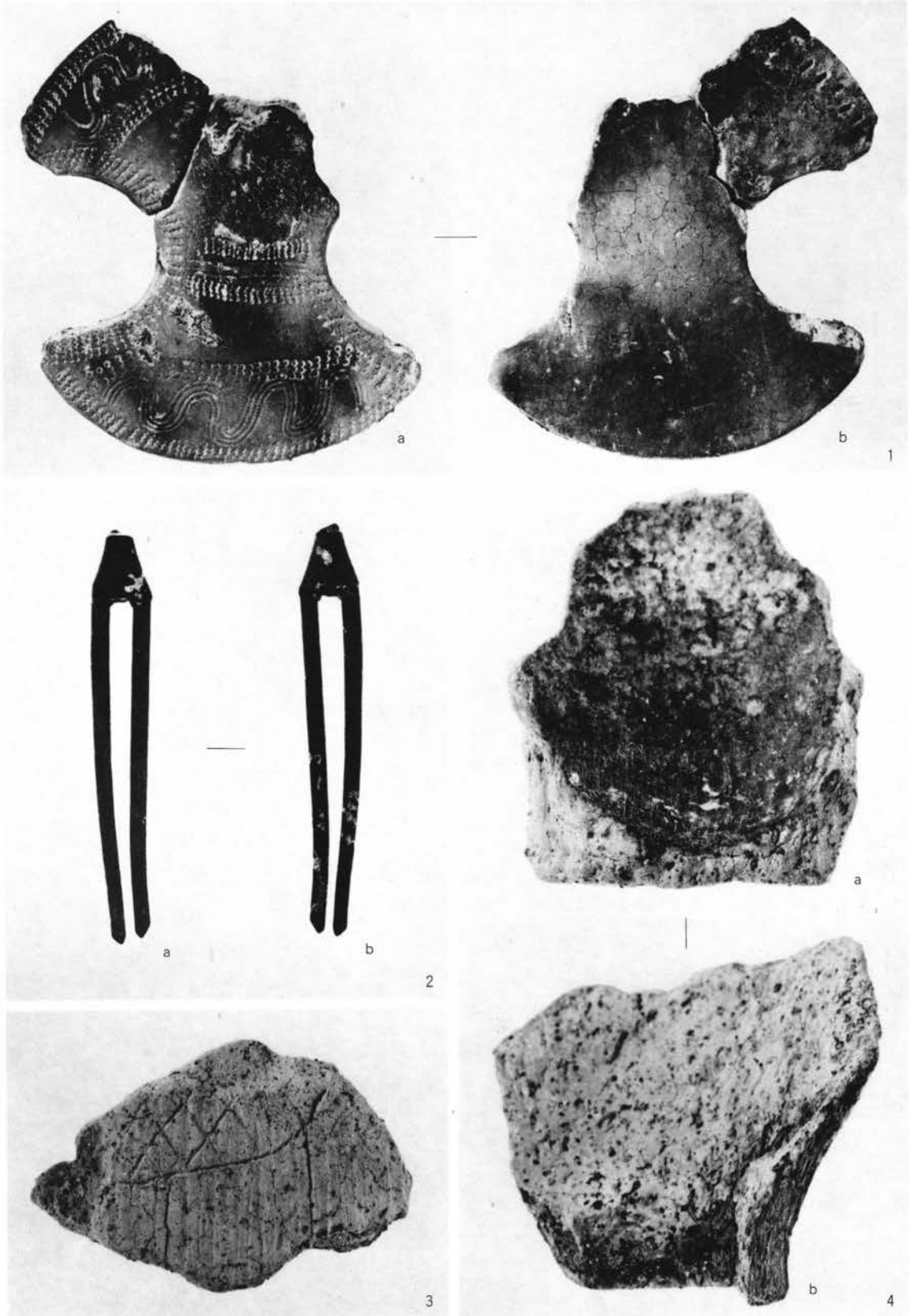
1~4; 削器 5~7; 磨製石劍



(1) 磨製石斧 (1)



(2) 磨製石斧 (2)



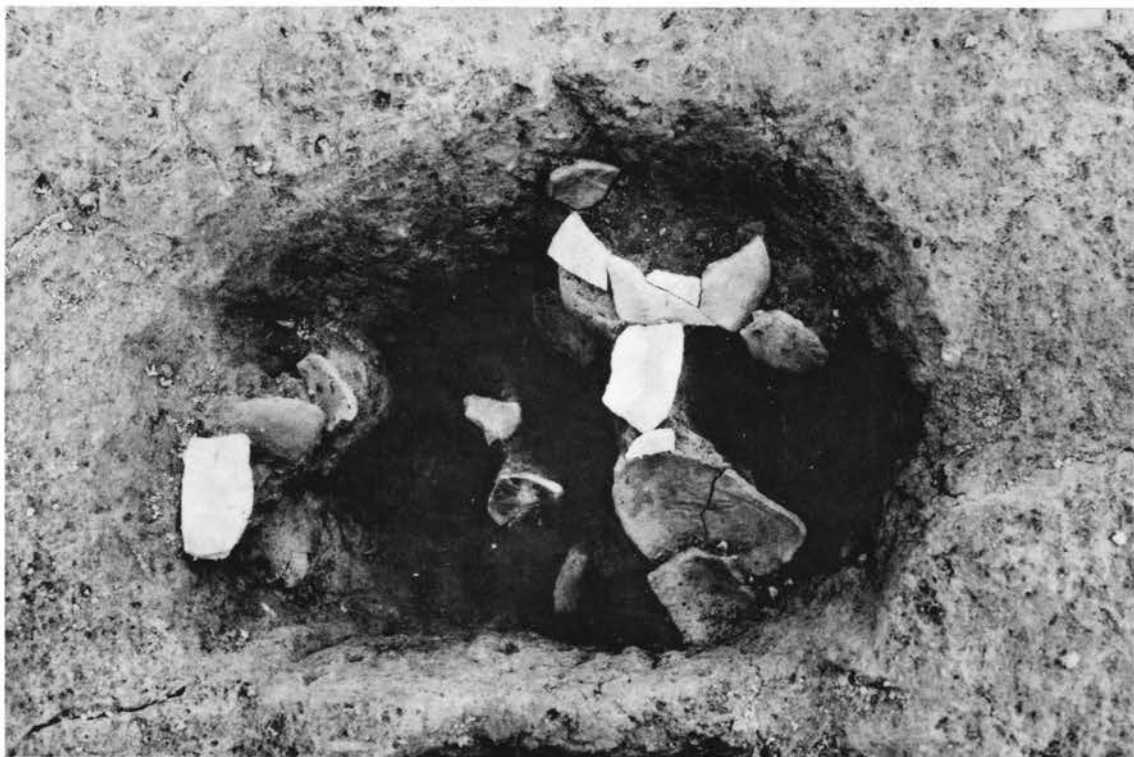
その他の遺物

1; 分銅形土製品 (Ⅱ地区SD01) 2; 簪 (Ⅰ地区SK09)

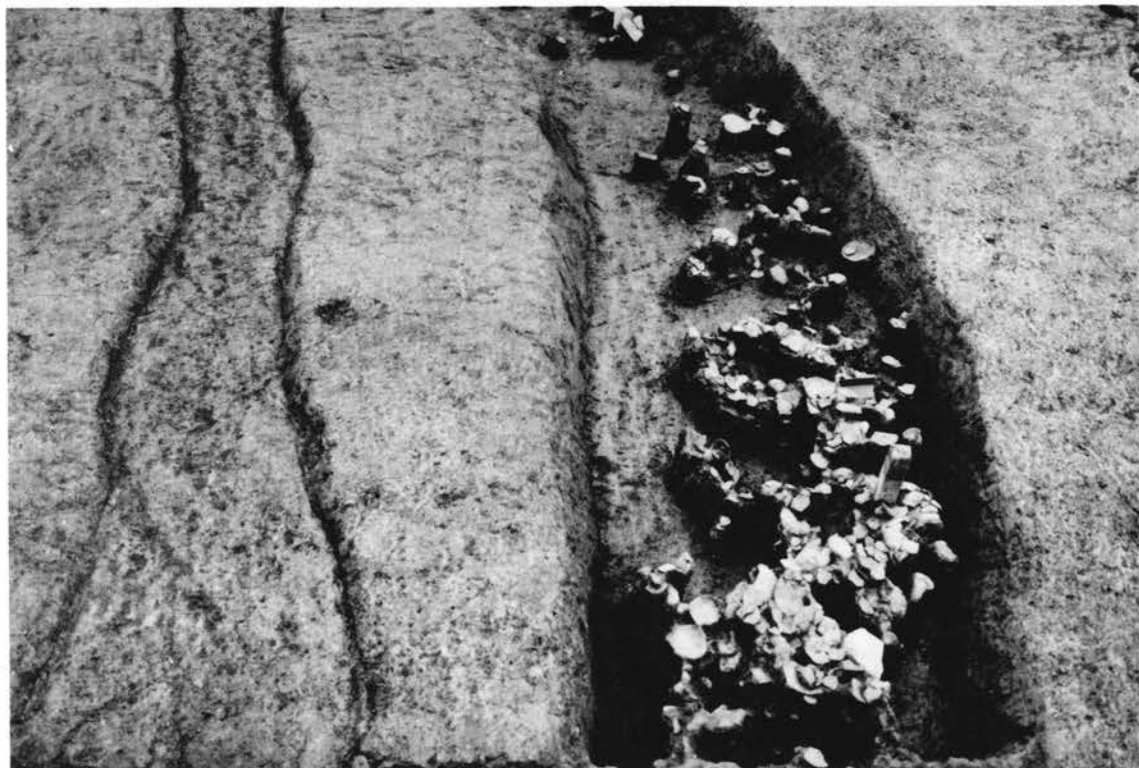
3; 絵画土器 (Ⅱ地区SD02) 4; 底部充填の状況



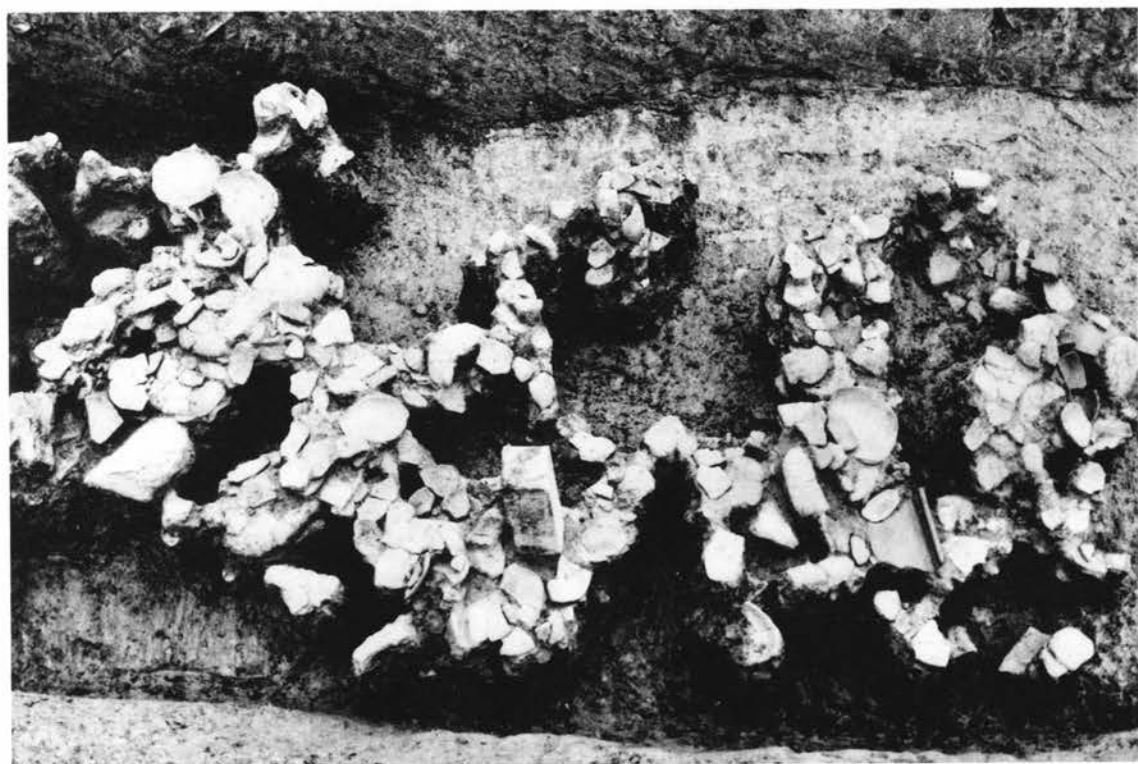
(1) Aトレンチ掘立柱建物跡群検出状況（南から）



(2) Aトレンチ柱穴完掘状況



(1) Aトレンチ溝 (SD01・02) 検出状況 (西から)



(2) Aトレンチ溝 (SD01) 内遺物出土状況





(1) Dトレンチ遺構検出状況（北から）



(2) Dトレンチ土坑（SK05・06）検出状況



(1) Eトレンチ上層遺構検出状況（北から）



(2) Eトレンチ下層遺構検出状況（北から）



143-60



140-11



136-25



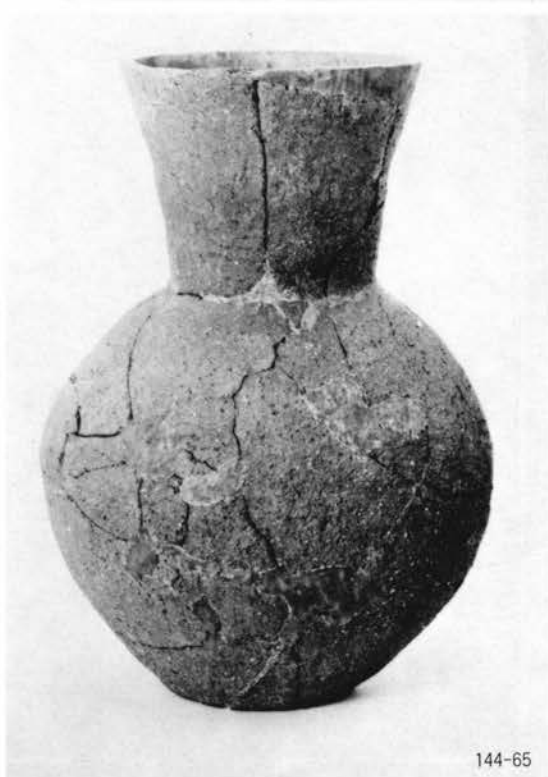
142-38



142-42

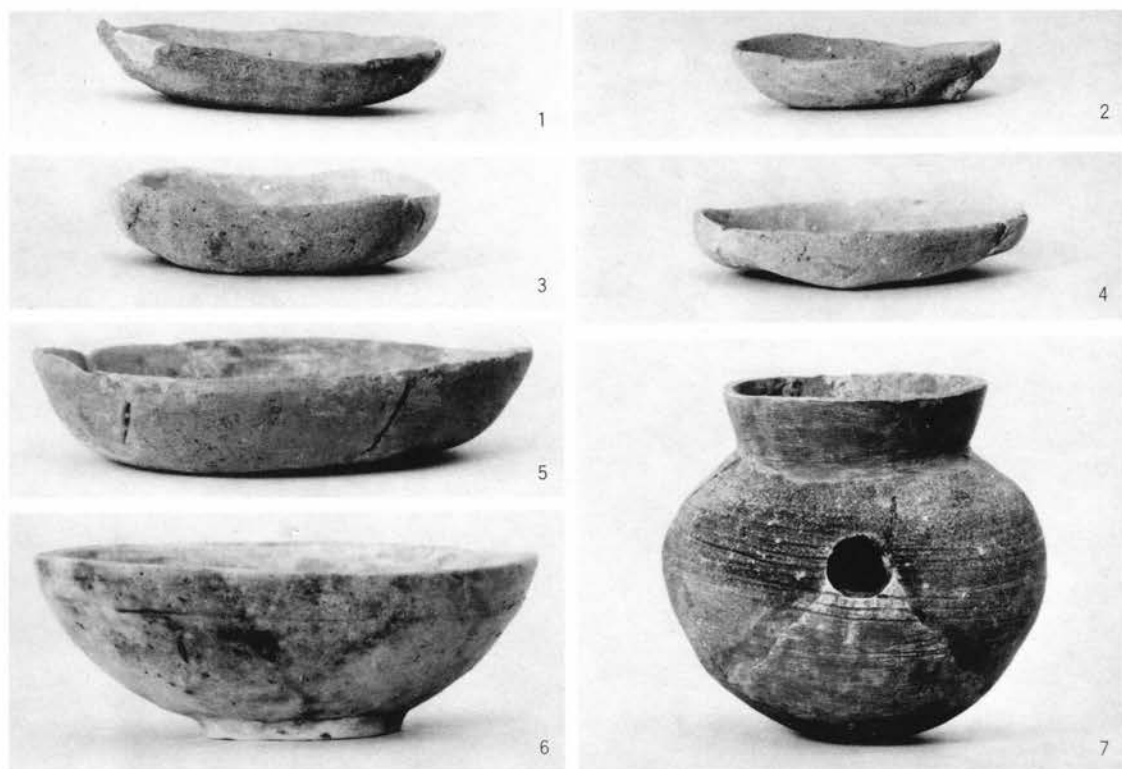


143-55

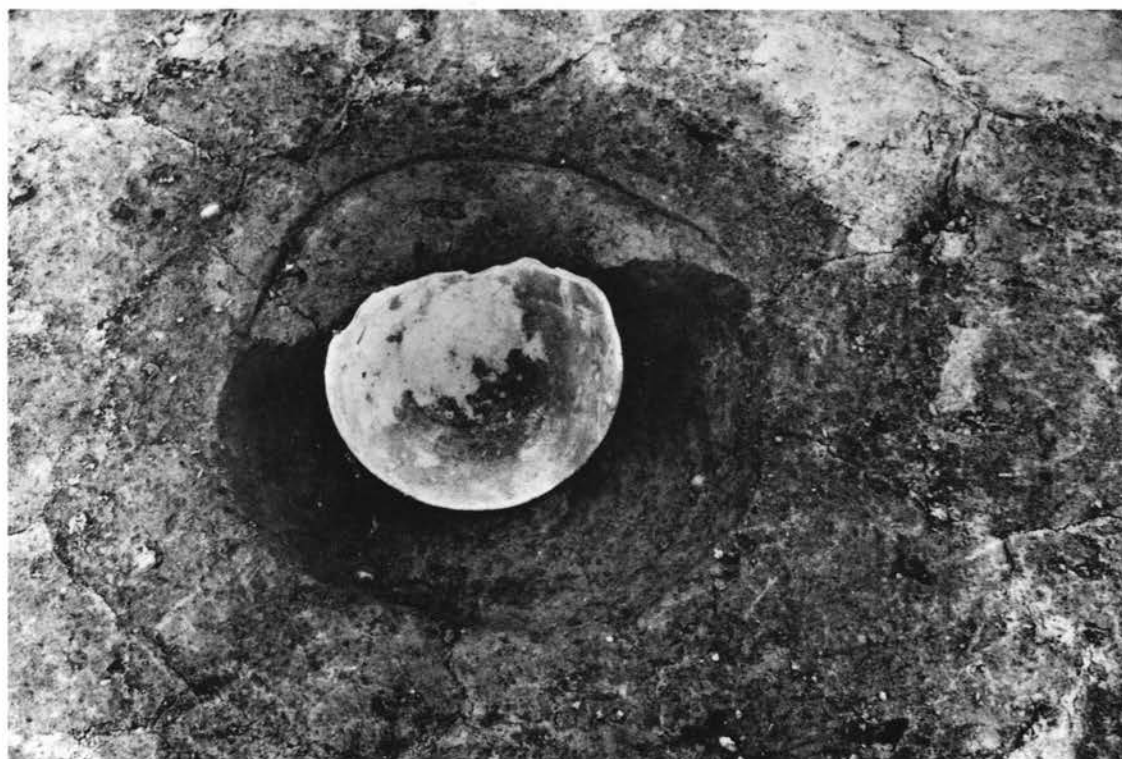


144-65





(1) 出土遺物 (3) 土師器皿1~5, 瓦器碗6, 須恵器甕7



(2) Cトレンチ柱穴内瓦器碗検出状況



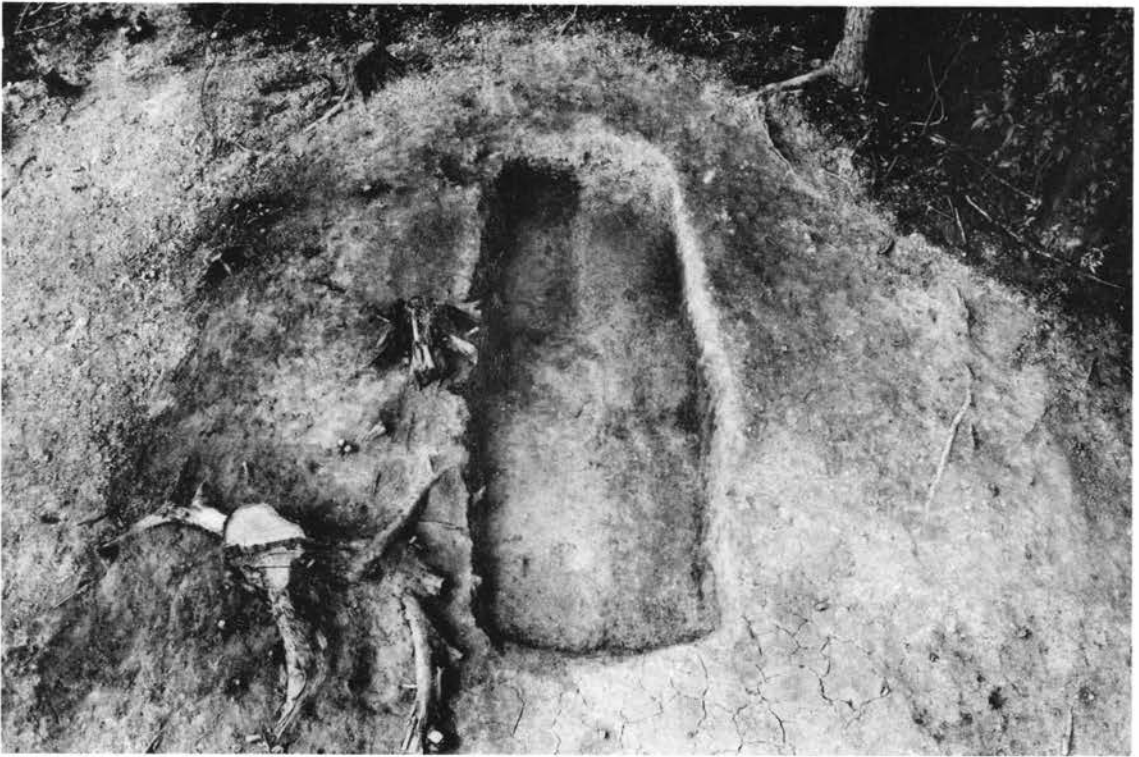
(1) 福垣北古墳群全景 (東から)



(2) 福垣北古墳群全景 (北から)



(1) 第1号墳完掘状況



(2) 第1号墳主体部完掘状況

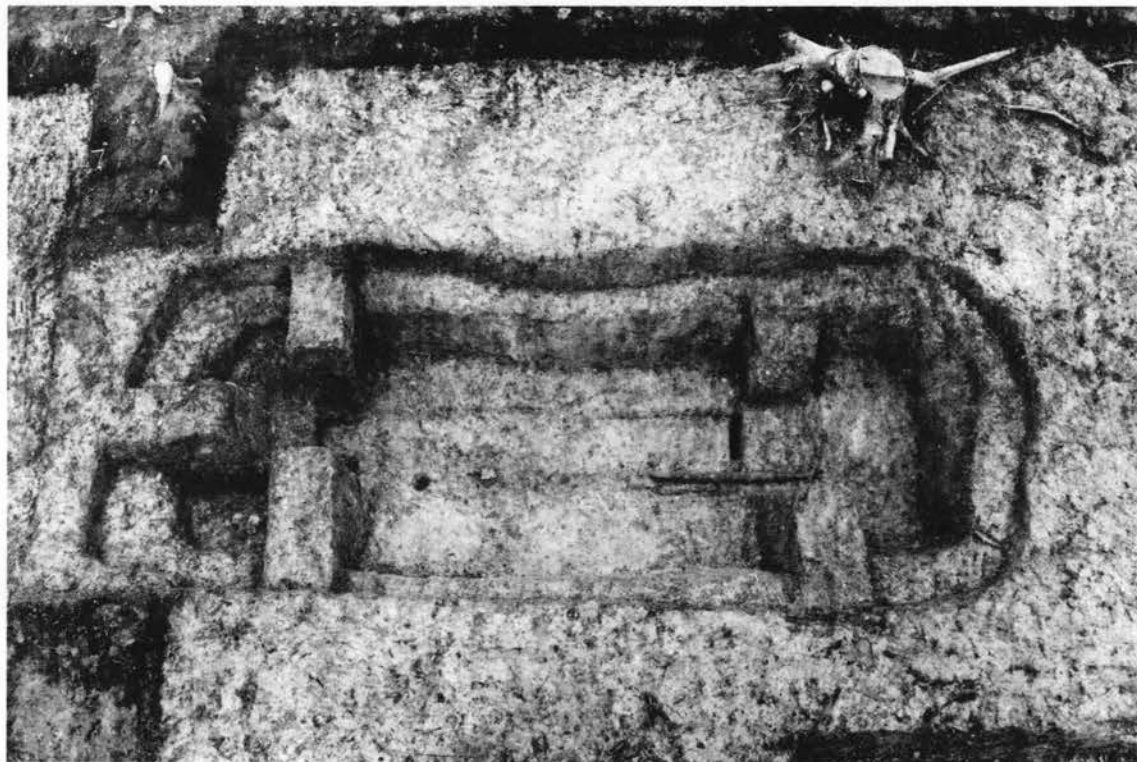


(1) 第2・3号墳完掘状況



(2) 第2号墳完掘状況





(1) 第2号墳完掘状況



(2) 第2号墳中心埋葬施設検出状況



(1) 第2号墳棺内鉄鍬出土状況



(2) 第2号墳棺内剣出土状況



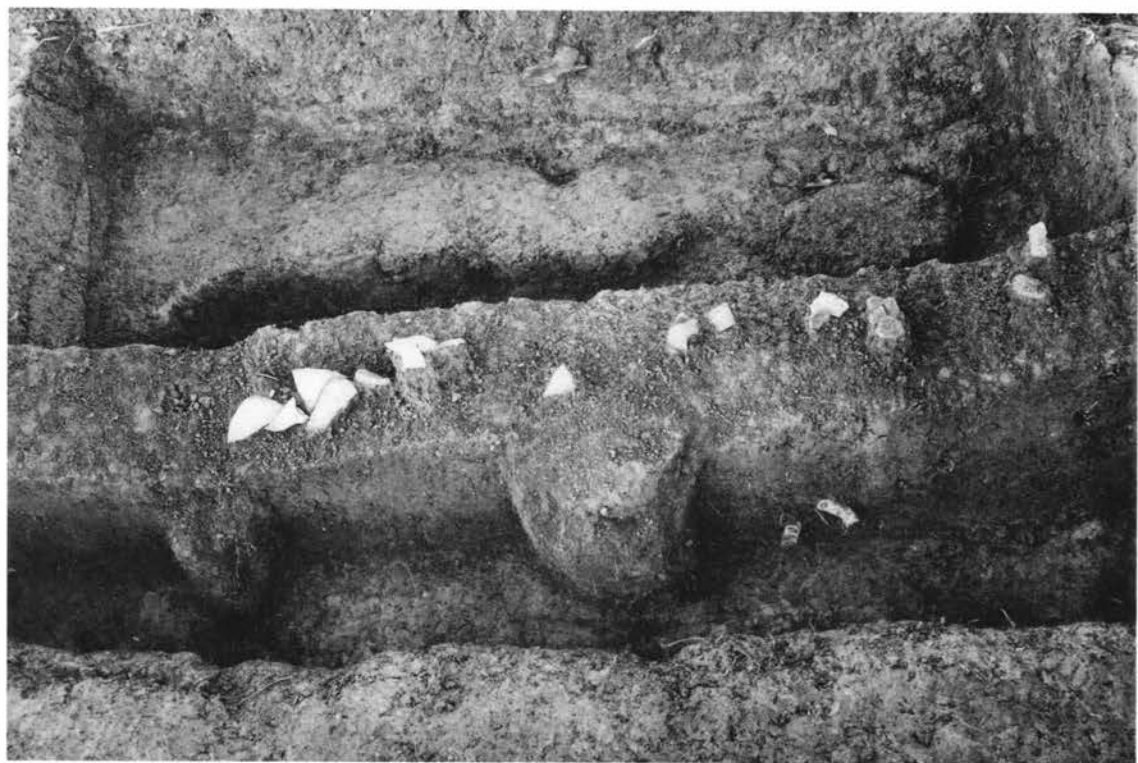
(1) 第3号墳完掘状況



(2) 第3号墳中心埋葬施設検出状況



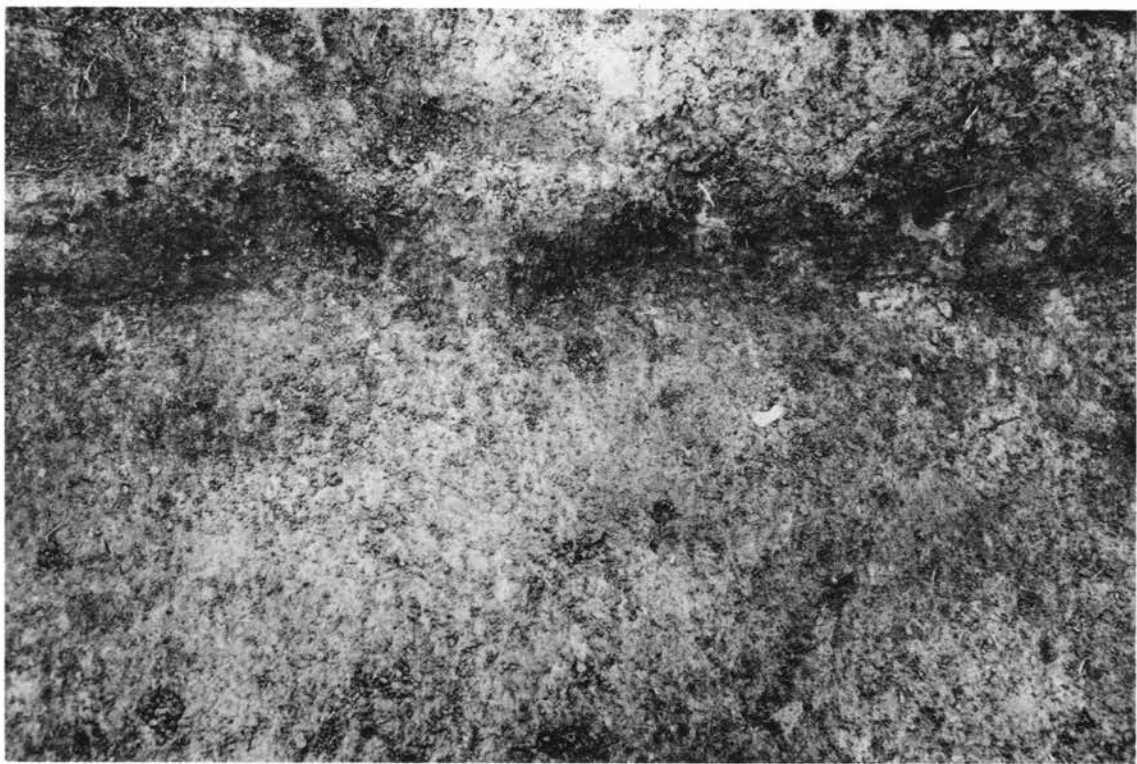
(1) 第3号墳墓壙上面土器出土状況



(2) 第3号墳棺内剣出土状況



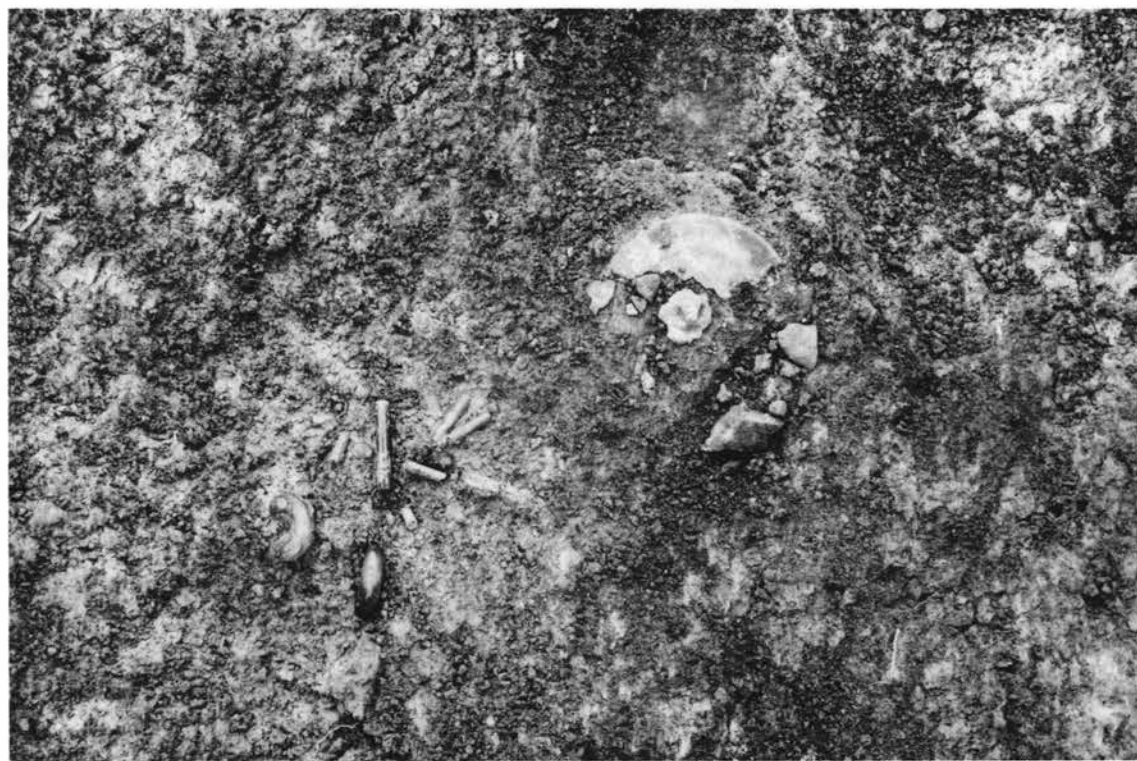
(1) 周辺第1主体完掘状況



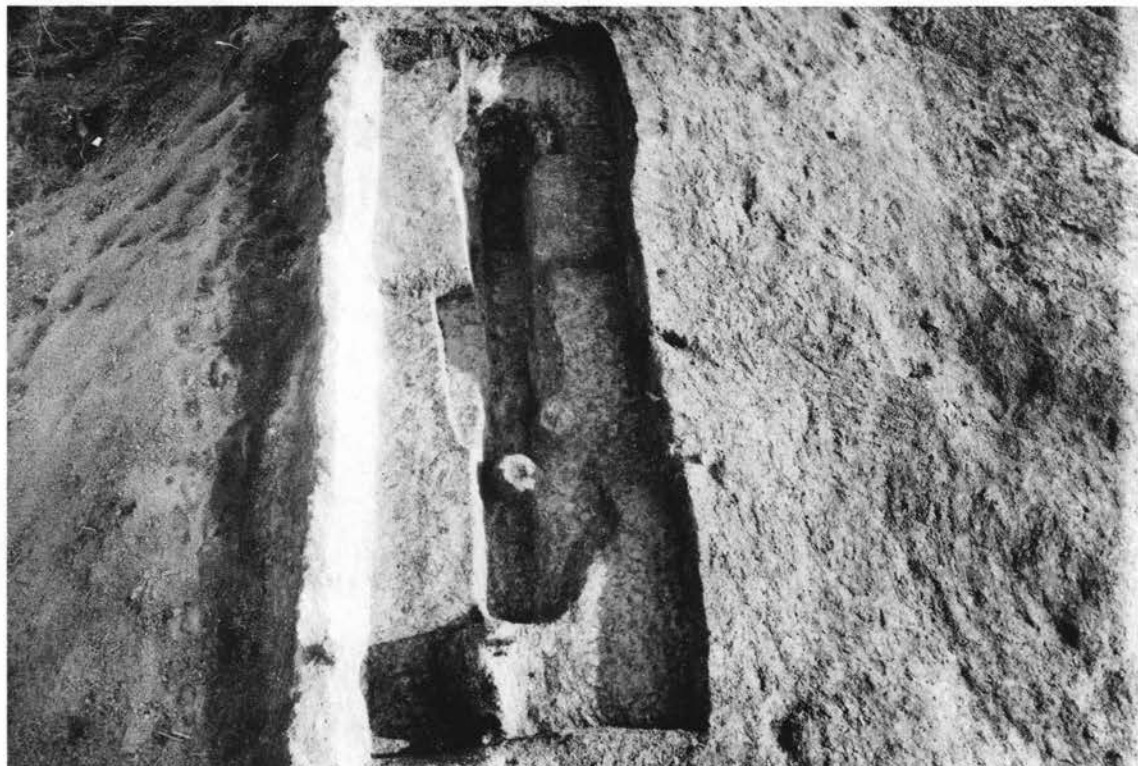
(2) 周辺第1主体玉類出土状況



(1) 周辺第4主体完掘状況



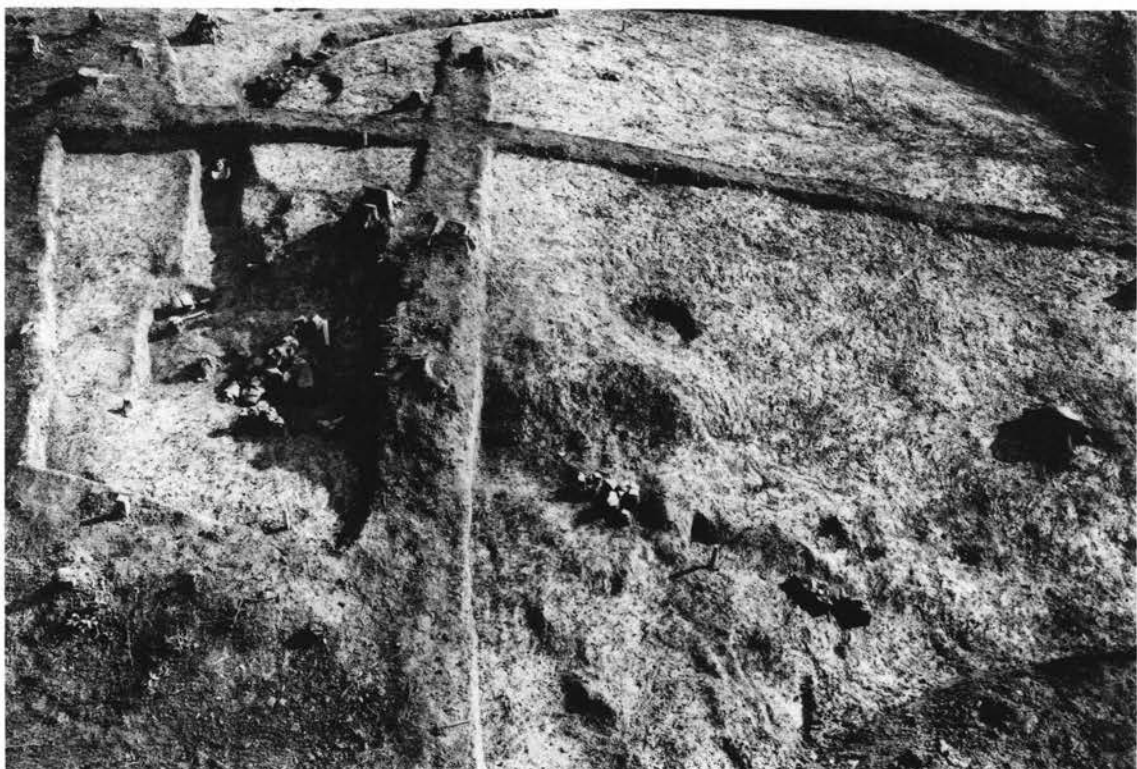
(2) 周辺第4主体玉類出土状況



(1) 5号墳中心埋葬主体掘削状況



(2) 5号墳中心埋葬主体完掘状況

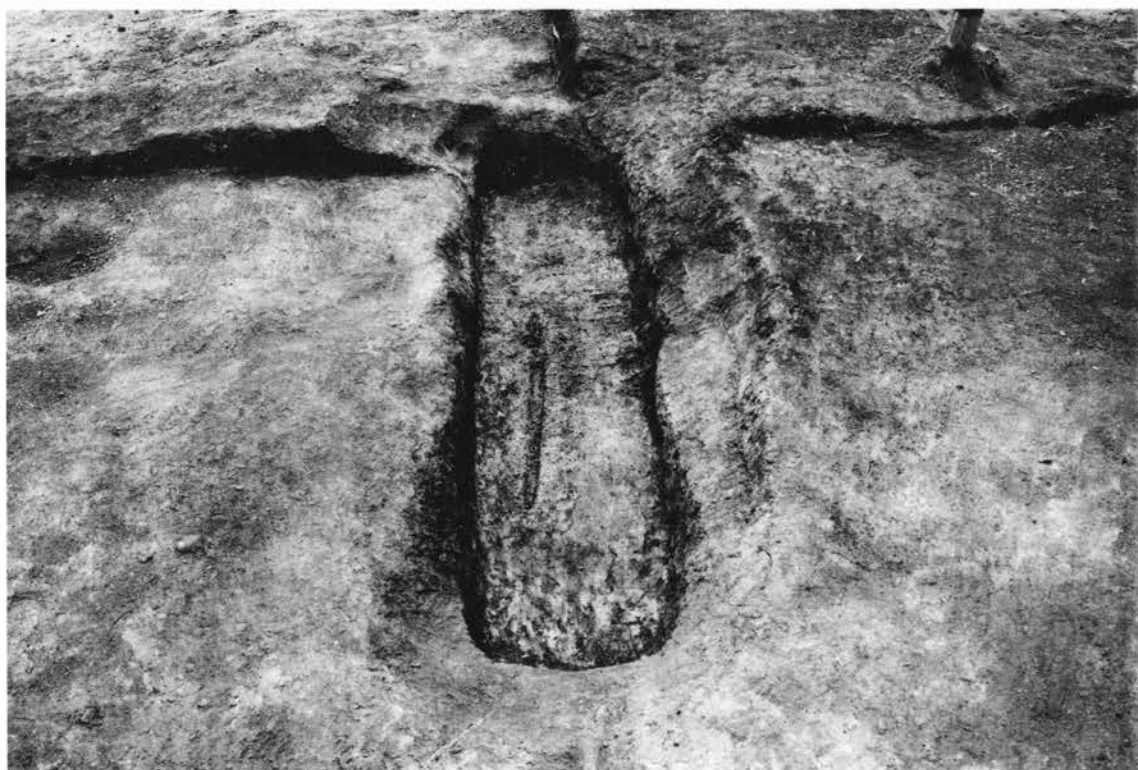


(1) 第4号墳完掘状況



(2) 第4・7号墳周溝内遺物出土状況

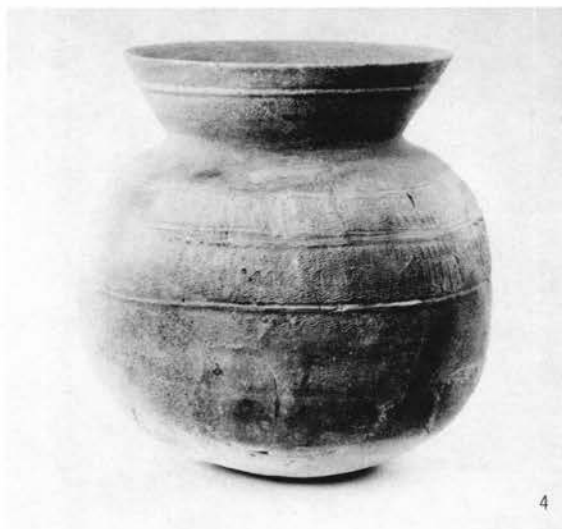




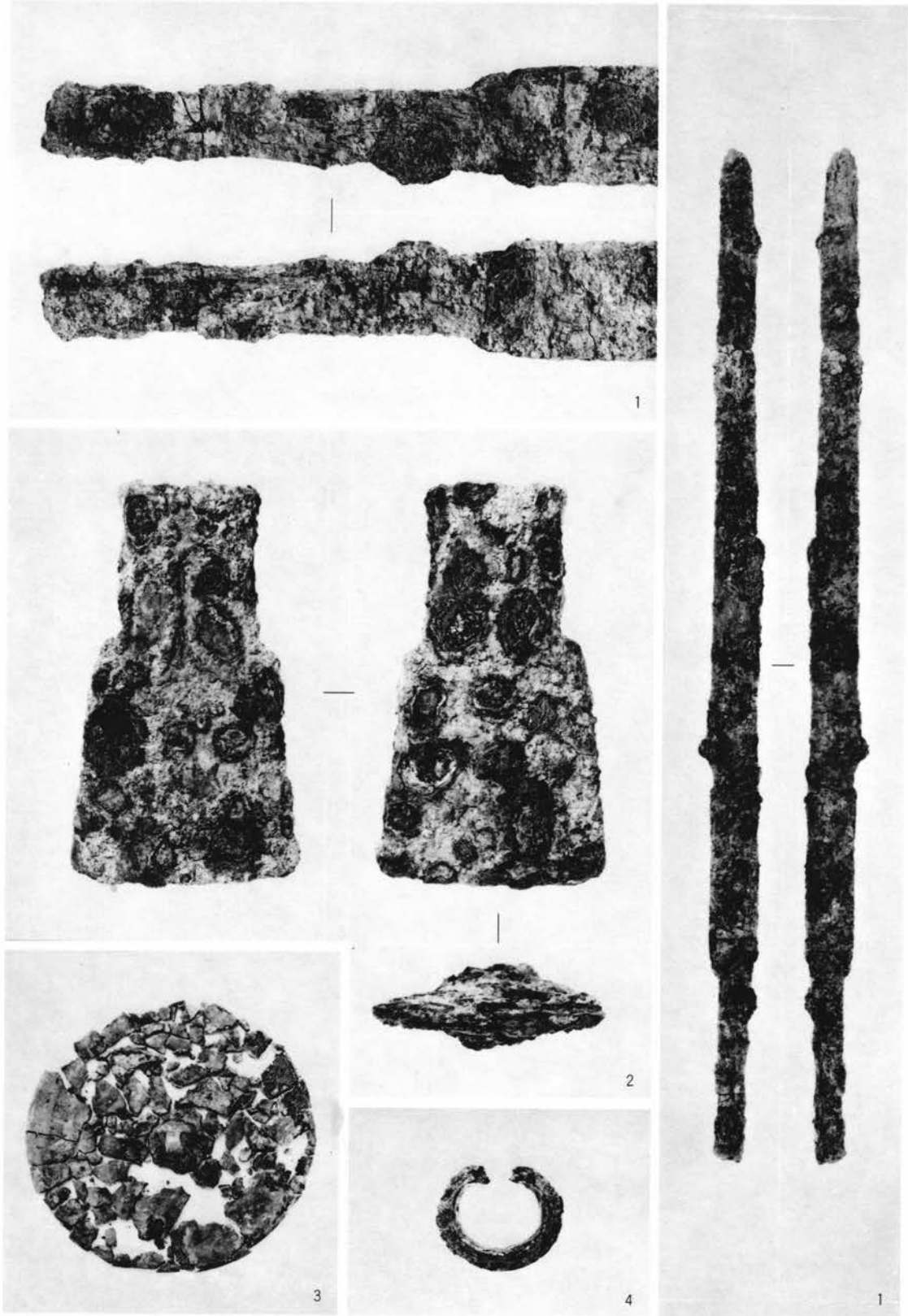
(1) 第6号墳主体部検出状況



(2) 第6号墳鉄剣・鉄鏃出土状況

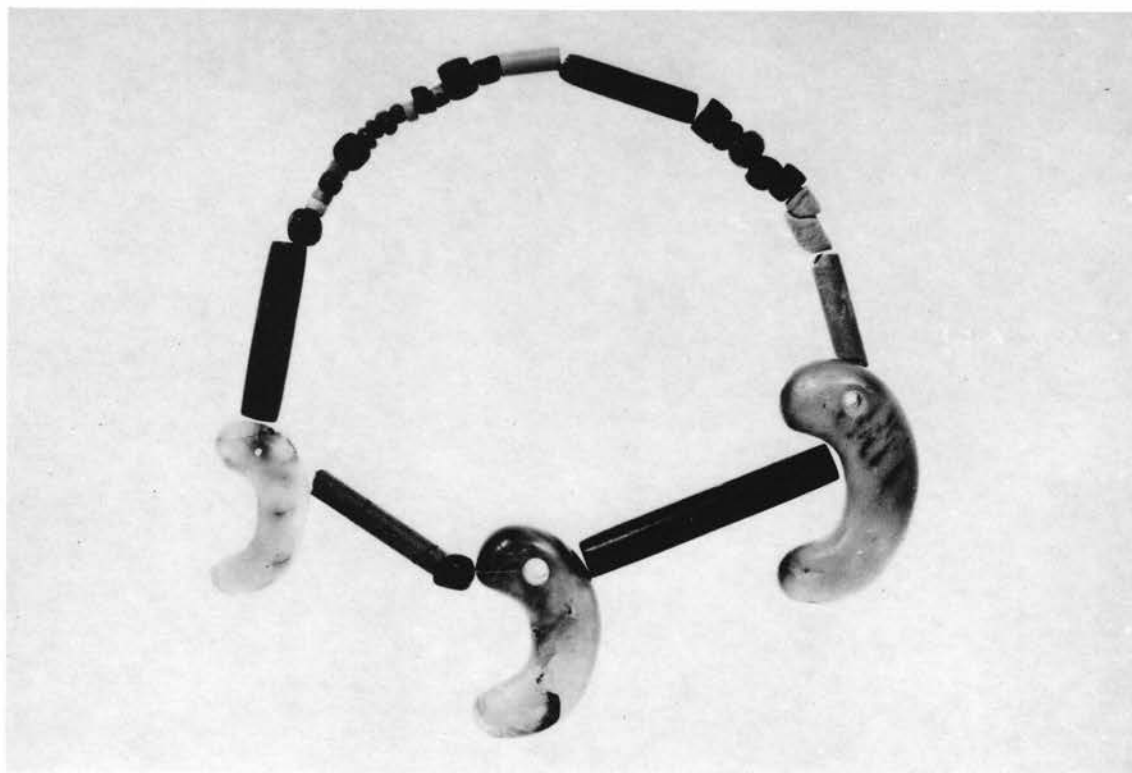


出土遺物 (1) 須恵器・埴輪  
須恵器 2. 第2号墳周辺第4埋葬施設 3. 第2号墳墳丘上 4. 第3号墳中心埋葬施設  
埴輪 5. 第2号墳周辺第1埋葬施設 4. 第4号墳周溝内

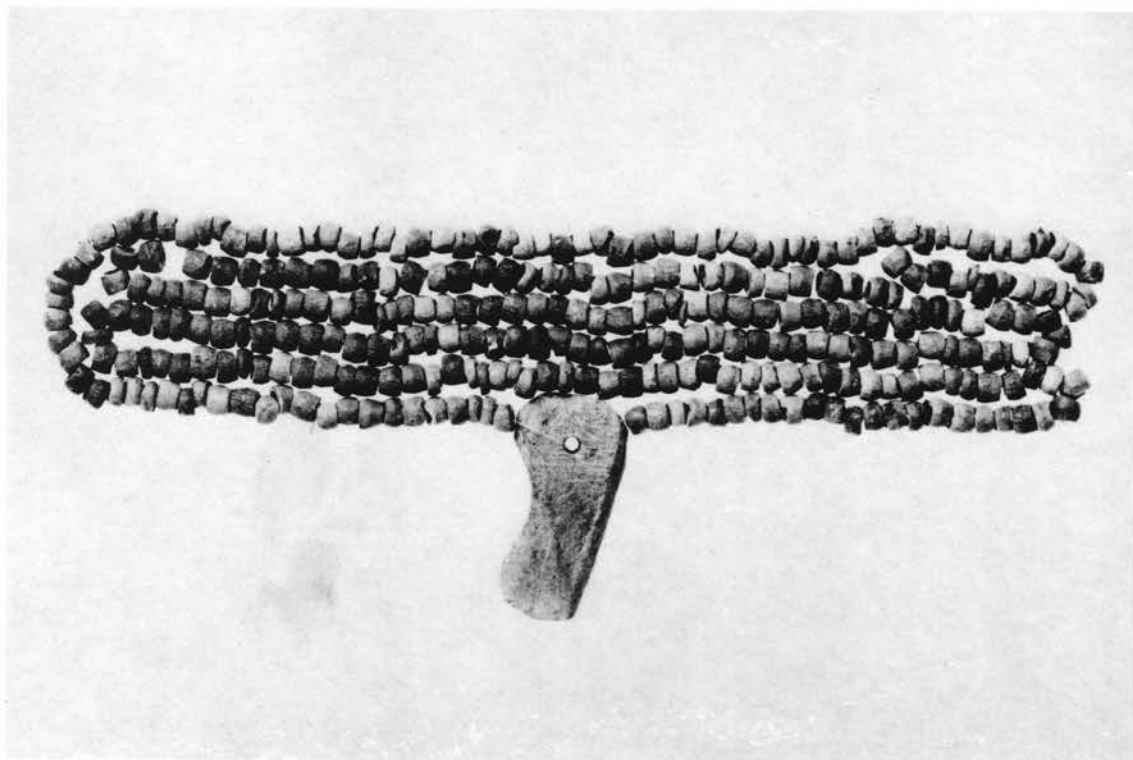


出土遺物 (2) 鉄製品

1. 第2号墳中心埋葬施設出土鉄剣 2. 第2号墳中心埋葬施設出土鉄斧  
3. 第2号墳周辺第4埋葬施設出土鏡 4. SD01出土銀環



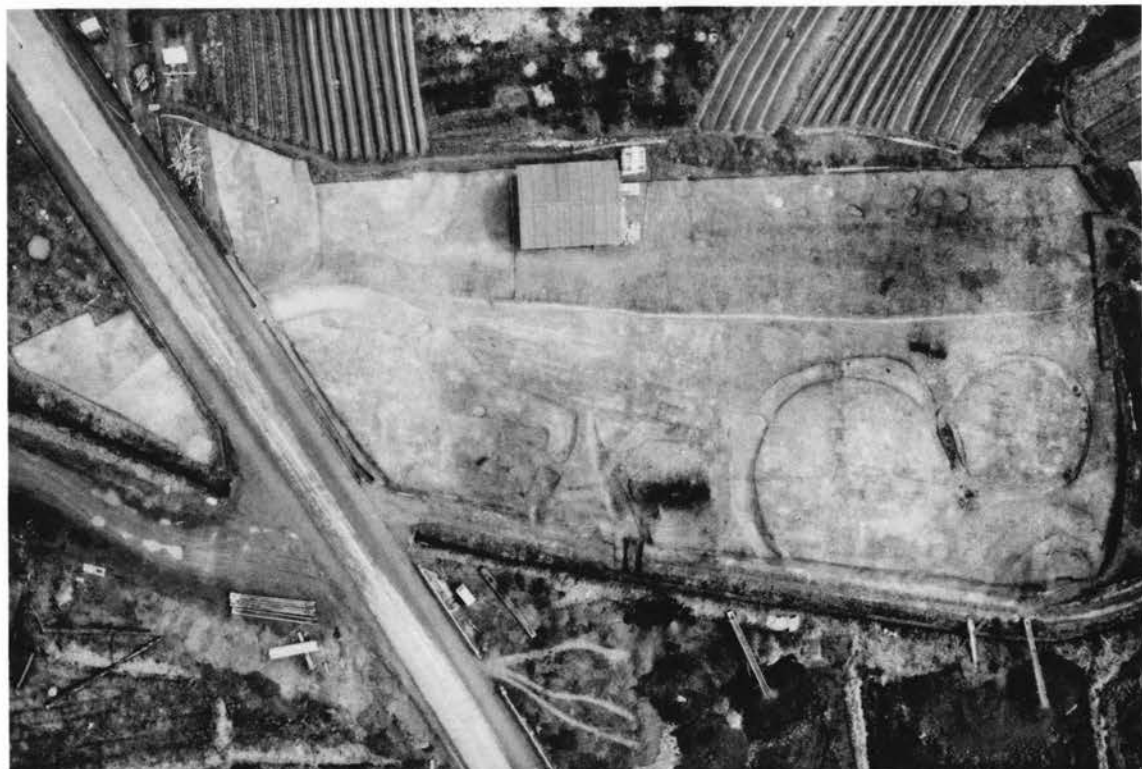
(1) 第2号墳周辺第4埋葬施設出土玉類



(2) 第2号墳周辺第1埋葬施設出土玉類



野崎古墳群航空写真（上が北）



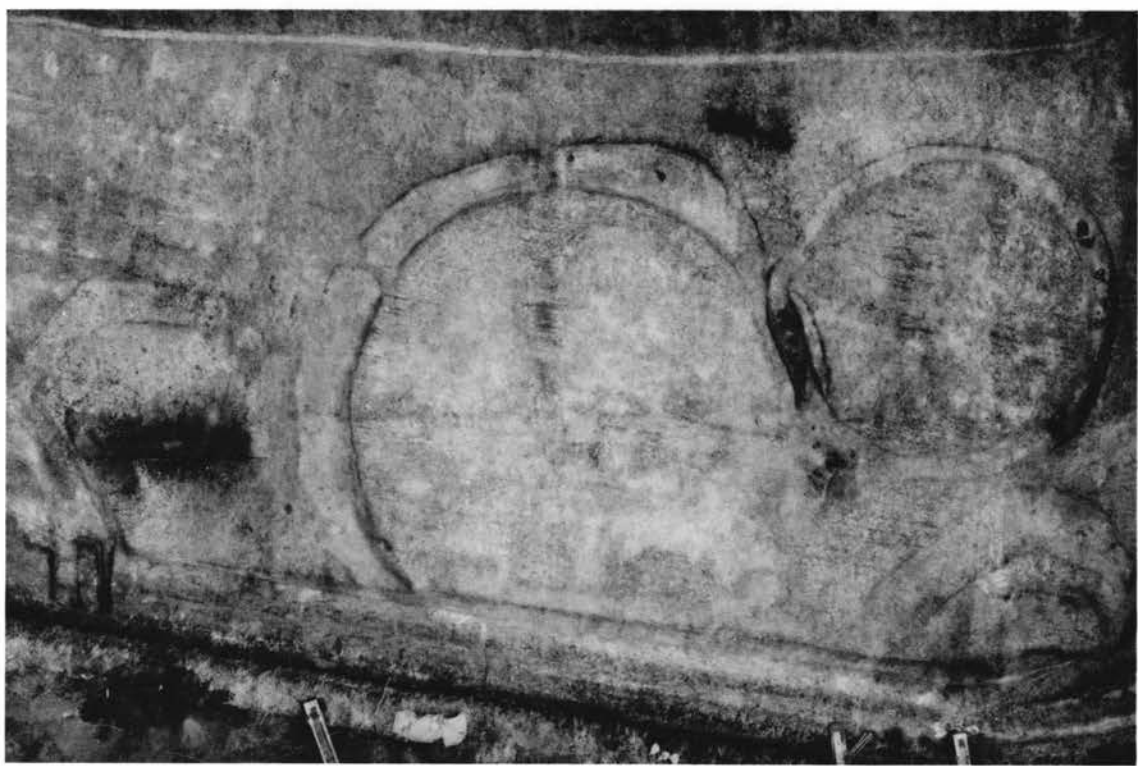
(1) 北地区全景航空写真 (左が北)



(2) 中央地区・南地区全景航空写真 (左が北)



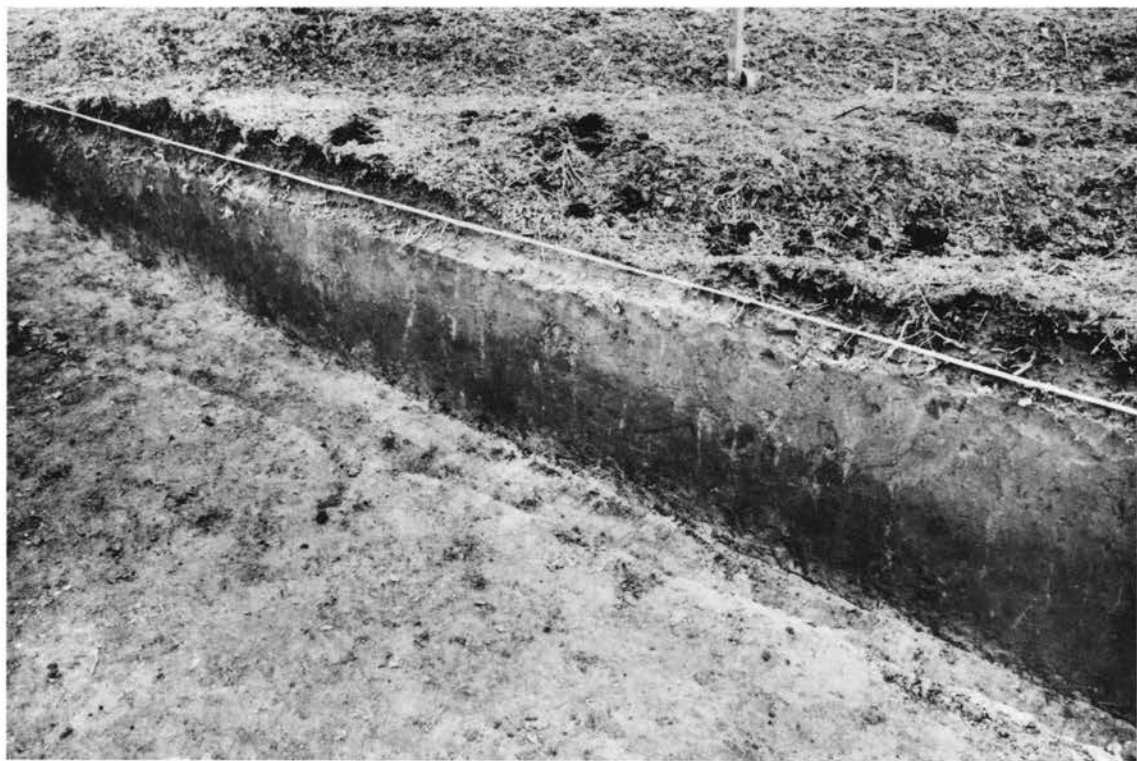
(1) 野崎5号墳・6号墳航空写真 (左が北)



(2) 野崎1～4号墳航空写真 (左が北)



(1) 北地区から中央地区・南地区を望む



(2) 中央地区トレンチ断面 (南西から)





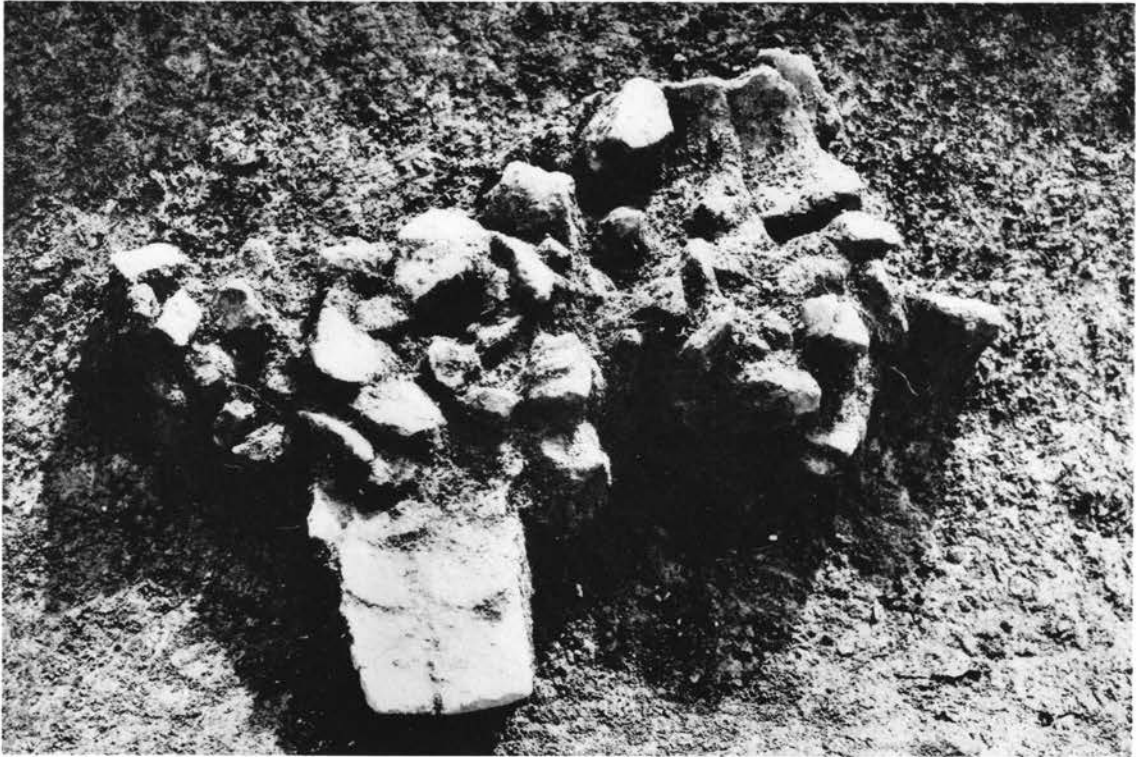
(1) 野崎1号墳周溝南部分(南東から)



(2) 同上(西から)



(1) 4号埴輪出土状況



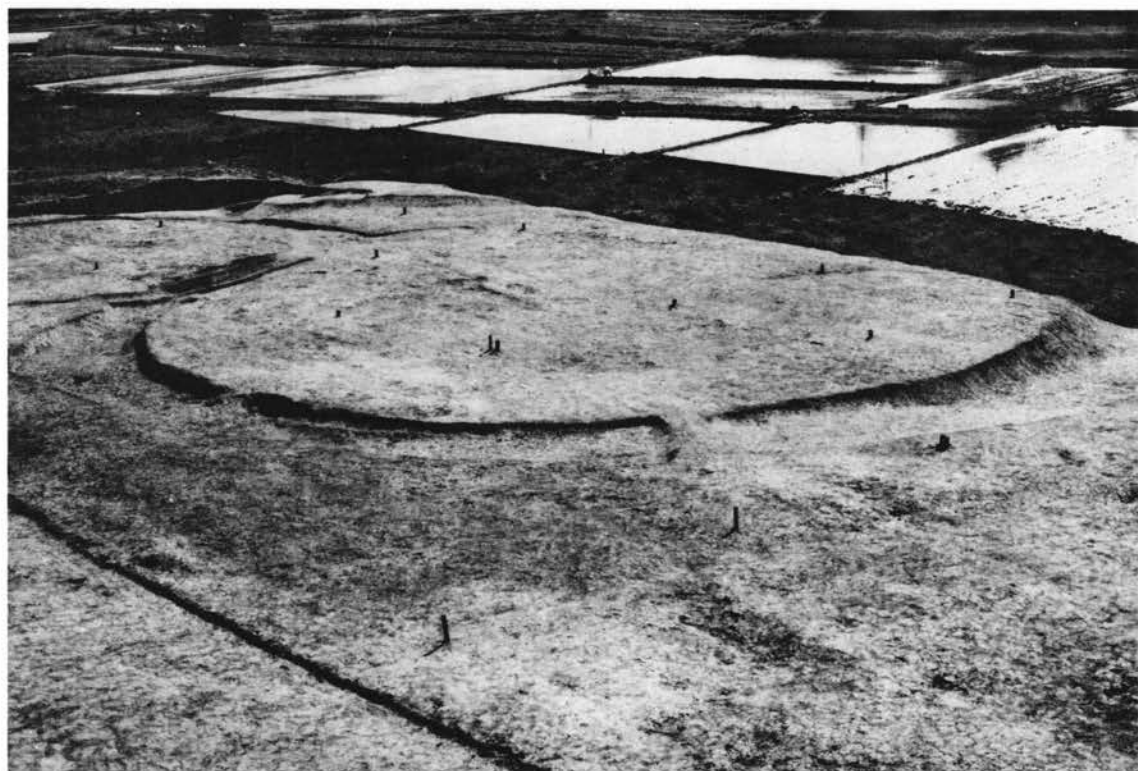
(2) 5号・6号埴輪出土状況



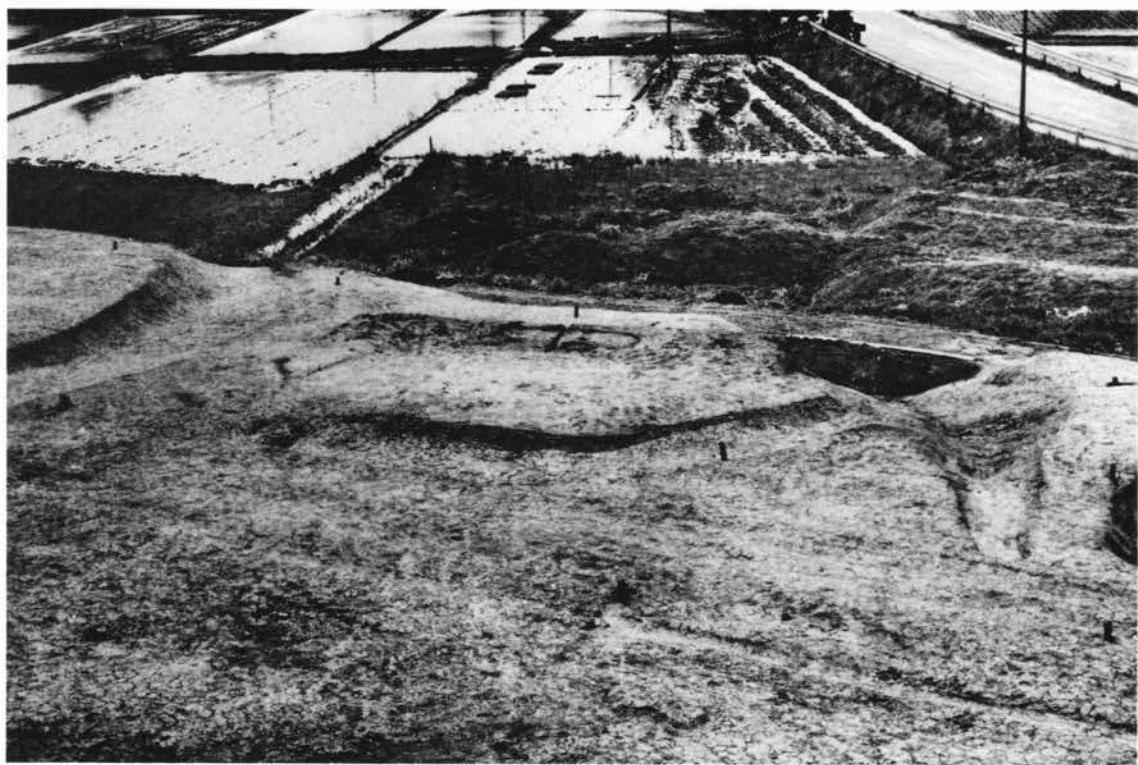
(1) 野崎1号墳周溝北部分(西から)



(2) 同上, 拡大(上が北)



(1) 野崎3号墳全景（北東から）



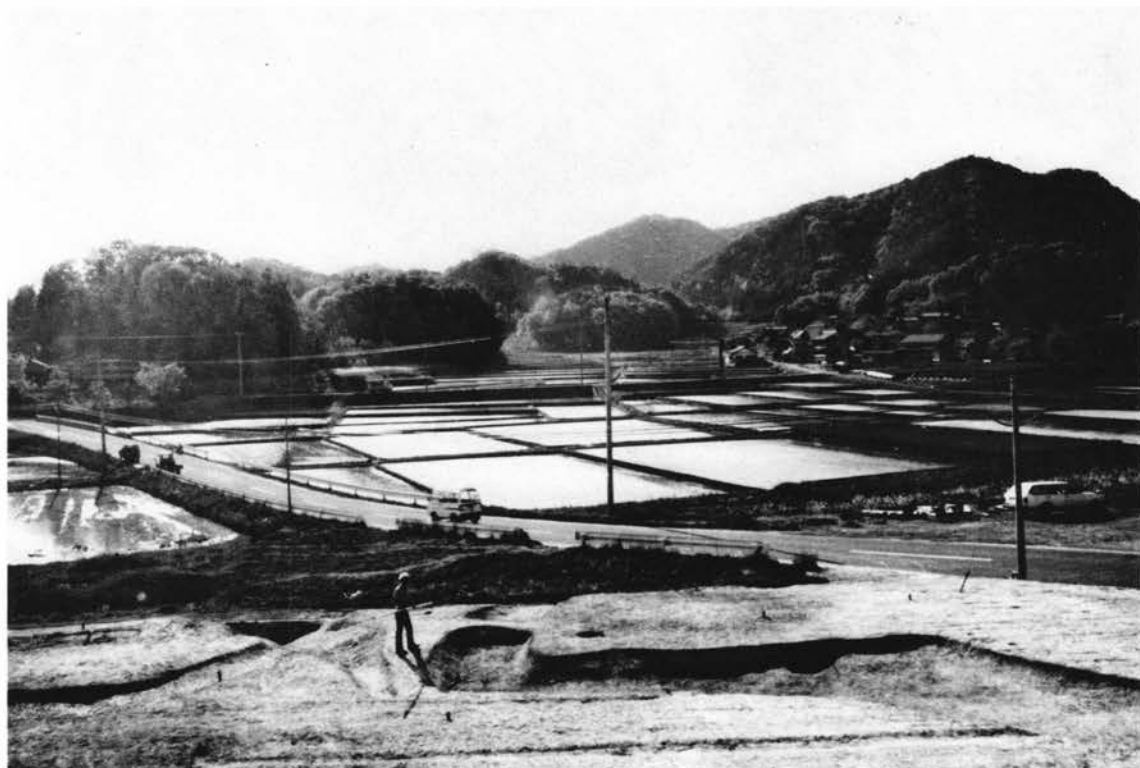
(2) 野崎4号墳と溝1（東から）



(1) 野崎5号墳全景 (南東から)



(2) 野崎6号墳全景 (南から)



(1) 野崎5号墳と左手後方に高槻茶臼山古墳（東から）



(2) 現地説明会風景：野崎5号墳後円部（北から）



3



4



5



6



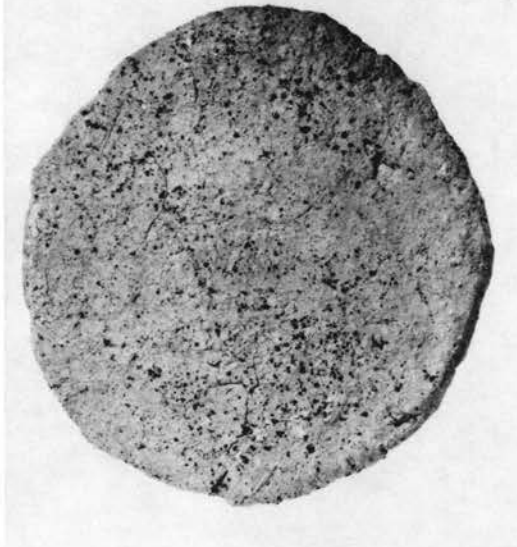
野崎4号墳出土家形埴輪







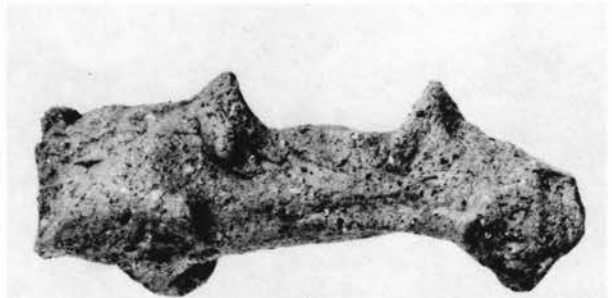
39



44



41



42



(1) 須恵器



(2) 鉄 鏃

京都府遺跡調査報告書 第17冊

平成4年3月30日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3

Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入

Tel(075)441-3155 (代)